

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第138集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

# 内匠諏訪前遺跡 内匠日影周地遺跡

1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日 本 道 路 公 団



財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第138集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集

# 内匠諏訪前遺跡 内匠日影周地遺跡

1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日 本 道 路 公 団

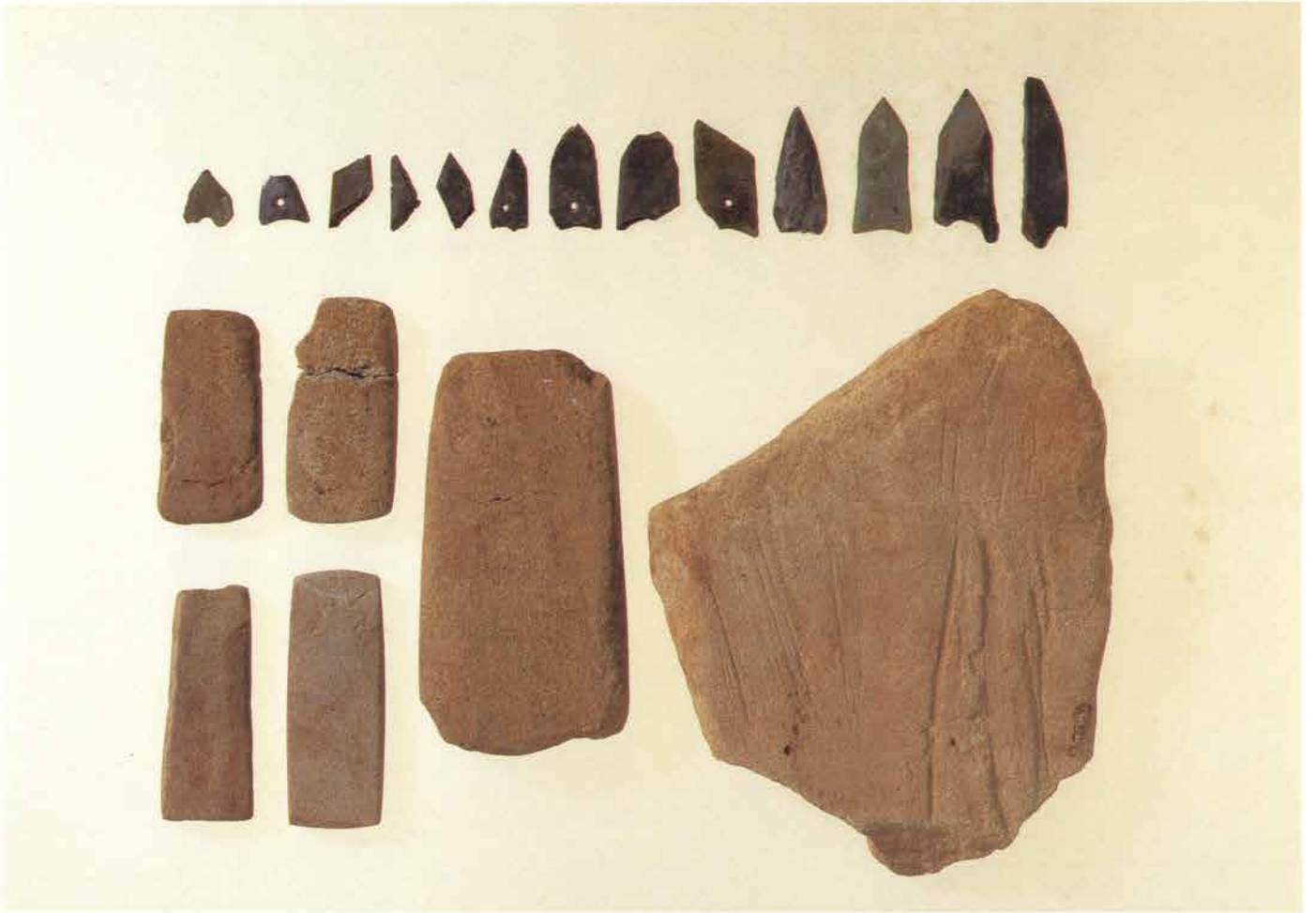




遺跡遠景（東より）



江戸屋敷遠景（北より）



弥生時代の石器



2号屋敷出土の近世陶磁器類

## 序

平成4年、いよいよ関越自動車道上越線（藤岡市一佐久市）が開通する年を迎えました。昭和61年度より続いてまいりました埋蔵文化財の発掘調査が終了し、併行して実施されていまして高速道路工事も一層の弾みがつき、進捗がはかられております。当遺跡の在ります富岡市の南、高瀬丘陵も山が削られ、あるいは土が盛られ、コンクリートの構造物が造られ景観も変貌してまいりました。

また、ここは富岡インターチェンジが造られる場所で膨大な面積があり、昭和61年当初より発掘調査が始まりましたが、終了するのに5年という長い歳月を要しました。

高瀬丘陵はもともと古墳、内匠城といった文化財の存在するところではありますが、この5年間の調査で旧石器時代から江戸時代にわたる多数の遺構が発見されました。

今回報告いたします内匠諏訪前・日影周地遺跡はインターチェンジの中心部にあたります。本遺跡でも長い期間にわたる数々の遺構が調査されましたが、特に江戸時代の屋敷跡や遺物から当丘陵の開けた時期が推定でき、現在との結びつきを窺える貴重な資料を得ることができました。その意味からも本報告書は意義深いものがあるといえましょう。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史の解明の一助となることができれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・富岡市教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導、御鞭撻に対しまして厚く御礼申しあげます。

平成4年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺 弘之





# 例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「内匠諏訪前遺跡」<sup>たくみすわまえ</sup>「内匠日影周地遺跡」<sup>たくみひかげしゅうち</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査地は、群馬県富岡市内匠1120番地他に所在する。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査にあたっては、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台 3—15—8 所在）が担当した。調査担当者および調査期間は以下のとおりである。（（ ）内は当時の職名）

## (1) 発掘調査

試掘調査 担当者 津金澤吉茂（主任調査研究員） 綿貫鋭次郎（調査研究員）  
田口正美（調査研究員）  
期 間 1986（昭和61）年6月2日～同年8月30日  
1987（昭和62）年2月16日～同年3月31日

本調査（調査総面積 43,594m<sup>2</sup>）

内匠諏訪前遺跡A区 担当者 石坂 茂（主任調査研究員） 内木真琴（調査研究員）  
（面積 11,547m<sup>2</sup>） 木村 收（調査研究員）  
期 間 1988（昭和63）年4月1日～同年12月21日

内匠諏訪前遺跡B区 担当者 津金澤吉茂（専門員） 新井 仁（調査研究員）  
（面積 1,615m<sup>2</sup>） 志塚雅美（調査研究員）  
期 間 1990（平成2）年5月17日～同年6月22日

内匠日影周地遺跡A区 担当者 石坂 茂（主任調査研究員）1988.12～1989.3  
（面積 22,227m<sup>2</sup>） 坂井 隆（主任調査研究員）1989.4  
内木真琴（調査研究員）1988.12～1989.3  
木村 收（調査研究員）1988.12～1989.4  
山口良寛（調査研究員）1989.4  
期 間 1988（昭和63）年12月15日～1989（平成元）年4月30日

内匠日影周地遺跡B区 担当者 津金澤吉茂（専門員） 飛田野正佳（調査研究員）  
（面積 8,205m<sup>2</sup>） 保坂雅美（調査研究員）  
期 間 1989（平成元）年7月18日～同年9月7日

(2) 整 理 期 間 1991（平成3）年4月1日～1992（平成4）年3月31日  
担当者 木村 收

(3) 事 務 常務理事 白石保三郎（昭和61・63年度）、邊見長雄、事務局長 井上唯雄（昭和61年度）、松本浩一、管理部長 田口紀雄（昭和63～平成2年度）、佐藤 勉、調査研究部長 上原啓巳（昭和61・63年度）、神保侑史、関越道上越線事務所長 井上 信（昭和61・63年度）、高橋一夫（平成元・2年度）、阿部千明（平成3年4月～11月）、松本浩一（兼任）、総括次長 片桐光一（昭

和63・平成元年度)、大澤友治、次長 徳江 紀(昭和63年度～平成2年度)、  
課長 長谷部 達雄(昭和61年度)、鬼形芳夫(昭和63年度～平成2年度)、依田治雄、庶務課係長  
代理 黒沢重樹(昭和61・63年度)、宮川初太郎(平成元・2年度)、主任 国定 均(昭和63～平  
成元年度)、笠原秀樹、臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、大手芳郎、松井留男、町田康子、本城美  
樹、後閑玲子、田中智恵美、高田千恵

6 報告書作成担当者

編集担当 木村 収

本文執筆 木村 収、依田治雄(I-1)、宮崎重雄(V-4の馬骨部分)、外山政子(VI-2)

遺構写真 発掘調査担当者

遺物写真 佐藤元彦((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)

保存処理 関 邦一((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)

遺物観察 木村 収

整理補助員 金田とも、久保順子、小嶋八重子、小林幸子、中村順子、丸澤君枝

委託関係 内匠日影周地遺跡の出土馬骨については、県立大間々高校教諭 宮崎重雄先生に、炭化材  
樹種については金沢大学教養部教授 鈴木三男先生に分析依頼した。航空写真は(株)K&Mエンター  
プライズに、遺構測量は(株)技研測量設計に、火山灰の分析は(株)パリノサーベイに、井戸の掘削  
は(株)原沢ボーリングに、遺物トレースは(株)測研に一部、遺物の実測写真は(株)シン航空写真  
に委託した。石材鑑定は陣内圭一先生(元群馬県立自然科学資料館)に依頼した。

7 肥前系陶磁器については、九州陶磁文化館 大橋康二氏に、近世遺物全般については、たましん地域文  
化財団 梶原 勝氏に御教示を得た。

8 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

9 報告書作成に当たり、以下の諸機関、諸氏から御教示、御指導いただいた。

記して謝意を表する次第である。(敬称略、50音順)


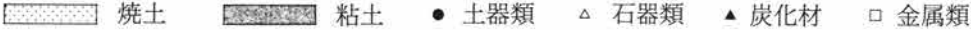
富岡市教育委員会、新井 仁、飯島義雄、飯田陽一、石坂 茂、井上 太、岩崎泰一、大木紳一郎、  
大西雅広、柿沼恵介、紀野自由、菊池 実、黒尾和久、佐藤明人、渋江芳浩、関口博幸、田中宏之、  
津金澤吉茂、富田一仁、外山政子、土井義夫、中沢 悟、藤巻幸男、右島和夫、山口逸弘、若狭 徹

10 発掘調査従事者

青木エイ 青木和人 青木喜代子 青木幸衛 青木しん 新井菊江 新井重男 安藤光代 安藤マツ  
今井クニ 岩井安代 上原愛子 上原きぬ江 上原きみ子 岡野乙二 岡村ワク 落合トシ 井野口和  
美 岩井光子 唐沢春江 神戸マツミ 神戸里子 桐生喜代子 桐生武行 久保順子 小井戸セイ 小  
井戸陽子 小金沢文子 小林イチ 小林たか 斎藤はつ江 佐藤とみ子 佐藤ふじ江 佐藤祐子 佐藤  
よし 篠原くに子 下山弥生 神宮永次郎 神宮百代 善財克育 曾我功 曾我みつ子 園部ケサ子  
園部とり 高田房雄 竹内久子 田丸喜代子 田村みね 豊田雄三 中村朝子 中村静子 中村とも子  
中村ひで 原田寛 本多サイ 牧野マサエ 真下伍男 真下ちる 真下泰一 松浦三郎 黛君枝 三宅  
良成 村山富士子 室岡三七作 三田とめ 茂木定男 茂原芳江 矢島イネ 矢島君代 安河内恵子  
柳沢百江 矢野清 山田正好 横田あさ江 渡部みつ江

上記の他、富岡市を中心として、多くの方々の協力を得た。

## 凡 例

1. 挿図中に使用した方位は国家座標の北を表す。また、遺構の方位については必要と判断した遺構にのみ記載し、その方位は長軸線の方位を採用した。
2. 竪穴住居の面積は、1/20の平面図上で住居のしたば線上をプランメーターで2回計測した平均値を使用した。
3. 各遺構の長さ（計測値）は、遺構のうわばを計測している。
4. 遺構及び遺物図面の縮尺は各図中に表示してある。遺物で図中の縮尺と異なるものがある場合は、遺物番号の後尾に（ ）で縮尺を表示した。
5. 古墳～平安時代の土器で、轆轤を使用しているものは断面を黒ぬりで表現した。
6. 土器中の「→」は、篋削りの方向を示す。
7. 遺物実測図中における表示は次のことを意味する。  

8. 遺構図面中における表示は、図にことわりがないかぎり次のことをあらわす。  

9. 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
  - (1) ( ) 内の計測値は、推定値を示す。
  - (2) 胎土中の砂粒の大きさは、 $> 2\text{mm}$ ＝礫、 $2 \sim 0.02\text{mm}$ ＝砂、とした。
  - (3) 色調については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。
  - (4) 備考欄に覆土中と記入してある遺物は、その遺構内の出土位置が不明なものである。
10. 本文中の第2図に使用した地図は、国土地理院発行50,000分の1地形図の「富岡」である。

# 目 次

巻頭写真

序

例 言

凡 例

抄 録

I 発掘調査と遺跡の概要	3	3. 方形周溝墓	152
1. 発掘調査に至る経緯	3	4. 古 墳	154
2. 調査の経過と遺跡の概略	4	5. 溜井状遺構	167
3. 遺跡の位置と地形	5	6. 竪穴状遺構	167
4. 周辺の遺跡	6	7. 溝	168
5. 調査の方法	9	8. 土 坑	169
6. 整理作業について	9	9. 遺構外出土遺物	169
7. 遺跡の基本層序	11	V 江戸時代以降の遺構と遺物	178
II 縄文時代の遺構と遺物	12	1. 検出された遺構の概要	178
1. 検出された遺構の概要	12	2. 屋敷跡	178
2. 竪穴式住居	12	3. 礎石建物	237
3. 埋 甕	23	4. 墓 塚	238
4. 集 石	23	内匠日影周地遺跡出土の馬骨について	243
5. 土 坑	25	5. 溝	248
6. 遺構外出土遺物	44	6. 土 坑	255
(1) 土 器	44	7. 遺構外出土遺物	255
(2) 石 器	44	8. 井 戸	258
III 弥生時代の遺構と遺物	63	9. 畠	258
1. 検出された遺構の概要	63	VI 成果と問題点	267
2. 竪穴式住居	63	1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物	267
3. 土 坑	93	2. コゲ・ススからみた土器の使われ方	
4. 遺構外出土遺物	93	—弥生時代後期—	302
IV 古墳～平安時代の遺構と遺物	113	付篇1. 群馬県内匠諏訪前・日影周地	
1. 検出された遺構の概要	113	遺跡出土の樹種について	306
2. 竪穴式住居	113	付篇2. 内匠諏訪前遺跡火山灰分析	312

## 挿 図 目 次

第 1 図	本遺跡の位置	5
第 2 図	周辺の遺跡	7
第 3 図	発掘調査の範囲とグリッド位置	10
第 4 図	遺跡の基本標準土層	11
第 5 図	諏 A 8 号住居	13
第 6 図	諏 A 8 号住居出土遺物	14
第 7 図	諏 A 10 号住居と出土遺物	15
第 8 図	諏 A 10 号住居出土遺物	16
第 9 図	諏 B 2 号住居と出土遺物	17
第 10 図	諏 B 2 号住居出土遺物	18
第 11 図	諏 B 4 号住居と出土遺物	19
第 12 図	諏 B 5 号住居	20
第 13 図	諏 B 5 号住居出土遺物	21
第 14 図	日 A 2 号住居と出土遺物	22
第 15 図	日 A 2 号住居出土遺物	23
第 16 図	1 号埋藏と出土遺物	24
第 17 図	1 号集石	24
第 18 図	諏 A 43・44・45・46・47・48・49・51・52・ 54・65号土坑	27
第 19 図	諏 A 53・69・70・71・73・74・75・76・77号土坑	28
第 20 図	諏 A 78・81・82・83・84・85・諏 B 1・2・3・ 4・5号土坑	29
第 21 図	諏 B 6・14・20・22・23・24・25・26・29号土坑	30
第 22 図	諏 B 27・28・30・31・32・日 A 27・28・29・ 日 B 4号土坑	31
第 23 図	諏 A 46・47・53・71・75・78・81・85・諏 B 3・ 4・5・14・20号土坑出土遺物	32
第 24 図	諏 B 24・26・27・28・29・31・32号土坑出土遺物	33
第 25 図	石材組成・器種別石材組成	45
第 26 図	遺構外出土土器 (1)	46
第 27 図	遺構外出土土器 (2)	47
第 28 図	遺構外出土石器 (1)	52
第 29 図	遺構外出土石器 (2)	53
第 30 図	遺構外出土石器 (3)	54
第 31 図	遺構外出土石器 (4)	55
第 32 図	遺構外出土石器 (5)	56
第 33 図	縄文時代の遺構分布 (1)・内匠諏訪前遺跡	60
第 34 図	縄文時代の遺構分布 (2)・内匠日影周地遺跡 A 区東側	61
第 35 図	縄文時代の遺跡分布 (3)・内匠日影周地遺跡	62
第 36 図	日 A 3 号住居	64
第 37 図	日 A 3 号住居出土遺物 (1)	65
第 38 図	日 A 3 号住居出土遺物 (2)	66
第 39 図	日 A 4 号住居	67
第 40 図	日 A 4 号住居出土遺物 (1)	68
第 41 図	日 A 4 号住居出土遺物 (2)	69
第 42 図	日 A 5 号住居と出土遺物 (1)	70
第 43 図	日 A 5 号住居出土遺物 (2)	72
第 44 図	日 A 5 号住居出土遺物 (3)	73
第 45 図	日 A 8 号住居	74
第 46 図	日 A 8 号住居出土遺物 (1)	75
第 47 図	日 A 8 号住居出土遺物 (2)	76
第 48 図	日 A 9 号住居と出土遺物	77
第 49 図	日 A 10 号住居	78
第 50 図	日 A 10 号住居出土遺物 (1)	79
第 51 図	日 A 10 号住居出土遺物 (2)	80
第 52 図	日 A 12 号住居	80
第 53 図	日 A 12 号住居出土遺物	81
第 54 図	日 A 15 号住居と出土遺物	82
第 55 図	日 A 15 号住居出土遺物	83
第 56 図	日 A 16 号住居と出土遺物	84
第 57 図	日 A 17 号住居と出土遺物	86
第 58 図	日 A 18 号住居と出土遺物	88
第 59 図	日 B 2 号住居	89
第 60 図	日 B 2 号住居出土遺物	90
第 61 図	日 B 4 号住居と出土遺物	91
第 62 図	日 B 8 号住居と出土遺物	92
第 63 図	諏 A 64・日 A 7・21号土坑と出土遺物	94
第 64 図	日 A 15 号土坑と出土遺物	95
第 65 図	日 A 5・6・9・10・11・12・13・14・16号土坑	96
第 66 図	日 A 17・20・24・25・日 B 5・11号土坑と 出土遺物	97
第 67 図	日 B 2 号住居・遺構外出土の遺物	98
第 68 図	弥生時代遺構分布 (1)・内匠諏訪前遺跡	110
第 69 図	弥生時代遺構分布 (2)・内匠日影周地遺跡 A 区 東側	111
第 70 図	弥生時代遺構分布 (3)・内匠日影周地遺跡	112
第 71 図	諏 A 1 号住居	114
第 72 図	諏 A 1 号住居竈と出土遺物	115
第 73 図	諏 A 2 号住居と出土遺物	116
第 74 図	諏 A 3 号住居と出土遺物	117
第 75 図	諏 A 3 号住居出土遺物	118
第 76 図	諏 A 4 号住居と出土遺物	119
第 77 図	諏 A 4 号住居出土遺物	120
第 78 図	諏 A 5 号住居	121
第 79 図	諏 A 5 号住居出土遺物	122
第 80 図	諏 A 6 号住居と出土遺物	123
第 81 図	諏 A 6 号住居竈	124
第 82 図	諏 A 7 号住居と出土遺物	125
第 83 図	諏 A 7 号住居出土遺物	126
第 84 図	諏 A 9 号住居と出土遺物	127
第 85 図	諏 A 9 号住居出土遺物	128
第 86 図	諏 B 1 号住居と出土遺物	129
第 87 図	諏 B 1 号住居竈と出土遺物	130
第 88 図	諏 B 3 号住居と出土遺物	131
第 89 図	日 A 1 号住居と出土遺物	132
第 90 図	日 A 6 号住居	133
第 91 図	日 A 6 号住居竈と出土遺物	134
第 92 図	日 A 6 号住居出土遺物	135
第 93 図	日 A 7 号住居と出土遺物	136
第 94 図	日 A 11 号住居	137
第 95 図	日 A 11 号住居竈と出土遺物	138
第 96 図	日 A 13 号住居と出土遺物	139
第 97 図	日 A 14 号住居と出土遺物	140
第 98 図	日 A 19 号住居と出土遺物	141
第 99 図	日 B 1 号住居と出土遺物	142
第 100 図	日 B 3 号住居と遺物出土状態 (1)	143
第 101 図	日 B 3 号住居遺物出土状態 (2)	144
第 102 図	日 B 3 号住居と遺構外遺物との接合関係	145
第 103 図	日 B 3 号住居出土遺物 (1)	146
第 104 図	日 B 3 号住居出土遺物 (2)	147
第 105 図	日 B 5 号住居と出土遺物	148
第 106 図	日 B 6 号住居	148
第 107 図	古墳～平安時代の遺構分布 (1)・内匠諏訪前遺跡	149
第 108 図	古墳～平安時代の遺構分布 (2)・内匠日影周地 遺跡 A 区東側	150

第109図	古墳～平安時代の遺構分布(3)・内匠日影周地遺跡……………151	第168図	1号屋敷30・40号土坑……………220
第110図	1号方形周溝墓と出土遺物……………152・153	第169図	1号屋敷31号土坑と出土遺物……………221
第111図	1号古墳……………154	第170図	1号屋敷38号土坑と出土遺物……………222
第112図	1号古墳主体部と出土遺物……………155	第171図	1号屋敷58・61号土坑……………222
第113図	1号溜井状遺構と出土遺物……………169	第172図	1号屋敷66・79・80号土坑と出土遺物……………222
第114図	1号竪穴状遺構と出土遺物、日A23・24号溝……………170	第173図	1号屋敷88号土坑……………223
第115図	日A18号土坑と出土遺物……………172	第174図	1号屋敷63号土坑……………223
第116図	諏A95・100・日A8・22・日B6・9号土坑と出土遺物……………173	第175図	1号屋敷溝出土遺物……………223
第117図	諏A55・87・89・90・91・92・93・96・97・98・日B13号土坑……………174	第176図	3号屋敷と出土遺物……………238
第118図	諏B17・18・21・日A19・日B7・14号土坑……………175	第177図	礎石建物と出土遺物……………239
第119図	遺構外出土遺物……………176	第178図	諏A1号墓塚と出土遺物……………241
第120図	2号屋敷遺物接合図(1)……………182	第179図	諏A2号墓塚と出土遺物……………241
第121図	2号屋敷全体図……………折り込み	第180図	諏A6・9号墓塚出土遺物……………241
第122図	2号屋敷遺物接合図(2)……………185	第181図	諏A3号墓塚と出土遺物……………242
第123図	2号屋敷遺物接合図(3)……………186	第182図	諏A4号墓塚と出土遺物……………242
第124図	2号屋敷金属器・炭化材出土位置図……………187	第183図	諏A5号墓塚と出土遺物……………242
第125図	2号屋敷出土遺物(1)……………188	第184図	諏A7号墓塚と出土遺物……………243
第126図	2号屋敷出土遺物(2)……………189	第185図	諏A8号墓塚と出土遺物……………243
第127図	2号屋敷出土遺物(3)……………190	第186図	諏A10・11号墓塚と出土遺物……………243
第128図	2号屋敷出土遺物(4)……………191	第187図	諏A12号墓塚と出土遺物……………244
第129図	2号屋敷3号井戸と出土遺物……………192	第188図	諏A13号墓塚と出土遺物……………244
第130図	2号屋敷32・86号土坑……………192	第189図	日A1号墓塚……………245
第131図	2号屋敷33・68号土坑と出土遺物……………193	第190図	諏A28・29・31号溝(暗渠)……………251
第132図	2号屋敷1号炭化物……………193	第191図	日B2号溝(暗渠)……………252
第133図	1号屋敷調査前の状況……………196	第192図	日B3号溝(暗渠)……………253
第134図	1号屋敷全体図……………折り込み	第193図	日B1号溝(暗渠)……………253
第135図	1号屋敷土坑遺物接合図……………199	第194図	溝出土遺物……………254
第136図	1号屋敷遺物接合図……………200・201	第195図	諏A5・14・35・36・37・39号土坑……………258
第137図	1号屋敷1号井戸遺物接合図……………202	第196図	諏A41・42・50・諏B7・8・13・日A1号土坑……………259
第138図	1号屋敷出土遺物(1)……………203	第197図	日A2・3・26号土坑……………260
第139図	1号屋敷出土遺物(2)……………204	第198図	2号井戸と畠……………260
第140図	1号屋敷1号井戸と出土遺物(1)……………205	第199図	遺構外出土遺物(1)……………261
第141図	1号屋敷1号井戸出土遺物(2)……………206	第200図	遺構外出土遺物(2)……………262
第142図	1号屋敷1号井戸出土遺物(3)……………207	第201図	江戸時代遺構分布(1)・内匠諏訪前遺跡……………266
第143図	1号屋敷1号井戸出土遺物(4)……………208	第202図	江戸時代遺構分布(2)・内匠日影周地遺跡A区東側……………267
第144図	1号屋敷4号井戸と出土遺物……………209	第203図	江戸時代遺構分布(3)・内匠日影周地遺跡……………268
第145図	1号屋敷1号建物……………210	第204図	縄文時代早期土器のグリッド別分布……………277
第146図	1号屋敷2号建物と出土遺物……………211	第205図	縄文時代前期土器のグリッド別分布(1)……………278
第147図	1号屋敷1号石垣……………212	第206図	縄文時代前期土器のグリッド別分布(2)……………279
第148図	1号屋敷2号石垣と出土遺物……………212	第207図	縄文土器前期土器のグリッド別分布(3)……………280
第149図	1号屋敷1・2号集石……………213	第208図	縄文時代五領ケ台式土器のグリッド別分布(1)……………281
第150図	1号屋敷1・2号土坑と出土遺物……………213	第209図	縄文時代五領ケ台式土器のグリッド別分布(2)……………282
第151図	1号屋敷3号土坑と出土遺物……………214	第210図	縄文時代五領ケ台式土器のグリッド別分布(3)……………283
第152図	1号屋敷4号土坑と出土遺物……………214	第211図	縄文時代石器のグリッド別分布(1)……………284
第153図	1号屋敷6・24号土坑と出土遺物……………215	第212図	縄文時代石器のグリッド別分布(2)……………285
第154図	1号屋敷7・16号土坑……………215	第213図	縄文時代石器のグリッド別分布(3)……………286
第155図	1号屋敷8号土坑と出土遺物……………215	第214図	内匠日影周地遺跡A区弥生時代住居全体図……………287
第156図	1号屋敷9・10号土坑……………216	第215図	内匠日影周地遺跡A区弥生時代遺構間接合図……………288
第157図	1号屋敷11・12号土坑……………216	第216図	縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布(1)……………289
第158図	1号屋敷15号土坑と出土遺物……………216	第217図	縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布(2)……………290
第159図	1号屋敷17号土坑と出土遺物……………217	第218図	縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布(3)……………291
第160図	1号屋敷13号土坑……………217	第219図	弥生時代後期土器のグリッド別分布(1)……………292
第161図	1号屋敷18・34号土坑と出土遺物……………218	第220図	弥生時代後期土器のグリッド別分布(2)……………293
第162図	1号屋敷19号土坑と出土遺物……………218	第221図	内匠諏訪前遺跡A区古墳時代住居全体図……………294
第163図	1号屋敷20・21号土坑……………219	第222図	内匠諏訪前遺跡A区古墳時代住居間接合図……………295
第164図	1号屋敷22・23号土坑……………219	第223図	古式土師器のグリッド別分布……………296
第165図	1号屋敷25・26号土坑……………219	第224図	古墳時代後期土器のグリッド別分布(1)……………297
第166図	1号屋敷27・28号土坑……………220	第225図	古墳時代後期土器のグリッド別分布(2)……………298
第167図	1号屋敷29号土坑と出土遺物……………220		

第226図	古墳時代後期土器のグリッド別分布（3）	299
第227図	平安時代土器のグリッド別分布（1）	300
第228図	平安時代土器のグリッド別分布（2）	301
第229図	江戸時代以降土器のグリッド別分布（1）	302
第230図	江戸時代以降土器のグリッド別分布（2）	303

第231図	江戸時代以降土器のグリッド別分布（3）	304
第232図	地籍図及び諏訪神社	305
第233図	コゲ・ススの着いた土器（1）	308
第234図	コゲ・ススの着いた土器（2）	309

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	8	第4表	古墳～平安時代 土坑規模一覧	171
第2表	縄文時代 土坑規模一覧	25	第5表	江戸時代以降 溝規模一覧	250
第3表	弥生時代 土坑規模一覧	93	第6表	江戸時代以降 土坑規模一覧	257

## 付篇1 表目次

表1	内匠諏訪前遺跡出土炭化材の樹種	315	表2	内匠日影周地遺跡出土炭化材の樹種	315
----	-----------------	-----	----	------------------	-----

## 付篇2 挿図・表目次

図1	内匠諏訪前遺跡A区における褐色火山灰土の断面	318	表1	試料番号11の軽鉱物組成	320
図2	試料番号11の軽鉱物組成ダイアグラム	319	表2	重鉱物組成	320
図3	重鉱物組成ダイアグラム	319			

# 写真目次

- PL 1 内匠諏訪前遺跡・日影周地遺跡全景  
 2 内匠日影周地遺跡全景、内匠諏訪前・日影周地遺跡試掘状況  
 3 内匠日影周地遺跡遠景・B区全景  
 4 諏A 8・10・諏B 2・4・5号住居出土遺物  
 5 日A 2号住居出土遺物、諏A 44・45号土坑全景  
 6 諏A 44・45・46・47・48・49号土坑全景  
 7 諏A 52・54・73・74・75・76・77号土坑全景、73号土坑セクション  
 8 諏A 78・82・83・84・85号土坑全景、82号土坑セクション、85号土坑出土遺物、1号埋壘  
 9 諏B 1・2・3・4・5・6号土坑全景  
 10 諏B 14・20・22・23・24・25・26・27号土坑全景  
 11 諏B 28・29・30号、日A 27・28・29号、日B 4号土坑全景、1号集石全景  
 12 縄文時代遺構外出土の土器  
 13 縄文時代遺構外出土の土器  
 14 縄文時代遺構外出土の土器  
 15 縄文時代遺構外出土の土器と石器  
 16 縄文時代遺構外出土の石器  
 17 縄文時代遺構外出土の石器  
 18 内匠日影周地遺跡A区・弥生時代の竪穴住居群  
 19 日A 3号住居全景・遺物出土状態・2号炉全景  
 20 日A 4・5号住居遺物出土状態、5号住居1・2号炉  
 21 日A 5・8・9号住居全景、8号住居遺物出土状態、9号住居炉セクション  
 22 日A 10・12号住居全景、10・12号住居遺物出土状態、12号住居セクション  
 23 日A 15・16号住居全景、15号住居遺物出土状態  
 24 日A 17・18号住居全景、16・17号住居遺物出土状態  
 25 日B 2号住居全景、セクション、遺物出土状態  
 26 日B 4・8号住居全景、4・8号住居遺物出土状態、4号住居炉セクション  
 27 諏A 64号土坑、日A 7・9・10・11・12・14号土坑  
 28 日A 15・16・17号土坑  
 29 日A 20・21・24・25号土坑、日B 5・11号土坑  
 30 弥生時代日A 3・4号住居出土の土器  
 31 弥生時代日A 4・5号住居出土の土器  
 32 弥生時代日A 5・8・9・10号住居出土の土器と石器  
 33 弥生時代日A 10・12・15号住居出土の土器と石器  
 34 弥生時代日A 16・17・18号住居、日B 2・4号住居出土の土器と石器  
 35 弥生時代日B 2・4・8号住居、諏A 15・21・24・64号土坑、遺構外出土の土器と石器  
 36 1号方形周溝墓全景・セクション・遺物出土状態  
 37 1号古墳全景・主体部・掘り方  
 38 諏A 1・2号住居・遺物出土状態・掘り方・竈全景  
 39 諏A 3・4号住居竈・掘り方全景・遺物出土状態  
 40 諏A 5号住居竈・掘り方・遺物出土状態、6号住居  
 41 諏A 7・9号住居竈・掘り方全景  
 42 諏B 1・3号住居竈・掘り方全景・遺物出土状態  
 43 日A 1・6号住居炉全景・遺物出土状態  
 44 日A 7・11号住居竈・掘り方・貯蔵穴全景・遺物出土状態  
 45 日A 13・14・19号住居全景・遺物出土状態  
 46 日B 3号住居全景・セクション・遺物出土状態  
 47 日B 3・1・5・6号住居  
 48 1号竪穴状遺構、諏A 55・87・89・90・92・93号土坑  
 49 諏A 95・96・97・98・99・100号土坑全景  
 50 日A 8・18号土坑セクション・遺物出土状態  
 51 日A 19・22号土坑、日B 6・9号土坑  
 52 古墳～平安時代1号方形周溝墓、諏A 1・2号住居出土遺物  
 53 古墳～平安時代諏A 3・4・5号住居出土遺物  
 54 古墳～平安時代諏A 5・6・7号住居出土遺物  
 55 古墳～平安時代諏A 9、諏B 1号住居出土遺物  
 56 古墳～平安時代諏B 1・3、A 1・6号住居出土遺物  
 57 古墳～平安時代日A 6・7・11・13号住居出土遺物  
 58 古墳～平安時代日A 13・14・19、日B 1・3号住居出土遺物  
 59 日B 3号住居出土遺物  
 60 日B 3・5号住居、日A 8・18・22、日B 6・9号土坑、1号竪穴状遺構、1号溜井状遺構、遺構外出土遺物  
 61 1・2号屋敷  
 62 2号屋敷全景・セクション・遺物出土状態  
 63 2号屋敷1号炭化物出土状態  
 64 2号屋敷3号井戸、32・33・68号土坑  
 65 1号屋敷全景、1・2号石垣  
 66 1号屋敷1・2号石垣、盛土、1・2号建物  
 67 1号屋敷1・4号井戸、1・2・3・23号土坑  
 68 1号屋敷4・6・7・8・10・16・24号土坑  
 69 1号屋敷11・12・15・17・18号土坑  
 70 1号屋敷18・19・20・21・22・34号土坑  
 71 1号屋敷26・27・29・30・31・38・40号土坑  
 72 1号屋敷1・2・3・4・5号溝  
 73 1号屋敷6・7・8・9・12号溝、1・2号集石  
 74 3号屋敷1号礎石建物、畠、諏A 1号墓  
 75 諏A 2・3・14号土坑  
 76 諏A 28・29・31号溝（暗渠）、日A 1号溝（暗渠）  
 77 日A 11、日B 1・2・3号溝（暗渠）  
 78 2号屋敷出土遺物（磁器・陶器）  
 79 2号屋敷出土遺物（陶器・軟質陶器）  
 80 2号屋敷3号井戸、33号土坑出土遺物（磁器・陶器・金属・石製品）  
 81 1号屋敷出土遺物（磁器・陶器・軟質陶器）  
 82 1号屋敷1号井戸出土遺物（磁器・陶器・金属）  
 83 1号井戸出土遺物（陶器・軟質陶器・石製品・金属）  
 84 1号屋敷4号井戸、2・3・4・15・17・18・19・24・29・31・34・80号土坑、3・7・12号溝出土遺物（磁器・陶器・軟質陶器・石製品・金属）  
 85 3号屋敷、諏A 1号礎石建物、諏A 1・2・3・4・5・6・7・8・12・13号墓、1・11・26・27・28号溝出土遺物（磁器・陶器・金属）  
 86 日A 20・21号溝、遺構外出土遺物（磁器・陶器・金属）



# 抄 録

## 1. 遺跡の概略

内匠諏訪前遺跡と内匠日影周地遺跡は、群馬県富岡市内匠の鍋川右岸に広がる標高220～260mの丘陵地上に所在する。遺跡の立地する丘陵は、通称「離れ山」と呼ばれ幅約600m、長さ約3.3kmの東西に細長い形状をなしている。この丘陵は、北に向かう小支谷によって地形的に分断されるが、2つの遺跡の位置も谷を挟んで隣接する関係にある。

発掘調査によって、縄文時代から江戸時代にわたる遺構・遺物が検出され、各時代において様々な土地利用が行われていたことが判明した。

本格的な調査は1988年4月から開始され、2回の調査断絶期間を挟んで、のべ約18カ月の期間を要した。

## 2. 遺構総量

縄文時代	竪穴式住居	竪穴状遺構	土坑	埋甕	集石	備 考
内匠諏訪前遺跡A区	1軒	1基	26基	1基	0	前期～中期初頭の遺構
内匠諏訪前遺跡B区	3軒	0	19基	0	0	前期～中期初頭の遺構
内匠日影周地遺跡A区	1軒	0	3基	0	0	諸磯a式期の住居
内匠日影周地遺跡B区	0	0	1基	0	1基	時期不明

弥生時代	竪穴式住居	土坑	備 考
内匠諏訪前遺跡A区	0	1基	中期の土坑。須和田式土器が出土。
内匠諏訪前遺跡B区	0	0	遺構外出土遺物も含めて、出土していない。
内匠日影周地遺跡A区	11軒	16基	住居は樽式。土坑は縄文終末～弥生の土器を出土した。
内匠日影周地遺跡B区	3軒	2基	中期1軒・後期1軒・弥生終末～古墳1軒

古墳～平安時代	竪穴式住居	土坑	方形周溝墓	古墳	竪穴状遺構	溝	備 考
内匠諏訪前遺跡A区	8軒	13基	0	0	0	0	後期の遺構
内匠諏訪前遺跡B区	2軒	3基	0	0	0	0	後期の遺構
内匠日影周地遺跡A区	7軒	4基	1基	1基	1基	2条	前期～後期
内匠日影周地遺跡B区	5軒	5基	0	0	0	0	溜井状遺構1基

江戸時代以降	屋敷跡	土坑	溝	井戸	墓塚	備 考
内匠諏訪前遺跡A区	3	9基	9条	1基	13基	屋敷地内には多数の土坑等の施設がある。 表で示した土坑・溝・井戸の数量には屋敷地分を含んでいない。 天明3年以前の屋敷地が1カ所検出。
内匠諏訪前遺跡B区	0	3基	0	0	0	
内匠日影周地遺跡A区	0	4基	19条	0	1基	
内匠日影周地遺跡B区	0	0	3条	0	0	



たく み す わ まえ  
内 匠 諏 訪 前 遺 跡

たく み ひ かげ しゅう ぢ  
内 匠 日 影 周 地 遺 跡



# I 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 発掘調査に至る経緯

関越自動車道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・松井田町（東部）、同57年松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調

査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。（後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和66年度末（平成2年度末）とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足。以後、6班22人体制(昭

## I 発掘調査と遺跡の概要

62)、9班36人体制(昭63)、12班45人体制(平元)、12班45人体制(平2)平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

今回の発掘調査報告地区は内匠・下高瀬遺跡(事業名称)の一部で、富岡インターチェンジ(仮称)内にあたる。内匠・下高瀬遺跡全体の対象面積は約22万㎡と非常に広大な遺跡とされた。そこで、まず予備的調査として分布調査並びに試掘調査を実施し、その後本調査を行う事で日本道路公団富岡工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課と合意した。分布・試掘調査は昭和61年6月から8月末までの3ヶ月間行われた。

試掘調査の結果、本調査実施面積は内匠・下高瀬遺跡全体で約11万㎡となった。そのうち、今回報告する遺跡の発掘調査総面積は43,594㎡に及ぶ。今回報告する調査区の遺跡名称は、大字名と小字名を組み合わせて命名し、内匠諏訪前遺跡と内匠日影周地遺跡とした。なお、調査期間の関係で、それぞれにA区・B区が存在する。この2つの遺跡は、内匠・下高瀬遺跡(事業名称)の一部分にすぎず、本来同一の遺跡と考えて差し支えない。

## 2. 調査の経過と遺跡の概要

### 内匠諏訪前遺跡A区(発掘面積 11,547㎡)

昭和63年4月から調査を開始して、同年12月に終了した。

東側部分に、江戸時代の屋敷跡が良好な状態で残っており、まず屋敷跡の調査に着手した。屋敷の調査終了後、屋敷地の盛土下を中心に古墳時代後期の遺構と縄文時代の包含層及び遺構が検出された。

西側部分は、表土層を除去した段階でローム層下の粘土層が露出し、江戸時代以降の溝が多く検出された。

### 内匠諏訪前遺跡B区(発掘面積 1,615㎡)

平成2年5月から調査を開始して、翌月には終了した。調査区を接する内匠諏訪前遺跡A区西側部分は遺構確認面が粘土層であるのに対し、B区はローム層が確認面である。縄文時代と古墳時代後期を中心とした遺構が検出された。

### 内匠日影周地遺跡A区(発掘面積 22,227㎡)

内匠諏訪前遺跡調査終了後に調査を開始して、平成元年4月に終了した。調査区の南側は急斜面であるために、土砂崩れの危険性を考慮して渇水期に調査期間を設定した。

北側の地区(D15以北V50以東)は、ローム層が残存していなかったが、他の地区は残存していた。表土を除去した段階で、弥生時代の遺構が多く検出された。

### 内匠日影周地遺跡B区(発掘面積 8,205㎡)

平成元年7月から調査を開始して翌月には終了した。再堆積ローム層が遺構確認面であったために、遺構の検出は容易ではなかったが、最終的には古墳時代を中心として、7軒の竪穴住居を検出した。谷地が2つ検出され遺物が多く出土した。

調査区全体における旧石器時代の調査は、縄文時代以降の調査が終了した段階で、ローム層が残存する地点に20~25%の割合でAT層まで試掘をおこなったが遺物は検出されなかった。特に、内匠諏訪前遺跡A区では弥生時代の土坑から、内匠日影周地遺跡A区では表採でそれぞれナイフ形石器が1点検出されたことから、検出地点を中心に試掘を50%の割合で行った。また、2点のナイフ形石器は整理作業に入る段階で紛失しており資料化できなかった。

### 3. 遺跡の位置と地形

当遺跡は、群馬県富岡市のほぼ東南端にあたる富岡市内匠の河岸段丘上に所在し、北方約2.3kmには、上信電鉄「上州富岡」駅が位置している。

富岡市は群馬県南西部に位置し、大まかな地形を概述すると、そのほぼ中央を鎭川が西から東へ流れており、鎭川が形成した河岸段丘を中心として、段丘を南北に挟むようにして丘陵地や山地が展開する。南に位置する多野・甘楽山系はそのまま関東山地に連なっている。

鎭川は、上信国境に連なる荒船山・八風山に源を発し、西牧川・南牧川となって下仁田町の川井付近で合流し鎭川となる。この川によって形成された河岸段丘は、下仁田町馬山から藤岡市落合に至る二十数kmにおよび、上位と下位の2面からなりたっている。下位段丘は両岸に発達するが、上位段丘は特に右岸（南側）において顕著な発達をみせる。

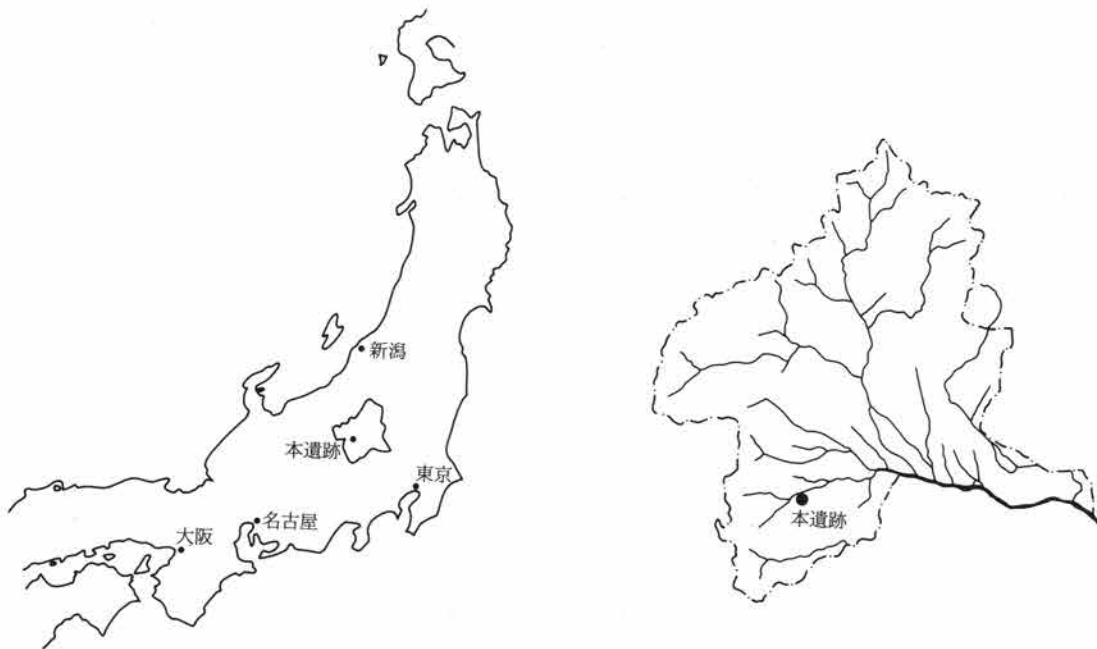
当遺跡は、この鎭川右岸の上位段丘面の通称「離れ山」と呼ばれる丘陵に位置している。

「離れ山」は鎭川の上位段丘が、東に流れる野上川と西と南を流れる下川などによって浸食をうけ、結果的に丘陵地形を示している。微視的にみれば、丘陵内においても内匠川をはじめとする小支谷が南北を中心にはしり、内匠諏訪前遺跡と内匠日影周地遺跡の間にも谷が存在する。この丘陵は東西に細長く、東西＝約3.3km、南北＝約600mを測る。丘陵上平坦面の標高は、およそ220～250mで、南から北に緩やかに傾斜している。北側は鎭川の下位段丘面であるが、丘陵上との比高は40mをこえる。

また、現在下川が流れている丘陵の南側は、かつて（約1万年前まで）は丘陵の東を流れている野上川が流れていた。

地質的に上位段丘面は、基盤岩（第三系）・砂礫層・粘土層・上部ローム層・表土の順番で堆積しており、当遺跡も基本的には同様である。

また、南に広がる多野・甘楽山系は三波川変成帯に属しており、結晶片岩類を多く産出する。さらに東側に連なる牛伏山系は、第三系の牛伏砂岩を産出している。当遺跡の石器類も、これらの石を原材料とするものが多い。



第1図 本遺跡の位置

## 4. 周辺の遺跡

本遺跡は「離れ山」丘陵上に立地するが、この丘陵は、各時代においてさまざまな土地利用が行われてきた。ここでは、「離れ山」丘陵を中心に当遺跡を除いて、調査された遺跡の様相を時期別に概観してみたい。

**旧石器時代** 下高瀬寺山遺跡で細石刃核が1点出土した。出土層位はAS-Y PからAS-B Pの間であったが、他の遺物は出土していない。

**縄文時代** 草創期の可能性がある柳葉形尖頭器が下高瀬寺山遺跡から検出されている。

明確な早期の遺構は検出されていないが下高瀬上之原遺跡では落とし穴状土坑が調査された。また、内匠日向周地遺跡では押型文土器がまとめて出土している。中高瀬観音山遺跡では、条痕文の土器片が僅かに出土している。

前期も前半～中葉の遺構・遺物は、内匠上之宿遺跡で有尾式系の土器が検出されているにすぎない。

「離れ山」丘陵上で、縄文時代の居住痕跡が多く確認されるのは、前期後半～中期初頭である。特に諸磯b式期を中心とした住居は、当遺跡や下高瀬寺山遺跡・中高瀬観音山遺跡・中高瀬庚申山遺跡で検出されている。また、前期末～中期初頭の段階は、内匠上之宿遺跡で土坑と土器片が検出されている。

中期前半から後期前半の遺構と遺物は内匠上之宿遺跡で検出されている。この遺跡は、加曾利E3式～掘之内II式の土器が多量に出土しており、遺構としては住居4軒と土坑約250基が検出されている。阿玉台I b式期の住居1軒以外は中期末～後期前半の遺構の可能性が高い。

**弥生時代** 中期以前の遺構は、中高瀬観音山遺跡の隣接区域で住居が確認されている。後期になると、中高瀬観音山遺跡で100軒をこえる住居が検出されている。また、内匠上之宿遺跡では4軒・中高瀬庚申山遺跡7軒・下高瀬寺山遺跡1軒と、中高瀬観音山遺跡をのぞけば、比較的小規模な集落が丘陵上の

弥生時代後期の様相である。

**古墳時代** 前期の住居は、中高瀬観音山遺跡と内匠日向周地遺跡で検出されている。前期の古墳としては、北山茶白山古墳と北山茶白山西古墳がある。中期の住居は中高瀬観音山遺跡で9軒検出されている。また、下高瀬上之原遺跡では5C後半～6C初頭の古墳が7基調査されている。

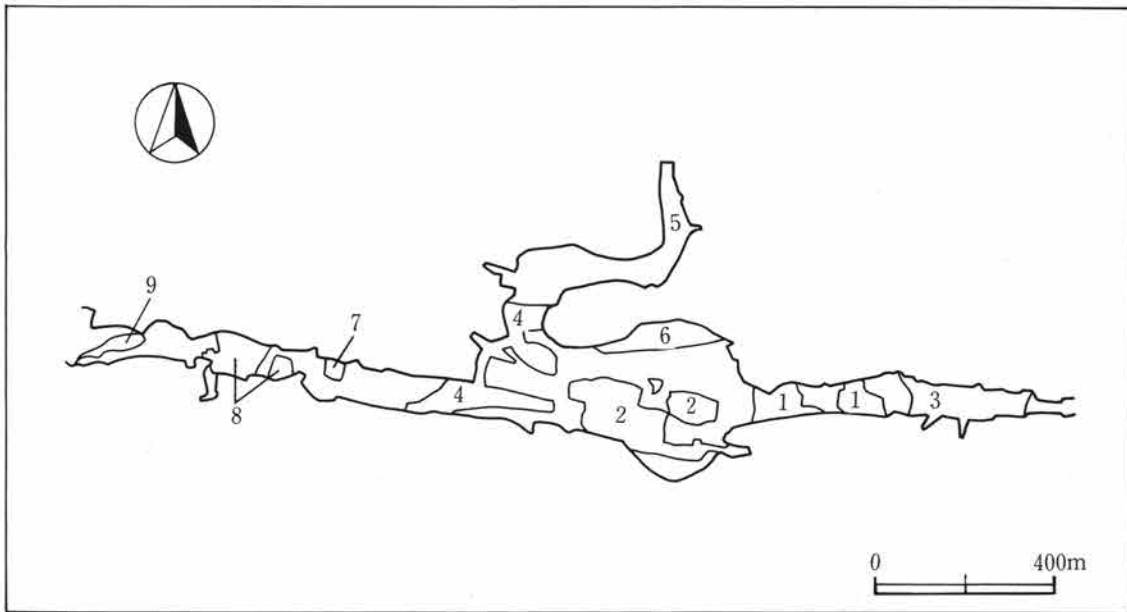
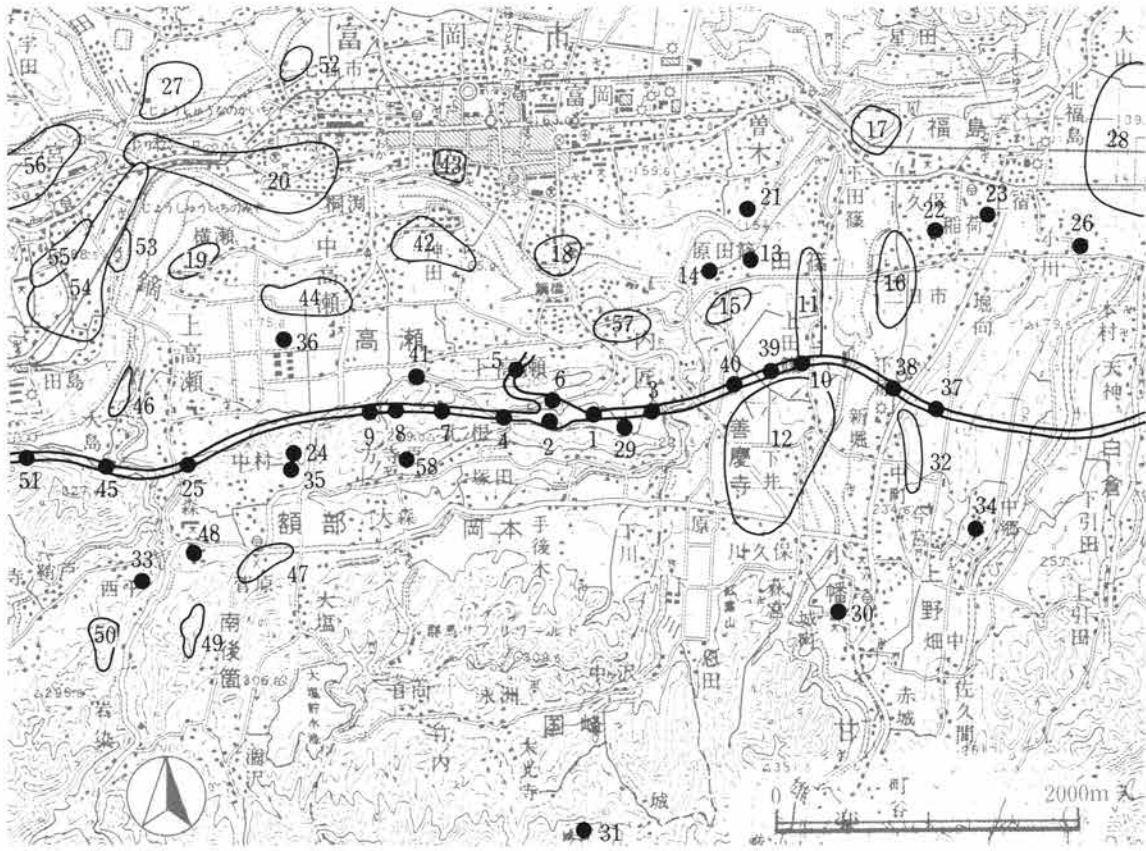
後期に入ると、内匠上之宿遺跡・下高瀬上之原遺跡・中高瀬観音山遺跡で住居が調査された。特に、下高瀬上之原遺跡は、殆どの住居内から滑石のチップや玉の未製品が出土している。さらに、同遺跡は集落に伴うと思われる水場が検出されたり、水場の谷頭から6C代の埴輪窯が2基検出されるなど、興味深い問題を提示してくれる。

**奈良・平安時代** 中高瀬庚申山遺跡では住居が6軒と性格不明の特殊遺構が4基検出されている。他の住居を検出した遺跡は、下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡・下高瀬上之原遺跡である。この中で、上之原遺跡では、特殊な遺物として住居内から青銅製八稜鏡や刻書の土師器などが出土している。また、内匠日向周地遺跡では多量の木製品とともに「□□□□奉龍王」の文字が読み取れる木簡が出土した。木製品や木簡が出土した埋没土の上からは、浅間B軽石に覆われていた水田も検出されている。

**中世** 丘陵の南東には内匠城があり、内匠上之宿遺跡では城の外側の一部が調査され、外堀・土塁・掘立柱建物などの施設が検出された。また、内匠日向周地遺跡では水田が調査された。

**江戸時代以降** 丘陵ほぼ全域で農業生産にかかわる溝やイモ穴状の土坑が検出されているが、時期を特定するのが難しい。信仰に拘わるものとしては、中高瀬庚申山遺跡では、遺跡名に由来する百庚申が建立されており、墓壇は、下高瀬上之原遺跡や下高瀬前田遺跡で調査された。上之原遺跡では、墓壇内から17C代の遺物が出土している。また、生産にかかわる遺構として下高瀬前田遺跡と内匠日向周地遺跡では、浅間A軽石によって埋没した水田と畠が検出された。





第 2 図 周辺の遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	備考
1	内匠諏訪遺跡	縄文・弥生・近世	集落他	当該遺跡。富岡インター予定地。
2	内匠日影周地遺跡	縄文・弥生・古墳	集落・古墳他	当該遺跡。富岡インター予定地。
3	内匠上之宿遺跡	縄文～古墳・中世	集落・城跡他	『年報』7 1989(勅群埋文)「上之宿・千足遺跡」1988富岡市教委。
4	下高瀬上之原遺跡	古墳～平安	集落・古墳他	『年報』8・9 1990(勅群埋文)。富岡インター予定地。埴輪窯他。
5	下高瀬前田遺跡	近世	生産他	『年報』10 1991(勅群埋文)。富岡インター予定地。
6	内匠日向周地遺跡	古墳・平安・中世	生産他	『年報』10 1991(勅群埋文)。富岡インター予定地。木簡出土。
7	下高瀬寺山遺跡	縄文・弥生・平安	集落	『年報』9 1990(勅群埋文)。当該遺跡と同一丘陵上に立地する。
8	中高瀬観音山遺跡	縄文・弥生～奈良	集落他	『年報』9 1990(勅群埋文)。当該遺跡と同一丘陵上に立地する。
9	中高瀬庚申山遺跡	縄文・弥生～平安	集落他	『年報』9 1990(勅群埋文)。平安時代の特殊遺構4基。
10	田篠上平遺跡	古墳～平安	古墳・集落	『田篠上平遺跡』1988(勅群埋文)。
11	上田篠古墳群	古墳	古墳	『上田篠古墳群・原田篠古墳群発掘調査報告書』1984富岡市教委。
12	善慶寺古墳群	古墳	古墳	後期の群集墳。現存は約20基。
13	原田篠遺跡	古墳～平安	集落	『上田篠古墳群・原田篠古墳群発掘調査報告書』1984富岡市教委。
14	布和田古墳群	古墳	古墳	上毛古墳総覧福島町第31～37号墳。
15	原田篠古墳群	古墳	古墳	『上田篠古墳群・原田篠古墳群発掘調査報告書』1984富岡市教委。
16	二日市古墳群	古墳	古墳	甘楽町二日市に所在。上毛古墳総覧福島町第2～22号墳。
17	田篠塚原遺跡	弥生・古墳	古墳・包蔵地	富岡市上田篠字塚原に所在。『富岡市史』1987 所収。
18	芝宮古墳群	古墳	古墳	富岡市芝宮に所在。100基以上の群集墳。『富岡市史』1987 所収。
19	横瀬古墳群	古墳	古墳	『横瀬古墳群』1990 富岡市教委。
20	七日市古墳群	古墳	古墳	『富岡五号古墳』1972 群馬県立博物館・『富岡市史』1987 所収。
21	久保遺跡	古墳	祭祀遺跡	滑石製模造品等多数出土。『富岡市史』1987 所収。
22	笹森稲荷塚古墳	古墳	古墳	上毛古墳総覧福島町第1号墳。
23	天王塚古墳	古墳	古墳	上毛古墳総覧福島町第2号墳。
24	北山茶白山西古墳	古墳	古墳	『富岡市史』1987 所収 『群馬県史』資料編3 1981 所収。
25	茶白山西古墳	古墳	古墳	『北山茶白山西古墳』1988(勅群埋文)。
26	笹遺跡	弥生～古墳	集落	『笹遺跡』1964・1966 群馬県立博物館。
27	小塚遺跡	縄文～中世	集落	『小塚・六反田・久保田遺跡』1987 富岡市教委。
28	甘楽糸里遺跡	古墳・平安・江戸	生産	各時代の水田が検出されている。甘楽町教委により1984年から調査。
29	内匠城跡	室町～戦国	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
30	小幡城跡	江戸	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
31	国峰城跡	戦国	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
32	下城跡	中世	城館	
33	西平原遺跡	弥生	集落か	壺と甕が2点採集。『富岡市史』1987 所収。
34	上野城跡	中世	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
35	中村遺跡	弥生	包蔵地	北山茶白山西古墳の南側。『富岡市史』1987 所収。
36	中高瀬遺跡	弥生	包蔵地か	1977年に富岡市教委調査。『富岡市史』1987 所収。
37	上野松葉遺跡	古墳～平安	集落	遺跡調査会によって調査。
38	上野場遺跡	弥生～平安	集落	遺跡調査会によって調査。
39	田篠中原遺跡	縄文	集落	『田篠中原遺跡』1990 (勅群埋文)。
40	善慶寺早道場遺跡	古墳～平安	集落	『年報』9・10 1990・1991(勅群埋文)。
41	陣屋遺跡	古墳・中世・近世	集落・城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
42	桐洞古墳群	古墳	古墳	17基が発掘調査された。『富岡市史』1987 所収。
43	富岡陣屋跡	中世・近世	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
44	一本木遺跡	古墳	包蔵地	
45	大島上城跡	中世	城館他	『大島上城遺跡』1988(勅群埋文)。
46	大島下城跡	中世	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
47	菅原遺跡	縄文・古墳	包蔵地	縄文土器片は『富岡市史』1987に掲載されている。
48	原遺跡	縄文	包蔵地	諸磯b式の土器片出土。『富岡市史』1987 所収。
49	浅香入城跡	中世	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
50	岩染城跡	中世	城館	山崎 一『群馬県古城址の研究 下巻』1978 所収。
51	野上塩之入遺跡	縄文～平安	集落他	『野上塩之入遺跡』1991 (勅群埋文)。
52	観音前遺跡	縄文	集落	富岡市教委によって、1984年に調査。
53	生田遺跡	縄文	包蔵地	縄文時代晩期。『富岡市史』1987 所収。
54	一ノ宮古墳群	古墳	古墳	17基が存在していた。『富岡市史』1987 所収。
55	本宿・郷土遺跡	縄文・古墳～平安	集落他	『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』1981 富岡市教委。
56	貫前神社遺跡	縄文	包蔵地	打製石斧が出土。『富岡市史』1987 所収。
57	内匠遺跡	古墳～平安	集落	『内匠遺跡発掘調査報告書』1982 所収。
58	上北ノ根遺跡	弥生	包蔵地	剣形石斧が1点採集。『富岡市史』1987 所収。

## 5. 調査の方法

### グリッド設定法

本報告遺跡を含む内匠・下高瀬遺跡（事業名称）全体を区割りするすることができるようにグリッドを設定した。調査区の区割りは、国家座標に乗る形で軸線を設定してある。

調査原点は、内匠・下高瀬遺跡の北東部、国家座標の $X = +27300.000$ 、 $Y = -83200.000$ の地点とし、ここをA0-I0とした。ここを基準とし、1グリッド2mとして南・西に向かって設定していった。南北ラインは、A0、A1、A2、……A98、A99、B0、B1、……とアルファベットとアラビア数字の併記とし、200mでアルファベットが、2mでアラビア数字が変わるものとした。東西ラインは、I0、I1、I2、……I98、I99、II0、II1、……とローマ数字とアラビア数字の併記とし、200mでローマ数字が、2mでアラビア数字が変わるものとした。そしてA1-I2のように、南北、東西の順で併記してグリッドの呼称とした。各グリッドの呼称は北東隅のポイント名をもってそのグリッドを表すものとした。

### 試掘調査

実施にあたり、内匠・下高瀬遺跡地を大きく4分割し、東から東I区（STA194~197）、東II区（STA197~200）、中央区（STA200~204）、西区（STA204~209）と仮称した。分布調査の結果、対象地を遺物の濃密分布区域（A）遺物分布の希薄な区域（B）遺物分布は認められないが遺構存在の可能性のある区域（C）傾斜地等の理由で調査が事実上不可能な区域（D）の4つに分類した。A区域は無条件で本調査とし、B・C区域に試掘調査を行って本調査区を決定した。試掘は重機使用によるトレンチ調査を実施した。トレンチの発掘面積は対象面積の10%（第1段階）、20%（第2段階）、30%（第3段階）として遺構確認ができるまで順次行い、第

3段階までに遺構が検出されなかった場合には本調査の対象外とした。

### 本調査

基本的に重機を使用して表土層を除去したのちに遺構確認を行った。遺構については平面図・地形図を20分の1で作成することを基本とし、住居跡のカマド、炉、詳細な遺物出土状況は10分の1で作成した。遺物は原則として出土位置、高さを記録して取り上げることとしたが、出土位置が不明になったもの、耕作溝等の新しい遺構に伴うものは一括して取り上げた。また、調査期間の問題から内匠日影周地遺跡A区については原則に従って調査ができなかった。現況図が必要と判断した遺構については図を作成した。

## 6. 整理作業について

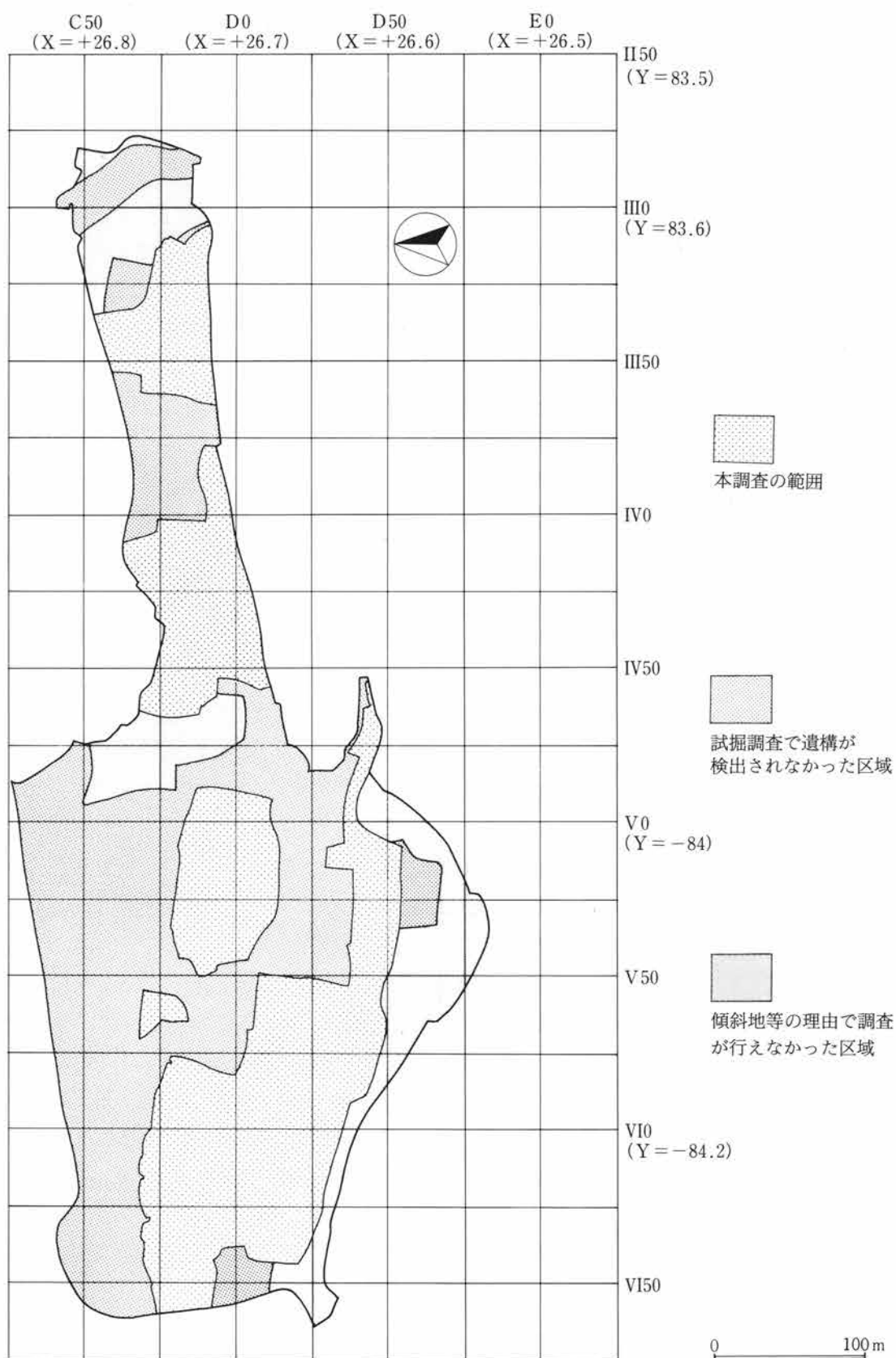
発掘調査で、遺構内遺物の出土位置を記録化することにつとめたことを生かすために、整理作業では以下の3点を念頭に置き報告書作成にあたった。

- ①遺構内から出土した遺物で出土位置が明確なものについては、できるかぎりその位置を示す。
- ②遺構内及び遺構間の遺物接合をできるかぎり試み、資料化を図る。
- ③遺構内及び遺跡から出土した遺物について時期別にその総量を提示する。

以上の方法により、一定の成果をあげることができたと考えている。

しかしながら、図化した遺物の出土位置しか提示できなかったことや時期別出土遺物の総量提示の時期区分の問題といった様々な課題を残した。

I 発掘調査と遺跡の概要



第3図 発掘調査の範囲とグリッド位置

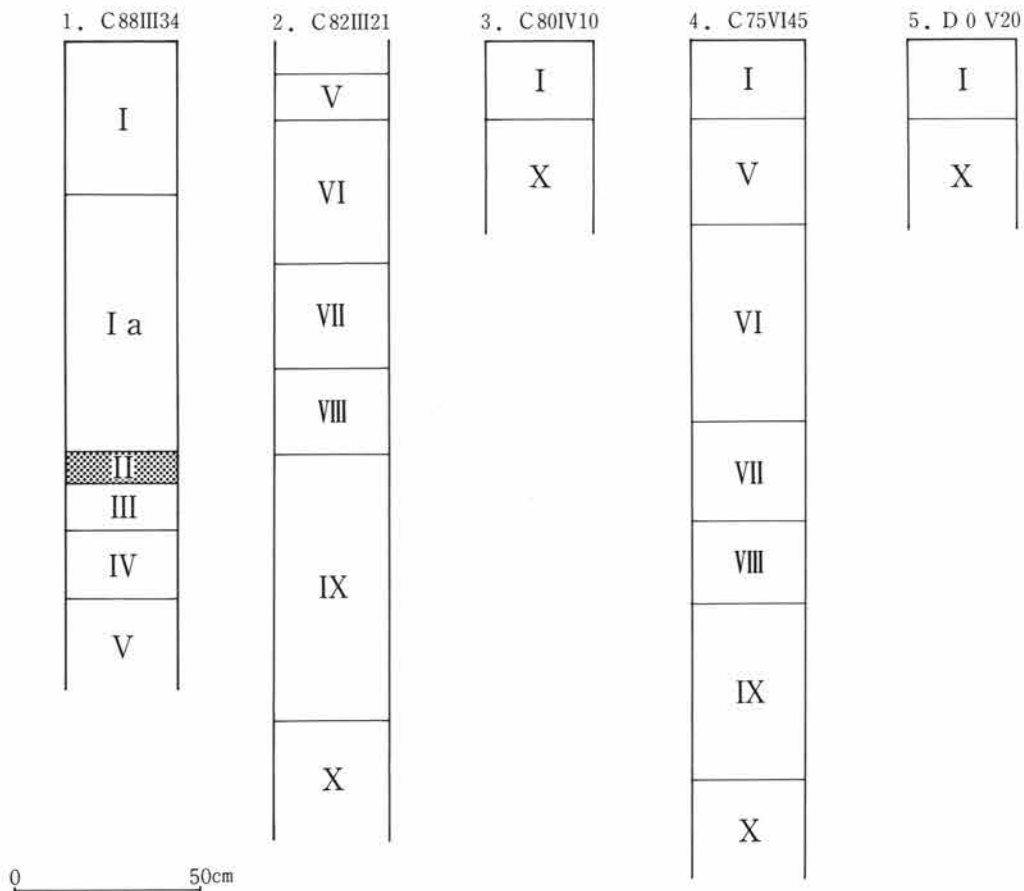
## 7. 遺跡の基本層序

本遺跡では、表土層下の様相が、地区により異なっている。I a～IV層は、内匠諏訪前遺跡A区の江戸屋敷盛土下部分でしか検出されなかった。また、調査時には、ローム層を消失しているために3・5のような層序を示す地域も多かった。また、基本層序として表さなかったが、内匠日影周地遺跡B区ではI層とV層の間に約30cmの再堆積ローム層が確認されている。

以下、各層序について簡単に特徴をしるす。

- I層：褐色土層。表土層にあたる。現在の畠の耕作土で浅間A軽石を含む。(I a層は内匠諏訪前遺跡A区の江戸屋敷地造成時の人為的盛土)
- II層：浅間A軽石。天明3(1783)年に爆発・降下した軽石層。

- III層：暗褐色土層。浅間A軽石降下前の表土層にあたる。下位には天仁元(1108)年に降下した浅間B軽石を含む。
- IV層：暗褐色土層。堅く締まり、粘性も強い。縄文～古墳時代の遺物を包含する。
- V層：明黄褐色ローム層。浅間板鼻黄色軽石(Y・P)を含み、部分的にブロック状をなす。
- VI層：暗黄褐色ローム層。上位には白色の細粒を多く含む。V層に比べると締まりが弱い。
- VII層：明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石(B・P)を多く含む。
- VIII層：暗褐色ローム層。暗色を呈する土層。粘性は若干あるが、締まりが弱い。
- IX層：明褐色ローム層。浅間室田軽石(M・P)の純層。
- X層：褐色粘土層。上位には始良丹沢火山灰(A・T)を含む。



第4図 遺跡の基本標準土層

## II 縄文時代の遺構と遺物

### 1. 検出された遺構の概要

地区別に概要を述べていきたい。

#### 内匠諏訪前遺跡 A 区 (第33図参照)

A 区では東側の地域で竪穴式住居 2 軒、土坑 26 基、埋甕 1 基が検出されている。

A 区東側の立地は、東側に深い谷をもつ斜面に位置し、谷を挟んだ東側は内匠上之宿遺跡である。

A 区で遺構が検出された部分は、ローム層が残存していたが、江戸時代の屋敷造成による削平等で遺構が空白となる箇所が存在する。

A 区東側の北西部分や A 区西側では、遺構が検出されていないが、その理由として調査時点ですでにローム層が消失していたことに起因すると思われる。本来は何等かの生活が営まれていた可能性もある。検出された遺構の多くは、前期諸磯 a 式期～中期初頭五領ケ台式期に比定される。谷を挟んだ東側の内匠上之宿遺跡の縄文時代の主体は、中期後半～後期前半であり、際だった違いをみせている。

#### 内匠諏訪前遺跡 B 区 (第33図参照)

B 区では竪穴式住居 3 軒と土坑 19 基が検出されている。隣接する A 区西側はローム層が消失していたが、B 区では残存しているため、遺構が検出された(残存していた)と思われる。B 区の立地は、西側に深い谷をもつ斜面上に立地している。検出された遺構のなかで時期がわかるものは、前期黒浜式期～中期初頭五領ケ台式期に比定される。

#### 内匠日影周地遺跡 A 区 (第34・35図参照)

竪穴式住居 1 軒と土坑 3 基が検出された。遺構は、弥生時代の竪穴式住居が検出された馬背状丘陵の頂部では検出されず、頂部から 10m 以上標高が下がった諏訪前遺跡とほぼ同じ標高で検出されている。住居は諸磯 a 式期であるが、土坑からは遺物の出土がなく時期は不明である。

C 80～D 15・IV 90～V 55 に含まれる部分は、ローム層が消失していた。

#### 内匠日影周地遺跡 B 区 (第35図参照)

集石 1 基と土坑 1 基が検出された。2 つの遺構の時期は不明である。

B 区においてもローム層の大半を消失していた。

### 2. 竪穴式住居

#### 内匠諏訪前遺跡 A 区 (第33図参照)

検出された 2 軒の住居は、8 号住居と 10 号住居である。東に谷があり、北東方向に傾斜する場所に立地している。

8 号住居は、北半分を近現代の削平により消失するが、南半分は 1 号屋敷(江戸時代)北側の盛土下にあたるために検出された壁高は高かった。埋没土中から、黒曜石のフレイク・チップ類の出土が多かった。諸磯 b 式期の住居である。

10 号住居は、8 号住居の東側に位置し谷に近いために傾斜が 8 号住居よりきつい。

1 号屋敷の盛土下での検出だが、壁高は 10 号住居と比べると低い。

10 号住居は十三善堤式期に比定されるが、竪穴状の遺構である可能性が強い。

#### 内匠諏訪前遺跡 B 区 (第33図参照)

検出された 3 軒の住居は 2 号・4 号・5 号住居である。西に谷があり、北西方向に緩やかに傾斜する場所に立地している。

2 号住居は黒浜式期に比定され、4 号住居も黒浜式もしくは近接する時期に比定される。5 号住居は、諸磯 a 式期に比定されよう。

#### 内匠日影周地遺跡 (第34図参照)

A 区で 2 号住居が検出されている。諸磯 a 式期の住居である。

2. 竪穴式住居

内匠諏訪前遺跡A区8号住居

位置 C87III34他 写真 PL4・12

形状 北半分を近現代と思われる削平により切られているために全体的な形状は不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。検出し得た軸長は、5.4mであった。

面積 不明 方位 不明

床面 暗褐色土とロームを118~96cm掘り込んで床面としている。床面は全体に堅固で良く踏み固められており、凹凸も認められる。地形が南から北に傾斜しているために、床面も同様の傾斜で南北で19cmの比高がある。

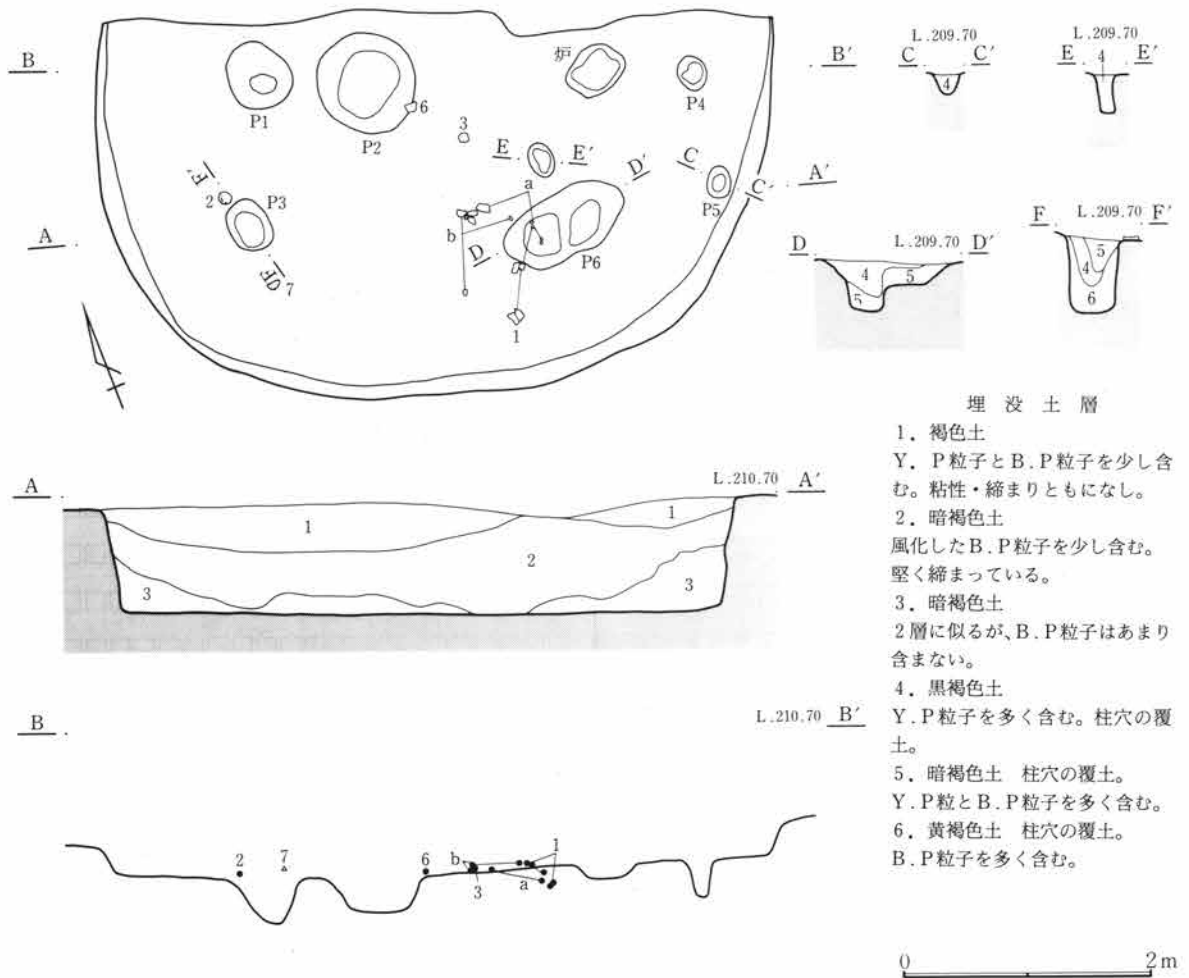
埋没土 上層には褐色土が、中・下層には暗褐色土が堆積し下位に行くにつれてローム粒の混入量が少なくなる。

炉 西壁から約110cm内側に位置している。43×38cmの隅丸方形を呈し、深さは12cmの掘り込みがある地床炉である。

柱穴 7本の柱穴が確認検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(54)×34cm、P2：(80)×33cm、P3：(44~32)×63cm、P4：(23)×28cm、P5：(24)×16cm、P6：(104~46)×38cm、P7：(20)×32cm、である。

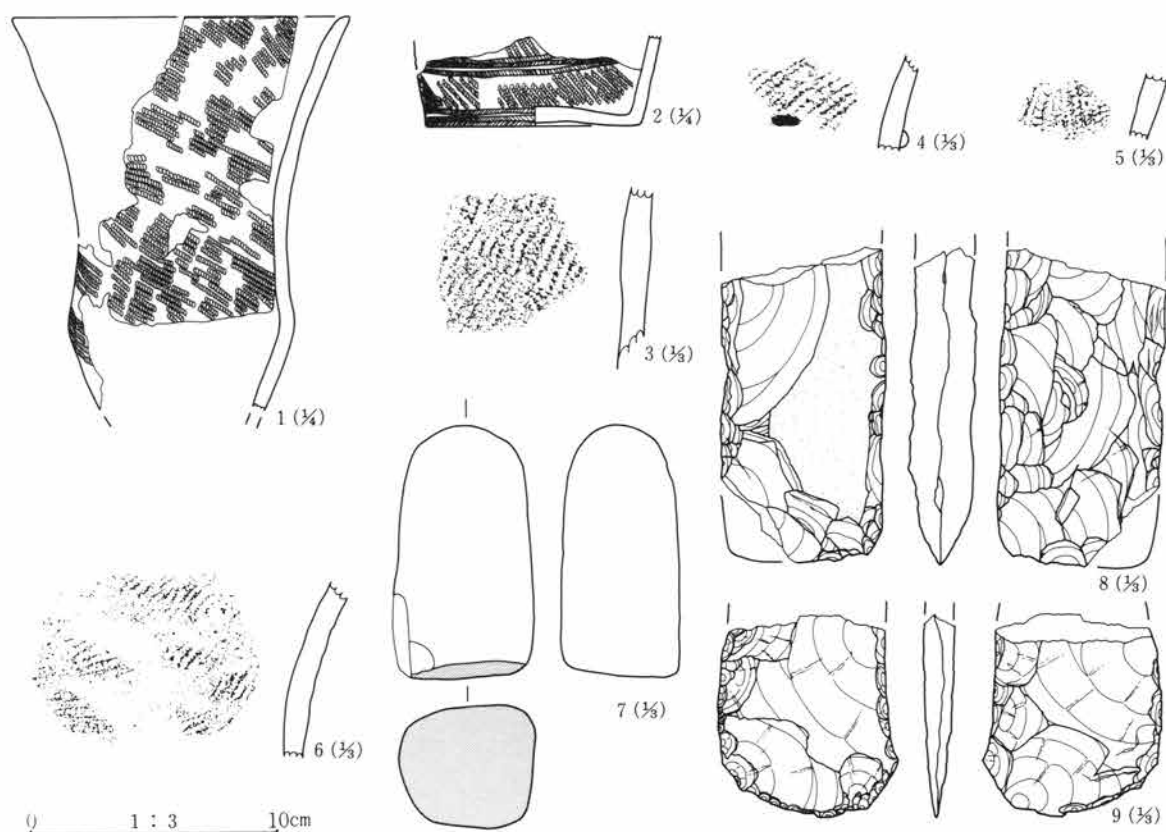
遺物 住居内から縄文土器95点と石器類353点を出土した。土器の大半は諸磯b式で、諸磯c式が1点と五領ケ台式2点が出土している。石器類の中で297点は黒曜石のフレイク・チップで2・3層中から出土した。接合資料a・bは諸磯b式の深鉢の胴部である。(遺物観察表：34頁)

備考 諸磯b式期の竪穴式住居。



第5図 諏A8号住居

## II 縄文時代の遺構と遺物



第 6 図 諏A 8号住居出土遺物

### 内匠諏訪前遺跡 A 区10号住居

位置 C79III17他

写真 PL4・12

形状 南北方向に主軸をもつ不正方形を呈すると思われる。1部に抉りがある。東側の大半を風倒木の攪乱を受けており詳細は不明である。

方位 不明

面積 不明

床面 ロームを36~68cm掘り込んで床面としている。床面が残存している箇所は、良く踏み固められており凹凸も認められる。地形が南から北に傾斜しているために、床面も同様の傾斜をするが比高は10cm程度である。

埋没土 暗褐色土を主体とする埋没土である。

炉 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

遺物 住居内から縄文土器92点と石器類76点が出

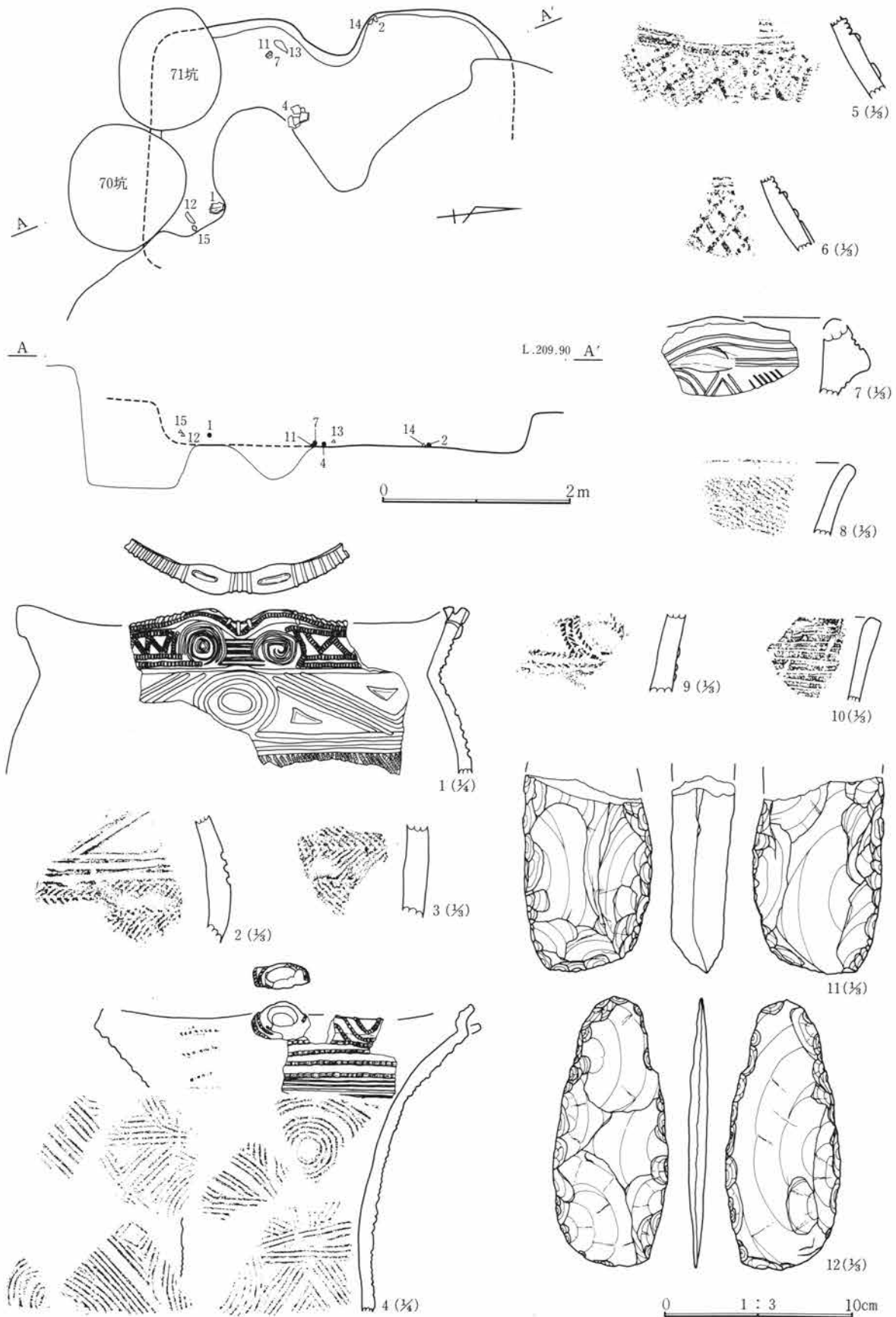
土している。出土土器の中で53点が無文であったが、他の土器型式の内訳は十三菩堤（併行）式27点、早期沈線文1点、諸磯b式4点、五領ケ台式1点、縄文施文（時期不明）6点である。床面直上の土器の大半は十三菩堤（併行）式であるが、1~3と同一個体が約12m離れたグリッドで出土している（遺構外出土土器：第26図33）。また、4も5点が覆土の上~中層からの出土である。出土石器類の中で33点が黒曜石で石器は20のみである。他の石材の大半は熱変成岩で、僅かにチャート1点、広義の結晶片岩2点、安山岩2点であった。

重複 南側で70・71号土坑と重複するが、先後関係は不明である。（遺物観察表：34・35頁）

備考 当初は住居と考えたが、炉・柱穴が検出されていないことなどから十三菩堤式併行期の竪穴状遺構の可能性が強い。

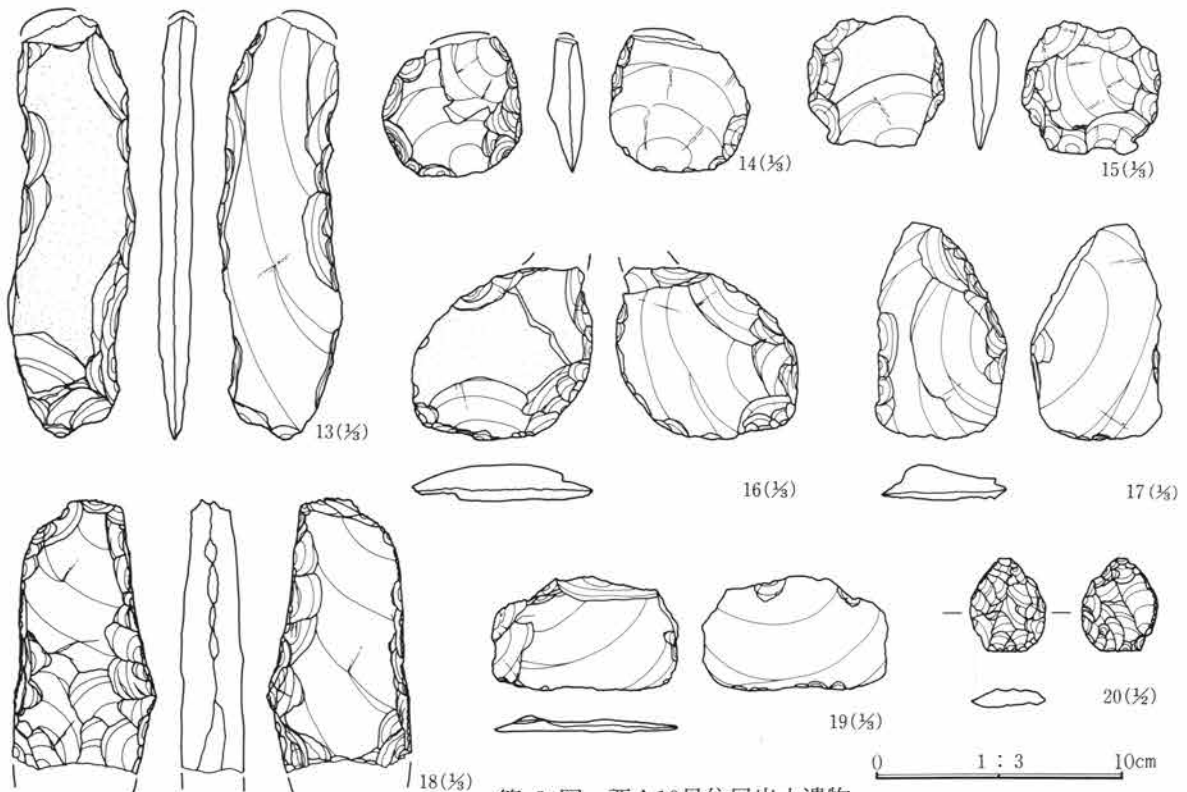


2. 竪穴式住居



第 7 図 諏A10号住居と出土遺物

II 縄文時代の遺構と遺物



第 8 図 諏A10号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡B区2号住居

位置 C81IV53他 写真 PL4・12・13

**調査の経緯と重複** 当初住居プランを確認した段階では、1軒の住居と認定し（2号住）調査を進めた。床面精査の際、中心部分から南側にかけて床面の状態が異なった部分が認められたため、さらに調査を進めたところ5号住を確認した。この段階では、最初の確認段階で5号住のプランが確認できなかったことなどの理由から2号住（新）・5号住（古）と判断したが、出土土器の様相から2号住（古）・5号住（新）と判明した。また、5号住居の掘り方調査の際、31・32号土坑が検出されたが、住居との新旧関係は不明である。

**形状** 直径約4.6mの円形を呈すると思われる。西側に谷が南側に小さな落ち込みがあるために、南西部分の壁は流れており検出できなかった。

**面積** 不明 **方位** 不明

**床面** 堅固な面はほとんどない。

**埋没土** 大半が5号住によって切られているために、2号住本来の埋没土は僅かである。

**炉** 残存部分からは検出されなかった。

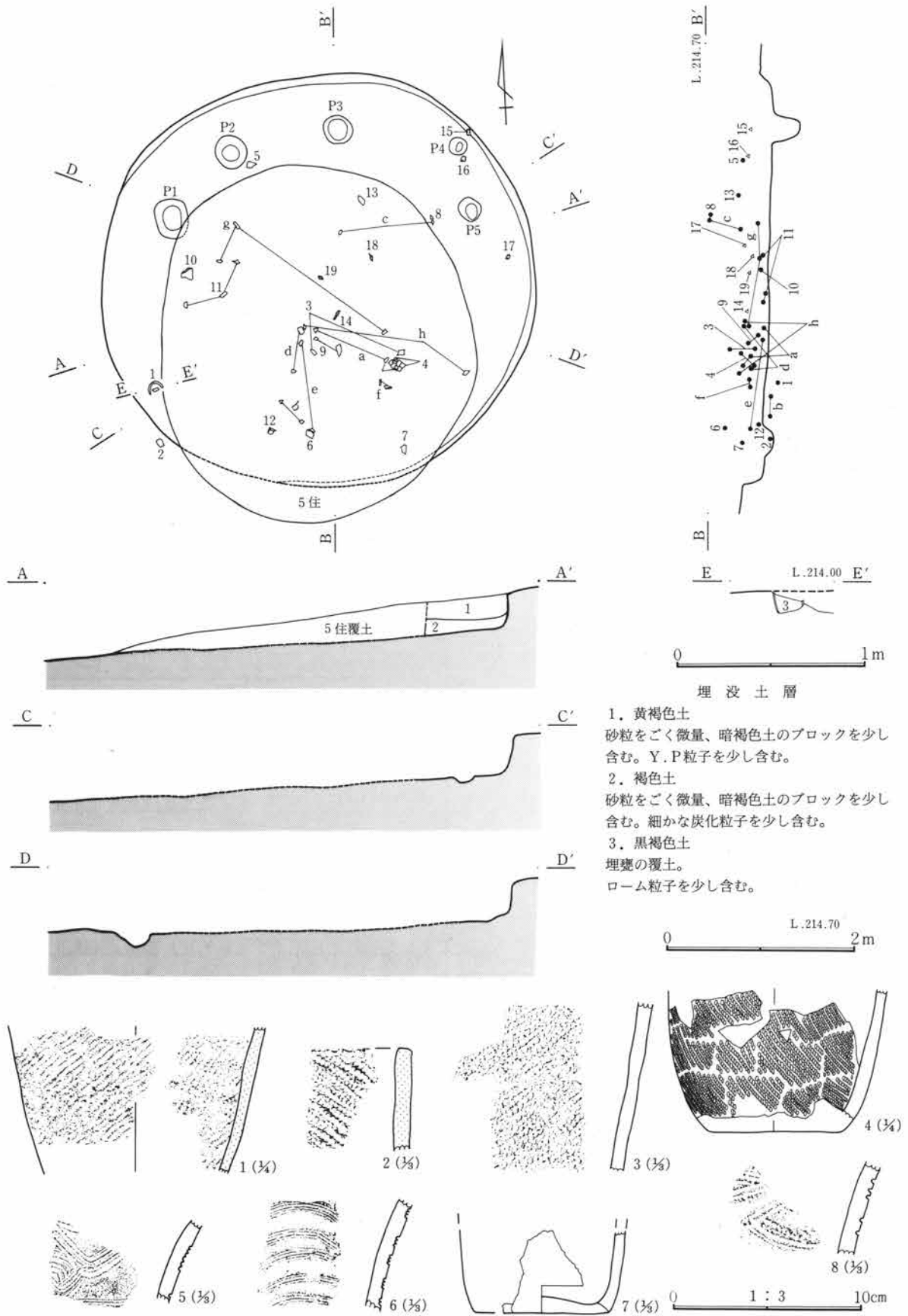
**柱穴** 残存部分で5本の柱穴が確認できた。残存状態から、住居の壁に沿って配列されていた可能性が強い。各柱穴の規模《（径）×深さ》は、P1：（35）×15cm、P2：（32）×19cm、P3：（34）×10cm、P4：（19）×29cm、P5：（20）×7cm、であった。

**埋 甕** 住居の南西隅で検出された（1）。

**遺 物** 縄文土器157点と石器類182点が出土しているが、大半は5号住居廃絶後の遺物として考えられ、分布も5号住居のプラン内に集中する。土器のうち繊維を含むものは15点で、五領ケ台式2点を除けば他は諸磯a～b式である。石器類のうち118点は黒曜石のフレイク等で石器は14のみであった。また、接合資料a～hのうちgは10と同一で他は繊維を含まない縄文施文の土器であった。32号土坑（32坑-1）と接合関係をもつ。（遺物観察表：35・36頁）

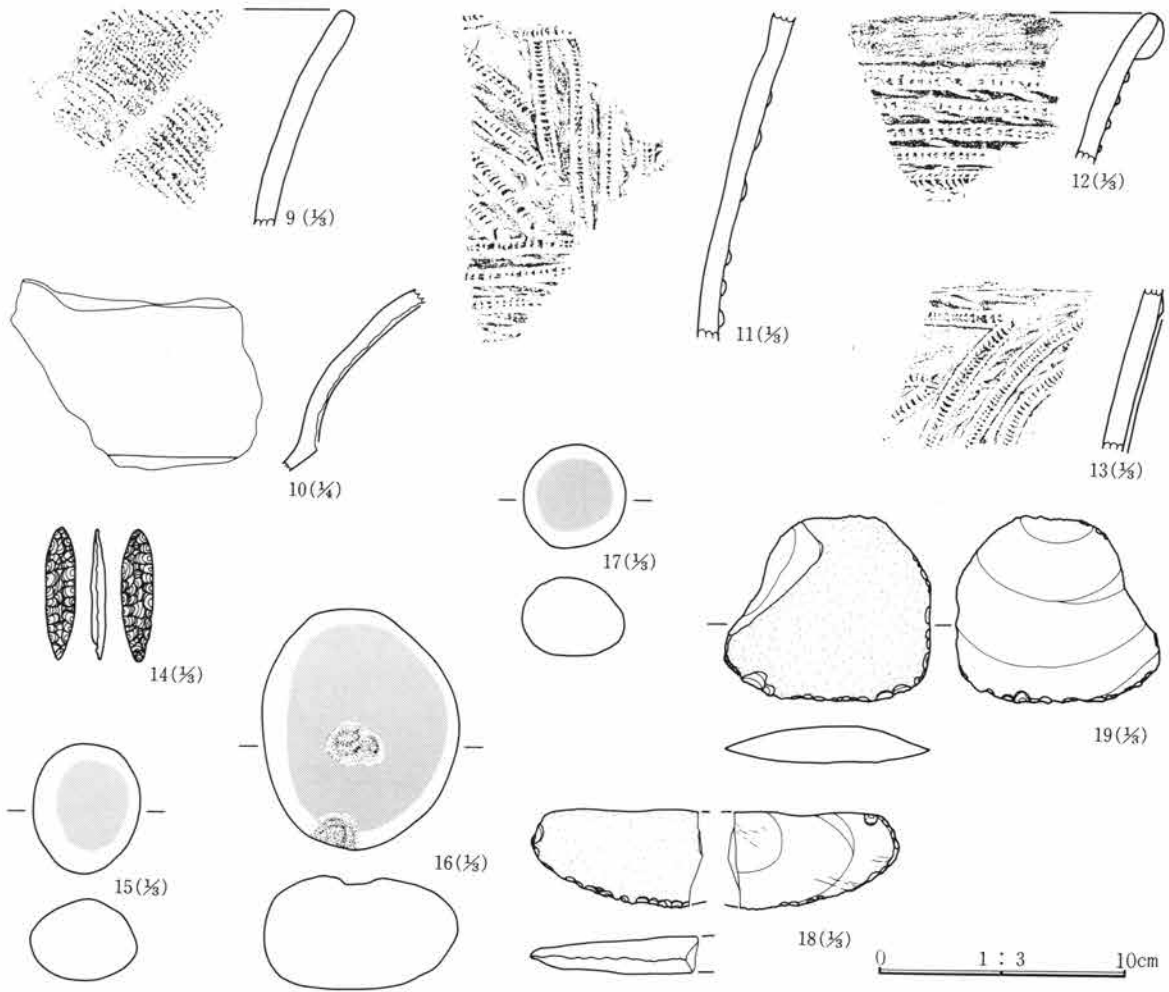
**備 考** 埋甕が黒浜式であり、当該期の住居に比定される。

2. 竪穴式住居



第9図 諏B2号住居と出土遺物

II 縄文時代の遺構と遺物



第10図 諏B2号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡B区4号住居

位置 C82IV42他 写真 PL4・13  
形状 多角形状に近い円形を呈する。直径は4.0~4.2mである。

面積 12.79m<sup>2</sup> 方位 不明

床面 ロームを南西隅で最大53cm掘り込んで床面とするが、北東に傾斜する斜面に立地するために北東の壁は流れていた。床面は全体に堅固であるが凹凸があり、地形に合わせるように床も約20cmの比高で傾斜する。

埋没土 ローム粒子を多く含む埋没土である。

炉 検出できなかった。また、焼土粒及び炭化粒子も床面上からは確認できなかった。

柱穴 不規則な配列だが7本検出されている。規模《(径)×深さ》は、P1：(44×32)×16cm、P

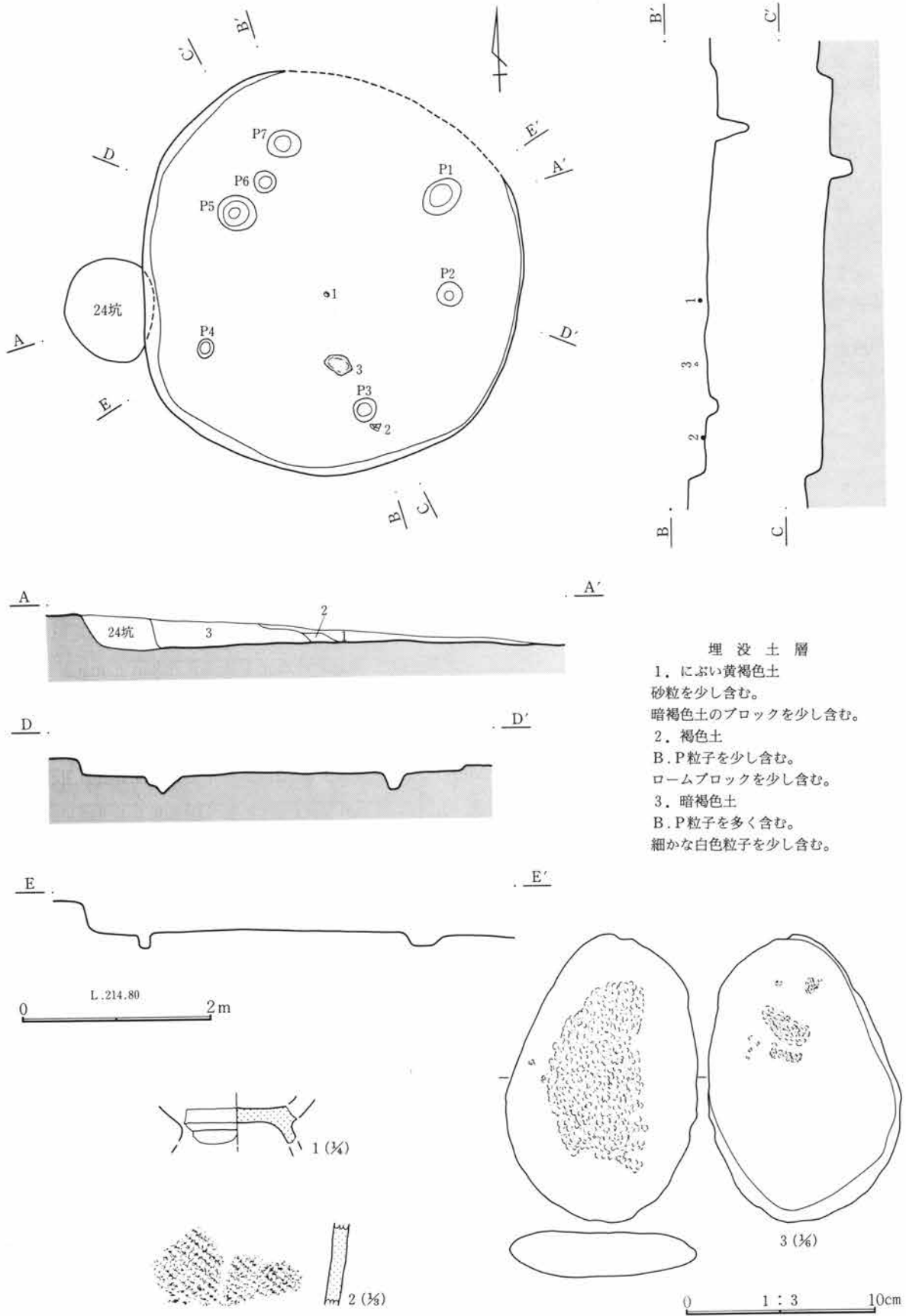
2：(28)×26cm、P3：(24)×32cm、P4：(18)×13cm、P5：(42)×20cm、P6：(22)×26cm、P7：(34×28)×49cm、である。径及び深さにかかなりの差異が認められる。

遺物 住居内からは、縄文土器11点と石器類7点が出土している。土器のうち8点が黒浜式で繊維を含んでいるが、他の3点は繊維を含まない縄文施文の土器（諸磯a～b式）であった。石器類のうち、明確に石器と認定できるものは3のみであった。出土した遺物は、すべて床面から10cm以上浮いた状態で出土している。（遺物観察表：36頁）

重複 24号土坑と重複する。本住居のほうが新しい。

備考 黒浜式期か。

2. 竪穴式住居



第11図 諏B4号住居と出土遺物

II 縄文時代の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡B区5号住居

位置 C80IV53他 写真 PL4・13

形状 多角形状に近い円形を呈する。直径は3.8~3.3mである。

面積 8.96m<sup>2</sup> 方位 不明

床面 2号住居の床面から10~30cm掘り込んで5号住居の床面としているが、5号住居覆土が2号住居覆土を切る状態は確認できなかった。床面は貼床で堅固であり、全体に凹凸が激しい。

埋没土 ローム質の土壌であった。2号住居の覆土

と明瞭な差異は認められなかった。

炉 住居のほぼ中央に36×58cmの焼土面が確認できたので炉と認定したが、焼土部分及び近辺の床面に明瞭な掘り込みは検出できなかった。

柱穴 規模〈(径)×深さ〉は、P1:(28)×15cm、P2:(24)×15cm、P3:(34)×37cm、P4:(54)×25cm、P5:(26)×16cm、P6:(26)×8cm、P7:(35)×46cm、P8:(42×28)×41cm、P9:(29)×35cm、P10:(30)×12cm、であった。

土坑 住居の南東に土坑が、炉の下に床下の土坑

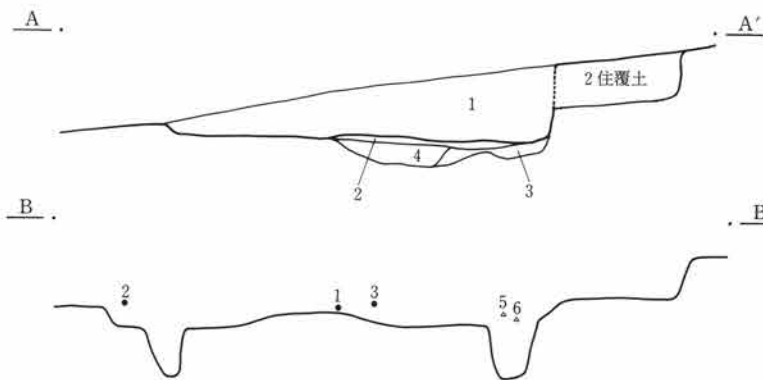
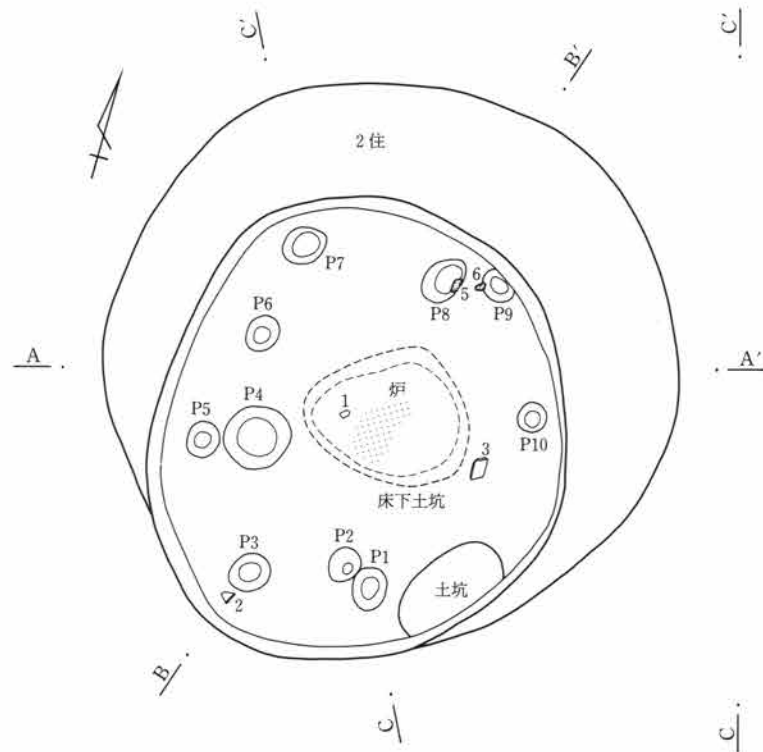
が検出された。両方ともに本住居に帰属するものであろう。

遺物 5号住居を確認してからの遺物は、縄文土器4点と石器類6点で、土器は型式がわかるものは図示した1・2のみであり、石器も5・6だけであった。また、2号住居の覆土の大半の遺物は5号住居内出土の遺物である。

(遺物観察表:36・37頁)

重複 2号住・31・32号土坑(詳細は2号住居の本文参照)

備考 諸磯a式期



埋没土層

1. 黄褐色土  
褐色土のブロックを多量に含む。  
黄色のパミスを少し含む。

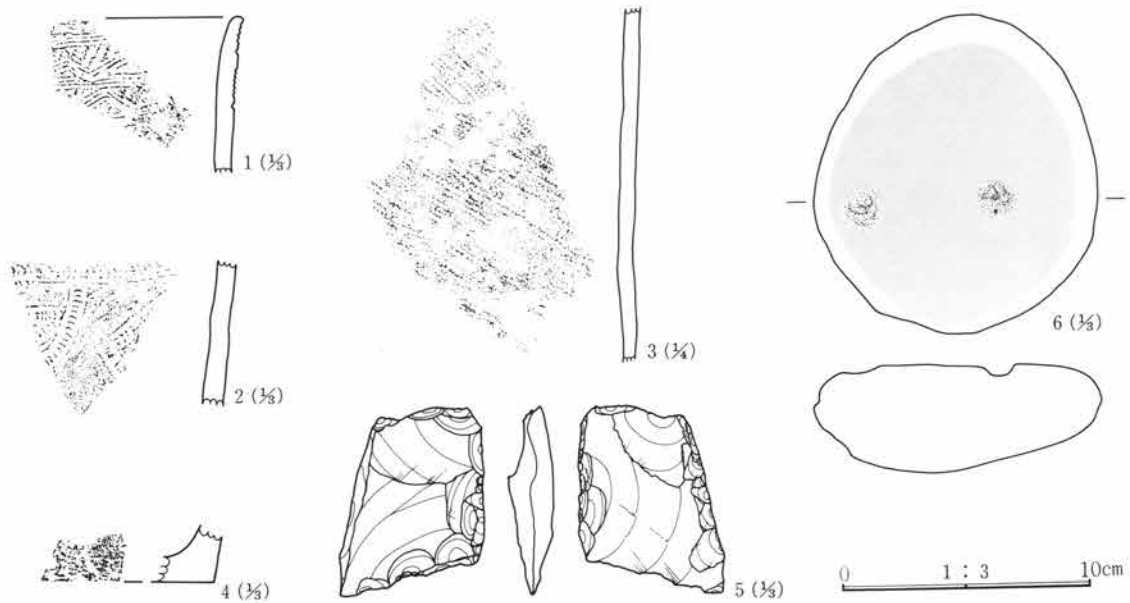
2. 黄褐色土  
貼床の土層。堅く締まる。

3. 黄褐色土  
掘り方の土層。炭化粒子を少し含む。

4. 褐色土  
床下土坑の覆土。  
褐色のブロックを少し含む。

0 L.214.70 2m

第12図 諏B5号住居



第13図 諏B 5号住居出土遺物

## 内匠日影周地遺跡A区2号住居

位置 D11V29他

写真 PL5・13

形状 円形に近い隅丸方形を呈する。軸長は4~5.7mである。

面積 23.3m<sup>2</sup>

方位 N-19°-E

床面 粘土質の土壌を31~2cm掘り込んで床面としている。床面は軟弱で凹凸があり、堅固な面は認められなかった。地形が南から北に緩やかに傾斜しているために、床面も同様の傾斜で南北では28cmの比高がある。また、南側1mの床面は他の部分よりも高い。

埋没土 下層にはローム質の土壌が堆積する。

炉 床面上では、焼土等を含め、何等その痕跡も検出されなかった。

柱穴 4本の柱穴が検出された。規模《(径)×深さ》は、P1 : (30)×12cm、P2 : (32)×11cm、P3 : (40)×28cm、P4 : (38)×22cmであった。P3とP4は主柱穴に該当しようが、対応すべき南側の主柱穴は検出できなかった。

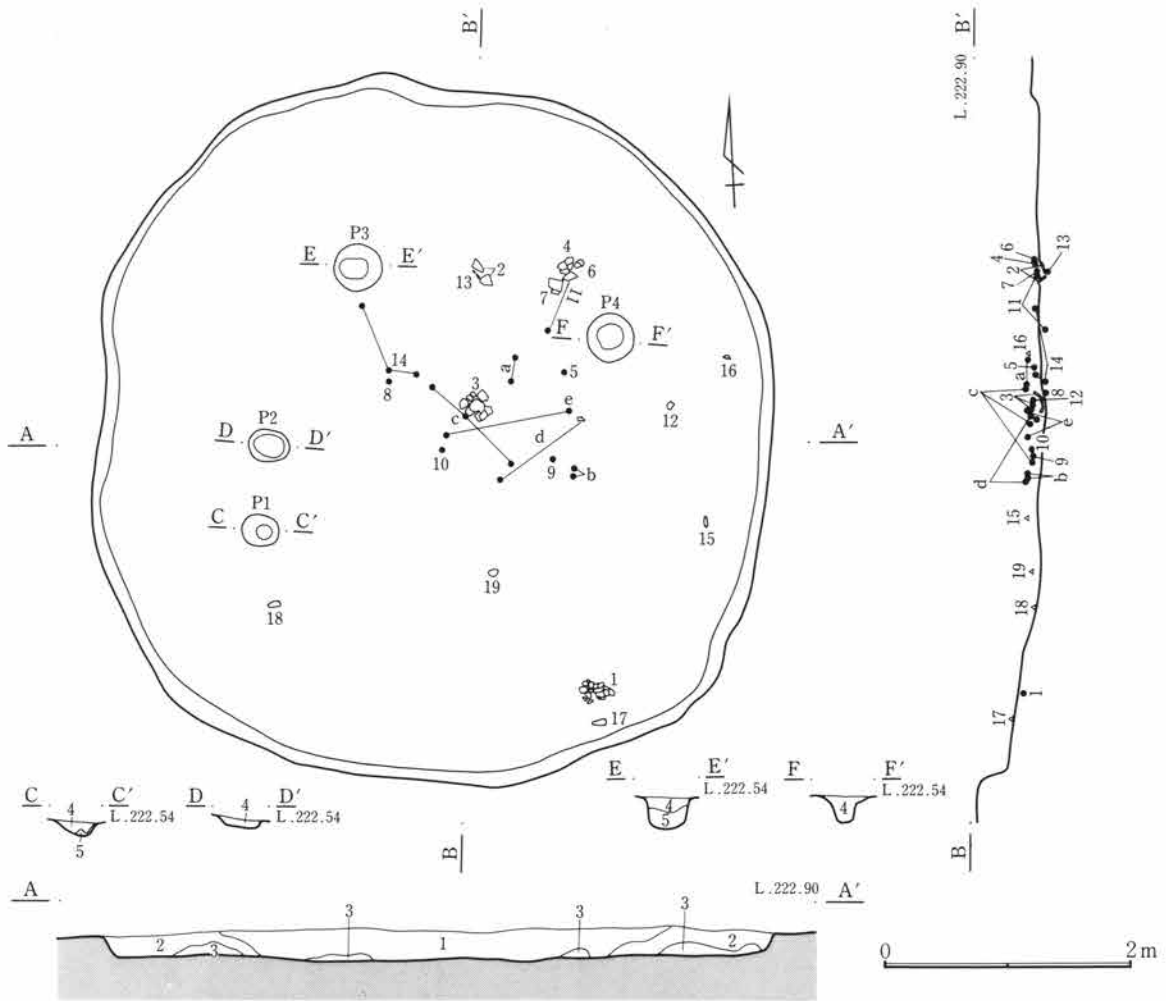
遺物 住居内から縄文土器99点と石器類28点が出土した。

土器の中で、ごく僅かではあるが繊維を含むものは3のみである。また、他の98点のうち文様をもつ土器は諸磯a式である。このことから、他の縄文施文のみの土器(1など)や無文の土器(14など)は、諸磯a式である可能性が高い。土器は、中央からやや北東よりに分布し、床上10cmから床面直上にかけて多く出土した。また、接合資料aとcは4~11と同一個体・bとdは縄文施文の同一個体、eは縄文施文の土器であった。以上の点から、床面に密着して接合関係がない1・2を除く土器は住居廃絶後に一括廃棄された可能性が高いと思われる。

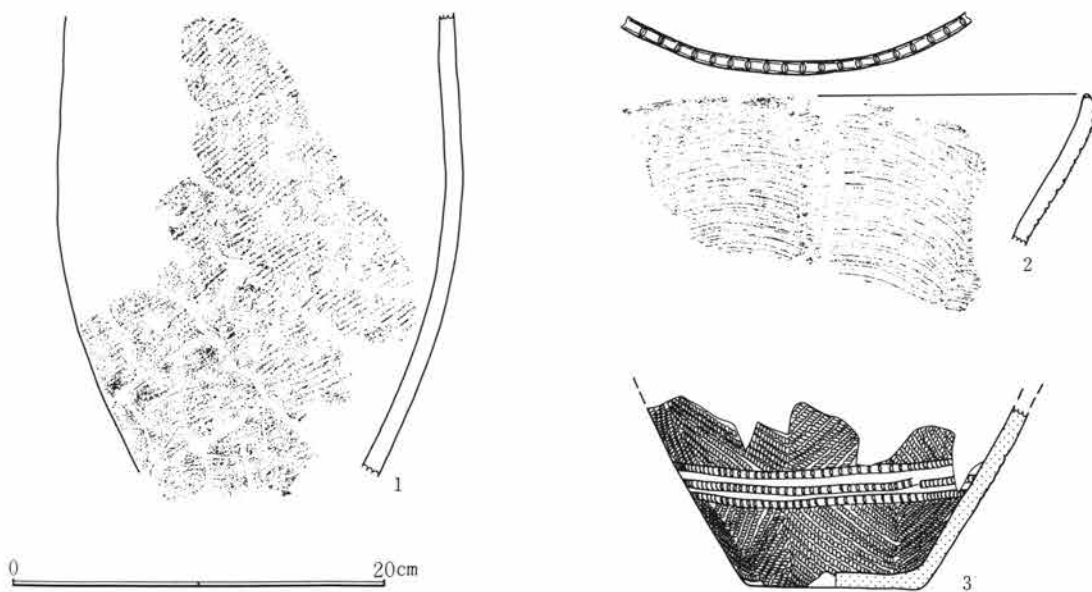
石器類28点の中で、石器は図示した4点のみであるが、15のすぐ西側で床上11cmの地点からチャートの石核が出土した。(遺物観察表:37・38頁)

備考 諸磯a式期の竪穴式住居

II 縄文時代の遺構と遺物

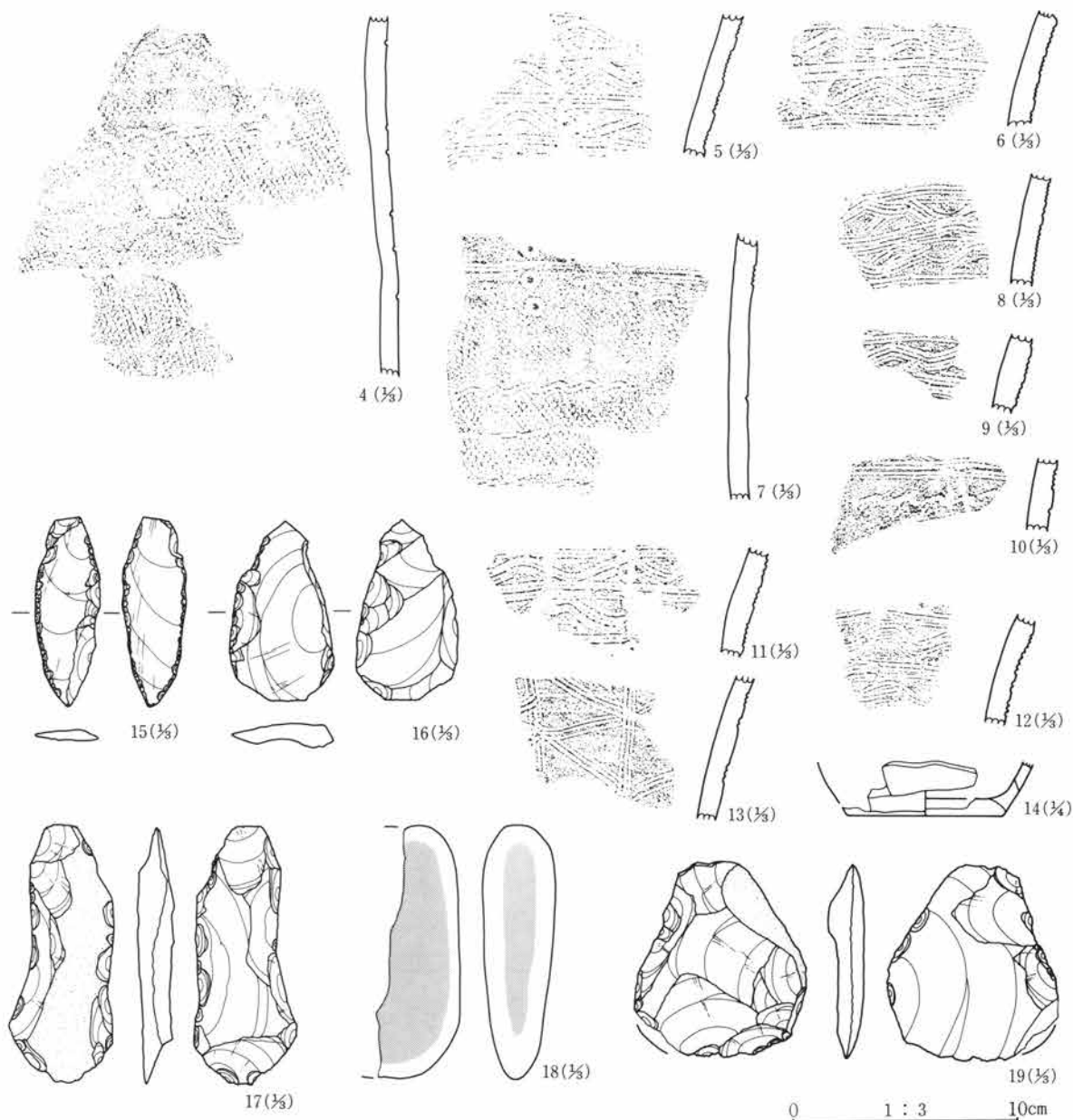


埋没土層 1. 黒褐色土 白色の細かなパミスを多く含む。炭化粒子と焼土粒子を少し含む。2. 暗褐色土 1層に似るが炭化粒子と焼土粒子を含まず、Y.P粒子を少し含む。3. 褐色土 Y.P粒子を主体としたロームブロックを多く含む。4. 黒色土 柱穴の埋没土。粘土粒子を少し含む。5. 灰黄褐色土 粘土質の土壌。



第14図 日A2号住居と出土遺物





第15図 日A 2号住居出土遺物

### 3. 埋 甕

内匠諏訪前遺跡A区で1基検出された。

埋甕の周辺では、柱穴等は検出されておらず、単独の埋甕である可能性が高い。西側に傾斜する地形変換点に立地している。

今回の報告では、住居に伴わない埋甕は1基しか検出されなかった。無文であるために、土器型式は不明である。  
(第16図参照)

### 4. 集 石

内匠日影周地遺跡B区で1基検出された。

北に走行をもつ谷の東側で検出され、北西方向に傾斜する場所に立地している。

周辺では縄文時代の遺構分布が希薄であり、縄文時代に帰属しない可能性もある。今回の調査で、集石は1基しか検出されなかった。  
(第17図参照)

II 縄文時代の遺構と遺物

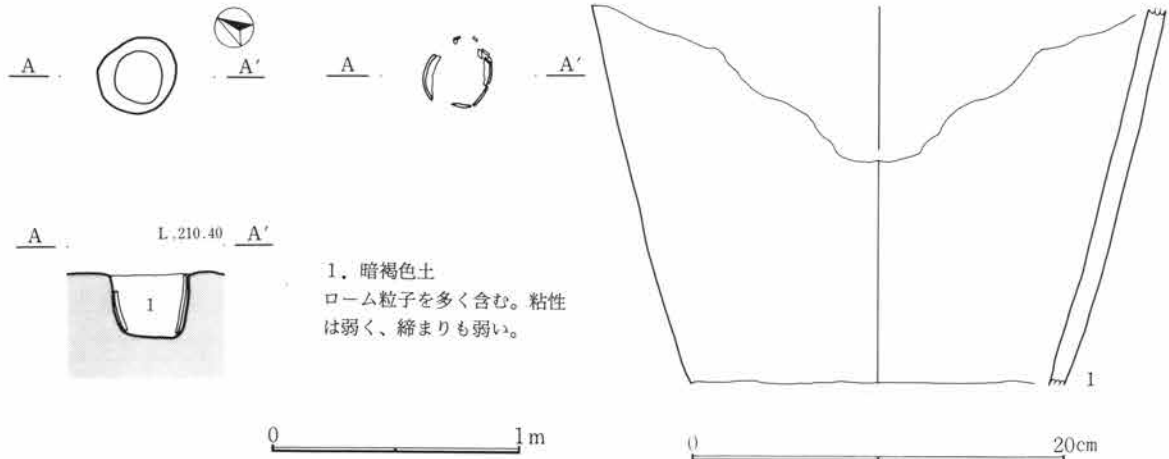
1号埋甕

位置 C87III13 写真 PL 8

最大径31cmの埋甕を埋設している。表土を除去した時点で検出されたので、上部が消失している可能

性がある。掘り方の径は32cm、深さは21cm、である。土器は無文で型式は不明だが、前期後半～中期初頭のいずれかに帰属すると思われる。

(遺物観察表：43頁)



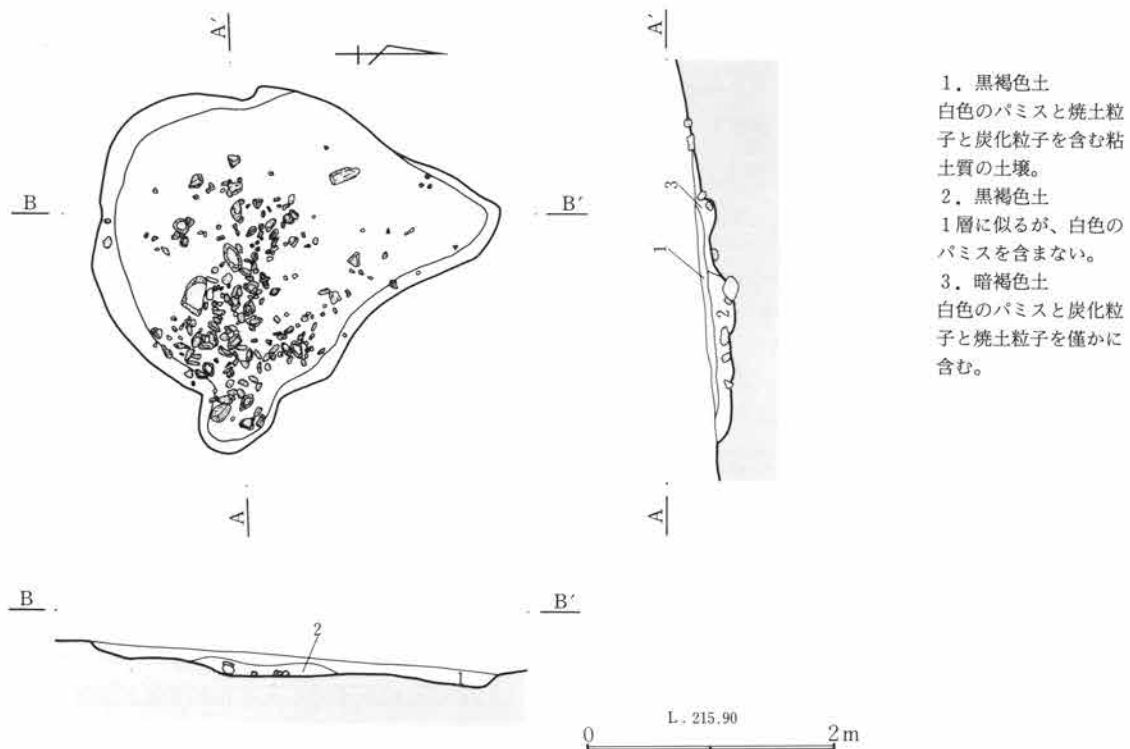
第16図 1号埋甕と出土遺物

1号集石

位置 C75VI21他 写真 PL11

6～23cmの浅い掘り込みをもち、内部に大小236点

の被熱礫が検出された。掘り込みの形状は定形的な様相を示さず、埋設土には炭化粒子等を含んでいる。型式不明の縄文土器小片4点が出土した。



第17図 1号集石

## 5. 土 坑

49基検出されたが、完形の土器を出土する土坑は皆無であり、土器片と石器を僅かに出土する土坑が多かった。検出された壁高は浅いものが多く、断面形状から、袋状を呈するのは諏訪前A区70号土坑だけである。

内匠諏訪前遺跡A区では26基検出されている。

直径1m前後で、円形のプランを呈し、底面が平坦なものが多い(45・46・48・52・70・71・73・74・

75・76・77号)。円形の土坑は、2箇所にかたまって検出されている。土坑内からの土器の出土は少なかった。出土土器は諸磯a式～五領ケ台式であるが、圧倒的に五領ケ台式の割合が多い。

内匠諏訪前遺跡B区では19基検出されている。

円形プランで底面が平坦なものが多い(1・2・4・5・6・22・24・31号)。出土した土器は、黒浜式と五領ケ台式が多かった。

内匠日影周地遺跡A区では3基とまって検出され、内匠日影周地遺跡B区では1基検出された。時期は不明である。(遺物観察表:39～43頁)

第2表 縄文時代 土坑規模一覧

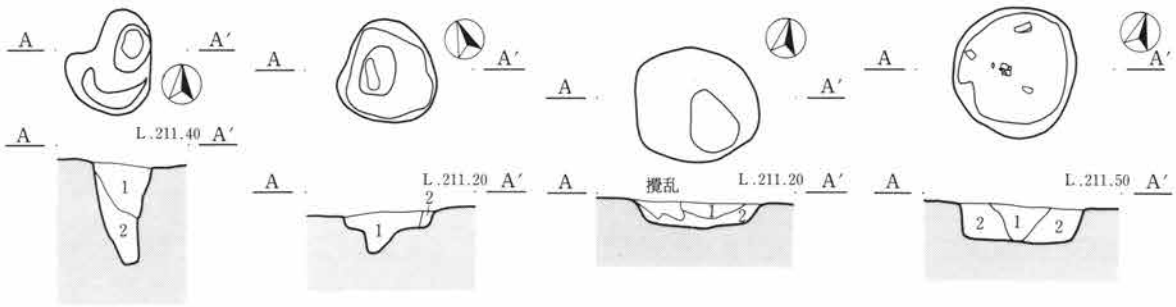
(単位:cm)

地 区	番号	位置	規模(縦×横)×深さ	図	P L	特 記 事 項	時 期
内匠諏訪前遺跡 A区	43	C78 III32	(82×50)×109	第18図		出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	44	C78 III32	(84×72)×60	第18図	5 6	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	45	C78 III32	(107×89)×89	第18図	5 6	埋没土中から、無文土器が1点出土した。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	46	C79 III31	(96)×38	第18図 第23図	6 13	埋没土中から、五領ケ台式土器6点が出土している。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	47	C80 III31	(60×42)×61	第18図 第23図	6 13	埋没土中から、五領ケ台式土器2点と熱変成岩のフレイク1点が出土した。図化しない1点は小片。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	48	C80 III32	(84×77)×18	第18図	6	無文の土器2点が出土した。前後後半～中期初頭の中に位置付けられる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	49	C79 III29	(102×68)×26	第18図	6	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	51	C83 III35	(103×62)×27	第18図		出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	52	C83 III43	(110)×33	第18図	7	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	53	C82 III41	(302×109)×72	第19図 第23図	13	五領ケ台式土器7点、諸磯C式1点、不明6点が出土。石器は磨石1点。フレイク・チップ5点。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	54	C81 III40	(181×127)×44	第18図	7	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	65	C87 III43	(65)×42	第18図		出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	69	C83 III9	(260×142)×48	第19図		出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	70	C80 III16	(130)×131	第19図		出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	71	C80 III17	(130)×83	第19図 第23図		諸磯C式土器1点と、無文で時期不明の土器1点が出土している。	諸磯C式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	73	C86 III33	(10×85)×53	第19図	7	五領ケ台式土器4点と無文の土器4点が出土したが、遺存状態が悪く、図化できなかった。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	74	C87 III33	(70)×31	第19図	7	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	75	C86 III32	(95)×44	第19図 第23図	7 13	五領ケ台式土器5点が出土したが、図化したもの以外は小片であった。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	76	C87 III33	(80)×26	第19図	7	五領ケ台式土器3点が出土したが、いずれも小片のために、図化不能である。	五領ケ台式期か

II 縄文時代の遺構と遺物

地区	番号	位置	規模(縦×横)×深さ	図	PL	特記事項	時期
内匠諏訪前遺跡 A区	77	C87 III32	(70)×27	第19図	7	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	78	C89 III32	(90)×32	第20図 第23図	8	熱変成岩のフレイクが1点出土している。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	81	C77 III21	(?×82)×70	第20図 第23図	13	諸磯a式土器1点と、無文の土器の小片が2点出土している。	諸磯a式期か
内匠諏訪前遺跡 A区	82	C82 III34	(?×87)×46	第20図	8	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	83	C77 III31	(110×74)×81	第20図	8	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	84	C87 III49	(172×116)×29	第20図	8	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 A区	85	C86 III45	(300×135)×58	第20図 第23図	8	五領ケ台式土器5点と、フレイクが1点出土している。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	1	C84 IV48	(85)×13	第20図	9	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	2	C83 IV47	(85)×22	第20図	9	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	3	C84 IV47	(84×64)×14	第20図 第23図	9	土器2点が出土した。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	4	C78 IV51	(118)×35	第20図 第23図	9 13,14	図化したもの以外に、黒浜式土器の小片4点と、フレイク4点が出土した。	黒浜式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	5	C78 IV52	(120)×33	第20図 第23図	9 14	図化したもの以外に、五領ケ台式土器の小片4点と、礫12点が出土した。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	6	C79 IV54	(80)×35	第21図	9	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	14	C83 IV48	(230×?)×63	第21図 第23図	10 14	図化したもの以外に、土器片3点と礫が11点出土した。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	20	C82 IV52	(118×120)×96	第21図 第23図	10 14	図化したもの以外に、縄文施文の小片が2点と、礫が3点出土した。	諸磯a～b式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	22	C81 IV59	(92×84)×20	第21図	10	熱変成岩のフレイクが1点出土した。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	23	C81 IV60	(157×98)×22	第21図	10	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	24	C83 IV44	(105)×39	第21図 第24図	10 14	図化したもの以外に、熱変成岩のフレイクが1点出土した。	黒浜式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	25	C75 IV41	(190)×34	第21図	10	埋没土中から、小片が1点出土したが、型式は不明である。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	26	C84 IV49	(280×250)×115	第21図 第24図	10 14	図化したもの以外に、13点の小片が出土したが、型式は不明である。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	27	C75 IV45	(180)×62	第22図 第24図	10 14	図化した2点だけの出土であった。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	28	C80 IV50	(166×125)×28	第22図 第24図	11 14	図化したもの以外に2点五領ケ台式土器の小片が出土した。	五領ケ台式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	29	C74 IV41	(112×84)×20	第21図 第24図	11 14	図化したもの以外には、出土していない。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	30	C74 IV41	(?×78)×37	第22図	11	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠諏訪前遺跡 B区	31	C81 IV52	(165×130)×80	第22図 第24図	14	32号土坑に切られる。図化できなかった土器片は18点だが、すべて繊維を含んでいた。	黒浜式期か
内匠諏訪前遺跡 B区	32	C81 IV52	(?×110)×53	第22図 第24図	14	31号土坑を切る。1は諏B2住覆土として取りあげた土器と接合関係をもつ。覆土土器は繊維なし。	諸磯a式期か
内匠日影周地遺跡 A区	27	C79 VI56	(115×92)×73	第22図	11	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠日影周地遺跡 A区	28	C78 VI54	(187×85)×95	第22図	11	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠日影周地遺跡 A区	29	C78 VI57	(130×113)×112	第22図	11	出土遺物はなかったが、埋没土の様相から、縄文時代の土坑と思われる。	不明
内匠日影周地遺跡 B区	4	C90 VI22	(157×137)×75	第22図	11	黒曜石のフレイク1点と、型式不明の土器底部が出土した。	不明

5. 土 坑

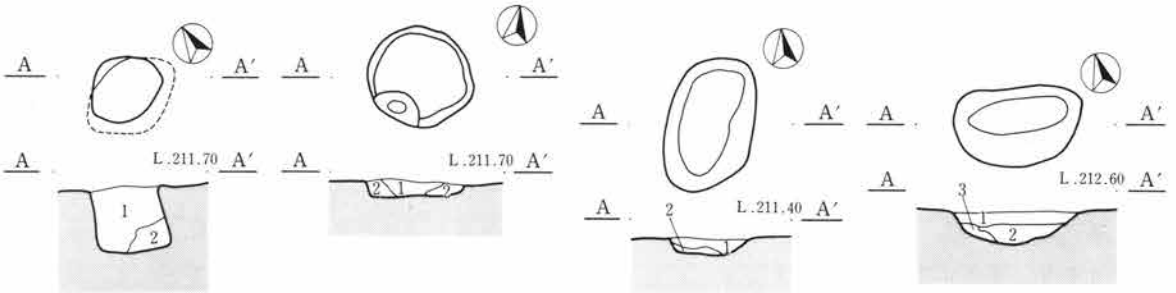


内匠諏訪前遺跡A区43号土坑  
1. 褐色土  
ローム粒子を多く含む。粘性は弱い、若干締まる。  
2. 褐色土  
1層に似るが、土のしまりが弱い。

内匠諏訪前遺跡A区44号土坑  
1. 暗褐色土  
ローム粒子を少し含む。  
2. 褐色土  
Y, P粒子を少し含む。

内匠諏訪前遺跡A区45号土坑  
1. 褐色土 強く締まり、Y, P粒子を多く含む。  
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

内匠諏訪前遺跡A区46号土坑  
1. 黒褐色土 Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

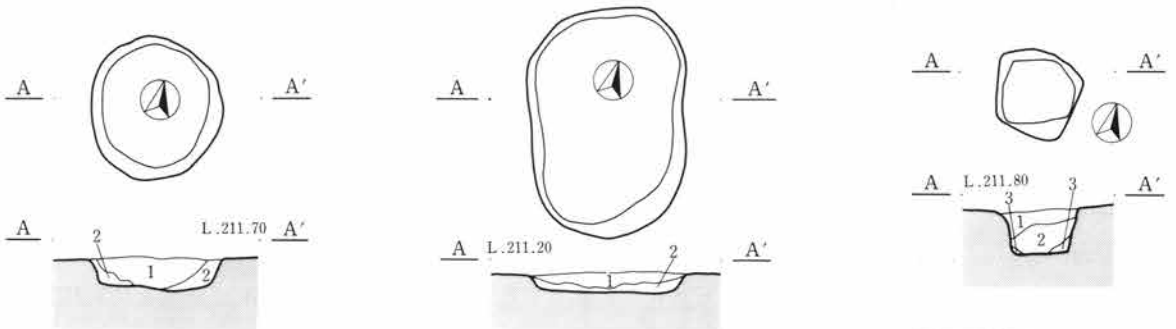


内匠諏訪前遺跡A区47号土坑  
1. 黒褐色土  
Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土  
1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多く、土の締まりが弱い。

内匠諏訪前遺跡A区48号土坑  
1. 黒褐色土 Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

内匠諏訪前遺跡A区49号土坑  
1. 黒褐色土 Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

内匠諏訪前遺跡A区51号土坑  
1. 褐色土 ローム粒子を多く含む。  
2. 暗褐色土 黒色土をブロック状に含む。  
3. 褐色土 1層に似るが、黒色土の粒子を少し含む。



内匠諏訪前遺跡A区52号土坑  
1. 黒褐色土 Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

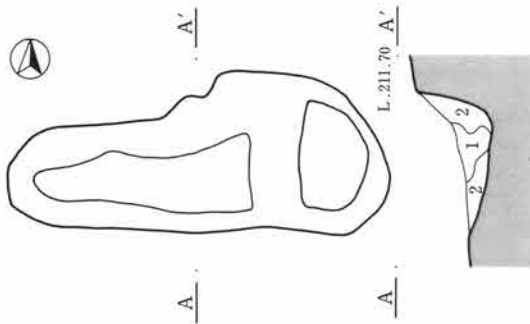
内匠諏訪前遺跡A区54号土坑  
1. 黒褐色土 Y, P粒子を少し含む。強く締まり、粘性は弱い。  
2. 褐色土 ローム粒子とY, P粒子を多く含む。強く締まる。

内匠諏訪前遺跡A区65号土坑  
1. 暗褐色土 B, P粒子を少し含む。2. 褐色土 1層に似るが、含まれるB, P粒子の量が多い。3. 黄褐色土 ローム質土壌。

0 2m

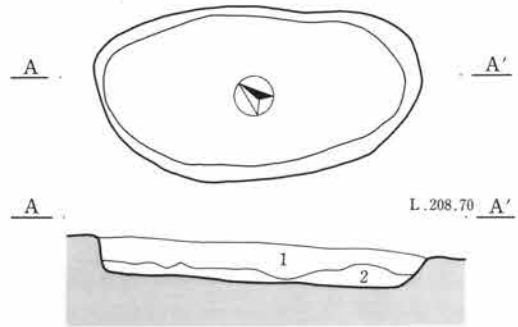
第18図 諏A43・44・45・46・47・48・49・51・52・54・65号土坑

II 縄文時代の遺構と遺物



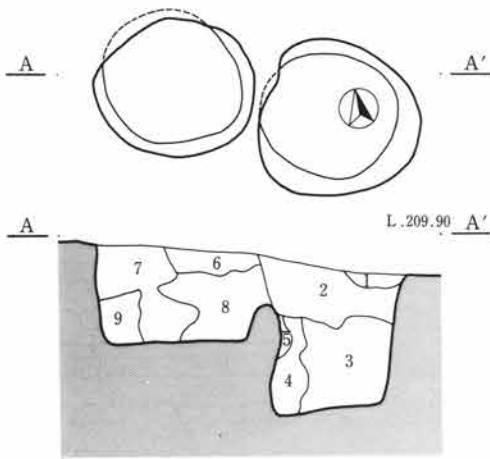
内匠諏訪前遺跡A区53号土坑

1. 黒褐色土  
Y, P粒子を少し含む。堅く締まり、粘性は弱い。
2. 褐色土  
1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。



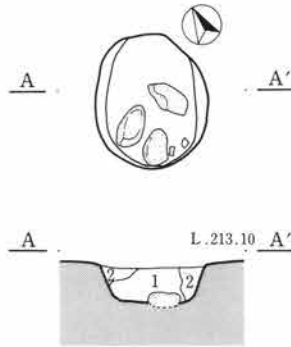
内匠諏訪前遺跡A区69号土坑

1. 暗褐色土 砂質の土壌で、土の締まりは弱い。
2. 黄褐色土 ローム質土壌。



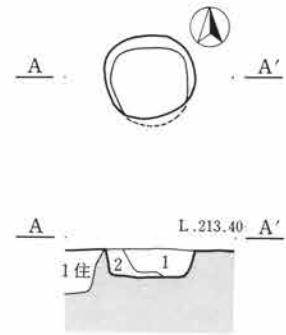
内匠諏訪前遺跡A区70号土坑(右)・71号土坑(左)

1. 黄褐色土 B, P粒子を多く含む。2. 黒褐色土 炭化粒子を少し含む。3. 褐色土 黒色土ブロックを少し含む。4. 黒褐色土 B, P粒子を少し含む。5. 褐色土 ロームと黒褐色土の混土层。6. 黒褐色土 B, P粒子を少し含む。7. 褐色土 8. 暗褐色土 9. 褐色土 黒色土ブロックを含む。



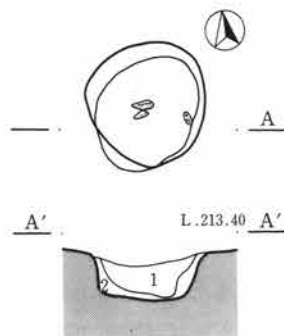
内匠諏訪前遺跡A区73号土坑

1. 黒褐色土 B, P粒子を含む。堅く締まり、粘性は弱い。
2. 褐色土 1層に似るが、含まれるB, P粒子の量が多い。



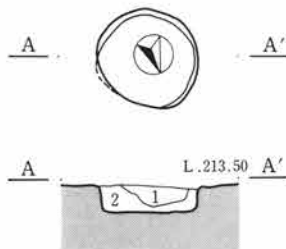
内匠諏訪前遺跡A区74号土坑

1. 黒褐色土 B, P粒子を少し含む。
2. 褐色土 B, P粒子を多く含む。



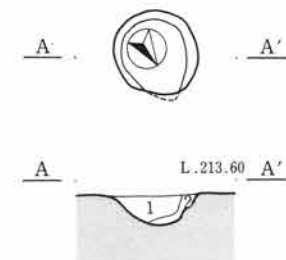
内匠諏訪前遺跡A区75号土坑

1. 黒褐色土 B, P粒子を少し含む。
2. 褐色土 1層に似るが、B, P粒子をブロック状に含む。



内匠諏訪前遺跡A区76号土坑

1. 黒褐色土 B, P粒子を少し含む。堅く締まり、粘性は弱い。
2. 1層に似るが、含まれるB, P粒子の量が多い。



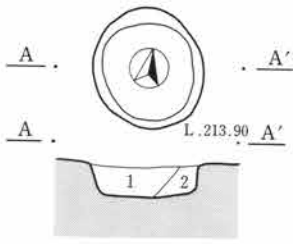
内匠諏訪前遺跡A区77号土坑

1. 黒褐色土 B, P粒子をブロック状に少し含む。堅く締まり、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 B, P粒子を多く含む。

0 2m

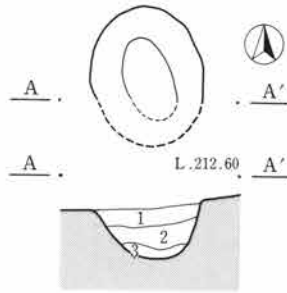
第19図 諏A53・69・70・71・73・74・75・76・77号土坑

5. 土 坑



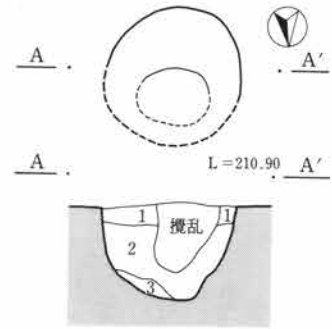
内匠諏訪前遺跡A区78号土坑

1. 黒褐色土 B.P粒子を少し含む。堅く締まり、粘性は弱い。
2. 暗褐色土 1層に似るが、ロームブロックを少し含む。



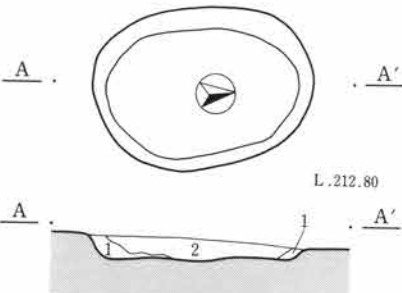
内匠諏訪前遺跡A区82号土坑

1. 黄褐色土 Y.P粒子を多く含む。
2. 黒褐色土 Y.P粒子を少し含む。
3. 褐色土 黒色土を斑状に含む。



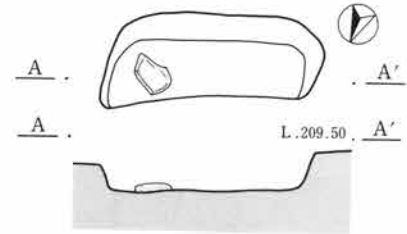
内匠諏訪前遺跡A区83号土坑

1. 褐色土 黒色土をブロック状に含む。
2. 暗褐色土 Y.P粒子を少し含む。
3. 黄褐色土 ローム質土壌。

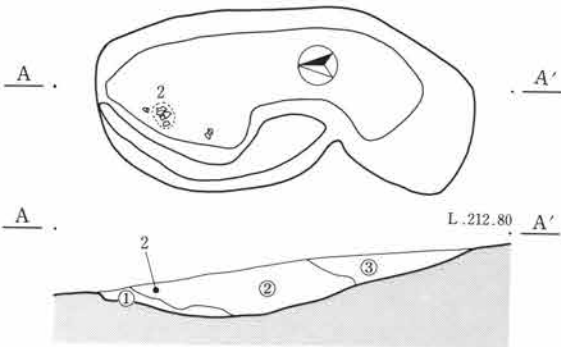


内匠諏訪前遺跡A区84号土坑

1. 暗褐色土 B.P粒子を多く含む。
2. 黒褐色土 粘性は弱い、締まりは強い。

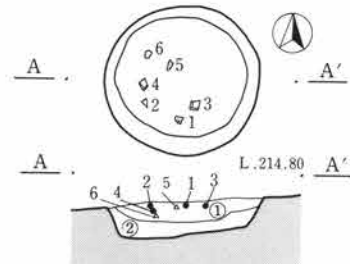


内匠諏訪前遺跡A区81号土坑



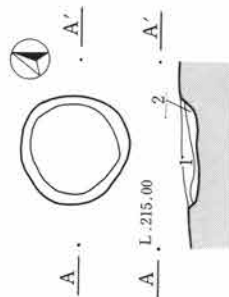
内匠諏訪前遺跡A区85号土坑

- ①黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- ②黒褐色土 砂質の土壌。
- ③褐色土 黄褐色土と暗褐色土の混土層。



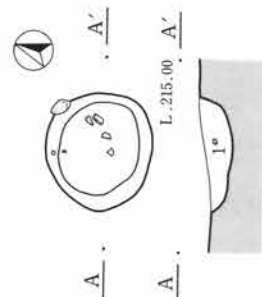
内匠諏訪前遺跡B区4号土坑

- ①褐色土 黄褐色土のブロックを多く含む。
- ②黄褐色土 ローム質土壌。



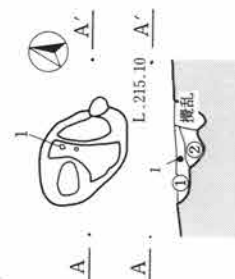
内匠諏訪前遺跡B区1号土坑

1. 褐色土 B.P粒子を少し含む。
2. 黄褐色土 B.P粒子を多く含む。



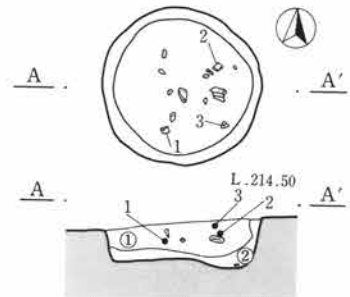
内匠諏訪前遺跡B区2号土坑

1. 褐色土 B.P粒子をごく僅かに含む。



内匠諏訪前遺跡B区3号土坑

- ①褐色土 B.P粒子をごく僅かに含む。
- ②黄褐色土 B.P粒子を少し含む。



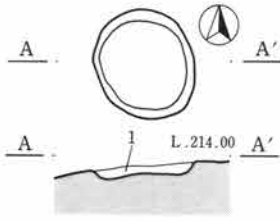
内匠諏訪前遺跡B区5号土坑

- ①黄褐色土 炭化粒子をごく僅かに含む。
- ②黄褐色土 1層に似るが、炭化粒子を含まない。

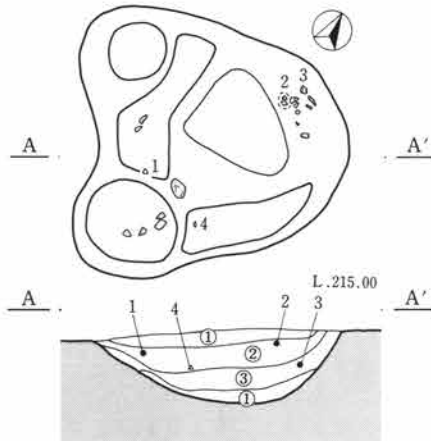
0 2m

第20図 諏A78・81・82・83・84・85・諏B1・2・3・4・5号土坑

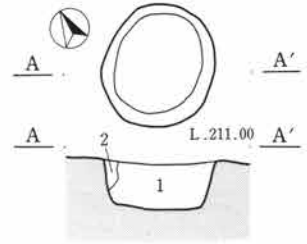
II 縄文時代の遺構と遺物



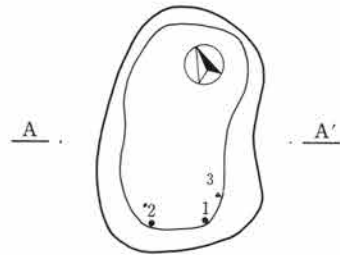
内匠諏訪前遺跡B区6号土坑  
1. 黄褐色土  
汚れたローム質の土壤。



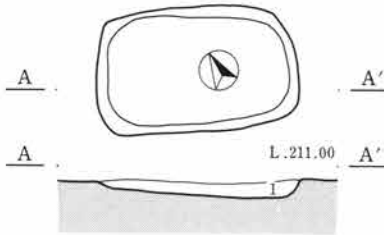
内匠諏訪前遺跡B区14号土坑  
①褐色土 黄色のパミスと炭化粒子を少し含む。②黄褐色土 炭化粒子をごく僅かに含む。③褐色土 褐色のパミスを含む。炭化粒子をごく僅かに含む。



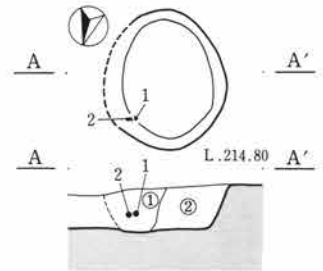
内匠諏訪前遺跡B区22号土坑  
1. 黒褐色土  
B. P粒子を少し含む。  
2. 黄褐色土 ローム質土壤。



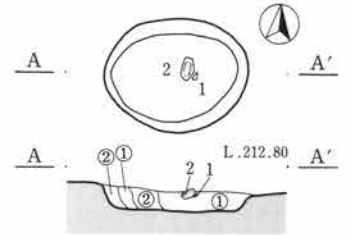
内匠諏訪前遺跡B区20号土坑  
①褐色土 B. P粒子を含む。②暗褐色土 M. P粒子を含む。③褐色土 M. P粒子を少し含む。



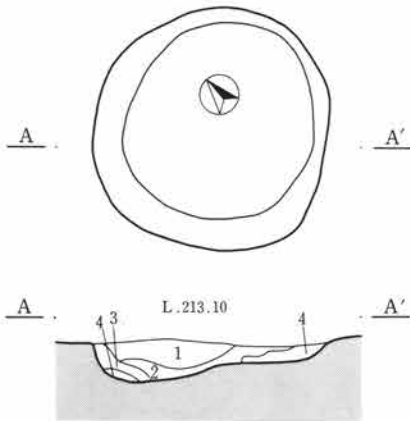
内匠諏訪前遺跡B区23号土坑  
1. 黒褐色土  
M. P粒子を少し含む。



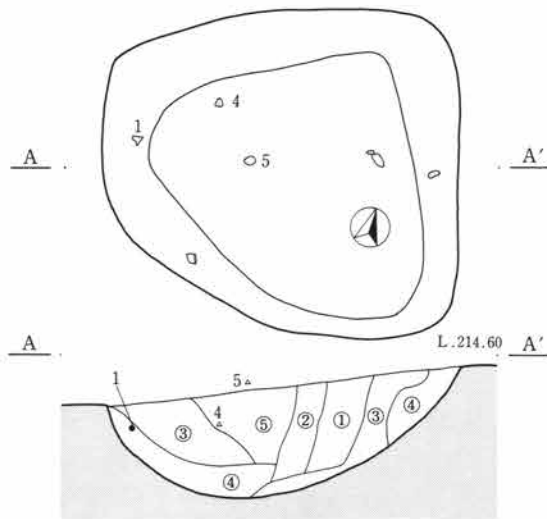
内匠諏訪前遺跡B区24号土坑  
①暗褐色土 ②黒褐色土 堅く締まる。



内匠諏訪前遺跡B区29号土坑  
①暗褐色土 粘性の弱い土壤。ローム粒子を少し含む。  
②黄褐色土 ローム質土壤。



内匠諏訪前遺跡B区25号土坑  
1. 黒褐色土 炭化粒子を少し含む。  
2. 褐色土 褐色のパミスを含む。  
3. にぶい黄褐色土 砂粒を多く含む。  
4. 黄褐色土 ローム質土壤。



①黄褐色土 粘土質土壤。  
②黄褐色土 マンガンを多く含む。  
③褐色土 砂粒を多く含む。  
④黄褐色土 褐色土のブロックを含む。  
⑤黄褐色土 炭化粒子を少し含む。

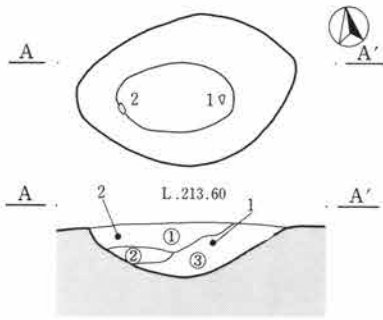
0 2m

内匠諏訪前遺跡B区26号土坑

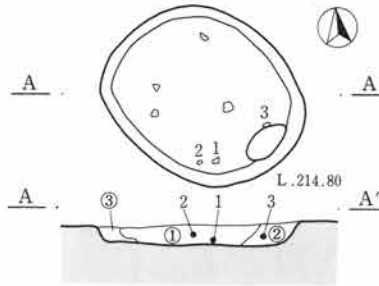
第21図 諏B6・14・20・22・23・24・25・26・29号土坑



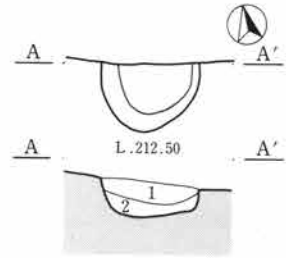
5. 土 坑



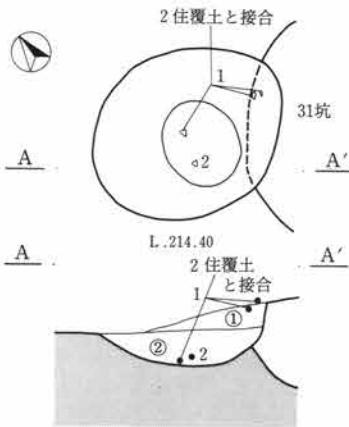
内匠諏訪前遺跡B区27号土坑  
①黄褐色土 炭化粒子を少し含む。  
②黄褐色土 Y.P粒子を少し含む。  
③褐色土 B.P粒子を少し含む。



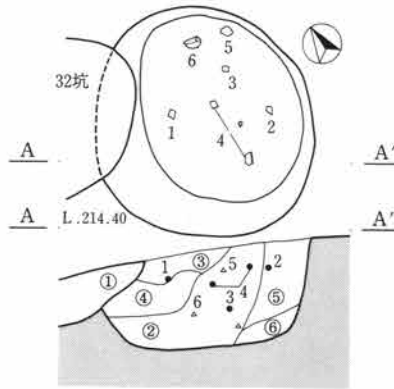
内匠諏訪前遺跡B区28号土坑  
①褐色土 炭化粒子を少し含む。  
②褐色土 暗褐色土ブロックを少し含む。③黄褐色土 ローム質土壌。



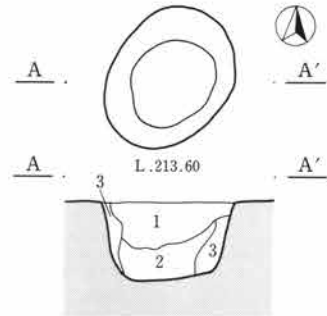
内匠諏訪前遺跡B区30号土坑  
1. 黒褐色土 褐色土を斑状に含む。2. 暗褐色土 汚れたローム質土壌。



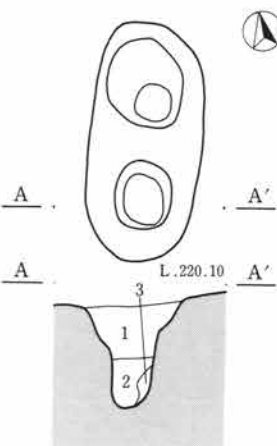
内匠諏訪前遺跡B区32号土坑  
①褐色土 Y.P粒子と炭化粒子を少し含む。  
②黄褐色土 暗褐色土のブロックを多く含む。



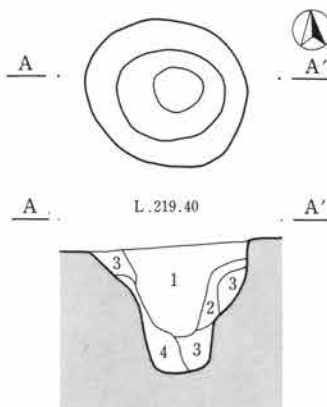
内匠諏訪前遺跡B区31号土坑  
①褐色土 32号土坑の覆土。②にぶい黄褐色土 暗褐色土のブロックを大変多く含む。③黄褐色土 炭化粒子を少し含む。④黄褐色土 褐色のパミスを少し含む。⑤明褐色土 ローム質土壌。⑥褐色土 M.P粒子を少し含む。



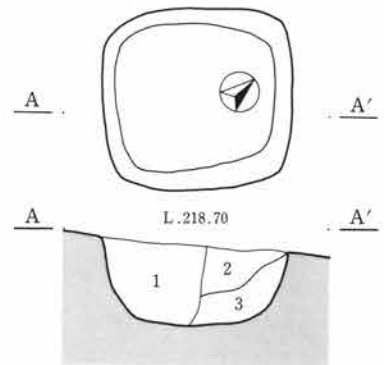
内匠日影周地遺跡  
A区27号土坑  
1. 黒褐色土 Y.P粒子を少し含む。強く締まる。2. 暗褐色土 Y.P粒子をごく僅かに含む。3. 褐色土 ロームブロックを含む。



内匠日影周地遺跡A区28号土坑  
1. 黒褐色土 締まりが強い。  
2. 褐色土 ローム質土壌。  
3. 褐色土 ロームブロックを含む。



内匠日影周地遺跡A区29号土坑  
1. 黒褐色土 強く締まる。  
2. 暗褐色土 ローム粒子を少し含む。  
3. 褐色土 Y.P粒子を多く含む。  
4. 褐色土 ローム質土壌。

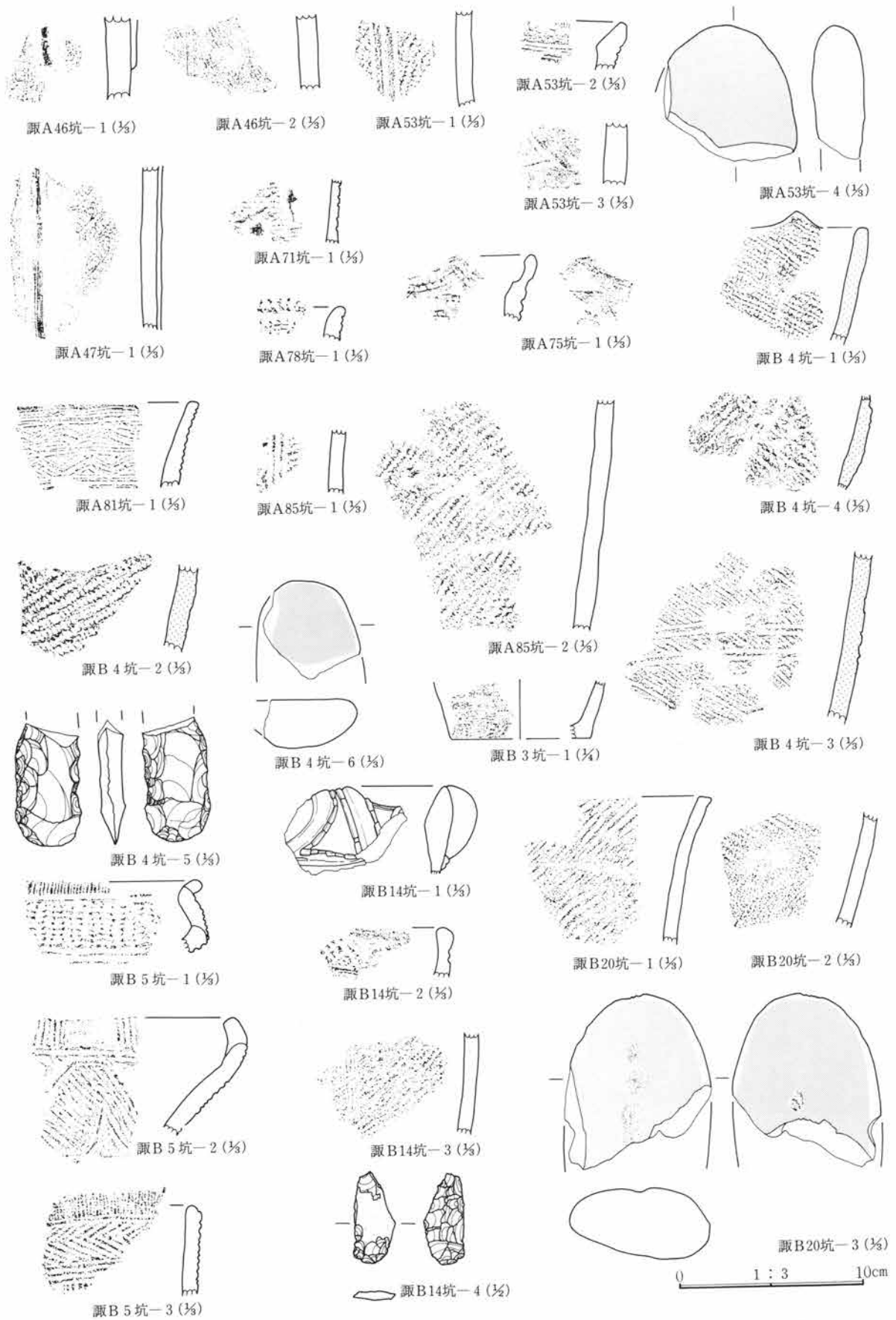


内匠日影周地遺跡B区4号土坑  
1. 黒色土 白色のパミスを少し含む。  
2. 黒褐色土 ローム粒子を少し含む。  
3. 黒褐色土 2層に似るが、含まれるローム粒子の量が多い。

0 2m

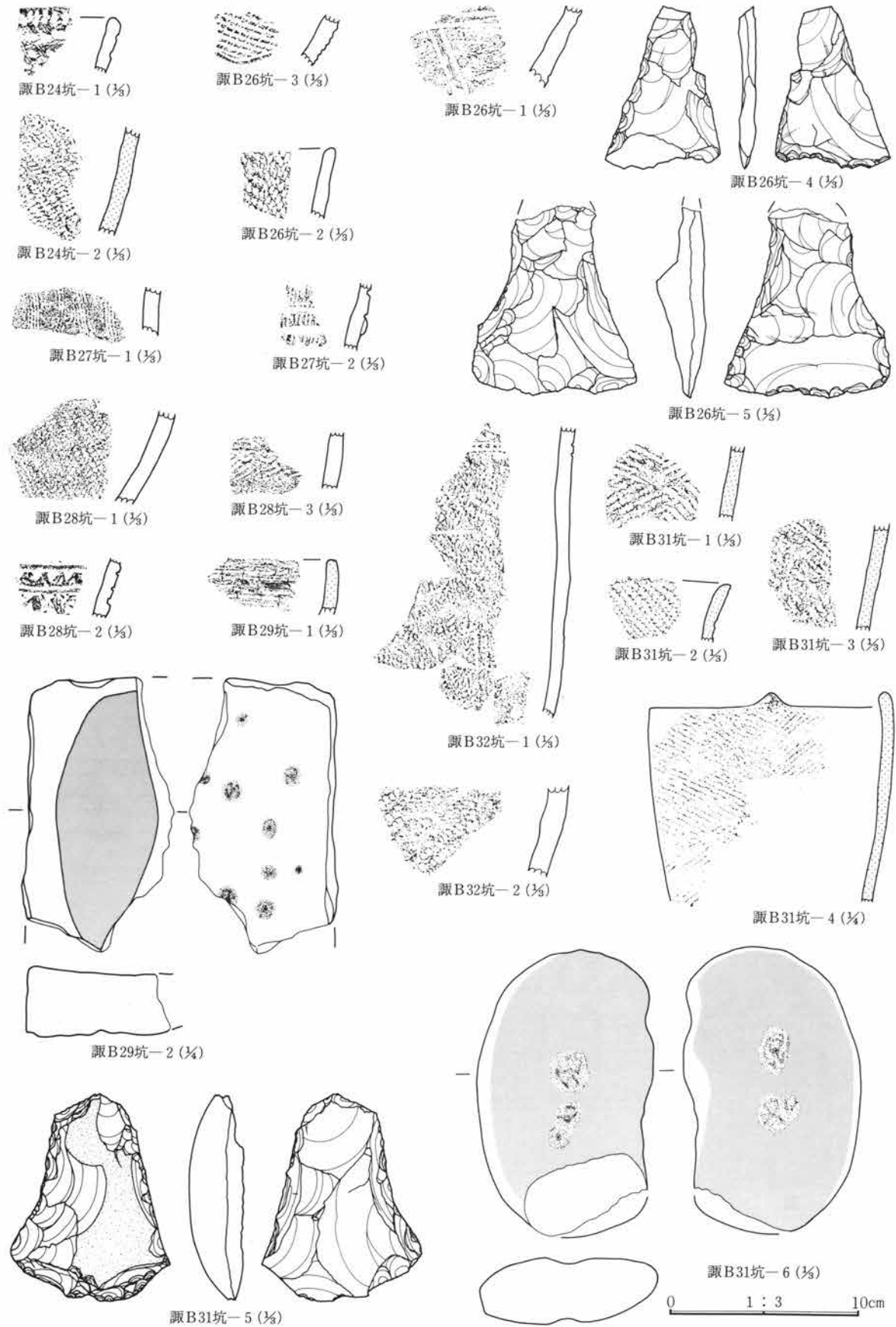
第22図 諏B27・28・30・31・32・日A27・28・29・日B4号土坑

II 縄文時代の遺構と遺物



第23図 諏A46・47・53・71・75・78・81・85・諏B3・4・5・14・20号土坑出土遺物

II 縄文時代の遺構と遺物



第24図 諏B24・26・27・28・29・31・32号土坑出土遺物

II 縄文時代の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 8 号住居出土遺物 (第 6 図、PL 12)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部～ 胴部	①良好 ②内面鈍い黄 橙色、外面黒褐色 ③ 砂を多量に含む。	口縁部 (径18.0) は外傾し、胴下部で屈曲する。原体 RL の 単節斜縄文。口縁部～胴上部に煤付着。内面は丁寧な磨き。	諸磯 b 式
2 深 鉢	胴部～底 部	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	地文に原体 RL の単節斜縄文。薄い粘土を 3 本巡らし、隆帯 状に大変細かな刻みを施す。底部径は11.4。	諸磯 b 式
3 深 鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③片岩と石英を多量に 含む。	原体 LR の単節斜縄文。器厚が一定しない。	
4 深 鉢	胴部片	① 良好 ② 赤褐色 ③ 礫を少量含む。	原体 LR の単節斜縄文。隆帯を貼付。	諸磯 c 式 覆土中
5 深 鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③ 砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施したのち、円形竹管による結節沈 線。	五領ケ台式 覆土 遺構外出土土器No72と同一。
6 深 鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③片岩と石英を多量に 含む。	原体 LR の単節斜縄文。器厚が一定しない。	

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
7	磨石	長 10.1 幅 5.7 厚 4.7 重 430.0	断面角丸方形。いわゆるスタンプ形石器。完形。	安山岩 覆土
8	打製石斧	長 — 幅 6.6 厚 1.6 重 290.0	刃部の一部が欠損。短冊形。	熱変成岩 覆土
9	打製石斧	長 — 幅 7.3 厚 1.3 重 111.0	短冊形か。1/2以上を欠損。	安山岩 覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区 10 号住居出土遺物 (第 7・8 図、PL 12)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部～ 胴部	①良好 ②暗褐色 ③金雲母を多量に含 む。	1～3 は同一個体。口縁部 (径32.0) はソーメン状の浮線を 貼付し、その上を半截竹管状工具による平行沈線及び、結節 沈線文を施す。口唇部にもソーメン状の浮線文。胴上部は同 一工具の外面による沈線で同心円文等の文様を描出する。 また削りとりによる三角印刻文を施す。胴下部は、結束第 1 種の原体 RL・LR の単節斜縄文。内面は横方向の丁寧な磨き。	遺構外出土土器No32と 同 一。3 は覆土中 十三善提式併行
2 深 鉢				
3 深 鉢				
4 深 鉢	口縁部～ 胴部	①良好 ②内面暗褐色 外面黒褐色 ③金雲母 を少量含む。	口縁部 (径27.6) は、粘土紐を貼付し、その上を半截竹管状 工具による結節浮線文。胴部は同一工具による沈線で文様を 描出。区画内を削り取る。	十三善提式併行
5 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③金雲母を多量に含 む。	5 と 6 は同一個体。胴部は地文に原体 LR の単節斜縄文を施 したのち、粘土紐を貼付し、半截竹管状工具による結節浮線 文。頸部は同一工具による平行沈線。	十三善提式。 覆土
6 深 鉢				
7 深 鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③石 英を少量、石を多量に 含む。	口縁部の一部が肥厚。半截竹管状工具による文様を描出。	諸磯 b 式か
8 深 鉢	口縁部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文。	覆土

II 縄文時代の遺構と遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
9 深鉢	胴部片	①良好 ②橙色 ③砂を多量に含む。	無文地に薄い粘土紐を貼付。浮線上を篋状工具による刻み。	諸磯b式 覆土
10 深鉢	口縁部	①良好 ②橙色 ③片岩を少量含む。	口唇部は角頭状を呈する。棒状工具による沈線。	沈線文 覆土

石器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
11	打製石斧	長 幅 6.8 厚 3.2 重 215.0	刃部は一部自然面が残る。微細な側縁整形が施されるが、刃部整形は丁寧ではない。ほぼ欠損。	熱変成岩
12	打製石斧	長 14.0 幅 6.0 厚 1.0 重 105.0	側縁部を中心に丁寧な整形が施される。完形。	熱変成岩
13	打製石斧	長 幅 5.0 厚 1.3 重 149.0	基部の一部を欠損。節理が多い石材のため、剥離痕が不鮮明。	点紋絹雲母石墨片岩
14	円形削器	長 5.4 幅 5.4 厚 1.5 重 45.0	ほぼ円形を呈し、縁辺に細かな整形が施される。一部欠損するがほぼ完形。	熱変成岩
15	円形削器	長 5.2 幅 5.5 厚 1.1 重 49.0	ほぼ円形を呈し、縁辺に細かな整形が施される。完形	熱変成岩
16	石匙	長 6.8 幅 7.2 厚 1.4 重 79.0	つまみ部を欠損。縁辺に細かな整形が施される。	安山岩 覆土 二次的に被熱
17	剥片石器	長 8.5 幅 5.2 厚 1.4 重 69.0	不定形。調整は雑。完形。	安山岩 覆土
18	打製石斧	長 幅 5.8 厚 2.5 重 235.0	刃部を中心に欠損。縁辺に細かな整形が施される。	熱変成岩 覆土
19	剥片石器	長 4.5 幅 7.4 厚 0.6 重 259.0	調整は雑。刃部に使用によると思われる剥離が見受けられる。完形。	熱変成岩 覆土
20	削器	長 1.9 幅 2.0 厚 0.5 重 2.5	縁辺に細かな整形が施される。完形。	黒曜石 覆土

内匠諏訪前遺跡B区2号住居出土遺物 (第9・10図、PL 12・13)

土器

(単位：cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部	①やや不良 ②暗褐色 ③繊維と礫を少量含む。	原体Lの無節の斜縄文。	埋甕 外面に煤付着。 黒浜式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③繊維を少量含む。	口唇部撫で。原体RLの単節斜縄文。	黒浜式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③砂と石英を多量に含む	原体LRの単節斜縄文。	
4 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③石英を少量含む。	原体RLの単節斜縄文。	9と同一の可能性が大きい。
5 深鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	櫛歯状工具による沈線で文様を描出。	
6 深鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	4本1組の櫛歯状工具による肋骨文。円形の刺突を施す。	
7 深鉢	胴部～底部片	①良好 ②暗褐色 ③砂を少量含む。	無文。内外面共に丁寧に磨かれている。底部径は(7.0)。	諸磯a式
8 深鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を少量含む。	地文に原体RLの単節斜縄文。半截竹管状工具による入組文。	諸磯a式
9 深鉢	口縁部～胴部片	①良好 ②明褐色 ③石英を少量含む。	原体RLの単節斜縄文。	4と同一の可能性が大きい。
10 浅鉢	口縁部～胴部片	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	外面から2次的に熱を受けて剥離。	諸磯a式

## II 縄文時代の遺構と遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
11	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を少量含む。	11、12、13は同一個体の可能性が高い。12の一部分に原体 RL の単節斜縄文が見られるが、他の無文部分は磨かれている。口唇部肥厚。棒状工具による刻みをもつ低い隆帯で文様が描かれ、隆帯に沿って半截竹管状工具による連続爪形文。	諸磯 b 式
12	口縁部片			
13	胴部片			

### 石器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
14	尖頭器	長 5.2 幅 1.2 厚 0.6 重 1.0	縁辺に細かな整形が施される。茎部をもち、段差がある。完形。	黒曜石
15	磨石	長 5.1 幅 4.2 厚 3.2 重 60.0	全面が磨面と思われる。完形。	安山岩
16	凹み石	長 9.5 幅 7.3 厚 4.5 重 500.0	凹み部は一面のみ。磨石としても使用。完形。	安山岩
17	磨石	長 4.0 幅 4.1 厚 3.1 重 60.0	全面が磨面と思われる。完形。	流紋岩
18	剥片石器	長 — 幅 4.1 厚 1.8 重 40.0	刃部に使用によると思われる細かな刃こぼれ状の剥離。 1/2欠損。	安山岩
19	剥片石器	長 7.3 幅 8.2 厚 1.4 重 100.0	刃部に使用によると思われる細かな刃こぼれ状の剥離。完形。	流紋岩

### 内匠諏訪前遺跡B区4号住居出土遺物（第11図、PL 13）

#### 土器

(単位：cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1	底部～脚部	①良好 ②明褐色 ③ 繊維を多量に、片岩と雲母とパミスを少量含む。	「ハ」の字状に脚が開く。	黒浜式か
2	胴部片			

#### 石器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
3	敲石	長 30.5 幅 16.1 厚 4.8 重 5000.0	両面の中央部に使用による敲打痕が集中。	角閃岩

### 内匠諏訪前遺跡B区5号住居出土遺物（第13図、PL 13）

#### 土器

(単位：cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考		
1	口縁部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を少量含む。	原体 LR の単節斜縄文を施したのち、3本1組の櫛歯状工具による波状文及び平行沈線。	諸磯 a 式		
2	胴部片				半截竹管状工具による連続爪形文で木葉状入組文を描出。	諸磯 a～b 式
3	胴部片				原体 RL の単節斜縄文。	
4	底部片				原体 LR の単節斜縄文。	

## II 縄文時代の遺構と遺物

## 石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	剥片石器	長 7.6 幅 5.8 厚 1.8 重 90.0	不定形な石器。粗い整形が施される。	石英粗面岩
6	凹み石	長 16.0 幅 11.3 厚 4.2 重 800.0	凹み部は一面のみ。裏面の一部に剥離をもつ。磨石としても使用。	安山岩

## 内匠日影周地遺跡 A 区 2 号住居出土遺物 (第14・15図、PL 13)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部	①良好 ②褐色 ③礫を少量含む。	原体 LR の単節斜縄文。一ヶ所に綾線文が見受けられるが、末端の結縛によるものか、結束第1種かは不明である。	諸磯 a 式
2 深 鉢	口縁部	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	半截竹管状工具による肋骨文。円形の刺突を施す。口唇部にも刻み。	諸磯 a 式
3 深 鉢	胴部～底部	①良好 ②明黄褐色 ③ごく少量の繊維を含む。	底部(径9.4)から開く器形。原体 RL の単節斜縄文を羽状に構成したのち、半截竹管状工具による平行沈線文及び、連続爪形文。外面は荒れている。	黒浜式～諸磯 a 式
4 深 鉢	胴部	①良好 ②黄褐色 ③石英を少量含む。	4～12は同一個体。 胴上部は4本1組の櫛歯状工具による平行沈線文及び、波状文。円形刺突は下の方に施される。 胴下部は原体 RL の単節斜縄文で、末端を自条結縛。	諸磯 a 式
5 深 鉢				
6 深 鉢				
7 深 鉢				
8 深 鉢				
9 深 鉢				
10 深 鉢				
11 深 鉢				
12 深 鉢	胴部片	①良好 ②黄褐色 ③石英を少量含む。	4～12は同一個体。	諸磯 a 式
13 深 鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	4本1組の櫛歯状工具による直線的な沈線文。	諸磯 a 式
14 深 鉢	底部1/2	①良好 ②明黄褐色 ③石英を少量含む。	無文。内外面に輪積痕が残る。底部径は(9.0)。	諸磯 a 式

II 縄文時代の遺構と遺物

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量				形 状 ・ 特 徴 等	備 考
15	石匙	長	8.3	幅	2.8	長軸が剥片長軸に一致し、短冊状を呈する。 縁辺に細かな整形が施される。完形。	熱変成岩
		厚	0.5	重	18.0		
16	石匙	長	7.8	幅	4.5	体部の形状は三角形に近い。 側縁を中心に調整が施される。完形。	熱変成岩
		厚	1.0	重	25.8		
17	打製石斧	長	11.2	幅	4.5	短冊形に近い形状。 縁辺に細かな整形が施される。完形。	輝緑岩
		厚	1.6	重	110.0		
18	磨石	長	11.0	幅	—	正面形及び断面形はほぼ角丸方形。 $\frac{1}{2}$ を欠損する。全面が磨面。	流紋岩
		厚	3.1	重	180.0		
19	打製石斧	長	8.7	幅	7.7	撥形に近い形状を呈する。 縁辺に細かな整形が施される。	流紋岩
		厚	1.6	重	120.0		



II 縄文時代の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A区46号土坑出土遺物 (第23図、PL 13)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③片岩を少量含む。	無文地に隆帯を垂下。	五領ケ台式 覆土
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③石英を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文を施し、半截竹管状工具による2本1組の沈線を垂下。	五領ケ台式 覆土

内匠諏訪前遺跡 A区47号土坑出土遺物 (第23図、PL 13)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③金雲母と砂を多量に含む。	隆帯を垂下し原体 RL の単節斜縄文を施す。	五領ケ台式 覆土

内匠諏訪前遺跡 A区53号土坑出土遺物 (第23図、PL 13)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②黄褐色 ③金雲母を多量に含む。	原体 LR の単節斜縄文。半截竹管状工具による2本1組の沈線を垂下。	五領ケ台式 覆土
2 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③石英を多量に含む。	半截竹管状工具による平行沈線文。口唇部にも浅い刻み。	五領ケ台式 覆土
3 深 鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を少量含む。	棒状工具による沈線文。	五領ケ台式 覆土

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
4	磨石	長 一 幅 一 厚 2.8 重 122.0	全面が磨面と思われる。 刃強が欠損。	砂岩 覆土

内匠諏訪前遺跡 A区71号土坑出土遺物 (第23図)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い赤褐色 ③砂を少量含む。	半截竹管状工具による平行沈線文上に粘土を貼付。	諸磯c式 覆土

内匠諏訪前遺跡 A区75号土坑出土遺物 (第23図、PL 13)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を多量に含む。	細い棒状工具による結節沈線文。内外面を三角形に削り取る。	五領ケ台式 覆土

内匠諏訪前遺跡 A区78号土坑出土遺物 (第23図)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②黄褐色 ③片岩と石英を多量に含む。	半截竹管状工具による結節浮線文を口唇部と外面に施す。	覆土

II 縄文時代の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区81号土坑出土遺物 (第23図、PL 13)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	半截竹管状工具による平行沈線文、及び波状文。	諸磯 a 式 覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区85号土坑出土遺物 (第23図)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③石 英を少量含む。	半截竹管状工具による集合沈線文。	五領ケ台式 覆土
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③金雲母を多量に含 む。	原体 LR の単節斜縄文。	

内匠諏訪前遺跡 B 区 3 号土坑出土遺物 (第23図)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	底部片	①良好 ②赤褐色 ③ 片岩と石英を少量含む。	底部 (径10.1) から開く。 無文。	

内匠諏訪前遺跡 B 区 4 号土坑出土遺物 (第23図、PL 13・14)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②鈍い黄橙色 ③繊維を少量含む。	口縁部に突起を持つ。 附加条の原体 (RL+R) で施文。	黒浜式
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③繊維を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文。	黒浜式
3 深 鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③繊維を多量に含む。	附加条の原体 (R+L) を施文したのち半截竹管状工具による 平行沈線文。	黒浜式
4 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄橙色 ③繊維を多量に含む。	原体 L の無節の斜縄文を羽状に施文。	黒浜式

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	打製石斧	長 3.5 幅 1.6 厚 1.6 重 49.0	短冊形を呈する。縁辺に細かな整形が施される。 基部を欠損する。	熟変成岩
6	磨石	長 5.7 幅 2.6 厚 2.6 重 100.0	1/4程度残存する。 全面が磨面か。	安山岩 二次的に被熱。

内匠諏訪前遺跡 B 区 5 号土坑出土遺物 (第23図、PL 14)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③片 岩と石英を少量含む。	半截竹管状工具による沈線。 口唇部に爪形文。	五領ケ台式
2 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③片岩と石英を少量含 む。	半截竹管状工具による沈線で文様を描出。 器面を削り取る。	十三菩提式併行～五領ケ台 式

II 縄文時代の遺構と遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
3 深鉢	口縁部片	①良好 ②明褐色 ③石英を多量に含む。	半截竹管状工具による平行沈線文。 口唇部に爪形文。	五領ケ台式

内匠諏訪前遺跡B区14号土坑出土遺物 (第23図、PL 14)

土器

(単位: cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②茶褐色 ③金雲母を多量に含む。	半截竹管状工具による結節沈線。 波状口縁を呈する。	十三善提式併行か。
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②黄褐色 ③金雲母を多量に含む。	半截竹管状工具による集合沈線文。 無文部は削り取る。	五領ケ台式
3 深鉢	胴部片	①良好 ②黄褐色 ③金雲母を多量に含む。	原体 LR の単節斜縄文を施したのち半截竹管状工具により浅くて雑な沈線を垂下。	

石器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
4	削器	長 3.2 幅 1.4 厚 0.3 重 1.8	自然面を一部残す。 縁辺に細かな整形が施される。	黒曜石

内匠諏訪前遺跡B区20号土坑出土遺物 (第23図、PL 14)

土器

(単位: cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②黄褐色 ③砂を多量に含む。	原体 L の無節の斜縄文。 口唇部に撫で。	諸磯 a～b 式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を羽状に施文。	諸磯 a 式

石器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
3	凹み石	長 — 幅 7.9 厚 3.8 重 400.0	両面に凹み部。 磨石としても使用か。	安山岩

内匠諏訪前遺跡B区24号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

土器

(単位: cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	口縁部片	①良好 ②黄褐色 ③礫を少量含む。	原体 L の無節の斜縄文を施したのち、結節状の縄文原体 (原体不明) を口唇部、口縁部に押捺。	
2 深鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③繊維を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文。	黒浜式

内匠諏訪前遺跡B区26号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

土器

(単位: cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②内面褐色、外面黒褐色 ③金雲母と片岩を少量含む。	幅広い半截竹管状工具による平行沈線文。	五領ケ台式
2 深鉢	口縁部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文。	覆土

## II 縄文時代の遺構と遺物

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
3 深 鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③ 礫を少量含む。	半截竹管状工具と鏝状工具による集合沈線文。 無文部を削りとり。	五領ケ台式 覆土

### 石 器

(単位：cm・g)

番 号	種 類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
4	打製石斧	長 8.4 幅 6.0 厚 9.0 重 50.0	撥形を呈する。丁寧な整形をあまり施さない。 完形。	熱変成岩
5	打製石斧	長 ー 幅 8.6 厚 2.5 重 200.0	撥形を呈すると思われる。基部を欠損。 縁辺に細かな整形が施される。	熱変成岩

### 内匠諏訪前遺跡B区27号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

#### 土 器

(単位：cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②黄褐色 ③ 砂を多量に含む。	原体 LR の単節斜縄文。	
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③砂 を多量に含む。	半截竹管状工具による沈線を施す。 削りとりによる三角印刻で鋸歯文。	五領ケ台式

### 内匠諏訪前遺跡B区28号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

#### 土 器

(単位：cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②赤褐色 ③ 砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文。	
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③石 英を少量含む。	半截竹管状工具による平行沈線文を施し、間に削りとりによる三角印刻の鋸歯文。	五領ケ台式
3 深 鉢	胴部片	①良好 ②内面黄褐色、 外面黒褐色。 ③石英 を少量含む。	原体 LR で単節斜縄文の結節をもつ単節斜縄文。	五領ケ台式 外面に煤付着。

### 内匠諏訪前遺跡B区29号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

#### 土 器

(単位：cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③纖 維を多量に含む。	半截竹管状工具による浅い結節状の平行沈線が施されている。 口唇部は角頭状を呈する。	

### 石 器

(単位：cm・g)

番 号	種 類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
2	石皿	長 ー 幅 ー 厚 3.6 重 1350.0	¼程度残存。裏面には凹み部が複数存在。	砂岩

### 内匠諏訪前遺跡B区31号土坑出土遺物 (第24図、PL 14)

#### 土 器

(単位：cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄橙色 ③纖維を少量含む。	原体 L と R の無節の斜縄文を羽状に施文。	黒浜式 4 と同一個体。
2 深 鉢	口縁部片	①良好 ②鈍い黄橙色 ③纖維を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文。	黒浜式

II 縄文時代の遺構と遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
3 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③繊維を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文。	黒浜式
4 深鉢	口縁部 ～胴部	①良好 ②鈍い黄褐色 ③繊維を少量含む。	原体 L と R の無節の斜縄文を羽状に施文。 口縁部に突起。口縁部径は (17.0)。	1 と同一個体。 黒浜式

石器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
5	打製石斧	長 10.7 幅 8.3 厚 2.8 重 250.0	反った形状を呈する。撥形の打製石斧。 縁辺に細かな整形が施される。完形。	熟変成岩
6	凹み石	長 — 幅 9.3 厚 3.5 重 800.0	一部を欠損。両面に凹み部。 磨面としても使用か。	安山岩

内匠諏訪前遺跡 B 区 32 号土坑出土遺物 (第 24 図、PL 14)

土器

(単位：cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を少量含む。	胴上部に半截竹管状工具による連続爪形文。 胴部は R + ? の付加条の原体を施文。 内面は丁寧に磨かれる。	諸磯 a 式
2 深鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③礫を少量含む。	原体 LR の単節斜縄文。	

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号埋甕出土遺物 (第 16 図)

土器

(単位：cm)

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
1 深鉢	胴部	①良好 ②明赤褐色 ③片岩と礫を多量に含む。	無文。内面は丁寧に磨かれる。	

## 6. 遺構外出土遺物

竪穴式住居や土坑などから出土しなかった遺物は、土器1431点・石器210点である。

この中には、縄文時代以外の遺構から出土した縄文時代の遺物も含んでいる。地区としては、内匠諏訪前遺跡A区で1号屋敷（江戸時代）造成の際に盛土された部分が、結果的に縄文時代の遺物包含層となっていたために出土点数が多かった。

分布の様相については、別項で述べる（第204～213図参照）。

### (1) 土 器

遺構外出土の土器は総計で1433点出土しているが、時期別の内訳は、早期27点、前期140点、中期381点、不明885点である。この中で、不明とした885点は、縄文施文だけのものと無文のものが大半をしめており、焼成や胎土及び遺構外出土土器の様相などから前期後半（諸磯a式）～中期初頭（五領ケ台式）に含まれる可能性が高い。また、不明とした中には、土製円盤1点（74）と土製品1点（75）が含まれている。

この他に、縄文時代終末～弥生時代に位置付けられる土器が出土しているが、編集の都合上、弥生時代の中でとり扱った。

また、草創期及び後期以降と思われる土器は出土していない。

早期に位置付けられる土器は、早期撚糸文系土器が20点、沈線文土器6点、楕円押形文土器11点が出土している。押形文土器には、すべて微量の繊維が含まれている。限定された時間幅内の土器型式であった。

前期に位置付けられる土器は、黒浜式74点、諸磯a式27点、諸磯b式14点、諸磯c式19点、十三善堤式6点が出土している。黒浜式よりも古い段階の前期の土器は検出されなかった。33は諏訪前遺跡A区10号住居出土土器と同一個体である。

中期に位置付けられる土器381点は、すべて五領ケ台式土器であり、勝坂式（阿玉台式）以降の土器は出土していない。

出土した五領ケ台式土器は、集合沈線文等を施す古い段階のものと、弧線文や結節沈線文等を施すきわめて新しい段階のものが多かった。

（遺物観察表：48～51頁）

### (2) 石 器

遺構外から210点の石器が出土した。この数値はコア・フレイク・チップ等を含んでいないが、石器の数値をはるかに越える量が検出されている。また、フレイクとしたものでも剥片石器に分類できうるものも多く存在しているために、剥片石器の数値については図で示したものより実際は多いと考えている。いわゆる定形的な石器については、網羅できたと考えている（55は定形的な石器であるが、剥片石器に分類した）。

出土した石器の中で、帰属時期が推定できうるものは70のスタンプ形石器で、他の石器については出土土器型式期の状況と対応する可能性が強いと思われる。

石器組成及び石材組成については図に示したが、傾向として以下の点があげられる。

- ① 出土石器の組成は打製石斧と剥片石器が全体の72%をしめている。また、石器全体の石材組成は16種類の石が使用されている中で、熱変成岩と分類されたものが半分以上を占めている。また、鎭川流域に多く存在する結晶片岩系の石はさほど多く使われていない。
- ② 各石器の石材組成で特徴的な点は、石器の種類によって熱変成岩を指向するもの（打製石斧・剥片石器・円形削器など）と指向しない石器が明瞭に別れていることであり、石器の機能を前提とした石材選定が行われていることを示している。（遺物観察表：57～59頁）

6. 遺構外出土遺物

石器組成

(210点)

①打製石斧 47.1%	②剥片石器 25.2%	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
③ 磨石 6.2%	④ 石鏃 5.2%	⑤ 石匙 4.8%	⑥ 円形削器 2.8%	⑦ 磨製石斧 2.4%	⑧ くぼみ石 2.4%	⑨ 石皿 2.4%	⑩ その他 (1.5%)	石槍・石錘・石棒 各0.5%	

石材組成

(210点)

①熱変成岩 54.3%	②安山岩 18.1%	③	④	⑤	⑦
③ 黒曜石 5.7%	④ 流紋岩 4.8%	⑤ 輝緑岩 3.3%	⑥ 石英粗面岩 2.4%	⑦ その他 (11.4%)	絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩・チャート 各1.9%
頁岩・玄武岩 各1.4%		砂岩 0.9%		角閃岩・閃緑岩・石英閃緑岩・緑泥片岩 各0.5%	

打製石斧 99点

①熱変成岩 71.7%	②安山岩 11.1%	③	④	⑤
③ 輝緑岩 5.1%	④ 石英粗面岩 4.1%	⑤ その他 (8.0%)	絹雲母石墨片岩 3.0%	玄武岩 2.0%
流紋岩・頁岩・角閃岩 各1.0%				

円形削器 6点

熱変成岩 100%
-----------

剥片石器 53点

①熱変成岩 69.8%	②安山岩 17.0%	③	④
③ 流紋岩 5.6%	④ その他 (7.6%)	石英粗面岩・玄武岩・緑泥片岩・チャート 各1.9%	

磨石 13点

安山岩 77.0%	点紋緑泥片岩 15.3%	砂岩 7.7%
-----------	--------------	---------

器種別石材組成 尖頭器 1点

黒曜石 100%
----------

石鏃 11点

黒曜石 91%	チャート 9%
---------	---------

石錘 1点

黒曜石 100%
----------

石匙 10点

流紋岩 50%	安山岩 20%	頁岩 20%	チャート 10%
---------	---------	--------	----------

磨製石斧 5点

輝緑岩 40%	閃緑岩 20%	石英閃緑岩 20%	チャート 20%
---------	---------	-----------	----------

くぼみ石 5点

安山岩 60%	砂岩 20%	流紋岩 20%
---------	--------	---------

石皿 5点

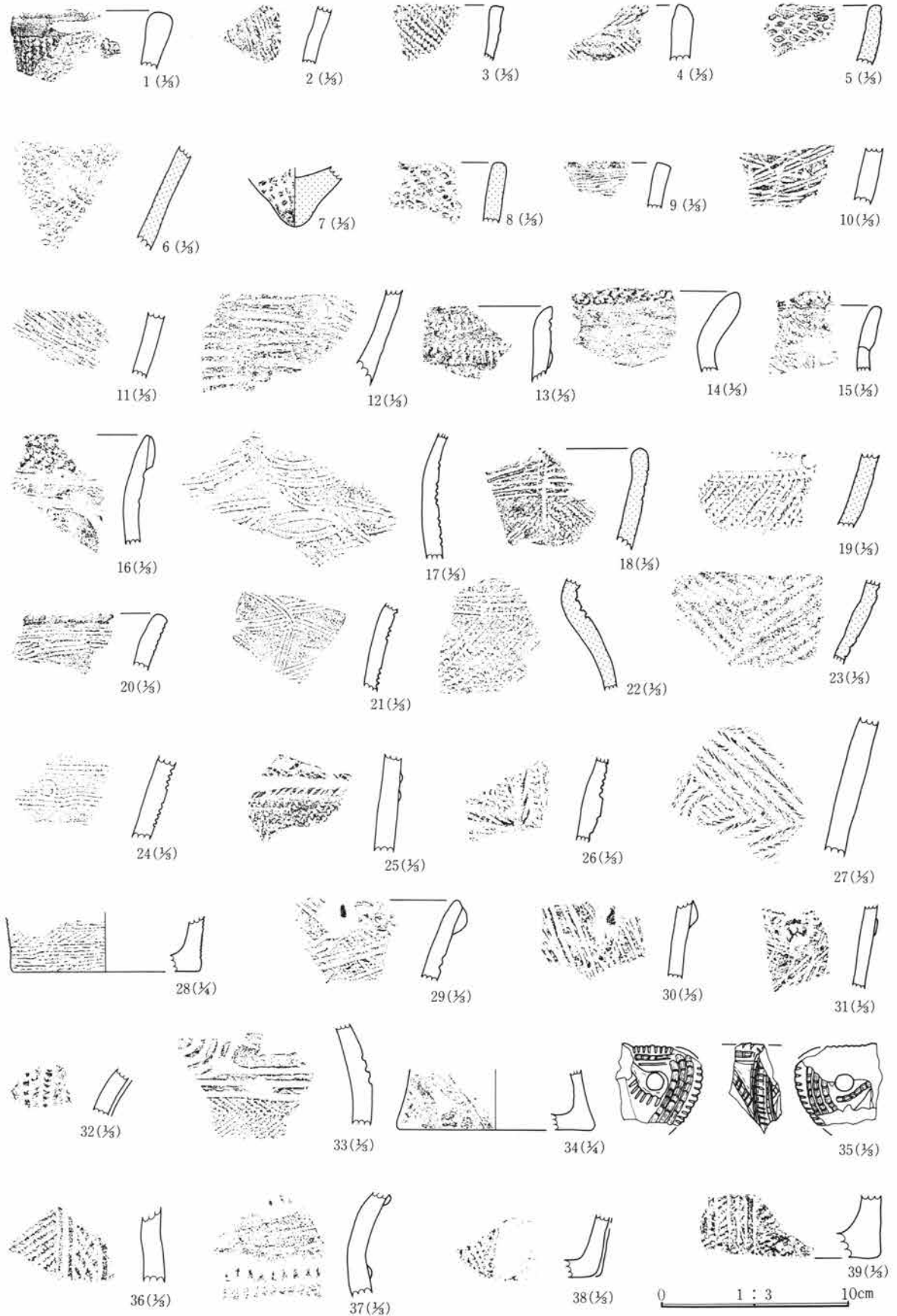
安山岩 60%	雲母石墨片岩 20%	点紋緑泥片岩 20%
---------	------------	------------

石棒 1点

点紋緑泥片岩 100%
-------------

第25図 石材組成・器種別石材組成

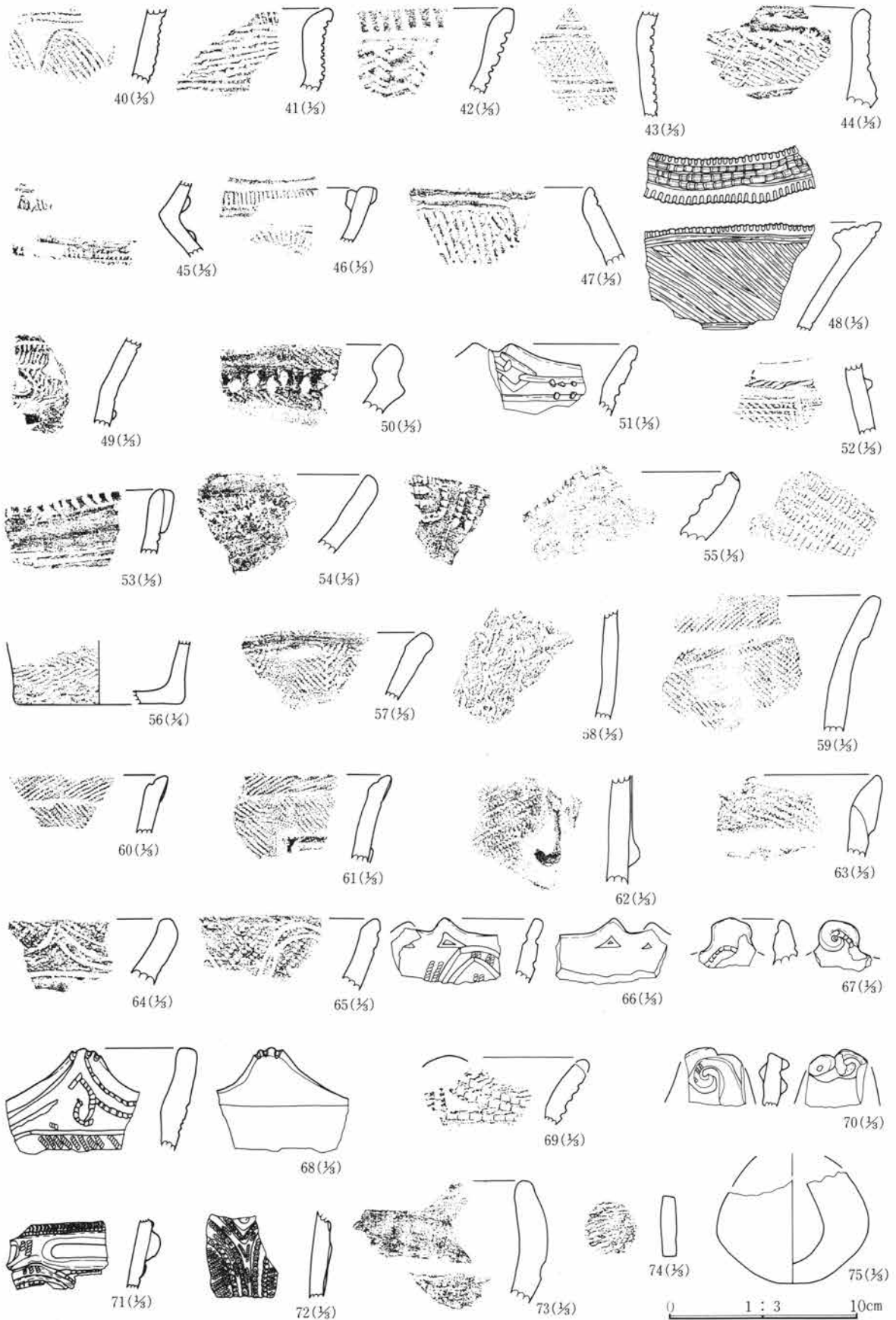
II 縄文時代の遺構と遺物



第26図 遺構外出土土器(1)



6. 遺構外出土遺物



第 27 図 遺構外出土土器 (2)

II 縄文時代の遺構と遺物

遺構外出土遺物 (第26~32図、PL 14~17)

土 器

(単位: cm)

番 号	部 位	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 の 特 徴 等	備 考
1 深 鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③片岩を多量に含む。	尖底土器の口唇部。口唇部は肥厚。原体 RL の縄文施文。	稲荷台式 内匠諏訪前遺跡A区2号住居覆土
2 深 鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③片岩を少量含む。	尖底土器の胴部。器厚が一定しない。原体 R の燃文。	早期 内匠諏訪前遺跡A区1号住居覆土
3 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明褐色 ③砂を多量に含む。	口唇部が角頭状。原体 RL の単節斜縄文。	早期か。 内匠諏訪前遺跡A区9号住居覆土
4 深 鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③礫を少量含む。	口唇部に稜を持ち肥厚。原体 L の無節の斜縄文。	時期不明 C78III28G
5 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明褐色 ③片岩と石英と繊維を少量含む。	尖底土器の口縁部。楕円押型文。	早期 内匠諏訪前遺跡A区6号住居覆土
6 深 鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③繊維と礫を少量含む。	尖底土器の胴部。楕円押型文。	早期 1号屋敷
7 深 鉢	尖底部	①良好 ②鈍い黄褐色 ③繊維と礫を少量含む。	楕円押型文。	早期 C80III16G
8 深 鉢	口縁部片	①良好 ②黄褐色 ③繊維と礫を少量含む。	尖底土器の口縁部。楕円押型文。	早期 内匠諏訪前遺跡A区58号土坑覆土
9 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	口唇部は角頭状を呈する。	沈線文 C84III21攪乱層
10 深 鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③片岩を少量含む。	棒状工具による2本1組の沈線。	沈線文 内匠諏訪前遺跡A区7号住居覆土
11 深 鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③礫を少量含む。	棒状工具による沈線。	沈線文 C81III19G
12 深 鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③片岩と石英を少量含む	棒状工具による条痕状の沈線。刺突を施す。	時期不明 D10V15G
13 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明赤褐色 ③石英を少量含む。	口縁部の一部が帯状に肥厚。半截竹管状工具による刺突。	時期不明 C78III27G
14 深 鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③礫を少量含む。	口唇部に原体 RL の単節斜縄文。	時期不明 C79III27G
15 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明褐色 ③バミスを少量含む。	外面は RR 直前段反燃の原体が施され、口唇部にも圧痕。	時期不明 内匠諏訪前遺跡A区6号住居覆土
16 深 鉢	口縁部片	①良好 ②橙色 ③石英を多量に含む。	口唇部が肥厚。棒状工具による沈線。原体 LR の単節斜縄文。	時期不明 内匠日影周地B区1号谷津覆土
17 深 鉢	胴部片	①良好 ②鈍い赤褐色 ③礫と雲母を多量に含む。	地文に原体 RL の縄文を施し、半截竹管状工具による木の葉文。	諸磯 a 式 C77III21G
18 深 鉢	口縁部片	①良好 ②明黄褐色 ③繊維を少量含む。	口縁部に突起を持つが単位は不明。原体 LR の単節斜縄文を羽状に施したのち、半截竹管状工具による2本1組の沈線。	黒浜式 内匠諏訪前遺跡B区1号住居覆土
19 深 鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③繊維と雲母を少量含む。	半截竹管状工具による平行沈線、及び爪形文。	黒浜式 D12V33G

## 6. 遺構外出土遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
20 深鉢	口縁部片	①良好 ②明褐色 ③礫を少量含む。	半截竹管状工具による沈線。口唇部下の沈線は間隔の広い結節を呈する。	諸磯 a 式 C87III45G
21 深鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	櫛歯状工具による 3 本 1 組の沈線。	諸磯 a 式 D13V29G
22 深鉢	胴部片	①良好 ②黄褐色 ③繊維を少量含む。	地文に縄文（原体不明）を施し、半截竹管状工具による平行沈線文、及び刺突。	黒浜式 D11V34G
23 深鉢	口縁部片	①良好 ②褐色 ③繊維を多量、礫を少量含む。	口唇部を欠損する。単節の斜縄文を羽状に施す。器面が荒れていて縄文原体不明。	黒浜式 C85IV56G
24 深鉢	胴部片	①良好 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	櫛歯状工具による平行沈線文。円形の刺突を施す。	諸磯 a 式 D11V13G
25 深鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	原体 LR の単節斜縄文を地文とし、浮線文上に刻みを施す。	諸磯 b 式 C86III44G
26 深鉢	胴部片	①良好 ②暗褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施文とし、浮線の上に細かな刻みを施す。	諸磯 b 式 C73VI51G
27 深鉢	胴部片	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を地文とし、浮線の上に細かな刻みを施す。	諸磯 b 式 D14V30G
28 深鉢	底部	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施し、半截竹管状工具による平行沈線文。	諸磯 b 式 C87III30G
29 深鉢	口縁部片	①良好 ②赤褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部に粘土を貼付。地文は半截竹管状工具による平行沈線文。	諸磯 c 式 C85IV10G
30 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を多量に含む。	地文は半截竹管状工具による平行沈線文。粘土を貼付。	諸磯 c 式 C87III9G
31 深鉢	胴部片	①良好 ②明赤褐色 ③砂を多量に含む。	地文は半截竹管状工具による平行沈線文。粘土を貼付し、刺突。	諸磯 c 式 C87III9G
32 深鉢	胴部片	①良好 ②明褐色 ③砂を多量に含む。	無文地に隆帯を貼付し、半截竹管状工具による結節浮線文。	十三菩提式 内匠諏訪前遺跡A区7号住居覆土
33 深鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③金雲母を多量に含む。	胴上部は棒状工具による沈線文、及び三叉文。胴下部は結束第1種の原体 RL・LR の単節斜縄文。	十三菩提式 C83III11G 内匠諏訪前遺跡A区10号住居No1～3と同一。
34 深鉢	胴部～底部	①良好 ②黄褐色 ③石英を多量に含む。	底部（14.0）が張り出す。胴部は半截竹管状工具による平行沈線文、及び刺突。篋状工具による玉抱き三叉文。	十三菩提式併行 C86III36G
35 深鉢	口縁部把手	①良好 ②内面鈍い橙色、外面明赤褐色 ③砂を多量に含む。	隆帯を貼付けない。半截竹管状工具による結節浮線文。	十三菩提式併行 C89III30G
36 深鉢	胴部片	①良好 ②褐色 ③礫と雲母を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文。半截竹管状工具と篋状工具による集合沈線文。	五領ヶ台式 C84III10G
37 深鉢	頸～胴部片	①良好 ②鈍い褐色 ③雲母を少量含む。	頸部と胴部に隆帯を持ち、棒状工具による刺突。胴下部は、半截竹管状工具による沈線。	十三菩提式併行 D11V13G
38 深鉢	胴部～底部	①良好 ②明赤褐色 ③石英を少量含む。	半截竹管状工具と篋状工具による集合沈線文。文様がない部分の器面は削り取り。	五領ヶ台式 D48V25G
39 深鉢	胴部～底部	①良好 ②明褐色 ③金雲母を少量含む。	底部が若干張り出す。胴部は地文に原体 LR の単節斜縄文を施したのち、半截竹管状工具による平行沈線文を垂下。	五領ヶ台式 C83III28G

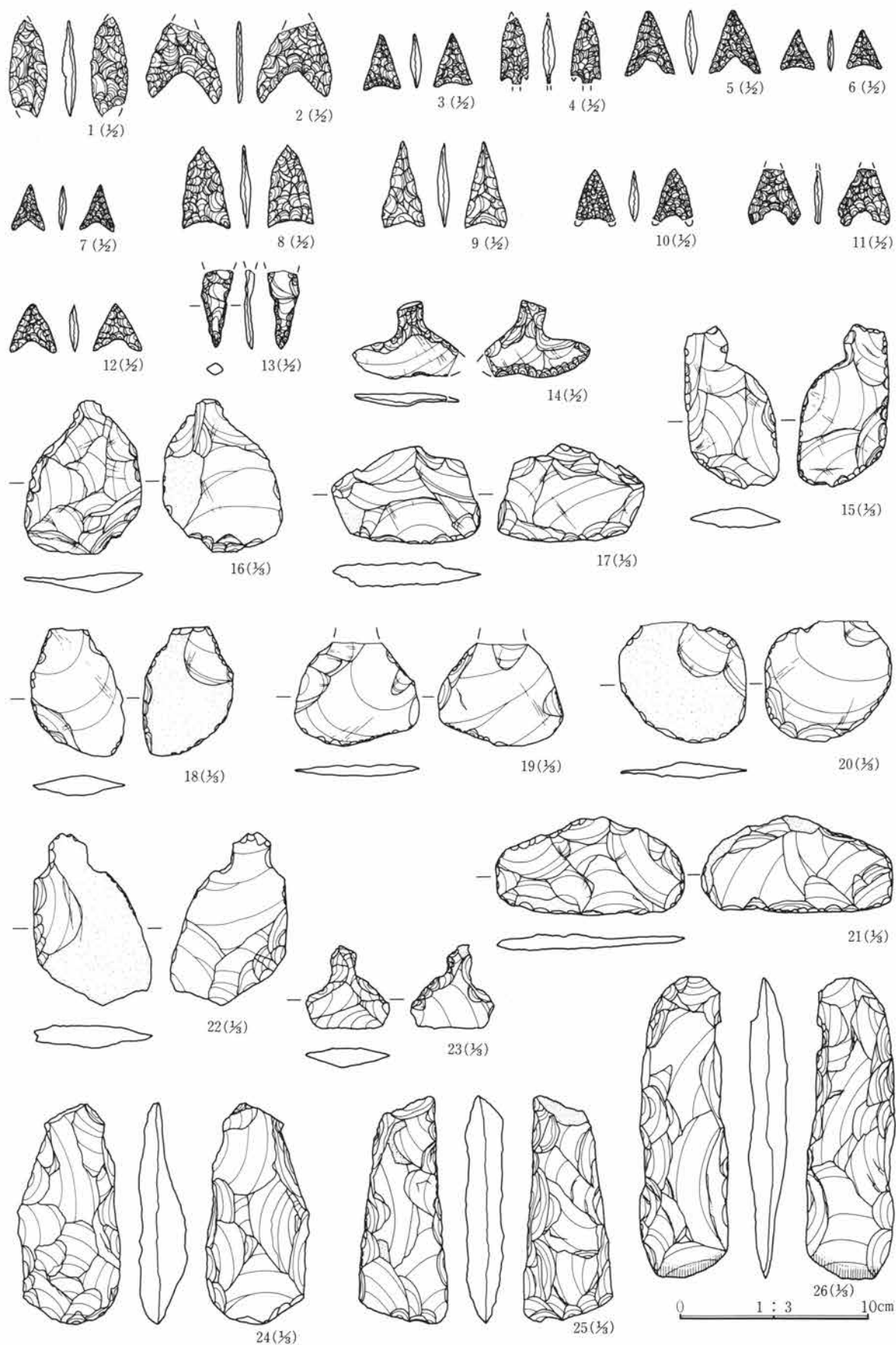
## II 縄文時代の遺構と遺物

番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
40	胴部片 深鉢	①良好 ②明褐色 ③石英を多量に含む。	半截竹管状工具による文様を描出。文様のない部分の器面は削り取り。	五領ケ台式 内匠諏訪前遺跡B区西落込覆土
41	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③石英を少量含む。	半截竹管状工具による文様を描出。口唇部にも同一工具による爪形文。	五領ケ台式 C73VI51G
42	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③片岩を少量含む。	半截竹管状工具と棒状工具により文様を描出。	五領ケ台式 C73VI51G
43	胴部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③礫を少量含む。	半截竹管状工具と篋状工具による集合沈線文。	五領ケ台式 C85IV55G
44	口縁部片 深鉢	①良好 ②鈍い褐色 ③金雲母を多量に含む。	半截竹管状工具による集合沈線文。	五領ケ台式 内匠日影周地遺跡B区1号谷津
45	頸部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③石英を多量に含む。	頸部は強く屈曲。隆起帯上に三角印刻文。棒状工具による刺突。	五領ケ台式 D43V25G
46	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③片岩と石英を少量含む。	口唇部上面に沈線が巡る。棒状工具による文様を描出。	五領ケ台式 D47V22G
47	口縁部片 深鉢	①良好 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	半截竹管状工具と篋状工具による集合沈線文。	五領ケ台式 1号屋敷
48	口縁部片 深鉢か	①良好 ②褐色 ③石英を少量含む。	半截竹管状工具による文様を描出。	五領ケ台式 C80III36G
49	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③雲母を多量に含む。	地文に原体LRの単節斜縄文。半截竹管状工具により文様を描出。	五領ケ台式 2号屋敷
50	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③金雲母を少量と砂を多量に含む。	原体RLの単節斜縄文。棒状工具による刺突。	五領ケ台式 内匠諏訪前遺跡A区5号住居覆土
51	口縁部片 深鉢	①良好 ②明褐色 ③砂を多量に含む。	棒状工具による沈線文。沈線上に刺突。	五領ケ台式 C82III40G
52	胴部片 深鉢	①良好 ②明褐色 ③砂を多量に含む。	半截竹管状工具による平行沈線文。原体RLの単節斜縄文。内面に稜。	五領ケ台式 内匠諏訪前遺跡A区5号住居覆土
53	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③石英を少量含む。	棒状工具による沈線文と交互刺突。口唇部上面に刻み。	五領ケ台式 C78III16G
54	口縁部片 浅鉢	①良好 ②赤褐色 ③礫を多量に含む。	内面に半截竹管状工具による結節沈線。	五領ケ台式 2号屋敷
55	口縁部片 浅鉢	①良好 ②明褐色 ③片岩を少量含む。	波状口縁。内面に半截竹管状工具による結節沈線。口唇部上面に刺突。	五領ケ台式 C78III27G
56	底部 深鉢	①良好 ②褐色 ③石英を多量に含む。	底部(12.0)は若干張り出す。胴部は結束第一種の原体RL・LRの単節斜縄文で自条結縛	五領ケ台式 2号屋敷
57	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③雲母を少量含む。	内面に稜。結束第1種の原体RL・LRの単節斜縄文。	五領ケ台式 C79III31G
58	胴部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③石英を少量含む。	原体RLの結節縄文を縦方向に施文。	五領ケ台式 C85IV58G
59	口縁部片 深鉢	①良好 ②明褐色 ③礫を多量に含む。	原体LRの単節斜縄文。	五領ケ台式 C88III30G

## 6. 遺構外出土遺物

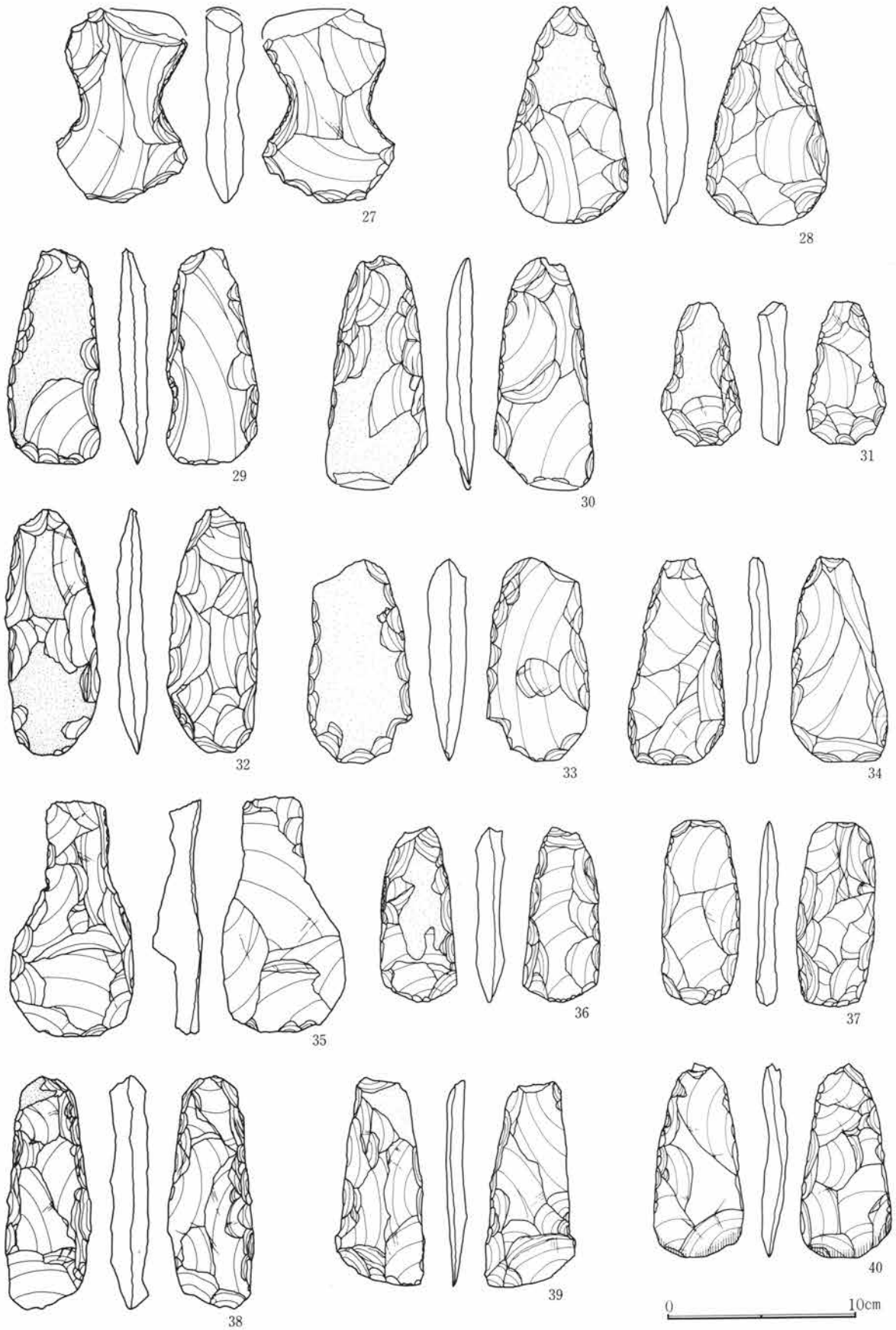
番号	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴等	備考
60	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部の内面に沈線が巡る。 原体 LR の単節斜縄文を羽状に施文。	61と同一 五領ケ台式 C78III21G
61	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部の内面に沈線が巡る。 胴部にクランク状の隆起を貼付したのち、原体 LR の単節斜縄文を羽状に施文。	60と同一 五領ケ台式。内匠諏訪前遺跡A区6号住居堀り方覆土
62	胴部片 深鉢	①良好 ②暗褐色 ③金雲母を多量に含む。	地文に原体 RL の単節斜縄文を施したのち、J字状の隆起を貼付。	五領ケ台式か。 C80III31G
63	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③石英と金雲母を多量に含む。	波状口縁。口縁部下に太い沈線。 原体 RL の単節斜縄文。	五領ケ台式か。 2号屋敷
64	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③金雲母を多量に含む。	原体 LR の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による弧線文。	五領ケ台式 C80IV32G
65	口縁部片 深鉢	①良好 ②鈍い赤褐色 ③石英を少量含む。	原体 RL の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による弧線文。	五領ケ台式 C79III29G
66	口縁部片 深鉢	①良好 ②内面鈍い赤褐色、外面灰褐色 ③礫を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による弧線文。 口唇部に突起を持ち、3叉文を施す。	五領ケ台式 C80III33G
67	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	棒状工具による結節沈線。	五領ケ台式 1号屋敷
68	口縁部片 深鉢	①良好 ②褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による結節沈線。波状口縁の先端に刻み。	五領ケ台式 C74IV41G
69	口縁部片 深鉢	①良好 ②赤褐色 ③砂を多量に含む。	波状口縁。原体 LR の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による結節沈線。削りとりによる三叉文。	五領ケ台式 C78III27G
70	口縁部片 深鉢	①良好 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	波状口縁の先端部分。隆帯を貼付したのち、単節の縄文を施文。棒状工具による沈線。	五領ケ台式 内匠諏訪前遺跡A区58号土坑覆土
71	胴部片 深鉢	①良好 ②内面暗褐色、外面黄褐色 ③礫と砂を多量に含む。	橋状把手の退化した隆起によって楕円の区画文。 原体 RL の単節斜縄文を施したのち、棒状工具による結節沈線。	五領ケ台式 2号屋敷
72	胴部片 深鉢	①良好 ②内面暗褐色、外面鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の単節斜縄文を施したのち、Y字状の隆帯が懸垂。隆帯に沿って円形竹管による結節沈線。	五領ケ台式。1号屋敷 内匠諏訪前遺跡A区8号住居No.5と同一。
73	口縁部片 深鉢	①良好 ②明赤褐色 ③片岩を少量、砂を多量に含む。	口縁部に突起。太い沈線が一本巡る。	時期不明 C80III18G
74	完形 土製円盤	①良好 ②褐色 ③砂を多量と、雲母を少量含む。	原体 L の無節の斜縄文。側面は全面擦れている。	時期不明 C70III46G
75	上部を欠損 土製品	①良好 ②褐色 ③片岩と砂を多量に含む。	無文。手捏だが中は中空。	時期不明 内匠諏訪前遺跡A区12号土坑覆土

II 縄文時代の遺構と遺物



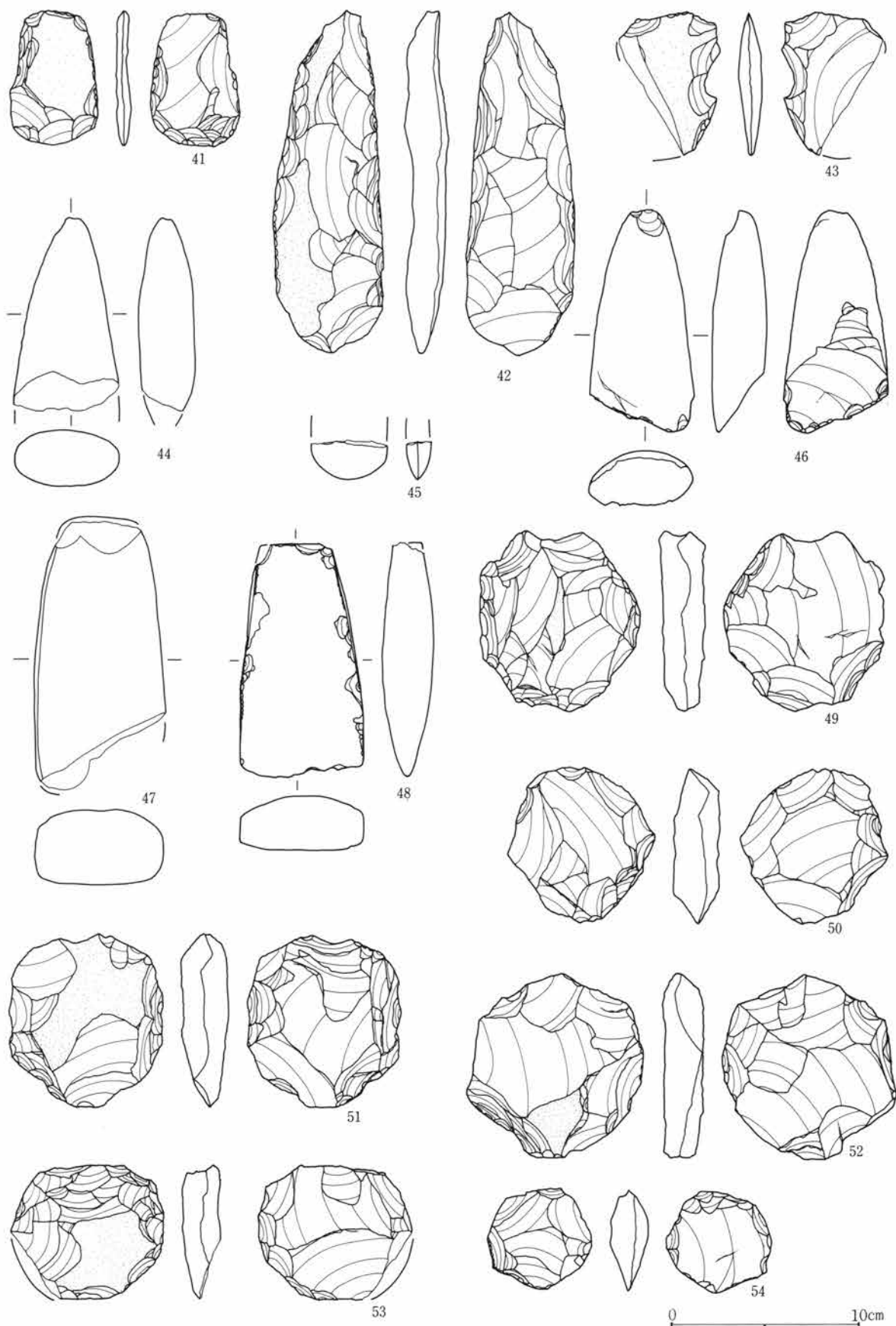
第28図 遺構外出土石器(1)

6. 遺構外出土遺物



第29図 遺構外出土石器(2)

II 縄文時代の遺構と遺物



第30図 遺構外出土石器(3)

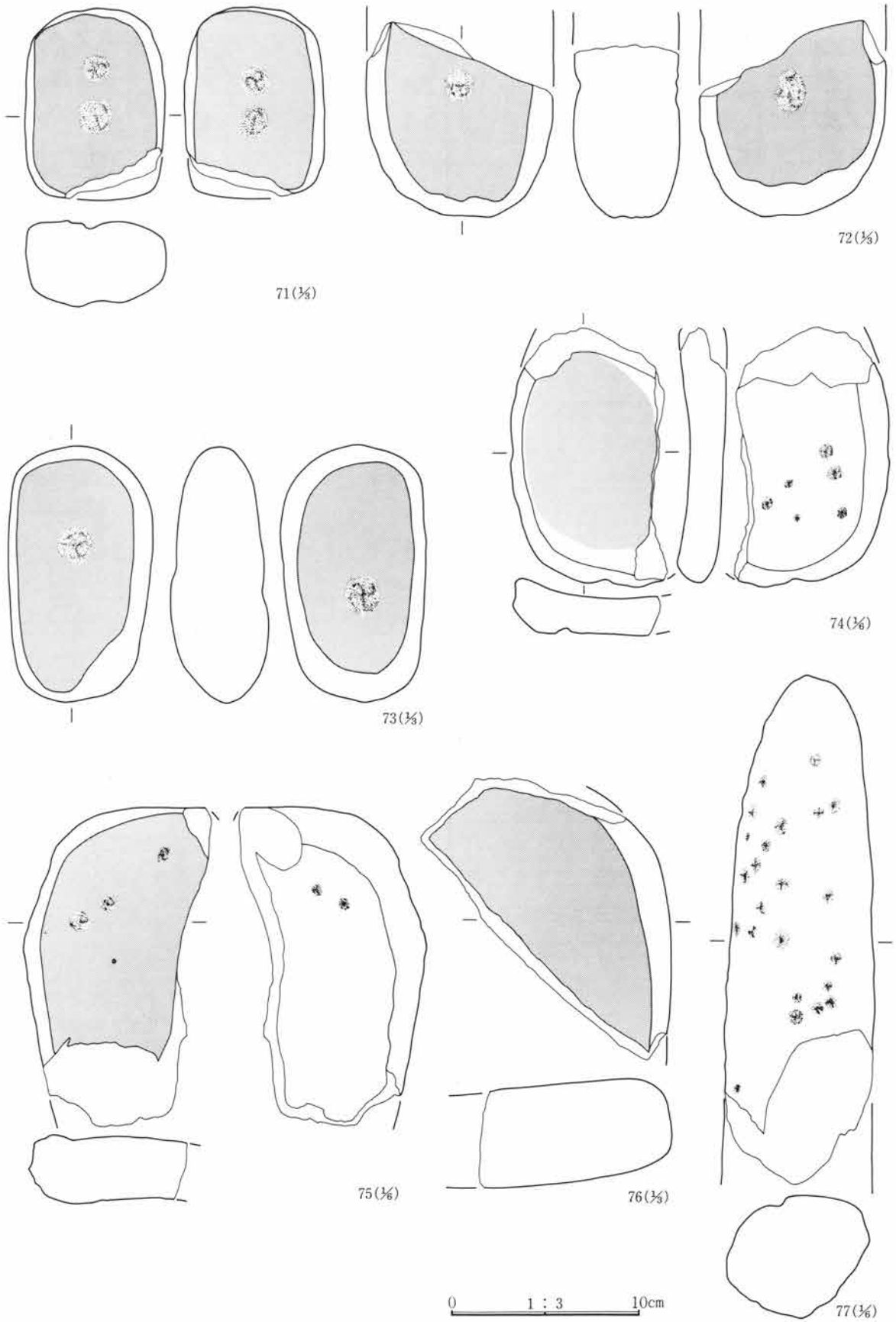


6. 遺構外出土遺物



第 31 図 遺構外出土石器 (4)

II 縄文時代の遺構と遺物



第32図 遺構外出土石器(5)

## 6. 遺構外出土遺物

## 石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量		形 状 ・ 特 徴 等		備 考	
1	尖頭器	長	—	幅	1.4	先端部及び基部を欠損する。縁辺を中心として丁寧な整形が施される。	黒曜石 D23IV24G
		厚	0.5	重	2.3		
2	石鏃	長	—	幅	2.6	完形は3、5、6、7、8、9、12。 先端を欠損するのが2、4、11で基部を欠損するのが4。 返しの欠損が10である。	黒曜石 C76III6G
		厚	0.2	重	1.1		
3	石鏃	長	1.9	幅	1.4	大半が無茎だが唯一4のみ有茎鏃である。	黒曜石 C79III16G
		厚	0.4	重	0.5		
4	石鏃	長	—	幅	1.0	無茎鏃の中で抉りが大きいものとして2、5、11があげられ、逆に抉りが小さいものとして、3、6、7、8、9があげられよう。	黒曜石 内匠諏訪前遺跡A区28溝
		厚	0.4	重	0.6		
5	石鏃	長	2.7	幅	1.9	いずれも縁辺に細かな整形が施される。	黒曜石 C75IV41G
		厚	0.4	重	0.6		
6	石鏃	長	1.5	幅	1.2	黒曜石 C80VI55G	
		厚	0.2	重	0.1		
7	石鏃	長	1.5	幅	1.2	黒曜石 C84IV56G	
		厚	0.2	重	0.1		
8	石鏃	長	2.8	幅	1.7	黒曜石 C90VI30G	
		厚	0.4	重	1.1		
9	石鏃	長	2.9	幅	1.5	チャート D40V30G	
		厚	0.4	重	1.0		
10	石鏃	長	—	幅	1.4	チャート 内匠日影周地遺跡A区表採	
		厚	0.4	重	0.5		
11	石鏃	長	—	幅	1.9	黒曜石 C95V95G	
		厚	0.3	重	0.5		
12	石鏃	長	1.6	幅	1.7	黒曜石 内匠日影周地遺跡A区表採	
		厚	0.4	重	0.3		
13	石錐	長	—	幅	1.0	先端部のみ残存。微細な整形が施される。	黒曜石 C88III10G
		厚	0.2	重	0.3		
14	石匙	長	2.6	幅	—	つまみ部を欠損するものは19、20で、それ以外の部分を欠損するものは14である。また明瞭なつまみを形成しないものとして、17、21がある。	チャート C81III34G
		厚	0.4	重	4.0		
15	石匙	長	8.5	幅	4.4	このうち、体部が縦長の形状のものとして15、18、22があり逆に横長の形状のものとしては、14、17、21、23がある。 横長形状のものを中心として体部は三角形を呈するものが多い。いずれも縁辺に細かな整形が施される。	頁岩 C77III32G
		厚	1.0	重	44.0		
16	石匙	長	8.0	幅	6.0	流紋岩 C77III32G	
		厚	1.0	重	60.0		
17	石匙	長	5.0	幅	7.6	流紋岩 C80III30G	
		厚	1.2	重	50.0		
18	石匙	長	6.5	幅	4.5	流紋岩 C82III51G	
		厚	1.0	重	37.0		
19	石匙	長	—	幅	6.4	安山岩 C70III40G	
		厚	0.6	重	30.0		
20	石匙	長	—	幅	6.6	流紋岩 C81III40G	
		厚	0.5	重	36.0		
21	石匙	長	5.0	幅	9.8	頁岩 C86VI49G	
		厚	1.0	重	59.0		
22	石匙	長	8.9	幅	5.5	流紋岩 D8III26G	
		厚	1.2	重	72.0		
23	石匙	長	4.3	幅	4.3	安山岩 C88VI28G	
		厚	1.0	重	13.4		
24	打製石斧	長	11.4	幅	5.3	欠損があるものとして、27、30、43があるが他はすべて完形である。形状として、いわゆる短冊形に含まれるものが大半を占める。	石英安山岩 C85III40G
		厚	2.5	重	185.0		
25	打製石斧	長	11.2	幅	4.7	短冊形の打製石斧は42のように長さが20cm近いものもあるが大半は10cm前後の計測値を示す。	熱変成岩 C89III9G
		厚	2.0	重	125.0		
26	打製石斧	長	15.5	幅	4.6	撥形に近い形状のものは、42などがあるが形態的にはむしろ短冊形と撥形の中間的な形をしている。	安山岩 C80III19G
		厚	2.0	重	185.0		
27	打製石斧	長	—	幅	6.8	分銅形を呈するものとしては、27、43がある。また刃部に明瞭な使用痕が見受けられるものとしては、26、40がある。	熱変成岩 C79III36G
		厚	2.0	重	178.0		
28	打製石斧	長	11.2	幅	6.3	打製石斧の中で35は特異な形状を持つ。	熱変成岩 C70III55G
		厚	2.1	重	142.0		
29	打製石斧	長	11.1	幅	4.8	打製石斧はすべて縁辺に細かな整形が施される。	熱変成岩 C75III45G
		厚	1.5	重	114.0		
30	打製石斧	長	—	幅	5.3	熱変成岩 C89III30G	
		厚	1.5	重	135.0		

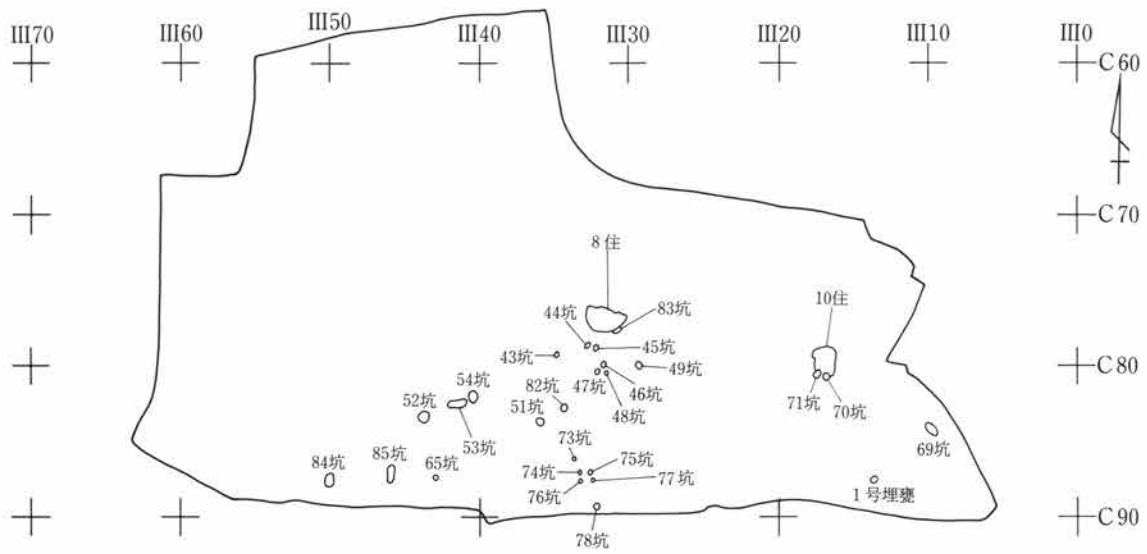
II 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
31	打製石斧	長 7.4 幅 4.2 厚 1.5 重 51.0		熱変成岩 C87IV46G
32	打製石斧	長 12.6 幅 4.9 厚 1.5 重 125.0		熱変成岩 C70III59G
33	打製石斧	長 10.5 幅 5.4 厚 2.0 重 139.0		安山岩 C77III32G
34	打製石斧	長 10.6 幅 5.0 厚 1.2 重 90.0		熱変成岩 C89III28G
35	打製石斧	長 12.0 幅 6.4 厚 2.5 重 201.0		輝緑岩 C80III20G
36	打製石斧	長 9.0 幅 4.0 厚 1.6 重 67.0		熱変成岩 C79IV21G
37	打製石斧	長 9.6 幅 4.0 厚 1.0 重 66.0		安山岩 C80III20G
38	打製石斧	長 12.0 幅 4.5 厚 1.5 重 140.0		熱変成岩 C68IV32G
39	打製石斧	長 10.7 幅 4.7 厚 1.2 重 60.0		熱変成岩 C82IV56G
40	打製石斧	長 10.0 幅 4.7 厚 1.0 重 74.0		石英粗面岩 D12V24G
41	打製石斧	長 6.8 幅 4.6 厚 0.8 重 40.0		熱変成岩 D48V17G
42	打製石斧	長 17.6 幅 5.7 厚 2.3 重 272.0		熱変成岩 C91VI87G
43	打製石斧	長 — 幅 5.3 厚 1.2 重 27.5		輝緑岩 D51V25G
44	磨製石斧	長 — 幅 5.5 厚 2.9 重 235.0	48がほぼ完形だが、他は欠損品。 46は欠損した磨製石斧を再利用している。	閃緑岩 C77III27G
45	磨製石斧	長 — 幅 3.0 厚 1.3 重 20.0	いわゆる「定角式」の磨製石斧は47、48である。 磨製石斧はすべて丁寧な研磨が施されている。	輝緑岩 C83III35G
46	磨製石斧	長 11.4 幅 5.4 厚 2.8 重 271.0		輝緑岩 C86III41G
47	磨製石斧	長 — 幅 7.0 厚 3.9 重 555.0		石英閃緑岩 C80III15G
48	磨製石斧	長 — 幅 6.5 厚 2.8 重 404.0		チャート 内匠諏訪前遺跡A区6号住居覆土
49	円形削器	長 8.6 幅 8.4 厚 2.4 重 220.0	正面形状がほぼ円形に近い削器で53は一部を欠損するが他はほぼ完形。 いずれの石器も粗い整形箇所と細かな整形箇所を有する。	熱変成岩 内匠諏訪前遺跡A区1号住居覆土
50	円形削器	長 8.0 幅 7.7 厚 2.4 重 160.0		熱変成岩 C70III41G
51	円形削器	長 8.4 幅 8.0 厚 2.5 重 245.0		熱変成岩 C81III45G
52	円形削器	長 9.5 幅 9.2 厚 2.2 重 250.0		熱変成岩 C72III28G
53	円形削器	長 6.9 幅 8.0 厚 2.0 重 130.0		熱変成岩 C85VI50G
54	円形削器	長 5.2 幅 5.4 厚 2.0 重 60.0		熱変成岩 C74VI41G
55	削器	長 2.6 幅 2.0 厚 0.4 重 3.8	縁辺に細かな整形が施される。 完形。	チャート 内匠諏訪前遺跡A区1号住居覆土
56	剥片石器	長 8.3 幅 6.0 厚 1.8 重 85.0	不定形な剥片の一部を加工したり、また使用によると思われる剥離がみられる。	熱変成岩 C77IV6G
57	剥片石器	長 7.5 幅 5.4 厚 1.2 重 40.0	機能的には削器としての使用が大半を占める。	熱変成岩 C76III13G
58	剥片石器	長 5.0 幅 4.5 厚 1.0 重 20.0		熱変成岩 C70III40G
59	剥片石器	長 5.0 幅 10.3 厚 2.0 重 106.0		熱変成岩 C77III32G

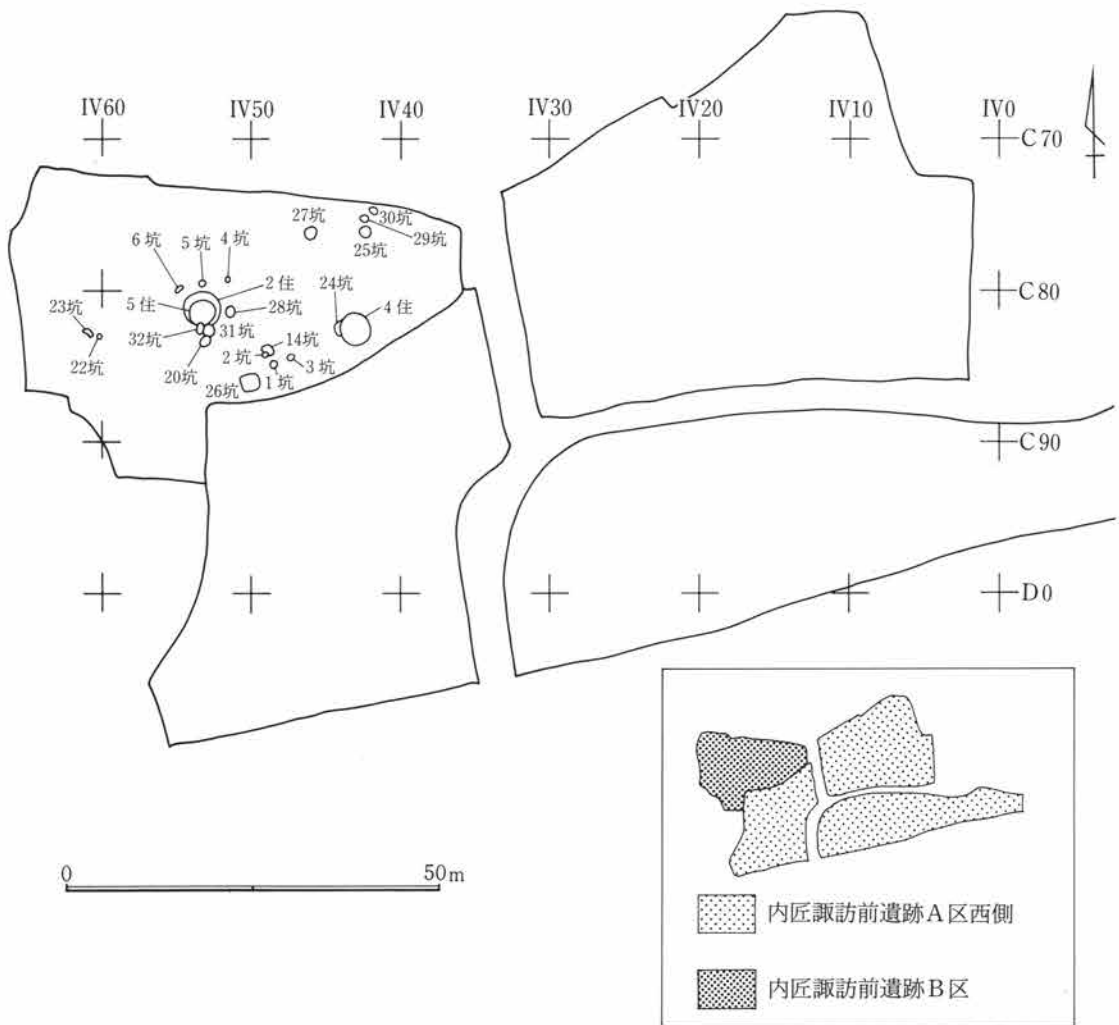
## 6. 遺構外出土遺物

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考	
60	剥片石器	長 4.3 幅 8.0 厚 1.0 重 45.0	不定形な剥片の一部を加工したり、また使用によると思われる剥離がみられる。 機能的には削器としての使用が大半を占める。	熱変成岩 C77III32G	
61	剥片石器	長 5.9 幅 5.0 厚 0.9 重 25.0		安山岩 C80III22G	
62	剥片石器	長 4.6 幅 6.8 厚 0.9 重 35.0		安山岩 C87III30G	
63	剥片石器	長 13.5 幅 3.7 厚 0.9 重 50.0		緑泥片岩 C88III9G	
64	剥片石器	長 7.1 幅 5.7 厚 0.9 重 47.0		安山岩 C79IV15G	
65	剥片石器	長 9.3 幅 7.1 厚 0.7 重 115.0		熱変成岩 C84III45G	
66	剥片石器	長 4.5 幅 7.0 厚 1.7 重 68.0		熱変成岩 D13V31G	
67	剥片石器	長 5.3 幅 11.2 厚 1.4 重 70.0		熱変成岩 内匠諏訪前遺跡A区表採	
68	磨石	長 10.1 幅 9.2 厚 5.6 重 790		いずれも完形である。68、69は楕円形を示すが70は正面形が二等辺三角形に近い。	安山岩 C91III25G
69	磨石	長 16.0 幅 8.0 厚 5.6 重 1100		68、69は全面が磨面で、70は底面のみが磨面として機能するいわゆるスタンプ形石器である。	安山岩 C90III28G
70	磨石	長 14.8 幅 8.8 厚 6.0 重 1000	安山岩 2号屋敷		
71	凹み石	長 — 幅 7.4 厚 4.4 重 500	71、72は欠損品。73は完形。 71は断面形状が隅丸の方形を呈するが、他は楕円形を呈する。		流紋岩 C86III45G
72	凹み石	長 — 幅 9.8 厚 5.6 重 800	すべて磨石としても使用されたものと思われる。	安山岩 C70III59G	
73	凹み石	長 13.2 幅 7.7 厚 5.1 重 900		安山岩 C77III28G	
74	石皿	長 27.0 幅 16.3 厚 6.0 重 3300	すべて正面形は楕円形ないしは隅丸方形を呈していたと思われるが、3点とも欠損品のため全体の形状の詳細は不明。	絹雲母石墨片岩 C87III30G	
75	石皿	長 33.1 幅 19.7 厚 7.2 重 7300	76は裏面に、75は両方に凹み部を持つ。	点紋緑泥片岩 内匠諏訪前遺跡15号土坑	
76	石皿	長 14.4 幅 13.3 厚 4.9 重 1300		安山岩 C70III23G	
77	石棒	長 52.9 幅 15.8 厚 12.8 重 15100	ほぼ全面に凹み部を持つ。 欠損品。	点紋緑泥片岩 内匠諏訪前遺跡1号井戸	

II 縄文時代の遺構と遺物

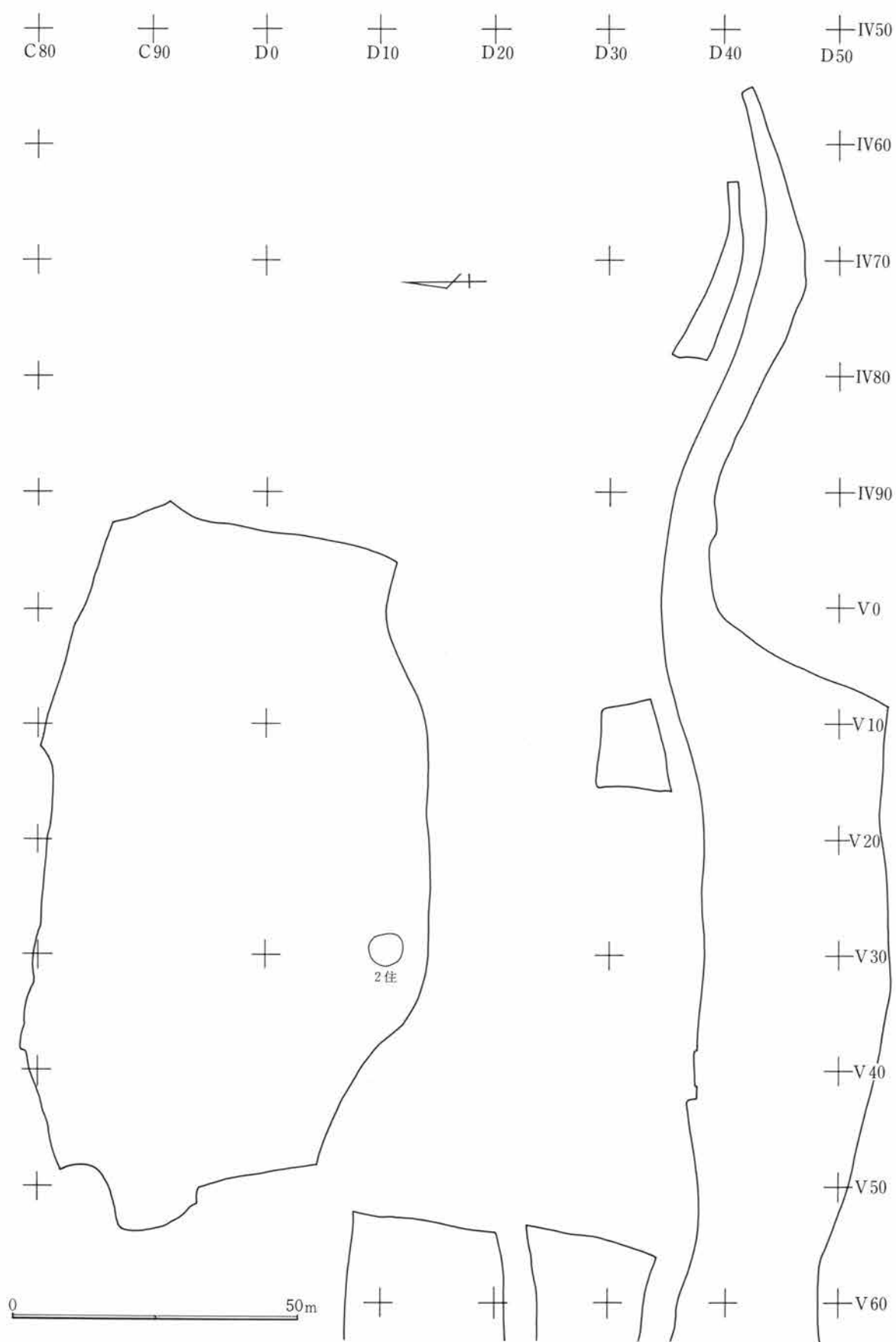


内匠諏訪前遺跡A区東側



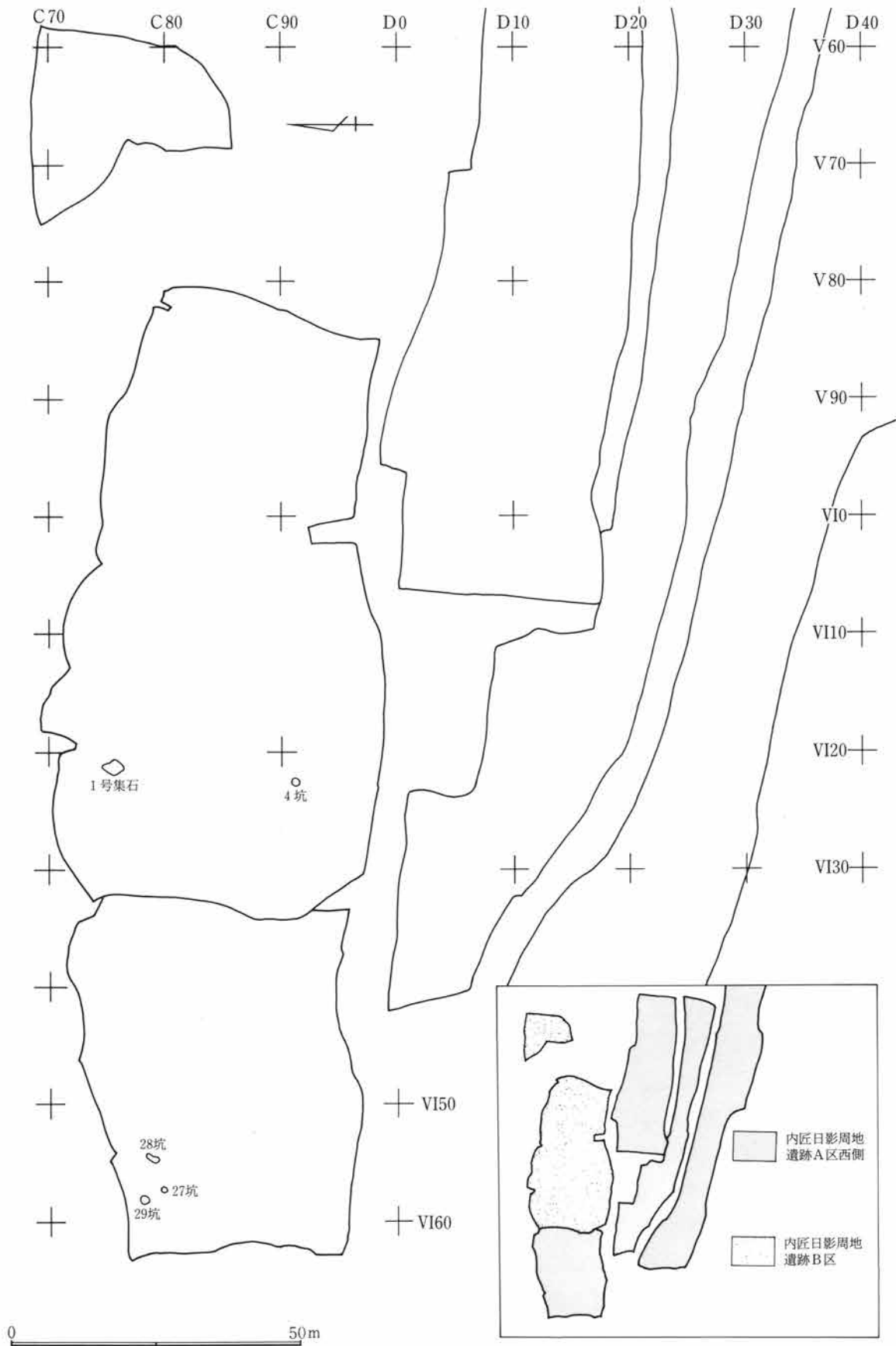
第33図 縄文時代の遺構分布(1)・内匠諏訪前遺跡

II 縄文時代の遺構と遺物



第34図 縄文時代の遺構分布(2)・内匠日影周地遺跡A区東側

II 縄文時代の遺構と遺物



第 35 図 縄文時代の遺跡分布 (3)・内匠日影周地遺跡



### III 弥生時代の遺構と遺物

#### 1. 検出された遺構の概要

地区別に概要を述べていきたい。

##### 内匠諏訪前遺跡（第68図参照）

内匠諏訪前遺跡では、A区で中期の土坑が1基検出されただけである。

B区では、弥生時代の遺構は検出されていない。

##### 内匠日影周地遺跡A区（第69・70図参照）

検出された竪穴式住居は11軒で、後期樽式期に位置付けられる。

土坑は16基検出されているが、縄文時代終末～弥生時代前期と考えられる段階から、後期樽式期までの土器が出土している。

##### 内匠日影周地遺跡B区（第70図参照）

竪穴式住居3軒と、土坑2基が検出されている。

竪穴式住居からは、それぞれ中期・後期樽式・弥生時代終末～古墳時代前期初頭に位置付けられる土器群が出土している。

土坑からは中期と思われる土器片が出土している。

#### 2. 竪穴式住居

##### 内匠日影周地遺跡A区（第69・70・214図参照）

東西にのびる馬背状丘陵の頂部から南側に傾斜する緩斜面上に11軒検出された。

住居の分布も地形にあわせて東西に細長い広がりをもっており、南北幅約25mの間で住居が分布するのについて、東端の3号住居から西端の17号住居までの距離は約140mである。

住居の向きは、大部分が南北方向を中心とした長軸をもち、南側に出入口が存在したと考えられる。例外的に5号住居は、東西方向に長軸をもち東側に出入口を有していた。

住居の形状は、隅丸長方形を基本にしているが、一部には平行四辺形や台形の形状も存在する。長軸と短軸の長短比は計測可能なものはすべて、1:1.2～1.3であった。

住居の規模は、面積からみた場合に、大（40～70m<sup>2</sup>）・中（16～20m<sup>2</sup>）・小（10m<sup>2</sup>前後）に分けることが可能で、具体的には、大—3・5・8・10・16・17号住居の6軒、中—4・9・18の3軒、小—12・15の2軒である（短軸しか計測できないものは、長短比を1:1.2として推定の面積を計算した）。

住居内部の施設は、基本的に4本の主柱穴をもち中軸線上に主体の炉を設ける場合が多いが、住居により柱穴数や副炉及び貯蔵穴の有無などに違いがある。また、出入口施設の痕跡として1対のピットを有するもの（5・16号住居）と浅い掘り込みをもつもの（12・15号住居）とがあるが、他の住居では検出できなかった。

住居間の遺物接合は、5例確認できた。（第215図参照）

この住居群から出土する土器は、樽式2期の後半に位置付けられるものが主体をしめる。したがって、出土する甕も、極端な球胴形を呈するものや、縄文施文をするものは含まれてはいない。また、樽式土器の甕に特徴的な簾状文は、あまり用いられていない。

また、すべての住居から磨製石鏃製作にかかわるとされる砥石が出土し、磨製石鏃の製作途中と考えられる欠損品を埋没土中から出土した住居は11軒中8軒という高い割合であった。

##### 内匠日影周地遺跡B区（第70図参照）

3軒の住居を検出した。2号住居からは、弥生時代終末～古墳時代前期初頭に位置付けられる土器群が出土している。4号住居は谷頭に立地し、中期の土器を出土している。8号住居は、樽式土器を出土しているが、竪穴式住居ではない可能性がある。

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区3号住居

位置 D41V12他 写真 PL19・30

形状 胴張りの隅丸長方形

長軸 7.6m 短軸 6.6m 長短比 1:1.2

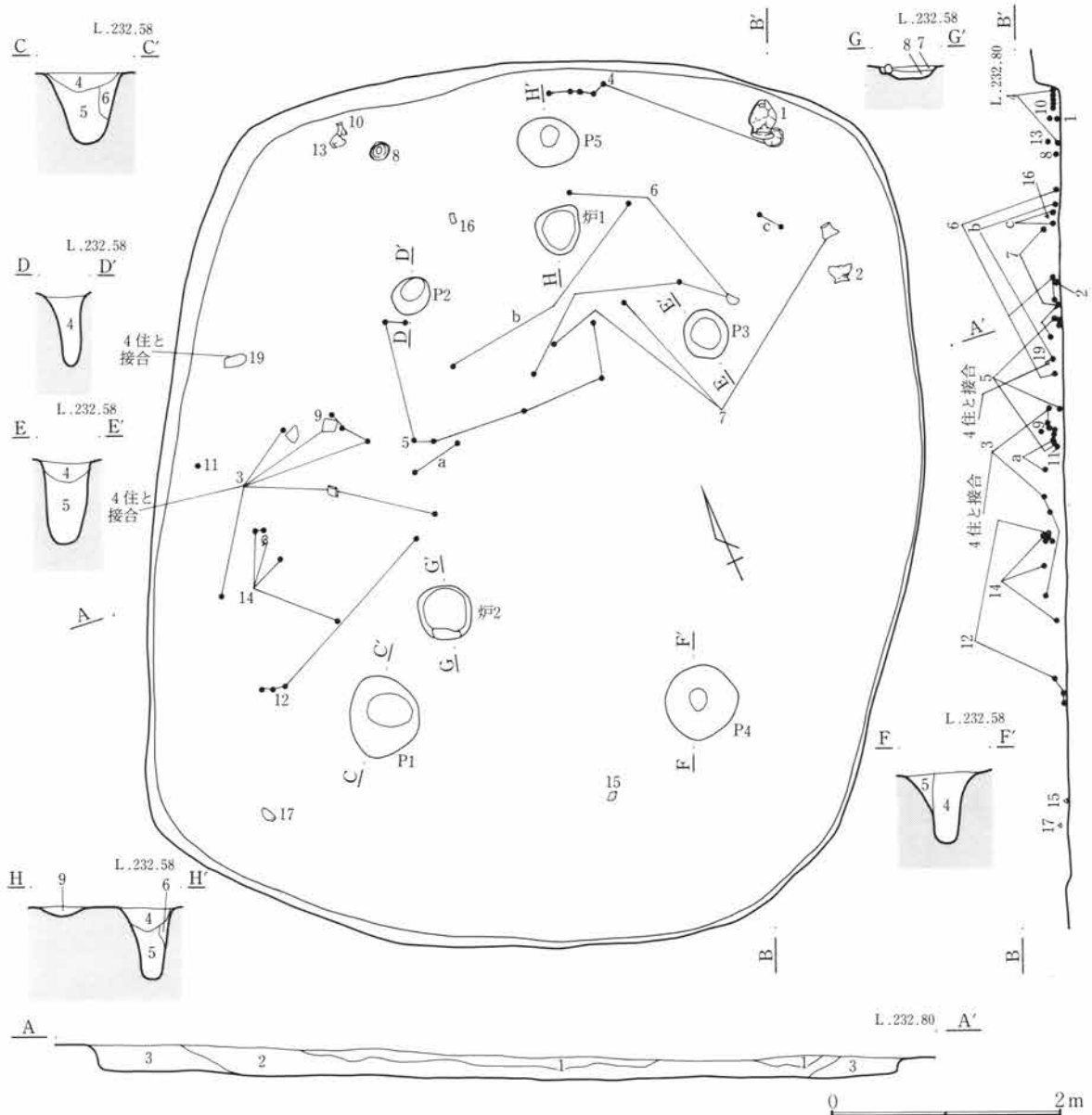
面積 48.0㎡ 方位 N-22°-E

床面 地形が北から南に緩やかに傾斜する場所に立地し、ロームを2~23cm掘り込んで床面としている。全体に堅固で良く踏み固められている。

埋没土 ローム質の土壌を主体とする。

炉 2基検出した。炉1は、中軸線北寄りで支柱穴線の外側にあり、6cmの浅い掘り込みをもつ。炉2は、住居中央から南西寄り。結晶片岩の炉石を据え、被熱により上面を中心に変色する。

柱穴 5本の柱穴が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(70×60)×68cm、P2:(32)×61cm、P3:(42)×71cm、P4:(66)×58



埋没土層 1, 黒褐色土 粘性と締まりともに弱い。2, 暗褐色土 ローム質土壌。Y.P粒子を少し含む。3, 褐色土 ローム質土壌。2層に似るがY.P粒子を含まない。4, 暗褐色土 柱穴の覆土。粘性と締まりともに弱い。5, 黄褐色土 柱穴の覆土。ローム質土壌。M.P粒子を含む。6, 褐色土 柱穴の覆土。ロームブロックを含む。7, 褐色土 炉2の覆土。焼土粒子を多く含む。8, 褐色土 炉2の覆土。焼土とロームブロックを含む。9, 暗褐色土 炉1の覆土。焼土粒子とローム粒子を少し含む。

第36図 日A3号住居

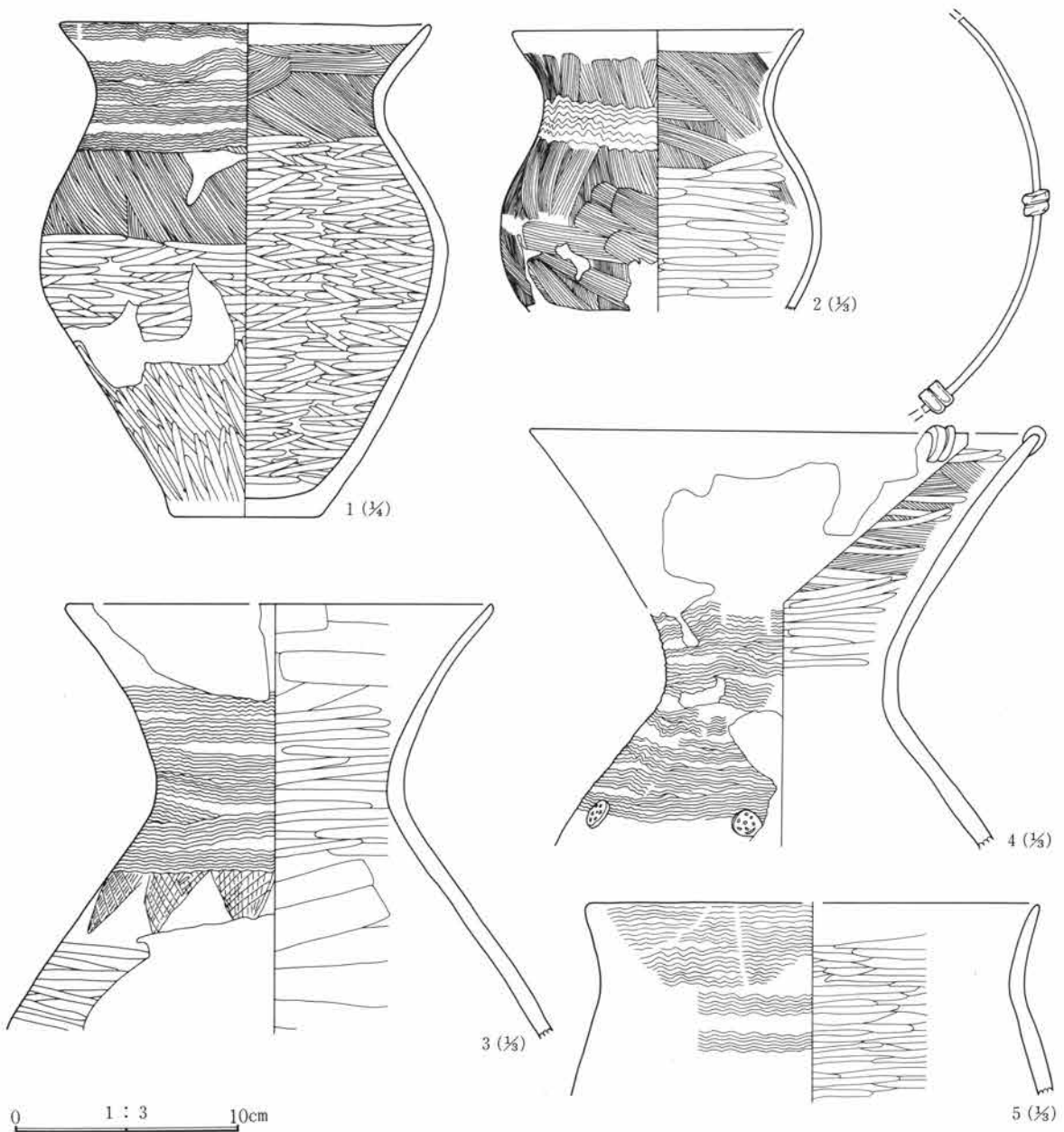
2. 竪穴式住居

cm、P 5 : (52×43)×63cm、であった。

**遺物** 住居内から樽式土器214点と石器類18点が出土した。この中で床上10cm以上の位置から出土した3と19は4号住居の床直上の遺物と接合関係をもつ(第39・215図参照)。土器の大半は床上10cm以上の位置に多く分布し、床直上の遺物も、それより高い位置に出土した遺物と接合関係をもつ(4・5・7・12など)。住居に帰属する土器として可能性が高いものとしては1と2がある。また、1の下で出土

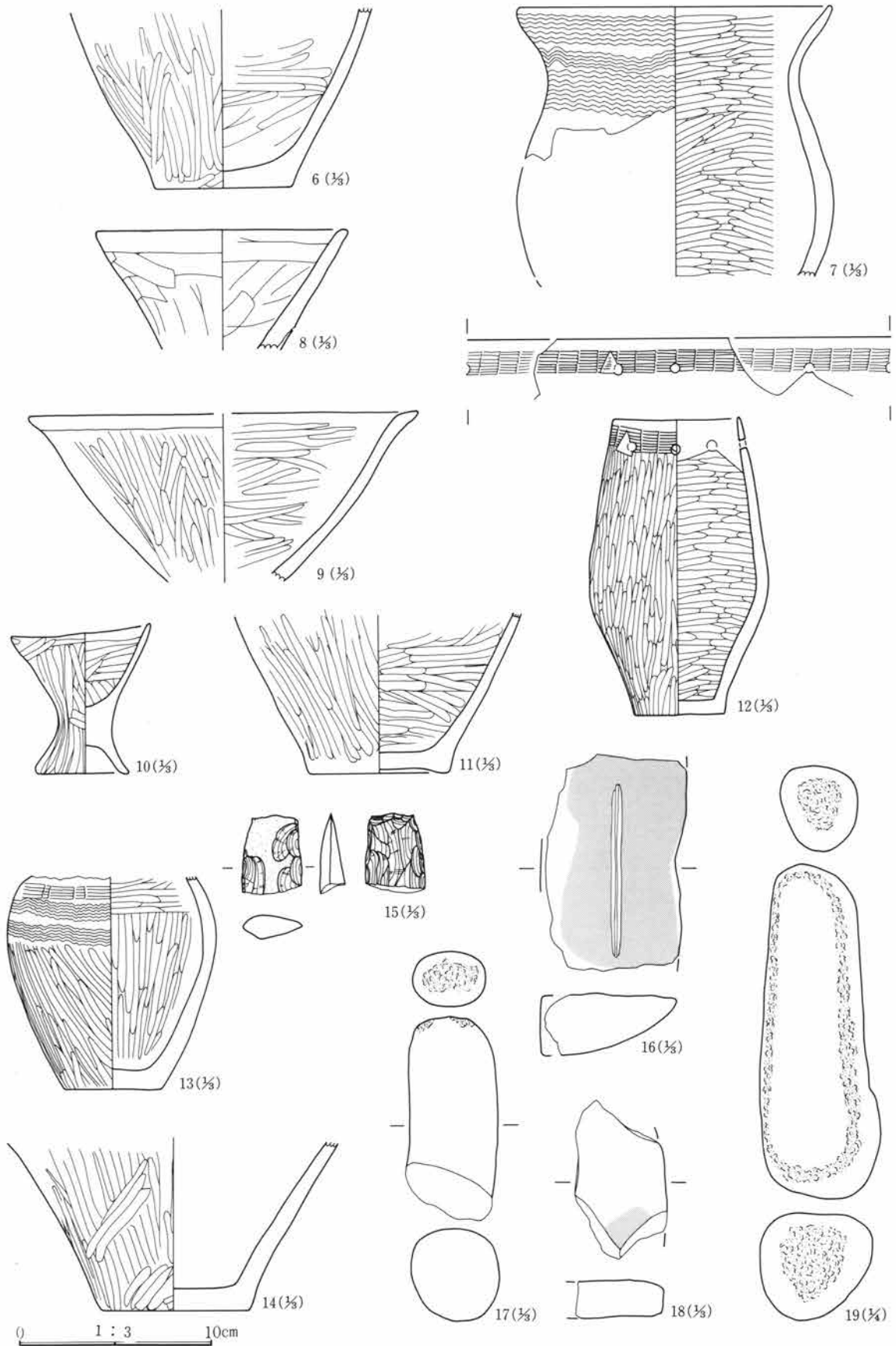
した4は、1の下から出土した部位が頸~胴上部であり、口縁部は覆土中位から出土していることから1の下から出土した4の部分は、そのみで機能していた可能性がある。石器類のうち、石器は図示したものだけである。また、磨製石鏃の原料となる結晶片岩のフレイクが炉2の北東で出土したが床上14cmであった。接合資料a~cは樽式土器である。

(遺物観察表：99頁)



第37図 日A3号住居出土遺物(1)

III 弥生時代の遺構と遺物



第38図 日A 3号住居出土遺物(2)

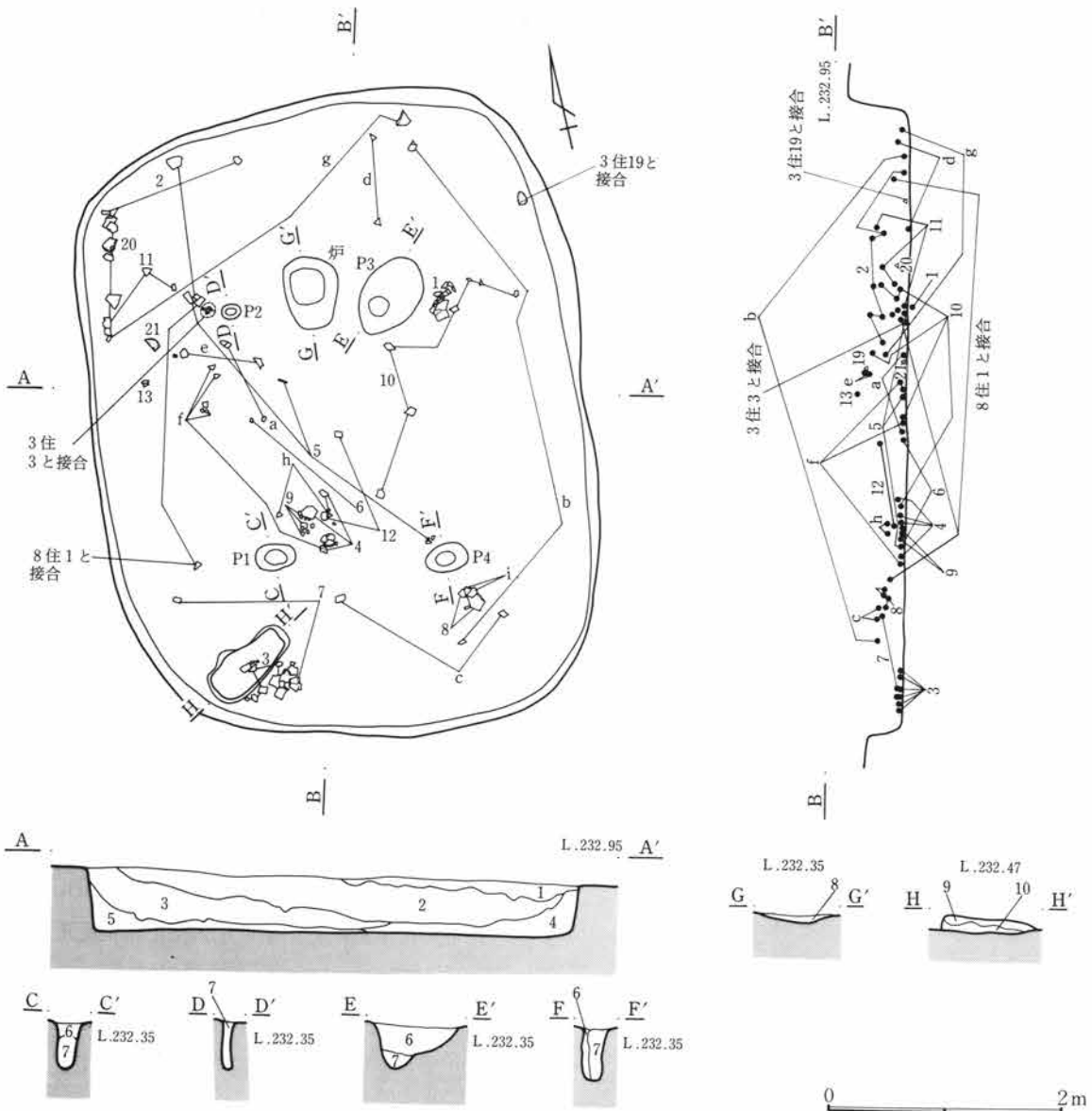
内匠日影周地遺跡A区4号住居

位置 D42V20他 写真 PL20・30・31  
 形状 隅丸長方形  
 長軸 5.4m 短軸 4.2m 長短比 1:1.3  
 面積 19.1m<sup>2</sup> 方位 N-12°-W  
 床面 地形が北から南に緩やかに傾斜する場所に立地し、ロームを30~59cm掘り込んで床面としている。全体に堅固で良く踏み固められている。  
 埋没土 ロームブロックを多く含む土層(3層)が

北東を中心に認められた。

炉 中軸線上と支柱穴(P2とP3)線のほぼ交わる地点で検出された。最大10cmの緩やかな掘り込みをもつ。炉内部の南側(住居内側寄り)は焼土化しているが、反対側は焼土化していない。また、炉に近接する北側部分(住居外側寄り)では多量の灰が検出された。

床面の状態などから、もう1基炉があった可能性は弱い。



埋没土層 1. 黒褐色土 白色の細粒を含む。2. 暗褐色土 炭化粒子を少し含む。3. 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。4. 黄褐色土 ローム質土壌。5. 灰褐色土 ローム粒子を少し含む。6. 黄褐色土 柱穴の覆土。ロームブロックを含む。7. 暗褐色土 柱穴の覆土。炭化粒子を少し含む。8. 暗褐色土 炉の覆土。炭化粒子を多く含む。9. 青灰白色粘土 10. 暗褐色土 ローム粒子を少し含む粘性の強い土。

第39図 日A4号住居

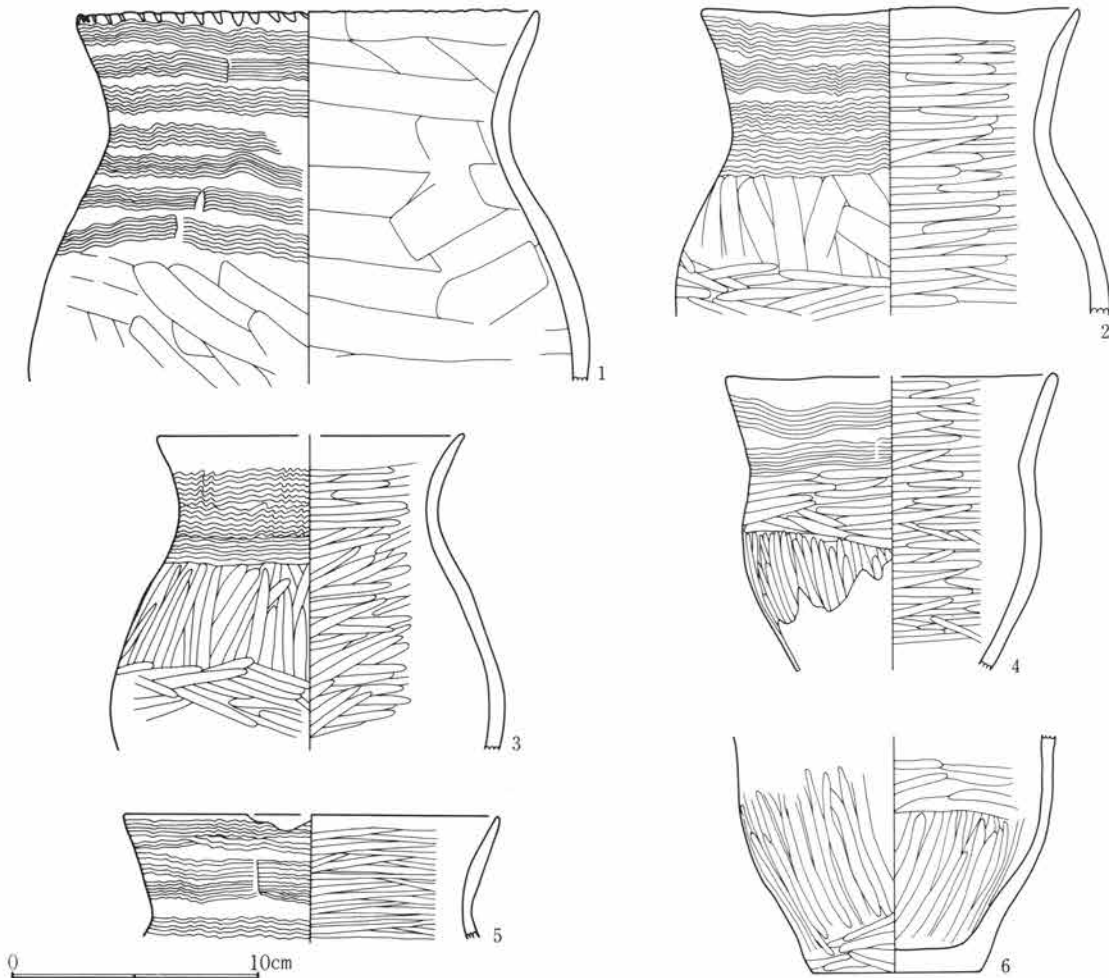
III 弥生時代の遺構と遺物

**柱 穴** 4本検出した。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P 1:(32×22)×38cm、P 2:(12)×38cm、P 3:(17×47)×36cm、P 4:(36×24)×43cm、であり、すべて楕円形であった。

**遺 物** 住居内から樽式土器618点と石器類172点が出土した。他の住居との接合例は4例確認できた。12は5号住居の覆土中の土器1点と接合した(第215図参照)が、5号住居内での出土位置は不明である。床直上の土器2点が3号住居の3・19と接合し(第36・215図参照)、覆土中～下層から出土した4点が8号住居1と接合した(第45・215図参照)。8号住居1はその覆土上～中層から5点が出土している。接合関係をもつ土器の大半は覆土中～下層にかけて接合する例が多く、床直上だけの接合関係をもつ土器(1・3・6)は少ない。石器類の中で図示した

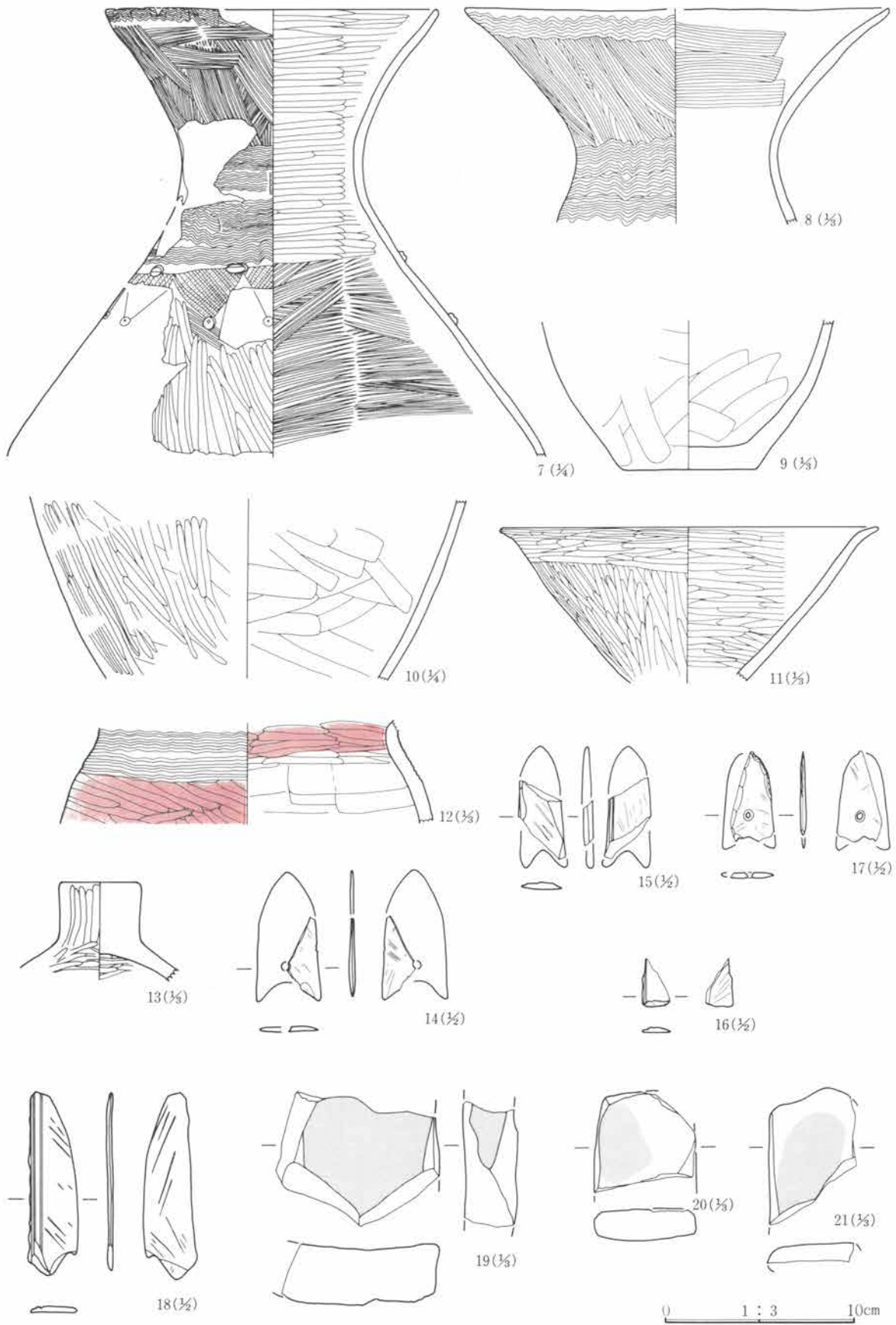
以外の石器は4点ある。1点(磨石の破片)は出土位置が不明である。他の石器は、被熱し破損した磨石が南側の中央で床上16cmの地点から、ほぼ同じ位置で床上34cmの地点から砥石が、20の近くから砥石の破片が床上3cmの地点から出土した。また、磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイク・チップ類は48点出土したが、その中で出土地点がわかるものは5点のみであった。5点は住居内において散漫と分布し、床上8～20cmの高さである。石器以外の石は、砥石と同じ石材のものと、礫、熱変成岩のフレイク類が主体をしめる。接合資料a～iは樽式土器である。(遺物観察表：99・100頁)

**備 考** 住居の南西隅で青灰色の粘土が確認されたが、粘土と床面の間には暗褐色土が挟まれていた。



第40図 日A 4号住居出土遺物(1)

2. 竪穴式住居



第41图 日A 4号住居出土遺物(2)

III 弥生時代の遺構と遺物

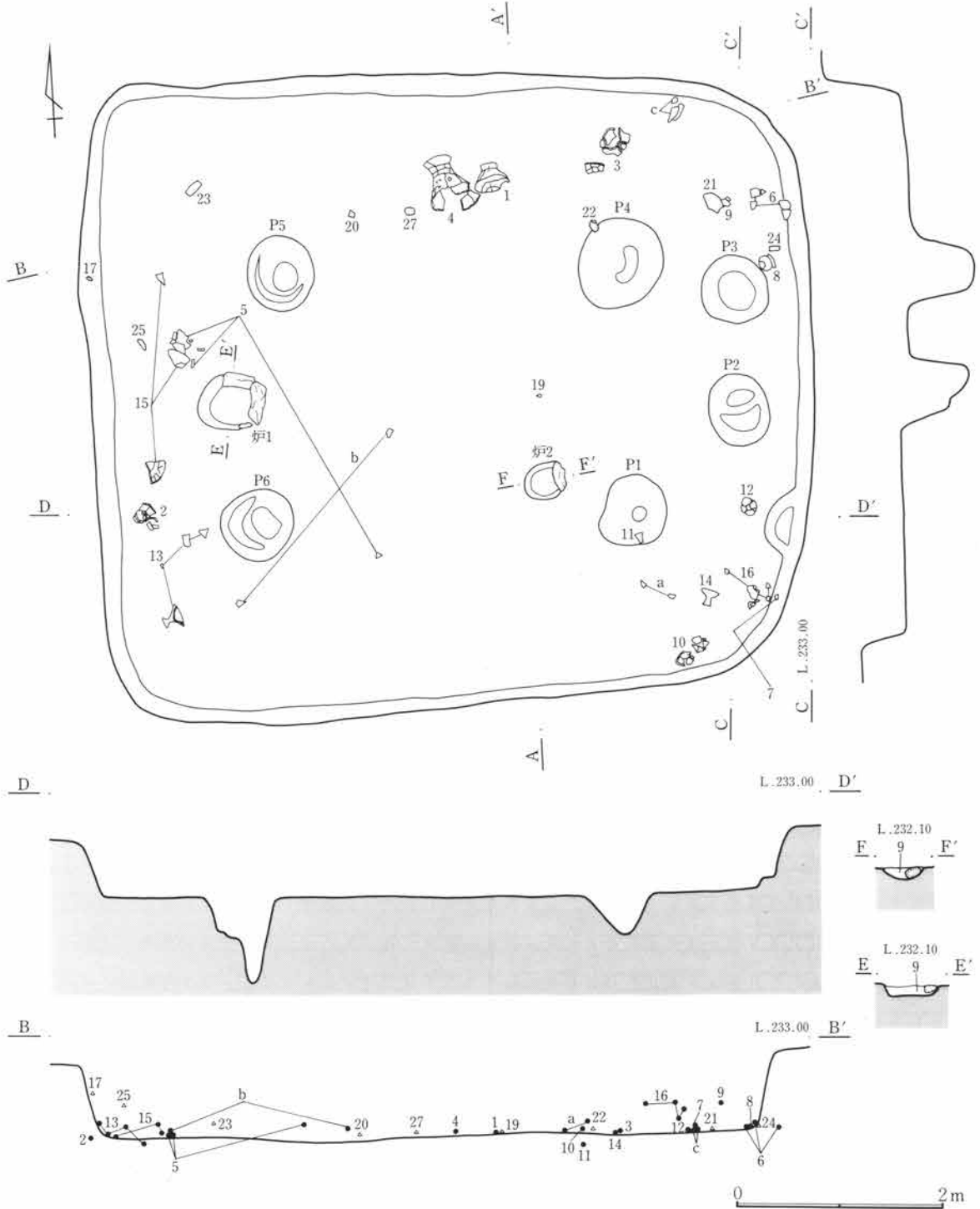
内匠日影周地遺跡A区5号住居

位置 D43V20 写真 PL20・21・31・32  
 形状 隅丸方形に近い台形  
 長軸 6.9m 短軸 5.6~6.0m  
 長短比 1:1.2 面積 41.5㎡  
 方位 N-82°-E

(内匠日影周地遺跡A区の弥生集落で東西方向に主軸が向くのは5号住居だけである。)

床面 地形が北から南に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを41~81cm掘り込んで床面としている。

全体に堅固で良く踏み固められているが、P2と



第42図 日A5号住居と出土遺物(1)



## 2. 竪穴式住居

P 3 から東側（住居東壁下の中央部）にかけては軟弱であった。また、東壁下の一部が僅かながら盛り上がっていた（D-D'参照）。

**埋没土** 覆土上層は自然埋没土だが中層はローム質の土壌であった。

**炉** 2 基検出した。炉 1 は中軸線上で、支柱穴（P 5 と P 6）線の外側にあり、炉石が炉を囲むように

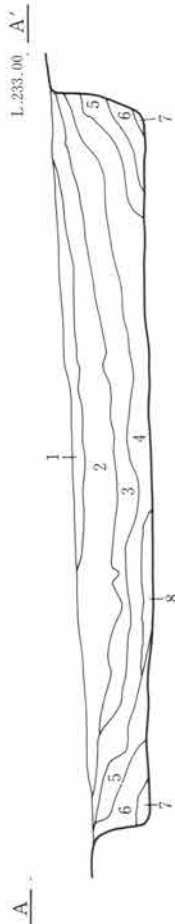
3 つ据えてあった。9 cm の掘り込みをもち底面全体が焼土化している。大きな炉石 2 つは牛伏砂岩で被熱による劣化が著しい。

炉 2 は P 1 の西側中央寄りで炉石を 1 つ添える形態である。10 cm の掘り込みをもち、底面南側の一部が焼土化していたが、炉 1 と比べると加熱は少なかったと思われる。また、炉石は結晶片岩で被熱により上面が変色していた。

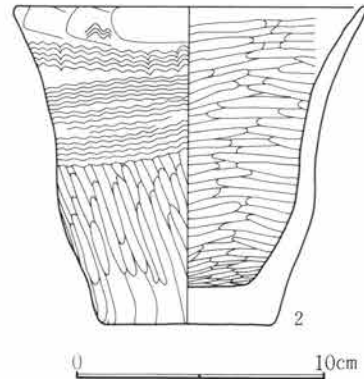
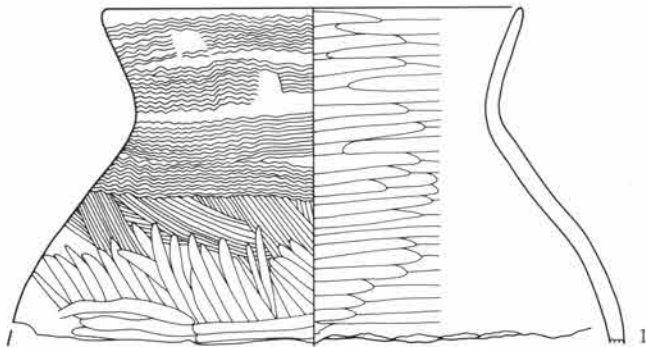
**柱 穴** 6 本の柱穴が検出された。このうち P 2 と P 3 は出入口施設の柱穴と思われる。他の 4 本は支柱穴である。各柱穴の規模《（径）×深さ》は、P 1 : (69)×42cm、P 4 : (82)×69cm、P 5 : (62)×49cm、P 6 : (70)×81cm、P 2 : (67×59)×60cm、P 3 : (64)×61cm、であった。

**遺 物** 樽式土器 365 点と石器類 72 点が出土したが、土器 312 点と石 40 点は一括して取り上げた。5 号住居外から出土した土器との接合関係は 2 例確認できた。7 が D43V70 グリッド（約 60m 西）の土器と接合した。覆土中の土器 1 点（出土位置不明）が 4 号住居 12 と接合した（第 39・215 図参照）。図示した土器の中で、この住居に帰属しない可能性が強いものとして 5・7・9・16 がある。出土した石器は図示したものである。また、磨製石鏃の原材料である結晶片岩は、コア 4 点とフレイク 9 点が出土したが出土位置が確認できた 6 点は床上 4~24cm であった。接合資料 a~c は樽式土器である。また、覆土から縄文土器 3 片が出土した。

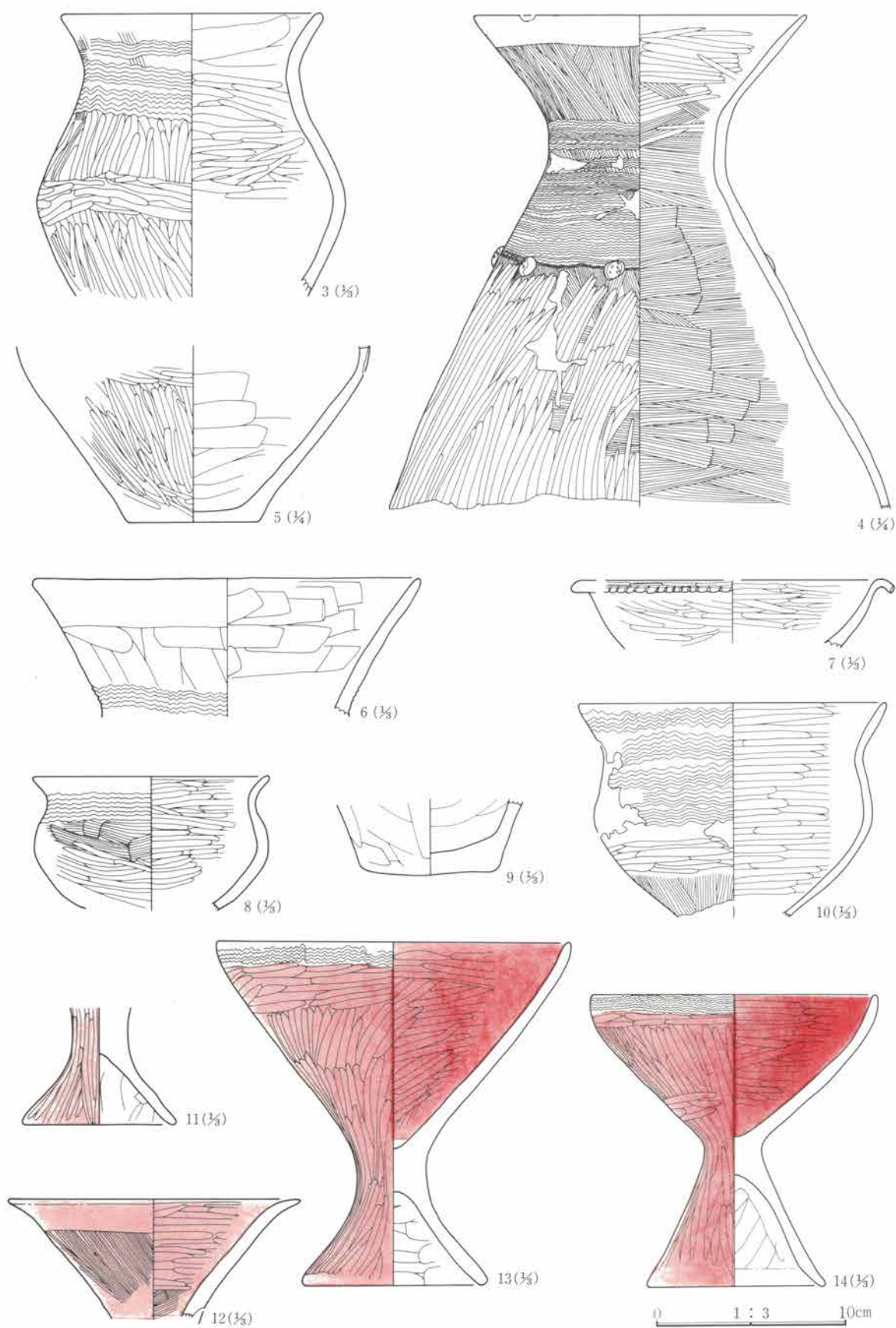
（遺物観察表：100・101・102 頁）



- 埋没土層**
1. 暗褐色土 炭化粒子を少し含む。粘性は弱い。
  2. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。
  3. 暗褐色土 炭化粒子と焼土粒子を少し含む。
  4. 黄褐色土 ローム質土壌。Y、P 粒子を多く含む。
  5. 褐色土 Y、P 粒子を多く含む。
  6. 黄褐色土 ローム質土壌。M、P 粒子を多く含む。
  7. 黄褐色土 堅く締まり粘性が強い。
  8. 暗褐色土 炭化粒子と焼土粒子を少し含む。
  9. 褐色土 炉 1 と 2 の覆土。焼土粒子を多く含む。炭化粒子を少し含む。

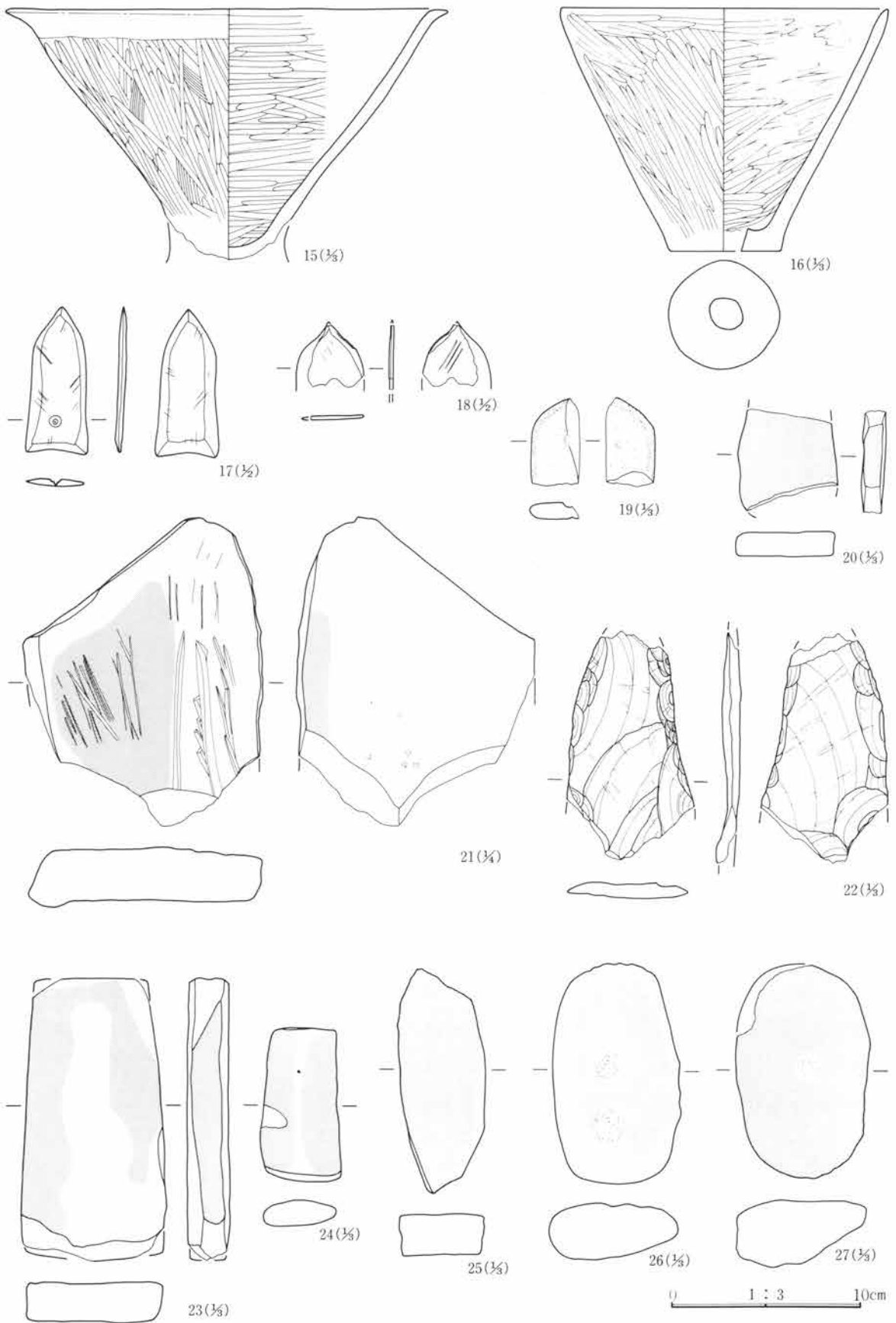


III 弥生時代の遺構と遺物



第43図 日A 5号住居出土遺物(2)

2. 竖穴式住居



第44图 日A5号住居出土遺物(3)

III 弥生時代の遺構と遺物

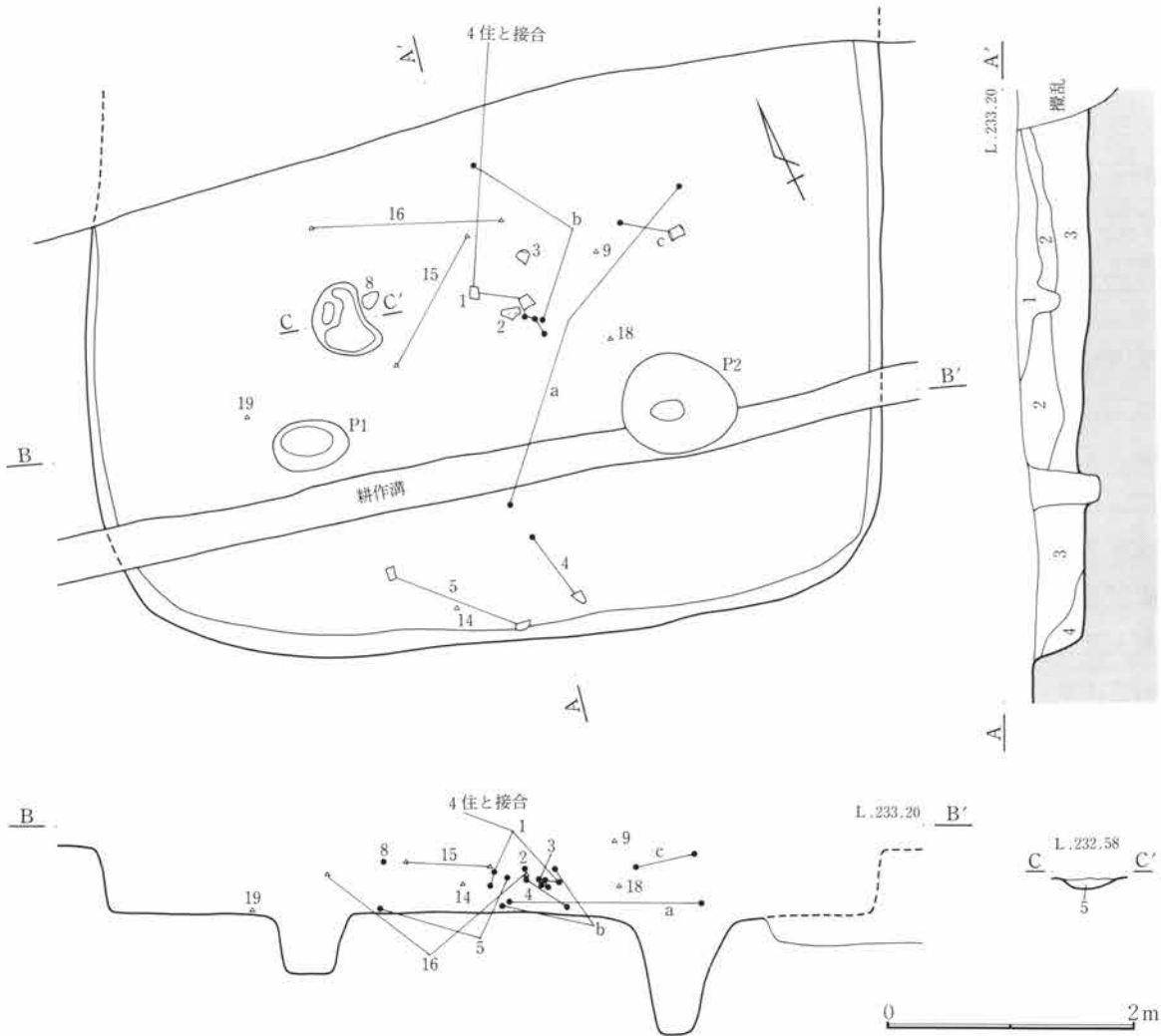
内匠日影周地遺跡A区8号住居

位置 D38V40他 写真 PL21・30・32  
 形状 北半分を現代の農道によって削平されるが、隅丸長方形を呈する可能性が高い。  
 長軸 不明 短軸 6.3m 長短比 不明  
 面積 不明 方位 N-12°-E  
 床面 ロームを44~55cm掘り込んで床面としている。全体に堅固で良く踏み固められている。  
 埋没土 覆土中~下層はローム質の土壤。

炉 P1の北側中央寄りで検出した。8cmの掘り込みをもち、灰は炉の北側にも分布している。削平された北側に炉が1基あった可能性が高い。

柱穴 2本を検出した。主柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(60×40)×49cm、P2:(90×80)×95cm、であり楕円形であった。

遺物 出土位置が確認できる樽式土器は65点、石器類は23点出土した。他の住居との接合例は1例確認できた。1は4号住居の覆土中~下層から出土した4点と接合関係をもつ。本住居内で接合関係をもつ土器の大半は、覆土中層以上の出土であり下層出土の土器も覆土中層との接合関係がみられる(2・4)。このような事実から図示した土器は、本住居に帰属しない可能性が高い。住居内から出土した石器類のうち、図示しなかったものは2点で砥石の欠損



埋没土層 1. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。2. 暗褐色土 Y.P粒子と炭化粒子を多く含む。3. 黄褐色土 ローム質土壤。4. 褐色土 堅く締まる。Y.P粒子を少し含む。5. 暗褐色土 炉の覆土。炭化粒子を多く含む。

第45図 日A8号住居

2. 竪穴式住居

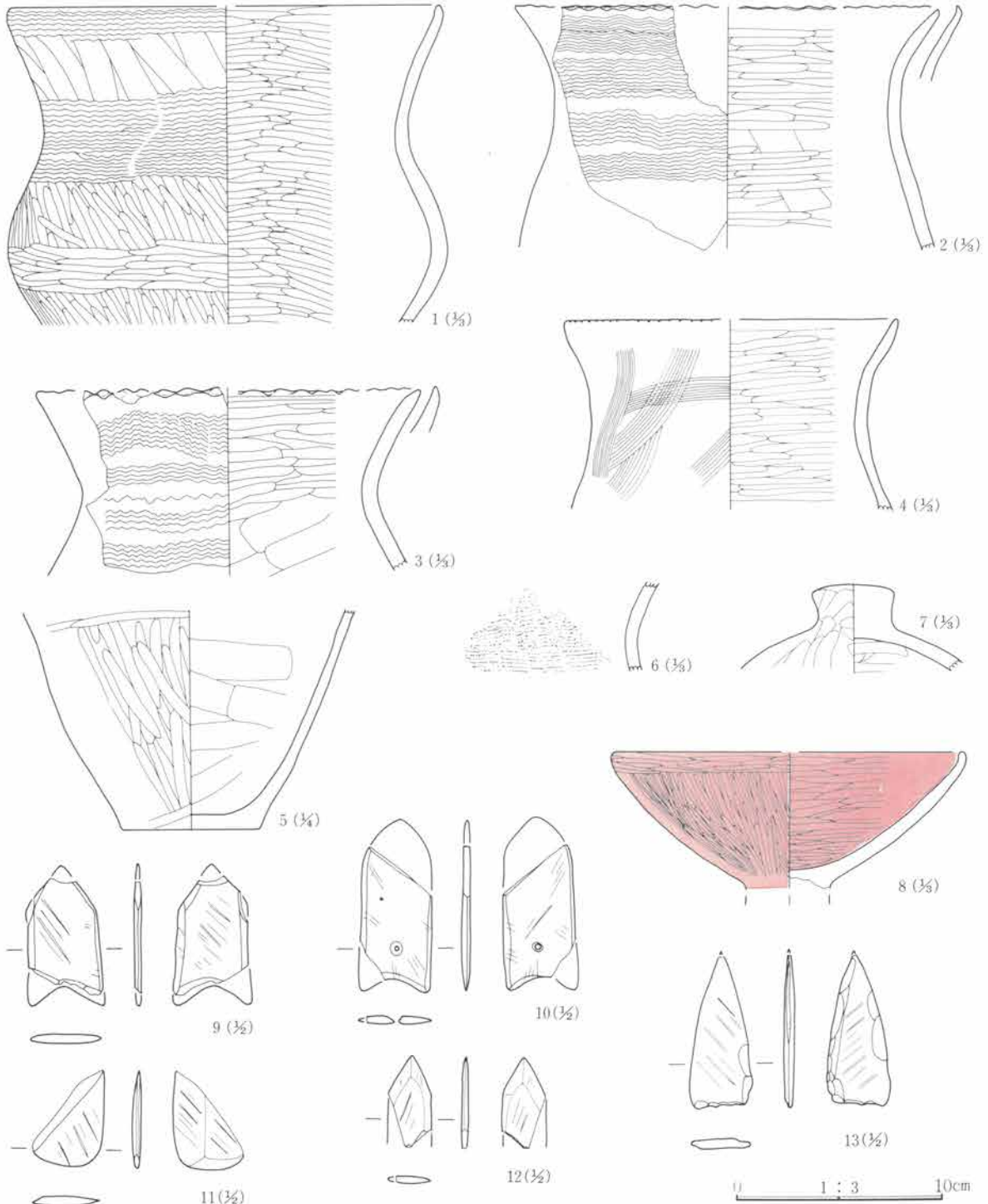
品である。2点の出土位置は床上30cmと31cmであった。床直上で出土した石器は14だけである。また、覆土中から磨製石鏃の原材料である結晶片岩はコア2点・フレイク1点・チップ6点、出土している。この中で、出土位置が確認できた3点は床上5cm・

35cm・49cmであった。また、磨製石鏃製作時の欠損品9は床上50cmの出土である。

(遺物観察表：102頁)

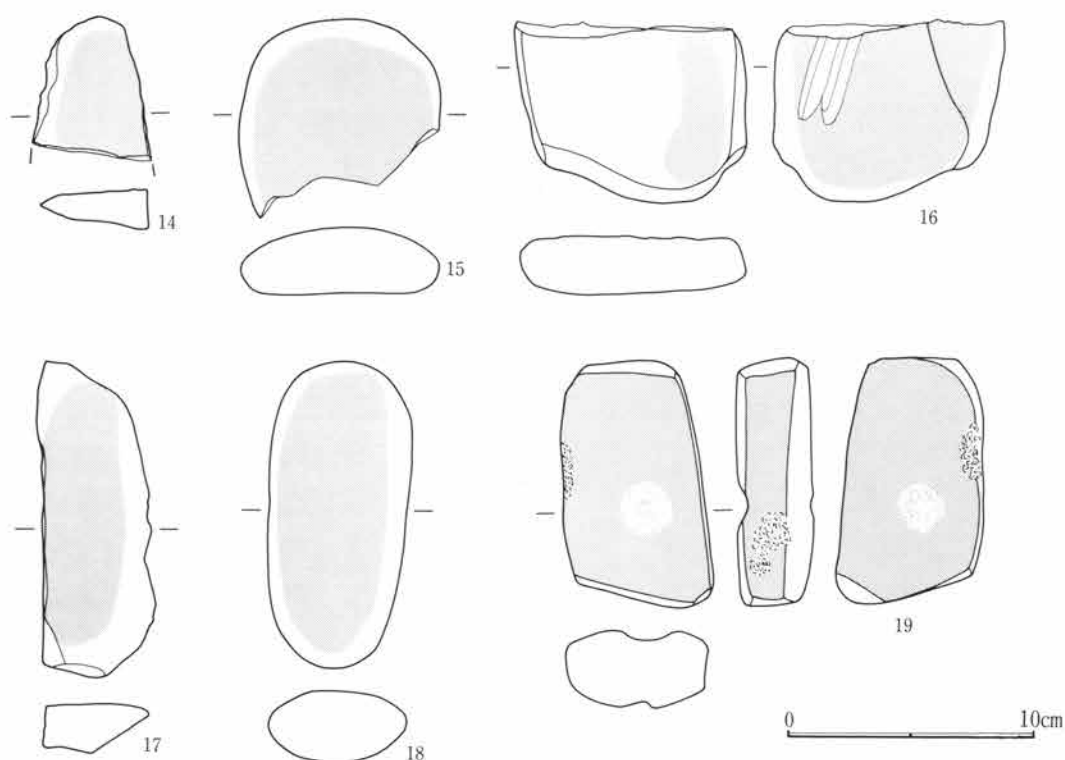
接合資料a～cは樽式土器。

備考 住居南側の一部が耕作溝に切られる。



第46図 日A 8号住居出土遺物(1)

III 弥生時代の遺構と遺物



第47図 日A 8号住居出土遺物(2)

内匠日影周地遺跡A区9号住居

位置 D38V43他

写真 PL21・32

形状 南西隅が不明であるが、隅丸長方形を呈する可能性が高い。

長軸 4.9m

短軸 4.0m

長短比 1:1.2

面積 17.5㎡

方位 N-5°-E

床面 地形が北から南に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを北側で最大31cm掘り込んで床面としている。全体に堅固で良く踏み固められており、中央部には貼床をするが、南西隅では床面が残存していなかった。

埋没土 暗褐色土が主体を占める。

炉 中軸線上で、支柱穴(P3とP4)線の外側にあり、炉石を据える形態であった。掘り込みは、最大9cmである。炉石は結晶片岩で上面を中心に被熱による変色とひび割れが観察できる。

底面は全体に焼土化していた。

床面の状態などから、炉がもう1基あった可能性は低い。

柱穴 支柱穴4本を検出した。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(32)×52cm、P2:(26)×33cm、P3:(28)×40cm、P4:(28)×41cm、であった。

遺物 出土した遺物は少なく、樽式土器4点と石器類6点であった。

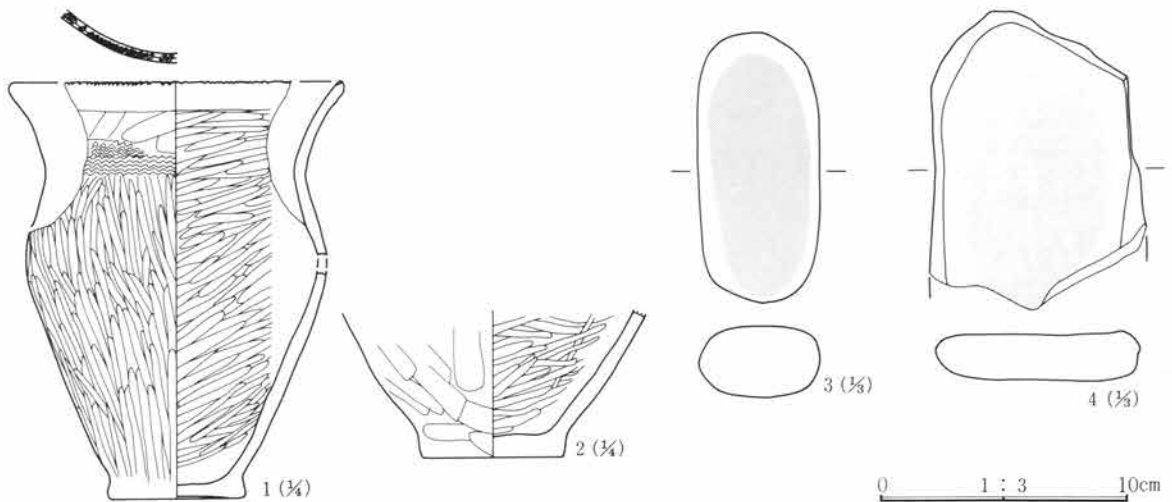
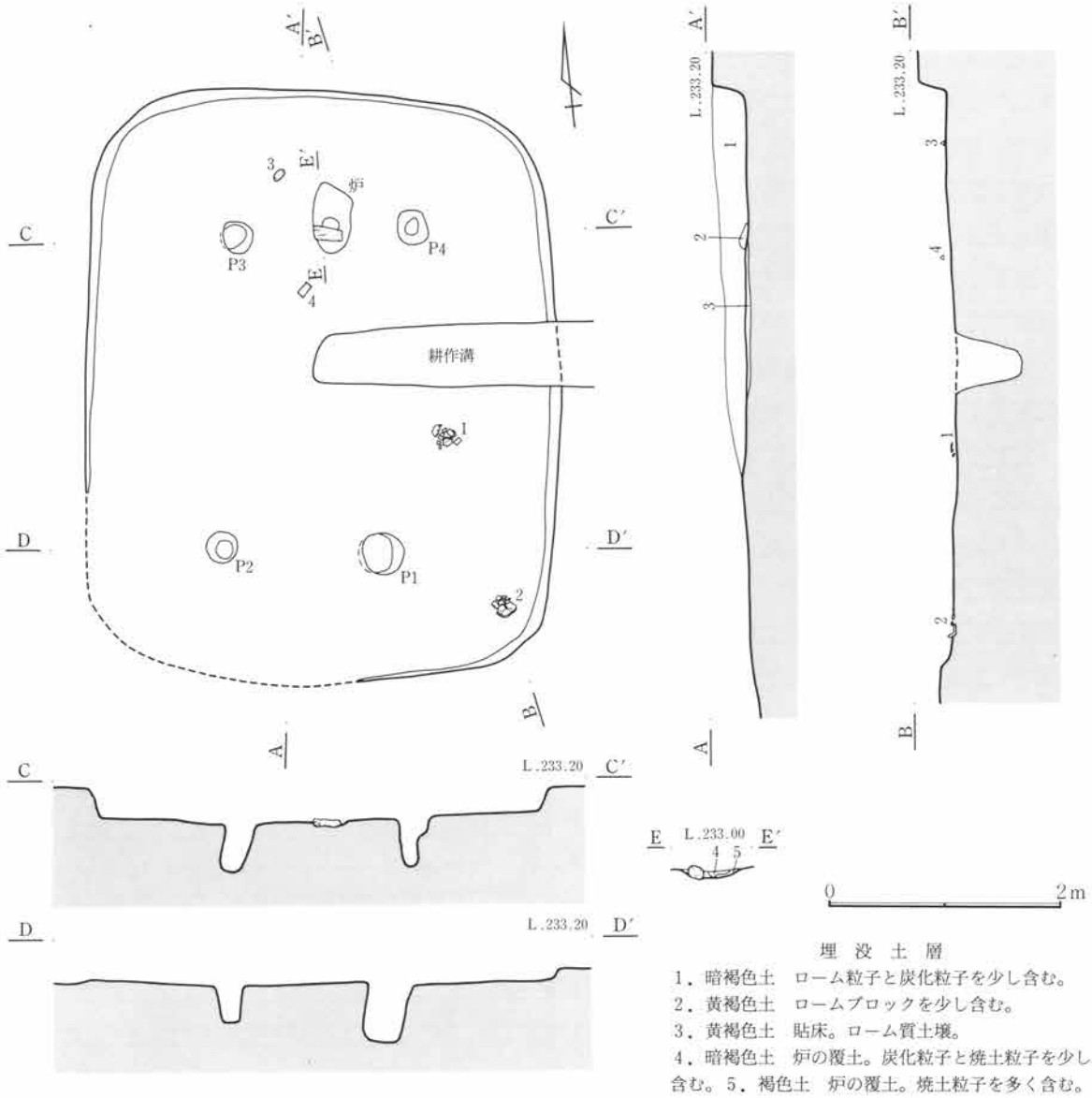
土器の中で1と2はほぼ床直上で出土した。この2点は、9号住居に帰属する可能性が高い。1は遺存状態が悪く実測図は図上復元である。図示しなかった他の土器は、高坏の体部片と甕の口縁部片でそれぞれ床上12cmと4cmであった。

石器類の中で、出土した石器は図示したものだけであった。また、図示しなかった石器類の中で砥石及び磨製石鏃にかかわる石は出土していない。

(遺物観察表:102・103頁)

備考 住居中央部が耕作溝によって切られる。

2. 竪穴式住居



第48図 日A9号住居と出土遺物

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区10号住居

位置 D43V64他 写真 PL22・32・33

形状 隅丸長方形を呈すると思われる。

長軸 不明 短軸 6.7m 長短比 不明

面積 不明 方位 N-10°-W

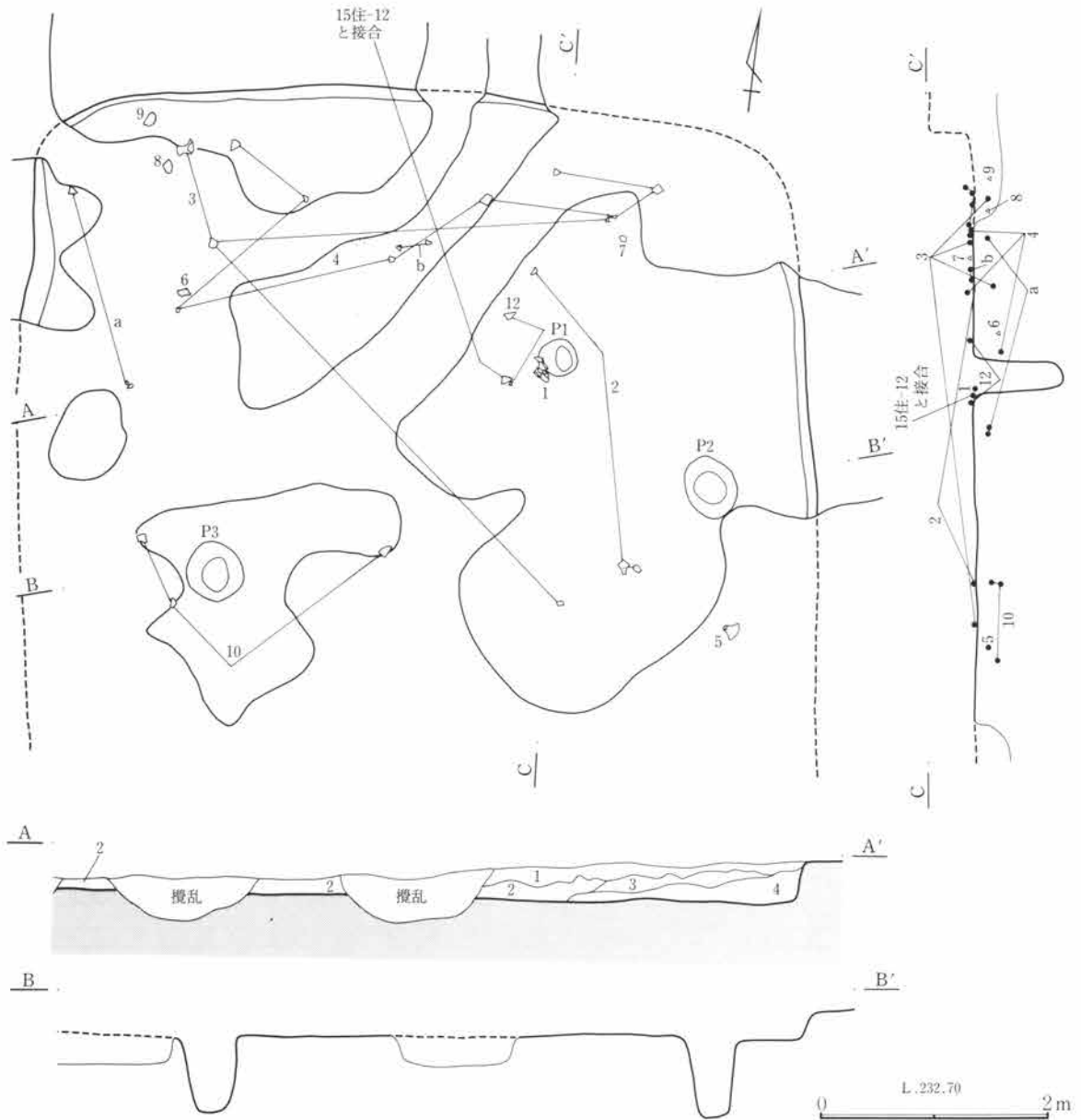
床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを北側で最大40cm掘り込んで床面としている。南側の大半を消失し、小動物に起因する攪乱

により床面もかなり破壊されているが、残存する床面は堅固であった。

埋没土 2層はローム質の土壤。

炉 北側で中軸線西寄りの地点に焼土が検出されたことから、炉の可能性はある。

柱穴 3本の柱穴が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(34)×75cm、P2：(54×44)×63cm、P3：(50)×42cm、であった。



埋没土層

- 1. 暗褐色土 B.P粒子と炭化粒子と白色の細粒を多く含む。
- 2. 黄褐色土 ローム質土壤。B.P粒子と白色の細粒を少し含む。
- 3. オリーブ褐色土 ローム粒子と白色の細粒を少し含む。
- 4. 褐色土 ローム粒子と炭化粒子を少し含む。

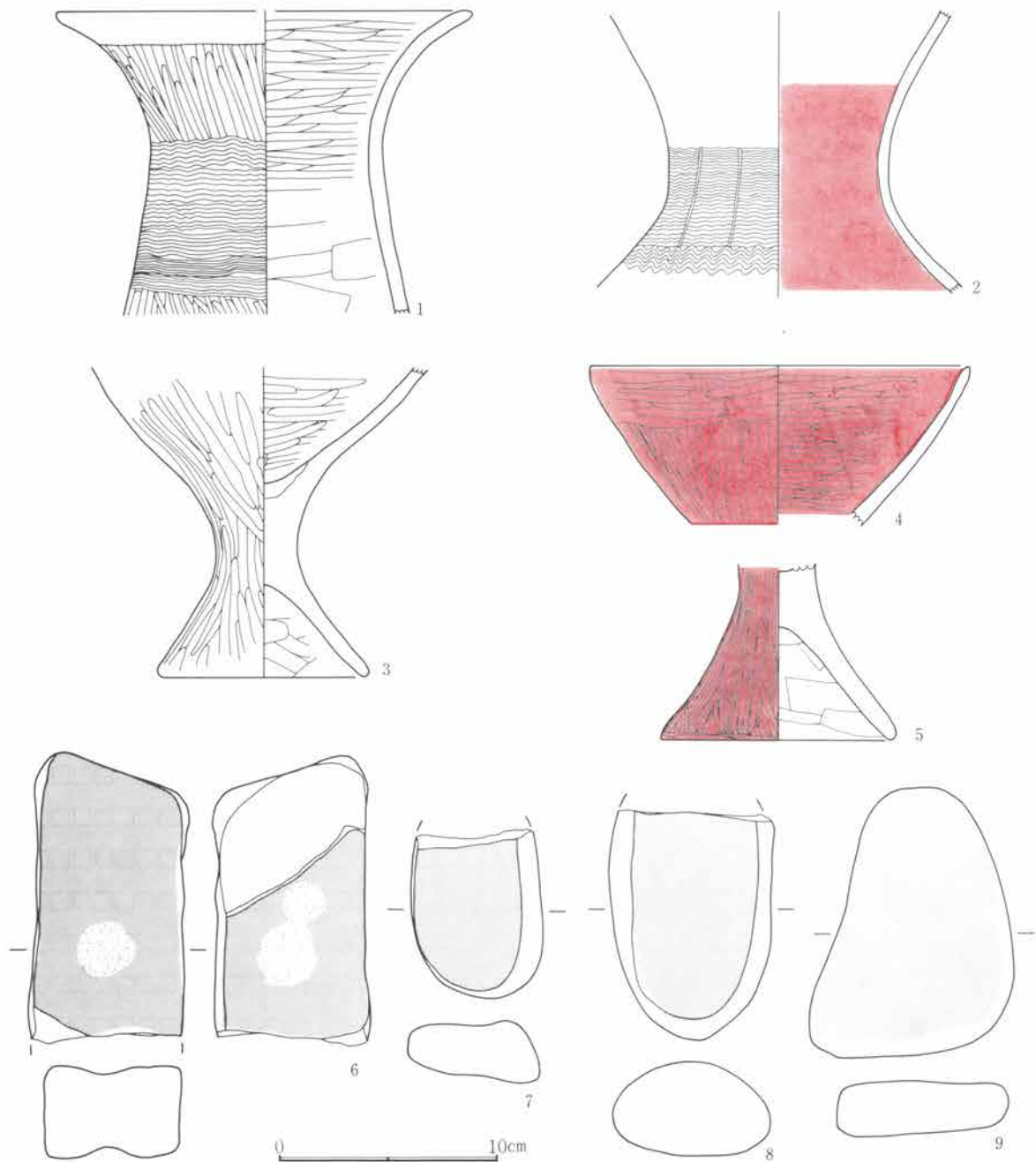
第49図 日A10号住居



## 2. 竪穴式住居

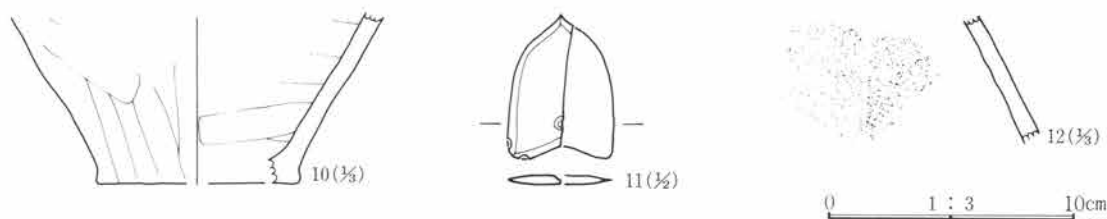
遺物 住居内から樽式土器274点と石器類68点が出土したが、土器167点と石器類27点は一括して取り上げた。他の住居との接合例は1例あり、10号住居床上出土の土器が15号住居12と接合している（第54・215図参照）。住居内出土土器の接合関係は床面上を中心に広範な接合を示すが、図化しなかった土器も含めた土器の出土状態は、覆土中～下層に多く出土する傾向がうかがえた。石器類の中で出土した

石器は、図化したもの以外に1点磨製石鏃の製作時の欠損品がある。この遺物は北西隅の攪乱を受けていない地点から出土し、床上24cmであった。磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイク・チップは12点出土し、出土位置が確認できた4点はそれぞれ床上4cm・16cm・17cm・20cmであった。接合資料aとbは樽式土器である。（遺物観察表：103頁）



第50図 日A10号住居出土遺物（1）

III 弥生時代の遺構と遺物



第51図 日A10号住居出土遺物(2)

内匠日影周地遺跡A区12号住居

位置 D38V83他 写真 PL22・33

形状 隅丸長方形

長軸 3.9m 短軸 3.2m 長短比 1:1.2

面積 10.1m<sup>2</sup> 方位 N-10°-W

床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを36~50cm掘り込んで床面としている。

全体に堅固で良く踏み固められていた。

埋没土 2層はローム質の土壤。

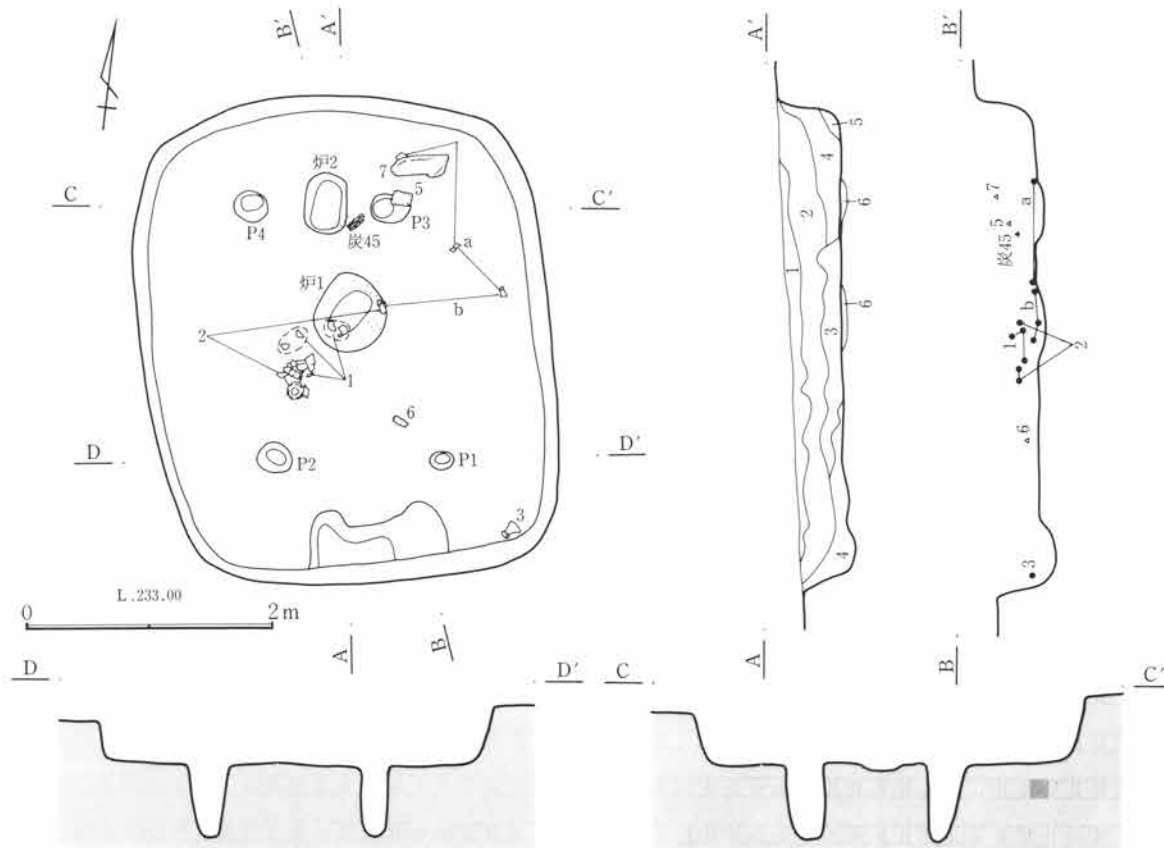
炉 2基検出した。炉1は住居のほぼ中央に位置

する。6cmの浅い掘り込みをもつ。今回調査した弥生時代後期の住居で、この位置で確認されたのはこの1基だけである。

炉2は、中軸線と支柱穴(P3とP4)線の交わる地点に位置し、5cmの浅い掘り込みをもつ。

2基の炉は底面が部分的に焼土化し、炉石はなかった。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(18)×56cm、P2:(28)×62cm、P3:(30)×65cm、P4:(30)×60cm、で



埋没土層 1. 褐色土 白色の細粒と炭化粒子を多く含む。2. 褐色土 1層に似るがローム粒子を含む。3. 黒褐色土 炭化粒子と白色の細粒と焼土粒子を多く含む。4. 暗褐色土 2層に似るが、混入する炭化物が多い。5. 褐色土 ロームブロックを含む。壁の崩落土。6. 黒色土 炉1と2の覆土。炭化粒子と焼土粒子を多く含む。

第52図 日A12号住居

2. 竪穴式住居

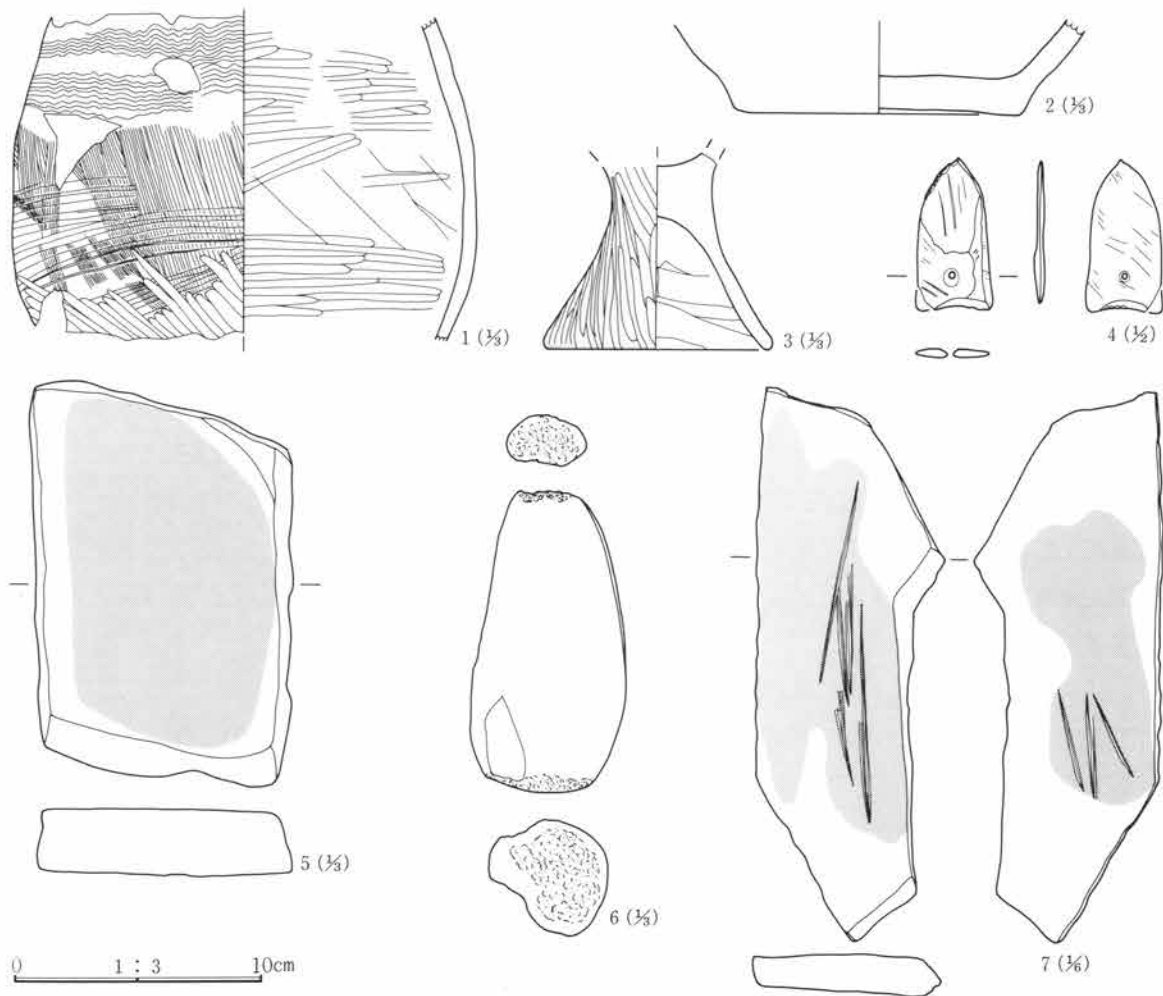
あった。

**遺物** 住居内から樽式土器140点と石器類24点が出土したが、土器107点と石器類13点は一括して取り上げた。また、炭化材(炭45)が1点のみ出土した(付篇1参照)。土器の中で、床面上で図化できたものは3のみであった。他の土器の大半は、石器類と同様に覆土上～中層の出土がほとんどである。磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイクは1点出土

したが、出土位置は不明である。また、変形工字文をもつ土器片が1点覆土から出土した(第67図1)。

(遺物観察表：103・104頁)

**備考** 住居南壁下で、出入口施設にかかわる可能性がある浅い落ち込みが検出された。落ち込みの深さは床面から2～6cmである。



第53図 日A12号住居出土遺物

内匠日影周地遺跡A区15号住居

**位置** D37V61他 **写真** PL23・33

**形状** 隅丸長方形

**長軸** 3.9m **短軸** 3.0m **長短比** 1:1.3

**面積** 10.0m<sup>2</sup> **方位** N-1°-E

**床面** 地形が北から南に緩やかに傾斜している場

所に立地し、ロームを2～22cm掘り込んで床面としている。堅固で良く踏み固められている。

**埋没土** 暗褐色土が主体を占める。

**炉** 2基検出した。炉1は中軸線と支柱穴(P2とP3)線の交わる地点に位置し、5cmの浅い掘り込みをもつ。炉2はP4の南西に位置し6cmの浅い

III 弥生時代の遺構と遺物

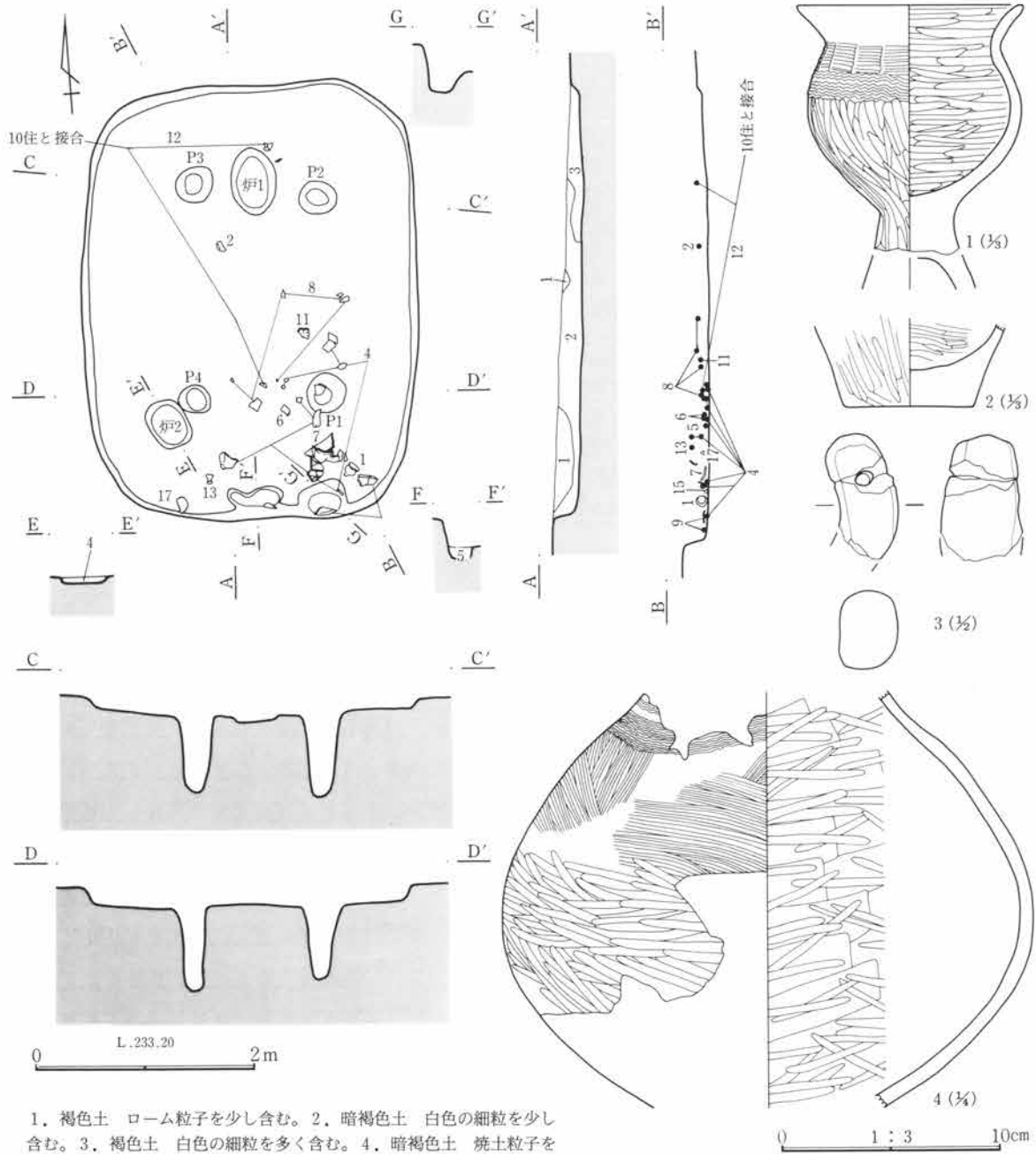
掘り込みをもつ。

**柱 穴** 4本が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(36)×64cm、P2：(33)×74cm、P3：(32)×66cm、P4：(26)×73cm、であった。

**遺 物** 住居内から樽式土器166点と石器類48点が出土したが、土器93点と石器類27点は一括して取り上げた。12は10号住居の土器と接合関係をもつ。石器類の中で出土した石器は図示したものだけであ

る。また磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイク・チップ類は29点出土し、出土位置が確認できた7点はそれぞれ床上2cm・3cm・5cm・6cm・7cm・8cm・15cmであった。(遺物観察表：104・105頁)

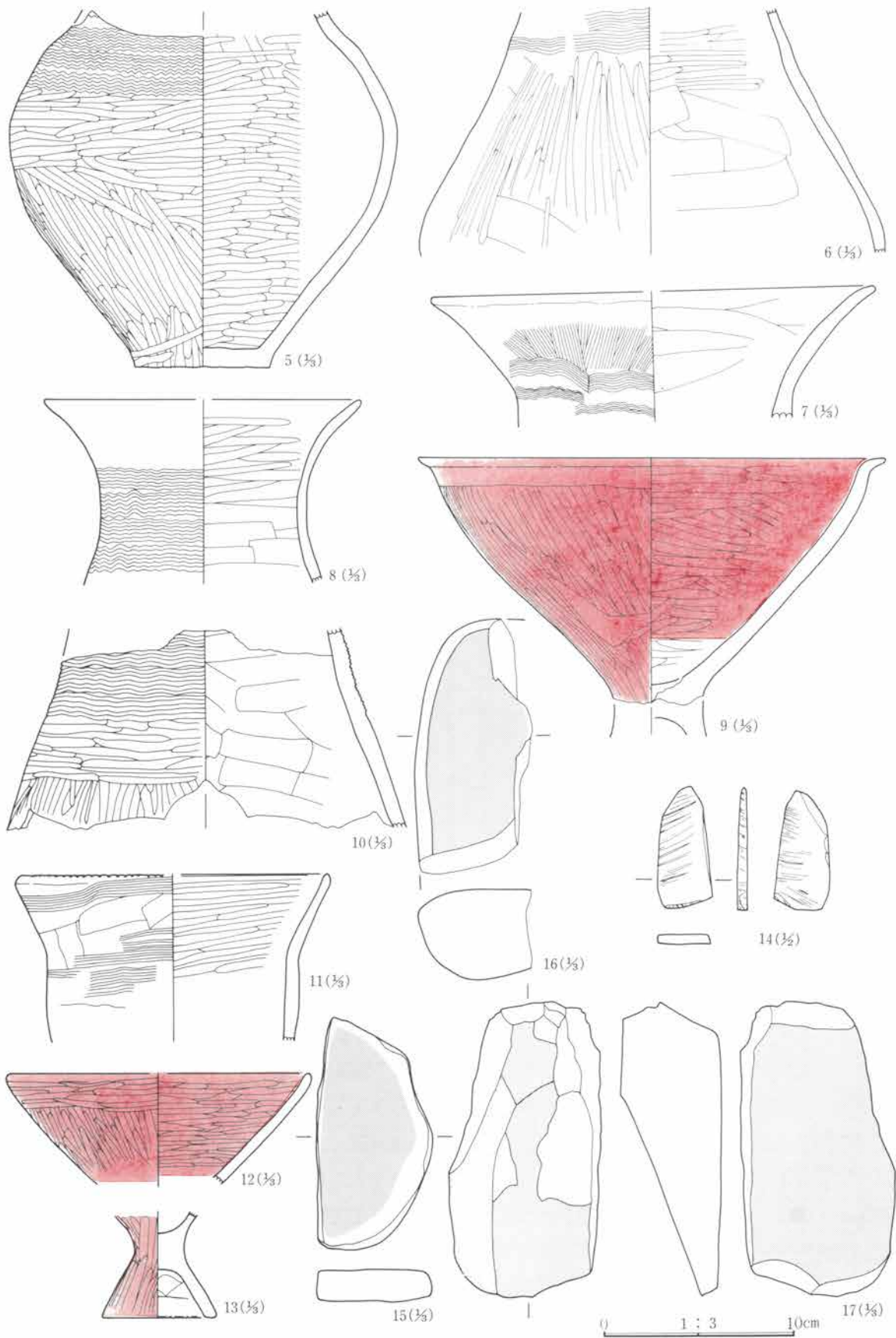
**備 考** 住居南壁下で、貯蔵穴と出入口施設にかかわる可能性がある落ち込みが検出された。それぞれ床面からの深さは、22cmと8cmである。



1. 褐色土 ローム粒子を少し含む。2. 暗褐色土 白色の細粒を少し含む。3. 褐色土 白色の細粒を多く含む。4. 暗褐色土 焼土粒子を少し含む。5. 暗褐色土 B.P粒子を少し含む。出入施設の覆土。

第54図 日A15号住居と出土遺物

2. 竖穴式住居



第 55 图 日A 15号住居出土遺物

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区16号住居

位置 D36V66他 写真 PL23・24・34

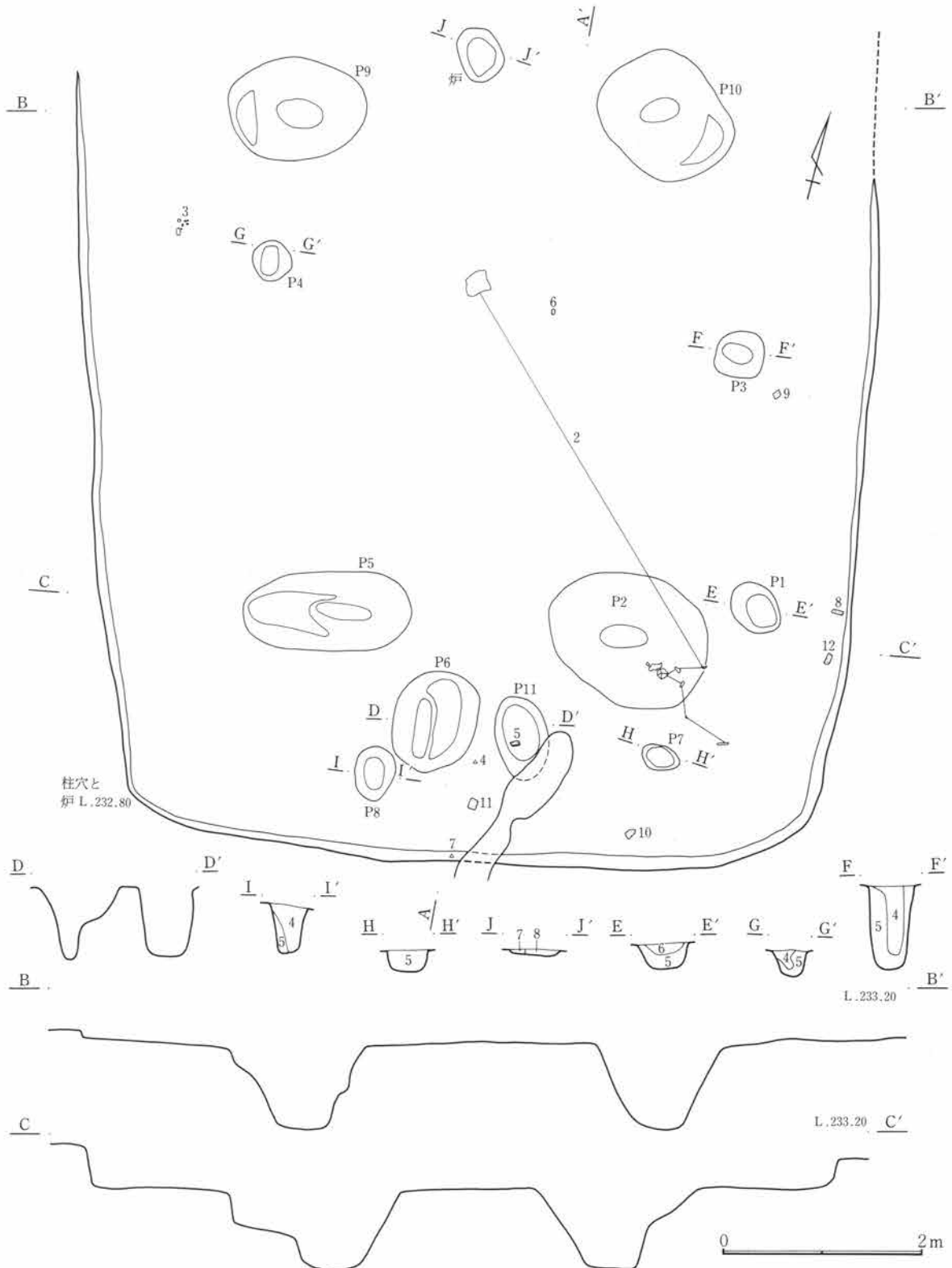
形状 隅丸長方形を呈すると思われる。

短軸 7.7m 方位 N-2°-W

床面 残存部の北側1/3と南壁の小動物の攪乱以外は堅固で良く踏み固められているが凹凸がある。

埋没土 2層と3層は、ローム質の土壌。

炉 床面は消失していたが、中軸線上で支柱穴(P



第56図 日A16号住居と出土遺物

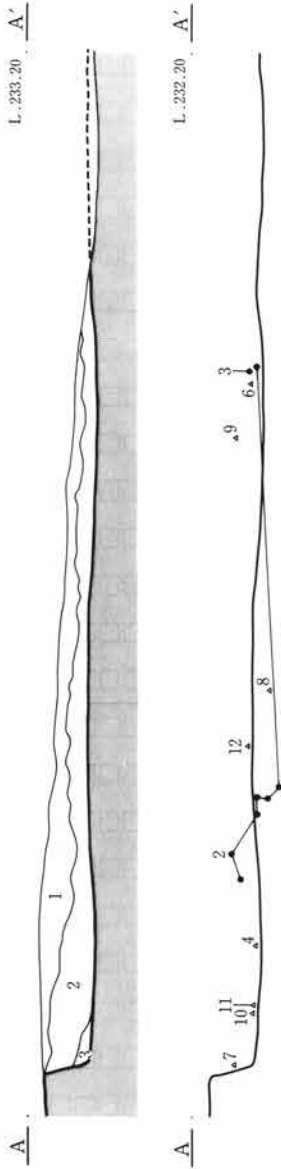
2. 竪穴式住居

9とP10)の外側で1基確認できた。

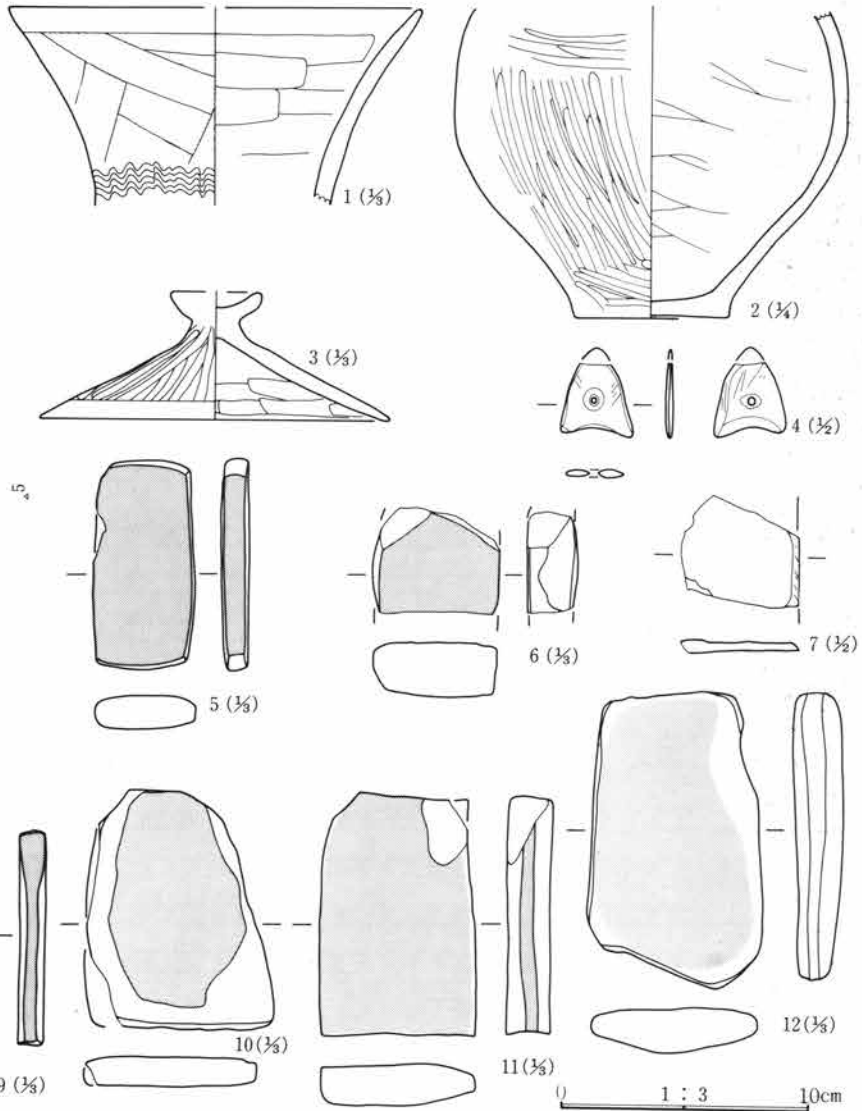
柱 穴 11本の柱穴が検出された。各柱穴の規模  
《(径)×深さ》は、P 1 : (56×42)×29cm、P 2 :

(164×130)×78cm、P 3 : (48)×85cm、P 4 :  
(40)×53cm、P 5 : (166×78)×80cm、P 6 : (100×  
70)×70cm、P 7 : (40×24)×26cm、P 8 : (53×  
40)×55cm、P 9 : (136×100)×81cm、P10 : (140×  
122)×81cm、P11 : (82×50)×66cm、であった。P  
2・P 5・P 9・P10が主柱穴で楕円形を呈する。

遺 物 樽式土器110点と石器類38点を出土したが、  
土器の70点と石器類の20点は一括して取り上げた。  
石器類の中で出土した石器は図化したものだけであ  
る。磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイク等  
は17点出土したが、出土位置が確認できた8点はそ  
れぞれ床上0cm・1cm・4cm・6cm・7cm・8cm・  
10cm・33cmであった。(遺物観察表:105頁)



- 埋 没 土 層
1. 黒褐色土 白色の細粒を少し含む。
  2. 褐色土 B. P粒子を少し含む。
  3. 褐色土 ローム質土壌。白色の細粒を多く含む。
  4. 褐色土 柱穴の覆土。炭化粒子を少し含む。
  5. 褐色土 柱穴の覆土。ローム質土壌。
  6. 暗褐色土 柱穴の覆土。白色の細粒を少し含む。
  7. 黒褐色土 炉の覆土。締まりが弱い。
  8. 黄橙色土 炉の覆土。焼土粒子を多く含む。



III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区17号住居

位置 D33V86他 写真 PL24・34

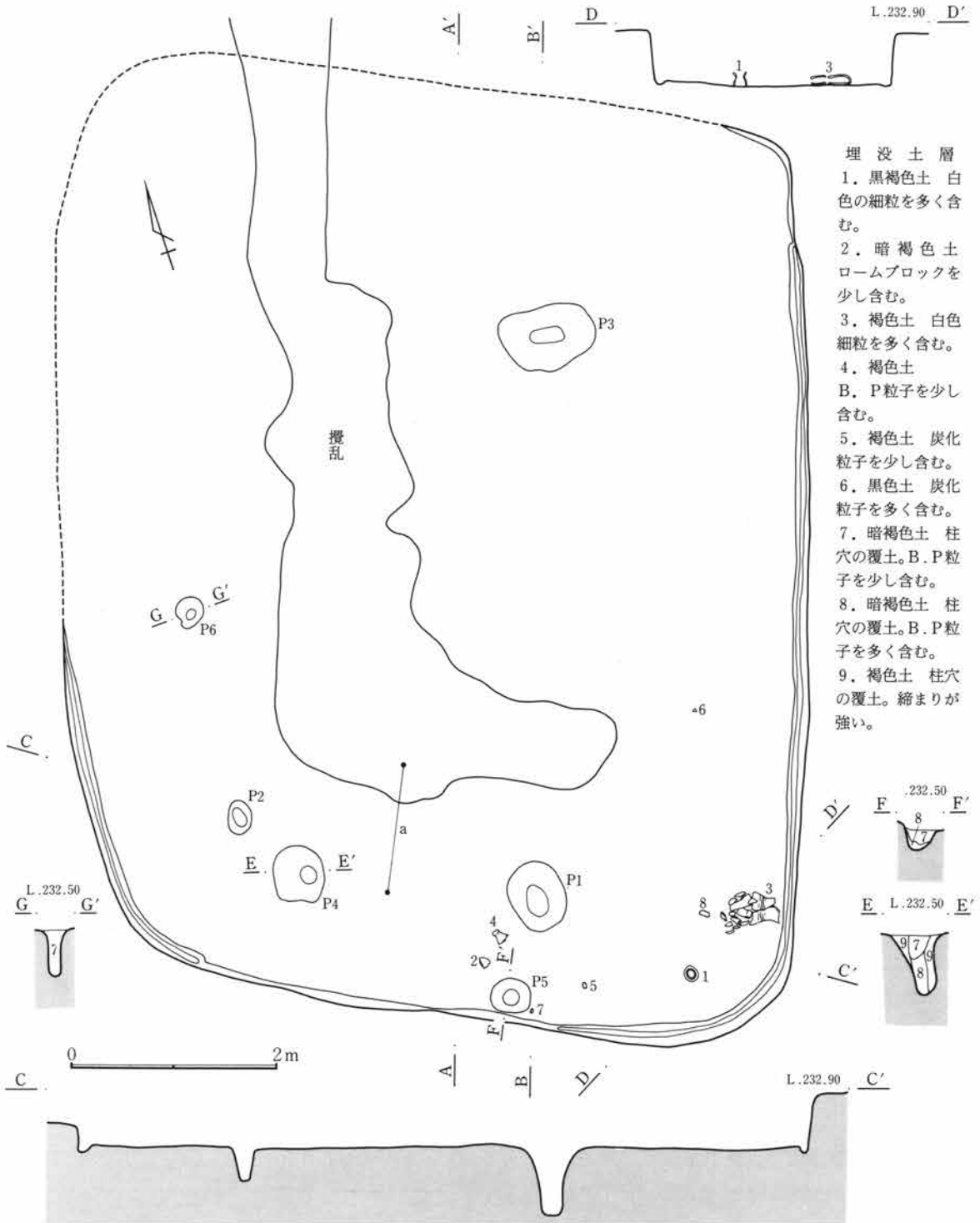
形状 北西部分を消失し、中央に小動物の攪乱をうけるが、隅丸平行4辺形を呈すると思われる。

長軸 8.6m 短軸 7.1m 長短比 1:1.2

面積 59.5m<sup>2</sup>(推定) 方位 N-9°-E

床面 ロームを最大48cm掘り込んで床面とし、残存部分の床面は堅固であった。

埋没土 住居南東隅に厚さ26cmの焼土ブロックを多量に含む土層が堆積していた。



第57図 日A17号住居と出土遺物



2. 竪穴式住居

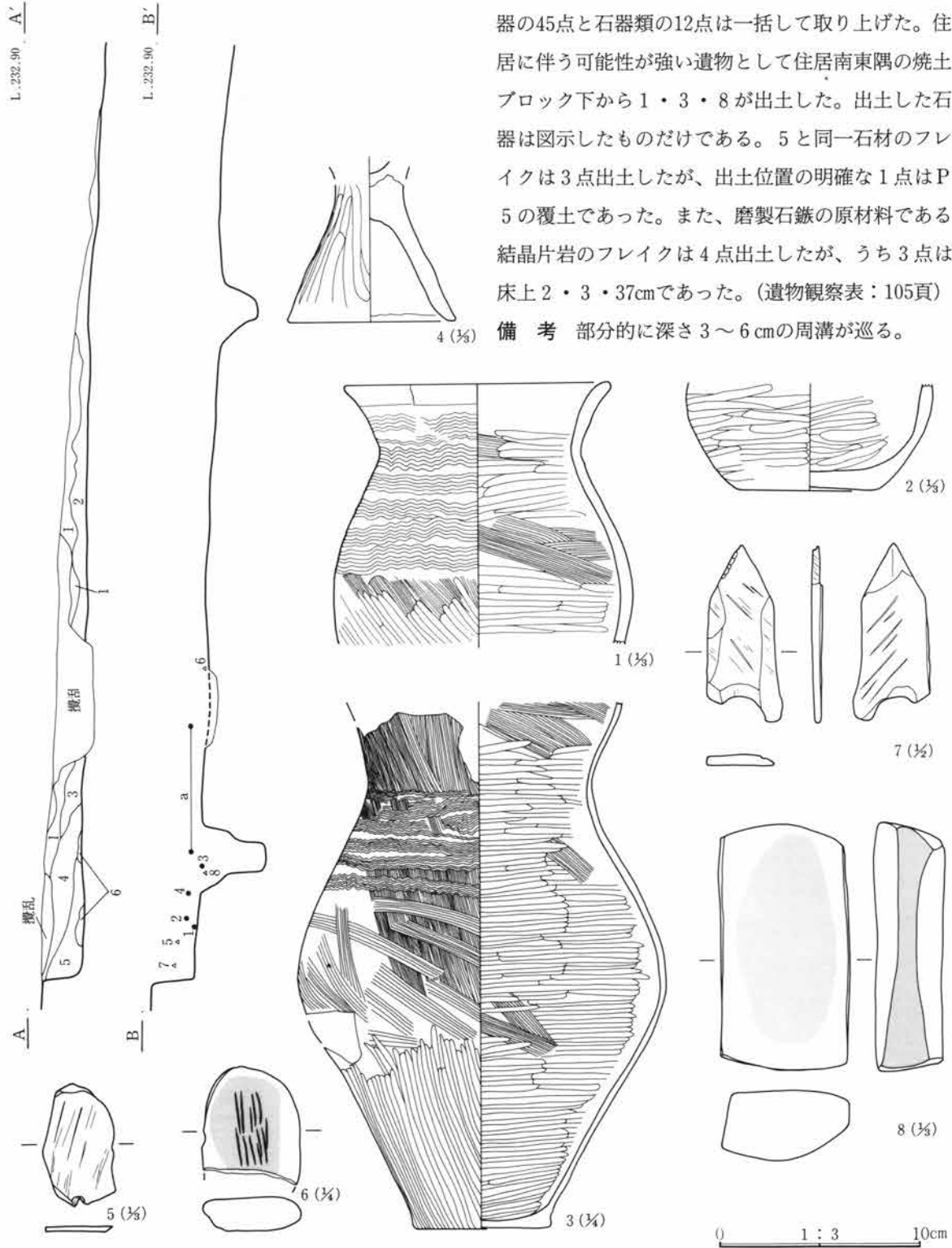
炉 痕跡も含め検出できなかった。床面消失部分に炉があった可能性が強い。

柱 穴 6本検出した。各柱穴の規模《(径)×深さ

》は、P 1 : (64×51)×64cm、P 2 : (24)×29cm、P 3 : (90×60)×85cm、P 4 : (48)×55cm、P 5 : (37)×21cm、P 6 : (28)×41cm、であった。

遺 物 樽式土器76点と石器類25点を出土したが土器の45点と石器類の12点は一括して取り上げた。住居に伴う可能性が強い遺物として住居南東隅の焼土ブロック下から1・3・8が出土した。出土した石器は図示したものだけである。5と同一石材のフレイクは3点出土したが、出土位置の明確な1点はP 5の覆土であった。また、磨製石鏃の原材料である結晶片岩のフレイクは4点出土したが、うち3点は床上2・3・37cmであった。(遺物観察表:105頁)

備 考 部分的に深さ3~6cmの周溝が巡る。



III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区18号住居

位置 D39V21他 写真 PL24・34

形状 耕作溝と7号住居によって切られているが隅丸長方形を呈すると思われる。

長軸 4.6m 短軸 3.7m 長短比 1:1.2

面積 16.2m<sup>2</sup>(推定) 方位 N-43°-E

床面 ロームを10~24cm掘り込んで床面としている。残存部分の床面は堅固であった。

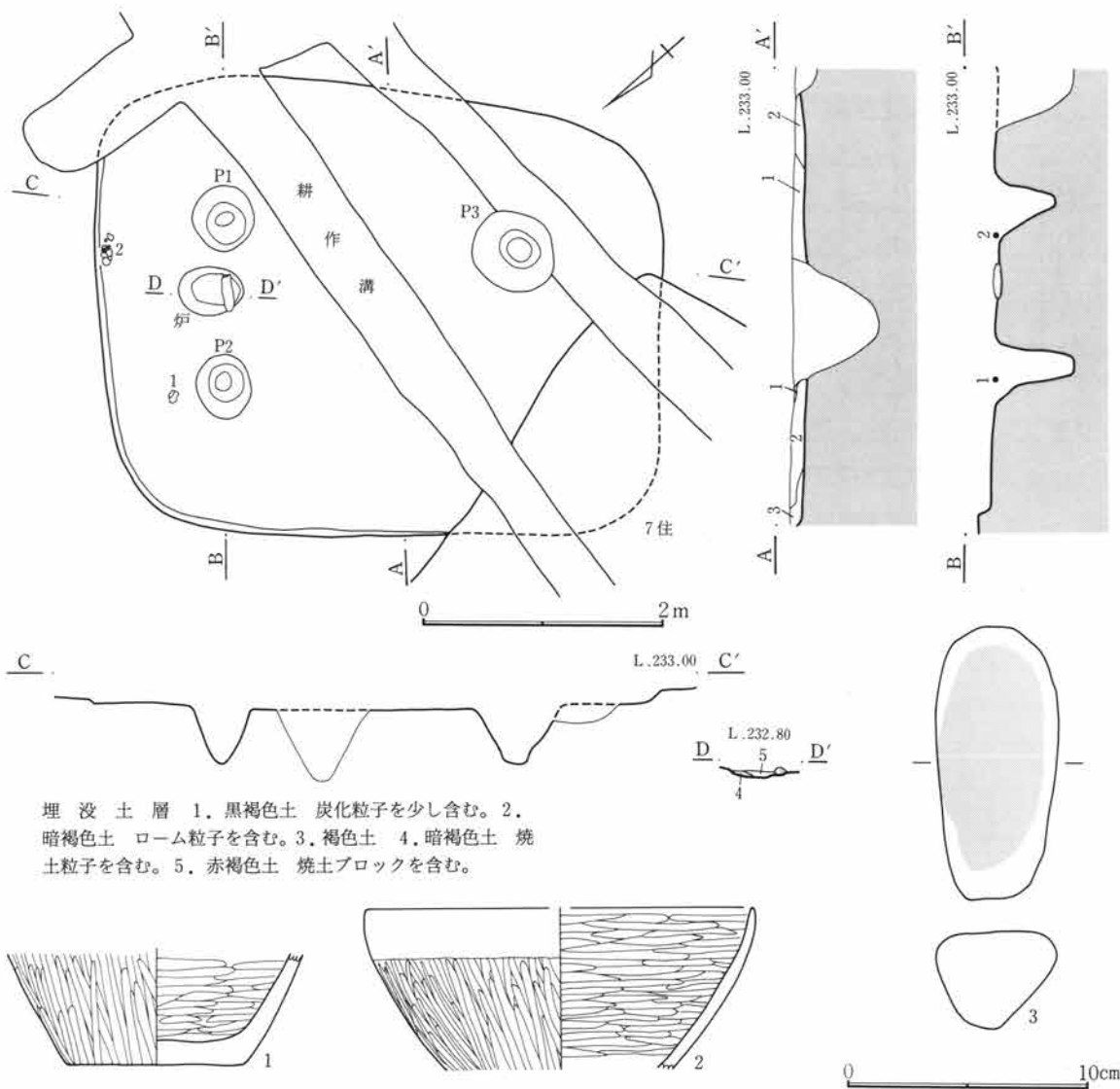
埋没土 3層とした褐色土はローム質の土壌であった。

炉 中軸線東寄りで支柱穴(P1とP2)線のやや外側で検出した。炉石を据える形態で8cmの掘り

込みをもつ。もう1基炉があったかは不明である。

柱穴 3本の支柱穴を検出した。柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(50)×47cm、P2:(44)×65cm、P3:(68)×42cm、であった。もう1本の支柱穴は7号住居と溝によって壊された可能性が高い。

遺物 住居内から出土した遺物は少なく、樽式土器7点と石器類14点が出土した。土器の中で5点と石器類1点は一括して取り上げた。1と2はほぼ床直上であった。石器類の中で石器は図示した3のみであった。また、磨製石鏃の原材料である結晶片岩は出土しなかった。(遺物観察表:106頁)



第58図 日A18号住居と出土遺物

2. 竪穴式住居

内匠日影周地遺跡B区2号住居

位置 C87VI25他 写真 PL25・34・35

形状 隅丸方形に近い台形

長軸 4.8m 短軸 3.6~4.0m

長短比 1:1.2~1.3 面積 16.6㎡

方位 N-116°-W

床面 ロームを50~77cm掘り込んで床面としている。貼床をし、堅固で良く踏み固められている。

埋没土 黒褐色土が主体を占める。

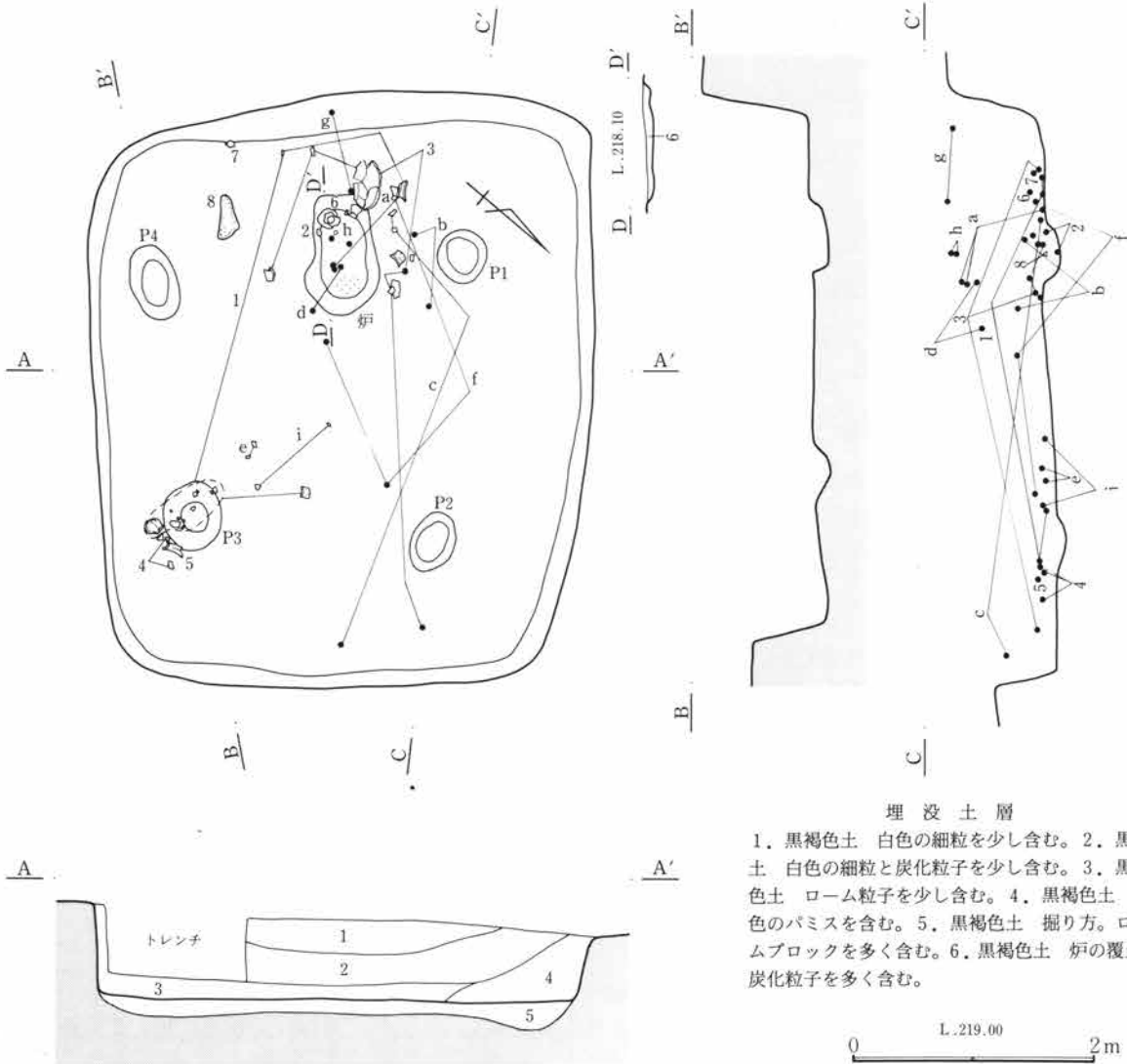
炉 掘り込み7cmの炉が中軸線北寄りで支柱穴(P1とP4)の間に検出された。

柱穴 4本の支柱穴が検出されたが、深さが浅

い。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(45)×12cm、P2:(50×35)×7cm、P3:(50)×11cm、P4:(62×38)×17cm、であった。

遺物 土器が143点と石器類が26点出土した。土器は樽式土器及び、外来系土器にその系譜が求められるものが出土している。1と2は同一個体の可能性が強い。接合資料b・c・e・iは1と同一個体で、fは3と同一個体であった。また、gとhは奈良時代の須恵器の坏である。石器は1点のみ出土した(第67図)。(遺物観察表:106頁)

備考 弥生時代終末~古墳時代前期初頭の土器群

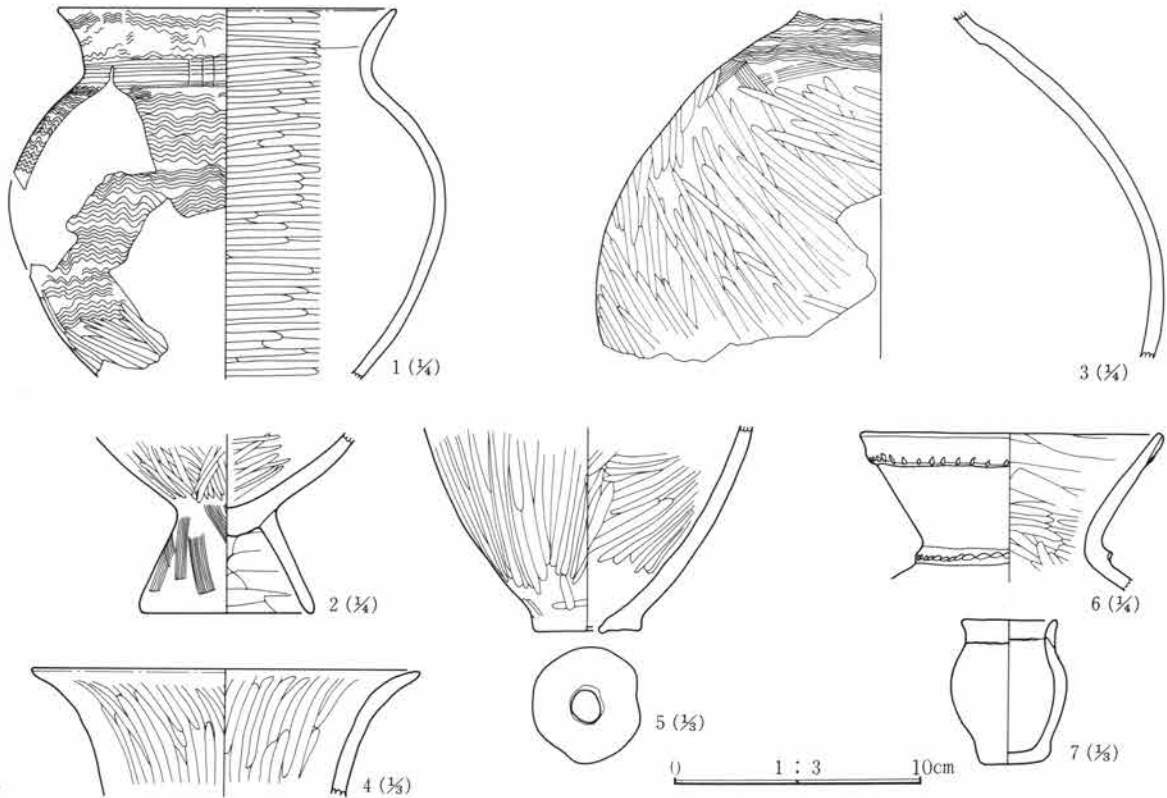


埋没土層

- 1. 黒褐色土 白色の細粒を少し含む。
- 2. 黒色土 白色の細粒と炭化粒子を少し含む。
- 3. 黒褐色土 ローム粒子を少し含む。
- 4. 黒褐色土 褐色のパミスを含む。
- 5. 黒褐色土 掘り方。ロームブロックを多く含む。
- 6. 黒褐色土 炉の覆土。炭化粒子を多く含む。

第59図 日B2号住居

III 弥生時代の遺構と遺物



第60図 日B2号住居出土遺物

内匠日影周地遺跡B区4号住居

位置 C77VI26他

写真 PL26・34・35

形状 隅丸長方形にちかい形状を呈する。

長軸 4.0m 短軸 3.3m 長短比 1:1.2

面積 9.2m<sup>2</sup> 方位 N-18°-W

床面 N-38°-Eの方向に地形が傾斜している場所に立地し、ロームを6~46cm掘り込んで床面としている。また、床面から壁への立ち上がりは緩やかである。地形に合わせるように床面も傾斜し、比高は30cm程度であった。床面はあまり締まらず、住居北西部は特に軟弱であったため一部掘りすぎってしまった。凹凸があり平坦な床面ではない。

埋没土 2層と3層はローム質の土壌。

炉 住居中央の北東寄りで検出した。炉の南側は住居より新しい攪乱(時期は不明)によって切られているが炉のほぼ全体は残存している。炉石を南に据える形態であり使用時に掘り込みはほとんどなかったと思われる。掘り方をもつ。焼土面は一部堅

く締まる。

柱穴 壁際を中心に14本検出された。各柱穴の規模は、P1:(32)×30cm、P2:(28)×38cm、P3:(30)×33cm、P4:(22)×8cm、P5:(23×19)×6cm、P6:(22)×5cm、P7:(22)×8cm、P8:(36)×17cm、P9:(32)×24cm、P10:(22)×38cm、P11:(20)×33cm、P12:(28)×35cm、P13:(26)×49cm、P14:(20)×35cm、であった。

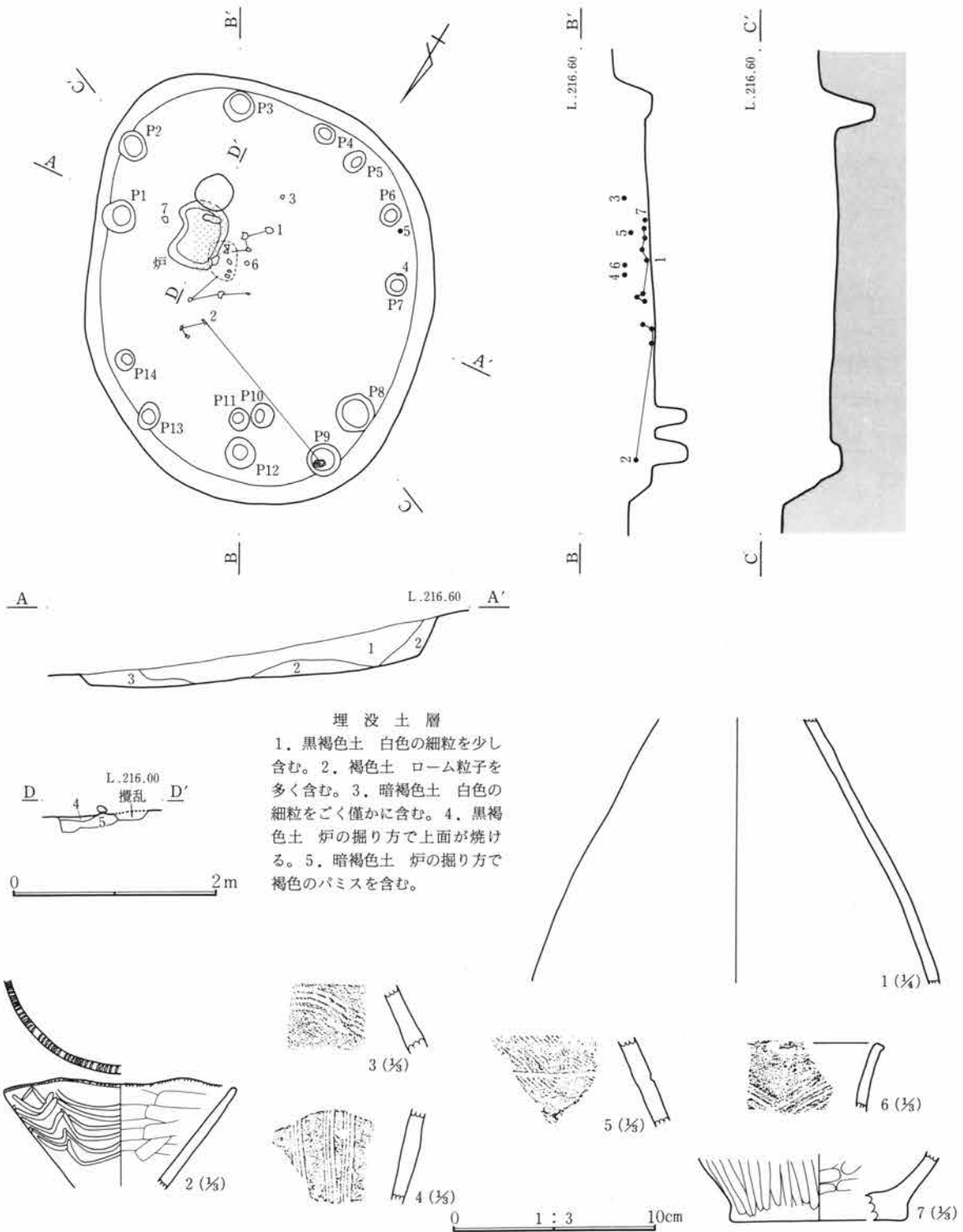
遺物 住居内から土器66点と石器類83点が出土した。

土器は覆土中~下層に多く出土し、弥生時代後期の土器は含まれてはいなかった。図化できるものが少なく、1と2の接合関係も広範である。

石器類のうち55点は、炉の南側の攪乱内から出土している。また石器はなく、熱変成岩のフレイクが多く出土した。

(遺物観察表:106・107頁)

備考 弥生時代中期の竪穴式住居。



第 61 図 日 B 4 号住居と出土遺物

内匠日影周地遺跡B区8号住居  
 位置 C71V70他 写真 PL26・35  
 形状 南半分を後世(時期不明)の削平によって消失するが、隅丸長方形を呈すると思われる。

短軸 5.5m 方位 N-10°-W  
 床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを南側で84cm掘り込んで床面としている。壁の立ち上がりは明瞭であったが、床面はあまり締

III 弥生時代の遺構と遺物

まっていなかった。

**埋没土** 覆土中～下層においては、炭化粒子の混入があった。

**炉と柱穴** 検出されなかった。

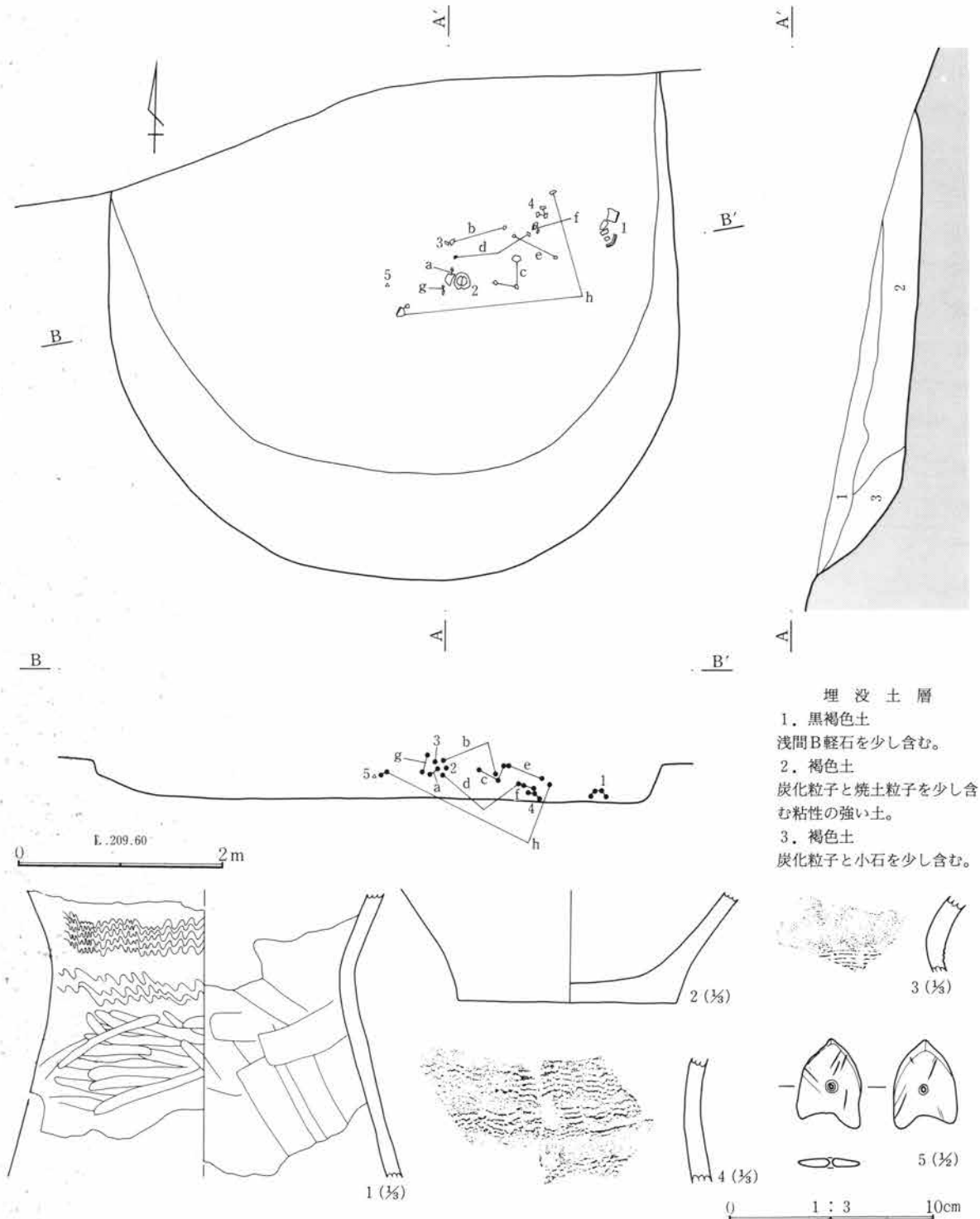
**遺物** 樽式土器が198点と石器類127点が出土した

が、大半は覆土中層出土であった。石器類の大半は礫で石器は図示した1点だけであった。

(遺物観察表：107頁)

**備考** 本遺構は炉と柱穴が検出されなかったこと

などから、竪穴状の遺構の可能性が強い。



第 62 図 日 B 8 号住居と出土遺物

### 3. 土坑

19基検出された。

内匠諏訪前遺跡では、A区で1基検出された。器形復元が可能な中期の土器が出土している。

日影周地遺跡では、16基検出された。器形復元が可能な土器を出土したのは7号・15号土坑だけであ

る。7号土坑は、樽式土器の壺が確認面から出土している。15号土坑は縄文時代終末～弥生時代にかけての土器群がまとまって出土した。他の土坑は、遺物の出土があまりなく、土器を出土しなかった土坑については、形状及び埋没土の状況等から弥生時代に帰属する可能性が強いと判断したものである。

(遺物観察表：107・108頁)

第3表 弥生時代土坑規模一覧

(単位：cm)

地区	番号	位置	規模(縦×横)×深さ	図	PL	特記事項
内匠諏訪前遺跡A区	64	C84III17	(187×142)×74	第63図	27・35	詳細は本文参照。弥生時代中期の土坑と思われる。1は胴部乏弱の遺存状態。
内匠日影周地遺跡A区	5	D46V17	(142×127)×91	第65図		出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	6	D46V23	(175×120)×76	第65図		出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	7	D50V15	(200×104)×62	第63図	27	確認面で、樽式の壺が出土した。埋没土中から、被熱したフレイク6点が出土する。時期不明。
内匠日影周地遺跡A区	9	D51V23	(?×110)×62	第65図	27	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	10	D51V24	(105)×49	第65図	27	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	11	D45V33	(95)×105	第65図	27	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	12	D44V35	(200)×100	第65図	27	21点の土器が出土したが、3点は古墳後期の土師器で、他は縄文時代終末～弥生時代の土器。出土した3点が、15号土坑の1と接合した。
内匠日影周地遺跡A区	13	D45V36	(151×119)×81	第65図		出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	14	D43V36	(100)×92	第65図	27	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	15	D41V35	(175×140)×88	第64図	28・35	詳細は本文参照。2次的に熱をうけた出土遺物が多かった。出土土器は埋没土上～中層から出土。12号土坑と接合関係をもつ。
内匠日影周地遺跡A区	16	D44V38	(154×112)×107	第65図	28	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	17	D45V42	(110)×91	第66図	28	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	20	D41V23	(145)×63	第66図	28	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡A区	21	D42V21	(140)×55	第63図	28・35	覆土上層から、江戸時代の陶器片1点と、土師器1点が出土した。石器は図示した1点のみの出土。
内匠日影周地遺跡A区	24	D85V51	(170)×29	第66図	28・35	図示した1点のみの出土である。他の日影A区の土坑と立地が異なっている。
内匠日影周地遺跡A区	25	D32V12	(190)×75	第66図	28	出土遺物はなく、時期は不明である。
内匠日影周地遺跡B区	5	C88VI20	(240×215)×29	第66図	29	15点の土器が出土。1点は、日B3住と接合関係をもつが、他の14点は図示した土器と同じ時期。
内匠日影周地遺跡B区	11	C85V80	(104×76)×28	第66図	29	底面が焼けており、図示した以外に須恵器3点が出土していることから、弥生時代でない可能性が強い。

### 4. 遺構外出土遺物

図 第67図 写真 PL35

遺構から出土しなかった土器は437点である。

この中には、明らかにその土器が出土した遺構に帰属しないと判断したものも含んでいる。また、分

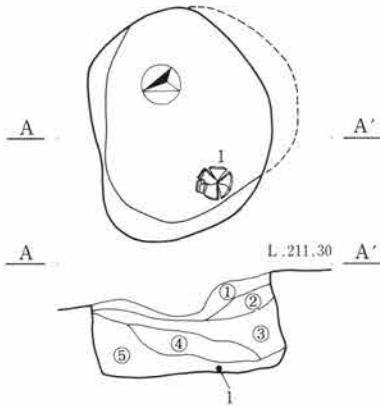
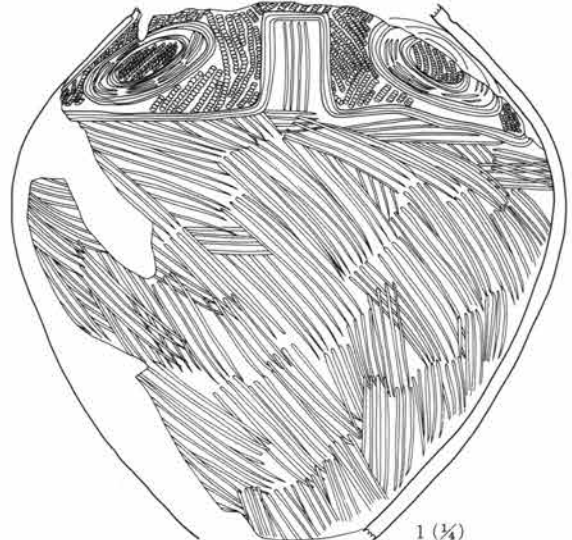
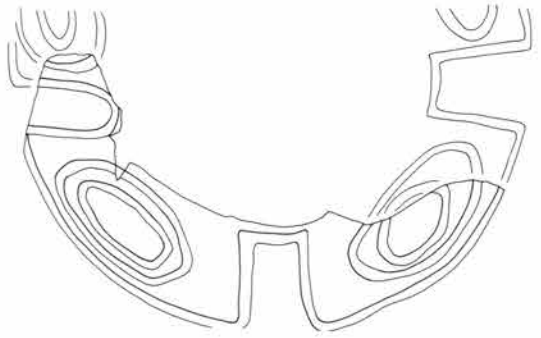
布の様相などについては、別項で述べる(第216～220図参照)。土器の時期は、縄文時代終末～弥生時代中期に含まれるものが239点で、大部分は弥生時代中期に含まれる。後期樽式土器は198点出土している。また、弥生時代と思われる石器は遺構外からは検出されていないが、磨製石鏃の原材料となる結晶片岩が数点出土した。(遺物観察表：108・109頁)

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡A区64号土坑

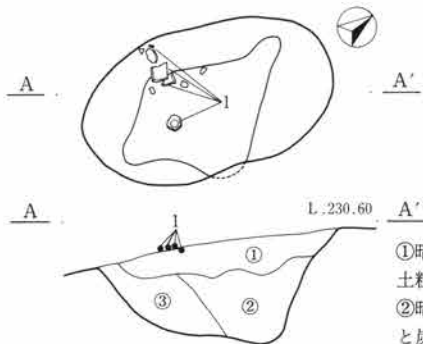
位置 C84III17 写真 PL27・35

南から北に緩やかに傾斜する場所に立地するが、上面を1号屋敷（江戸時代）によって削平されるために、確認面は水平である。形状は不正楕円形を呈している。壁の立ち上がりかたは位置によって異なり、南側はオーバーハングする。土器は1が胴部約半分の残存状態で底面上から出土しただけである。また、旧石器時代のナイフ形石器が覆土から出土したが、紛失してしまった。（遺物観察表：107頁）



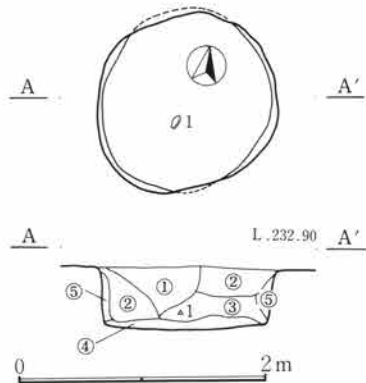
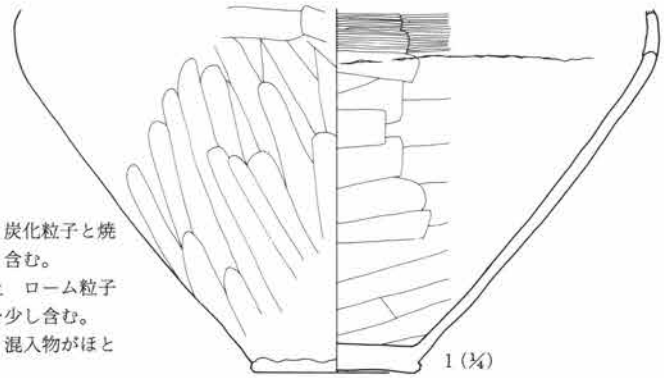
- 埋没土層
- ①暗褐色土 浅間A 軽石を少し含む。
  - ②暗褐色土 ロームブロックを少し含む。
  - ③暗灰褐色土 ローム粒子を少し含む。強く締まる。
  - ④暗褐色土 強く締まる。
  - ⑤黄褐色土 ローム粒子を少し含む。

内匠諏訪前遺跡A区64号土坑と出土遺物



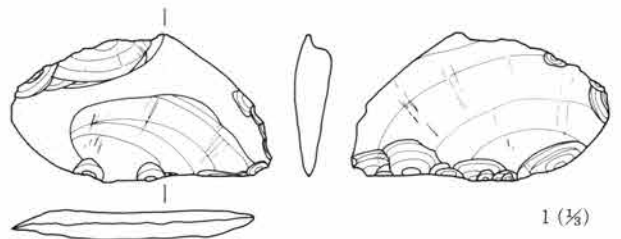
- ①暗褐色土 炭化粒子と焼土粒子を多く含む。
- ②暗灰褐色土 ローム粒子と炭化粒子を少し含む。
- ③黄褐色土 混入物がほとんどない。

内匠日影周地遺跡A区7号土坑と出土遺物



- ①黒褐色土 白色細粒を多く含む。
- ②オリブ褐色土 締まりが強い。
- ③黒褐色土
- ④黄褐色土 ローム質土壤
- ⑤黄褐色土

内匠日影周地遺跡A区21号土坑と出土遺物



第63図 諏A64・日A7・21号土坑と出土遺物



内匠日影周地遺跡A区15号土坑

位置 D41V35 写真 PL28・35

馬背状丘陵の南側で、緩やかに傾斜する場所に立地する。形状は、不正楕円形を呈している。壁の立ち上がりは南北方向にオーバーハングするが、東西壁は垂直に近い状態で立ち上がる。出土遺物は縄文時代終末～弥生時代にかけての土器32点と被熱礫4点が1～3層を中心に出土した。埋没土の中層から上は、焼土粒子や炭化粒子を含んでいる。1の胴下

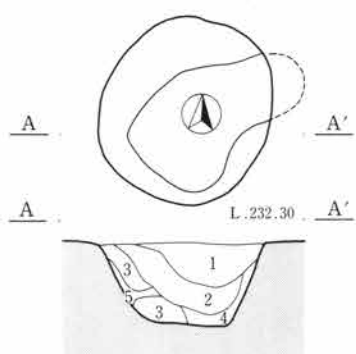
部3点は12号土坑から出土し、接合関係をもつ（第64図参照）。土器の出土層位から、土器の時期に近い土坑である。

(遺物観察表：108頁)



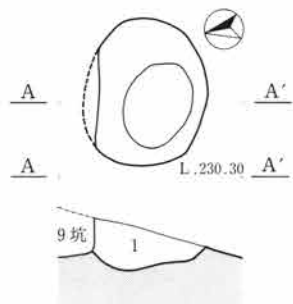
第64図 日A15号土坑と出土遺物

III 弥生時代の遺構と遺物



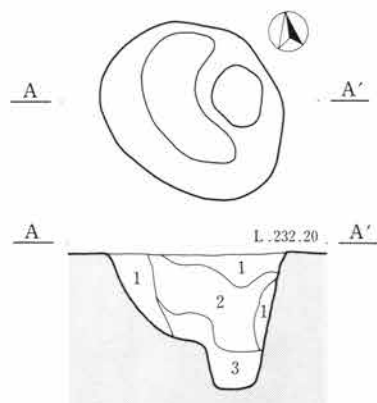
内匠日影周地遺跡A区5号土坑

1. 黒褐色土 Y.P粒子を少し含む。
2. 暗褐色土 Y.P粒子を多く含む。
3. 暗褐色土 白色の細粒を少し含む。
4. 暗褐色土 Y.P粒子を少し含む。
5. 黄褐色土 ローム質土壌。



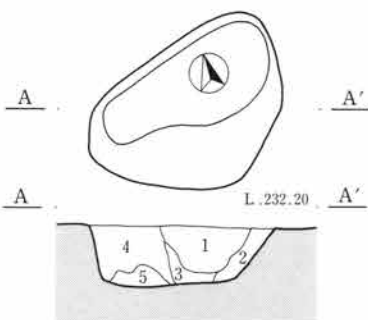
内匠日影周地遺跡A区10号土坑

1. 暗褐色土
- ローム質土壌中に、暗褐色土を斑状に含む。粘性は弱いが締まりは強い。



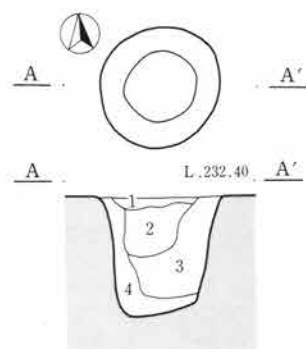
内匠日影周地遺跡A区13号土坑

1. 黄褐色土 白色の細粒とB.P粒子を多く含む。
2. 暗褐色土 1層に似るが、締まりが強い。
3. 褐色土 B.P粒子をブロック状に含む。



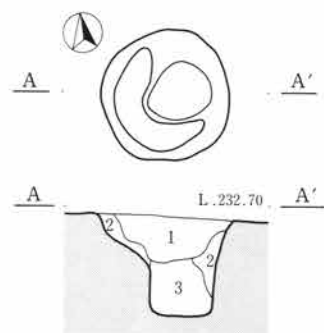
内匠日影周地遺跡A区6号土坑

1. 黒褐色土 混入物がほとんどない。
2. 暗褐色土 Y.P粒子とロームブロックを少し含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックを少し含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土のブロックを少し含む。
5. 暗褐色土 Y.P粒子を少し含む。



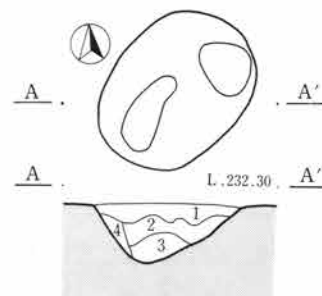
内匠日影周地遺跡A区11号土坑

1. 黒褐色土 白色の細粒を少し含む。
2. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。
3. オリーブ褐色土 B.P粒子を多く含む。
4. 黄褐色土 ローム質土壌。



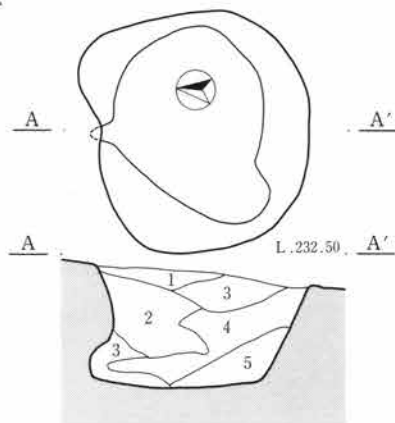
内匠日影周地遺跡A区14号土坑

1. 黒褐色土 炭化粒子白色の細粒を多く含む。ローム粒子とロームブロックを僅かに含む。
2. 黄褐色土 ローム質土壌。壁の崩落土と思われる。
3. 暗褐色土 B.P粒子をブロック状に含む。締まりは弱い。



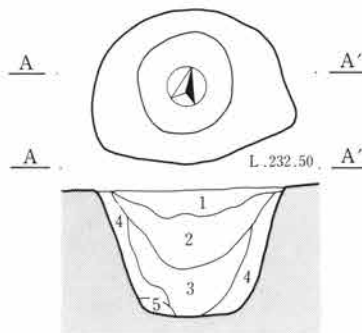
内匠日影周地遺跡A区9号土坑

1. 暗褐色土 白色の細粒を少し含む。
2. 褐色土 ローム粒子と暗褐色土を斑状に含む。
3. 2層に似るが暗褐色土を多く含む。
4. 黄褐色土 ローム質土壌。



内匠日影周地遺跡A区12号土坑

1. オリーブ褐色土 白色の細粒を少し含む。
2. 暗オリーブ褐色土 炭化粒子を少し含む。
3. 黄褐色土 ローム質土壌。
4. 暗オリーブ褐色土
5. 褐色土 ローム質土壌。



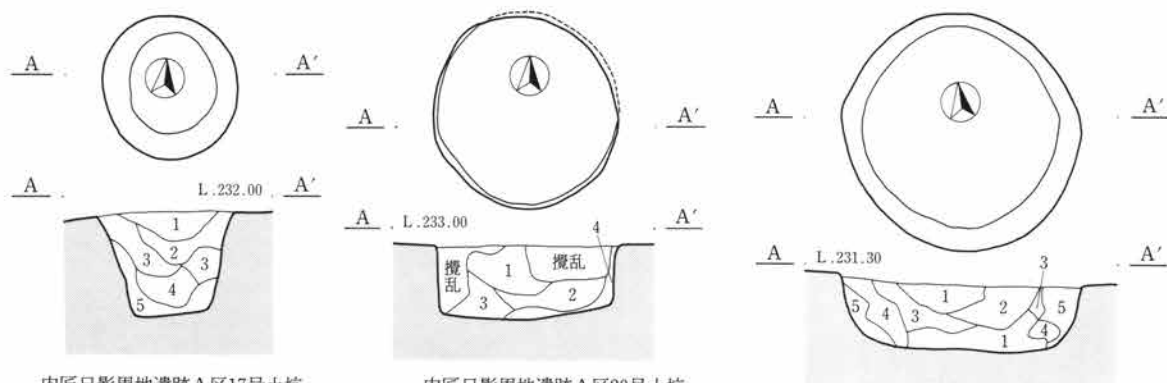
内匠日影周地遺跡A区16号土坑

1. 黒褐色土 炭化粒子と白色の細粒を少し含む。
2. 暗褐色土 ローム質土壌と暗褐色土を含む。
3. 暗褐色土 炭化粒子とM.P粒子を少し含む。
4. オリーブ褐色土 ロームブロックを少し含む。
5. オリーブ褐色土 ローム質土壌。

第65図 日A5・6・9・10・11・12・13・14・16号土坑

0 2m

III 弥生時代の遺構と遺物



内匠日影周地遺跡A区17号土坑

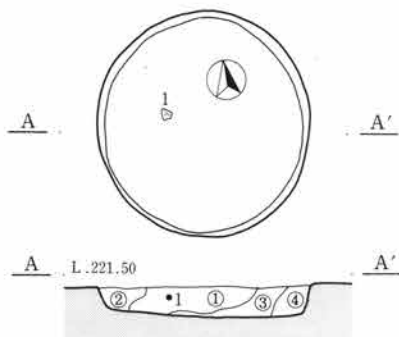
1. 黒褐色土 白色の細粒を少し含む  
2. 黄褐色土 3. オリーブ褐色土 B.P粒子を少し含む。4. 暗褐色土 5. 黄褐色土 ローム質土壌。

内匠日影周地遺跡A区20号土坑

1. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。2. オリーブ褐色土 ロームブロックを少し含む。3. 暗褐色土 B.P粒子を少し含む。4. 黄褐色土 ローム質土壌。

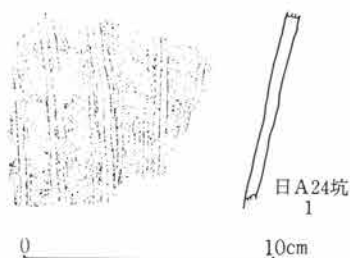
内匠日影周地遺跡A区25号土坑

1. 黒褐色土 B.P粒子を含む。2. 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。3. 褐色土 黒色土を含む。4. 黄褐色土 5. 黄褐色土 粘性が強い。

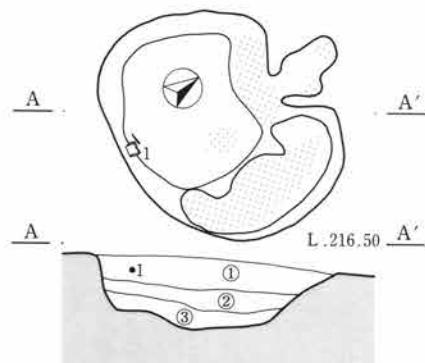


内匠日影周地遺跡A区24号土坑

①暗褐色土 Y.P粒子と白色の細粒と炭化粒子を少し含む。②黄褐色土 ローム質土壌中にB.P粒子と炭化粒子を少し含む。③褐色土 ロームブロックとY.P粒子を少し含む。④黄褐色土 ローム質土壌。Y.P粒子を少し含む。

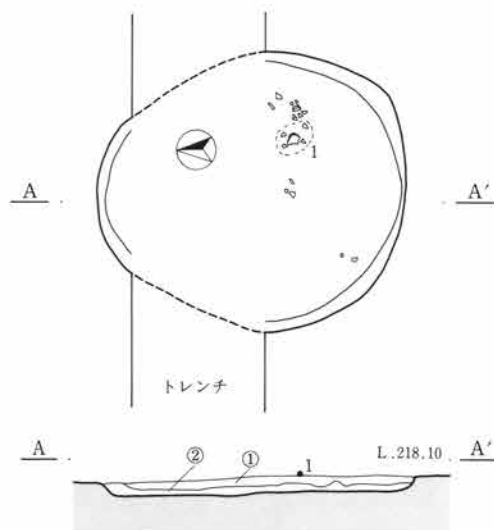


日A24坑 1



内匠日影周地遺跡B区11号土坑

①にぶい赤褐色土 焼土ブロックを少し含む。  
②赤褐色土 焼土ブロックと炭化粒子を少し含む。  
③赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。



内匠日影周地遺跡B区5号土坑

①黒褐色土 粘性の弱い土層。  
②褐色土 白色の細粒を含む。粘性と締まりが強い。



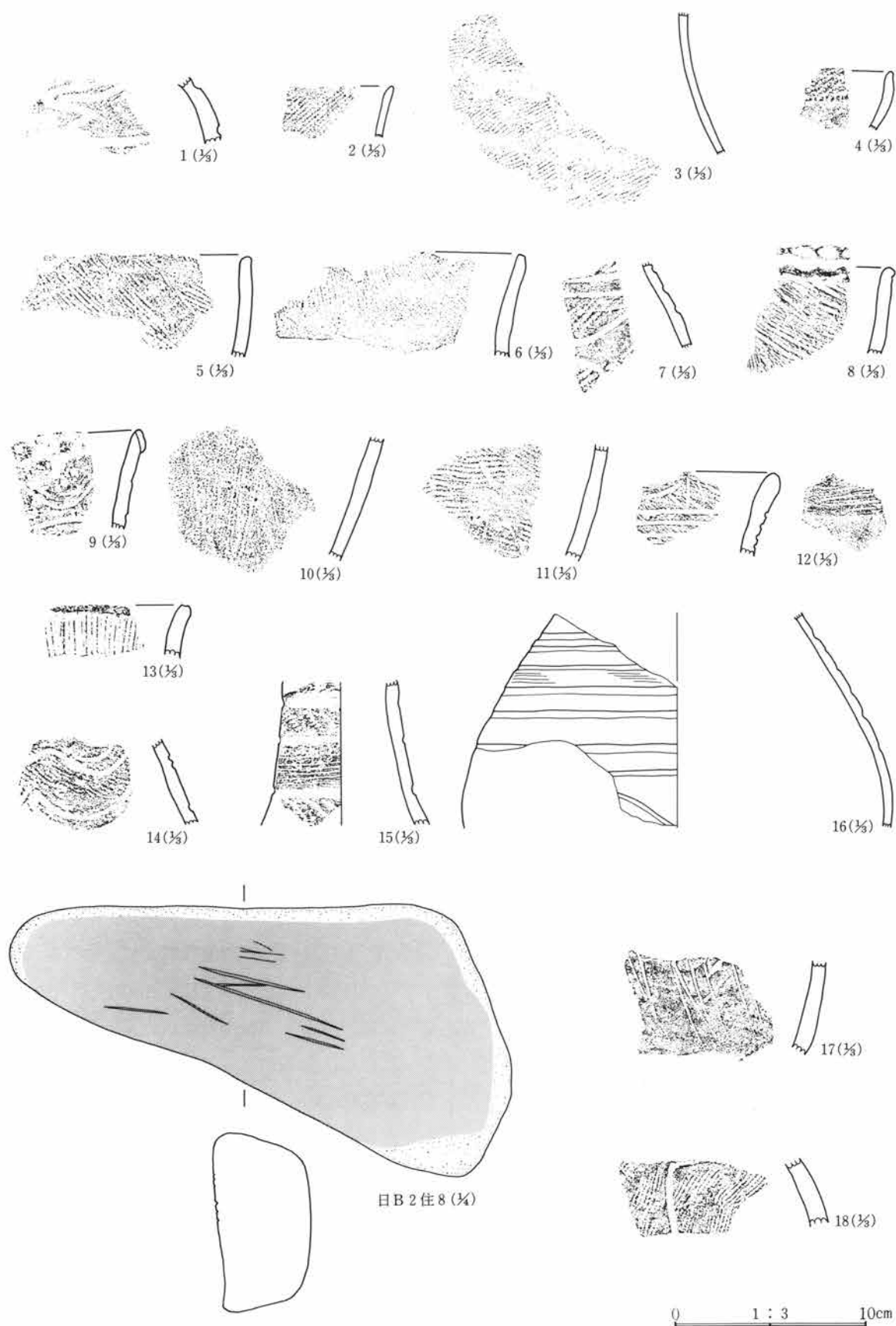
日B11坑 1



日B5坑-1

第66図 日A17・20・24・25・日B5・11号土坑と出土遺物

III 弥生時代の遺構と遺物



第 67 図 日 B 2 号住居・遺構外出土の遺物

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡 A 区 3 号住居出土遺物 (第37・38図、PL 30)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1	口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$	口 21.9 高 28.8 底 8.6	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部～肩部に波状文。刷毛目のち篔磨き。 内面口縁部横撫で。刷毛目のち篔磨き。	樽式土器 内面ヨゴレとコゲ、外面スス。
2	口縁一部 欠損。下 半部欠損	口 13.0 高 — 底 —	①普通 ②暗褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部に波状文。刷毛 目。内面刷毛目のち篔磨き。	樽式土器 内外面スス。
3	口縁一部 欠損。下 半部欠損	口 (18.8) 高 — 底 —	①普通 ②淡橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部に波状文。撫で のち篔磨き。篔磨鋸歯文。内面撫でのち頸部に篔磨 き。	樽式土器 4号住居と接合。
4	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残。胴部 以下欠損	口 (22.7) 高 — 底 —	①普通 ②淡橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。口唇部と胴部に貼付文。 外面頸部に波状文。内面刷毛目のち頸部に篔磨き。	樽式土器
5	口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 (19.8) 高 — 底—	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部～肩部に波状文。内面口縁部横撫で。頸 部～胴部篔磨き。	樽式土器 内外面スス。
6	胴部～底 部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 7.0	①普通 ②鈍い黄橙 色 ③礫を少量、砂 を多量に含む。	外面縦方向の篔磨き。内面撫でのち篔磨き。	樽式土器
7	口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 16.0 高 — 底—	①普通 ②灰褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面口縁部～頸部波状文。 器面は荒れている。内面横方向篔磨き。	樽式土器 内面コゲ、外面スス。
8	底部欠損	口 — 高 — 底—	①普通 ②黄橙色 ③砂を少量含む。	口縁部内外面共に横撫で。体部は内外面共に篔撫で。	樽式土器
9	坏部 高 坏	口 (20.0) 高 —	①普通 ②内面丹彩 外面鈍い橙色 ③砂 を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。体部外面は縦方向篔磨き。 体部内面は横方向篔磨き。	樽式土器 外面の丹彩は確認できな い。
10	ほぼ完形 高 坏	口 7.1 高 7.7 底 4.8	①普通 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	坏部は内外面共に篔磨き。脚部外面篔磨き。内面撫 で。	樽式土器 ミニチュア
11	胴部～底 部	口 — 高 — 底 7.0	①普通 ②鈍い黄橙 色 ③砂を少量含 む。	胴部外面縦篔磨き。内面横篔磨き。	樽式土器
12	口縁部 $\frac{1}{2}$ 弱欠損	口 6.4 高 15.0 底 4.6	①普通 ②黄褐色 ③礫を少量、砂を多 量に含む。	口縁部外面は等間隔止め簾状文。胴部縦方向篔磨き。 口縁部内面横撫で。胴部横方向篔磨き。	樽式土器 小孔3ヶ所残 存。2対1組で4ヶ所の 小孔。
13	頸部～底 部	口 — 高 — 底 5.2	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を少量含む。	外面肩部に2連止め簾状文。胴上部に波状文。胴下 部は篔磨き。内面篔磨き。	樽式土器 内面ヨゴレ、 外面スス。 覆土
14	底部	口 — 高 — 底 7.6	①普通 ②灰黄色 ③砂を多量に含む。	外面篔磨き。内面の器面は荒れている。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ・重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
15	打製石斧	長 — 幅 3.1 厚 1.25 重 18.0	短冊形に近いと思われる。中心より刃部にかけて欠損。	熟変成岩
16	砥 石	長 — 幅 — 厚 3.1 重 274.0	一部を欠損する。研ぎ面は表面で、中心に太い線条痕。	牛伏砂岩
17	敲 石 か	長 — 幅 4.8 厚 4.8 重 335.0	上面に、敲打痕。 $\frac{1}{2}$ 欠損。砥石としても使用か。	安山岩
18	砥 石	長 — 幅 — 厚 2.0 重 90.0	一部に研ぎ面。 $\frac{1}{2}$ 以上欠損。	牛伏砂岩
19	敲 石 か	長 22.7 幅 6.5 厚 6.2 重 2200.0	断面が台形状を呈す。上下に敲打痕。完形。 平平面は砥石としても使用か。	4号住居と接合。 石英閃緑岩

内匠日影周地遺跡 A 区 4 号住居出土遺物 (第40・41図、PL 30・31)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1	口縁部 ～胴上半 部	口 18.4 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐 色 ③砂を多量に含 む。	外面棒状工具押捺により口唇部に刻み。口縁部～肩 部に波状文。胴部撫で。内面撫で。	樽式土器 内面ススとヨゴレ、外面 スス。

### III 弥生時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
2	口縁部 ～胴上半部	口 15.0 高 — 底 —	①普通 ②明褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面口縁部～頸部に波状文。胴部撫でのち横方向に磨き。内面横撫で。以下横磨き。	樽式土器 外面スス。
3	口縁部 ～胴部	口 (12.0) 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面口縁部～肩部波状文。胴部磨き。内面頸部～胴部磨き。	樽式土器 内面ヨゴレとコゲ、外面スス。
4	口縁部 ～胴部	口 (13.3) 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部波状文。胴部磨き。内面横磨き。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
5	口縁部片	口 (15.0) 高 — 底 —	①普通 ②暗褐色 ③雲母粒を含む。	外面波状文。内面口縁部横撫で。磨き。	樽式土器 内外面スス。
6	胴部～底部 1/2	口 — 高 — 底 6.6	①普通 ②暗灰色 ③砂を多量に含む。	内外面共に磨き。外面の器面は荒れている。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
7	口縁部 ～胴部	口 (22.7) 高 — 底 —	①普通 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部波状文。頸部波状文。磨き鋸歯文と貼付文。刷毛目のち磨き。内面刷毛目のち口縁部～頸部に磨き。	樽式土器
8	口縁部 ～頸部	口 (22.0) 高 — 底 —	①普通 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部波状文。頸部波状文。刷毛目。内面刷毛目。内外面共に器面が荒れている。	樽式土器
9	胴部～底部	口 — 高 — 底 6.8	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	内外面共に磨きに近い磨き。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
10	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を少量含む。	外面撫でのち磨き。内面撫で。	樽式土器
11	坏部 高 坏	口 19.7 高 — 底 —	①普通 ②外面黄褐色、内面丹彩。③砂を多量に含む。	内外面共に磨き。	樽式土器 外面の丹彩は確認できない。
12	頸部～胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②内外共一部丹彩 ③砂と雲母を少量含む。	外面肩部に波状文。胴部磨きのち丹彩。内面撫でのち磨き。頸部に丹彩。	樽式土器 5号住居覆土と接合。
13	つまみ部分	つまみ径 4.4	①普通 ②明黄色 ③砂を多量に含む。	全面磨き。	樽式土器

### 石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
14	磨製石鏃	長 — 幅 — 厚 0.2 重 1.0	刃部は研いで作られている。全面に擦痕が残る。小孔一部残存。製作時の欠損品か。	覆土 孔径(0.2) 結晶片岩
15	磨製石鏃	長 — 幅 1.7 厚 0.4 重 1.0	両側の刃部は粗割りの段階。全面に擦痕が残る。上、下を製作時に欠損か。	覆土 結晶片岩
16	磨製石鏃か?	長 — 幅 0.9 厚 0.1 重 1.0	粗割りの段階での欠損品か。擦痕と一部に自然面残る。	覆土 結晶片岩
17	磨製石鏃	長 — 幅 — 厚 0.1 重 0.2	刃部の一部に剝離痕が見受けられる。全面に擦痕。小孔1ヶ。製作時の欠損品か。	覆土 孔径0.3 結晶片岩
18	不明	長 6.3 幅 1.7 厚 0.1 重 5.0	片側に研いだ刃部。反対側は線条痕が2本。線条痕に沿って割られている。	未製品 覆土 結晶片岩
19	砥石	長 — 幅 8.2 厚 3.1 重 190.0	3面の研ぎ面を持つ。欠損品。	牛伏砂岩
20	砥石	長 — 幅 5.2 厚 1.7 重 60.0	断面長方形。欠損品。	牛伏砂岩
21	砥石	長 — 幅 4.8 厚 1.1 重 35.0	一部に研ぎ面が残る。欠損品。	牛伏砂岩

### 内匠日影周地遺跡A区5号住居出土遺物(第42～44図、PL 31・32)

### 土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	口縁部 ～胴部	口 16.6 高 — 底 —	①普通 ②黄褐色 ③砂を少量含む。	外面口縁部～肩部波状文。胴部刷毛目のち磨き。内面横磨き。割れ口が、意図的に割られた可能性がある。調整の痕跡か。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
2	口縁部 ～胴部	口 14.0 高 12.5 底 7.0	①普通 ②黒褐色 ③砂を少量含む。	口縁部内外面共に横撫で。頸部波状文。胴部磨き。内面横磨き。	樽式土器 内面ススとヨゴレ、外面スス。

III 弥生時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
3	底部欠損 甕	口 13.6 高— 底—	①普通 ②黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部に波状文。胴部刷毛目のち篔磨き。内面撫でのち篔磨き。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
4	口縁部 ～胴部 壺	口 23.0 高— 底—	①普通 ②鈍い黄橙色 ③砂と雲母を少量含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部～肩部波状文。貼付文。刷毛目のち篔磨き。内面刷毛目のち口縁部篔磨き。	樽式土器 外面スス。
5	胴部～底部片 壺	口 — 高— 底 (9.0)	①普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	外面篔磨き。内面撫で。	樽式土器
6	口縁部片 甕	口 (20.1) 高— 底—	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部波状文。内面撫で。	樽式土器
7	口縁部片 高 坏	口 (16.8) 高— 底—	①普通 ②内面丹彩 外面鈍い黄橙色 ③砂を少量含む。	口唇部は外面に折り返し状になり、刻みを持つ。全面横篔磨き。口唇部の折り返した外面にも丹彩。	樽式土器 外面の丹彩は確認できない。D43V70Gと接合。
8	口縁部 ～胴部 台付 甕	口 12.2 高— 底—	①普通 ②黄褐色 ③砂を少量含む。	外面口縁部撫で。頸部は波状文。胴部刷毛目のち篔磨き。内面全面横篔磨き。	樽式土器 内面ヨゴレ、外面スス。
9	底部 甕	口 — 高— 底 7.0	①普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	内外面共に磨きに近い篔磨で。	樽式土器
10	口縁部 ～胴部 台付 甕	口 16.0 高— 底—	①普通 ②灰黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部～頸部波状文。胴部刷毛目のち横篔磨き。内面全面横篔磨き。	樽式土器 内面アレ、外面ススとアレ。
11	脚部 高 坏	口 — 高— 底 7.9	①普通 ②内面浅黄色、外面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面縦篔磨き。内面撫で。	樽式土器
12	坏部 高 坏	口 15.2 高— 底—	①普通 ②内外面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面口縁部撫で。体部刷毛目。内面刷毛目のち横篔磨き。	樽式土器
13	ほぼ完形 高 坏	口 18.4 高 17.5 底 9.5	①普通 ②内外面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面口縁部波状文。以下篔磨き。内面体部横篔磨き。脚部撫で。	樽式土器
14	口縁部一部欠損 高 坏	口 15.0 高 15.0 底 9.2	①普通 ②内外面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面口縁部波状文。以下篔磨き。内面体部横篔磨き。脚部撫で。	樽式土器
15	坏部 高 坏	口 23.0 高— 底—	①普通 ②外面明褐色、内面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面口縁部横撫で。体部刷毛目のち縦篔磨き。内面全面横篔磨き。	樽式土器 外面ススで、丹彩は確認できない。
16	口縁部 ～底部% 甕	口 16.8 高 12.5 底 5.6	①普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	内外面全面篔磨き。	樽式土器 孔径1.6

石 器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
18	磨製石鏃	長 — 幅 — 厚 0.1 重 2.0	刃部に剝離痕残る。製作時の欠損品か。全面に擦痕。	床面より下で出土。 結晶片岩
19	不 明	長 — 幅 — 厚 0.9 重 15.0	両面に小孔を持つ。欠損品。	緑泥片岩
20	砥 石	長 — 幅 5.3 厚 1.4 重 50.0	断面長方形。裏面は研ぎ面ではない。欠損品。	牛伏砂岩
21	砥 石	長 — 幅 16.9 厚 4.2 重1,450.0	表面には研ぎ面を持ち、線条痕がある。裏面には小孔。欠損品。	牛伏砂岩
22	打製石斧	長 — 幅 6.7 厚 1.3 重 105.0	上下を欠損。	輝緑岩
23	砥 石	長 14.5 幅 7.6 厚 2.3 重 450.0	一部を欠損するが、ほぼ完形。正面形及び断面は長方形を呈する。	牛伏砂岩
24	砥 石	長 7.9 幅 4.3 厚 1.3 重 55.0	断面隅丸長方形。正面形も長方形。	牛伏砂岩
25	砥 石	長 11.6 幅 4.6 厚 2.2 重 150.0	欠損品。表、裏面共に研ぎ面。	牛伏砂岩
26	砥 石	長 11.3 幅 6.7 厚 3.0 重 345.0	表面にのみ浅い凹み。	流紋岩 覆土

III 弥生時代の遺構と遺物

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
27	凹み石	長 10.9 幅 7.0 厚 3.4 重 270.0	一部欠損。表面にのみ凹み。表面の風化が著しい。	牛伏砂岩

内匠日影周地遺跡A区8号住居出土遺物(第46・47図、PL 30・32)

土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	口縁部 ～胴部%	口 (20.8) 高 — 底 —	①普通 ②暗褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部と頸部に波状文。撫でのち篔磨き。内面横篔磨き。	樽式土器 内面コゲ、外面スス。4号住居と接合。
2	口縁部 ～胴部片	口 (20.4) 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面棒状工具押捺による口唇部に刻み。口縁部～肩部波状文。器面は荒れている。内面撫でのち横篔磨き。	樽式土器 内外面スス。
3	口縁部 ～頸部片	口 (18.4) 高 — 底 —	①普通 ②浅黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口唇部に、棒状工具押捺による刻み。口縁部～胴部波状文。内面撫でのち横篔磨き。	樽式土器
4	口縁部片	口 (16.4) 高 — 底 —	①普通 ②赤褐色 ③砂を多量に含む。	口唇部刻み。外面口縁部～胴部に櫛描。内面篔磨き。	樽式土器 内外面スス。
5	胴部～底部	口 — 高 — 底 (8.8)	①普通 ②橙色 ③砂を多量に含む。	外面幅広の篔磨き。内面篔撫で。	樽式土器 内面コゲとスス、外面スス。
6	頸部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②灰黄色 ③砂と雲母を少量含む。	外面口縁部波状文。頸部、等間隔止め簾状文。内面篔磨き。	樽式土器 外面スス。 覆土
7	つまみ部 ～体部	つまみ径 4.8	①普通 ②鈍い橙色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	内外面共に磨きに近い篔撫で。	樽式土器 覆土
8	坏部%	口 (16.8) 高 — 底 —	①普通 ②内外面丹彩 ③パミスを少量含む。	外面口縁部横篔磨き。体部縦篔磨き。内面横篔磨き。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
9	磨製石鏃	長 — 幅 2.5 厚 0.2 重 2.0	全面に擦痕。製作時の欠損品か。	結晶片岩
10	磨製石鏃	長 — 幅 2.4 厚 0.1 重 2.0	両側より穿孔を施す。全面に擦痕。製作時の欠損品か。	結晶片岩 孔径 0.4 覆土
11	不明	長 — 幅 2.1 厚 0.2 重 2.0	全面に擦痕。製作時の欠損品か。	結晶片岩 覆土
12	磨製石鏃	長 — 幅 1.4 厚 0.2 重 1.0	全面に擦痕。製作時の欠損品か。	結晶片岩 覆土
13	磨製石鏃	長 4.9 幅 2.0 厚 0.3 重 4.0	粗割りののち、磨きの途中と思われる。部分的に擦痕が見受けられる。	未製品 結晶片岩 覆土
14	砥石	長 — 幅 4.7 厚 1.1 重 41.0	二次的に被熱。欠損品。研ぎ面は一面のみ。	安山岩
15	砥石	長 — 幅 8.1 厚 2.7 重 231.0	1/2を欠損。断面が楕円形。	安山岩
16	砥石	長 — 幅 9.3 厚 2.4 重 200.0	断面長方形。1/2を欠損。裏面に太めの線条痕。	牛伏砂岩
17	砥石	長 12.4 幅 4.3 厚 1.9 重 139.0	完形。研ぎ面は一面。	牛伏砂岩 覆土
18	砥石か	長 12.1 幅 5.8 厚 2.8 重 313.0	完形。断面が楕円形。	安山岩
19	砥石	長 9.7 幅 6.0 厚 3.0 重 245.0	表・裏面に凹み。側面に敲打痕。	牛伏砂岩

内匠日影周地遺跡A区9号住居出土遺物(第48図、PL 32)

土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	口縁部 ～胴部・ 胴部～底部	口 (17.7) 高 (21.6) 底 7.2	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。口唇部に刻み。外面頸部波状文。篔磨き。内面篔磨き。	樽式土器 内面ヨゴレとコゲ、外面スス。



III 弥生時代の遺構と遺物

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
2 甕	胴部～底部	口 ー 高 ー 底 7.4	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	外面撫で。内面撫でのち磨き。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
3	砥石か	長 10.6 幅 4.9 厚 2.8 重 250.0	完形。断面楕円形。	流紋岩
4	砥石	長 ー 幅 8.6 厚 2.0 重 250.0	一部欠損。研ぎ面は一面。	牛伏砂岩

内匠日影周地遺跡 A 区10号住居出土遺物 (第50・51図、PL 32・33)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
1 壺	口縁部 ～頸部	口 (18.9) 高 ー 底 ー	①普通 ②明黄褐色 ③礫を少量、砂を多 量に含む。	胴部から直線的に立ち上がり、大きく外反する。外 面口縁部横撫で。頸部波状文。縦篋磨き。内面撫で のち横篋磨き。	樽式土器 内面スス。
2 壺	口縁部 ～頸部	口 ー 高 ー 底 ー	①普通 ②外面明黄 褐色 内面頸部上丹 彩 ③砂を少量含む。	内外面共に器面は荒れている。外面頸部櫛描波状文 に縦直線。	樽式土器 外面の丹彩は確認できな い。
3 高 坏	坏体部 ～脚部	口 ー 高 ー 底 9.6	①普通 ②内面丹彩 外面鈍い褐色 ③砂 を多量に含む。	外面篋磨き。内面坏部篋磨き。脚部篋撫で。	樽式土器 外面の丹彩は確認できな い。
4 高 坏	坏部	口 16.9 高 ー 底 ー	①普通 ②内外面丹 彩 ③砂を多量に含 む。	外面口縁部横篋磨き。体部縦篋磨き。内面横篋磨き。	樽式土器
5 高 坏	脚部	口 ー 高 ー 底 10.4	①普通 ②内面鈍い 橙色、外面丹彩 ③ 砂を少量含む。	外面縦篋磨き。内面脚部篋撫で。	樽式土器
10 甕	底部	口 ー 高 ー 底 (8.0)	①普通 ②灰黄褐色 ③砂を多量に含む。	内外面共に磨きに近い篋撫で。	樽式土器 内面にヨゴレ
12 甕	胴部片	口 ー 高 ー 底 ー	①普通 ②鈍い黄橙 色 ③砂を多量に含 む。	内外面共に器面は荒れている。外面篋描による同心 円文。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
6	砥石	長 ー 幅 7.4 厚 4.2 重 562.0	断面長方形。表面に1つ、裏面に2つ凹み。1/2欠損。	牛伏砂岩
7	砥石か	長 ー 幅 6.0 厚 2.6 重 210.0	断面台形。1/2欠損。	安山岩
8	砥石か	長 ー 幅 7.4 厚 4.2 重 540.0	断面楕円形。1/2欠損。	石英安山岩
9	砥石	長 17.1 幅 9.3 厚 2.5 重 355.0	完形。一面のみ研ぎ面。	牛伏砂岩
11	磨製石鏃	長 ー 幅 ー 厚 0.2 重 1.0	製作時の欠損品か。穿孔は片側からのみ。全面に擦痕が残る。	結晶片岩 覆土

内匠日影周地遺跡 A 区12号住居出土遺物 (第53図、PL 33)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
1 甕	頸部～胴部	口 ー 高 ー 底 ー	①普通 ②鈍い黄褐 色 ③砂を多量に含 む。	外面肩部に波状文。胴部は刷毛目のち櫛描きのち篋 磨き。内面撫でのち篋磨き。	樽式土器 内面ヨゴレとコゲ、外面 スス。
2 甕	底部片	口 ー 高 ー 底 11.5	①普通 ②鈍い橙 色 ③砂とバミスを少 量含む。	外面篋撫で。内面器面は荒れていて観察不可能。	樽式土器

### III 弥生時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
3 高 坏	脚部	口 — 高 — 底 8.8	①普通 ②内面鈍い 黄褐色、外面丹彩 ③砂を多量に含む。	外面縦篋磨き。坏部内面丹彩。脚部内面篋撫で。	樽式土器

### 石 器

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
4	磨製石鏃	長 3.9 幅 2.0 厚 0.2 重 1.0	刃部に一部剥離痕が残る。両側から穿孔。全面に擦痕。製作時の欠損品か。	結晶片岩 孔径 0.4
5	砥 石	長 16.0 幅 10.6 厚 2.7 重 760.0	断面長方形。	牛伏砂岩
6	敲 石	長 11.8 幅 6.3 厚 4.4 重 490.0	上下に敲打痕。ほぼ完形。砥石としても使用か。	安山岩
7	砥 石	長 43.8 幅 15.1 厚 3.3 重 2200.0	断面長方形。不定形だが完形。表と裏に研ぎ面を持ち、両面に線条痕を多数持つ。	牛伏砂岩

### 内匠日影周地遺跡 A区15号住居出土遺物 (第54・55図、PL 33)

### 土 器・土 製品

(単位：cm・g)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1 台付甕	脚部欠損	口 10.3 高 — 底 —	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部横撫で。頸部は等間隔止め簾状文。肩部波状文。胴部縦篋磨き。内面横方向篋磨き。	樽式土器 内面コゲとヨゴレ、外面スス。内面の口縁部に丹彩が一部残存
2 甕	底部	口 — 高 — 底 5.8	①普通 ②鈍い黄橙色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	外面縦篋磨き。内面篋磨き。	樽式土器
3 勾 玉	欠損	長 — 厚 2.2 幅 1.9 重 18.0	①普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を少量含む。	焼成前に一方向から小孔。手捏で製作。	樽式土器 覆土
4 壺	頸部～胴部	口 — 高一 底—	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	外面肩部に波状文。胴部刷毛目のち篋磨き。内面撫でのち磨き。	樽式土器
5 甕	胴部～底部	口 — 高 — 底 7.0	①普通 ②黒褐色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	肩部波状文。胴部篋磨き。内面撫でのち横篋磨き。	樽式土器 内面コゲ、外面ススとアレ。
6 壺	頸部～胴部	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面頸部波状文。胴部撫でのち篋磨き。内面撫で。頸部に横篋磨き。	樽式土器
7 壺	口縁部	口 (23.0) 高 — 底 —	①普通 ②橙色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面刷毛目のち頸部に波状文。内面撫で。	樽式土器
8 壺	口縁部	口 (16.4) 高 — 底 —	①普通 ②淡橙色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面頸部に波状文。内面撫でのち横篋磨き。器面は荒れている。	樽式土器
9 高 坏	脚部欠損	口 24.2 高 — 底 —	①普通 ②内面丹彩 外面黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部横撫で。体部撫でのち磨き。内面横篋磨き。	樽式土器 内面アレ、外面スス。内外面の一部に丹彩の痕跡あり。
10 壺	胴部	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄橙色 ③礫とバミス少量、砂を多量に含む。	外面肩部に波状文。胴部篋磨き。内面撫で。	樽式土器 ビット2 覆土
11 甕	口縁部片	口 (16.0) 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	口唇部に刻み。外面口縁部と頸部に波状文。内面横篋磨き。	樽式土器 外面スス。
12 高 坏	坏部	口 (15.1) 高 — 底 —	①普通 ②内外面共に丹彩 ③砂を多量に含む。	外面口縁部は横篋磨き。以下は縦磨き。内面横篋磨き。	樽式土器 10号住居と接合。
13 高 坏	脚部	口 — 高 — 底 5.8	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	外面縦篋磨き。内面撫で。	樽式土器 外面に丹彩一部残る。内面に丹彩の痕跡なし。

## III 弥生時代の遺構と遺物

## 石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
14	磨製石鏃	長 4.2 幅 2.0 厚 0.4 重 3.0	一部に剥離痕。側面も含め擦痕。製作途中で、穿孔の痕跡なし。	未製品 結晶片岩
15	砥 石	長 11.9 幅 6.1 厚 1.7 重 170.0	不定形だが完形。表・裏面共に研ぎ面。	安山岩
16	砥石か	長 — 幅 — 厚 4.6 重 590.0	平坦面を研ぎ面とする。	安山岩 二次的に被熱。ビット2覆土
17	砥 石	長 15.1 幅 7.8 厚 5.2	不定形だがほぼ完形。一部に自然面。平坦面はすべて研ぎ面と思われる。	輝緑岩 重1000.0

## 内匠日影周地遺跡 A 区16号住居出土遺物 (第56図、PL 34)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1	口縁部 壺	口 (16.4) 高一 底一	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。外面細かな刷毛目か。頸部波状文。内面撫で。器面は荒れている。	樽式土器 覆土上層
2	胴部～底 甕	口 — 高 — 底 (8.2)	①普通 ②鈍い橙色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	外面篋磨き。内面磨きに近い撫で。	樽式土器
3	つまみ部 蓋	口 14.0 つまみ径 (3.6) 高 5.0	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	外面篋撫で及び篋磨き。内面篋撫で。	樽式土器 内面ススとヨゴレ。

## 石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
4	磨製石鏃	長 — 幅 1.9 厚 0.1 重 2.0	先端部を欠損。左右不对称であることから、製作途中の欠損品か。両側から穿孔。	結晶片岩 孔径(0.5)
5	砥 石	長 8.6 幅 4.2 厚 1.3 重 68.0	断面胴張りの長方形。六面が研ぎ面。各面の稜を明確に持つ。	牛伏砂岩
6	砥 石	長 — 幅 5.1 厚 2.3 重 65.0	上、下を欠損。3面が研ぎ面。	牛伏砂岩
7	不 明	長 2.9 幅 3.3 厚 0.4 重 5.0	縁辺の一部に擦痕が残るが、他は自然面。	未製品 結晶片岩
8	砥 石	長 9.3 幅 3.7 厚 0.9 重 63.0	断面胴張りの長方形。六面が研ぎ面。各面の稜を明確に持つ。	牛伏砂岩
9	砥 石	長 8.5 幅 3.4 厚 1.2 重 55.0	断面胴張りの長方形。六面が研ぎ面。各面の稜を明確に持つ。	牛伏砂岩
10	砥 石	長 9.5 幅 7.5 厚 1.2 重 120.0	正面形は不定形な台形。断面は長方形。表、裏面が研ぎ面か。一部欠損するがほぼ完形。	牛伏砂岩
11	砥 石	長 9.6 幅 6.4 厚 1.6 重 165.0	正面形及び断面は、ほぼ台形。六面が研ぎ面か。ほぼ完形。	牛伏砂岩
12	砥 石	長 11.8 幅 7.2 厚 2.1 重 200.0	表、裏面に研ぎ面。ほぼ完形。	牛伏砂岩

## 内匠日影周地遺跡 A 区17号住居出土遺物 (第57図、PL 34)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1	口縁部 甕	口 13.0 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部内外面共に横撫で。口縁部下～肩部波状文。胴部刷毛目のち篋磨き。内面刷毛目のち横篋磨き。	樽式土器 内面アレ、外面スス。
2	胴部～底 甕	口 — 高 — 底 5.2	①普通 ②鈍い黄褐色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	内外面共に横篋磨き。	樽式土器
3	口縁部欠 損	口 — 高 — 底 (8.9)	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面刷毛目のち櫛櫛のち縦篋磨き。頸部～肩部に波状文。内面刷毛目のち横篋磨き。	樽式土器 内面ヨゴレとコゲ、外面スス。
4	脚部 高 坏	口 — 高 — 底 8.2	①普通 ②橙色 ③砂を多量に含む。	外面縦篋磨き。内面器面が荒れていて観察できない。	樽式土器 外面には丹彩の痕跡が見受けられない。内外面スス。

III 弥生時代の遺構と遺物

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	不 明	長 5.9 幅 3.6 厚 0.2 重 12.0	不定形。表面に細かな擦痕。	滑石片岩
6	砥 石	長 ー 幅 6.5 厚 2.2 重 175.0	片を欠損する。表、裏面に線条痕が施される。	流紋岩
7	磨製石鏃	長 ー 幅 2.5 厚 0.5 重 5.0	刃部の一部に剝離痕。ほぼ全面に擦痕。刃部の一側面には線条痕。製作途中。穿孔の痕跡なし。	未製品 結晶片岩 覆土
8	砥 石	長 11.9 幅 6.3 厚 3.5 重 445.0	断面胴張りの長方形。六面が研ぎ面か。各面の稜を明確に持つ。	牛伏砂岩

内匠日影周地遺跡 A 区 18号住居出土遺物 (第58図、PL 34)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
1	胴部～底部	口 ー 高 ー 底 7.5	①普通 ②鈍い赤褐色 ③砂を多量に含む。	外面縦篋磨き。内面横篋磨き。	樽式土器 覆土 内面コゲ、外面スス。
2	坏部	口 (16.0) 高 ー 底 ー	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面口縁部横撫で。以下縦篋磨き。内面横篋磨き。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
3	砥 石	長 11.0 幅 5.1 厚 4.0 重 400.0	研ぎ面は表面のみ。	安山岩 覆土

内匠日影周地遺跡 B 区 2号住居出土遺物 (第60図、PL 34・35)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
1	口縁部～胴部	口 18.0 高 ー 底 ー	①普通 ②明褐色 ③砂とバミスを多量、雲母を少量含む。	球胴を呈す。外面口縁部～胴部下に波状文のち胴部下に篋磨き。頸部三連止め簾状文。内面横篋磨き。	2と同一の可能性が大きい。 内面コゲ、外面スス。
2	胴部～台付部	口 ー 高 ー 底 9.0	①普通 ②明褐色 ③砂とバミスを多量、雲母を少量含む。	外面胴部篋磨き。台部細かな刷毛目。内面胴部篋磨き。台部篋撫で。	1と同一の可能性が大きい。 内面コゲとスス、外面スス。
3	壺	口 ー 高 ー 底 ー	①普通 ②明褐色 ③礫(結晶片岩・石英)を少量、砂を多量に含む。	球胴に近い。内面で頸部と胴部の接合部に稜。外面頸部～肩部波状文。胴部刷毛目のち篋磨き。内面の器面は荒れているが篋撫でか。	
4	口縁部	口 15.4 高 ー 底 ー	①普通 ②浅黄色 ③砂を多量に含む。	内外面共に縦篋磨き。	
5	胴部～底部	口 ー 高 ー 底 4.2	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	内外面篋磨き。焼成前に内側から外側へ穿孔。	内外面ヨゴレ。 孔径1.5
6	口縁部～頸部	口 16.1 高 ー 底 ー	①普通 ②橙色 ③礫(結晶片岩・石英)を多量に含む。	外面の器面は荒れている。隆帯に刺突。内面撫でのち篋磨き。内面で頸部と胴部の接合部に稜。	
7	小型壺	口 3.8 高 5.7 底 2.8	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	器面は荒れている。内外面共に口縁部と胴部の接合部に輪積痕。	ミニチュア 内外面スス。

内匠日影周地遺跡 B 区 4号住居出土遺物 (第61図、PL 34・35)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 文 様 ・ 製 作 技 法 の 特 徴	備 考
1	胴部	口 ー 高 ー 底 ー	①普通 ②明黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)を多量に含む。	内外面共に器面は荒れている。	中期

III 弥生時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
2 鉢	口縁部 $\frac{1}{2}$	口 11.1 高一 底一	①普通 ②灰黄褐色 ③砂を少量含む。	口唇部に細かな刻み。外面棒状工具による弧線文。 内面篋撫で。	中期
3 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③礫を少量含む。	外面条痕上に4本1組の沈線。	中期
4 壺	胴部片	口 — 高一 底一	①普通 ②明赤褐色 ③礫を少量含む。	4本1組の沈線を垂下。	中期
5 壺	胴部片	口 — 高一 底一	①普通 ②暗褐色 ③砂を多量に含む。	原体 RL の縄文。沈線を2本施している。	中期
6 甕	口縁部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②明褐色 ③雲母を多量に含む。	口唇部に刻み。外面に斜めの条痕。	中期
7 甕	底部片	口 — 高 — 底 (8.6)	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面下から上への篋磨き。内面篋磨き。	中期

内匠日影周地遺跡B区8号住居出土遺物 (第62図、PL 35)

土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1 壺	頸部～胴部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 —	①普通 ②明黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)を少量含む。	外面頸部に波状文。胴部篋磨き。内面撫で。	樽式土器
2 甕	底部	口 — 高 — 底 10.5	①普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	内外面共に器面は荒れている。	樽式土器
3 深鉢	頸部片	口 — 高一 底一	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	外面頸部に等間隔止め簾状文。	樽式土器
4 甕	頸部片	口 — 高一 底一	①普通 ②明黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面頸部～肩部波状文。内面の器面は荒れている。	樽式土器

石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	磨製石鏃	長 2.8 幅 2.1 厚 0.3 重 5.0	小孔の外縁は、剥離がみられる。両面に製作時の擦痕がのこる。完形。	結晶片岩 孔径 0.2

内匠諏訪前遺跡A区64号土坑出土遺物 (第63図、PL 35)

土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1 壺	胴部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 —	①普通 ②明褐色 ③礫と砂を多量に含む。	外面肩部は4単位の文様(2単位残)で沈線内をLRの縄文と5本1組の条痕を充填。胴部は同一工具による条痕。内面の器面は荒れている。	中期 外面スス。

内匠日影周地遺跡A区7号土坑出土遺物 (第63図)

土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1 壺	胴部～底部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 8.8	①普通 ②黄褐色 ③砂を多量に含む。	外面篋撫で。内面刷毛目と篋撫で。	樽式土器

内匠日影周地遺跡A区21号土坑出土遺物 (第63図、PL 35)

石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
1	剥片石器	長 5.8 幅 10.3 厚 1.5 重 90.0	不定形な剥片石器。	熱変成岩

III 弥生時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺物 A区15号土坑出土遺物 (第64図、PL 35)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1 甕	欠損	口 29.0 高 — 底 —	①普通 ②鈍い橙色 ③礫と砂を多量に含む。	口唇部に隆帯を貼りつける。外面口唇部上～胴下まで粗くて深い条痕。内面粗くて浅い条痕。輪積痕。	縄文晩期 終末～弥生。12号土坑覆土の3片が接合。被熱。
2 甕	口縁部～胴部欠	口 (44.6) 高一 底—	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部に突起(単位不明)。外面細かな浅い条痕。内面刷毛目に近い横撫で。	縄文晩期終末～弥生
3 壺	口縁部片	口 (8.7) 高 — 底 —	①普通 ②明褐色 ③礫、砂、パミスを少量含む。	波状口縁。口唇部撫で。外面頸部に沈線。原体 RL の縄文施文。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 覆土
4 甕	口縁部片	口 — 高一 底—	①普通 ②橙色 ③礫と砂を少量含む。	口唇部上に薄く粘土を貼付け、押捺後に口唇部～上面、内面に条痕。外面深い条痕。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 覆土
5 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①良好 ②鈍い黄褐色 ③礫と砂を少量含む。	外面1段の縄による燃糸文。多方向に施文。	縄文晩期終末～弥生 外面スス。6と同一か。 覆土
6 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①良好 ②鈍い黄褐色 ③礫と砂を少量含む。	外面1段の縄による燃糸文。同一の単一絡条体による条痕。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 5と同一か。
7 甕	底部片	口 — 高 — 底 (8.2)	①普通 ②灰黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	単節の縄文施文。	縄文晩期終末～弥生 覆土

内匠日影周地遺跡土坑出土遺物 (第66図、PL 35)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③礫を少量含む。	外面4本を単位とする深い条痕。内面撫で。	内匠日影周地遺跡A区24号土坑 中期か
1 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①良好 ②鈍い褐色 ③礫と砂を少量含む。	外面3+αを単位とする条痕を、縦方向に施す。	内匠日影周地遺跡B区5号土坑 中期か
1 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②黄褐色 ③砂を多量、雲母を少量含む。	外面細かく浅い条痕。内面撫で。	内匠日影周地遺跡B区11号土坑 中期か

遺構外出土遺物 (第67図、PL 35)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
1 壺 か	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を少量含む。	棒状工具による幅広の沈線。変形1字文。原体 LR の単節斜縄文。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 内匠日影周地遺跡A区12号住居 覆土
2 壺 か	口縁部片	口 — 高一 底—	①良好 ②鈍い褐色 ③礫を少量含む。	口唇部上面にも縄文施文。原体 LR の単節斜縄文。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 C80III21G 3と同一
3 壺 か	胴部片	口 — 高 — 底 —	①良好 ②鈍い褐色 ③礫を少量含む。	原体 LR の単節斜縄文。末端自条結縛。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 内匠諏訪前遺跡A区6号住居 C81III21G
4 壺 か	口縁部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③礫を少量含む。	口縁部に原体 LR の単節斜縄文を施して刻み。口唇部は鋭角。	縄文晩期終末～弥生 1号屋敷西側盛土
5 甕	口縁部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い橙色 ③礫を少量、砂を多量に含む。	口唇部は角頭状を呈し、撫でを施す。外面4+αを単位とする粗くて浅い条痕。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 内匠諏訪前遺跡A区5号住居 C83III33IV G
6 壺	胴部片	口 — 高一 底—	①普通 ②褐灰色 ③砂を少量含む。	口唇部上面に撫で。外面口縁部は浅くて細かな条痕。胴部に横撫で。内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 C88III29IV G
7 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を少量含む。	外面棒状工具による幅広の沈線で、文様を描出。原体 LR の単節斜縄文。内面撫で。	中期か 内匠諏訪前遺跡A区9号住居柱穴

III 弥生時代の遺構と遺物

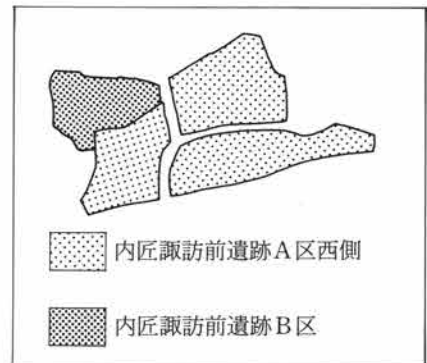
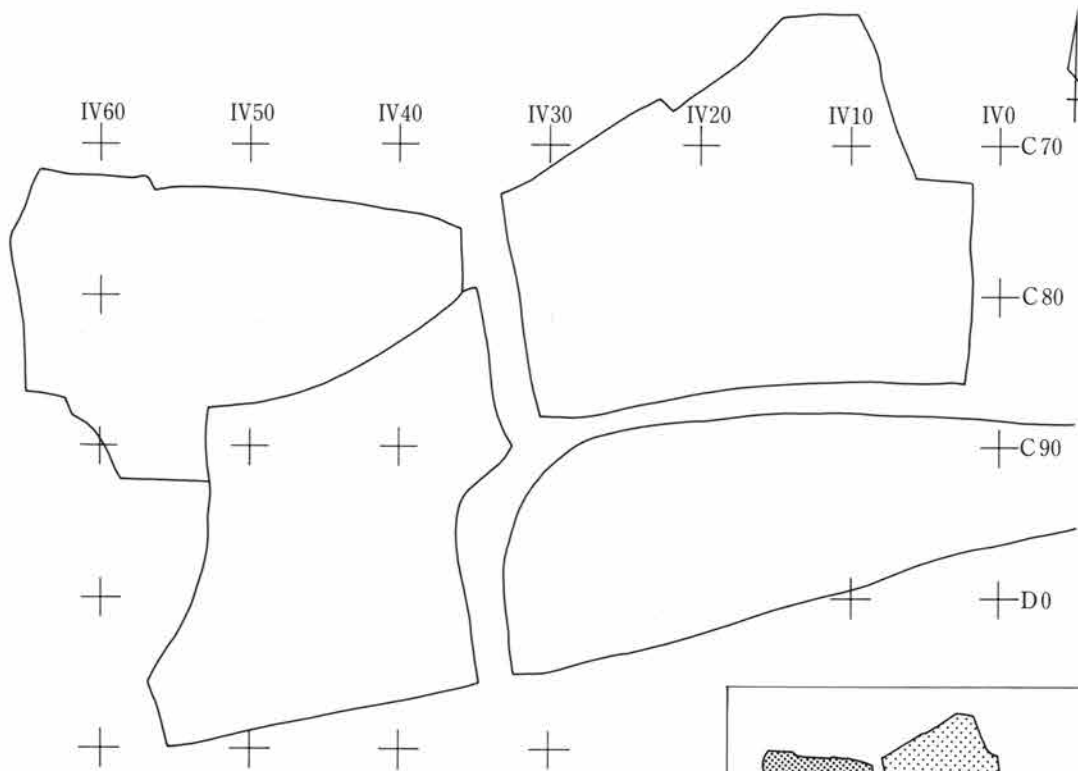
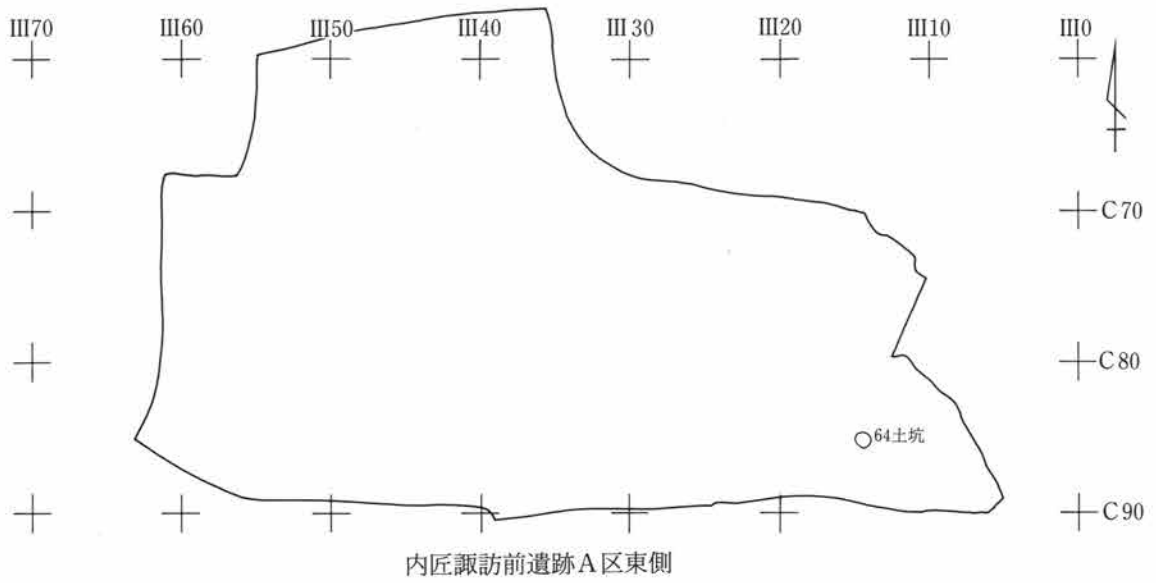
番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備 考
8 壺	口縁部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②赤褐色 ③砂を少量含む。	口唇部に粘土を貼付し、押捺。外面粗くて浅い条痕。 内面撫で。	縄文晩期終末～弥生 内匠日影周地遺跡A区15 号住居
9 壺	口縁部片	口 — 高— 底—	①普通 ②明褐色 ③砂を少量含む。	口唇部に粘土を貼付し、押捺。外面棒状工具による 弧線文。内面撫で。	中期か C89IV57G
10 壺	胴部片	口 — 高— 底—	①普通 ②橙色 ③ 礫と砂を多量に含む	外面浅くて細かな条痕。内面荒れていて観察不能。	中期か D13V26G
11 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い橙色 ③礫と砂を多量に含 む。	外面無節の縄文施文か。内面撫で。	中期か 内匠日影周地遺跡B区2 号谷津
12 壺	口縁部	口 — 高— 底—	①普通 ②明褐色 ③砂を少量含む。	口縁部の内側は肥厚し、そこから外面にかけて浅く て粗い条痕。外面には棒状工具による沈線。	縄文晩期終末～弥生 D48V44G
13 壺	口縁部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄橙 色 ③雲母を少量含 む。	外面3～4本を単位とした深い条痕を縦方向に施 文。内面横撫で。	縄文晩期終末～中期 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津
14 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い褐色 ③礫と雲母を少量含 む。	外面2本1組の棒状工具による沈線。原体LRの半 截斜縄文。内面横撫で。	中期 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津
15 壺	頸部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	外面横方向の粗くて浅い条痕。棒状工具による幅広 の沈線。半截竹管状工具による刺突を充填。内面の 器面は荒れている。	中期 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津
16 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②明褐色 ③砂とパミスを少量 含む。	器面は荒れている。外面横方向の粗くて浅い条痕。 棒状工具による幅広の沈線。	中期 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津
17 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い赤褐 色 ③砂を少量含 む。	外面篋描に近い沈線。内面撫で。	中期か 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津
18 壺	胴部片	口 — 高 — 底 —	①普通 ②鈍い黄褐 色 ③砂を少量含 む。	外面原体LRの単節斜縄文ののち、幅広の沈線。内 面撫で。	中期 内匠日影周地遺跡B区1 号谷津

内匠日影周地遺跡B区2号住居出土石器 (第67図、PL 35)

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ・重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
8	砥 石	長 34.8 幅 19.0 厚 6.5 重 5600.0	研ぎ面は一面だけで、線条痕が見受けられる。完形で、研ぎ面以 外の面は自然面である。	緑泥片岩

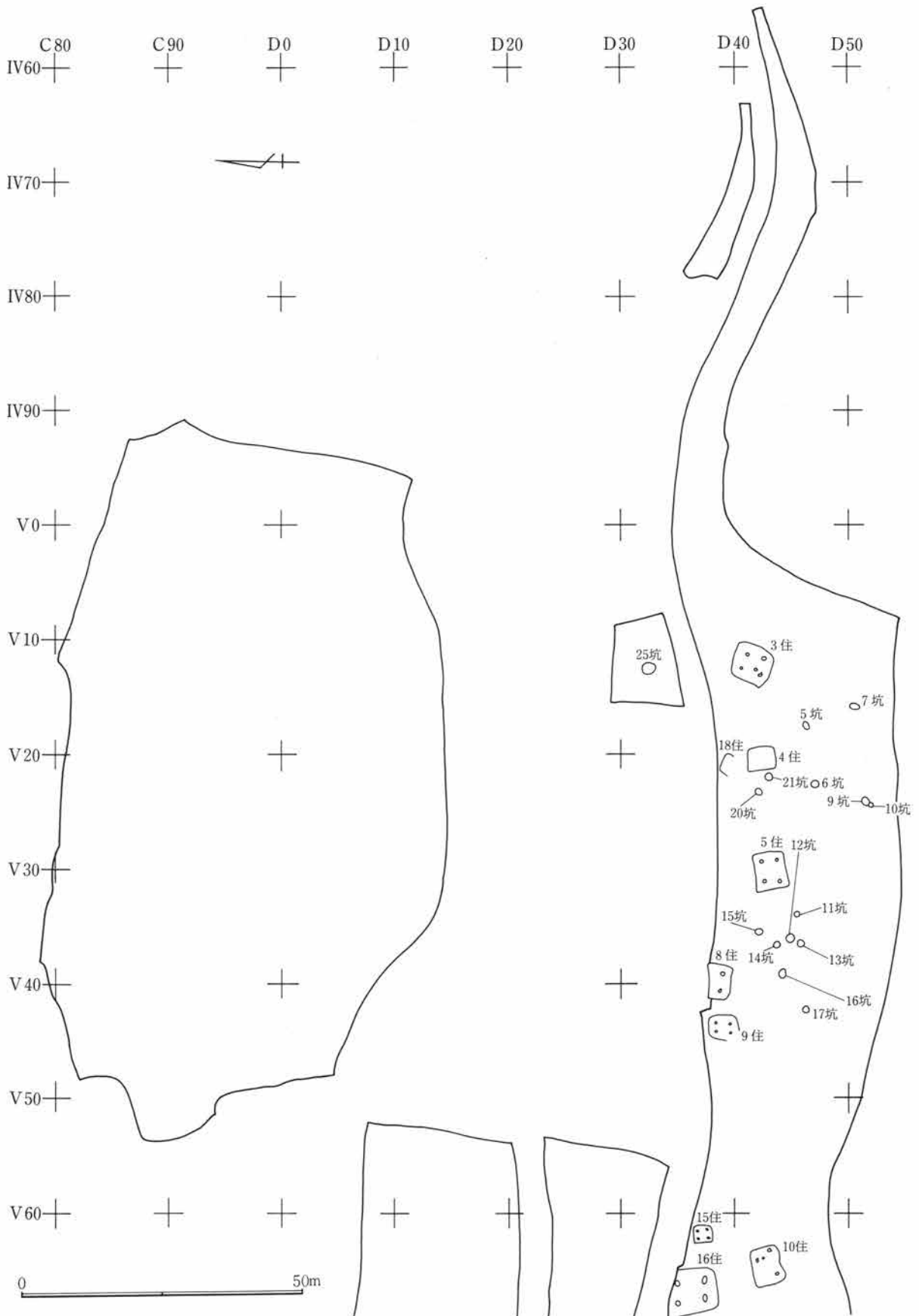
III 弥生時代の遺構と遺物



0 50m

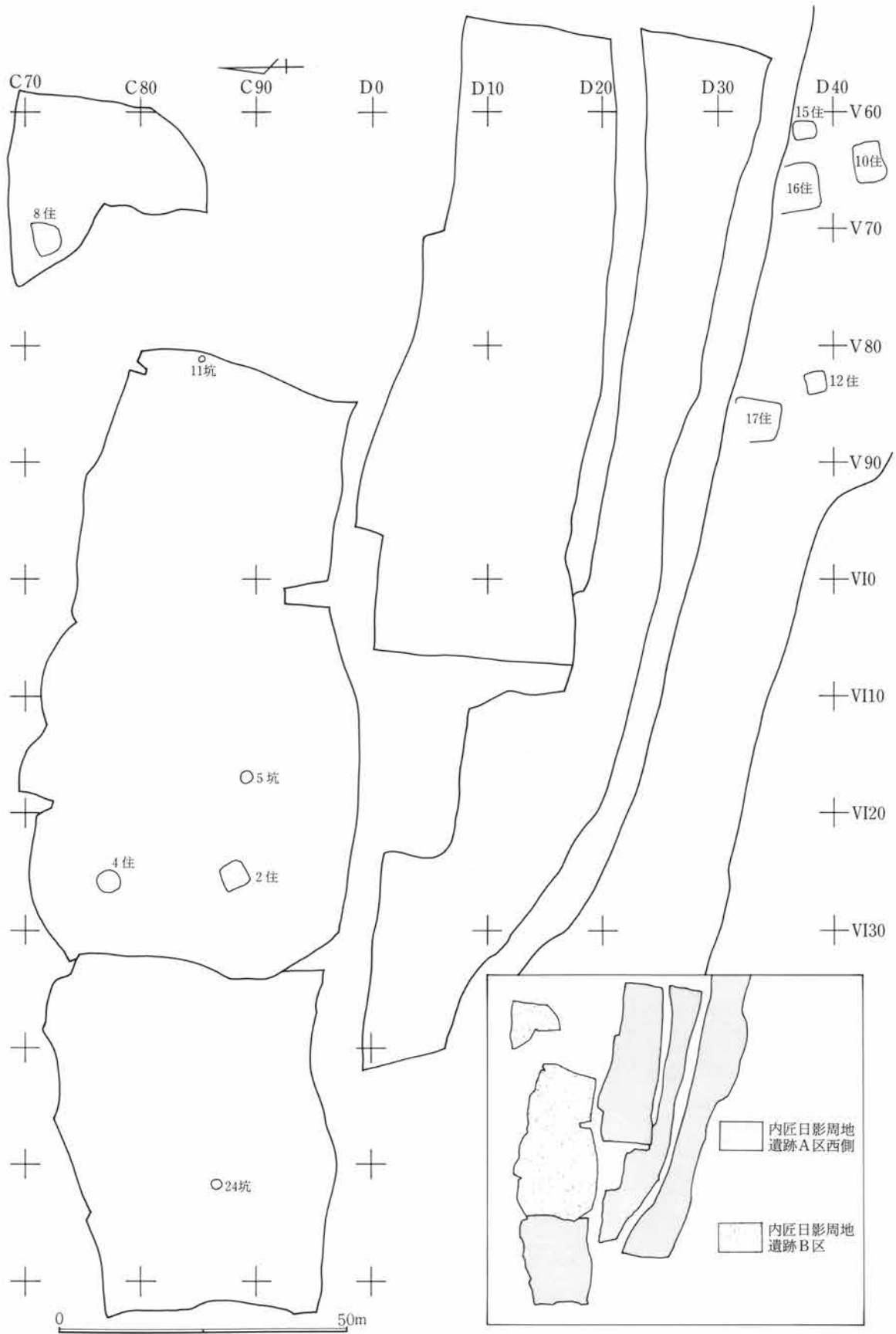
第68図 弥生時代遺構分布(1)・内匠諏訪前遺跡





第 69 図 弥生時代遺構分布 (2)・内匠日影周地遺跡 A 区東側

III 弥生時代の遺構と遺物



第70図 弥生時代遺構分布(3)・内匠日影周地遺跡

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

### 1. 検出された遺構の概要

地区別に概要を述べていきたい。

#### 内匠諏訪前遺跡A区（第107図参照）

内匠諏訪前遺跡A区は発掘区で大きく東側（Ⅲ5～Ⅲ63）と西側（Ⅲ78～Ⅳ57）の2つの地区に別れている。

東側の地域では、竪穴式住居8軒と土坑1基が検出されている。住居はすべて古墳時代後期の土器を伴出しており、当該期の住居と考えられる。土坑については遺物を出土していないが、埋没土の様相から、他の住居とほぼ同じ時間内のものである可能性が高い。また、Ⅲ40以西は遺構が検出されていないが、この部分は、調査の時点でローム層が消失していたことから、本来はなんらかの遺構があった可能性は否定できない。

西側の地域では、12基の土坑が検出されている。この地区も遺構確認時にはローム層が消失していた。土坑の多くは柱穴状であったが、竪穴式住居の痕跡（柱穴）である可能性が高い。埋没土には浅間B軽石を含んでいるものがおおかったが、B軽石を含まずに、古墳時代後期の土器が出土する例もあった。

#### 内匠諏訪前遺跡B区（第107図参照）

諏訪前遺跡A区の西側と隣接する。この地区は、ローム層の消失はなかった。竪穴式住居2軒と土坑3基を検出している。住居は古墳時代後期の土器を伴出していることから当該期の遺構である。土坑からは、土器の出土はなかったが浅間B軽石を埋没土中に含んでいる。

#### 内匠日影周地遺跡A区（第108・109図参照）

方形周溝墓1基・古墳1基・竪穴式住居7軒・土坑4基・竪穴状遺構1基・溝2条が検出された。

古墳時代前期と思われる遺構としては方形周溝墓

と竪穴式住居1軒と竪穴状遺構があげられる。

古墳時代中期と思われる遺構としては古墳がある。古墳時代後期と思われる遺構は、竪穴式住居6軒である。また、C80～D15・IV90～V55に含まれる地域は、ローム層が消失していた。

平安時代と思われる遺構は、土坑と溝である。

#### 内匠日影周地遺跡B区（第109図参照）

竪穴式住居4軒・土坑4基・溜井状遺構1基が検出された。古墳時代前期～中期の遺構として竪穴式住居2軒があげられる。古墳時代後期の遺構としては2軒の竪穴式住居がある。溜井状遺構と土坑は平安時代の可能性が高い。

### 2. 竪穴式住居

#### 内匠諏訪前遺跡A区（第107・221図参照）

検出された8軒の住居は、北側に傾斜する場所に立地し、6世紀末～7世紀前半に比定される。3・9号住居は1号屋敷（江戸時代）により削平される。また2号住居は近現代の削平によりきわめて残存状態が悪かった。8軒の住居は、竈位置がバラエティーに富み、北竈が3軒（3・7・9号住居）、南竈が1軒（2号住居）、東竈が2軒（4・5号住居）、西竈が2軒（1・6号住居）、であった。また、住居間の接合も確認されている（第222図参照）。

#### 内匠諏訪前遺跡B区（第107図参照）

検出された2軒は、古墳時代後期の7世紀代に比定される。3号住居は残存状態が悪かった。

#### 内匠日影周地遺跡A区（第108・109図参照）

7軒検出された。1号住居が古墳時代前期に比定されるが、他の住居は古墳時代後期の7世紀代に比定される。14号住居は、竈が存在しなかった。

#### 内匠日影周地遺跡B区（第109図参照）

4軒検出された。それぞれ、5号住居が古墳時代前期に、3号住居が古墳時代前期～中期に、1・6

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

号住居が古墳時代後期の7世紀代に比定される。

内匠諏訪前遺跡A区1号住居

位置 C84III34他

写真 PL38・52

形状 長辺が4.8mで短辺が4.6mの隅丸長方形を呈する。

面積 21.6m<sup>2</sup>

方位 N-93°-W

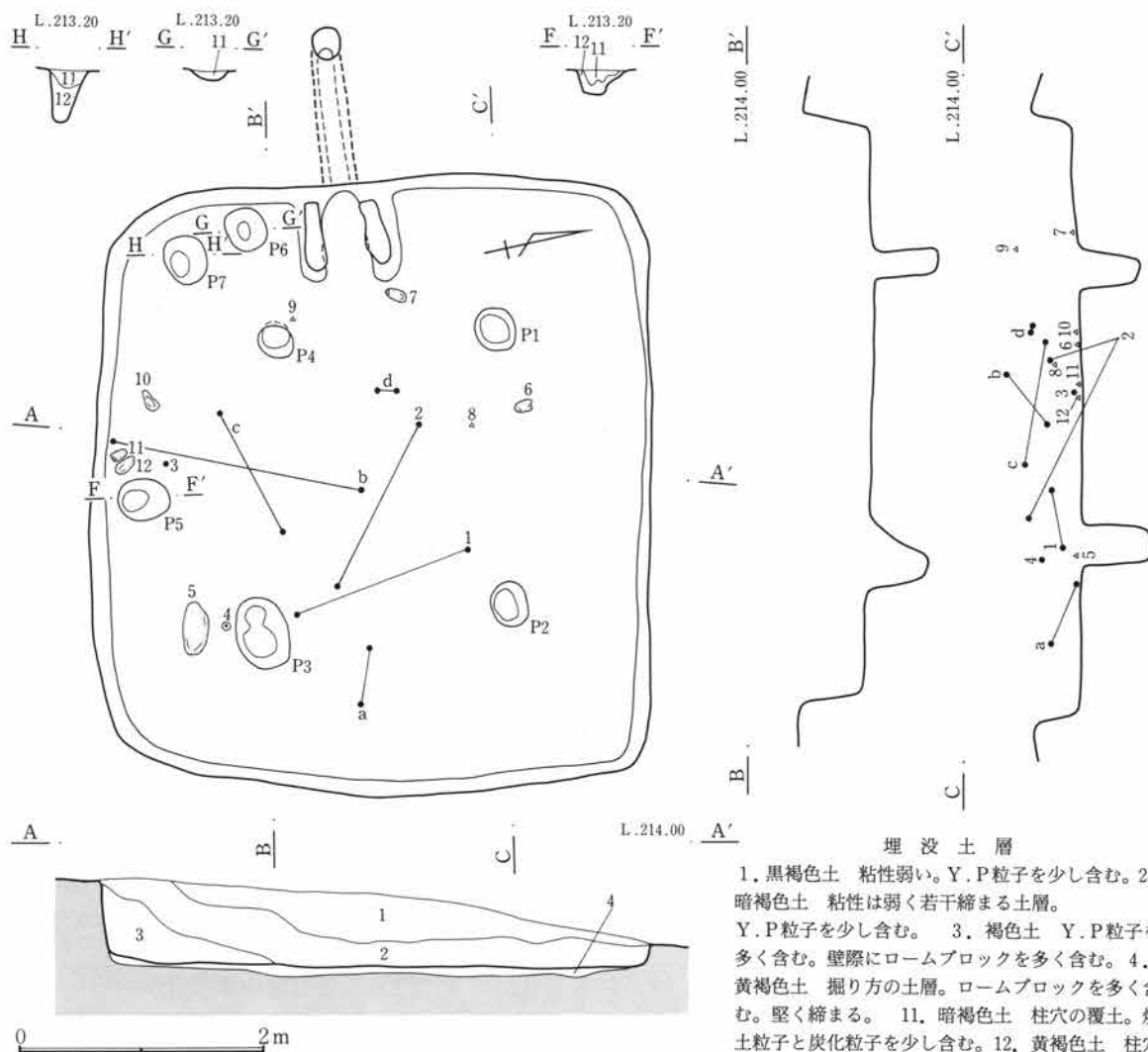
床面 地形が北から南に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを19～64cm掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。住居中央付近がとくに堅固であった。

埋没土 覆土下層はローム質の土壌だが、覆土上層は黒褐色土が主体をなす。

竈 西壁中央付近にあり、方位はN-90°-Wであった。残存状況は良好であったが天井部は崩落していた。袖は暗灰褐色粘土でつくられており焚口幅は32cmである。煙道部はトンネル状に残っており、規模(径×長さ)は、20×124cmであった。煙道は、ほぼ水平に掘られ、その後地表面に向かって直上する断面L字形を呈する。

柱穴 7本検出された。各柱穴の規模《(径)×長さ》は、P1:(34)×56cm、P2:(36)×59cm、P3:(56×42)×48cm、P4:(26)×52cm、P5:(42×32)×52cm、P6:(30)×12cm、P7:(30)×50cm、であった。なお、P7はその位置及び大きさから貯蔵穴にあたる可能性が強い。

遺物 住居内から、土師器128点・須恵器1点・石



埋没土層

1. 黒褐色土 粘性弱い。Y.P粒子を少し含む。
2. 暗褐色土 粘性は弱く若干締まる土層。Y.P粒子を少し含む。
3. 褐色土 Y.P粒子を多く含む。壁際にロームブロックを多く含む。
4. 黄褐色土 掘り方の土層。ロームブロックを多く含む。堅く締まる。
11. 暗褐色土 柱穴の覆土。焼土粒子と炭化粒子を少し含む。
12. 黄褐色土 柱穴の覆土。Y.P粒子を少し含む。

第71図 諏A1号住居

## 2. 竪穴式住居

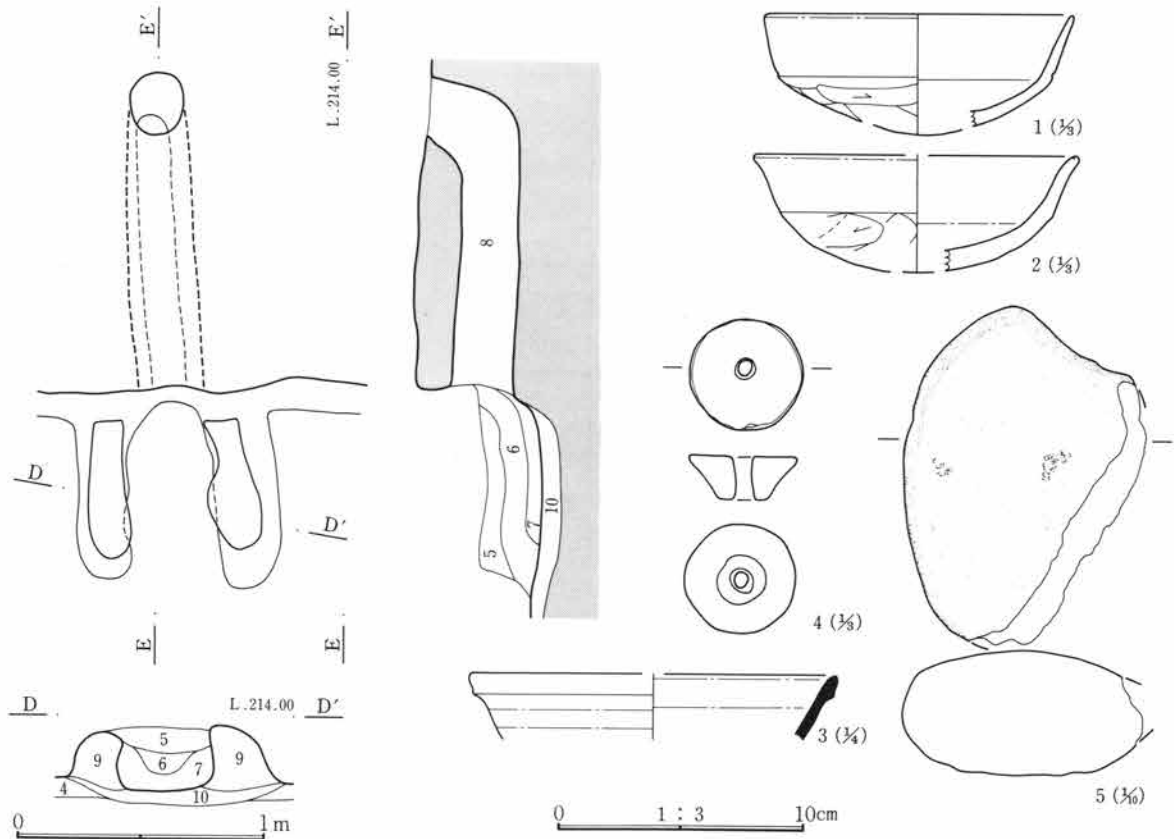
器類12点・紡錘車1点が出土した。遺物は主に覆土中層の住居南側で多く出土した。石器類の中で、石器は平面図にしるしたものだけである。

なお、紡錘車の出土は内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡内でこの1点だけであった。

接合資料a～dは、土師器甕の胴部である。

(遺物観察表：156頁)

備考 本住居は、1号屋敷（江戸時代）西側の盛土下に位置する。



竈 埋没土層

5. 暗褐色土 粘性は弱く若干締まる。Y.P粒子を少し含む。6. 褐色土 竈天井の崩壊土。粘土質で炭化粒子と焼土粒子を少し含む。7. 多量の焼土と炭化粒子を含む。7層の下部が灰層。8. 暗褐色土 煙道の覆土。焼土粒子を少し含む。9. 暗灰褐色粘土 竈の袖の土層 10. 褐色土 竈掘り方の土層 ロームブロックと焼土粒子を含む。

第72図 諏A1号住居竈と出土遺物

### 内匠諏訪前遺跡A区2号住居

位置 C72III31他 写真 PL38・52

形状 竈周辺を除く大部分が近現代と思われる削平により消失しているために、住居の規模や形態及び竈以外の施設は不明である。

方位 N-19°-W

床面 竈周辺のみ残存しているが、他の部分は掘り方も含めて不明である。竈部分においても立ち上がりを確認することはできなかった。

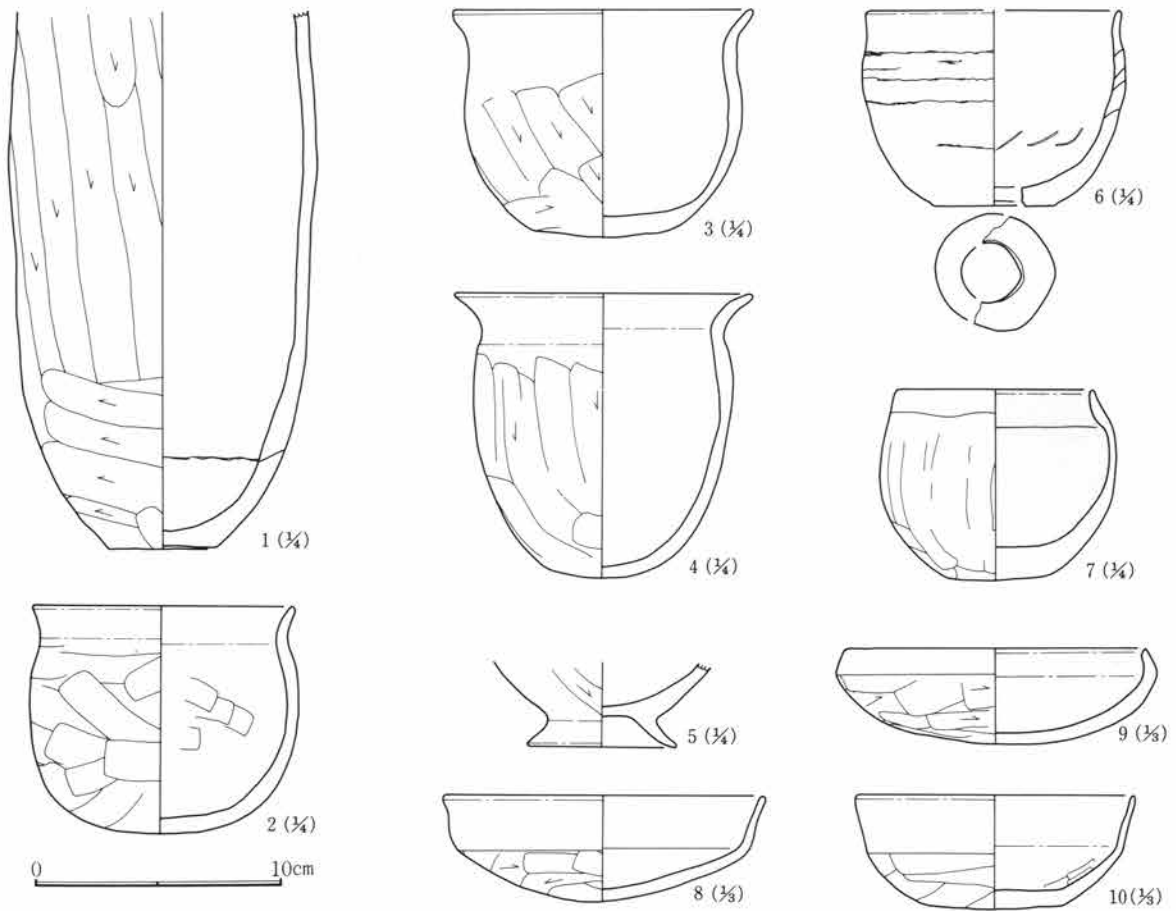
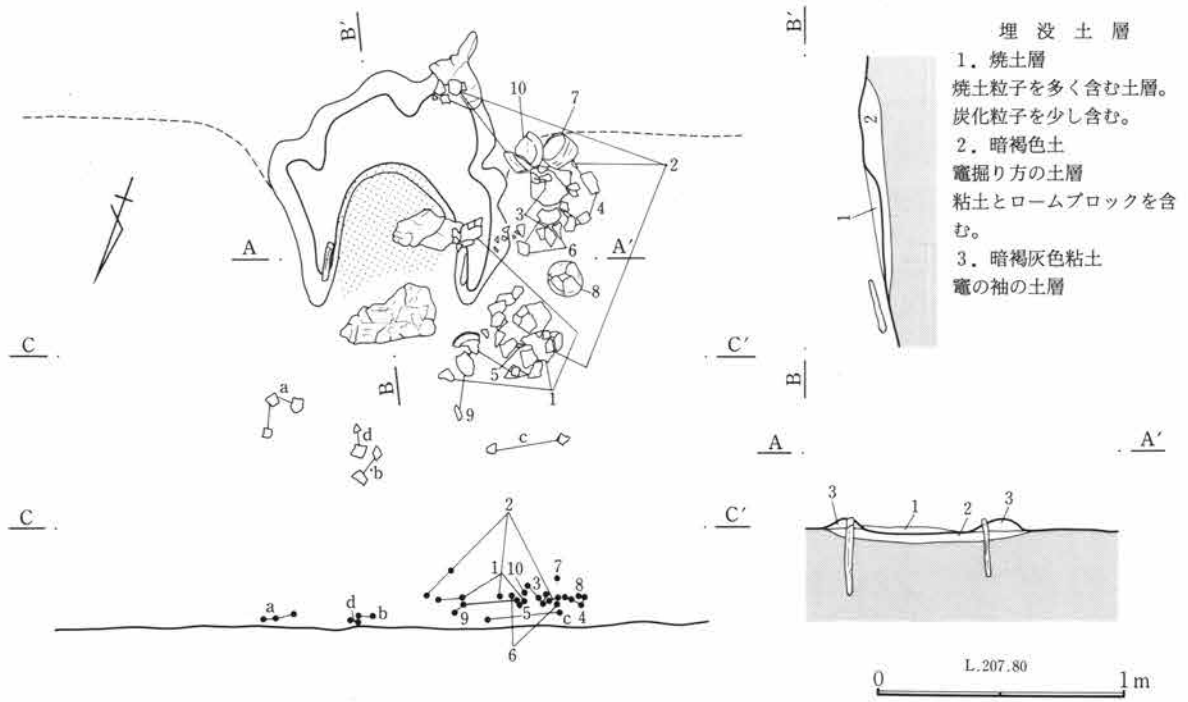
埋没土 表土を除去した段階で、埋没土は遺物の周

辺僅かしか存在しなかったが、その土は竈に起因する焼土や粘土などであった。

竈 住居南辺に位置していたと思われる。袖石と崩落した天井石が検出された。焚口幅は52cmで、燃燒部の長さは47cmであった。また、竈南側にも竈材と思われる石や粘土が散乱していた。

遺物 竈の前（北側）と右（西側）で79点の土師器が出土した。完形に復元できる土器が多かった。5は平安時代の遺物である。接合資料a～dは土師器甕の破片である。（遺物観察表：156・157頁）

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第73図 諏A 2号住居と出土遺物

内匠諏訪前遺跡A区3号住居

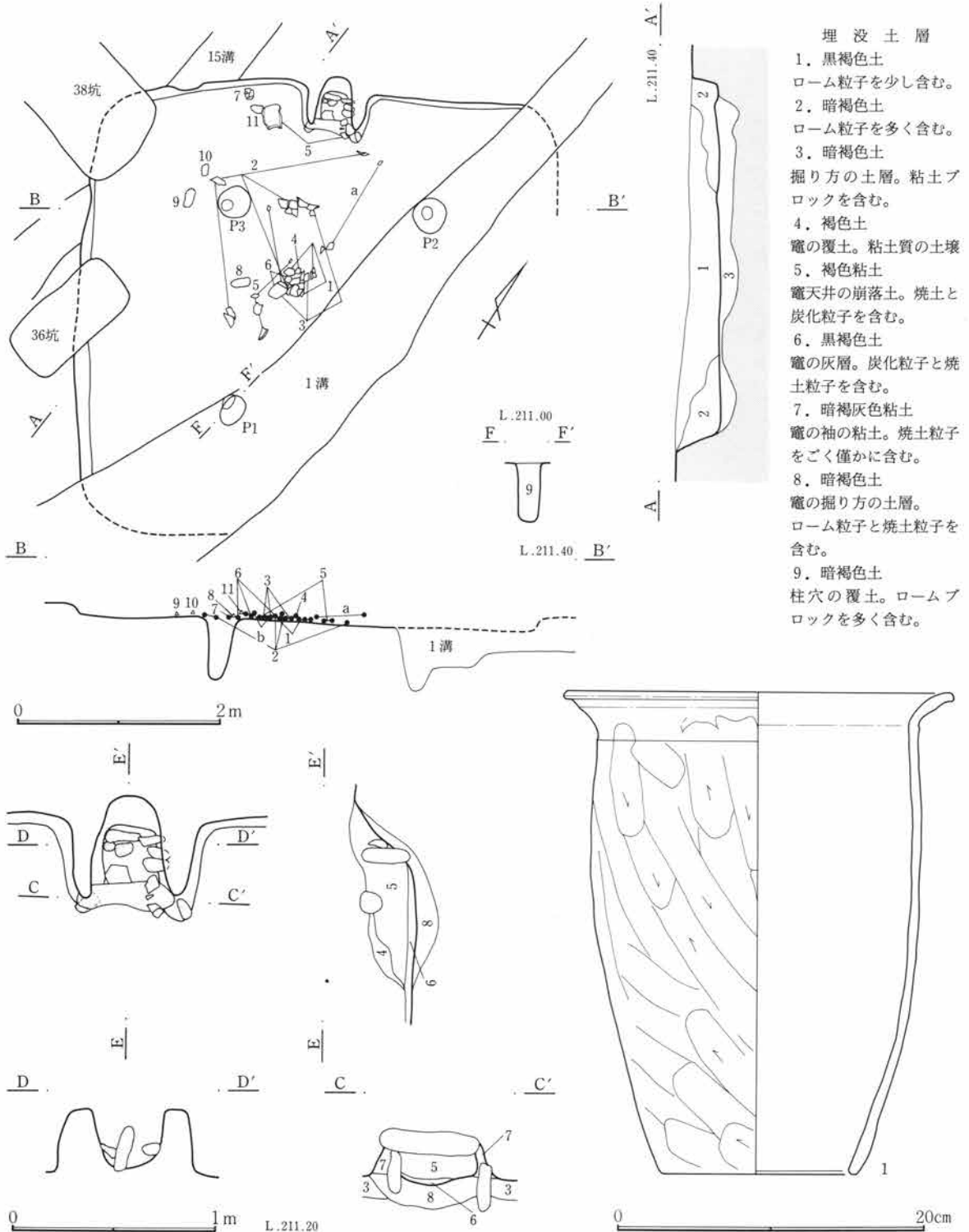
位置 C86III16他 写真 PL39・53

形状 東半分を1溝及び1号屋敷に伴う削平によって消失するが、隅丸方形を呈すると思われる。

各辺の長さ及び面積は不明である。

方位 N-27°-W

床面 本来は北東に傾斜する地点に立地している。最大壁高40cmで、掘り方をもち貼床をする。中央付近が堅固であったが、他の部分は軟弱であり竈付近は掘り過ぎである。



第74図 諏訪A3号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

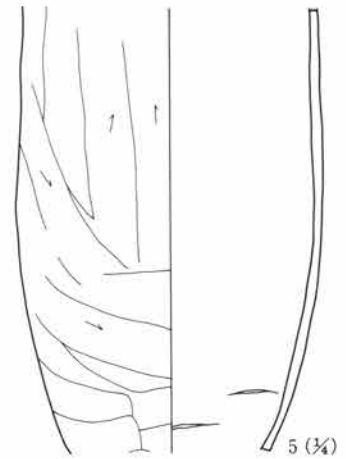
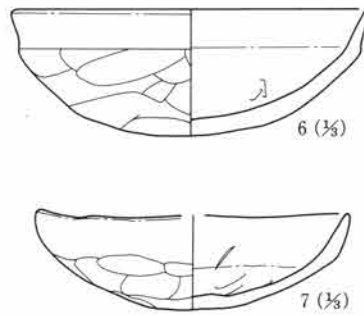
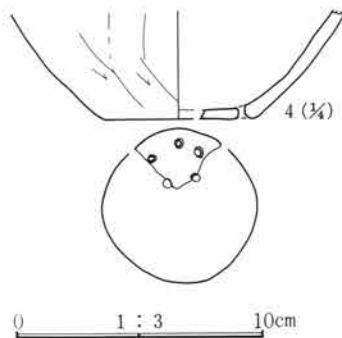
**竈** 北壁中央にあり、方位はN-21°-Wであった。残存状態は良好で、袖石の上に天井石がのった状態で確認できた。焚口幅は50cmで、竈内部では、壁に沿う石と石製支脚が検出された。

**柱 穴** 3本検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(24)×49cm、P2：(30)×18cm、P3：(30)×62cm、だがP2は残存の深さであり、あと1本削平部分にあった可能性が強い。

**遺 物** 住居内から土師器92点と石器類21点が出土した。土器は覆土上層からも出土するが、接合関係をもつものは床直上だけであった。また、石器は平面図にしるしたものだけである。

(遺物観察表：157・158頁)

**備 考** 36・38号土坑、1・15号溝に切られ、1号屋敷に削平されている。



第75図 諏A 3号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡A区4号住居

**位置** C75III19他 **写真** PL39・53

**形状** 長辺が3.1mで短辺が2.9mの隅丸長方形を呈する。

**面積** 9.0m<sup>2</sup> **方位** N-105°-E

**床 面** 地形が南から北に傾斜している場所に立地し、ロームを28～76cm掘り込んで床面とする。掘り方をもち貼床をする。柱穴は検出されなかった。

**埋没土** 覆土中層以下はローム質の土壌。

**竈** 東壁中央付近にあり、方位はN-113°-Eであった。残存状況は良好で、天井石などが使用時と思われる位置で検出された。袖は僅かに張り出し、焚口幅は70cmである。煙道部はトンネル状に残り、規模(径×長さ)は、25×112cmであった。煙道は、

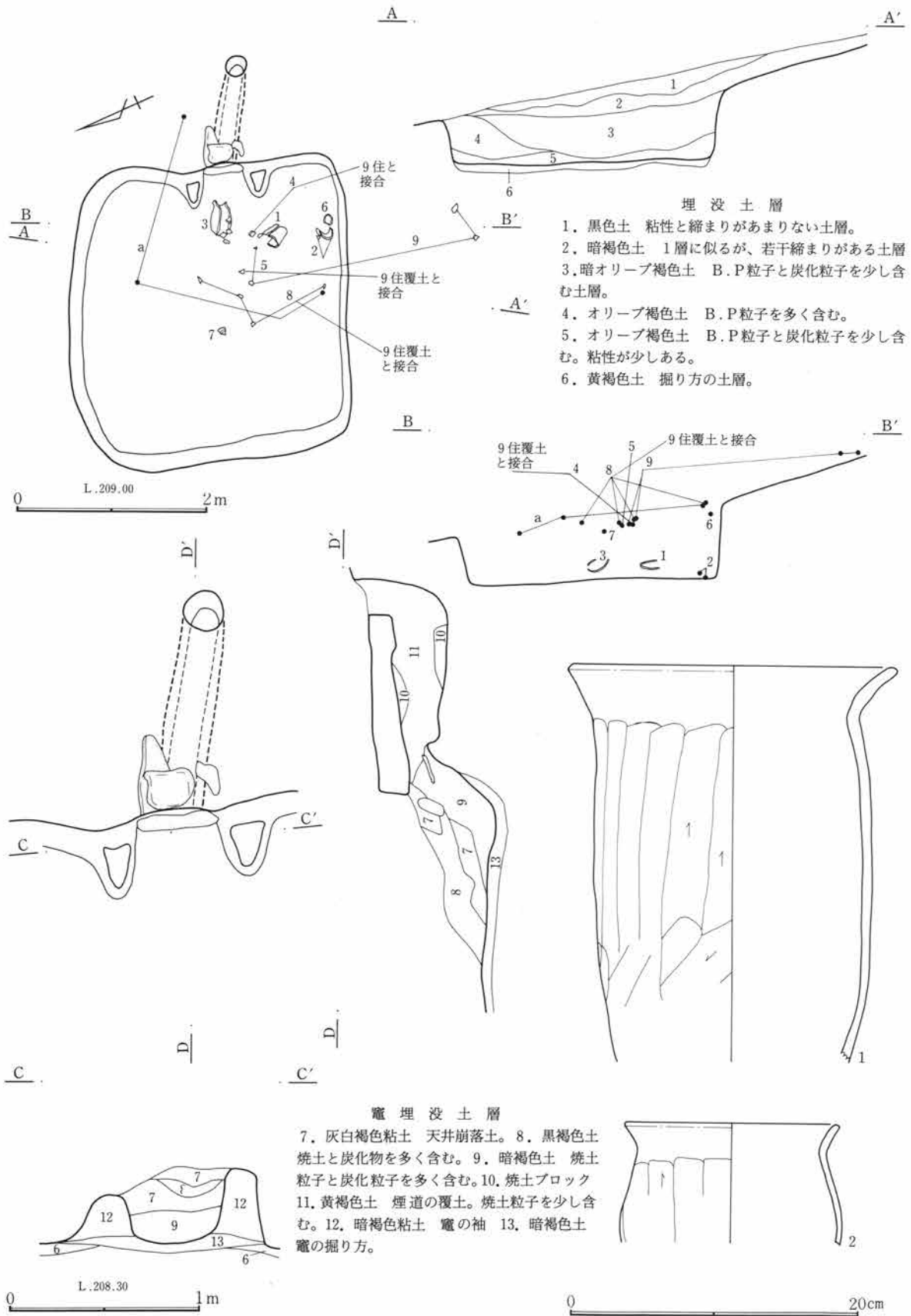
断面L字形を呈する。

**遺 物** 土師器53点と石器類12点を出土した。覆土上層から出土した4・5・8が9号住居内の土器と接合関係をもつ(第84・222図参照)。また、覆土間(出土地点不明)で7号住居と接合関係をもつ(第222図参照)。覆土上層で接合関係が多くみられたが、覆土下層では、出土した遺物じたいが少なかったこともあり、あまり接合関係はみられなかった。覆土上層とほぼ同じ土層の近接グリッドからも土師器が出土している(第119図5・9)。接合資料aは土師器甕の胴部である。石器類のうち5点は縄文時代の石器で、本住居にかかわる石器は出土していない。また、縄文土器も覆土から6点出土した。

(遺物観察表：158頁)

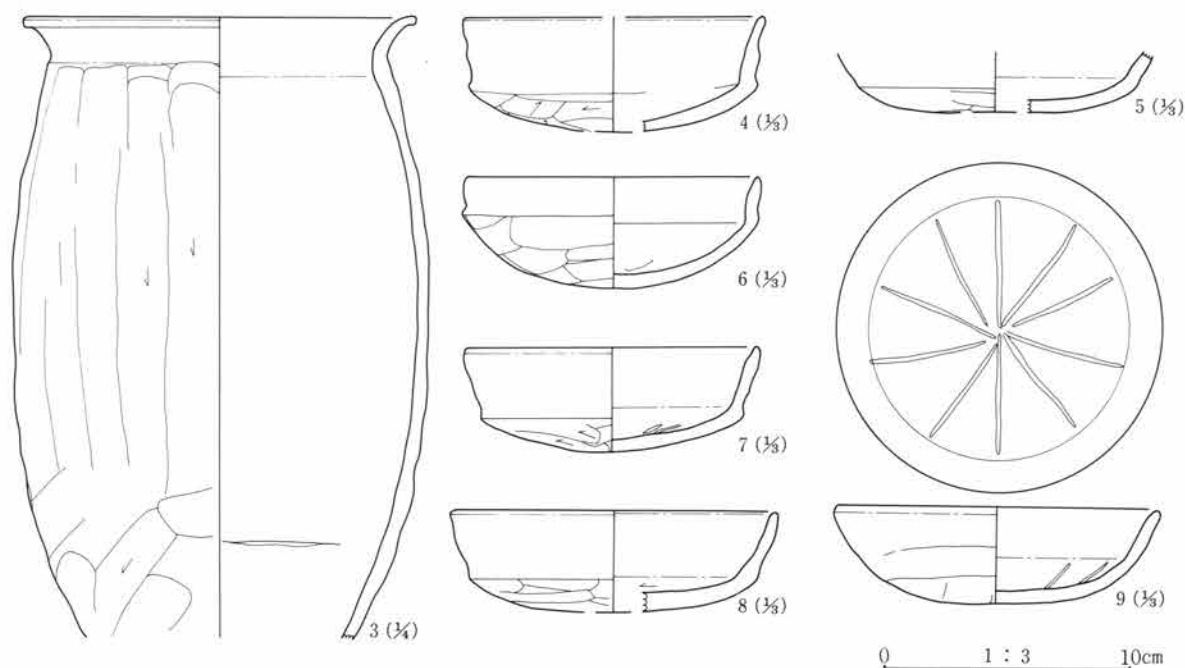


2. 竪穴式住居



第76図 諏A4号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第77図 諏A 4号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡A区5号住居

位置 C80III33他

写真 P L40・53・54

形状 一辺が3.8mの隅丸方形を呈する。

面積 12.4m<sup>2</sup>

方位 N-84°-E

床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。壁の高さは残存状態の良い南壁で79cmであり、逆の北壁は23cmであった。掘り方をもち貼床をする。住居中央付近がとくに堅固であった。

埋没土 2層はローム質の土壌であった。

竈 東壁中央から若干南寄りにあり、方位は住居主軸とほぼ同じであった。残存状況は良好であったが天井部は崩落していた。袖は住居内側にあまり張り出さず、袖石が東壁に貼り付いた状態である。袖石の上ののっていたと思われる天井石が崩落していた。焚口幅は65cmである。煙道部はトンネル状に残っており、規模(径×長さ)は、31×102cmであった。煙道は、ほぼ水平に掘られ、その後地表面に向かって直上する断面L字形を呈する。竈の掘り方調査で、

最初に箱形に掘った後に、暗褐色粘土などで竈をつくったことが判明した。

柱穴 主柱穴4本が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(20)×59cm、P2:(38)×67cm、P3:(28)×50cm、P4:(22)×44cm、であったが深さについては掘りすぎである。

貯蔵穴 竈に向かって右側の住居南東隅で検出された。4cmほど浅く掘りくぼめた後、深く掘り込んでいる。床面からの深さは43cmであった。2・4・5・6・7が出土した。

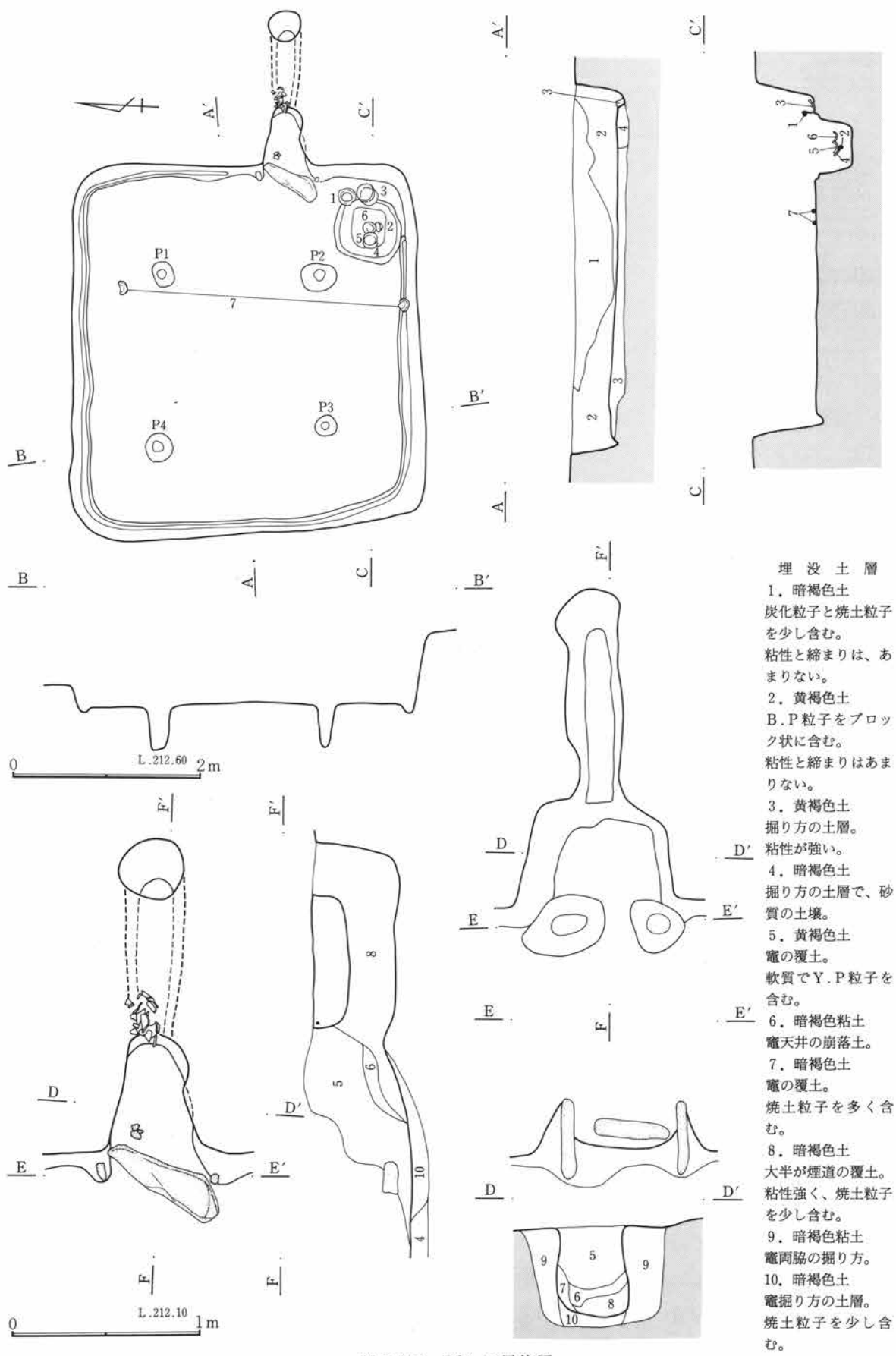
壁周溝 竈前から貯蔵穴にかけては検出されなかったが、他の部分は巡っていた。幅は5～14cmで、深さは3～8cmであった。

遺物 64点の土師器が出土したが、51点は一括して取り上げた。図化できた土器は床直上及び貯蔵穴内から出土したものだけであった。石器類は22点出土したが、大半が縄文時代のものである。

(遺物観察表:158・159頁)

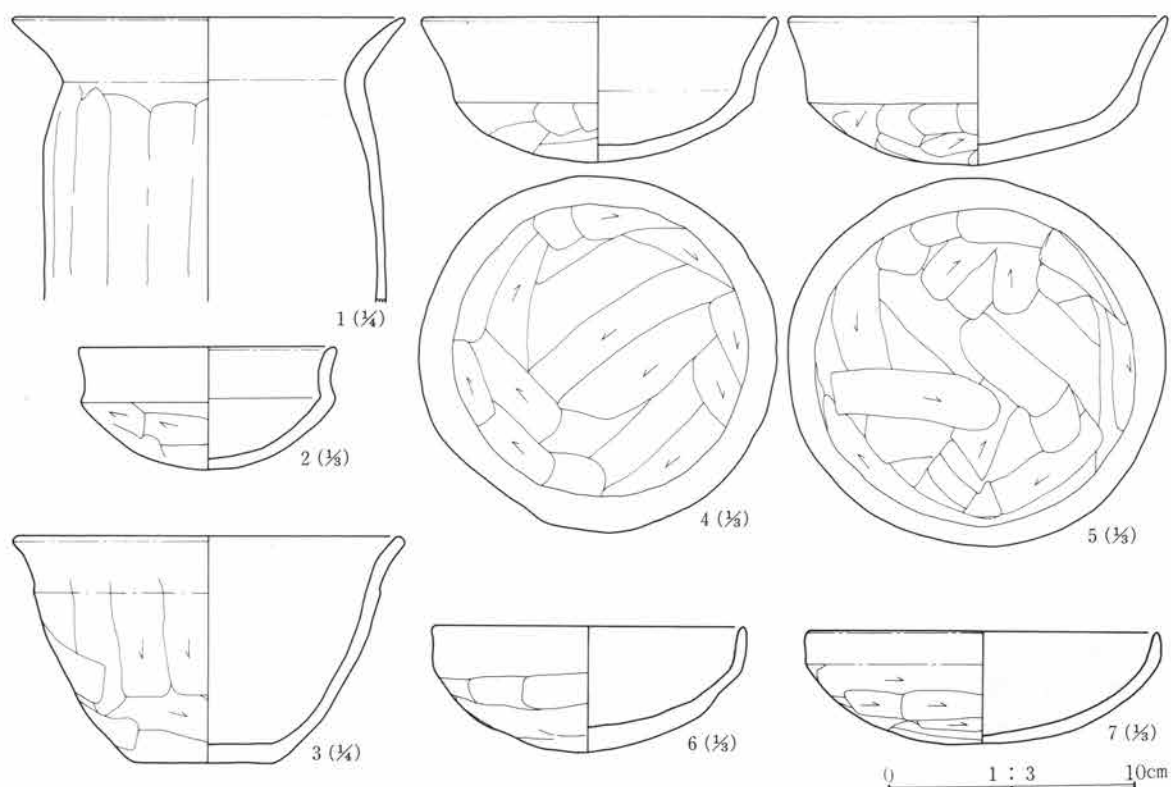
備考 本住居は、1号屋敷(江戸時代)西側の盛土下に位置する。

2. 竪穴式住居



第78図 諏A5号住居

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第79図 諏A 5号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡A区6号住居

位置 C80III63他

写真 PL40・54

形状 一辺が4.9mの隅丸正方形を呈する。

面積 21.0m<sup>2</sup>

方位 N-83°-W

床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。壁の高さは残存状態の良い南壁で91cmであり、逆の北壁は38cmであった。掘り方をもち貼床をする。住居中央付近がとくに堅固であった。

埋没土 住居南壁付近に多量の焼土と炭化物が確認された。また、2層はローム質の土壌である。

竈 西壁中央付近にあり、方位は住居主軸とほぼ同じであった。残存状況は良好であったが天井部及び煙道の天井は崩落していた。袖は暗灰褐色粘土で作られており焚口幅は60cmである。煙道部はトンネル状に残っており、規模(径×長さ)は、32×123cmであった。煙道は、ほぼ水平に掘られ、その後地

表面に向かって直上する断面L字形を呈する。

柱穴 支柱穴4本が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(42×34)×71cm、P2：(40)×71cm、P3：(70×40)×71cm、P4：(40)×61cm、であった。P3は柱穴が重複している。

貯蔵穴 竈に向かって左側の住居南東隅で検出された。長軸78cm・短軸58cm・深さ51cmだった。

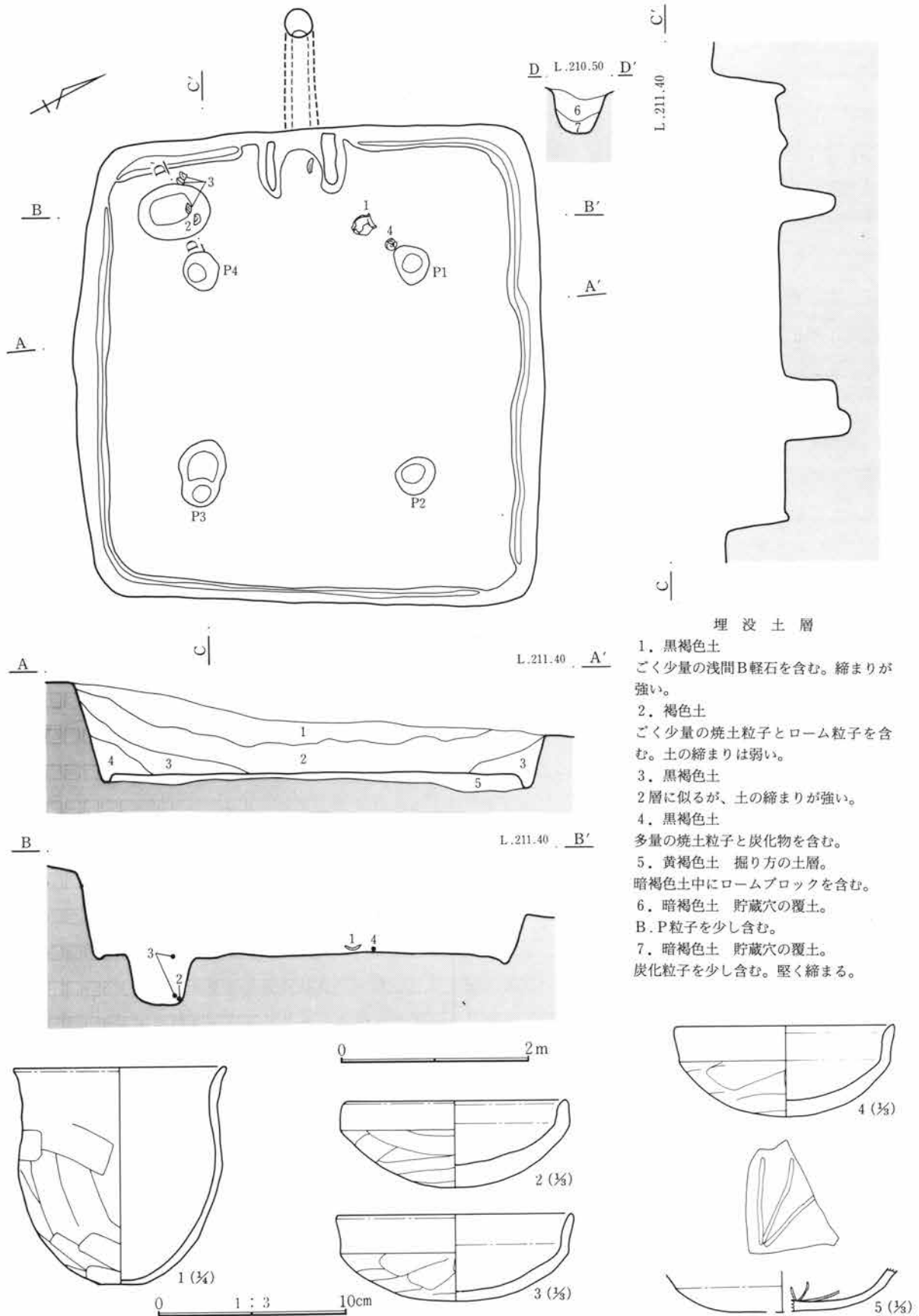
壁周溝 ほぼ全周する。幅は3～10cmで、深さは3～12cmであった。

遺物 248点の土師器が出土したが、239点は一括して取り上げた。覆土から出土した土器(出土位置不明)が7号住居と接合関係をもつ(第82・222図参照)。図化できた土器は床直上及び貯蔵穴内から出土したものだけであった。石器類は83点出土したが、大半が縄文時代のものである。

(遺物観察表：158頁)

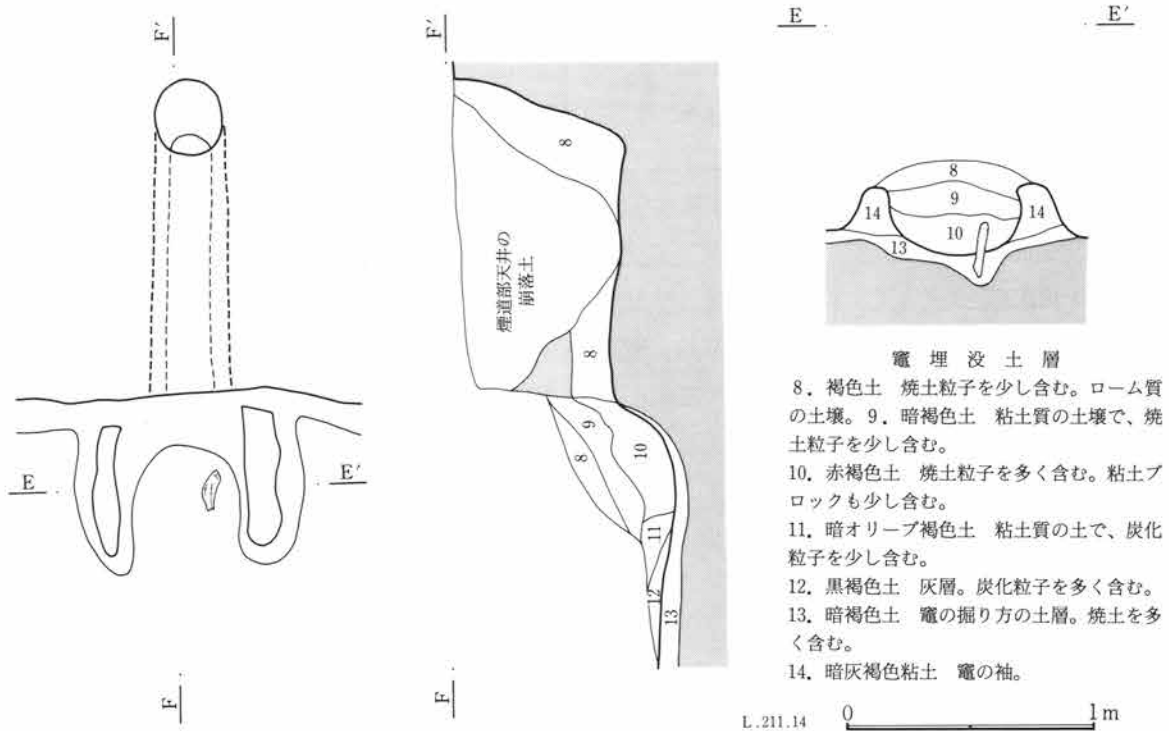
備考 本住居は、1号屋敷(江戸時代)北側の盛土下に位置する。

2. 竪穴式住居



第80図 諏A6号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第81図 諏A 6号住居竈

内匠諏訪前遺跡A区7号住居

位置 C80III19他

写真 P L41・54

形状 長辺が3.6mで短辺が3.2mの隅丸長方形を呈する。

面積 9.2m<sup>2</sup>

方位 N-18°-E

床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。壁の高さは残存状態の良い南壁で95cmであり、逆の北壁は46cmであった。住居北東隅は攪乱（時期不明）により切られている。他の住居と異なり、掘り方をもたず床面全体が軟弱であった。

埋没土 2層及び4層はローム質の土壌である。

竈 北壁中央から若干西寄りにあり、方位は住居主軸とほぼ同じN-15°-Eであった。残存状況は良好であったが天井部は崩落していた。袖は暗灰褐色粘土でつくられており、袖石も残存していた。焚口幅は52cmである。天井石は袖石から前方にずり落ちた状態で検出された。煙道部はトンネル状に残って

おり、規模（径×長さ）は、27×92cmであった。

煙道は南側に傾斜をもって掘られ、斜め上方に立ち上がる形状である。

竈内部においては、石製支脚が倒れた状態で検出された。

柱穴 検出されなかった。

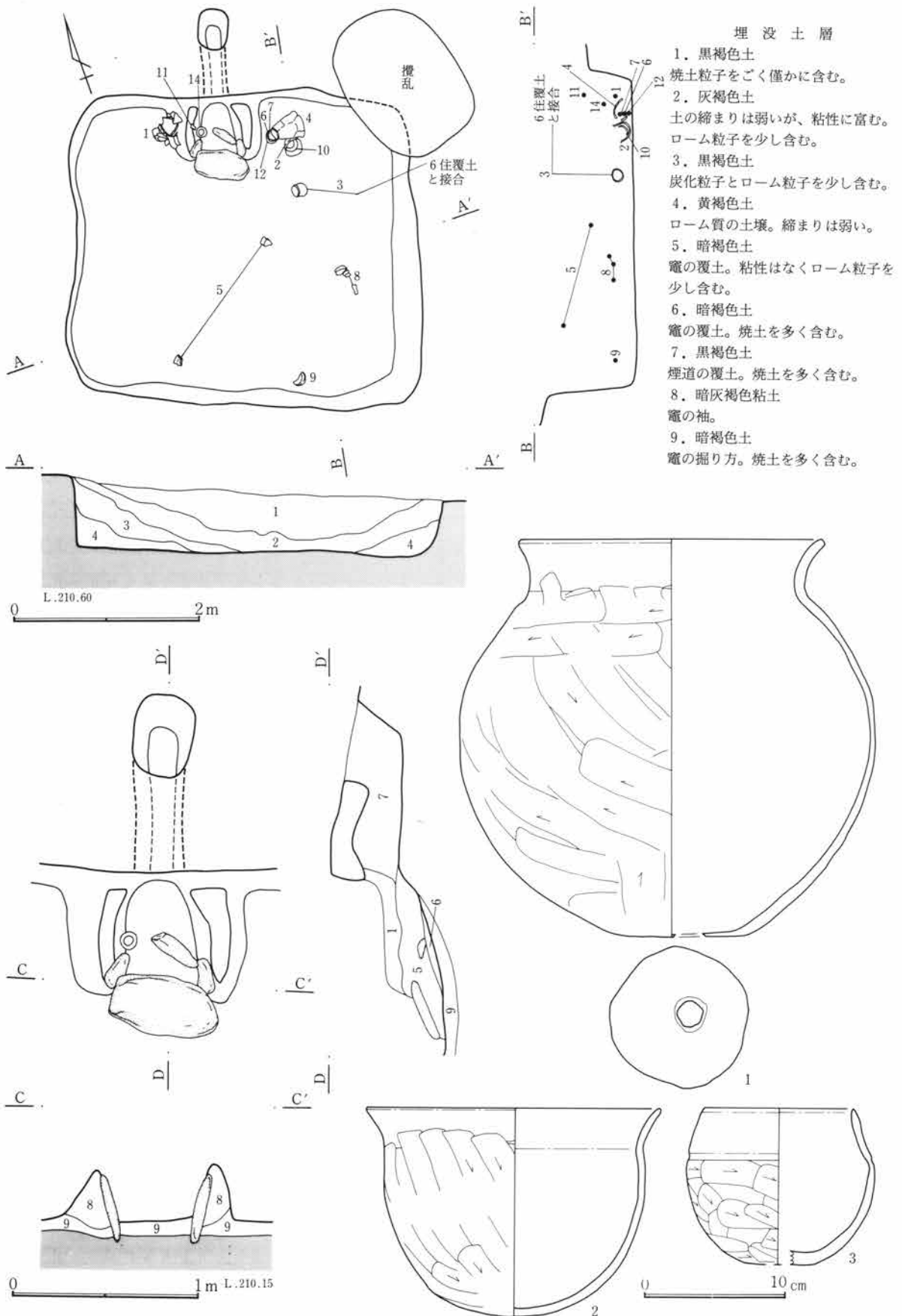
貯蔵穴 検出されなかった。

壁周溝 検出されなかった。

遺物 住居内から土師器169点と石器類32点が出土したが、土器146点と石器類29点は一括してとりあげた。他の住居との接合関係は2例検出できた（第222図参照）。3は6号住居覆土の土器（出土位置不明）と接合した。また、13は4号住居覆土土器と接合した（両住居ともに出土位置不明）。完形（もしくは近い状態）に復元できた土器は、竈周辺から出土したものが大半を占める。また、石器類の大半は縄文時代のものである。（遺物観察表：159・160頁）

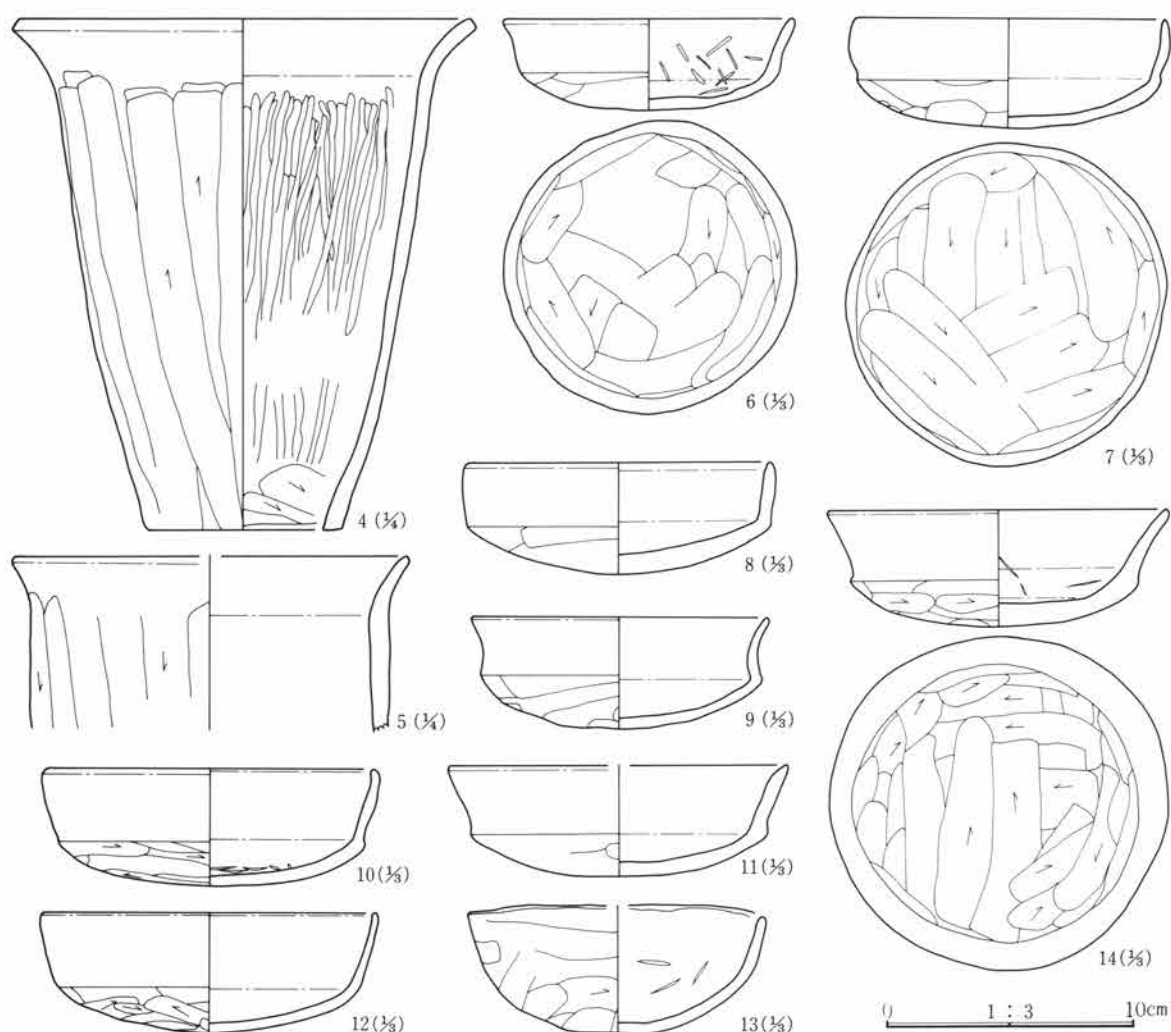
備考 本住居は、1号屋敷（江戸時代）北側の盛土下に位置する。

2. 竪穴式住居



第 82 図 諏A 7号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第83図 諏A 7号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡A区9号住居

位置 C89III17他 写真 PL41・55

形状 住居の南3/4が調査区域外で、住居北西部は1号屋敷による削平のために全体形状は不明だが、一辺4.6mの隅丸方形を呈すると思われる。

面積不明 方位 N-11°-W

床面 地形が北に傾斜変換する地点に立地し、壁高は33～68cmであった。残存部分は、掘り方の上に貼床を施し堅固であった。

埋没土 1層は表土層で、2層以下が埋没土。

竈 北壁中央付近にあり、方位は住居と同じである。残存部分で袖石及び2つに割れた天井石が検出され、内部では、石製支脚が立った状態で検出された。これらの石材は結晶片岩である（他の諏訪前A

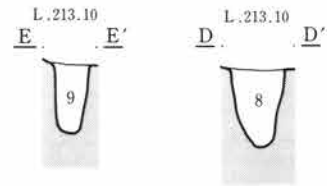
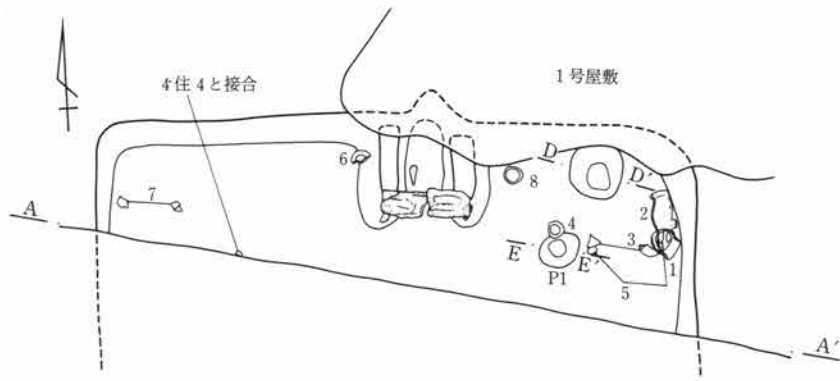
区古墳時代の住居が使用する竈材は牛伏砂岩である）。焚口幅は55cmで、燃烧部の長さは43cmであった。  
柱穴 1本検出された。規模《(径)×深さ》は、P1：(30)×59cm、である。

貯蔵穴 竈に向かって右側の住居北東隅で検出された。径は42cmで深さは63cmである。

遺物 住居内から土師器146点と石器類25点が出土したが、土器130点と石器類19点は一括してとりあげた。4号住居との接合関係が3例検出できた（第76・222図参照）。図化できた土器は、床直上のものが多かった。また、石器類の大半は縄文時代のものである。（遺物観察表：160・161頁）

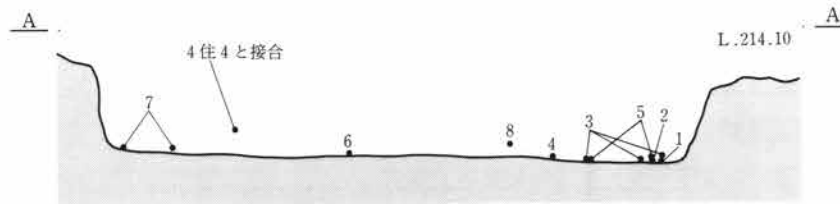
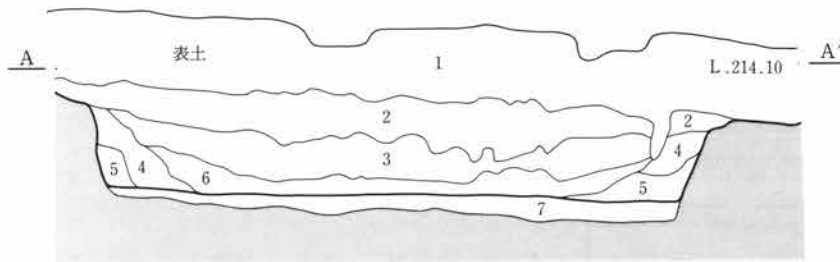


2. 竪穴式住居

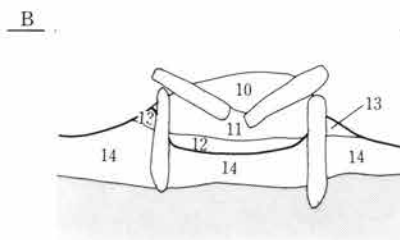
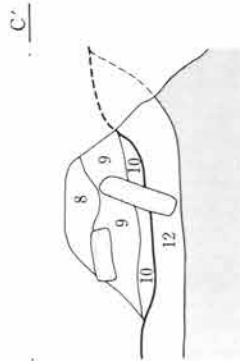
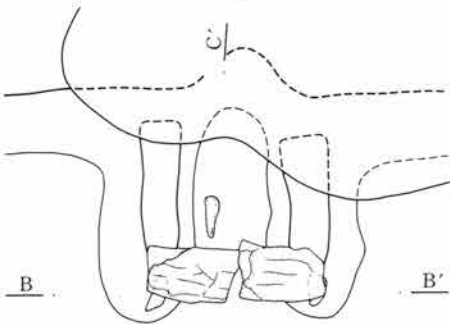


埋没土層

- 1. 褐色土  
表土層。浅間A軽石を少し含む。
- 2. 黒褐色土  
粘性と締まりが弱い。
- 3. 褐色土  
粘性をもち締まりが強い。
- 4. 黄褐色土  
Y.P粒子を含む。
- 5. 暗褐色土  
少量の炭化粒子と焼土粒子を含む。
- 6. 黒褐色土  
Y.P粒子を少し含む。
- 7. 灰黄褐色土  
掘り方の土層。  
黒色土と暗褐色土のブロックを多く含む。強く締まる。
- 8. 暗褐色土  
貯蔵穴の覆土。  
ローム粒子を少し含む。
- 9. 暗褐色土  
柱穴の覆土。  
炭化粒子を僅かに含む。



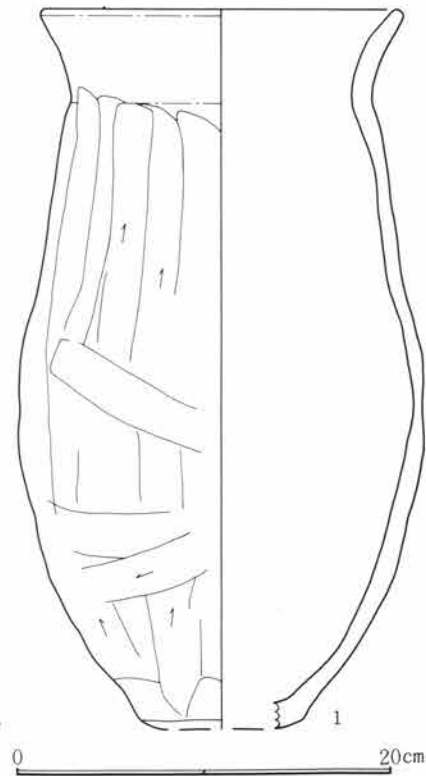
0 2m



0 1m L.213.50

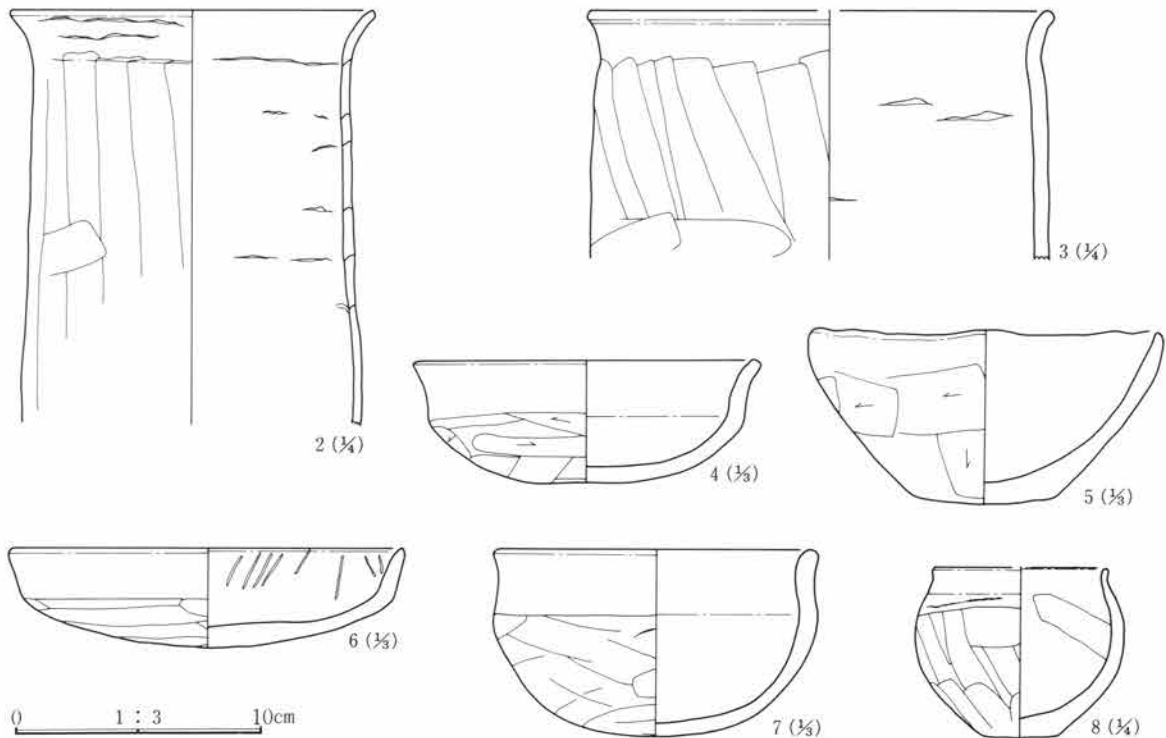
竈埋没土層

- 10. 暗褐色土  
砂質で締まりが弱い。
- 11. 暗灰褐色粘土  
天井の粘土が崩落したもの。
- 12. 暗褐色土  
多くの焼土と炭化粒子を含む。
- 13. 暗灰褐色粘土 竈の袖。
- 14. 暗褐色土  
竈の掘り方。焼土とロームブロックを含む。



第84図 諏A9号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第85図 諏A 9号住居出土遺物

内匠諏訪前遺跡B区1号住居

位置 C82IV50他 写真 PL42・55・56

形状 一辺が4.6mの隅丸正方形を呈する。

面積 19.4m<sup>2</sup> 方位 N-32°-W

床面 地形が北西方向に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。地形を反映した壁高で、残りの良い南東では32cm、残りの悪い北西で21cmであった。掘り方をもち貼床をする。壁際の床面は軟弱であるが、中央付近は堅固である。床面も地形と同様の傾斜を示し、南東と北西の比高は10cmである。

埋没土 ローム質の土壌が堆積する。

竈 新旧関係をもつ2基の竈を検出した。

新竈 北壁中央から若干東寄りにあり、方位はN-24°-Wであった。残存状態は良好であったが燃焼部から煙道にかかる地点に攪乱をうける。また、袖石及び割れた天井石が検出された。焚口幅は、32cmで、煙道の幅は20cm、長さは124cmであった。

旧竈 掘り方調査の際に煙道が検出された。新竈の左側(西側)に位置し、方位はN-37°-Wである。

煙道の幅は20cm、長さは124cmであった。

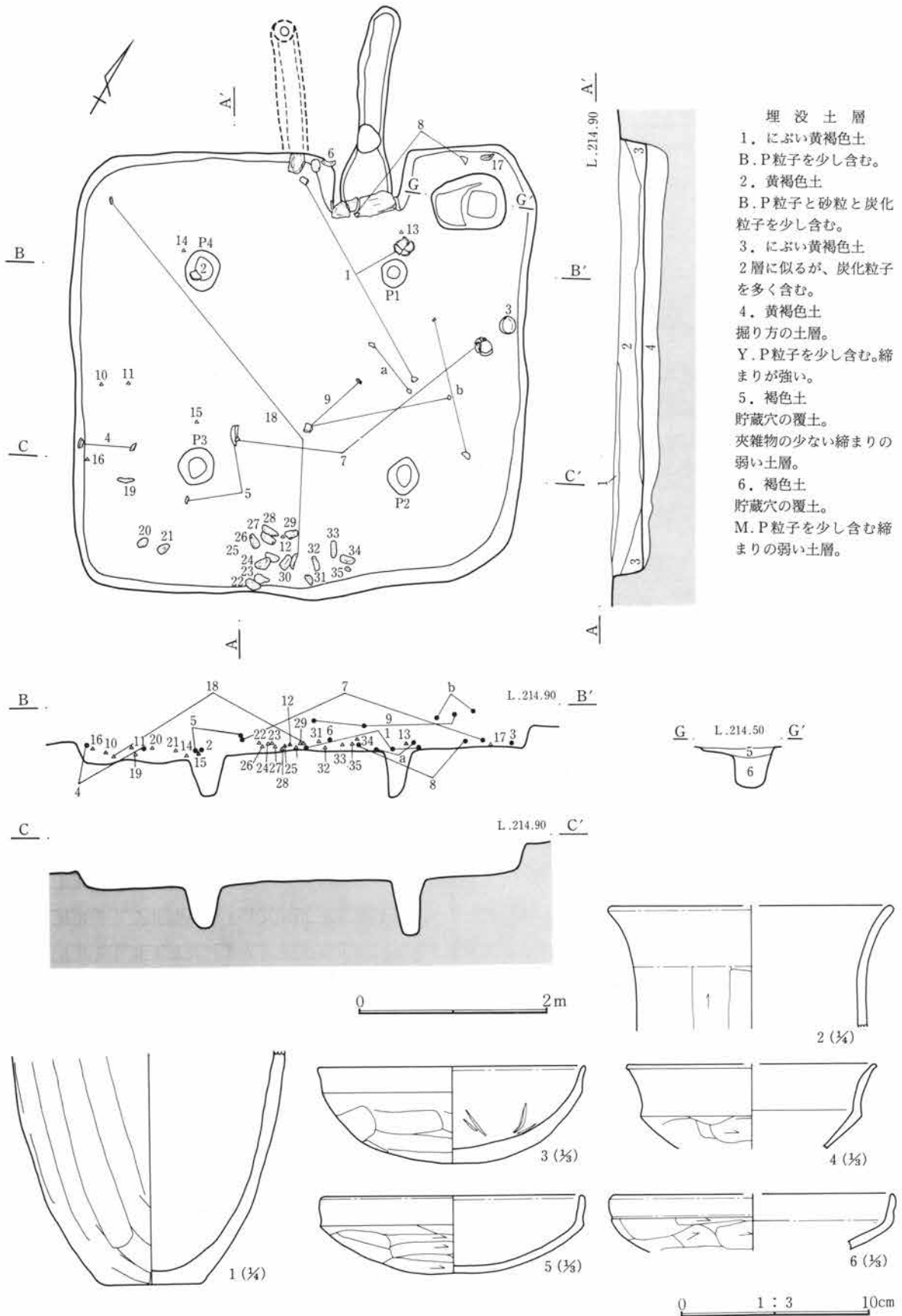
柱穴 主柱穴4本が検出された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:(30)×50cm、P2:(34)×56cm、P3:(36)×46cm、P4:(40)×43cm、であった。また、掘り方調査の際に新たに柱穴が確認されたが、明確に拡張を示す状態ではなかった。

貯蔵穴 竈に向かって右側の住居北東隅で検出された。西側を浅く掘りくぼめ東側を方形に深く掘り込む。規模は、長軸78cm、短軸54cm、深さ38cm、であった。

遺物 住居内から、189点の土師器と、石器類49点を出土したが、土器の104点は一括して取り上げた。図化した土器は、大半が床面付近の遺物であった。石器類の中で平面図に示したものの以外は縄文時代の石器類である。白玉が6点出土したが(未製品も含む)、図化したものの以外の出土はなく、調査時にも土をふるって検出に努めた。覆土中からは、白玉の石材である滑石のフレイク・チップ類は出土しなかった。また、床直上から20点のこも網石が出土した。

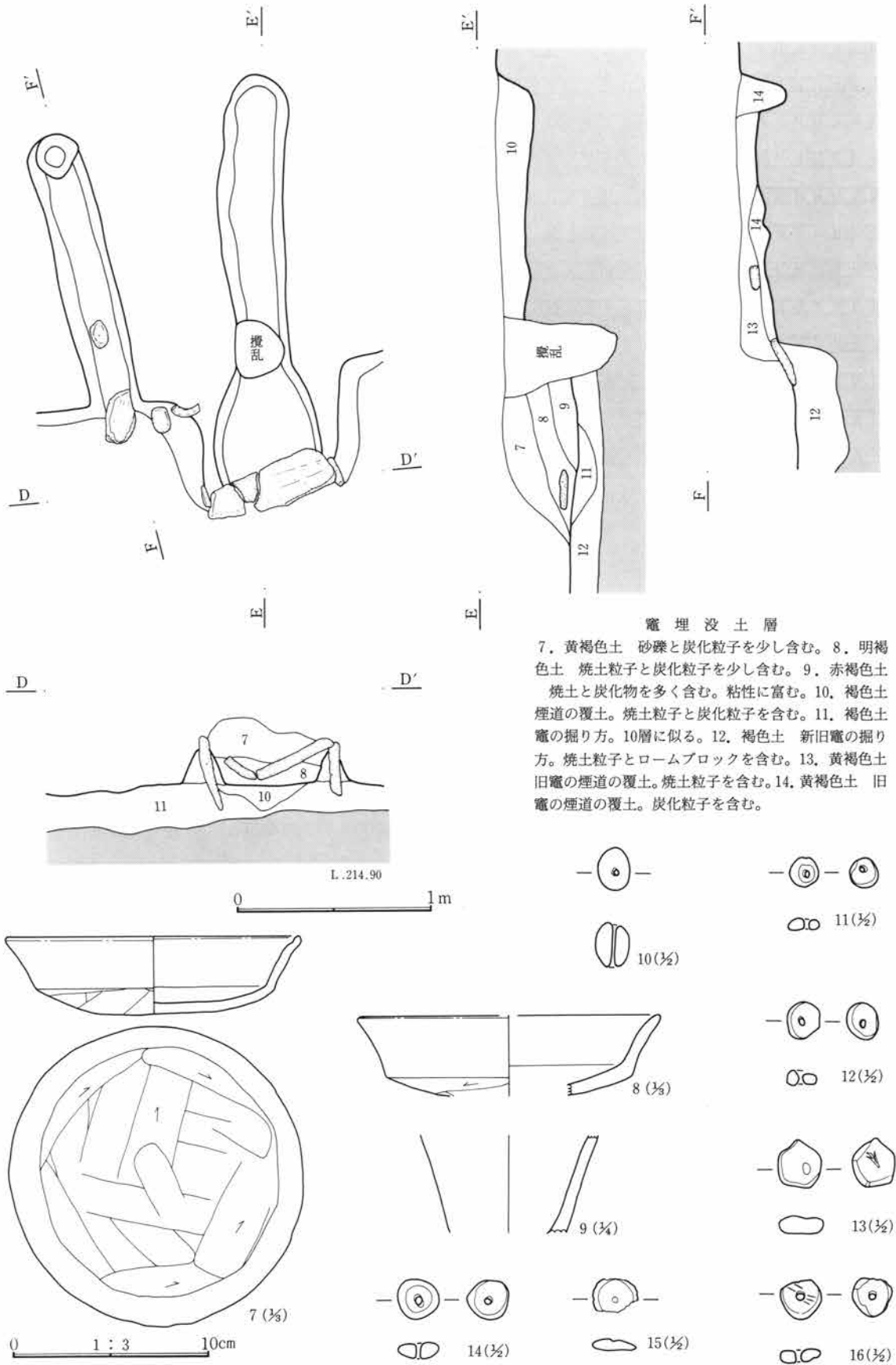
(遺物観察表:161・162頁)

2. 竪穴式住居



第86図 諏B1号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第 87 図 諏 B 1 号住居竈と出土遺物

2. 竪穴式住居

内匠諏訪前遺跡B区3号住居

位置 C80IV46 写真 PL42・56

形状 地形が北東方向緩やかに傾斜する場所に立地している。壁及び床面のほとんどが消失しており、形状及び柱穴以外の施設は不明である。

床面 ごく僅かに土器が出土した地点に堅固な面が残存していたが、ほとんどを消失する。壁の立ち上がりらしきものは検出されたが、住居に伴うかどうかは不明である。

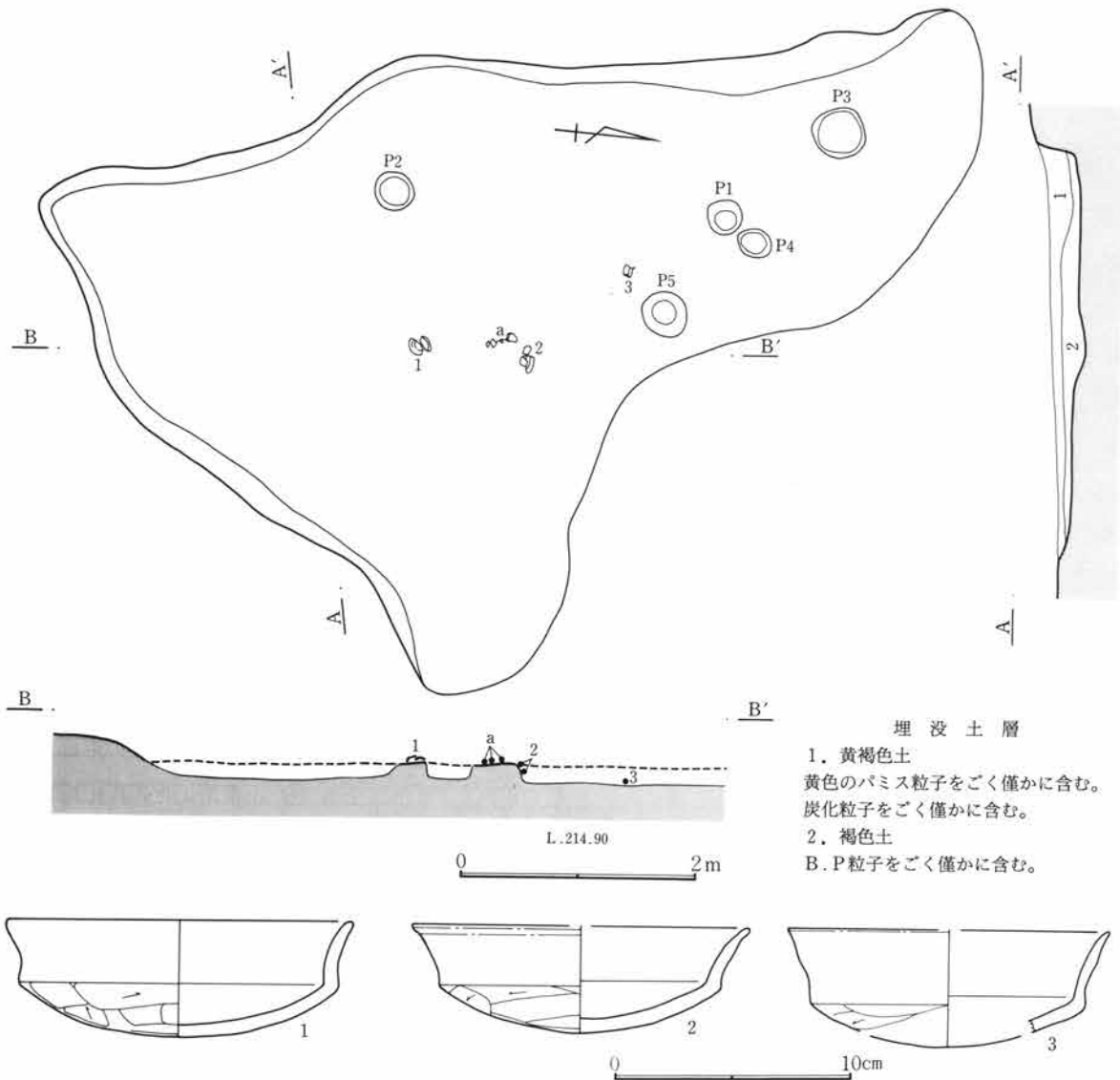
埋没土 床面の大半を消失することから、住居覆土も消失している可能性が強い。

竈 痕跡も含めて、検出されなかった。

柱穴 5本検出された。柱穴の覆土は、ローム質の土壌であった。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(18)×27cm、P2:(24)×7cm、P3:(29)×22cm、P4:(32)×31cm、P5:(28)×8cm、であった。

遺物 土師器27点と石器類2点を出土したが、土器の14点は一括して取り上げた。石器類は縄文時代の遺物である。接合資料aは土師器坏の破片である。

(遺物観察表:162頁)



第88図 諏B3号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区1号住居

位置 D5V31他

写真 PL43・56

形状 耕作による攪乱を全体にうけているが、残存部の状況から隅丸正方形を呈すると思われる。

面積 不明

方位 N-10°-W

床面 粘土質の土壌を掘り込んで床面としている。検出できた壁の立ち上がりは僅かで最大壁高7cmである。南辺と東辺の壁は検出できなかった。

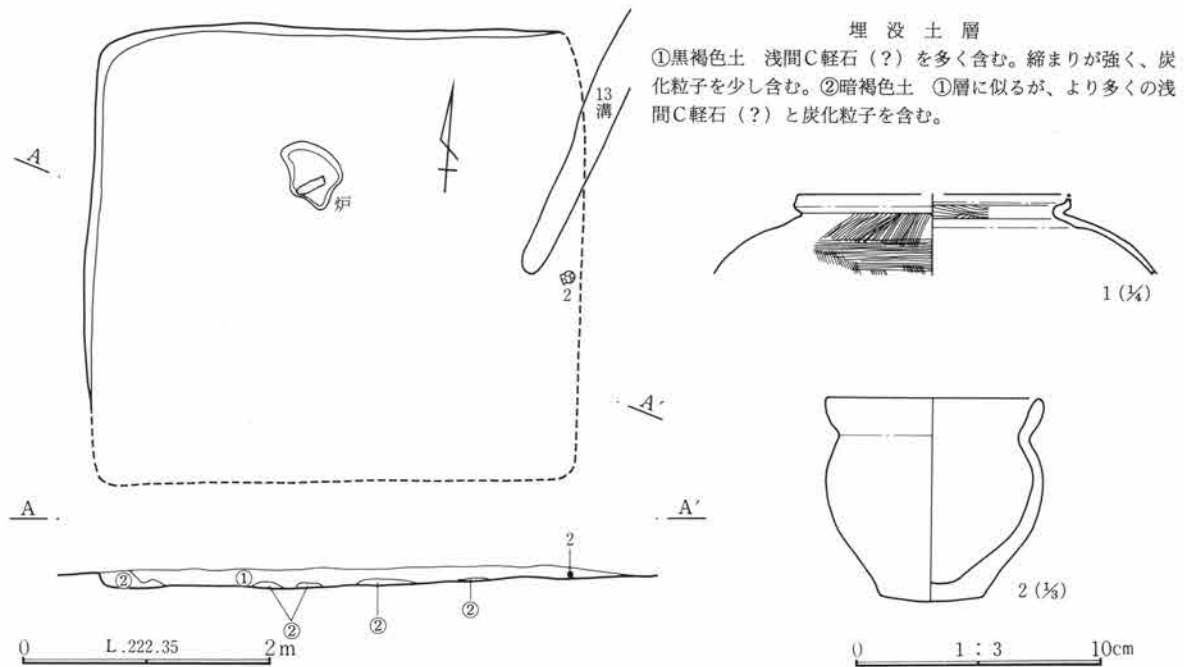
埋没土 浅間C(?)軽石を多く含む土層が堆積する。

炉 住居中央から北西寄りで検出された。炉石を据える形態であるが、明瞭な掘り込みは確認できなかった。

柱穴 検出できなかった。

遺物 住居内から古式土師器6点と石片が4点出土した。石器は出土していない。1は試掘調査の際出土した。(遺物観察表:162頁)

備考 13号溝に切られる。



第89図 日A1号住居と出土遺物

内匠日影周地遺跡A区6号住居

位置 D39V33他

写真 PL43・56・57

形状 一辺が4.7mの隅丸正方形をほぼ呈する。

面積 20.4m<sup>2</sup>

方位 N-83°-E

床面 地形が北から南に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。壁高は、28~38cmであった。

壁際の床面は軟弱であるが、中央付近は堅固で平

坦である。

埋没土 1層はローム質の土壌である。

床面中央部から覆土下層にかけて炭化物が多く混入する。

竈 東壁中央部にあり、方位は住居主軸とほぼ同じである。

袖の下部が残存するが、良好な遺存状態ではなかった。焚口幅は35cmで、袖を粘土質の土壌でつくっている。竈周辺には、竈材と考えられる粘土質土壌と石が土師器とともに散乱する。

柱穴 4本の柱穴を検出したが、配列及び規模に

## 2. 竪穴式住居

規格性を見いだすことはできなかった。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1：(44)×59cm、P2：(26)×52cm、P3：(38)×23cm、P4：(17)×65cm、である。また、掘り方調査の際に、新たな柱穴は検出されなかった。

**貯蔵穴** 竈に向かって右側の住居南東隅で検出された。貯蔵穴の一部が、近現代の耕作溝によって切られる。貯蔵穴の規模は、長辺69cm、短辺58cm、深さ79cm、であった。覆土下層から多くの土師器片が出土している。

**壁周溝** 約1/2周分が検出された。最大幅は13cmで、深さは約20cmであった。

**遺物** 住居内から土師器371点と石片類26点が出

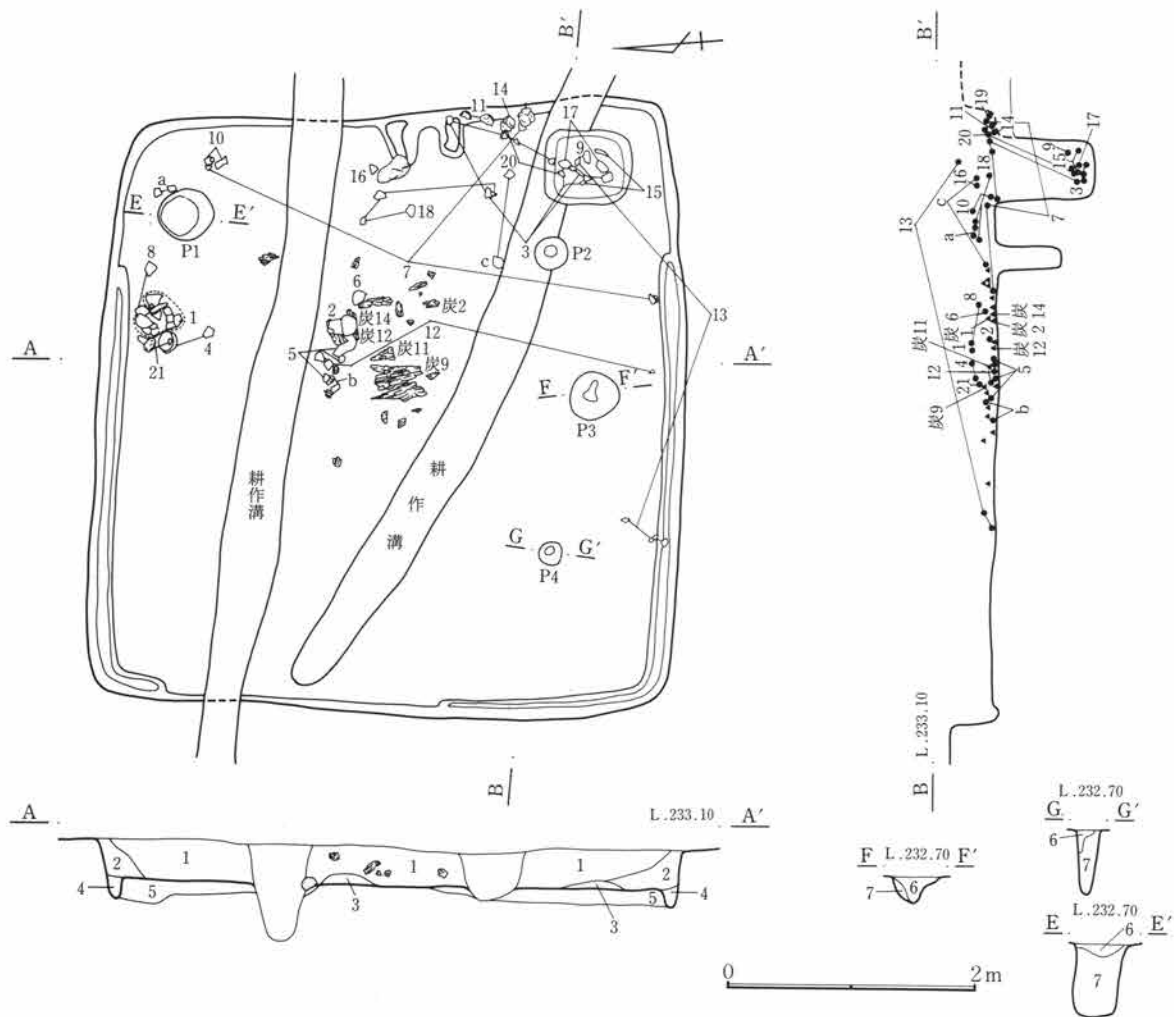
土したが、土器260点は一括して取り上げた。土器は覆土中～下層にかけて多く出土しており、接合関係もその間で接合する例が多い。また、竈右横から出土した土器と貯蔵穴下層出土の土器との接合関係もみられる(3・20など)。土師器環は内面に稜をもつものが多かった。16と21は同一個体の可能性が高い。

石片類の中で、石器はみあたらなかった。

また、住居中央部の床面上から多く検出された炭化材については、付篇1を参照されたい。

(遺物観察表：162・163頁)

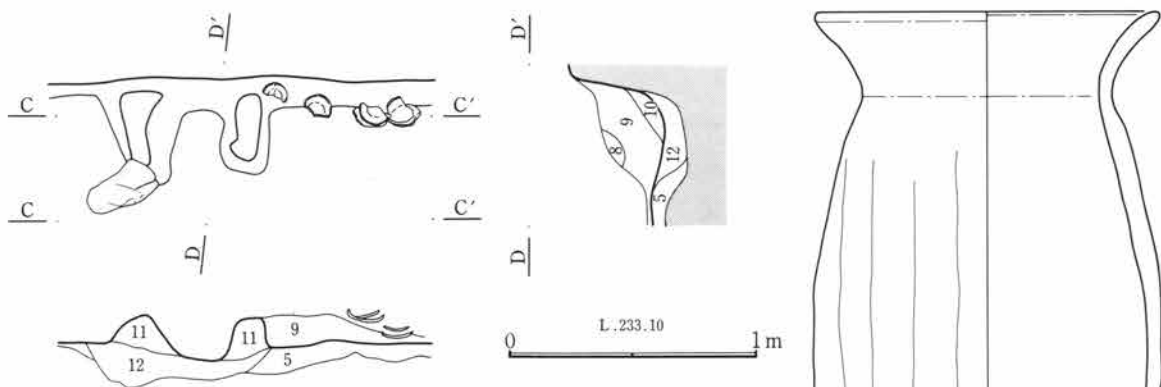
**備考** 近現代の耕作溝2本によって床と壁の一部が切られている。



1. 黄褐色土 ロームブロックと炭化物を含む。2. 暗灰褐色土 粘性の強い土層。3. 暗褐色土 炭化物を多く含む。4. 黄褐色土 周溝の覆土。Y.P粒子を少し含む。5. 黄褐色土 掘り方の土層。ロームブロックを多く含む。6. 暗褐色土 柱穴の覆土。粘性が強く堅く締まる。7. 黄褐色土 柱穴の覆土。ロームブロックを少し含む。

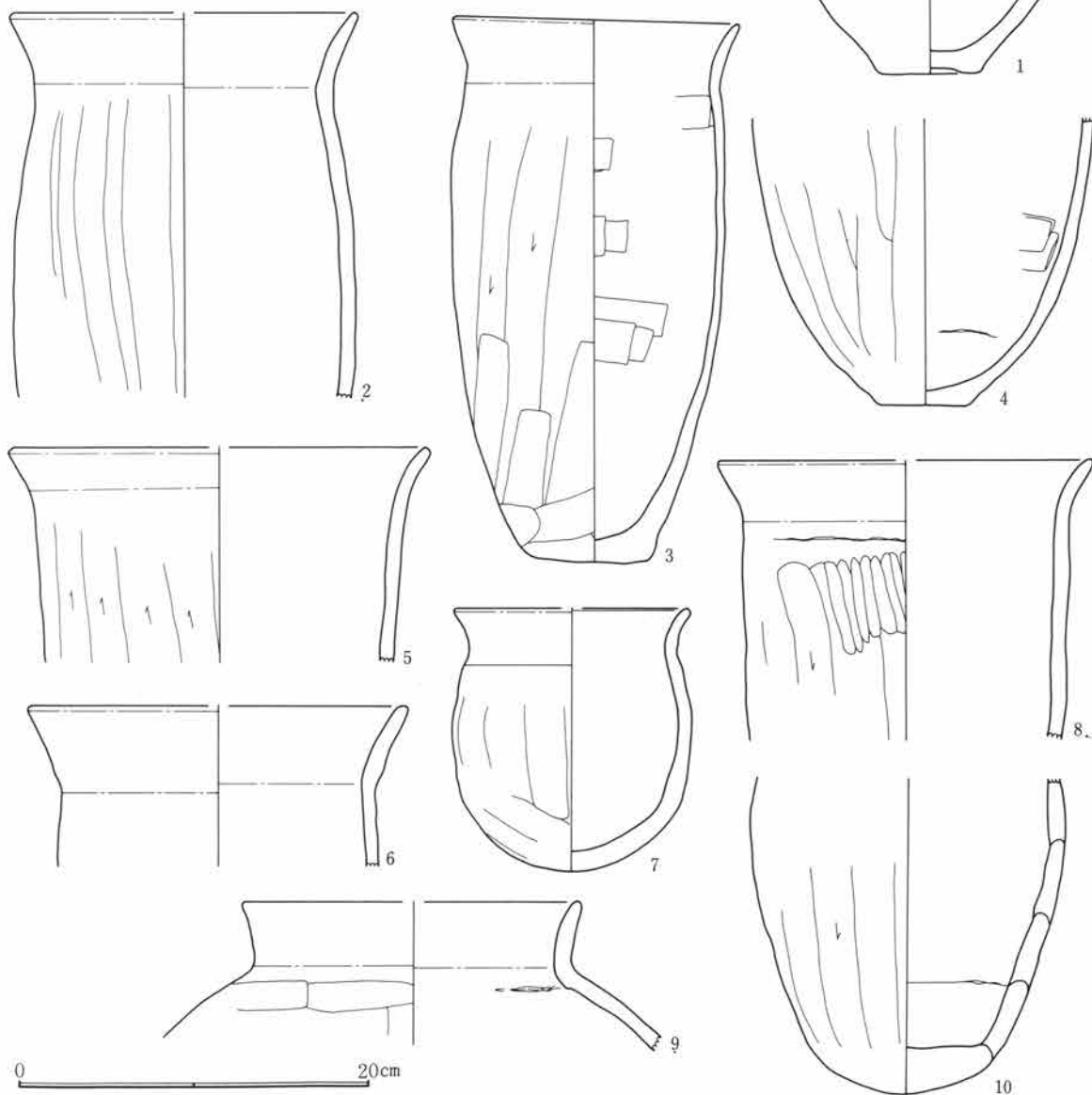
第90図 日A6号住居

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



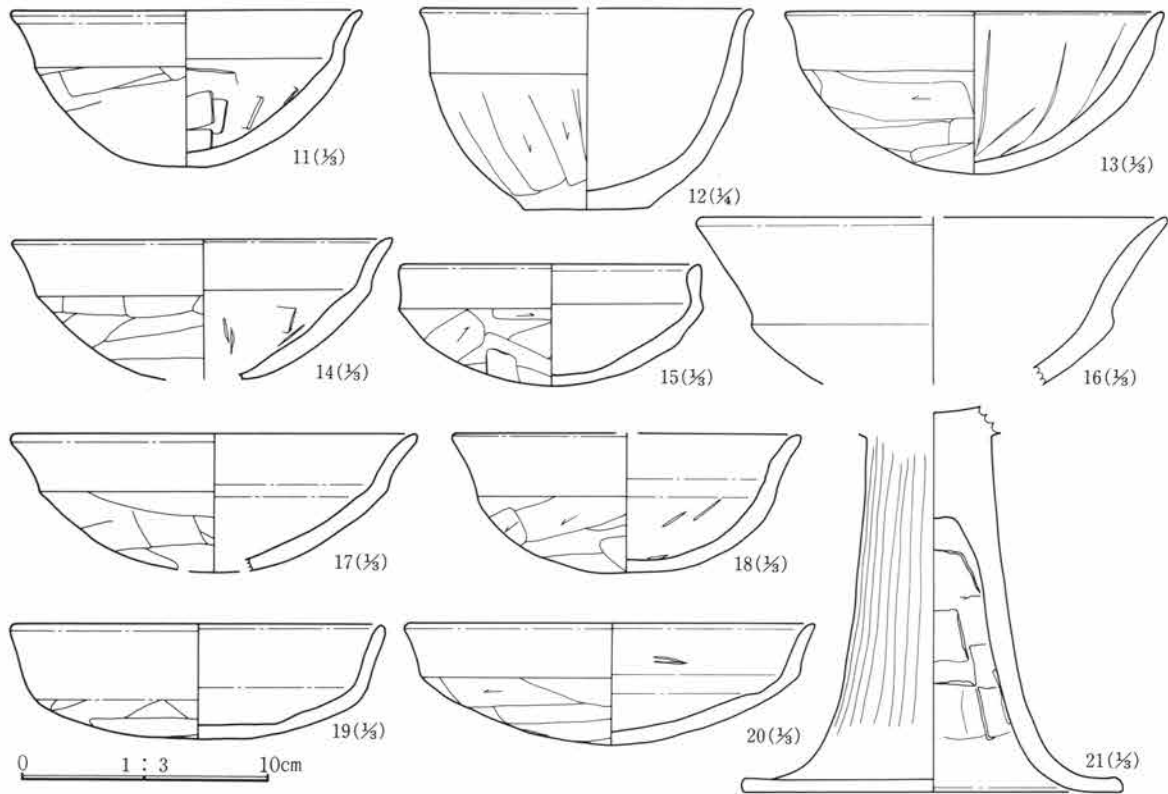
竈埋没土層

- 8. 暗褐色土 ローム粒子を少し含む。砂質の土壤。
- 9. 暗灰褐色土 竈の天井が、崩落及び流れた粘土質の土壤。
- 10. 暗褐色土 ロームブロックを少し含む。
- 11. 暗赤褐色土 竈の袖。小石を多く含む。粘土をブロック状に含む。
- 12. 暗褐色土 竈の掘り方。炭化粒子とローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。



第91図 日A6号住居竈と出土遺物





第92図 日A6号住居出土遺物

## 内匠日影周地遺跡A区7号住居

位置 D40V23他

写真 PL44・57

形状 一辺が3.8mの隅丸正方形をほぼ呈する。

面積 13.1m<sup>2</sup>

方位 N-74°-E

床面 地形が北から南に緩やかに傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。壁高は、41~51cmであった。

壁際の床面は軟弱であるが、中央付近は堅固で平坦である。

埋没土 3層と4層はローム質の土壌。

竈 東壁中央部にあり、方位は住居主軸とほぼ同じである。竈北半分を近現代の耕作溝によって切られている。調査時には、竈燃焼部を竈左袖と誤認したが、掘り方調査の際に、竈左袖と認定していた場所から竈右袖石と天井石が検出され、竈の左側が攪乱されていることが判明した。右の袖石は2つあり、

天井石が乗った状態で検出された。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。P2は約半分を、近現代のイモ穴状土坑によって切られている。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(44×32)×67cm、P2:(22)×54cm、P3:(22)×52cm、P4:(34)×34cm、であった。また、掘り方調査の際に、新たな柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴 竈に向かって右側の住居南東隅で検出された。径は53×44cmで深さは78cmであった。貯蔵穴内からの遺物の出土はみられなかった。

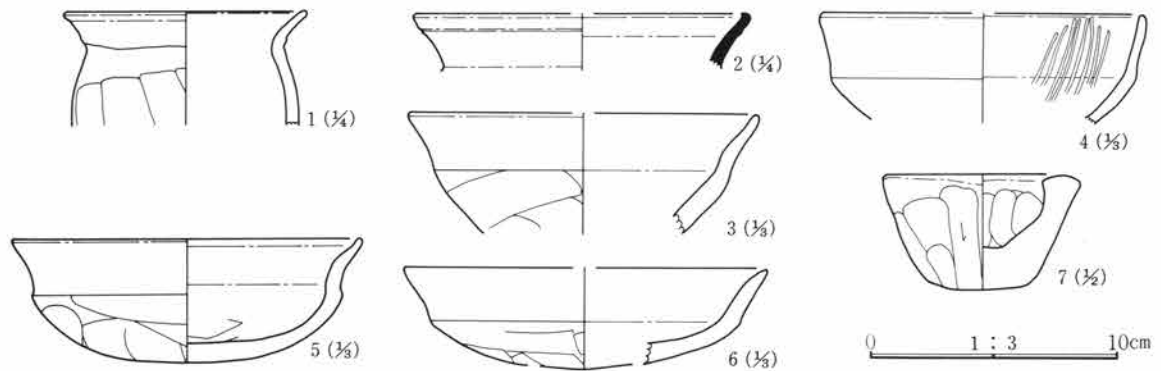
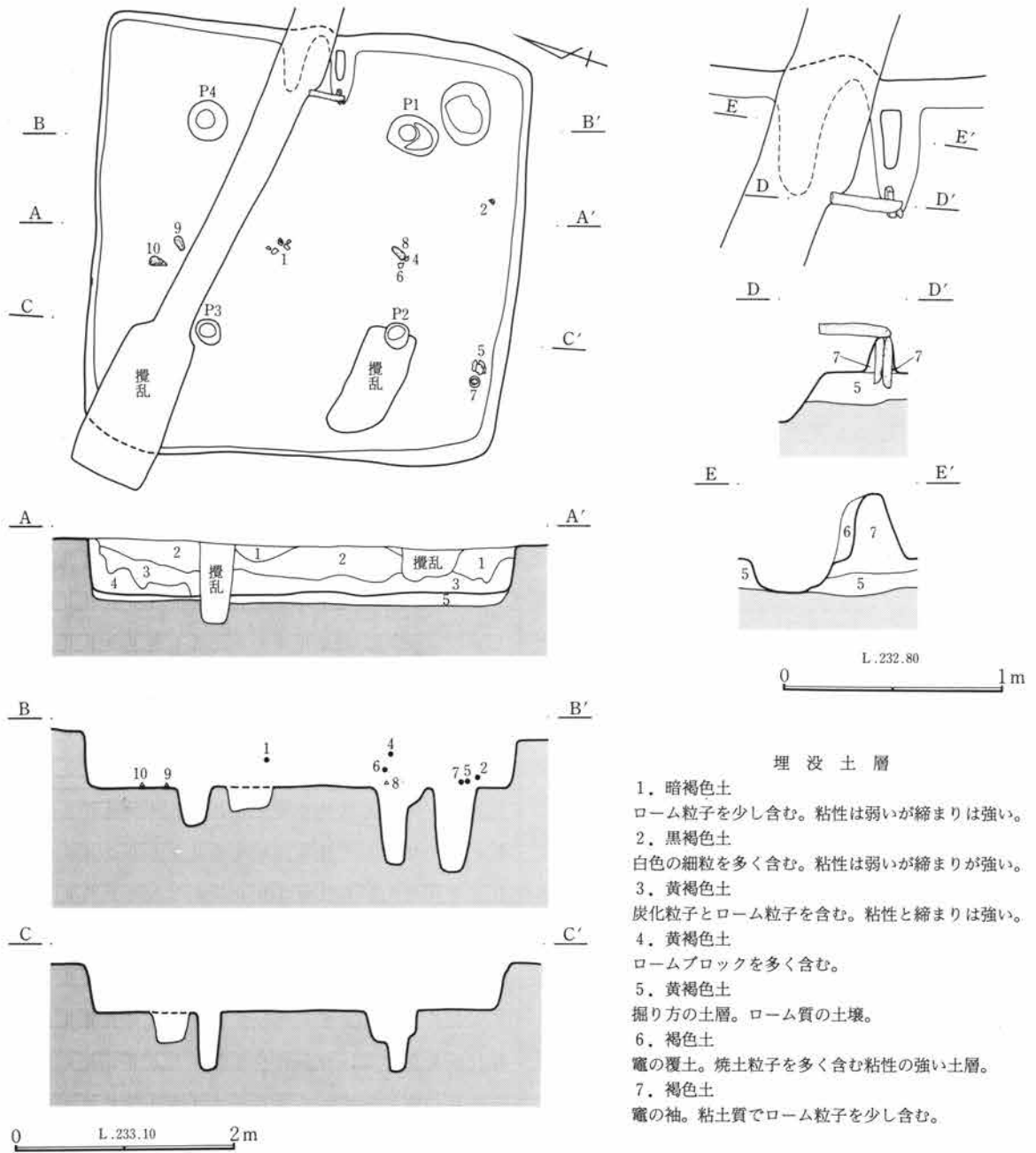
壁周溝 検出されなかった。

遺物 住居内から土師器56点、須恵器1点、石器類22点が出土したが、土師器48点は一括して取り上げた。本住居に伴うと思われる遺物は5・7と8・9・10のこも網石である。石器類の中で、石器は8~11のこも網石だけである。

(遺物観察表:164頁)

備考 近現代の耕作溝とイモ穴状土坑に一部切られる。

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第93図 日A 7号住居と出土遺物

2. 竪穴式住居

内匠日影周地遺跡A区11号住居

位置 D40V49他 写真 PL44・57

形状 今回報告する古墳時代後期の住居は、ほぼ隅丸方形であるが、11号住居は長短比(長辺4.5m、短辺3.7m)が1:1.2の隅丸長方形である。

面積 14.7㎡ 方位 N-2°-E

床面 地形が北から南に傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。壁高は、7~31cmであった。中央付近は堅固で平坦である。

埋没土 3層及び4層はローム質の土壤である。

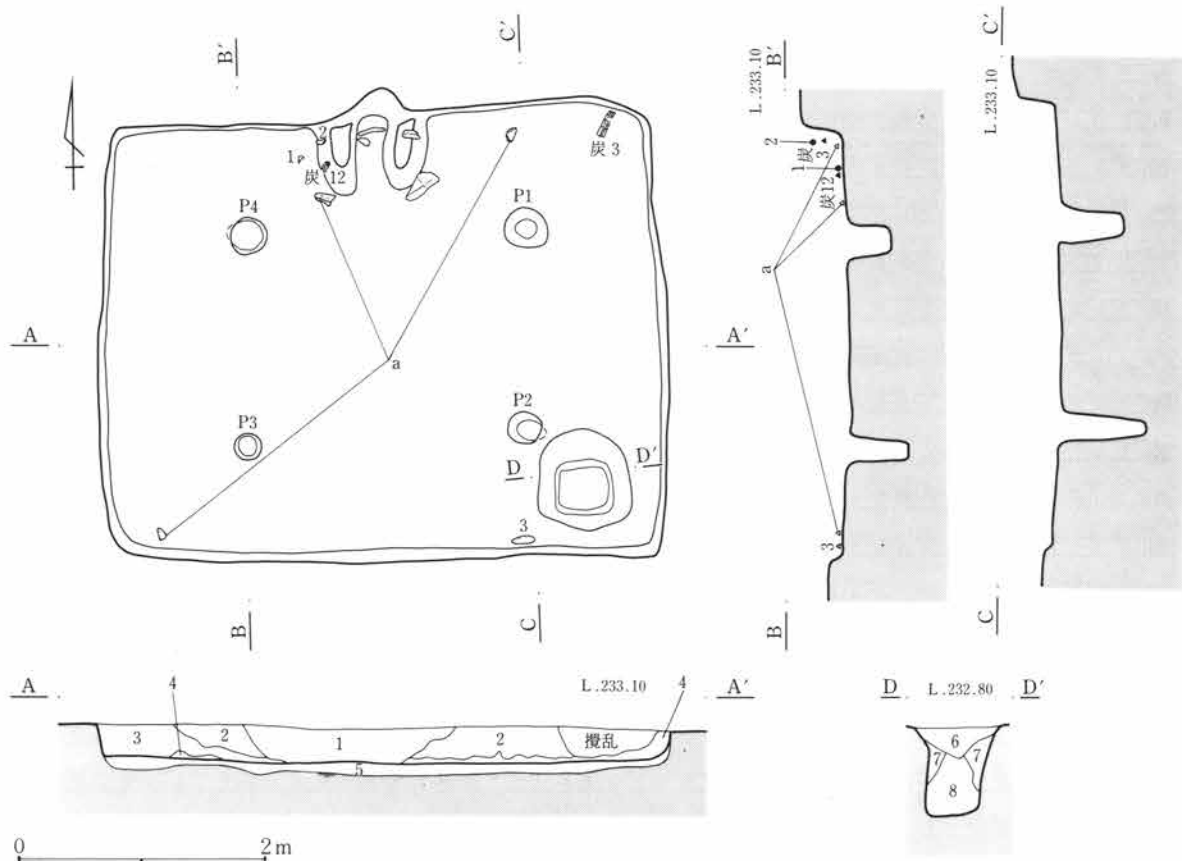
竈 北壁中央付近にあり、方位は住居の主軸とほぼ同じであった。確認面が低かったため、残存状態は悪く、袖の下部が残存する。焚口幅は35cmで、燃

焼部の長さは50cmであった。周辺に竈材と思われる石片が出土する。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(34)×56cm、P2:(24)×64cm、P3:(20)×49cm、P4:(28)×42cm、であった。また、掘り方調査の際に、新たな柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴 底面は方形を呈し、深さは72cmである。

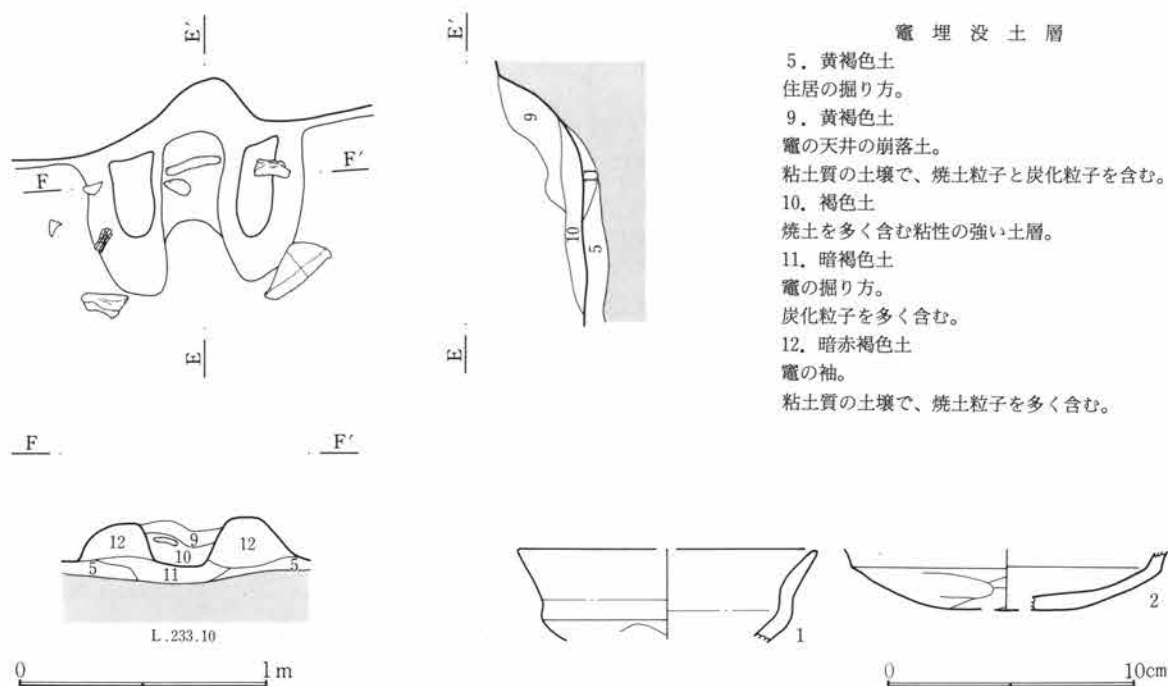
遺物 住居内から土師器43点と石器類6点が出土したが、土器40点は一括して取り上げた。接合資料aは、竈材と思われる牛伏砂岩である。石器は、こも網石2点が出土した。炭化材については、付篇1を参照されたい。(遺物観察表:164頁)



埋没土層 1. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。炭化粒子を僅かに含む。2. 黒褐色土 1層に似るが、ローム粒子を僅かに含む。3. オリーブ褐色土 ローム粒子を多く含む。4. 黄褐色土 ロームブロックを含む。5. 黄褐色土 掘り方の土層。ローム質の土壤。6. 黒褐色土 貯蔵穴の覆土。炭化粒子を多く含む。7. 黄褐色土 貯蔵穴の覆土。ローム質土壤。8. 暗褐色土 貯蔵穴の覆土。炭化粒子を少し含む。

第94図 日A11号住居

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第95図 日A11号住居竈と出土遺物

内匠日影周地遺跡A区13号住居

位置 C78VI44他 写真 PL45・57・58

形状 竈を攪乱（時期不明）により消失するが、長辺6.0m、短辺5.8mの正方形に近い隅丸長方形を呈する。

面積 34.4m<sup>2</sup> 方位 N-6°-W

床面 地形が南から北に傾斜している場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。地形を反映した壁高で、残りの良い南側は54cm、残りの悪い北側は9cmであった。壁際は軟弱だが、中央付近は堅固で平坦である。

埋没土 南側から北側にかけての自然堆積を示すが、1層及び4層は攪乱土層（時期不明）の可能性が強い。

竈 攪乱をうけているが、掘り方調査の際に、焼土等の痕跡を確認した。

柱穴 床面精査の段階で、10本以上のPitを確認したが、木の根等の痕跡の可能性が強く、13号住居に伴うと思われる柱穴は検出できなかった。また、掘り方調査でも、同様の所見である。

貯蔵穴 竈に向かって右側の住居北東隅で検出され

た。貯蔵穴は長方形を呈し規模は、長辺64cm、短辺49cm、深さ74cmであった。覆土下層から土師器坏片（5）が出土している。

壁周溝 一部検出できなかった。最大幅は15cmで、深さは約10cmであった。

遺物 住居内から土師器156点、須恵器2点、石器類14点が出土したが、土師器135点は一括して取り上げた。

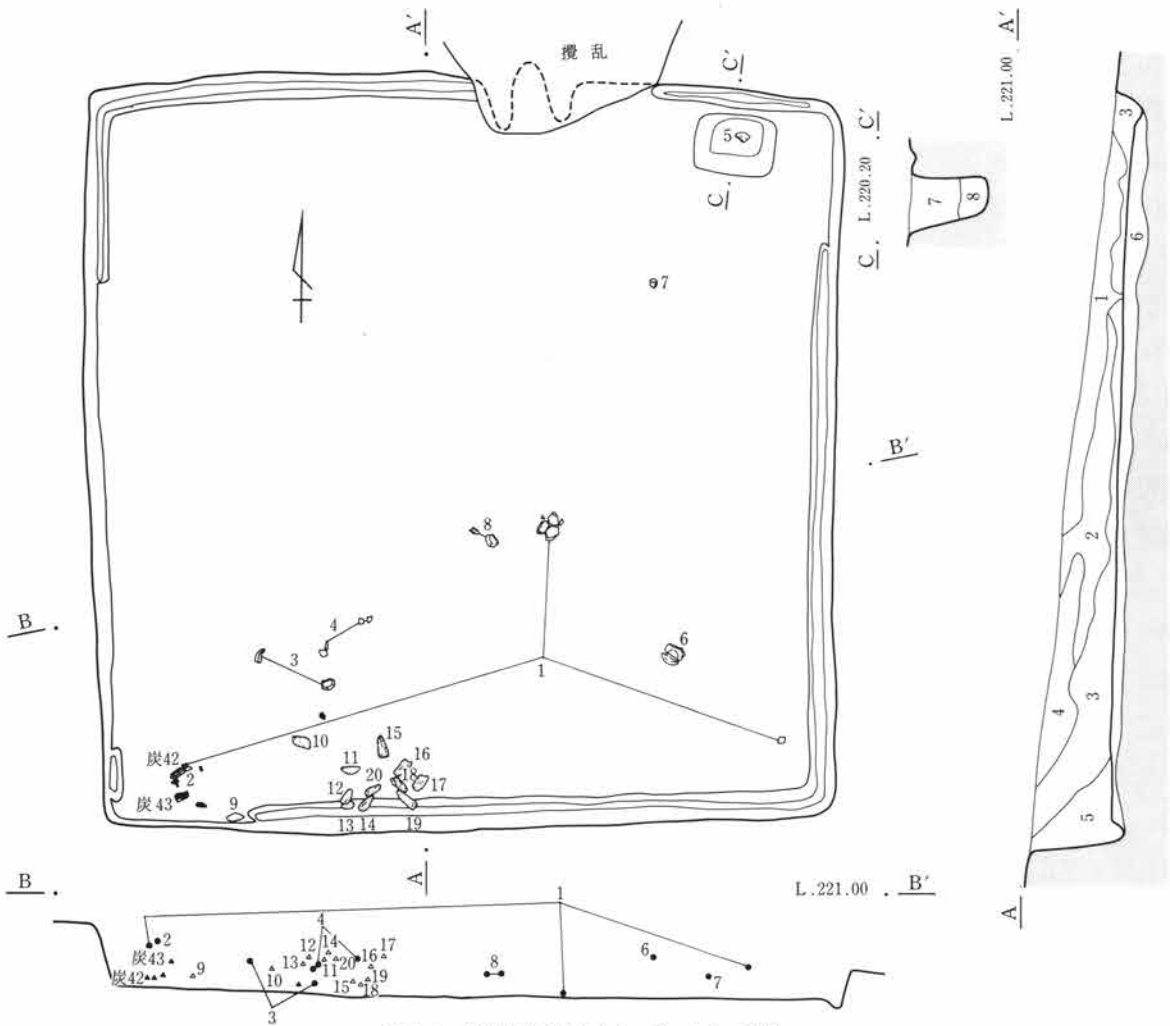
図化できた土器の大半は住居南側で床面から浮いた状態で出土しており、接合関係の多くも同様のありかたを示している。なお、4と8は混入したもののだが、他の平安時代の土坑からの出土状況と類似していることから、調査時には検出できなかった平安時代の土坑が13号住居内にあった可能性が強い。

また、石器は、その形態からこも網石の可能性が強い12点が出土しているが、すべて住居南壁付近から出土し、しかも床面からかなり浮いた出土状態を示していた。

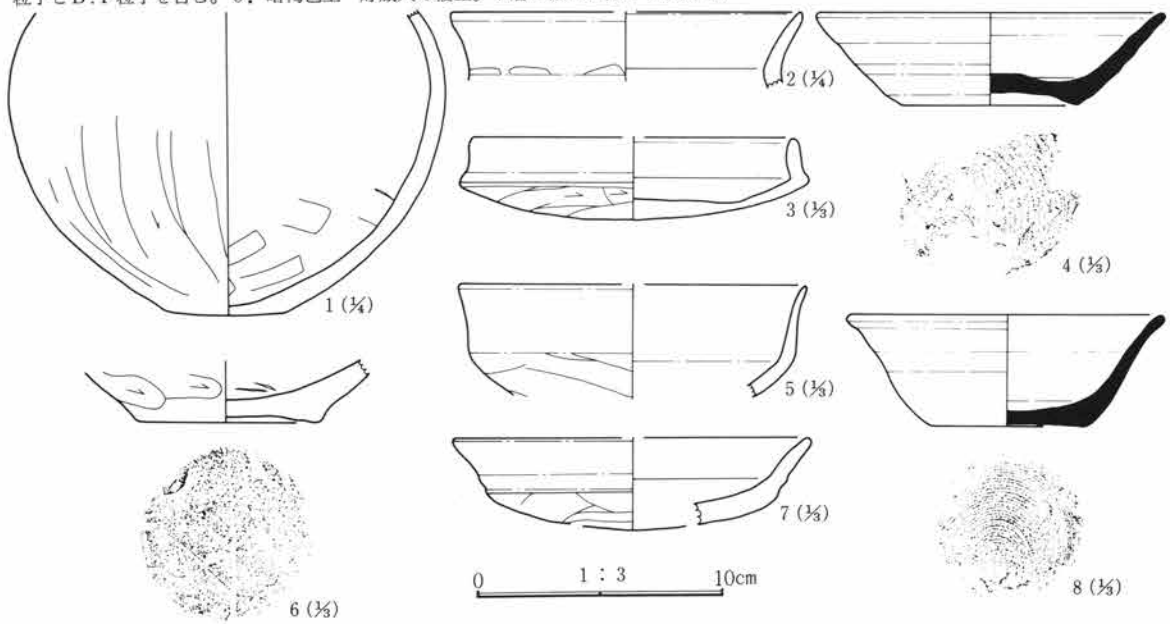
炭化材は住居南西隅から出土しているが、樹種等については、付篇1を参照されたい。

（遺物観察表：164・165頁）

2. 竪穴式住居



埋没土層 1. 褐色土 攪乱。2. 黒褐色土 炭化粒子を多く含む。3. オリーブ褐色土 Y.P粒子を少し含む。4. 黒褐色土 ローム粒子を少し含む。5. 黄褐色土 ローム質土壌。6. 黄褐色土 掘り方の土層。ローム質土壌。7. 暗褐色土 貯蔵穴の覆土。炭化粒子とB.P粒子を含む。8. 暗褐色土 貯蔵穴の覆土。7層に似るが締まりが強い。



第96図 日A13号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

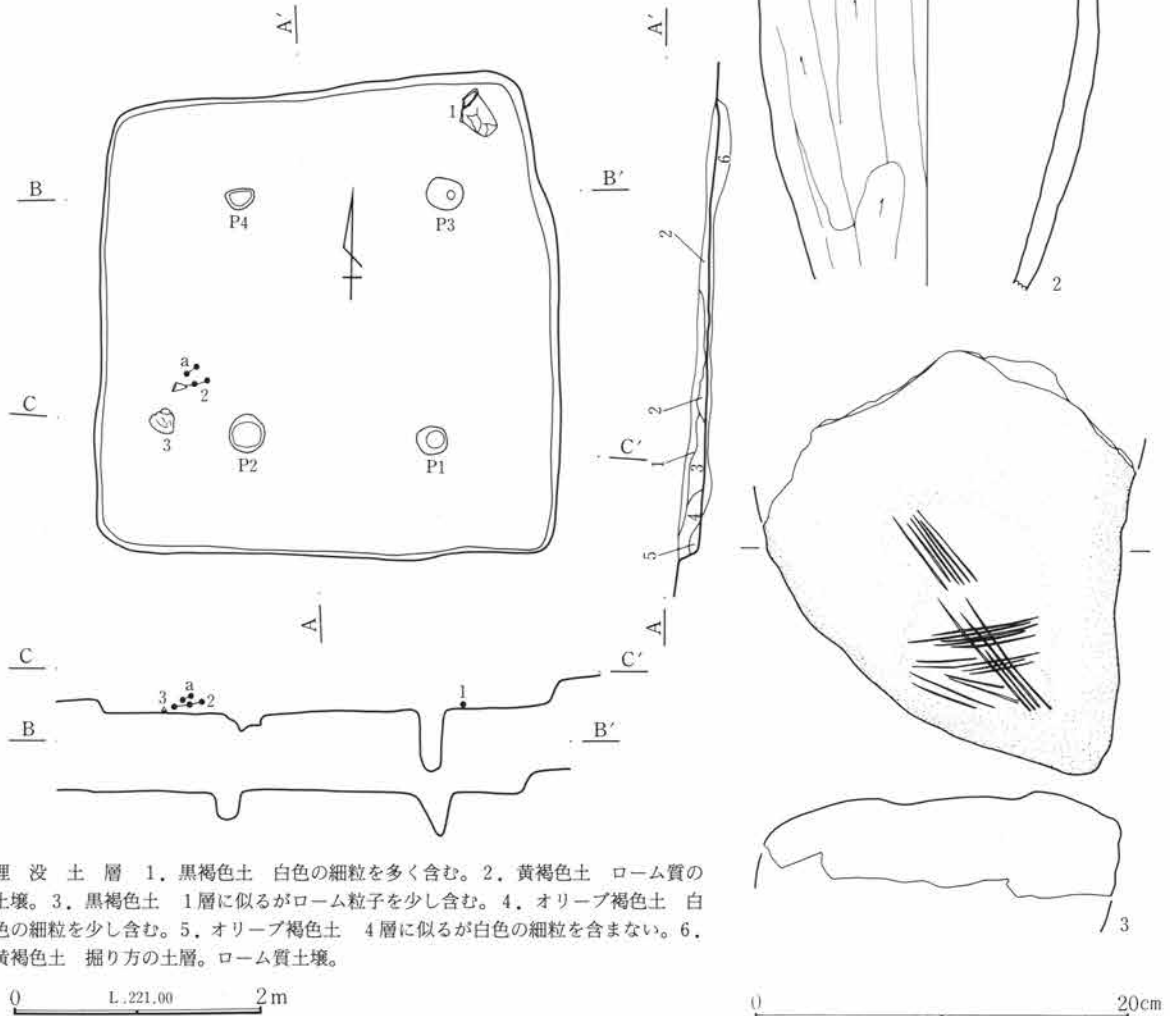
内匠日影周地遺跡A区14号住居

位置 C81VI50他 写真 PL45・58  
 形状 一辺3.6mの隅丸正方形  
 面積 12.3㎡ 方位 N-2°-W  
 床面 掘り方をもち貼床をする。残存壁高は南側で11cm、北側で2cmであった。

竈 掘り方の調査でも検出できなかった。

柱穴 4本検出できた。各柱穴の規模は、P1：(22)×51cm、P2：(26)×13cm、P3：(22×36)×37cm、P4：(22×14)×21cm、である。

遺物 土師器22点と、石器1点が出土したが、土器14点は一括して取り上げた。接合資料aは土師器甕の胴部である。図化できた遺物は、床直上の出土位置であった。(遺物観察表：165頁)



埋没土層 1. 黒褐色土 白色の細粒を多く含む。2. 黄褐色土 ローム質の土壌。3. 黒褐色土 1層に似るがローム粒子を少し含む。4. オリーブ褐色土 白色の細粒を少し含む。5. オリーブ褐色土 4層に似るが白色の細粒を含まない。6. 黄褐色土 掘り方の土層。ローム質土壌。

第97図 日A14号住居と出土遺物

2. 竪穴式住居

内匠日影周地遺跡A区19号住居

位置 D 2 V 26他

写真 P L 45・58

形状 西壁を14号溝によって切られるが、一辺が3.2mの隅丸正方形を呈すると思われる。

面積 9.6m<sup>2</sup> (推定)

方位 N-116°-W

床面 地形が南から北に緩やかに傾斜している場所に立地し、粘土質の土壌を掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。壁高は、4~12cmであった。

壁際の床面は軟弱であるが、中央付近は堅固で平坦である。

埋没土 粘土ブロックが混入する。

竈 東壁中央から南寄りにあり、方位は住居主軸とほぼ同じである。

袖の下部が残存するが、良好な遺存状態ではなかった。焚口幅は55cmで、袖を粘土質の土壌でつくっている。

柱穴 掘り方の調査でも検出できなかった。

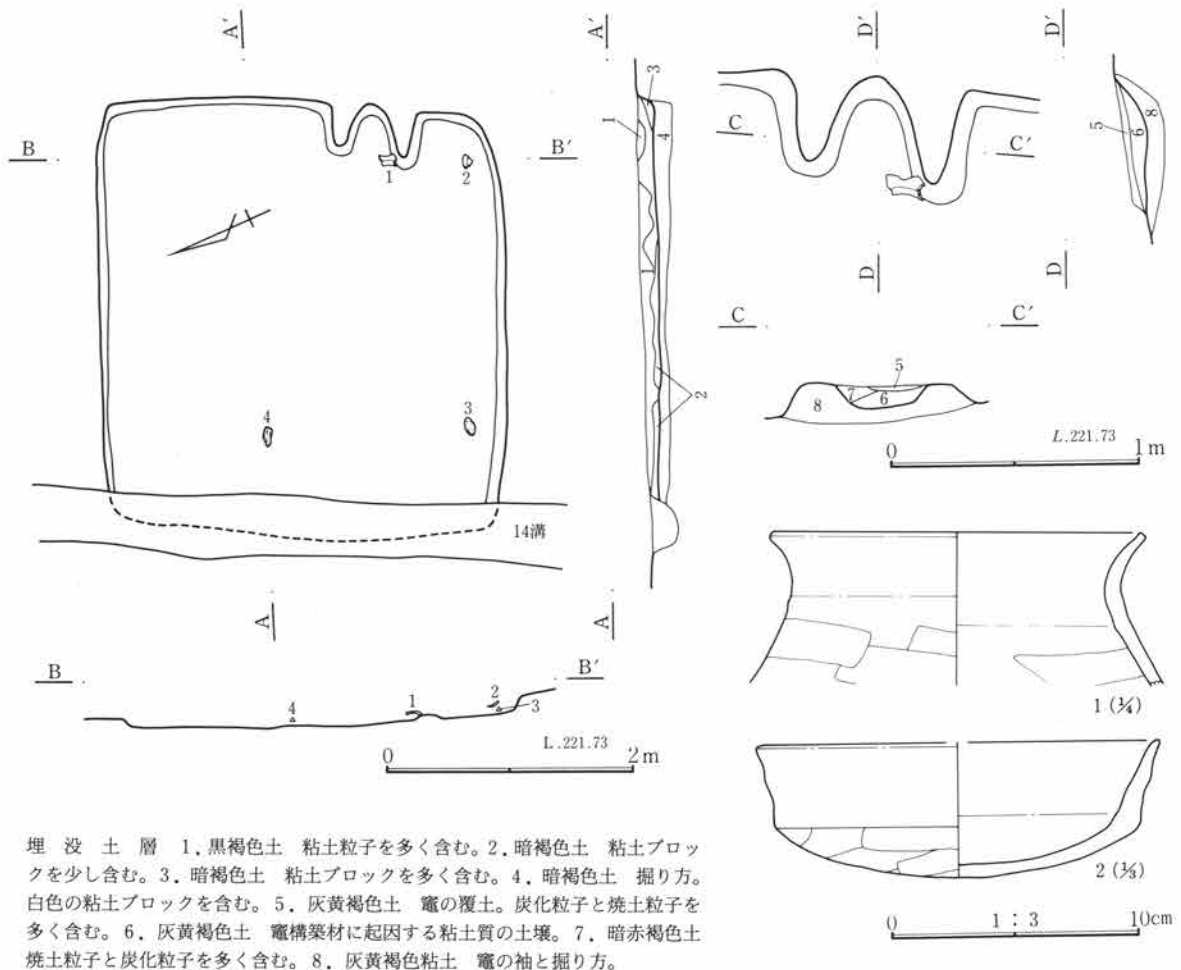
貯蔵穴 掘り方の調査でも検出できなかった。

壁周溝 掘り方の調査でも検出できなかった。

遺物 住居内から、土師器5点とこも網石2点が出土した。

遺構の残存状態を反映して、覆土下層から床直上の出土位置である。 (遺物観察表：165頁)

備考 住居西壁を、すべて14号溝によって切られている。



第98図 日A19号住居と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

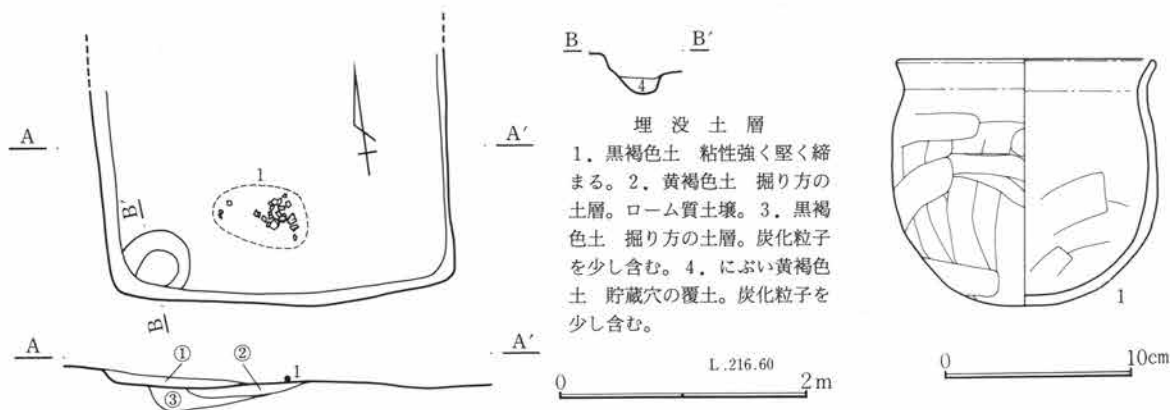
内匠日影周地遺跡B区1号住居

位置 C84V84他 写真 PL47・58  
 形状 住居北側を消失するために全体の形状は不明だが、検出できた一辺は2.8mである。  
 床面 軟弱である。壁高は最大8cmであった。

貯蔵穴 住居南西隅で検出できた。

遺物 土師器は床直上で1が散乱して出土した。石器の出土はなかった。(遺物観察表：165頁)

備考 1号住居に伴うと考えられる竈と柱穴等は、掘り方の調査でも痕跡を検出できなかった。



第99図 日B1号住居と出土遺物

内匠日影周地遺跡B区3号住居

位置 C90VI29他 写真 PL46・47・58～60  
 形状 長辺5.3m、短辺5.1mの正方形に近い隅丸長方形を呈する。  
 面積 24.1m<sup>2</sup> 方位 N-12°-W  
 床面 地形が北東方向に傾斜する場所に立地し、ロームを掘り込んで床面としている。掘り方をもち貼床をする。壁高は18～54cmであった。床面は壁際を除いて、堅固であった。

埋没土 炭化材が多く出土するが、埋没土中の炭化粒子は多くなかった。

炉 中軸線上と支柱穴(P1とP7)線のほぼ交わる地点で検出された。3cmの浅い掘り込みをもち、焼土と灰が周辺に広がっていた。

柱穴 13本の柱穴が検出された。各柱穴の規模《(径)×深さ》は、P1:(44)×81cm、P2:(26×22)×20cm、P3:(40)×76cm、P4:(24)×20cm、P5:(40)×16cm、P6:(30)×70cm、P7:(30)×62cm、P8:(48×33)×20cm、P9:(32)×20cm、P10:(18)×40cm、P11:(20)×35cm、P12:(20)×13cm、P13:(18)×10cm、でありP1・P3・P6・P7が支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 住居の南東隅で検出された。規模《(径)×深さ》は(39×44)×33cmで、埋没土は黒褐色土である。

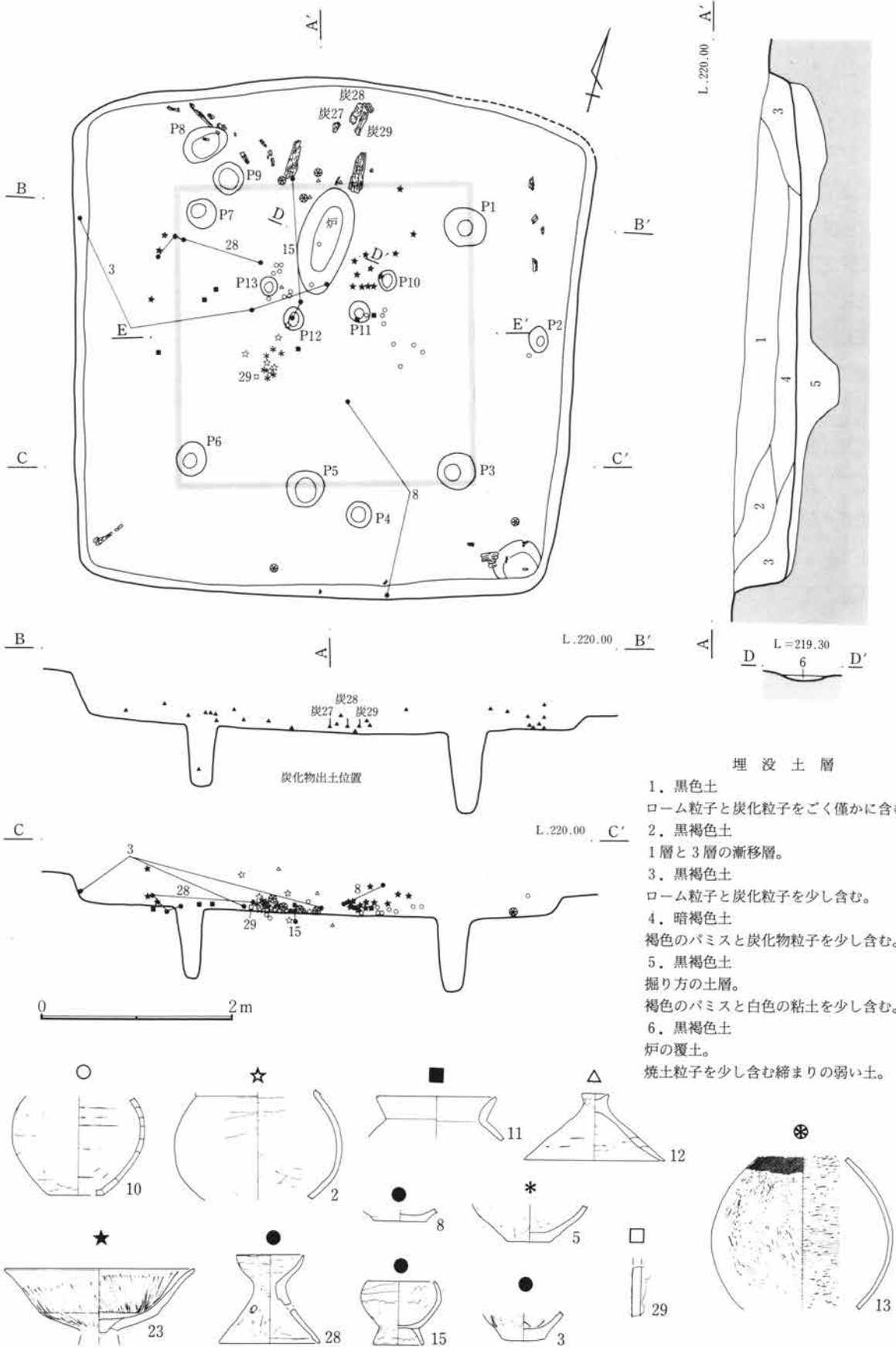
遺物 土器は古墳時代中期の古式土師器を主体として783点、石片類は69点(但し石器はない)、鉄器は1点(29)出土した。

土器の出土状態の特徴として、①住居中央部で床上10cm以上の地点からまとまって出土している(第101図参照)、②高坏の坏部のみ多数出土している(高坏脚部の破片は出土していない)、③ミニチュアの台付甕が多数出土している、④古墳時代中期の古式土師器以外にも、弥生土器(12・13)や平安時代以降の須恵器(30)が出土する、などがあげられる。3号住居以外から出土した遺物との接合関係は3例あった(第102図参照)。①以外の出土状態を示す資料として第100図があるが、床直上の土器も広範な接合関係を示しているため、住居に帰属するものを限定するのはさし控えたい。唯一床直上だけの接合関係をしめすのは、P12内からの出土破片をもつ15であった。(遺物観察表：165・166・167頁)

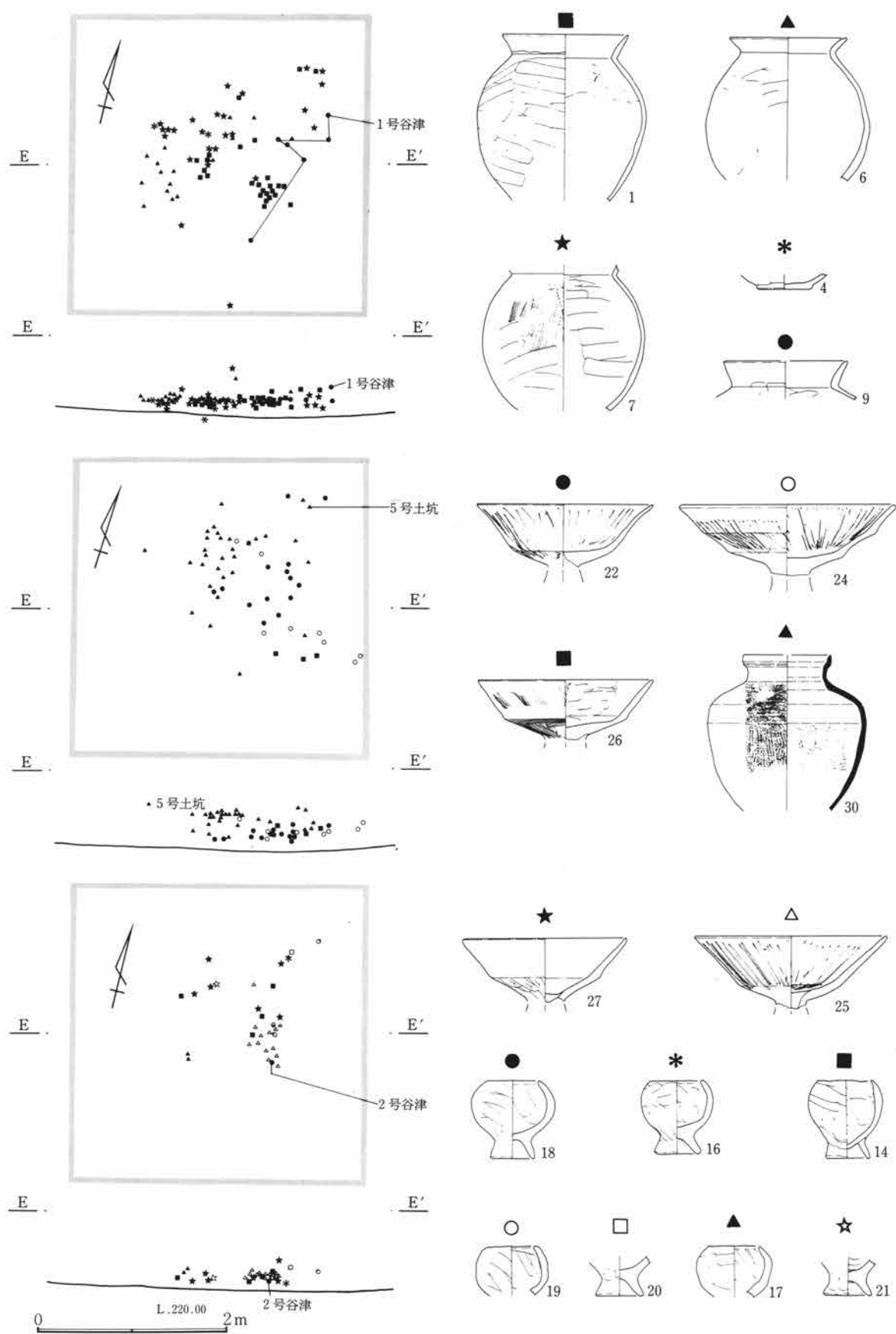
また、炭化材は壁際から住居内側に倒れるような状態で出土している(樹種等は付篇1を参照)。



2. 竪穴式住居

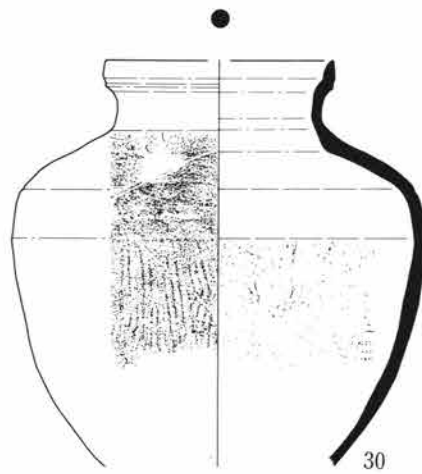
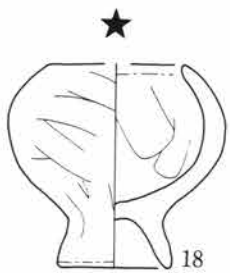
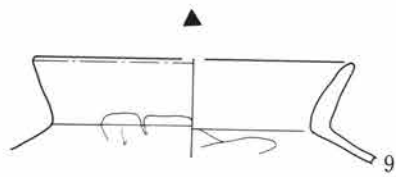
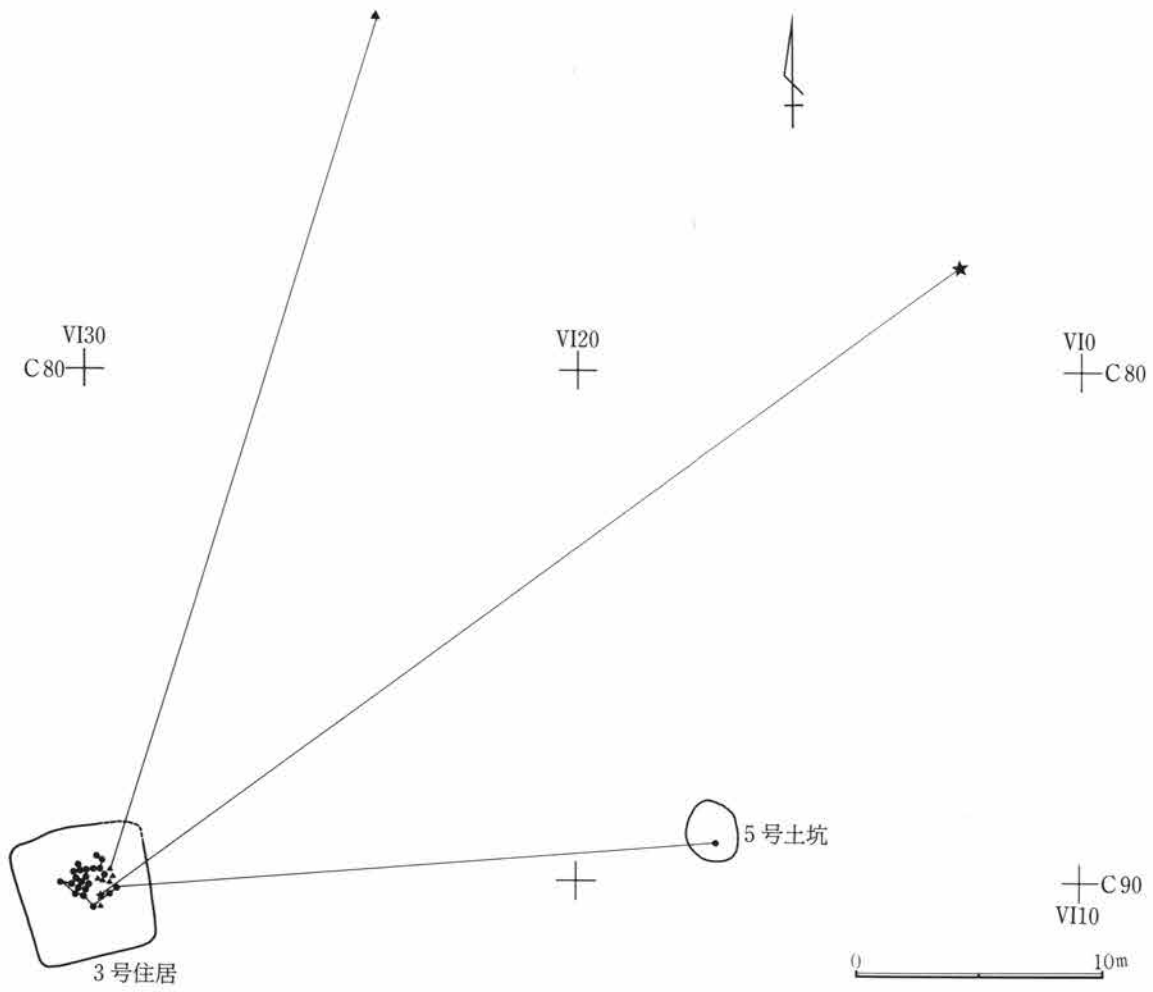


IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



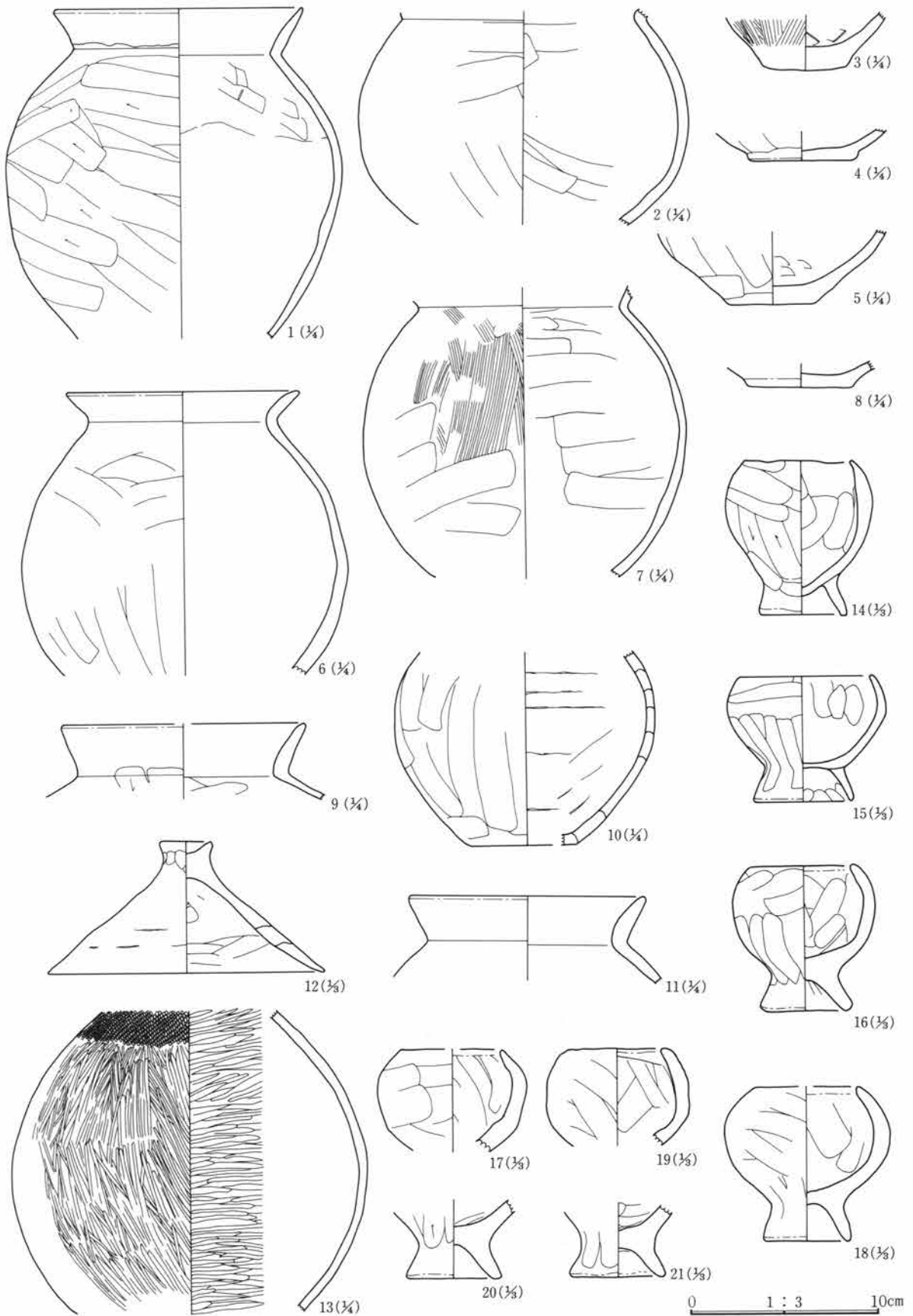
第101図 日B3号住居遺物出土状態(2)

2. 竪穴式住居



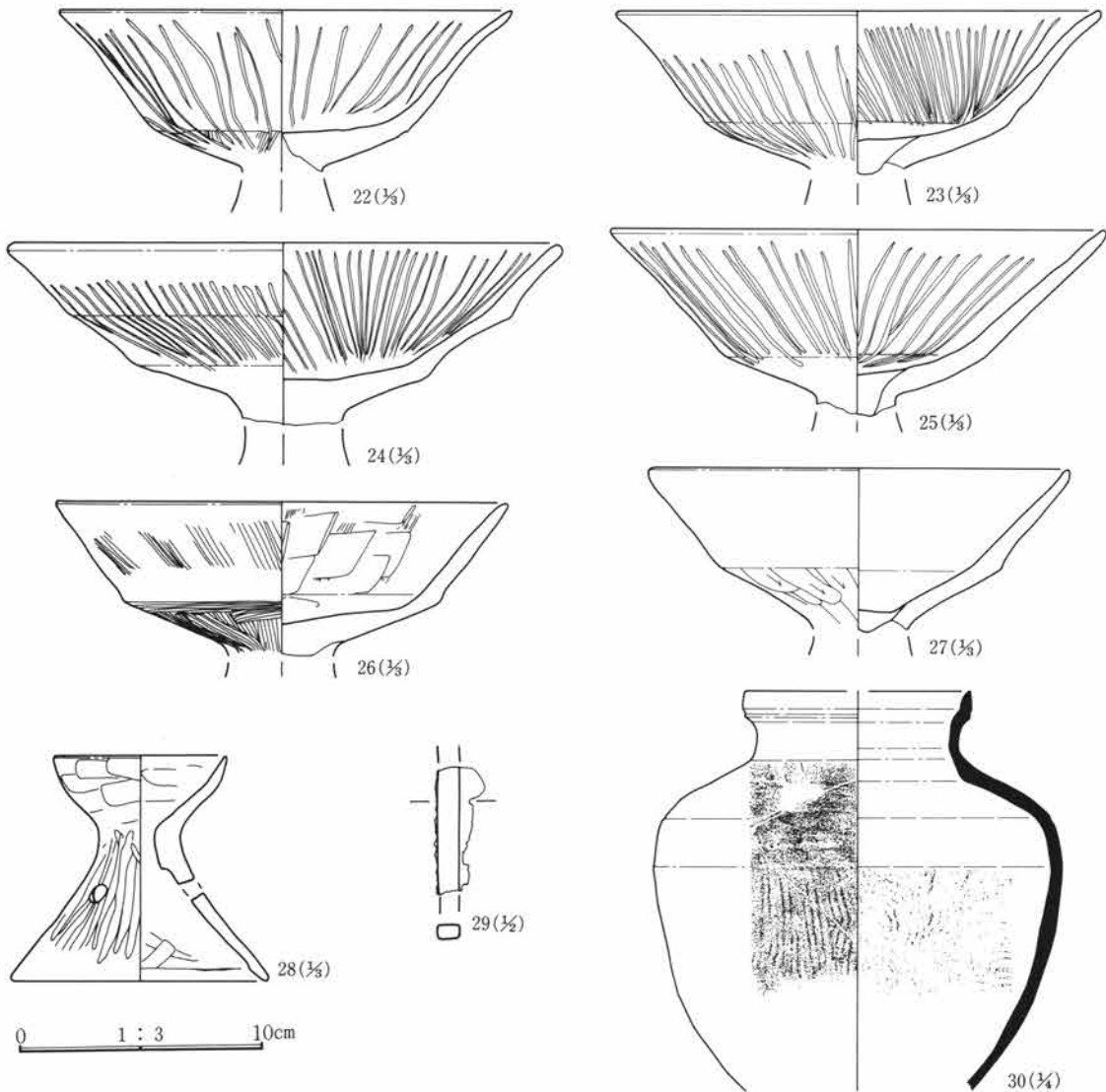
第102図 日B 3号住居と遺構外遺物との接合関係

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第103図 日B 3号住居出土遺物 (1)

2. 竪穴式住居



第104図 日B 3号住居出土遺物(2)

内匠日影周地遺跡B区5号住居

位置 C86VII18 写真 PL47・60

形状 残存状態が悪いため詳細は不明であるが、炉及び貯蔵穴の位置関係から北西方向に主軸をもつ隅丸(長)方形を呈する可能性が強い。

床面 残存する部分も軟弱であり、後世の攪乱を受けている。壁の立ち上がりも明確ではない。

炉 2基検出された。炉1は6cm、炉2は18cm、の掘り込みをもつ。

柱穴 精査したが、検出できなかった。

遺物 古式土師器3点が出土したが、図化できたのは1だけである。他の2点は小片だが、台付甕の胴部である。(遺物観察表:167頁)

内匠日影周地遺跡B区6号住居

位置 C85VI7他 写真 PL47

形状 住居の約1/2を溝および削平(時期不明)により消失するが、一辺4.0mの隅丸方形を呈すると思われる。また、住居にともなうと考えられる施設は、竈を除き検出できなかった。

面積 不明 方位 N-116°-E

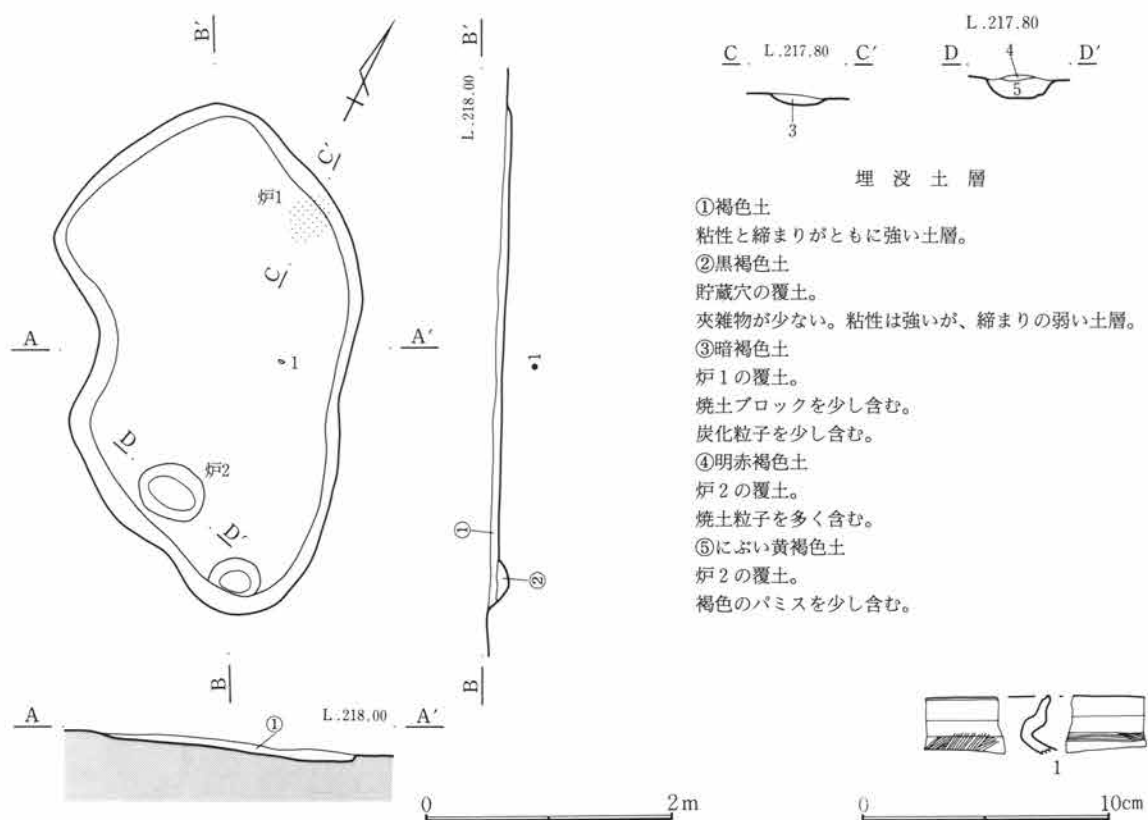
床面 消失し、掘り方部分のみ残存。

埋没土 1層と2層は掘り方の土層である。

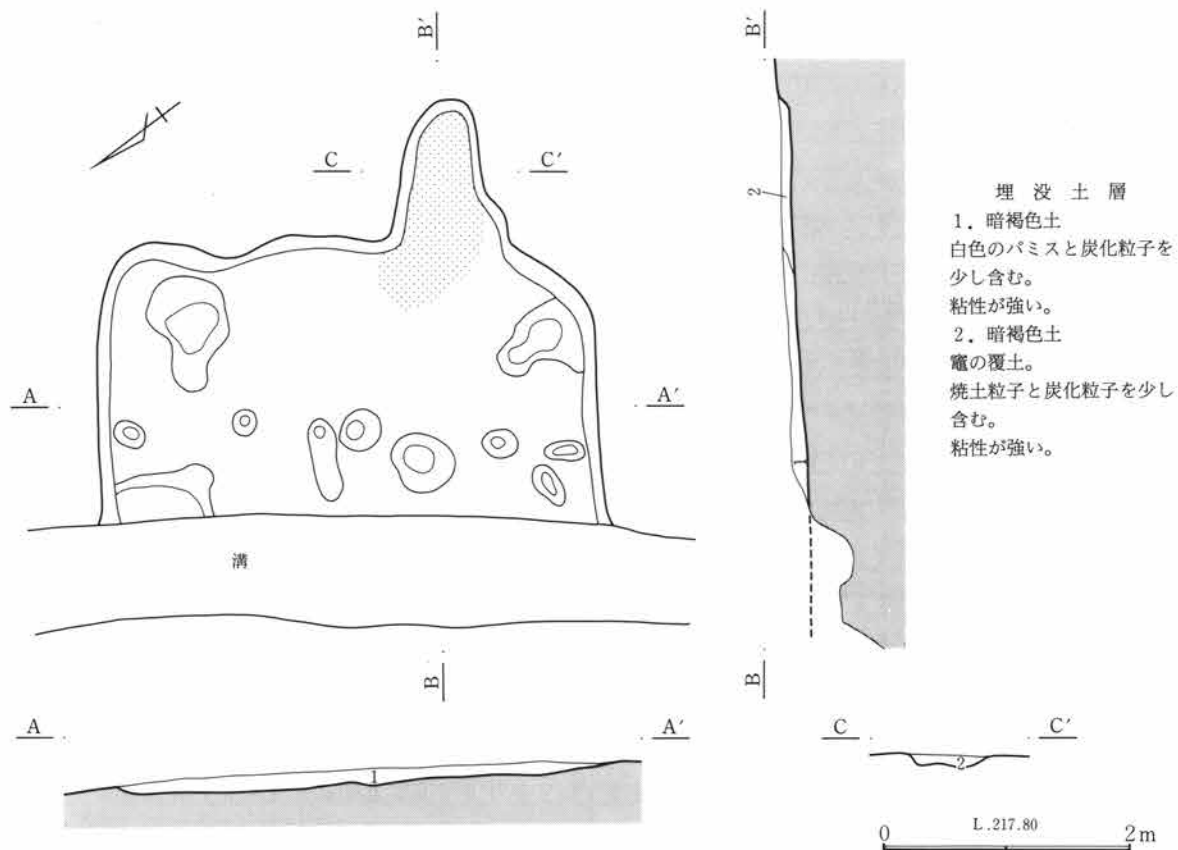
竈 掘り方のみ残存する。東壁中央から南寄りにあり、方位は住居主軸とほぼ同じである。

遺物 古墳時代後期の土師器甕の小片が竈周辺から7点出土したが、図化できなかった。

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

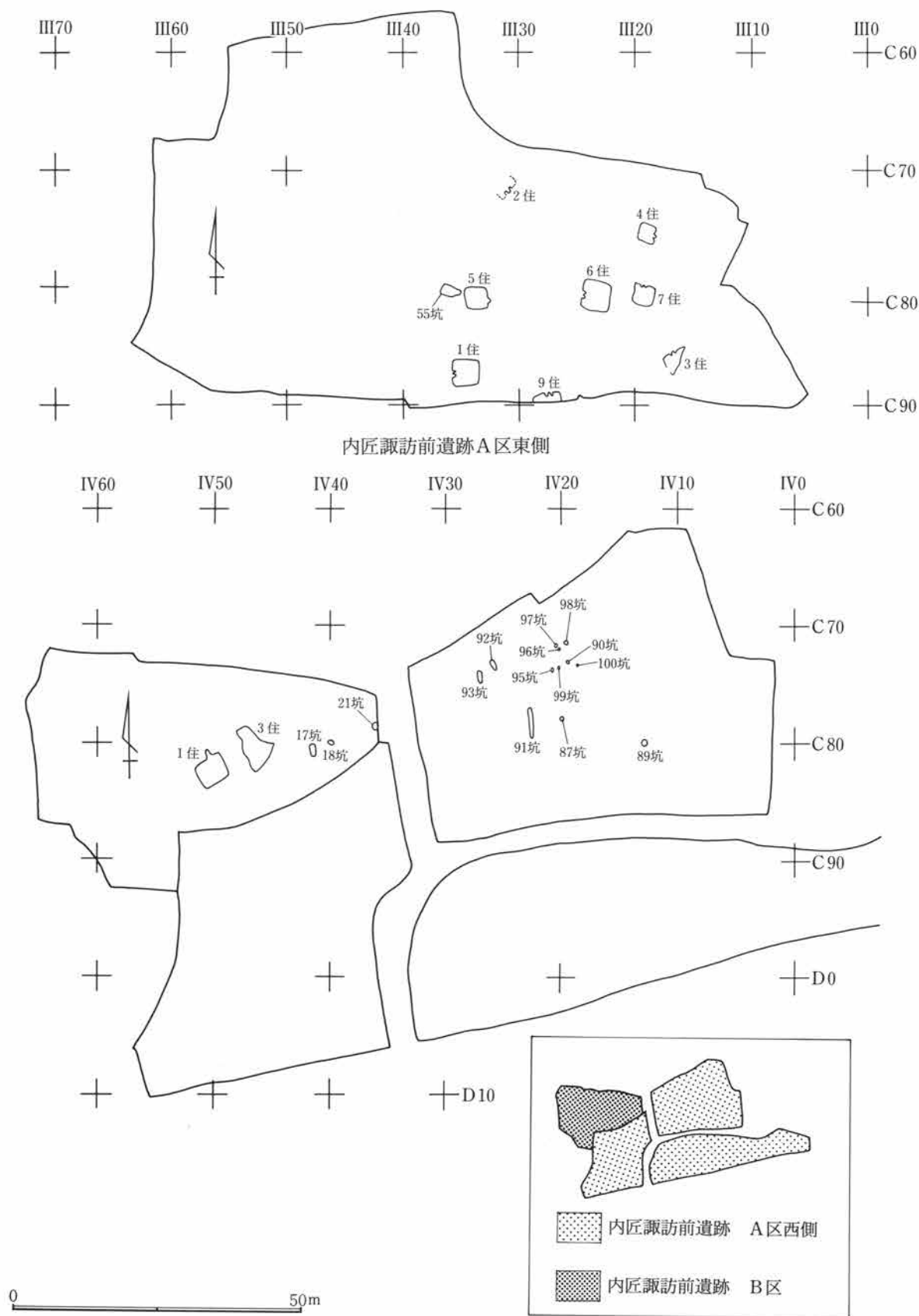


第105図 日B 5号住居と出土遺物



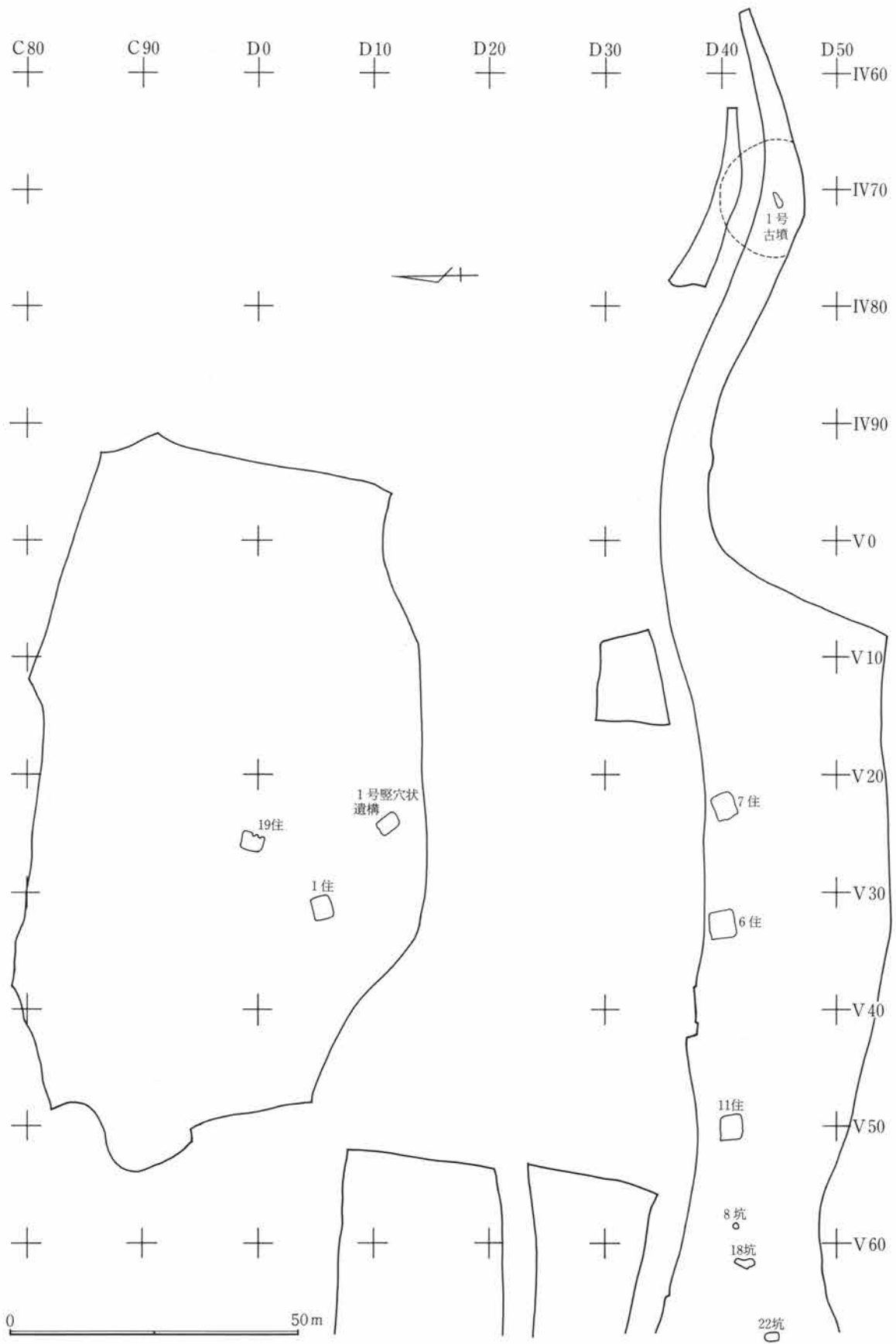
第106図 日B 6号住居

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



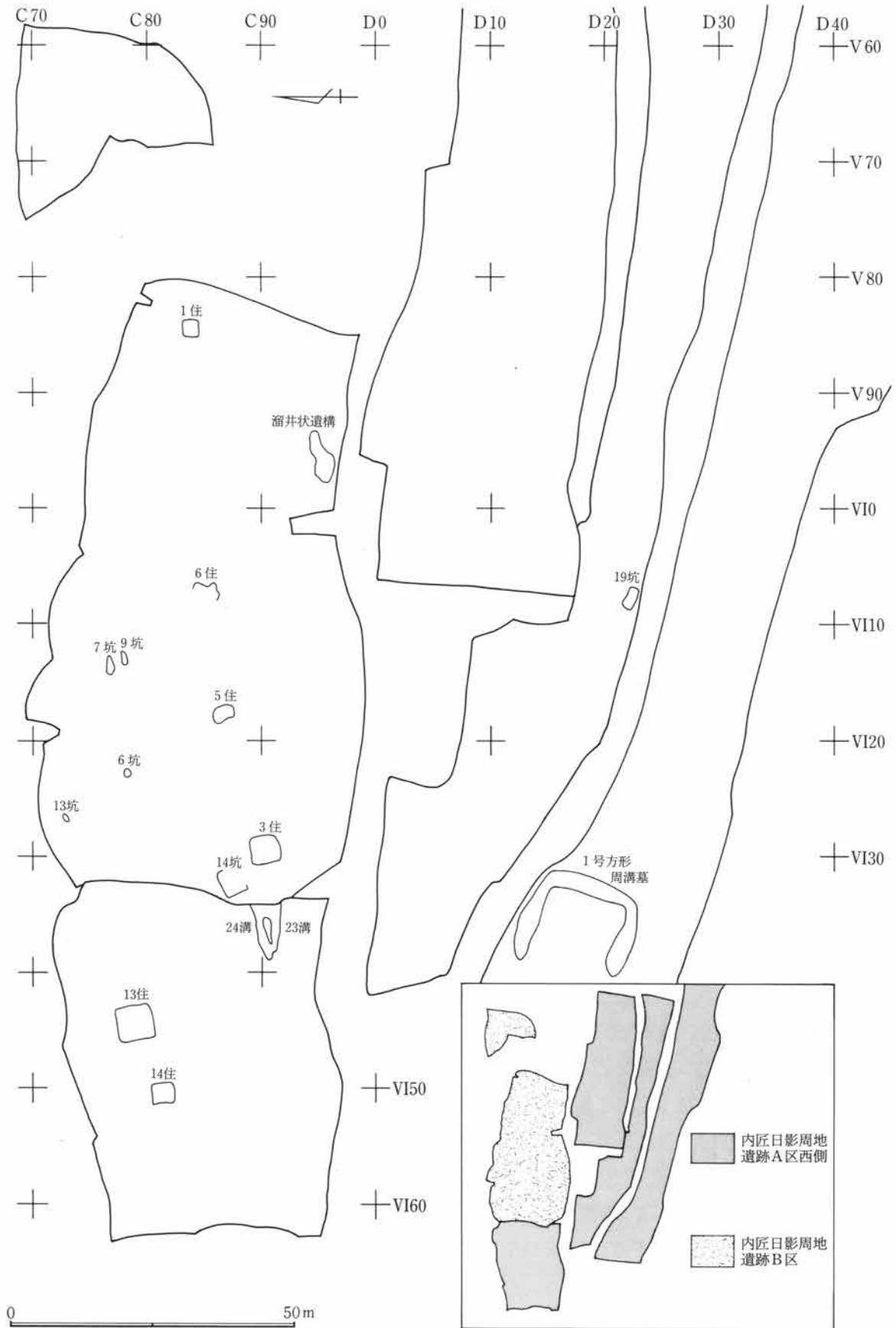
第107図 古墳～平安時代の遺構分布(1)・内匠諏訪前遺跡

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第108図 古墳～平安時代の遺構分布(2)・内匠日影周地遺跡A区東側





第109図 古墳～平安時代の遺構分布 (3)・内匠日影周地遺跡

### 3. 方形周溝墓

内匠日影周地遺跡A区から、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている（本報告の中で方形周溝墓は1基しかない）。同一丘陵上の他の遺跡においても当該期の方形周溝墓は検出例がない。

#### 1号方形周溝墓

位置 D15VI35他  
写真 PL36・52  
方位 N-20°-E

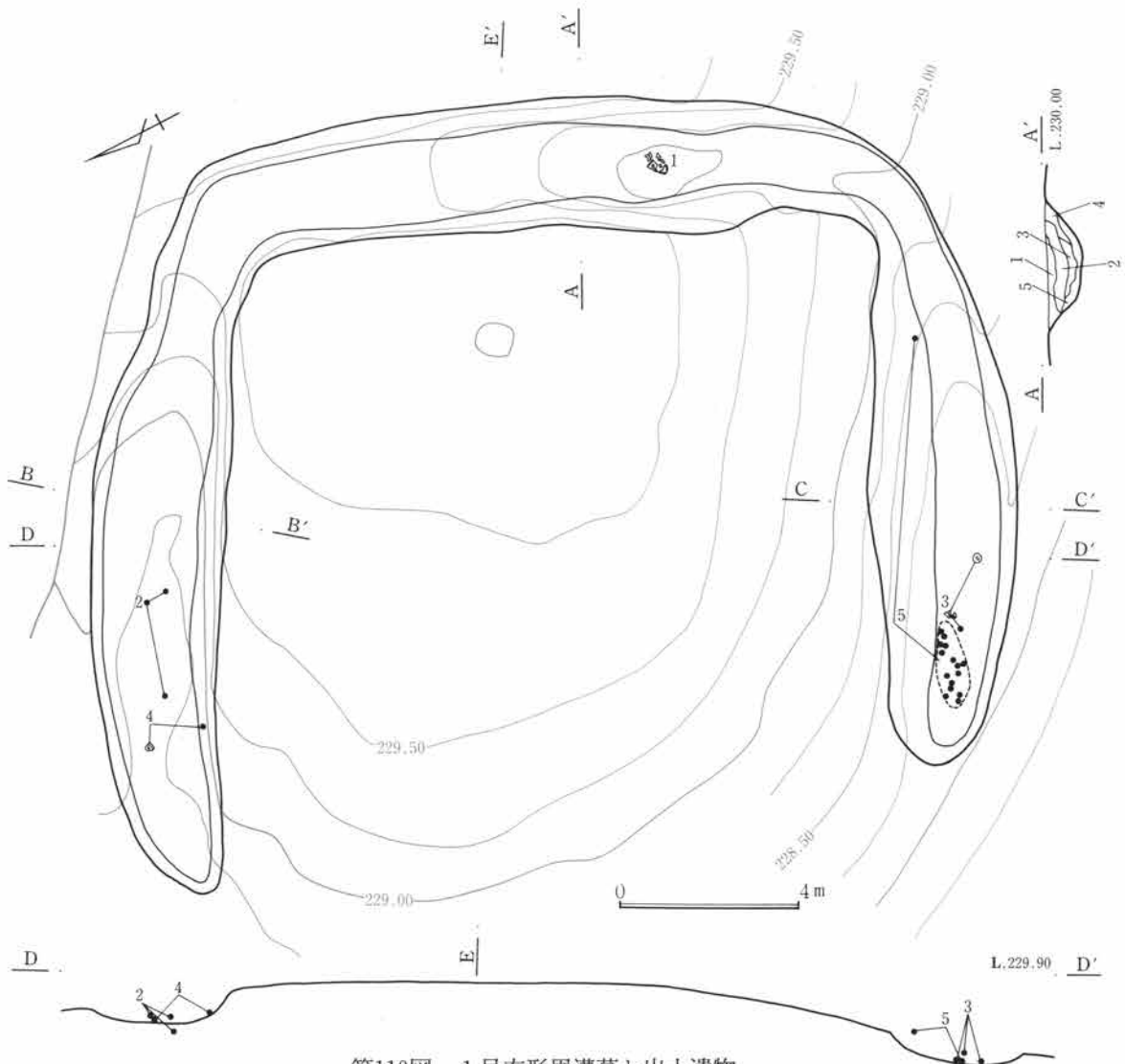
形状 丘陵の西端に位置するために、西・北・南の3方向が傾斜する場所に立地している。西側の浅い谷を挟んで西側は下高瀬上之原古墳群である。

3方向に傾斜するが、とくに西側の傾斜は強くて調査時点においては既に西辺を消失していたが、四辺が溝の方形周溝墓であったと考えられる。

残存部分の形状からみた特徴は2点あり、

- ① 辺の交点部分の幅が若干狭くなる（北東隅と南東隅）。
- ② 各辺の中心部が外側に膨らむために、胴張の隅丸方形を呈する。

などがあげられよう。



第110図 1号方形周溝墓と出土遺物

主体部 検出できなかった。

埋没土 溝の覆土下層はローム質の土壌である。

遺物 溝の中から、古式土師器115点が出土したが、64点は一括して取り上げた。

図化した5点は、溝の底面（もしくは若干浮いた状態）上で出土している。1及び5は、底面上で潰れた状態で出土したが、細かな小片で広がりをもっていた。2・3・4も破片としては大きいが、広がりをもった接合関係を示している。以上のような出土状態から、1～5については本来は溝よりも上の位置にあった可能性が強いと考えられ、溝に転落した時期もかなり早い段階であったと思われる。

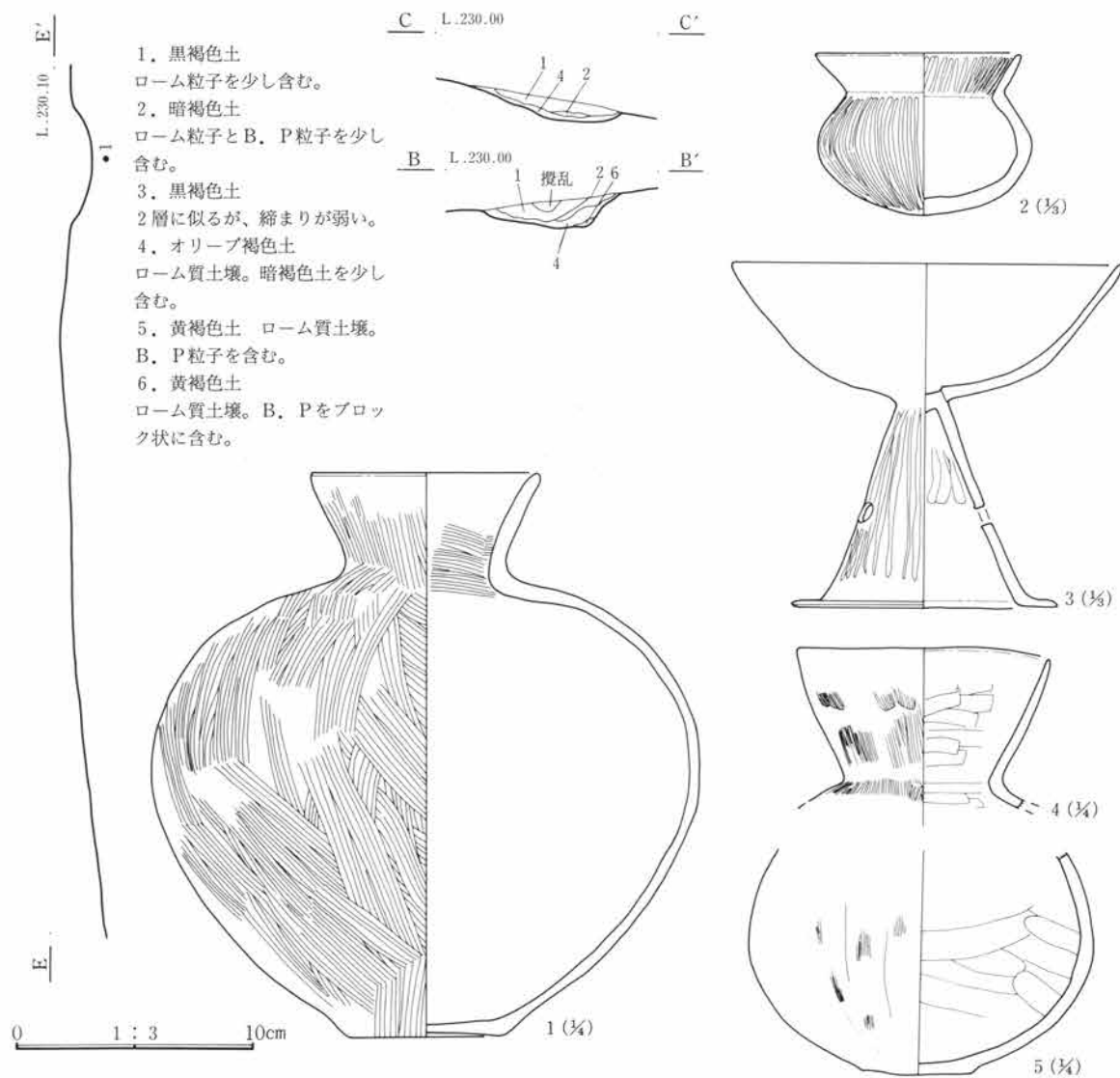
石器の出土はなかった。（遺物観察表：156頁）

計測値一覧

長軸（D-D'）の長さ 20.8m

溝の規模（幅×深さ）（A-A'）2.96m×0.8m、（B-B'）3.04m×0.72m、（C-C'）3.36m×0.8m、（D-D'）（北側）3.04m×0.72m、（D-D'）（南側）2.64m×0.72m、（北東隅）2.48m×0.5m、（南東隅）1.52m×0.3m、であった。

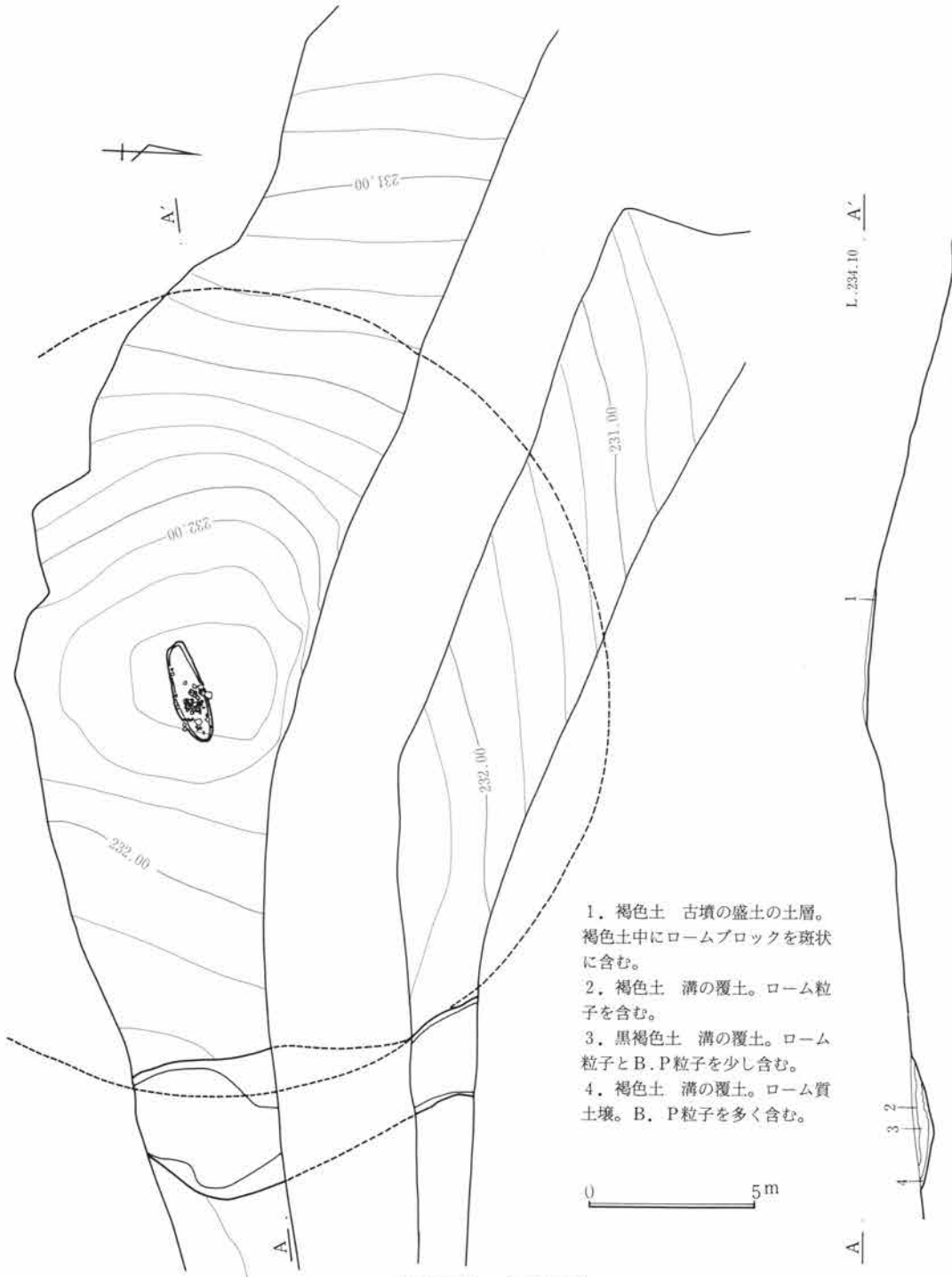
備考 西端に1号墓塚がある。また、溝内で2の近辺から、平安時代の坏1点と高台付碗2点が底面上40cmの高さで出土している（第119図11・12・13）。出土状況から、調査時には検出できなかった平安時代の土坑があった可能性が指摘できよう。



## 4. 古墳

内匠日影周地遺跡A区から、古墳時代中期（5世紀後半）と思われる古墳が1基検出された。同一丘陵上でほぼ同じ年代の古墳は、南北にはいる浅い谷

を挟んで西側に隣接する下高瀬上之原古墳群（7基）である。下高瀬上之原古墳群と日影周地遺跡の古墳とは、直線距離で約400mほどしか離れておらず、両者ともに馬背状の丘陵の頂部に立地していることなど、共通点を見いだすことができる。



第111図 1号古墳

1号古墳

位 置 D45IV72他

写 真 PL37・52

形 状 丘陵の頂部で、四方が斜面となる場所に立地している。

北側と南側が調査区域外であることや、主体部北側において農道による削平をうけていることなど、調査時における制約が多かった。また、残存状態は極めて悪く盛土の大半を消失し、主体部の痕跡と東側で僅かに壕が検出されたにすぎない。

上記の理由により細かな実態は不明であるが、直径25m(主体部の中心から壕の内側を半径として)の規模をもつ円墳であった可能性が強い。

盛 土 十字にベルトを設定して調査した。

表土を除去したところ、既に大半が流失及び削平等により盛土部がなかった。僅かに中心部においてロームブロックを斑状に含む土層が検出でき、この土層が盛土に比定されると思われる。

主体部 表土を除去した段階で、中心部に自然礫がまとまって出土したため、主体部と認定して調査をすすめた。

礫は総数23点であったが、一部にしか残存していなかった。礫を除去して掘りすすめたところ楕円形

の主体部を検出したが、木の根等の攪乱がはげしく、本来の形状を反映しているかは不明である。

掘り方をもつが、前述した主体部と同様の調査所見である。掘り方も含めて主体部の土層は、ローム質の土壌であった。

主体部の方位はN-73°-Eであり、規模(掘り方を含まない)は、長軸3.1m、幅(最大)0.9m、深さは21cm、であった。

壕 東側で一部が検出できた。

墳丘にたいし全周していたかは不明である。

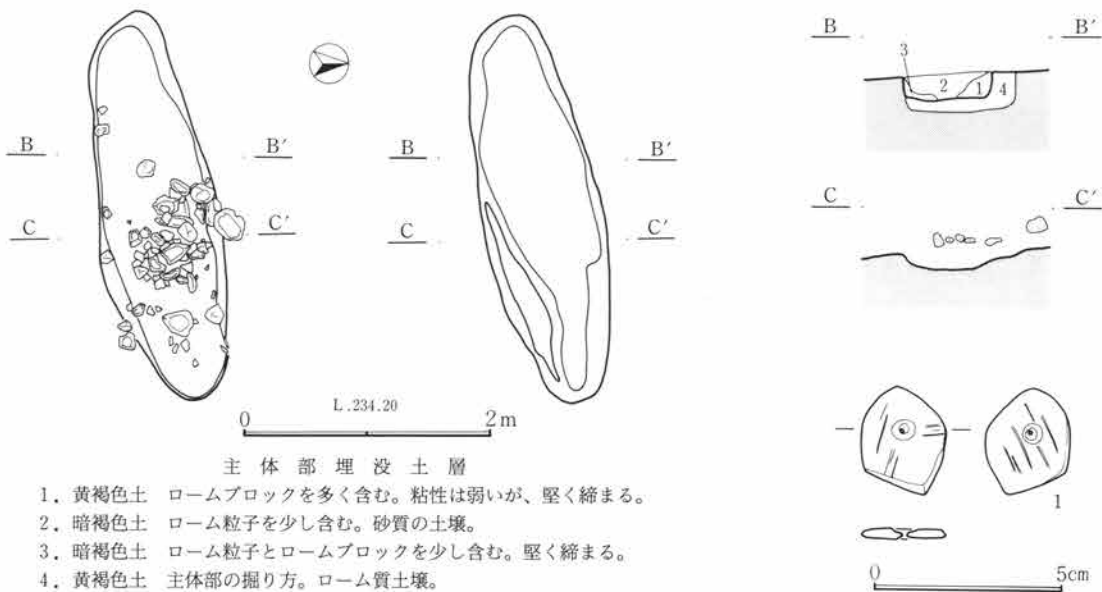
埋没土は、上層が自然堆積を想定させる黒色土であった。

規模は、幅1.9~4.1m、深さ0.7mであった。

遺 物 表面採集で1の石製模造品がみつかったいるが、正確な位置等は不明である。

穿孔の仕方及び石材が、弥生時代の磨製石鏃に類似することなどから、古墳に帰属するかは不明である。また、1号古墳に関する出土遺物は、主体部の礫を除けば1だけである。(遺物観察表:156頁)

備 考 下高瀬古墳群との類似から、5世紀後半に比定される可能性が強い。



第112図 1号古墳主体部と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区1号方形周溝墓出土遺物（第110図、PL 52）

土 器

（単位：cm）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 壺	ほぼ完形	口 12.8 高 30.7 底 8.6	①酸化・普通 ②黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 内外面共に刷毛目。	古式土師
2 小型丸底 壺 か	口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$	口 8.5 高 6.6	①酸化・普通 ②鈍い橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。但し、内面の口縁部は篋磨き。胴部外面は縦方向の篋磨き。	古式土師
3 土 師 器 高 坏	ほぼ完形	口 16.0 高 14.1 底 10.8	①酸化・普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 脚部 外面篋磨き。内面篋撫で。	古式土師
4 土 師 器 壺	口縁部	口 14.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い黄橙色 ③礫（結晶片岩・石英）とパミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 以下、外面刷毛目。内面撫で。	古式土師
5 土 師 器 壺	胴部～底 部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 (5.6)	①酸化・普通 ②灰黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、砂を多量に含む。	胴部 外面刷毛目。内面撫で。	古式土師

内匠日影周地遺跡A区1号古墳出土遺物（第112図、PL 52）

石 器

（単位：cm・g）

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
1	石製模造品	長 2.8 幅 2.2 厚 0.3 重 5.0	製作時の擦痕あり。縁辺にも擦痕あり。	未製品 結晶片岩

内匠諏訪前遺跡A区1号住居出土遺物（第72図、PL 52）

土 器 ・ 土 製 品

（単位：cm・g）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 12.2 高 (4.1)	①酸化・普通 ②黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
2 土 師 器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 (12.9) 高 (4.6)	①酸化・普通 ②赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
3 須 恵 器 甕	口縁部	口 (19.6) 高 — 底 —	①還元・硬 ②褐灰色 ③砂を少量含む。	ロクロ整形。	
4 土 製 品 紡 錘 車	完形	上面径 4.2 下面径 1.9 重 27.0	①酸化・普通 ②黒褐色 ③砂を少量含む。	上面以外は丁寧な磨き。	上面は褐色を呈する。 孔径 0.8

石 器

（単位：cm・g）

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	台 石	長 44.8 幅 32.2 厚 16.5 重 33345	表面には使用によると思われる打痕が認められる。	砂岩

内匠諏訪前遺跡A区2号住居出土遺物（第73図、PL 52）

土 器

（単位：cm）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 甕	胴部～底 部 $\frac{1}{2}$	口 — 高 — 底 5.8	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量砂を多量に含む。	胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に煤附着。 内面に輪痕。

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
2 土師器 小型甕	口縁部欠損	口 14.0 高 12.0	①酸化・普通 ②明黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	丸底
3 土師器 小型甕	口縁部～底部欠損	口 (16.0) 高 12.0	①酸化・普通 ②赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	丸底
4 土師器 小型甕	口縁部～底部欠損	口 15.6 高 15.0	①酸化・粗 ②鈍い赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を多量、砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 篋削り。内面撫で。	丸底
5 土師器 台付甕	底部	口 — 高 — 底 8.1	①酸化・普通 ②明褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	台部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	覆土中 平安時代か。
6 土師器 小型甕	口縁部～底部欠損	口 (13.6) 高 10.4 底 6.4	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	外面に輪積痕。
7 土師器 小型壺	完形	口 10.5 高 10.1 底 4.8	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	内面に黒色処理。
8 土師器 坏	完形	口 12.8 高 4.2	①酸化・普通 ②褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
9 土師器 坏	口縁部一部欠損	口 12.0 高 3.8	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	内面に黒色処理か。
10 土師器 坏	口縁部一部欠損	口 11.2 高 4.5	①酸化・普通 ②褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	

## 内匠諏訪前遺跡 A区 3号住居出土遺物（第74・75図、PL 53）

## 土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	ほぼ完形	口 25.3 高 30.9 底 12.5	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
2 土師器 甕	口縁部欠損	口 23.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
3 土師器 甕	口縁部～胴部欠損	口 23.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
4 土師器 甕	胴部～底部欠損	口 — 高 — 底 (8.0)	①酸化・普通 ②鈍い赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、砂を多量に含む。	胴部 外面斜め及び縦篋削り、内面撫で。	焼成前に外面から刺突を施して穿孔。
5 土師器 甕	胴部	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を多量に含む。	胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面煤付着。 内面に輪積痕。
6 土師器 坏	口縁部～体部欠損	口 14.3 高 5.0	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量、パミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
7 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 (12.4) 高 3.8	①酸化・普通 ②暗褐色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	器厚が一定しない。

内匠諏訪前遺跡 A 区 4 号住居出土遺物 (第76・77図、PL 53)

土 器

(単位：cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	底部欠損	口 22.8 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
2 土師器 小型甕	口縁部 ～胴部迄	口 14.4 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
3 土師器 甕	口縁部 ～胴部迄	口 21.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
4 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 (12.0) 高 (4.5)	①酸化・普通 ②明赤褐色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	9号住居覆土遺物と接合。
5 土師器 坏	口縁部 ～体部	口 — 高 —	①酸化・普通 ②鈍い橙色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	9号住居覆土遺物と接合。
6 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 11.7 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
7 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 11.9 高 4.1	①酸化・普通 ②明赤褐色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
8 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 13.0 高 4.0	①酸化・普通 ②鈍い赤褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	9号住居覆土遺物と接合。
9 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 13.0 高 —	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	暗文

内匠諏訪前遺跡 A 区 5 号住居出土遺物 (第79図、PL 53・54)

土 器

(単位：cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	上半部	口 21.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
2 土師器 坏	完形	口 10.2 高 4.8	①酸化・普通 ②鈍い黄橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	貯蔵穴
3 土師器 小型甕	完形	口 21.0 高 5.2 底 7.5	①酸化・普通 ②褐色 ③礫 (結晶片岩・石英) を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	



## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
4 土師器 坏	ほぼ完形	口 14.0 高 5.2	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③礫（結晶片岩・石英）とパミス を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	貯蔵穴
5 土師器 坏	完形	口 15.2 高 5.8	①酸化・普通 ②鈍い 褐色 ③礫（結晶片岩・石英）とパミス を少量、砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	貯蔵穴
6 土師器 坏	完形	口 12.4 高 5.0	①酸化・普通 ②鈍い 褐色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	内面に黒色顔料が一部残存。 器厚が一定しない。 貯蔵穴
7 土師器 坏	ほぼ完形	口 14.0 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍い 褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	内面黒色処理

## 内匠諏訪前遺跡 A区 6号住居出土遺物（第80図、PL 54）

## 土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 小型甕	口縁部 ～底部迄	口 15.0 高 14.8 底 3.0	①酸化・普通 ②鈍い 赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を 多量、パミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
2 土師器 坏	ほぼ完形	口 11.6 高 4.5	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	器厚が厚い。
3 土師器 坏	完形	口 12.4 高 4.5	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
4 土師器 坏	ほぼ完形	口 11.4 高 4.7	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	器厚が厚い。
5 土師器 坏	体部迄	口 — 高 —	①酸化・普通 ②鈍い 赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	暗文 内面黒色処理 覆土

## 内匠諏訪前遺跡 A区 7号住居出土遺物（第82・83図、PL 54）

## 土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 丸甕	ほぼ完形	口 21.6 高 28.0 底 9.9	①酸化・普通 ②橙 色 ③礫（結晶片岩・石英）を少量、 砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	底部に外面から穿孔。甕 として転用か。孔径2.5。 外面に煤付着。
2 土師器 小型甕	口縁部一 部欠損	口 20.9 高 14.7	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を 多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	丸底
3 土師器 小型甕	底部一部 欠損	口 10.6 高 11.0 底 4.8	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂とパミスを 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り及び斜め篋削り。	6号住居覆土遺物と接 合。
4 土師器 甕	口縁部迄 欠損	口 24.2 高 27.0 底 10.4	①酸化・普通 ②明 褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面横篋削り。内面撫でののち篋磨き。	

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
5 土師器 甕	口縁部 ～胴部	口 (21.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
6 土師器 坏	ほぼ完形	口 11.5 高 3.6	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂とパミス を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
7 土師器 坏	ほぼ完形	口 12.6 高 4.3	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)を少量、 砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
8 土師器 坏	口縁部一 部欠損	口 12.2 高 4.4	①酸化・普通 ②橙 色 ③礫(結晶片 岩・石英)を少量、 砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
9 土師器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 11.8 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
10 土師器 坏	完形	口 13.4 高 4.5	①酸化・普通 ②褐 色 ③砂を多量、パ ミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
11 土師器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 (13.6) 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③砂を多量 に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
12 土師器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 13.4 高 4.7	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③礫(結 晶片岩・石英)と砂 を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
13 土師器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 (12.0) 高 5.0	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	器形・器厚が一定しない。 覆土遺物と4号住居覆土 遺物が接合。
14 土師器 坏	完形	口 13.6 高 4.6	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	

内匠諏訪前遺跡 A 区 9号住居出土遺物 (第84・85図、PL 55)

土 器

(単位:cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	胴部一部 欠損	口 19.0 高 38.0 底 (8.8)	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂を 多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に煤附着。
2 土師器 甕	胴部上半 部	口 19.4 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	内外面共に輪積痕。 外面に煤附着。
3 土師器 甕	口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 (24.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	内面に輪積痕。
4 土師器 坏	完形	口 14.0 高 4.8	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)砂、パミ スを多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
5 土師器 埴	口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$	口 14.1 高 6.8 底 5.8	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に撫でを施さない。 体部 外面篋削り。内面撫で。	

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
6 土師器 坏	口縁部 ～体部 <small>1/2</small>	口 (15.6) 高 3.9	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
7 土師器 坏	完形	口 13.0 高 7.4	①酸化・普通 ②橙 色 ③礫(結晶片 岩・石英)砂、パミ スを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
8 土師器 小型甕	口縁部 ～底部 <small>1/2</small>	口 (9.1) 高 8.5 底 4.0	①酸化・普通 ②鈍 い黄橙色 ③礫(結 晶片岩・石英)と砂 を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面に輪積痕。

## 内匠諏訪前遺跡B区1号住居出土遺物(第86・87図、PL 55・56)

## 土 器・土 製品

(単位: cm・g)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	胴部 <small>1/2</small>	口 — 高 — 底 7.0	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)を少量、 砂を多量に含む。	胴部 外面篋削り。内面撫で。	外面粘土付着。
2 土師器 甕	口縁部 <small>1/2</small>	口 (20.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)を少量、 砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
3 土師器 坏	ほぼ完形	口 14.1 高 5.0	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)、砂、パ ミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
4 土師器 坏	口縁部 ～体部	口 (13.0) 高 —	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
5 土師器 坏	口縁部一 部欠損	口 14.0 高 5.0	①酸化・普通 ②明 褐色 ③砂を少量、 パミスを多量に含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
6 土師器 坏	口縁部 ～体部 <small>1/2</small>	口 (14.0) 高 —	①酸化・普通 ②明 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
7 土師器 坏	ほぼ完形	口 14.8 高 3.9	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
8 土師器 坏	口縁部 ～体部 <small>1/2</small>	口 (15.8) 高 4.0	①酸化・普通 ②明 黄褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
9 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②黄 褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	外面は削り、撫でなどの調整が見受けられ ない。内面は撫で。	時期不明。混入か。
10 土製品 土玉	完形	長 1.4 厚 1.5 幅 1.1 重 1.0	①酸化・普通 ②暗 褐色 ③砂を少量含 む。	両側から焼成前に穿孔。	

## 石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
11	白 玉	長 1.0 幅 1.0 厚 0.4 重 1.0	全面研磨。円形に近い。	孔径 0.3 完形

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
12	白玉	長 1.3 幅 1.1 厚 0.5 重 2.0	全面研磨。円形に近い。断面形状は三角形。	孔径 0.3 完形
13	白玉	長 1.5 幅 1.6 厚 0.6 重 5.0	全面研磨。裏面傷あり。穿孔途中。	未製品
14	白玉	長 1.3 幅 1.4 厚 0.5 重 1.0	全面研磨。円形に近い。	孔径 0.2 完形
15	白玉	長 1.1 幅 1.5 厚 0.4 重 0.5	裏面研磨なし。円形に近い。穿孔途中。	未製品
16	白玉	長 1.3 幅 1.4 厚 0.5 重 2.0	全面研磨。円形に近い。	孔径 0.3 完形

内匠諏訪前遺跡B区3号住居出土遺物（第88図、PL 56）

土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1	ほぼ完形	口 14.4 高 4.8	①酸化・普通 ②鈍い赤褐色 ③礫（結晶片岩・石英）、砂、パミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
2	口縁部～体部1/2	口 (14.1) 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③礫（結晶片岩・石英）、砂、パミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。口唇部肥厚。	
3	口縁部～体部1/2	口 (13.5) 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍い橙色 ③礫（結晶片岩・石英）、砂、パミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	

内匠日影周地遺跡A区1号住居出土遺物（第89図、PL 56）

土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1	口縁部～胴部1/2	口 (14.4) 高 —	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部 S字状口縁の台付甕。内面の一部に刷毛目。 胴部 外面刷毛目。	古式土師 試掘調査の際に出土。 覆土中
2	口縁部～胴部1/2	口 8.6 高 8.1 底 (4.1)	①酸化・普通 ②鈍い褐色 ③砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。	古式土師 表面が荒れている。

内匠日影周地遺跡A区6号住居出土遺物（第91・92図、PL 56・57）

土 器

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1	ほぼ完形	口 18.2 高 34.6 底 6.0	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
2	口縁部～胴部1/2	口 (19.3) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
3	胴部一部欠損	口 16.1 高 30.4 底 7.1	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	外面に煤付着。
4	胴部～底部1/2	口 — 高 — 底 5.0	①酸化・普通 ②鈍い黄褐色 ③礫（結晶片岩・石英）と砂を少量含む。	胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	内面に輪積痕。 外面に粘土付着。

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
5 土師器 甕	口縁部 ～胴部迄	口 (23.3) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
6 土師器 甕	口縁部 ～胴部迄	口 (21.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②赤 褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
7 土師器 小型甕	口縁部 ～底部迄	口 (13.4) 高 14.8	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	丸底
8 土師器 甕	口縁部 ～胴部	口 (20.5) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
9 土師器 丸甕	頸部～胴 部迄	口 (19.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	内面に輪積痕。口縁部と 胴部の接合部に稜。
10 土師器 甕	胴部～底 部迄	口 — 高 —	①酸化・軟 ②明黄 褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	丸底に近い。 外面に煤付着。 内面に輪積痕。
11 土師器 坏	口縁部一 部欠損	口 13.8 高 6.1	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	
12 土師器 小型甕	口縁部 ～底部迄	口 (17.5) 高 10.7 底 6.7	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)を少量、 砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
13 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 (15.0) 高 6.4	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	暗文
14 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 15.2 高 —	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③礫(結 晶片岩・石英)と砂 を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。体部に稜。	
15 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 12.0 高 4.8	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。体部内面に稜。	
16 土師器 高坏	坏部迄	口 (18.6) 高 —	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	21と同一の可能性あり。
17 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 16.2 高 —	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。体部内面に稜。	
18 土師器 坏	口縁部 ～体部迄	口 (14.0) 高 (5.5)	①酸化・普通 ②褐 色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 内面撫で。篋あたり痕。体部内面に稜。	
19 土師器 坏	完形	口 15.0 高 4.5	①酸化・普通 ②褐 色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。体部内面に稜。	
20 土師器 坏	口縁部一 部欠損	口 16.4 高 4.8	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。体部 内面に稜。	
21 土師器 高坏	脚部	口 — 高 — 底 15.2	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③砂を少量 含む。	脚部 外面篋磨き。内面撫で。	16と同一の可能性あり。

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区7号住居出土遺物（第93図、PL 57）

土 器

（単位：cm）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 小 型 甕	口 縁 部 ～胴部迄	口 13.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②暗 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。口唇部肥厚。	
2 須 恵 器 甕	口縁部破 片	口 (18.0) 高 — 底 —	①還元・硬 ②暗青 灰色 ③砂を少量含 む。	ロクロ整形。	
3 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部	口 (14.0) 高 —	①酸化・普通 ②赤 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	覆土中
4 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部迄	口 (13.0) 高 —	①酸化・普通 ②暗 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	暗文
5 土 師 器 坏	口 縁 部 ～底部迄	口 14.0 高 4.9	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	内面黒色処理か。
6 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部迄	口 (14.4) 高 4.0	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
7 土 師 器 塊	口縁部一 部欠損	口 5.2 高 3.0 底 2.5	①酸化・普通 ②黒 褐色 ③礫（結晶片 岩・石英）と砂を少 量含む。	手握整形。外面篋削り。	ミニチュア

内匠日影周地遺跡A区11号住居出土遺物（第95図、PL 57）

土 器

（単位：cm）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部	口 (12.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い黄橙色 ③砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
2 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部	口 — 高 —	①酸化・普通 ②鈍 い黄橙色 ③砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	

内匠日影周地遺跡A区13号住居出土遺物（第96図、PL 57・58）

土 器

（単位：cm）

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土 師 器 丸 甕	胴部～底 部	口 — 高 — 底 6.8	①酸化・普通 ②鈍 い黄橙色 ③礫（結 晶片岩・石英）を少 量、砂を多量に含む。	胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
2 土 師 器 甕	口縁部片	口 (18.6) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫（結晶 片岩・石英）と砂を 少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	
3 土 師 器 坏	口 縁 部 ～底部	口 (12.8) 高 3.2	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
4 須 恵 器 坏	口 縁 部 ～底部	口 13.8 高 3.6 底 7.0	①還元・普通 ②黄 灰色 ③砂を少量含 む。	内外面共にロクロ整形（右回転）。 底部は回転糸切り無調整。	平安時代。混入。
5 土 師 器 坏	口 縁 部 ～体部	口 (15.0) 高 —	①酸化・普通 ②明 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
6 土師器 甕	底部片	口 — 高 — 底 9.7	①酸化・普通 ②黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	木葉痕。
7 土師器 坏	口縁部 ～体部 $\frac{1}{4}$	口 (14.2) 高 3.6	①酸化・普通 ②鈍い橙色 ③砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	
8 須恵器 坏	口縁部 $\frac{3}{4}$ 欠損	口 (12.6) 高 4.4 底 6.0	①還元・普通 ②黄灰色 ③砂を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。	平安時代。混入。

## 内匠日影周地遺跡A区14号住居出土遺物(第97図、PL 58)

## 土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 21.4 高 26.7 底 12.0	①酸化・普通 ②褐色 ③礫(結晶片岩・石英)を多量、砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	内外面に輪積痕。
2 土師器 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い赤褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を多量に含む。	胴部 外面縦篋削り。内面撫で。	

## 石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
1	砥石	長 22.3 幅 19.9 厚 5.7 重 3500	中央を中心として線条痕。	安山岩。

## 内匠日影周地遺跡A区19号住居出土遺物(第98図、PL 58)

## 土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 丸甕	口縁部 ～頸部	口 (20.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	
2 土師器 坏	口縁部 ～底部 $\frac{1}{4}$	口 (16.0) 高 —	①酸化・普通 ②黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	

## 内匠日影周地遺跡B区1号住居出土遺物(第99図、PL 58)

## 土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 小型甕	口縁部 ～底部 $\frac{3}{4}$	口 14.0 高 13.0	①酸化・普通 ②褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	丸底

## 内匠日影周地遺跡B区3号住居出土遺物(第100～104図、PL 58～60)

## 土 器

(単位: cm・g)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1 土師器 甕	底部欠損	口 17.4 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明赤褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①酸化②色調③胎土	器形・文様・製作技法の特徴	備考
2 土師器 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い赤褐色 ③礫（結 晶片岩・石英）と砂 を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師
3 土師器 甕	胴部～底 部	口 — 高 — 底 5.9	①酸化・普通 ②鈍 い赤褐色 ③礫（結 晶片岩・石英）と砂 を多量に含む。	胴部 外面刷毛目ののち篋撫で。内面撫で。篋あ たり痕。	古式土師
4 土師器 甕	底部	口 — 高 — 底 9.6	①酸化・普通 ②茶 褐色 ③礫（結晶片 岩・石英）と砂を多 量に含む。	外面篋削り。内面撫で。	古式土師
5 土師器 甕	胴部～底 部	口 — 高 — 底 5.0	①酸化・普通 ②茶 褐色 ③礫（結晶片 岩・石英）と砂を多 量に含む。	外面篋削り。内面撫で。	古式土師
6 土師器 甕	口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 16.3 高 — 底 —	①酸化・普通 ②橙 色 ③礫（結晶片 岩・石英）と砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師
7 土師器 甕	胴部	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫（結晶 片岩・石英）と砂を 多量に含む。	胴部 外面刷毛目ののち篋撫で。内面撫で。	古式土師
8 土師器 甕	底部	口 — 高 — 底 7.4	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫（結晶 片岩・石英）と砂を 多量に含む。	内外面共に篋撫で。	古式土師
9 土師器 甕	口縁部	口 (17.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③礫（結 晶片岩・石英）と砂 を多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師 谷出土の遺物と接合。
10 土師器 甕	胴部	口 — 高 — 底 (7.8)	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂とバミス を少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師 内面に輪痕。
11 土師器 甕	口縁部	口 16.4 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫（結晶 片岩・石英）と砂を 多量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	古式土師
12 弥生 蓋	ほぼ完形	口 14.6 高 6.8 つまみ部径 2.6	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③礫（結 晶片岩・石英）、砂、 バミスを少量含む。	内外面共に篋撫で。 つまみ部に指頭圧痕あり。	弥生時代
13 弥生 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫（結晶 片岩・石英）、砂、バ ミスを少量含む。	胴上半部に原体 LR の縄文施文。 外面は磨き。内面は横方向の磨き。	弥生時代
14 土師器 台付甕	ほぼ完形	口 5.6 高 8.0 底 4.3	①酸化・普通 ②鈍 い赤褐色 ③礫（結 晶片岩・石英）と砂 を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。 連結部の外面が張り出す。	ミニチュア、古式土師
15 土師器 台付甕	ほぼ完形	口 7.2 高 6.5 底 5.4	①酸化・普通 ②黄 褐色 ③礫（結晶片 岩・石英）と砂を少 量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師 pit12
16 土師器 台付甕	口縁部 ～胴部片	口 5.5 高 7.5 底 4.3	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫（結晶 片岩・石英）と砂を 少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師



## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
17	土師器 台付甕 口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$	口 (5.3) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師
18	土師器 台付甕 口縁部 ～脚部 $\frac{1}{2}$	口 (5.4) 高 (8.0) 底 4.4	①酸化・普通 ②鈍い 黄橙色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師 谷出土の土器と接合。
19	土師器 台付甕 口縁部 ～胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い 褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師
20	土師器 台付甕 脚部片	口 — 高 — 底 4.8	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師
21	土師器 台付甕 脚部片	口 — 高 — 底 4.8	①酸化・普通 ②鈍い 橙色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面篋削り。内面撫で。	ミニチュア、古式土師
22	土師器 高 坏	口 18.3 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②明 褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	外面刷毛目ののち撫でと磨き。 内面撫でののち磨き。	古式土師 内面に丹彩の痕跡。
23	土師器 高 坏	口 19.5 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②明 赤褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	内外面共に篋による撫でののち磨き。	古式土師
24	土師器 高 坏	口 22.0 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②明 黄褐色 ③砂とパミスを少量含む。	内外面共に篋による撫でののち磨き。	古式土師
25	土師器 高 坏	口 19.9 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②赤 褐色 ③礫(結晶片岩・石英)、砂、パミスを少量含む。	内外面共に篋による撫でののち磨き。	古式土師
26	土師器 高 坏	口 18.2 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂とパミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 内外面共に刷毛目ののち撫で整形。	古式土師
27	土師器 高 坏	口 17.0 高 — 裾 —	①酸化・普通 ②茶 褐色 ③砂とパミスを少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 内外面共に撫で。	古式土師
28	土師器 器 台	口縁部 7.0 一部欠損 9.0 脚 10.4	①酸化・普通 ②淡 黄色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	内外面共に撫で及び篋磨き。 三方に円形小孔。連結部にも小孔。	古式土師
29	鉄製品 鉄 鉄	幅 0.6 厚 0.4 重 2.8		断面長方形を呈する。	
30	須恵器 甕 口縁部 ～胴部	口 12.2 高 — 底 —	①還元・硬 ②灰色 ③砂を少量含む。	口縁部～胴上半部 内外面共にロクロ整形。胴下半部外面平行叩き。内面青海波叩き。	平安時代以降。混入。 5号土坑覆土遺物と接合。

## 内匠日影周地遺跡B区5号住居出土遺物(第105図、PL 60)

## 土 器

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師器 台付甕 口縁部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍い 黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂を少量含む。	口縁部 S字状を呈する台付甕。 胴部上の外面に刷毛目。内面にも刷毛目を施す。	古式土師

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

住居内出土こも編石

(単位：cm・g)

地 区	遺構名	番号	PL	大 き さ ・ 重 量				石 材	備 考				
内匠諏訪前遺跡A区	1号住居	6	52	長	12.0	幅	5.5	厚	4.3	重	715	緑簾緑泥片岩	完形
〃	〃	7	52	長	14.5	幅	8.5	厚	3.6	重	740	安山岩	〃
〃	〃	8	52	長	13.5	幅	7.0	厚	3.7	重	480	流紋岩	一部欠損
〃	〃	9	52	長	12.5	幅	8.0	厚	3.2	重	470	砂岩	完形
〃	〃	10	52	長	15.5	幅	6.3	厚	3.0	重	575	安山岩	〃
〃	〃	11	52	長	12.0	幅	8.5	厚	3.5	重	575	絹雲母石墨片岩	〃
〃	〃	12	52	長	18.0	幅	7.0	厚	4.3	重	745	〃	〃
〃	3号住居	8	53	長	19.0	幅	8.0	厚	2.8	重	900	点紋絹雲母石墨片岩	〃
〃	〃	9	53	長	19.0	幅	9.0	厚	3.0	重	760	安山岩	一部欠損
〃	〃	10	53	長	16.5	幅	7.0	厚	3.0	重	635	絹雲母石墨片岩	完形
〃	〃	11	53	長	13.5	幅	8.0	厚	3.2	重	565	〃	〃
〃	4号住居	10	53	長	15.0	幅	7.0	厚	2.6	重	455	〃	覆土 完形
内匠諏訪前遺跡B区	1号住居	17	55	長	15.0	幅	6.5	厚	5.2	重	780	安山岩	完形
〃	〃	18	55	長	14.5	幅	7.0	厚	3.9	重	700	緑簾緑泥片岩	〃
〃	〃	19	55	長	13.0	幅	7.0	厚	5.0	重	800	安山岩	〃
〃	〃	20	55	長	13.5	幅	7.0	厚	3.3	重	585	〃	〃
〃	〃	21	55	長	11.0	幅	6.0	厚	4.6	重	625	〃	一部欠損
〃	〃	22	55	長	15.0	幅	7.5	厚	4.3	重	950	〃	完形
〃	〃	23	56	長	13.0	幅	7.0	厚	5.6	重	900	石英閃緑岩	一部欠損
〃	〃	24	56	長	14.5	幅	8.5	厚	4.0	重	900	安山岩	完形
〃	〃	25	55	長	15.5	幅	7.0	厚	4.3	重	770	石英粗面岩	〃
〃	〃	26	55	長	13.5	幅	7.0	厚	4.6	重	800	安山岩	〃
〃	〃	27	55	長	15.0	幅	7.0	厚	3.7	重	760	〃	〃
〃	〃	28	56	長	16.0	幅	7.0	厚	3.5	重	800	〃	〃
〃	〃	29	55	長	12.5	幅	7.5	厚	4.8	重	650	〃	〃
〃	〃	30	56	長	13.0	幅	8.0	厚	3.7	重	680	〃	〃
〃	〃	31	55	長	14.0	幅	8.0	厚	5.3	重	800	〃	〃
〃	〃	32	55	長	15.0	幅	7.0	厚	4.3	重	900	〃	〃
〃	〃	33	56	長	14.0	幅	8.0	厚	4.0	重	730	流紋岩	〃
〃	〃	34	56	長	15.0	幅	7.5	厚	4.6	重	900	安山岩	〃
〃	〃	35	56	長	13.0	幅	8.0	厚	4.5	重	650	流紋岩	〃
〃	〃	36	56	長	12.5	幅	7.5	厚	3.9	重	800	安山岩	〃
内匠日影周地遺跡A区	7号住居	8	57	長	16.0	幅	9.0	厚	4.6	重	1000	〃	〃
〃	〃	9	57	長	16.0	幅	7.5	厚	3.9	重	1000	〃	〃
〃	〃	10	57	長	16.5	幅	6.5	厚	5.0	重	1000	〃	一部欠損
〃	〃	11	57	長	14.0	幅	6.5	厚	4.7	重	900	〃	覆土 完形
〃	11号住居	3	57	長	17.0	幅	5.5	厚	2.1	重	370	絹雲母緑泥片岩	完形
〃	〃	4	57	長	14.0	幅	6.0	厚	3.7	重	440	砂岩	覆土 完形
〃	13号住居	9	58	長	14.0	幅	7.0	厚	3.7	重	705	安山岩	一部欠損
〃	〃	10	58	長	15.5	幅	9.5	厚	4.4	重	1000	〃	完形
〃	〃	11	58	長	16.0	幅	6.5	厚	6.0	重	850	〃	〃
〃	〃	12	58	長	14.5	幅	8.0	厚	4.6	重	900	〃	〃
〃	〃	13	58	長	15.5	幅	9.5	厚	5.0	重	1000	石英粗面岩	〃
〃	〃	14	58	長	16.0	幅	7.5	厚	3.5	重	670	安山岩	〃
〃	〃	15	58	長	16.0	幅	5.5	厚	4.2	重	800	〃	〃
〃	〃	16	58	長	15.5	幅	8.0	厚	3.3	重	700	〃	〃
〃	〃	17	58	長	16.0	幅	7.5	厚	5.7	重	950	熔結凝灰岩	〃
〃	〃	18	58	長	15.0	幅	8.5	厚	4.6	重	1000	安山岩	〃
〃	〃	19	58	長	12.0	幅	6.5	厚	4.7	重	640	〃	〃
〃	〃	20	58	長	14.5	幅	7.0	厚	4.3	重	770	石英粗面岩	〃
〃	19号住居	3	58	長	13.5	幅	7.0	厚	3.5	重	520	輝緑岩	一部欠損
〃	〃	4	58	長	13.5	幅	6.5	厚	4.4	重	610	緑簾緑泥片岩	〃

## 5. 溜井状遺構

内匠日影周地遺跡B区で平安時代と思われる溜井状遺構1基を検出した。

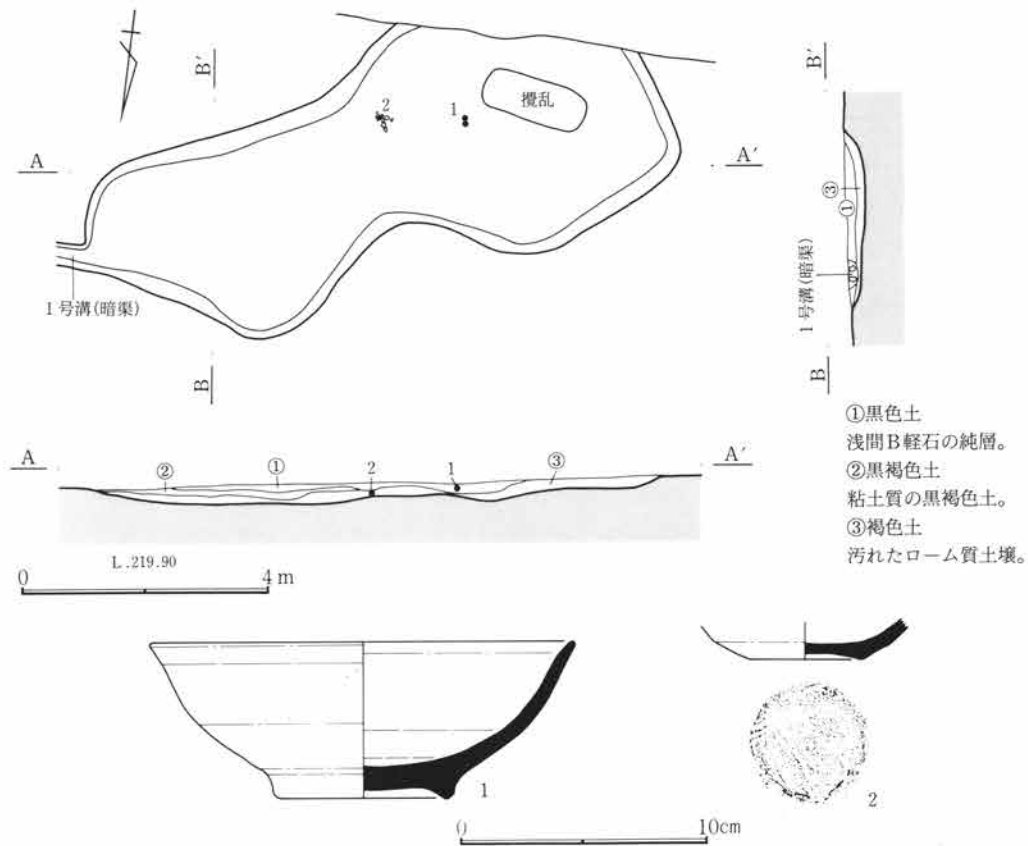
### 1号溜井状遺構

位置 C98V96他 写真 PL51・60

形状 浅い谷の谷頭に位置し、不定形である。南側は農

道のため未調査であり、全体形状を把握できないが、規模は最大長軸9.2m、短軸2.3~3.6mである。ローム層が消失しており、調査時の掘り込みは6~34cmであった。浅間B軽石の純層が堆積し、その下から1・2が出土した。(遺物観察表:178頁)

備考 北端を1号溝(暗渠)に切られ、南側をイモ穴状土坑に切られる。溝・土坑ともに江戸時代以降と思われる。



第113図 1号溜井状遺構と出土遺物

## 6. 竪穴状遺構

内匠日影周地遺跡A区で、古墳時代前期と考えられる竪穴状遺構1基が検出された。

### 1号竪穴状遺構

位置 D11V24他 写真 PL48・60

形状 地形が南から北に緩やかに傾斜する場所に

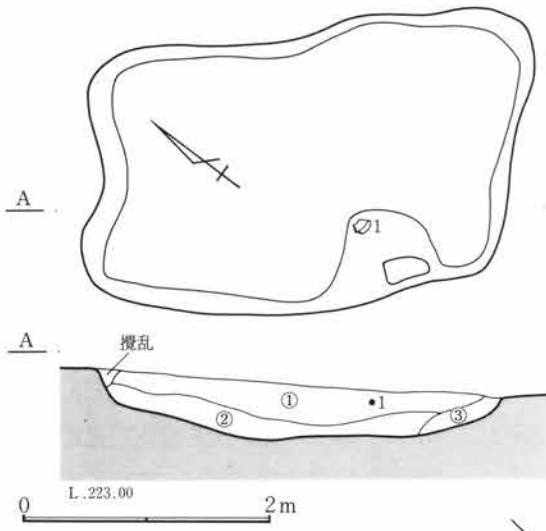
立地し、粘土質の土壌を掘り込んでいる。長辺が3.2~3.5m、短辺が2.0~2.2mの不正隅丸長方形を呈するが、南西の一部がテラス状に掘り残してある。

遺物 古墳時代前期の古式土師器1点(1)と、1の隣から縄文土器片が1点出土した。

埋没土 混入物等のちがいから縄文時代の遺構の埋没土とは異なっている。

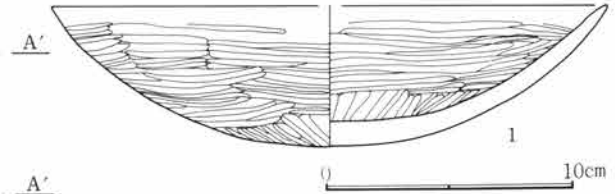
備考 本遺構は埋没土及び遺物から、古墳時代前期に帰属する可能性が強い。(遺物観察表:178頁)

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



1号竪穴状遺構

①黒褐色土 B, P粒子と炭化粒子を少し含む。②黒褐色土 Y, P粒子を主体としたロームブロックを少し含む。③暗褐色土 Y, P粒子を主体としたロームブロックを多く含む。



1号竪穴状遺構出土遺物

## 7. 溝

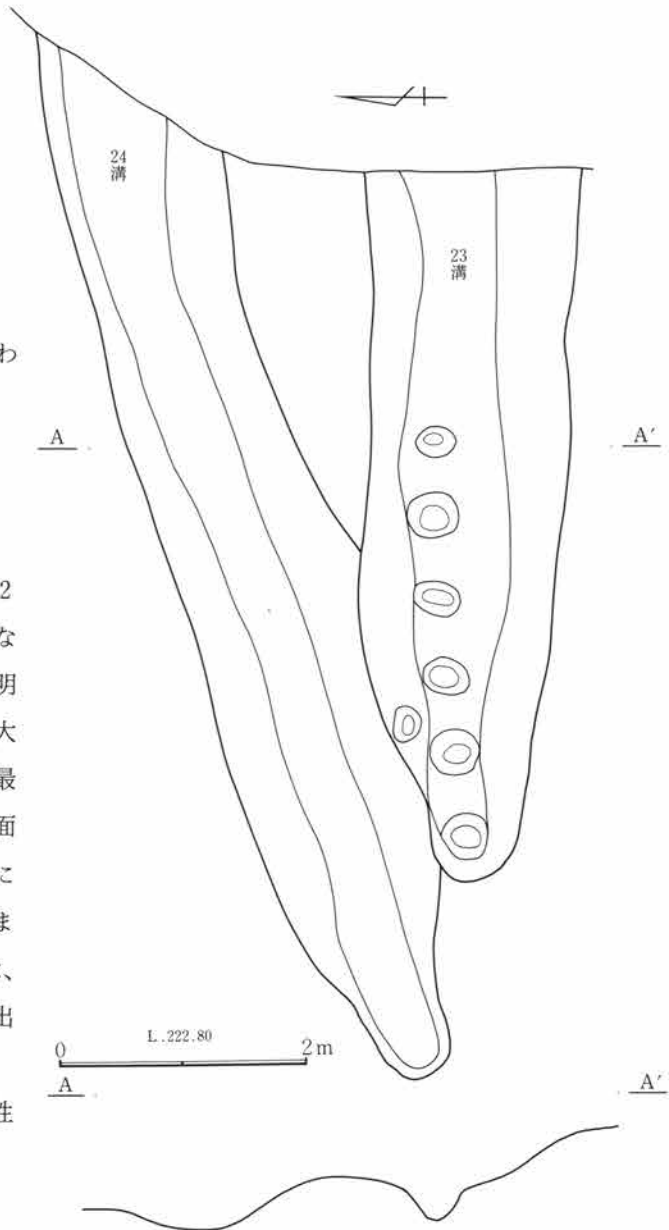
内匠日影周地遺跡A区から、平安時代と思われる溝を2条検出した。

### 内匠日影周地遺跡A区23・24号溝

位置 C90III36他 写真 PL51

北西方向に傾斜する場所に立地している。2条ともに西方向に走行をもつ。重複するような形で検出されているが、時期差をもつかは不明である。溝の規模は、23号溝 長さ5.5m、最大幅1.55m、深さ52cm、で24号溝 長さ8.4m、最大幅1.3m、深さ30cm、であった。23号溝の底面には、柱穴状の土坑が7基検出されたが、溝にともなうか不明である。埋没土は、軽石を含まない黒褐色土が主体をしめていた。出土遺物は、平安時代に比定される高台付碗の破片が3点出土したが、小片のため図化できなかった。

備考 出土遺物から、平安時代の溝の可能性が指摘できるが確実ではない。



第114図 1号竪穴状遺構と出土遺物、日A23・24号溝

(遺物観察表:177頁)

## 8. 土坑

図 第115～117図 写真 PL48～51・60

総数で25基検出されたが、規格性を見いだすことはできなかった。

出土土器から古墳時代後期に比定されるのは、内匠諏訪前遺跡100号土坑だけである。

(遺物観察表:177頁)

平安時代の土坑としては、完形（もしくは近い状態）の土器を出土した日影周地遺跡A区8・18・22号土坑、日影周地遺跡B区6・9号土坑がある。

浅間B軽石を埋没土に含むことから平安時代に帰属すると考えられる土坑として、諏訪前遺跡A区55・87号土坑、諏訪前遺跡B区18・21号土坑、日影周地遺跡6・7・9・13号土坑がある。

土器及び埋没土から帰属する時期が不明な土坑は、諏訪前遺跡A区55・87号土坑、諏訪前遺跡B区17号土坑、日影周地遺跡A区19号土坑、日影周地遺跡B区14号土坑である。帰属時期が不明な5基の土坑は、埋没土等の状況が縄文・江戸時代と異なることから、消去法的に古墳～平安時代に帰属させた。

第4表 古墳～平安時代 土坑規模一覧

(単位:cm)

地 区	番号	位 置	規模(縦×横)×深さ	特 記 事 項	時 期
内匠諏訪前遺跡A区	55	C 80III36	(330×192)×77	不定形。出土遺物なし。	不明
内匠諏訪前遺跡A区	87	C 77IV19	( 80)×18	出土遺物なし。	不明
内匠諏訪前遺跡A区	89	C 79IV12	(124×85)×13	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	90	C 72IV19	( 74×48)×24	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	91	C 76IV22	(560×68)×59	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	92	C 72IV25	(217×92)×50	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	93	C 73IV27	(230×70)×39	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	95	C 73IV21	( 20)×34	古墳時代後期の土師器を7点出土した。	古墳後期
内匠諏訪前遺跡A区	96	C 71IV20	( 44×32)×41	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	97	C 71IV20	( 34)×43	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	98	C 71IV19	(100×65)×23	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	99	C 73IV20	( 30)×35	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠諏訪前遺跡A区	100	C 73IV18	( 25)×23	古墳時代後期の土師器片を10点出土。	古墳後期
内匠諏訪前遺跡B区	17	C 80IV40	(209×90)×39	出土遺物なし。	不明
内匠諏訪前遺跡B区	18	C 79IV39	(141×60)×15	出土遺物なし。	不明
内匠諏訪前遺跡B区	21	C 78IV35	(125×70)×21	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠日影周地遺跡A区	8	D 40V58	(100)×53	完形の高台付塊が1点出土。	平安
内匠日影周地遺跡A区	18	D 41V61	(330×110)×75	完形の坏2点と、完形の高台付塊2点出土。本文参照。	平安
内匠日影周地遺跡A区	19	D 21VI7	(352×180)×82	古墳時代後期の土器片2点と樽式土器片2点出土。	不明
内匠日影周地遺跡A区	22	D 43V67	( ? ×130)×103	完形の高台付塊出土。	平安
内匠日影周地遺跡B区	6	C 78VI22	(144×45)×78	完形の高台付塊出土。浅間B軽石を含む。	平安
内匠日影周地遺跡B区	7	C 76VI13	(262×100)×51	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠日影周地遺跡B区	9	C 77VI12	(259×80)×42	完形の高台付塊出土。浅間B軽石を含む。	平安
内匠日影周地遺跡B区	13	C 72VI26	(100×90)×84	出土遺物なし。浅間B軽石を含む。	平安
内匠日影周地遺跡B区	14	C 86VI32	( ? ×340)×141	出土遺物なし。土坑でない可能性もある。	不明

## 9. 遺構外出土遺物

図 第119図 写真 PL60

遺構外の出土遺物については、小片を除いて器形が復元できるものについて図化した。明らかに遺構

に伴わない遺物についてもここで取り扱ったが、資料操作の段階で、各遺構遺物図に含めてしまったものもある。15は灰釉陶器であるが、小破片も含めて1点のみの出土である。(遺物観察表:178・179頁)

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡 A区18号土坑

位置 D41V61他 写真 PL50・60

形状 地形が緩やかに北から南に傾斜する場所に立地する。

隅丸長方形を呈するが、中央の一部にふくらみをもつ。

西側のふくらみから北側の壁にかけて、底面の横が攪乱（小動物に起因すると思われる）をうけているために、壁の立ち上がりが判然としなかった。

長辺の壁は垂直に近い状態で立ち上がるが、短辺

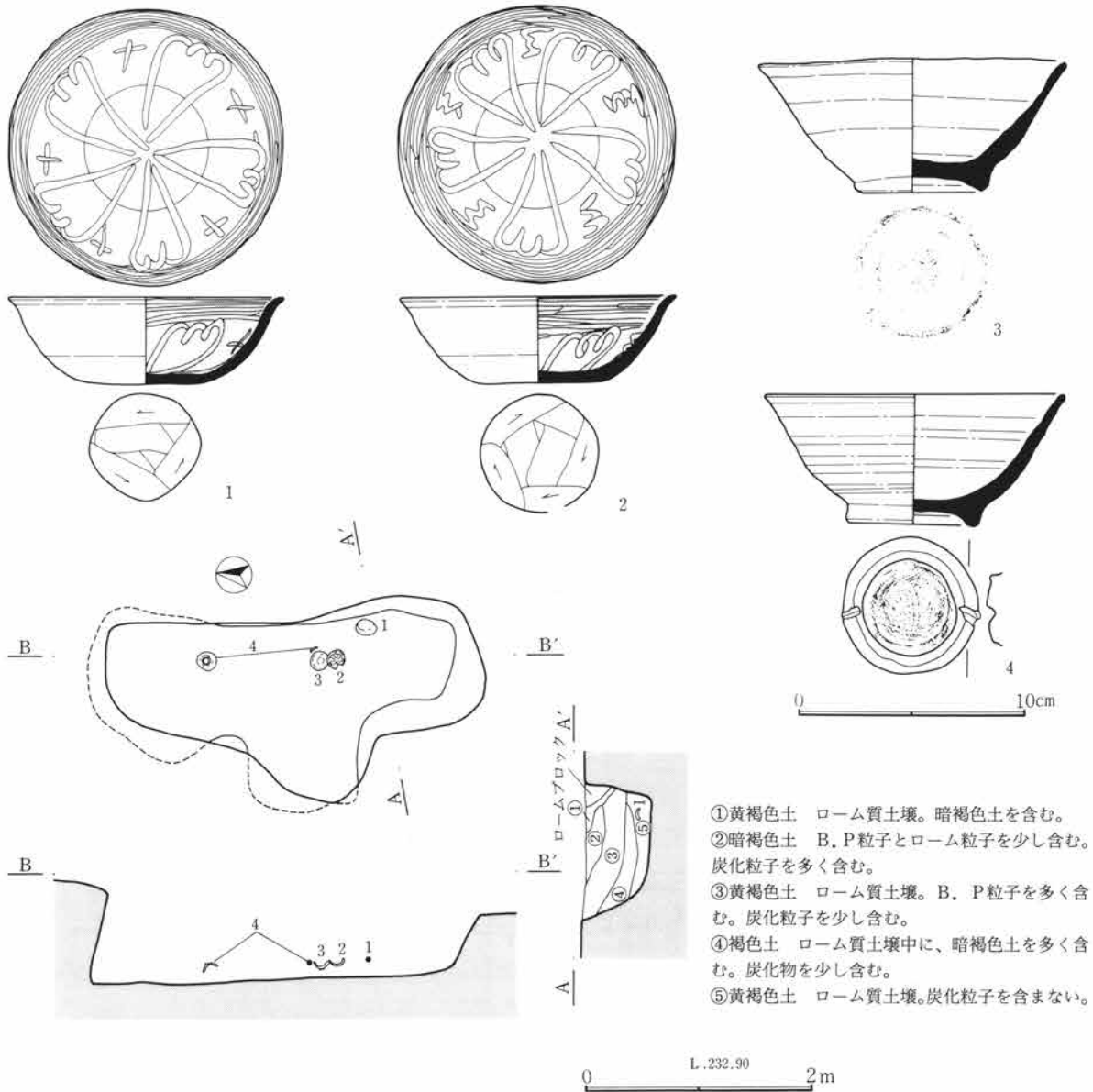
の壁は若干緩やかに立ち上がる。

長軸は3.3m、短軸1.1～1.5m、深さは51～75cm、である。

方位 N-3°-W（ほぼ北向きである）

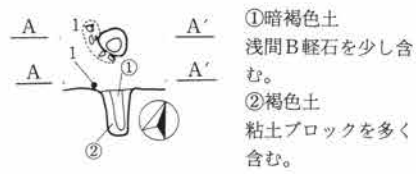
埋没土 ローム質の土壤が主体をしめる。⑤層は水平に堆積していた。①～④層は、ほぼ同様の土が互層をなしていたことから、時間差がない状態で、人為的な一括埋土が想定される。

遺物 図示した4点の出土である。5層上面からの出土であった。（遺物観察表：177頁）

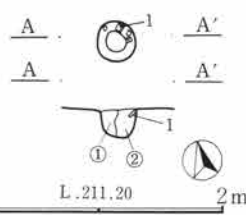
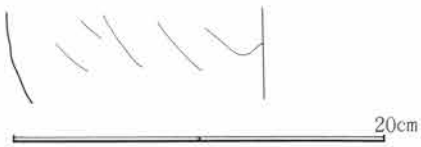


第115図 日A18号土坑と出土遺物

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

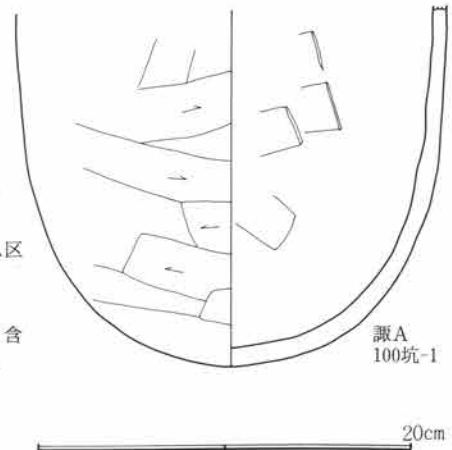


内匠諏訪前遺跡A区95号土坑  
L. 211.20

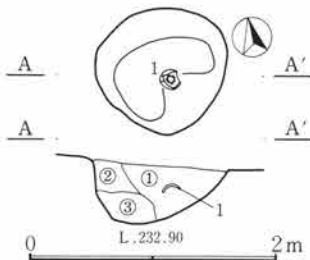


内匠諏訪前遺跡A区  
100号土坑

①黒褐色土  
炭化粒子を多く含む。粘土質土壤。  
②褐色土  
粘土質土壤。

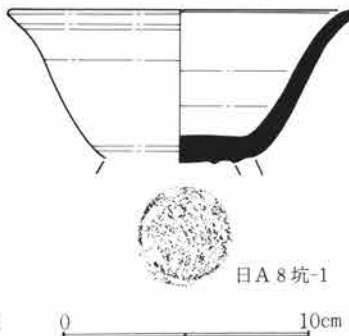


諏A  
100坑-1



内匠日影周地遺跡A区8号土坑

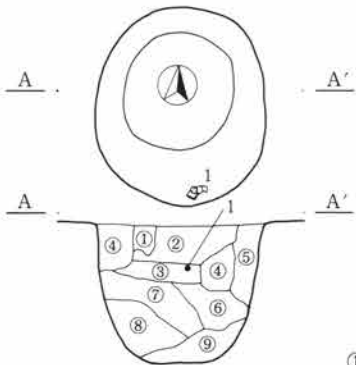
①黒褐色土 B、P粒子とローム粒子を斑状に少し含む。炭化粒子を少し含む。  
②褐色土 ロームブロックを斑状に含む。  
③褐色土 ローム粒子を少し含む。



日A 8坑-1



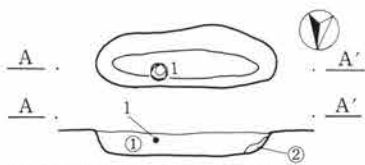
日A22坑-1



内匠日影周地遺跡A区22号土坑

L. 232.40

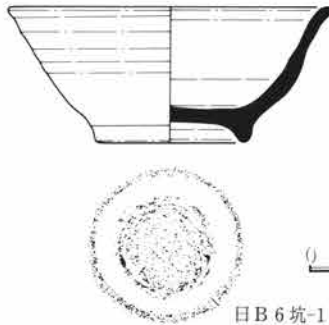
①黒褐色土 炭化粒子を少し含む。②褐色土 ③暗褐色土 ④黄褐色土 炭化粒子を含む。⑤黄褐色土 ロームブロックを含む。⑥暗褐色土 B、P粒子を含む。⑦褐色土 ⑧暗褐色土 ⑨灰黄褐色土



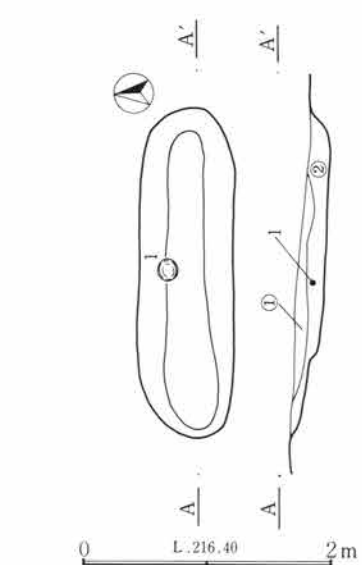
内匠日影周地遺跡B区6号土坑

L. 216.20

①黒色土 浅間B軽石を多く含む。  
②黒褐色土 浅間B軽石を少し含む。

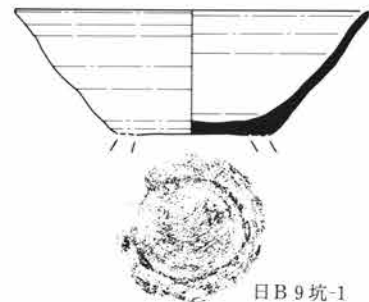


日B 6坑-1



内匠日影周地遺跡B区9号土坑

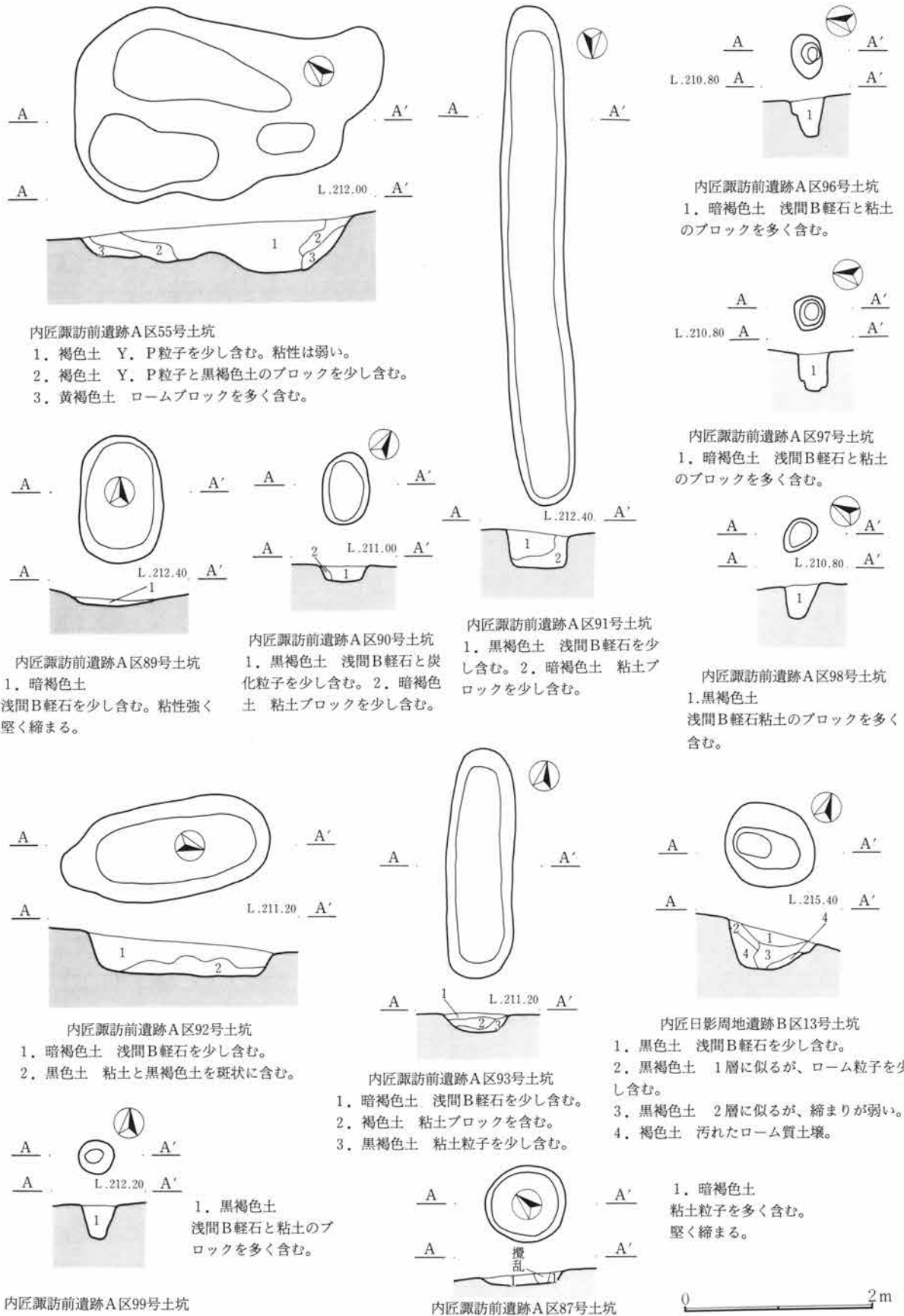
①黒褐色土  
浅間B軽石を含む。粘性が少しある。  
②暗褐色土  
浅間B軽石を含む粘土質の土壤。



日B 9坑-1

第116図 諏A95・100・日A 8・22・日B 6・9号土坑と出土遺物

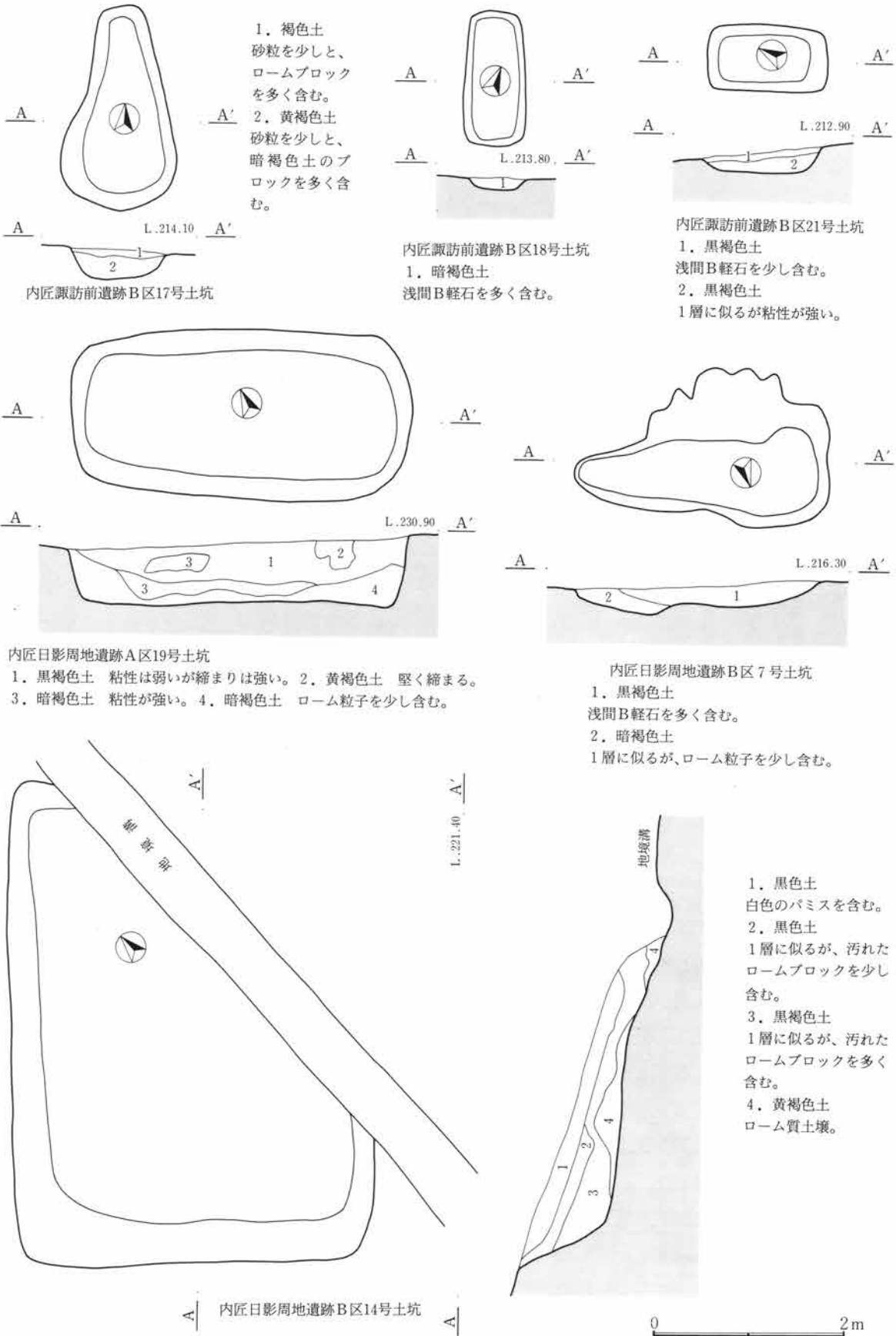
IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第117図 諏A55・87・89・90・91・92・93・96・97・98・99日B13号土坑

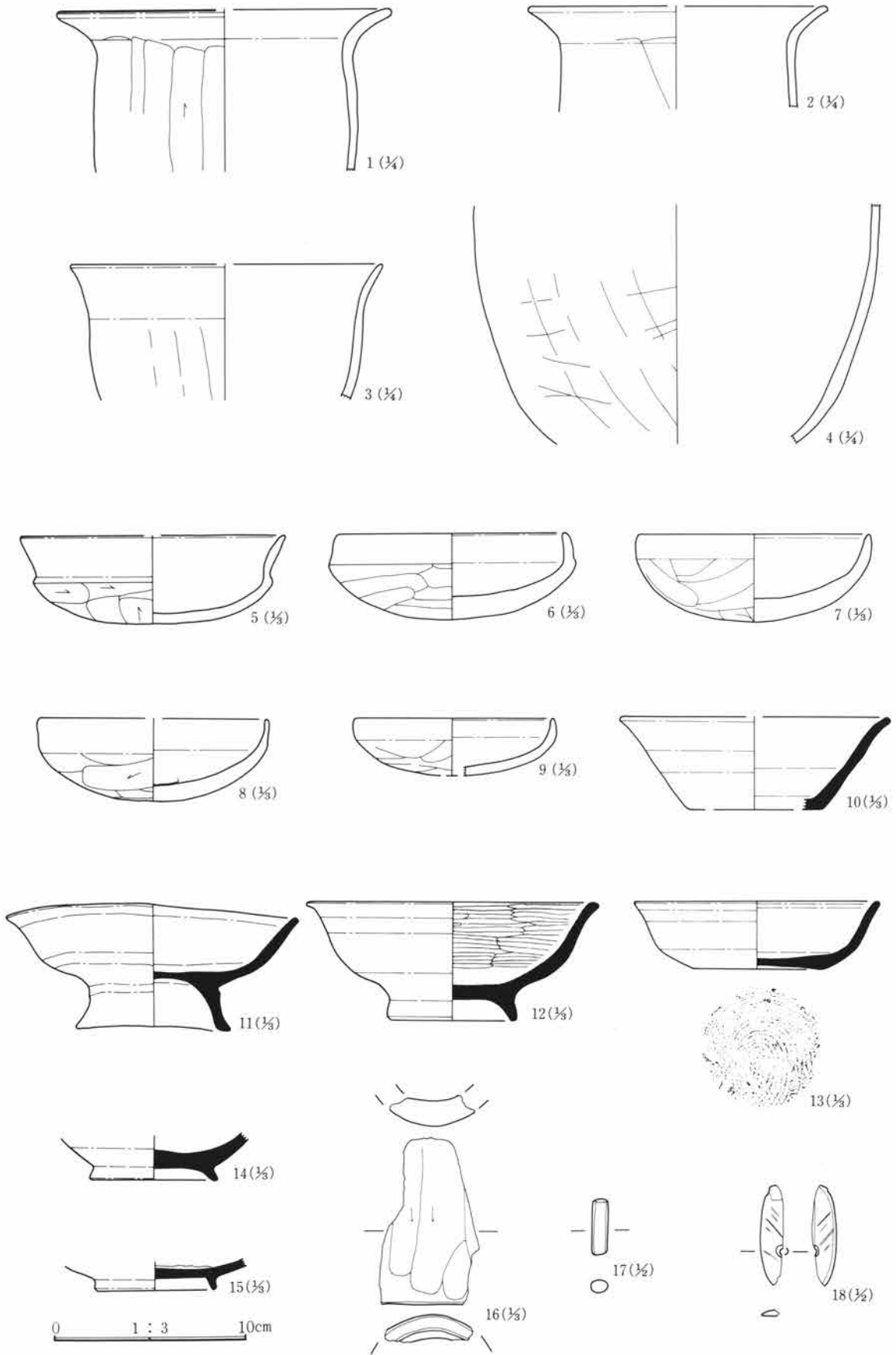


IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第118図 諏B17・18・21・日A19・日B7・14号土坑

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物



第119図 遺構外出土遺物

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

## 内匠日影周地遺跡 A 区18号土坑出土遺物 (第115図、PL 60)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 坏	完形	口 12.0 高 3.7 底 5.0	①酸化・普通 ②明褐色 ③礫(チャート)を少量含む。	ロクロ整形。底部手持ち篋削り。口縁部内面は暗文と同一手法による磨きが施される。	内面黒色処理。暗文
2 坏	口縁部一部欠損	口 12.0 高 3.7 底 5.0	①酸化・普通 ②明褐色 ③礫(チャート)を少量含む。	ロクロ整形。底部手持ち篋削り。口縁部内面は暗文と同一手法による磨きが施される。	内面黒色処理。暗文
3 須惠器 高台付境	ほぼ完形	口 12.8 高 5.8 底 5.4	①還元・軟 ②灰白色 ③礫を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台。	
4 須惠器 高台付境	高台一部欠損	口 13.1 高 5.5 底 5.9	①還元・軟 ②灰オリーブ色 ③礫を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。付高台で2ヶ所刻みを持つ。	

## 内匠諏訪前遺跡 A 区95号土坑出土遺物 (第116図)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土師器 甕	胴部片	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②赤褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂とパミスを少量含む。	外面 横篋削り。内面撫で。	内外面共に器面の荒れが著しい。

## 内匠諏訪前遺跡 A 区100号土坑出土遺物 (第116図)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 土師器 甕	胴部～底部	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②明褐色 ③礫(結晶片岩・石英)と砂とパミスを少量含む。	胴部 外面篋削り。内面撫で。	丸底の長胴甕か。

## 内匠日影周地遺跡 A 区 8 号土坑出土遺物 (第116図、PL 60)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 須惠器 高台付境	高台部一部欠損	口 14.0 高 — 底 —	①酸化・普通 ②淡黄色 ③礫と砂を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

## 内匠日影周地遺跡 A 区22号土坑出土遺物 (第116図、PL 60)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 須惠器 坏	口縁部～底部	口 13.8 高 7.8 底 5.6	①還元・軟 ②鈍い黄褐色 ③礫と砂を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

## 内匠日影周地遺跡 B 区 6 号土坑出土遺物 (第116図、PL 60)

## 土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1 須惠器 高台付境	完形	口 12.6 高 5.3 底 6.2	①還元・軟 ②鈍い黄褐色 ③礫(結晶片岩・石英)を少量と砂を多量に含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り無調整。	

IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡B区9号土坑出土遺物(第116図)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	高台部欠 須恵器 高台付塊	口 14.0 高 4.8 底 6.2	①還元・軟 ②灰白色 ③砂を少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。	

内匠日影周地遺跡B区1号溜井状遺構出土遺物(第113図、PL 60)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	口縁部 高台付塊 ～底部	口 17.0 高 6.2 底 7.4	①酸化・軟 ②鈍い 橙色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂とパ ミス少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 付高台。底部の調整は不明。	器面の荒れが著しい。
2	底部片 坏	口 — 高 — 底 4.6	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂と パミス少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。	

内匠日影周地遺跡A区1号竪穴状遺構出土遺物(第114図、PL 60)

土 器

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	口縁部 土師器 ～底部片 坏	口 (22.2) 高 5.5 底 4.4	①酸化・普通 ②鈍 い黄褐色 ③砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 内外面共に篋磨き。	

遺構外出土遺物(第119図、PL 60)

土 器・土 製品

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	①焼成②色調③胎土	器 形 ・ 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
1	口縁部 土師器 ～胴部片 甕	口 (24.0) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫(結晶 片岩・石英)と砂と パミス少量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面は横篋削り。内面撫で。	C80III13G
2	口縁部片 土師器 甕	口 (21.2) 高 — 底 —	①酸化・普通 ②褐 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を少 量含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面は横篋削り。内面撫で。	C77III13G、C77III15G C83III12G、C78III12G
3	口縁部 土師器 ～胴部片 小型甕	口 21.4 高 — 底 —	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面は斜め篋削り。内面撫で。	C78III23G
4	胴部片 土師器 甕	口 — 高 — 底 —	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③礫(結晶 片岩・石英)を少量 と砂を多量に含む。	胴部 外面篋削り。内面撫で。	C67III41G
5	口縁部 土師器 ～底部片 坏	口 (13.6) 高 4.5	①酸化・普通 ②鈍 い橙色 ③礫(結晶 片岩・石英)を少量 含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	内匠諏訪前遺跡A区4号 住居の隣接グリッド
6	口縁部 土師器 ～底部片 坏	口 11.7 高 4.4	①酸化・普通 ②鈍 い黄橙色 ③砂を多 量に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。	C75III15G 体部肥厚
7	口縁部 土師器 ～底部片 坏	口 12.0 高 4.5	①酸化・普通 ②鈍 い褐色 ③砂を多量 に含む。	口縁部 内外面共に横撫で。 体部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	C72III24G
8	口縁部 土師器 ～底部片 坏	口 (12.0) 高 4.3	①酸化・普通 ②暗 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。篋あたり痕。	内匠諏訪前遺跡B区

## IV 古墳～平安時代の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	①焼成②色調③胎土	器形・成形・整形の特徴	備考
9	土師器 口縁部 ～底部迄 坏	口 10.2 高 2.9	①酸化・普通 ②灰 褐色 ③砂を少量含 む。	口縁部 内外面共に横撫で。 胴部 外面篋削り。内面撫で。	内匠諏訪前遺跡A区4号 住居
10	口縁部 ～底部迄 坏	口 (13.9) 高 4.7 底 (7.1)	①酸化・普通 ②橙 色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂とパ ミス少量含む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。	C77III33G
11	完形 高台付塊	口 15.0 高 6.2 底 8.0	①酸化・普通 ②橙 色 ③砂を少量含 む。	塊部分及び高台部共にロクロ整形(右回転)。 付高台。	内匠日影周地遺跡A区1 号方形周溝墓 焼成時の歪み。
12	完形 高台付塊	口 15.0 高 6.0 底 6.8	①酸化・普通 ②明 褐色 ③砂を少量含 む。	塊部分及び高台部共にロクロ整形(右回転)。 付高台。 体部内面はロクロ整形後、横方向の磨き。	内匠日影周地遺跡A区1 号方形周溝墓 内面黒色 処理。焼成時の歪み。
13	ほぼ完形 坏	口 12.6 高 3.4 底 6.7	①酸化・普通 ②褐 色 ③砂を少量含 む。	内外面共にロクロ整形(右回転)。 底部は回転糸切り無調整。	内匠日影周地遺跡A区1 号方形周溝墓
14	体部～脚 部 高台付塊	口 — 高 — 脚 6.4	①酸化・普通 ②褐 色 ③砂を少量含 む。	塊部分及び高台部共にロクロ整形(右回転)。 付高台。	C75III18G
15	灰釉陶器 皿	口 — 高 — 底 (6.0)	①還元・硬 ②灰白 色 ③夾雑物をほと んど含まない。	ロクロ整形。付高台。潰掛けの可能性が大きい。	内匠日影周地遺跡B区表 採
16	土製品 羽口	径 (7.0)	①酸化・普通 ②黄 褐色 ③礫(結晶片 岩・石英)と砂を多 量に含む。	外面縦篋削り。内面篋整形。	D42IV25G

## 石 器

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形 状 ・ 特 徴 等	備考
17	管 玉 末 製品	長 1.9 幅 0.6 厚 0.4 重 1.0	上、下共に調整。未穿孔。	C85III19G 滑石片岩
18	石製品模 造品か	長 (3.4) 幅 (0.8) 厚 0.2 重 1.0	半分を欠損する。両面に製作時の擦痕。小孔は、両側より穿孔を 施す。	C81III34G 結晶片岩

## V 江戸時代以降の遺構と遺物

### 1. 検出された遺構の概要

内匠諏訪前遺跡A区東側で、屋敷跡が3カ所検出されたが、それ以外は墓14基・溝40条（内 暗渠は9）・土坑16基・井戸1基・畠1カ所である（屋敷に含まれるものは除く）。また、内匠諏訪前遺跡A区西側で、5つの礎石様の遺構を検出した。

（第201～203図参照）

### 2. 屋敷跡

内匠諏訪前遺跡A区東側で検出した屋敷跡は、1～3号屋敷である。2号屋敷は火事により家屋が焼失していた。火災後、天明3年（1783年）の浅間山の噴火に伴う軽石（浅間A軽石）が降下している。1号屋敷は、2号屋敷の東側に位置し、浅間A軽石降下後に敷地造成を行っている。3号屋敷は、2号屋敷の西側に位置するが屋敷地の可能性は弱い。

#### 2号屋敷

位置 C77III44他 方位 N-10°-E

写真 PL62～64・78～80

立地 屋敷は東西に細長い馬背状丘陵上で地形が北西方向に11°傾斜する場所に立地している。東側に1号屋敷が隣接するが、さらに1号屋敷の東側には丘陵を分断する谷が入る。微視的にみれば屋敷地の立地する場所は東側が高くなっている。

年代 屋敷は、出土した肥前系磁器の年代から、18C前～中葉にかけて成立し、浅間A軽石が降下した天明3年（1783年）にかなり近い段階で火災に遭遇して廃絶したと思われる。

規模 斜面を切り盛りして屋敷地の平坦面を造成している。屋敷地の北西部分には13基の墓塚がある

が、調査前に重機を使用した改葬が行われ大きく攪乱されているために一部形状が不明である。なお、墓塚は2号屋敷とは直接関係ない（240頁参照）。

平坦面の長辺は21.1m、短辺は11.3mであり、面積は238.4㎡（推定）の広さであった。また、建物があったと想定される溝の内側は長辺13.1m、短辺10.3mであり、面積は134.9㎡（推定）の広さであった。おおよそ、屋敷地の北西部分が盛土部分にあたり、南東部分を中心に切り土が行われている。

施設 屋敷地内で2号屋敷に伴う遺構として、敷地の南西隅で出入口施設が検出され、さらに、溝1条と土坑4基が検出されている。また、屋敷地南西隅から約9m離れて井戸が1基検出されている。

出入口施設は地山を掘り残してつくられており、両側に溝（13号溝）をもつ。

溝（13号溝）は、出入口施設に沿う部分と、建物があったと想定される部分の外側を一周巡るようであったと思われるが、両者はほぼつながっており一体のものである。西辺の南端近くに柵形に掘られている箇所が存在し、32号土坑も柵形部分と同様に溝に伴う機能をもっていた可能性がある。一周巡る溝は、北辺の一部と西辺の大部分を墓塚改葬時の攪乱により消失する。さらに、東辺の一部がとぎれるが、調査の際に判別がしづらい部分でもあったことから、本来的にはつながっていた可能性が強い。但し、南西隅の一部は溝が明らかに掘られていなかった。また、出入口施設に沿って掘られている溝は、西端を14号溝（近現代の所産）に切られていた。溝の深さは最大10cmであるが、柵形部分は25cmである。

土坑は4基検出されている。

32号土坑は、溝と重なっているが、位置および埋没土などの状況から、溝と一体の遺構である可能性が強い。86号土坑は盛土断ち割り調査の際に、検出された。33号土坑は、その位置から、家屋内の土坑である可能性が強い。

68号土坑は家屋外である可能性が強く、本来は桶が埋設されていたことから便所と考えられる。

井戸（3号井戸）は、屋敷地から離れた場所に位置するが、埋没土に浅間A軽石を多量に含み、皿（3井戸-4）と香炉（3井戸-3）が屋敷地内から出土した破片と接合関係をもつことなどからも、2号屋敷にともなう井戸である可能性が強い。

**埋没土** 生活面直上の土層（4層）は、炭化材や焼土粒を多く含んでいた。また、4層上には浅間A軽石（3層）が堆積している。浅間A軽石は、切り土された部分で厚く堆積しており、東端では、1m以上の厚さである。3層は、浅間A軽石だけで構成されるが、降下時の純層と思われるのは10cmぐらいの厚さである。また、屋敷地北側では、浅間A軽石の純層は検出されていない。

**盛土** 屋敷地の北西部分を中心に盛土がおこなわれている。6層が盛土土層で、下部はロームが少なく、上部はローム及び粘土ブロックを多く含む。平坦面の北端から3.4m北が、盛土の末端である。

**建物跡** 柱穴は精査したが検出されなかったことから、掘立の建物であった可能性は弱い。また、33号土坑の北東部分に石が2点検出されたことから、石場建てである可能性がある。

**焼失状況** 火事の痕跡を示すものとして、埋没土及び2次的に被熱した遺物以外に、1号炭化物と炭化材などがある。1号炭化物は、編んだ竹を挟んだ壁材であり、炭化材の多くは建築材である。（樹種の詳細は付篇1参照）

また、屋敷地南辺の溝に沿った、幅約2mの間で炭化した茅？（屋根材）が多く検出され、この部分の面は焼土化していた。

**遺物** 4層を中心として磁器112点、陶器171点、軟質陶器128点、土製品13点、金属類53点、砥石3点、の破片が出土した。2次的に被熱しているものが多かったことや、面的な分布や接合関係などから、殆どが、2号屋敷に伴う遺物である。

磁器112点の内訳は、碗72点、皿25点、小盃7点、徳利8点、であり、碗2点と小盃2点は1層から出

土したが、他の破片は2・4層から出土している。磁器の分布（第120～122図参照）は溝の内側域に集中しており、特に南西部分に集中している。

個々の接合関係は広範であるが、器種による偏在も見いだせない。また、皿4点の破片が3号井戸の1片と接合している。図示した磁器の中で、3は1層から出土しており2号屋敷に伴わない可能性があるが、他は2号屋敷に帰属する。磁器はすべて肥前系で、製作年代は18世紀代である。

陶器169点の内訳は、碗57点、皿20点、土瓶33点、香炉23点、徳利12点、播鉢9点、片口鉢6点、灯明皿7点、不明2点であり、碗21点、土瓶1点、播鉢1点、不明2点、は1層から出土したが、他の破片は2・4層から出土している。陶器の分布（第120～123図参照）は溝の内側域に集中している。香炉2点の破片が3号井戸の1片と接合している。図示した陶器の中で、37と47は1層から出土しており39は17世紀代の遺物であることから2号屋敷に伴わない可能性があるが、他は2号屋敷に帰属する。陶器の産地は、肥前系の陶胎染付と瀬戸・美濃系が大半を占めるが、34は不明である。

軟質陶器は128点が出土し、38点が1層から出土し、他は2・4層から出土している。図示した軟質陶器の中で、45は1層から出土したが、他は2・4層から出土した。また、土製品はすべて2・4層から出土している。

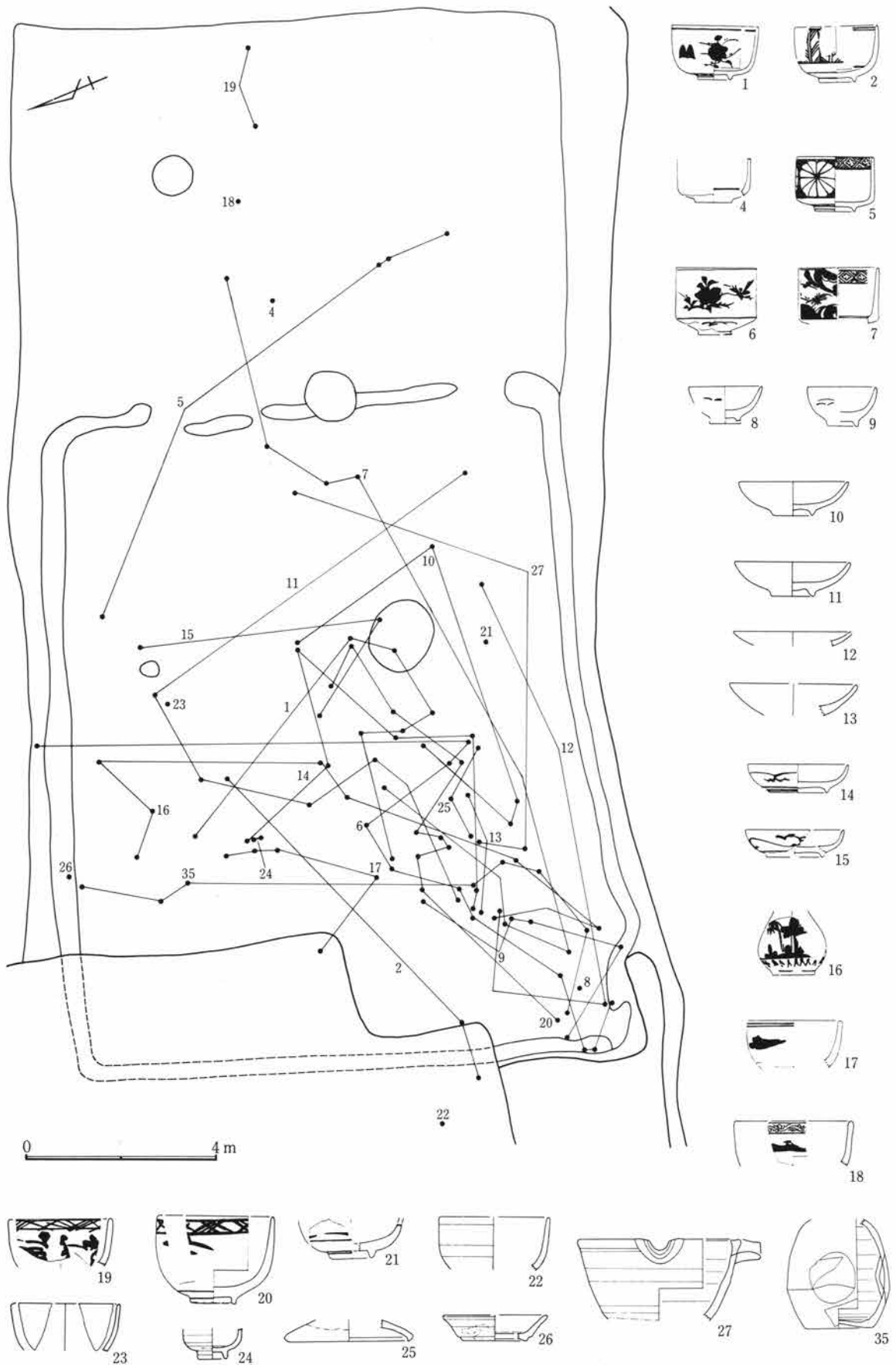
砥石3点の中で、54は1層からの出土である。

金属類53点の内訳は、釘29点、銭4点、煙管類7点、鋏1点、切羽1点、小刀2点、不明9点、であった。すべて2・4層からの出土である。金属類は分布に偏在性が認められる（第124図参照）。

（遺物観察表：224～227頁）

**備考** 重複関係は前述した以外に、屋敷地東部で1層中に畠が検出され、溝の南東隅で2号井戸が調査されたが、両者ともに2号屋敷より新しい遺構である。また、屋敷地から離れた東側で浅間A軽石を多量に含んだ土坑（内匠諏訪前遺跡A区14号土坑）が検出されている。

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第120図 2号屋敷遺物接合図(1)



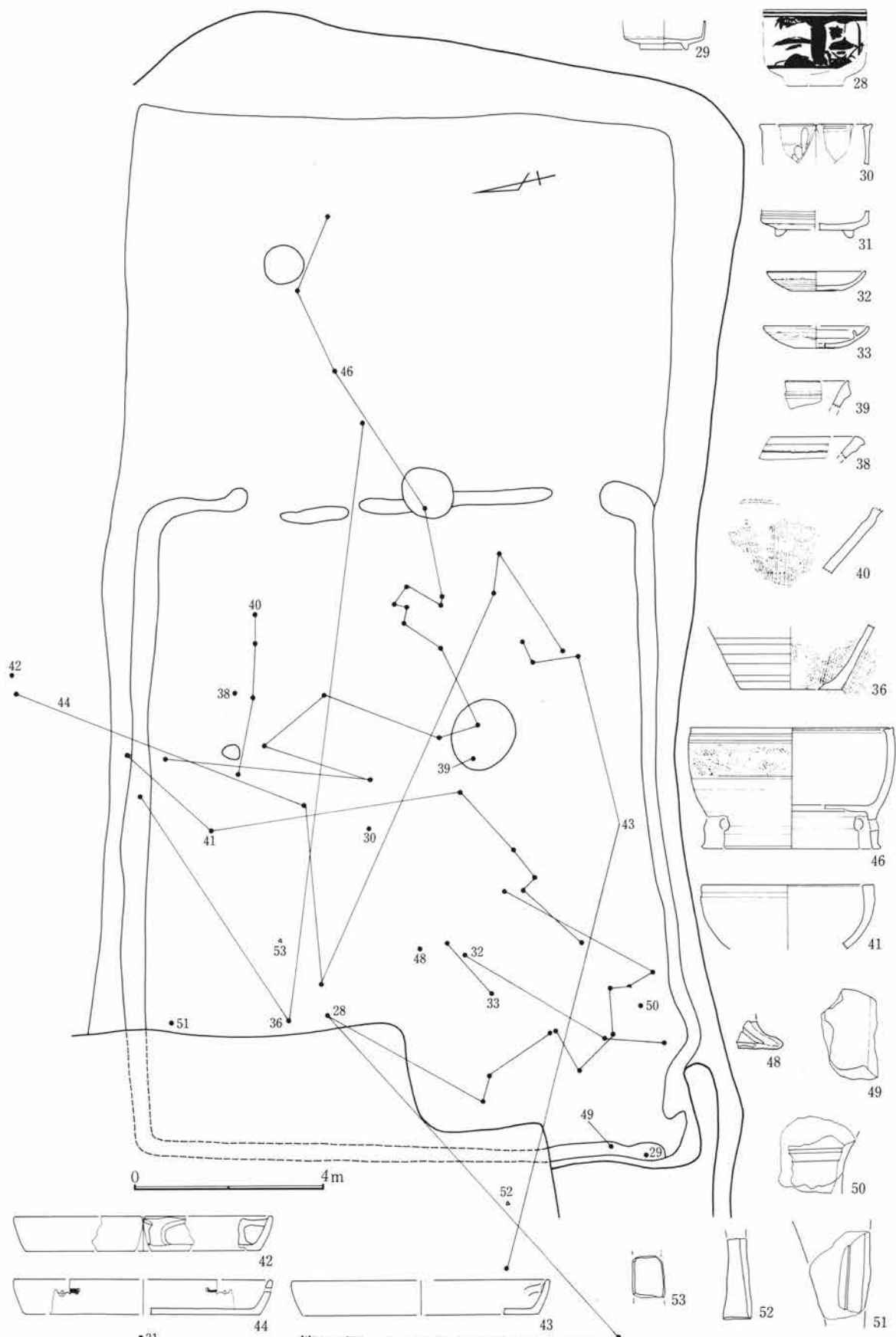


1. 暗褐色土 浅間A軽石を若干含む。表土層。
2. オリーブ褐色土 浅間A軽石を多く、焼土粒子と炭化物を少し含む。
3. 褐灰色土 浅間A軽石を主体とする。下部は純層。
4. 暗褐色土 炭化物と炭化粒子を多く、焼土粒と浅間A軽石を少し含む。
5. 暗褐色土 86号土坑の覆土。炭化物と焼土を多く含む。
6. 2号屋敷地を造る際の盛土 下部は屋敷地造成前の旧表土に起因する暗褐色土である。上部はロームを主体とする。6層上面はM・Pを多く含む。
7. 暗褐灰色土 浅間A軽石を主体とするが、褐色土を少し含む。
8. 1号屋敷地を造る際の盛り土 ロームと褐色土が互層をなす。

第121図 2号屋敷全体図

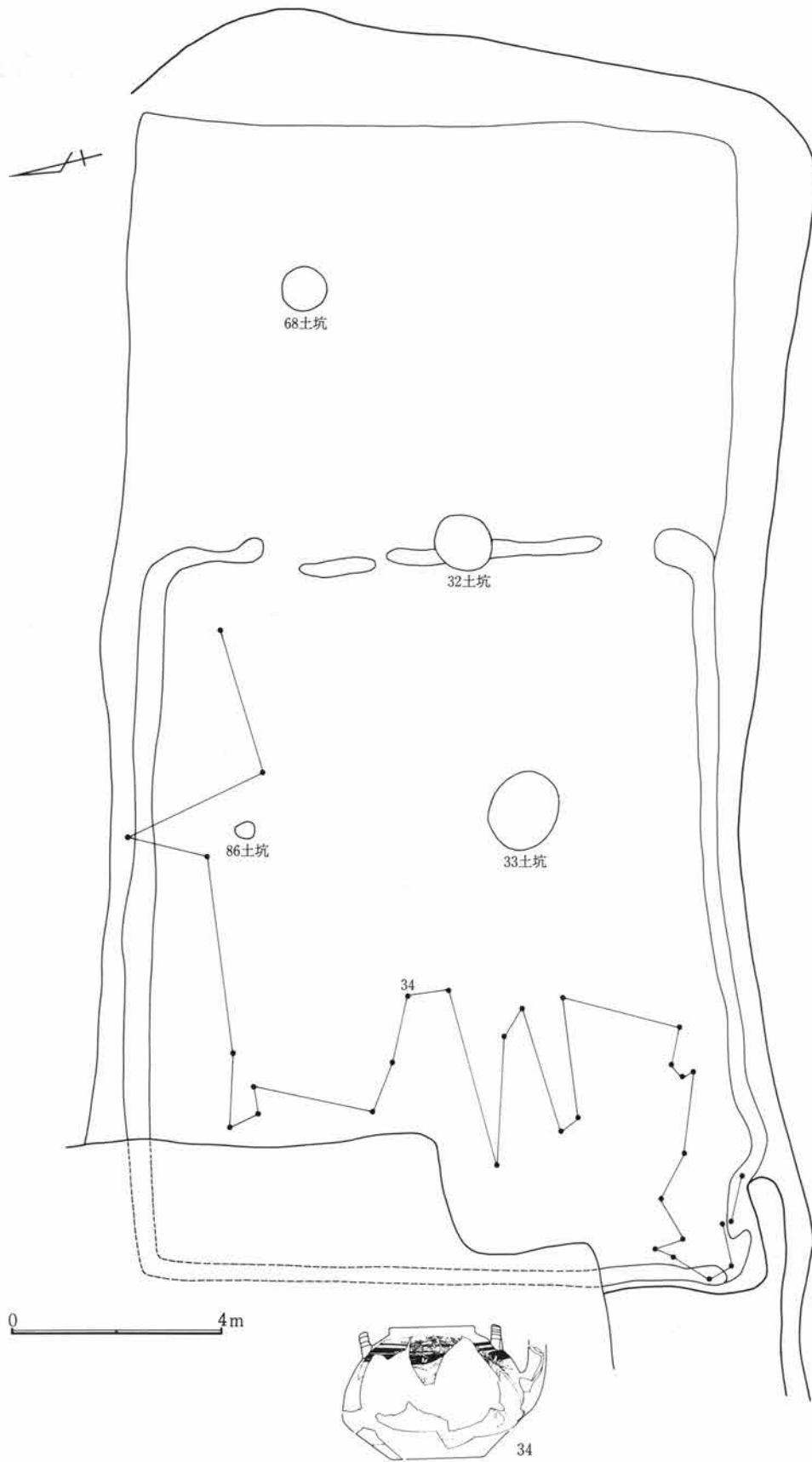


2. 屋敷跡



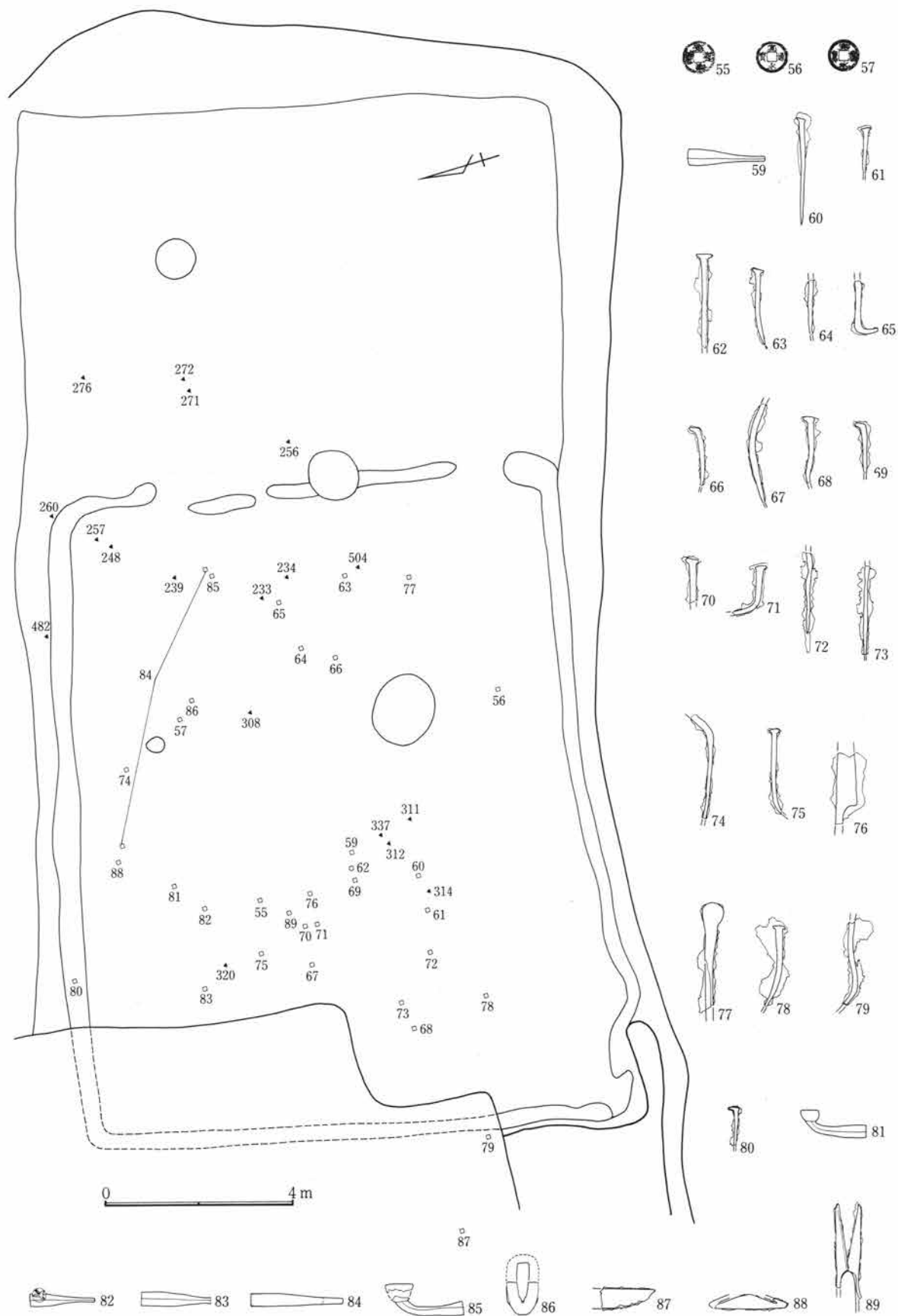
第122図 2号屋敷遺物接合図(2)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



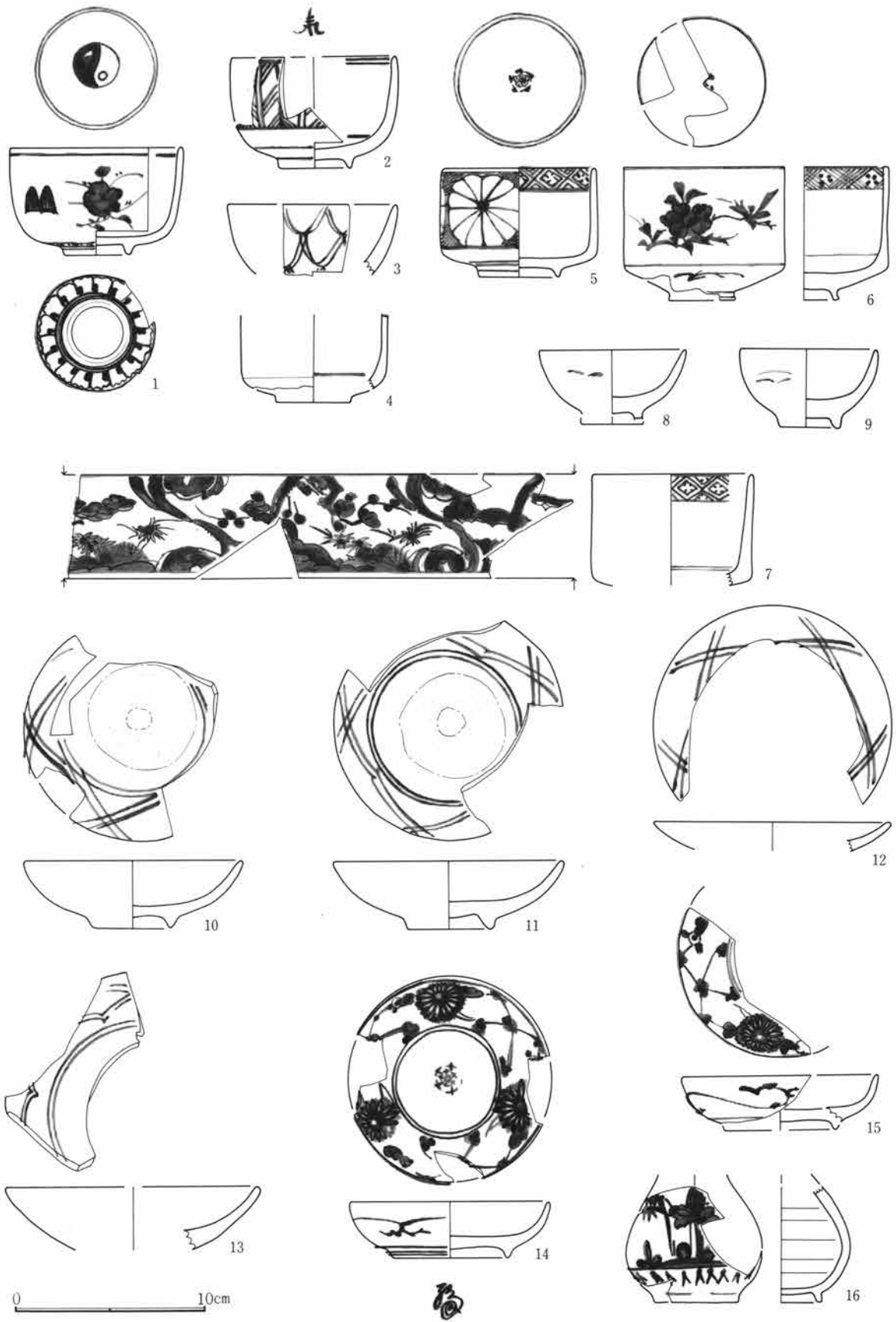
第123図 2号屋敷遺物接合図(3)

2. 屋敷跡



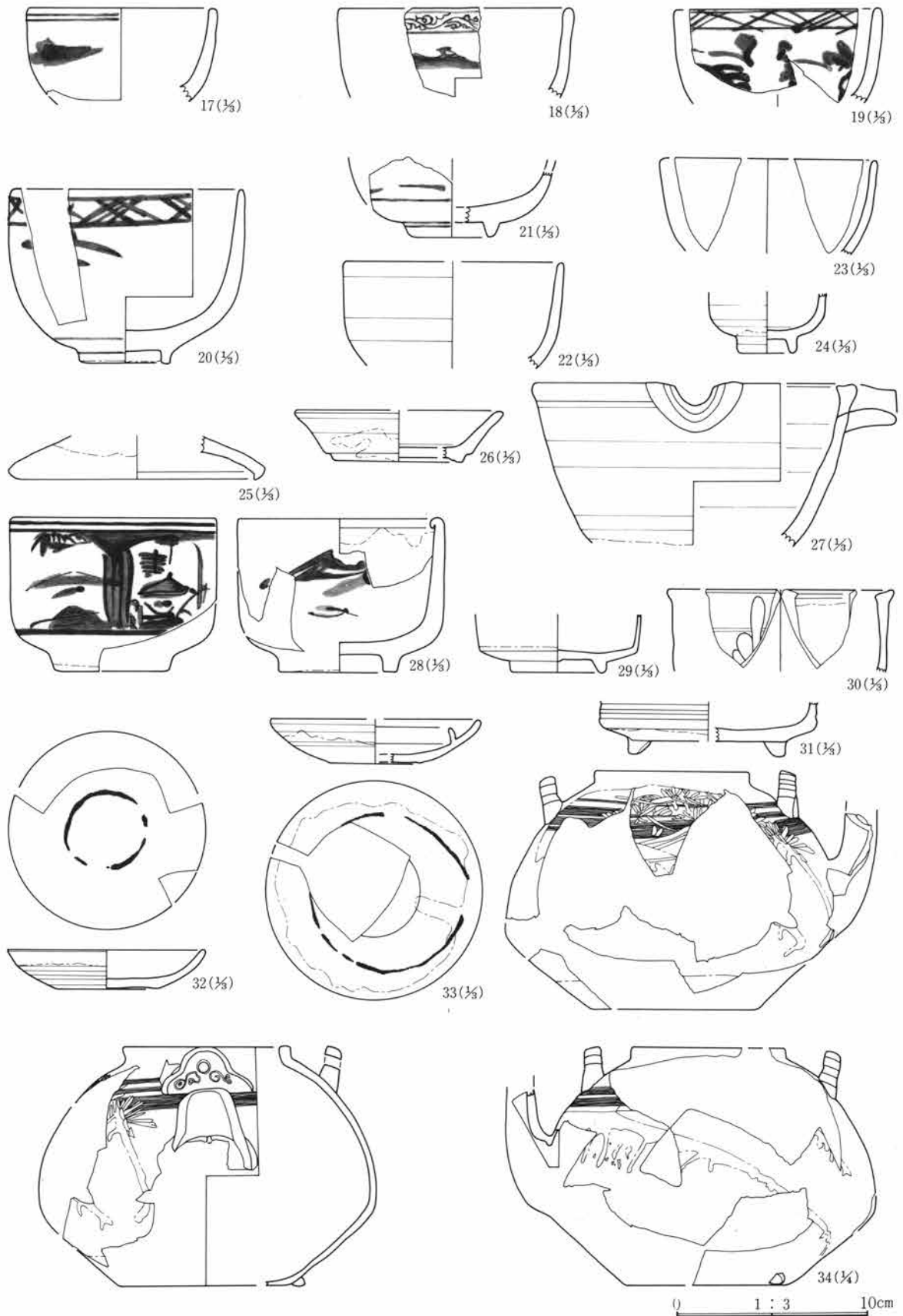
第124图 2号屋敷金属器・炭化材出土位置图

V 江戸時代以降の遺構と遺物



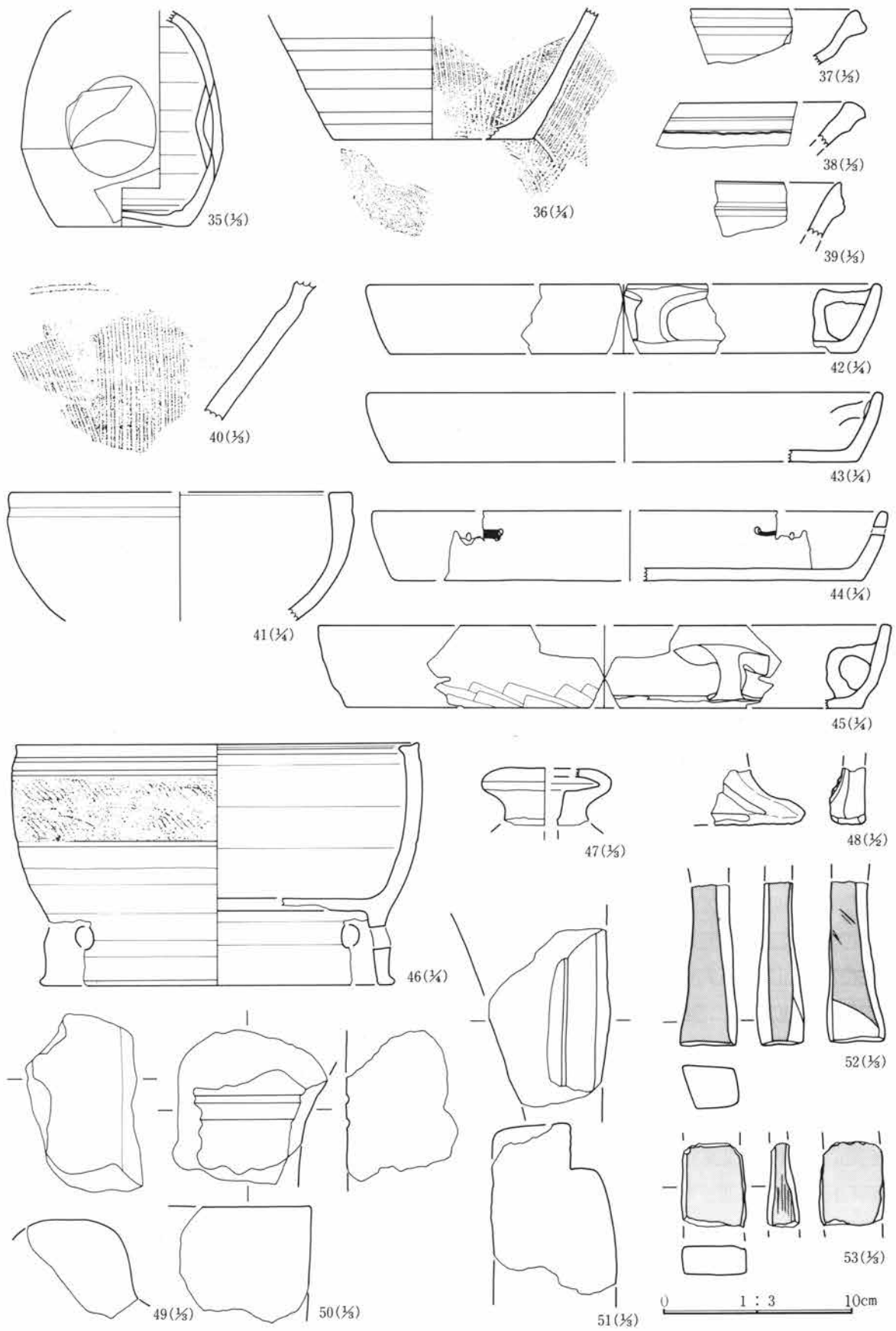
第125図 2号屋敷出土遺物(1)

2. 屋敷跡



第126図 2号屋敷出土遺物(2)

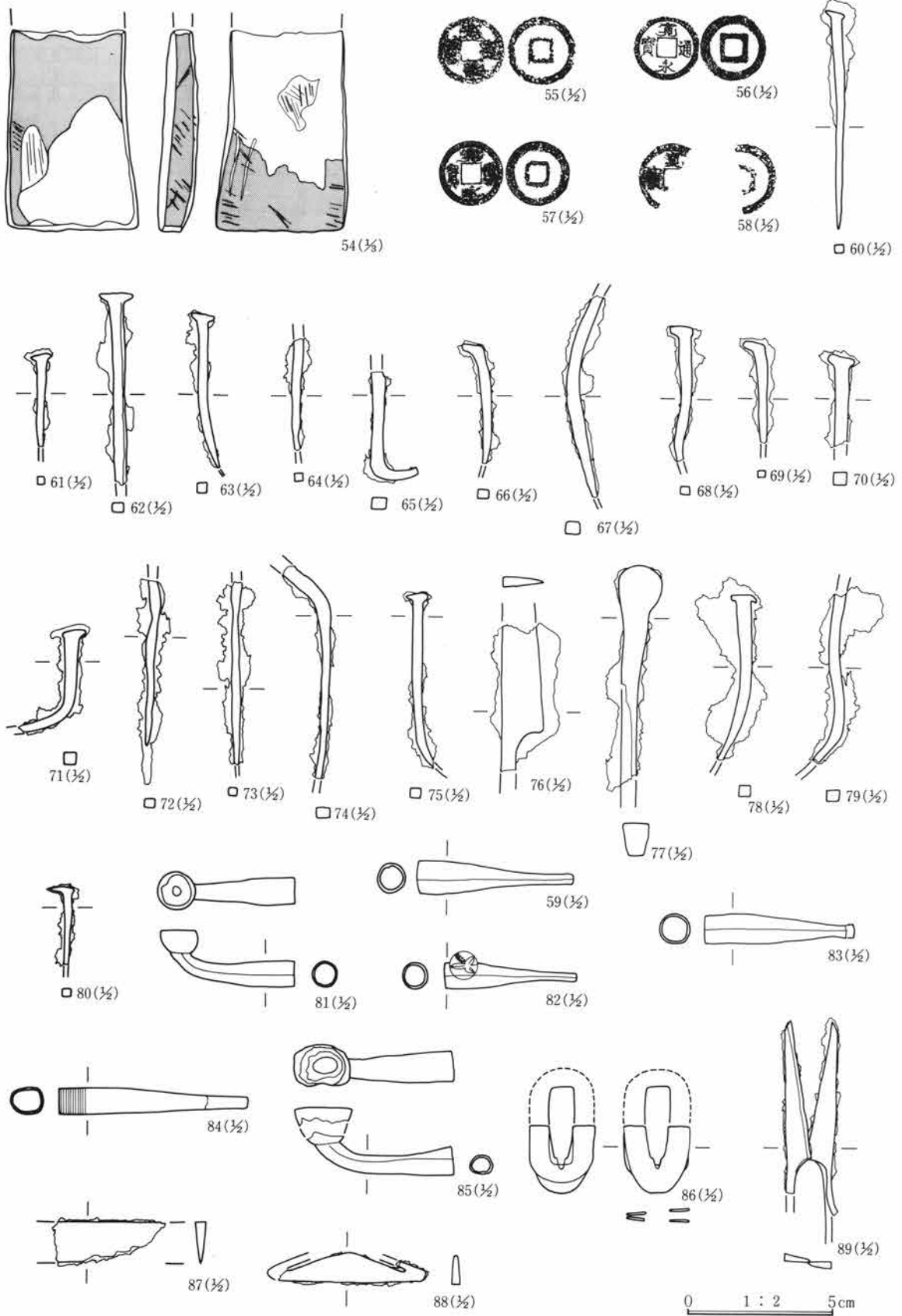
V 江戸時代以降の遺構と遺物



第127図 2号屋敷出土遺物 (3)



2. 屋敷跡



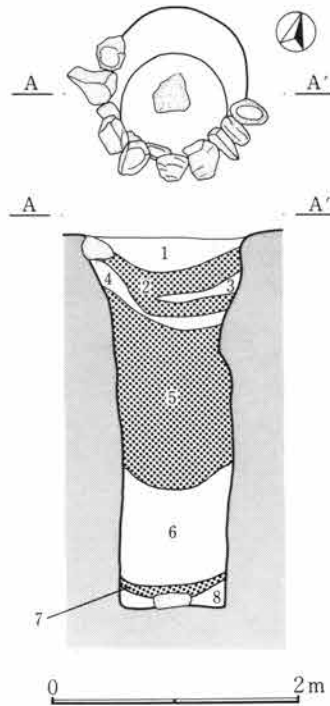
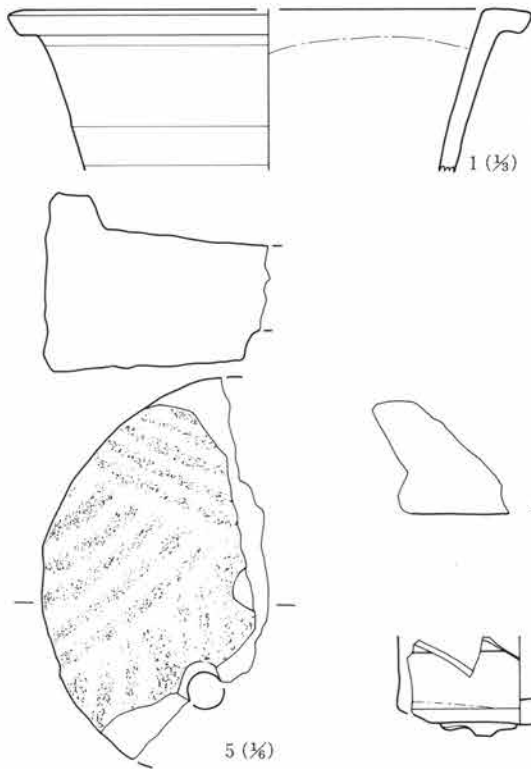
第128図 2号屋敷出土遺物(4)

V 江戸時代以降の遺構と遺物

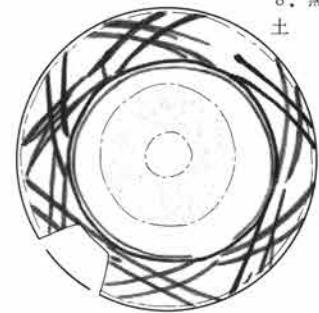
2号屋敷3号井戸

位置 C83III50他 写真 PL64・80

規模は直径1.15m、深さ2.95mであった。上部に石組の一部が残存する。7層がA軽石降下時の純層だが、2～6は人為的に埋められている。1～4は6層上面から、5は8層から出土した。3・4は2号屋敷と接合関係をもつ。(遺物観察表：228頁)



- 埋没土層
1. にぶい黄褐色土
  2. 浅間A軽石中に炭化物と黄褐色土を少し含む。
  3. 暗褐色土粘土質土壌。
  4. 黄褐色土砂質の土層。
  5. 浅間A軽石を主体とする。
  6. 暗褐色土浅間A軽石を少し含む。石組の崩落石を含む。
  7. 浅間A軽石降下時の純層。
  8. 黒色砂質土

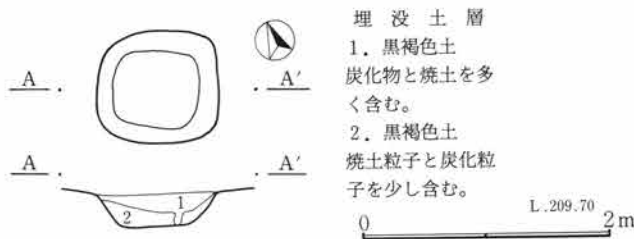


第129図 2号屋敷3号井戸と出土遺物

2号屋敷32号土坑

位置 C77III41 写真 PL64

溝に伴う枳形の土坑である。長辺98cm、短辺84cm、深さ26cmであった。遺物の出土はなかった。

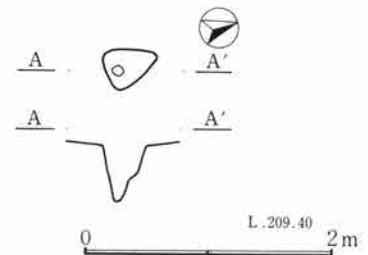


- 埋没土層
1. 黒褐色土炭化物と焼土を多く含む。
  2. 黒褐色土焼土粒子と炭化粒子を少し含む。

2号屋敷86号土坑

位置 C74III43 写真 PL—

盛土断ち割り調査の際に検出された。径41cm、深さ45cm、の規模で遺物の出土はなかった。

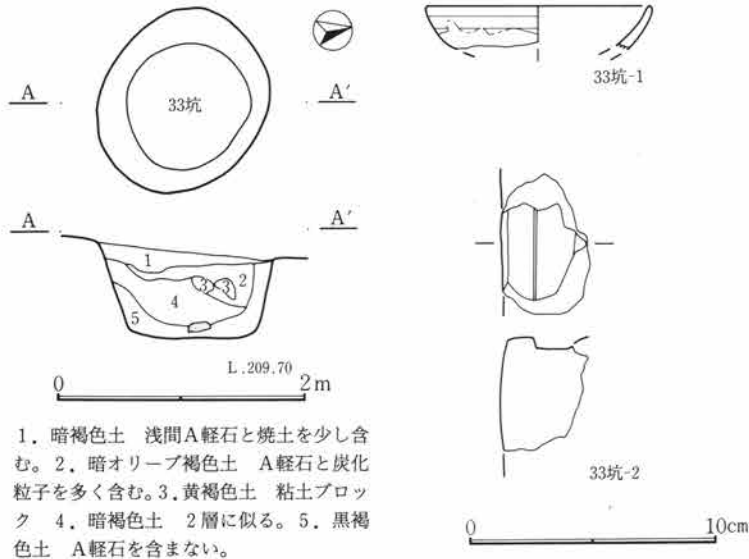


第130図 2号屋敷32・86号土坑

2号屋敷33号土坑

位置 C77III43他 写真 PL64・80

位置的に家屋内の可能性が高い。径1.46×1.30cm、深さ0.84cm、の隅丸長方形に近い楕円形を呈する。図示した遺物が出土した。(遺物観察表:228頁)

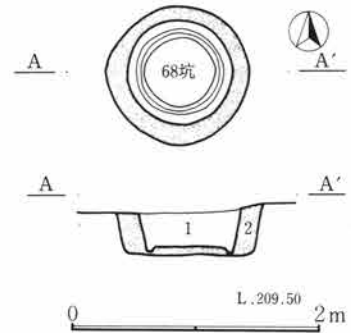


1. 暗褐色土 浅間A軽石と焼土を少し含む。2. 暗オリーブ褐色土 A軽石と炭化粒子を多く含む。3. 黄褐色土 粘土ブロック 4. 暗褐色土 2層に似る。5. 黒褐色土 A軽石を含まない。

2号屋敷68号土坑

位置 C76III38他 写真 PL64

桶を埋設した便所と思われる、底面に側板部分が溝状に検出された。径88cm、深さ43cm、で掘り方部分はひとまわり大きい。遺物の出土はなかった。



埋没土層

1. 暗褐色土 焼土ブロックと炭化物と黒色土のブロックを多く含み、粘性・締まりともに弱い。浅間A軽石を含まない。  
2. 暗褐色粘土 掘り方の土層で粘性強く堅く締まる。

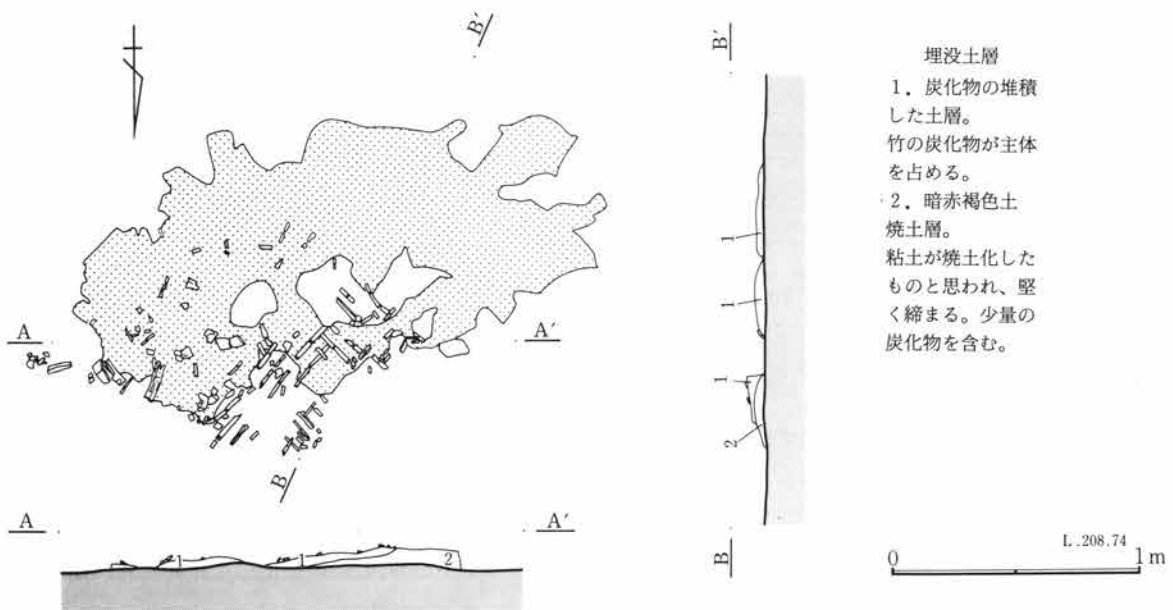
第131図 2号屋敷33・68号土坑と出土遺物

2号屋敷1号炭化物

位置 C78III44他 写真 PL63

壁が崩落したもので、壁土に挟まれた竹が検出さ

れている。竹は編まれた状態で、他の建築材も一緒に検出された。なお、1号炭化物の南側では、炭化した屋根材が多量に検出された。(付篇1参照)



埋没土層

1. 炭化物の堆積した土層。竹の炭化物が主体を占める。  
2. 暗赤褐色土 焼土層。粘土が焼土化したものと思われる、堅く締まる。少量の炭化物を含む。

第132図 2号屋敷1号炭化物

## V 江戸時代以降の遺構と遺物

### 1号屋敷

位置 C84III18他 方位 N-13°-E

写真 PL65~73・81~84

立地 屋敷地は東西に細長い馬背丘陵上で、地形が北西方向に傾斜する場所に立地している。西側には2号屋敷が位置し、東側に丘陵を南北に分断する深い谷が入り、屋敷地は谷の斜面を切り盛りして平坦面を造成している。

年代 屋敷の成立は、屋敷地造成時の盛土下に天明3年(1783年)に降下した浅間A軽石の純層が堆積し、また浅間A軽石の上はすぐに盛土となることから、浅間A軽石降下後のかなり早い段階であろうことが推察できる。

屋敷の存続期間は、1号井戸から出土した2つの墓石の年代が文化11年(1814年)と文政5年(1822年)であることから、この時期までは存続していたと思われる。

さらに、屋敷地は明治5~6年(1872~1873年)に作成された壬申地籍図(第232図)では新下畑となっていることから、この段階では既に屋敷は廃絶している。

テラス 平坦面は2面造成されている。東側をIテラス、西側をIIテラスと呼称し、IテラスはIIテラスより約50cm低く、その間には1号溝が入る。Iテラスの調査した範囲は約1/2で、調査区より南側にさらに約30m程広がっている区域は調査範囲外であった。調査範囲内では4号井戸近辺の南西部分が切り土であるが、他の部分は盛り土によって平坦面が造成されている。Iテラスの規模は、東西最大19.7mで南北最大50.6m(調査部分は20.6m)で面積は推定742m<sup>2</sup>(調査部分は246m<sup>2</sup>)である。Iテラス内では建物跡1棟、溝1条、土坑6基、井戸1基が検出されているが、IIテラス内の検出遺構数に比べると少ない。

IIテラスはおおよそ211.25mのコンタラインを境として南西側が切り土、北東側が盛り土である。IIテラスは南西隅の一部が調査範囲外であるが、ほぼ全域を調査できた。形状はほぼ長方形を呈し、規模

は、東西最大33.1m、南北最大21.9mで面積は631m<sup>2</sup>(推定)である。南側切り土上面と、IIテラスとの比高は約2mである。屋敷地に伴う諸施設の大半はIIテラス内で検出されている。

埋没土 1層が埋没土にあたるが、表土と一体で約20cmの厚さであった。調査前の状況が部分的に雑木林であったことから約10cmの表土を大型重機で除去し、その後人力による調査を行った。なお、調査工程の都合上盛土部分も大型重機を使用した。反省点としてあげられよう。

施設 屋敷地内の施設は、建物跡2棟・溝11条・土坑39基・井戸2基・石垣2カ所・集石2基が検出されている。さらに、屋敷地の西側は最大1m20cmの盛り土による土塁状の施設があり、盛り土最高部とIIテラスとの比高は、最大2m25cmである。この土塁状の施設と、南側の切り土によって屋敷地は西側と南側が囲まれた状況を呈する。

屋敷地へ入る道は、発掘調査では検出できなかったが、調査前には北側からIテラスの西側に入る道が存在していた。(第133図)

建物跡は2棟が検出された。

1号建物は2間×6間(?)、2号建物は1間×3間(?)の規模である。いずれの建物も明瞭な礎石を検出できず、土をつき固めた土台が確認されたにすぎない。また、IIテラス内の3号溝(北側)、4号溝(西側)、8号溝(南側)、6号溝(東側)に区画された区域に母屋が想定されるが、母屋と思われる建物跡や土間などの施設は検出できなかった。

溝は11条検出されているが、いずれの走行も屋敷地の東西及び南北の軸線とほぼ一致する。

2号溝と3号溝、6号溝と7号溝、8号溝と9号溝は、ほぼ平行して結果的に2条1対の検出状況であるが、それぞれが時間差をもつのか併存するかは不明である。11号溝と12号溝は小規模であるが、他の溝は屋敷地内の区割りや建物跡と関連する可能性が強い。

各溝の規模(のべの長さ×最大幅×深さ)は、1号溝:17.1×0.61×0.27m、2号溝:19.3×0.85×

## 2. 屋敷跡

0.27m、3号溝：27.3×0.70×0.23m、4号溝：16.7×0.63×0.30m、5号溝：12.1×0.60×0.25～0.42m、6号溝：14.1×0.48×0.27m、7号溝：14.2×0.60×0.31～0.36m、8号溝：18.2×0.85×0.22m、9号溝：15.3×0.40×0.07～0.15m、11号溝：2.5×0.28×0.07m、12号溝：1.7×0.34×0.28m、である。遺物の出土状況については223頁に記載した。

土坑39基の中で特徴的なものとして、桶を埋設する土坑がある。1・2・3・6・8(?)・24・17・18・34・27(?)・40号土坑の11基が該当するが、桶材は検出されなかった。桶埋設土坑は、すべて掘り方部分が粘土でつくられている。また、1・2号土坑と18・34号土坑は掘り方を共有しており、それぞれ2基で対をなしていたと思われる。また、遺物とともに自然礫が廃棄される土坑が多かった。この桶埋設土坑の用途としては人糞をふくむ液体貯蔵の施設などが考えられよう。

21・29号土坑は、長方形の掘り込まれた土坑内に多量に自然礫を含む集石土坑である。

井戸は2基検出されている。

2基の井戸ともに12m以上の深さであった。いずれの井戸も上部に石組があったと思われ、埋設土の上層から多くの自然礫が出土している。1号井戸からの出土遺物が多く、18C末葉以降の遺物が出土している。また、井戸の上屋に拘る遺構は検出できなかった。なお、『群馬縣北甘楽郡史』1928年に記載されている「ジャンジャン井戸」は地元の伝承などからも1号井戸である可能性が強い。

石垣は2カ所で検出されたが、部分的な検出であり、2号石垣は石垣としての機能を果していたとは考えにくい。

集石はいずれもIIテラスの北側で検出された。1号集石の下面は固くしまっていた。

**遺物** 屋敷地内の諸施設からは、1号井戸を中心として多くの遺物が出土したが、IテラスやIIテラスといった平坦面からの遺物出土量は少ない。特に、Iテラスからの出土遺物は少なく、図化できうる遺物が出土しなかった。

出土遺物の年代は、18C末葉以降のものが主体を占め、2号屋敷の出土遺物よりも新しい傾向を示す。このことは、1号屋敷が天明3年以降につくられている事実とも合致し、出土遺物の大半は、1号屋敷廃絶に伴うものである可能性が強いといえる。また、明治以降の陶磁器類が井戸を中心に出土しているが、先に述べたように、明治5～6年段階では既に屋敷が廃絶していることから1号屋敷には直接関係しない遺物である。

図化した遺物は52点(井戸等の諸施設分は除く)であるが、他の遺物は小片であったり遺存状態が悪いなどの事情により図化できなかった。図化遺物52点の内訳は、磁器茶碗9点、磁器飯碗4点、磁器猪口3点、陶器茶碗3点、陶器鉢類7点、半胴甕1点、盤1点、陶器徳利1点、播鉢4点、焙烙3点、火鉢2点、土(石)製品4点、金属類10点である。この中で、1は伝世品の可能性が強い色絵の磁器茶碗であるが、本遺跡から出土した色絵磁器はこの1点だけである。28の緑釉盤は、中世の所産で1号屋敷には伴わない。図化できなかった陶磁器片の点数は272点(Iテラス37点、IIテラス235点)である。各テラスの内訳は、Iテラスでは、磁器碗9点、磁器皿1点、磁器徳利1点、磁器小盃1点、陶器碗8点、陶器皿2点、陶器鉢2点、播鉢1点、焙烙12点である。IIテラスでは、磁器碗91点、磁器皿1点、明治以降の磁器4点、陶器碗19点、陶器鉢17点、甕類5点、播鉢8点、焙烙80点、火鉢10点であった。また、図化できなかった金属類は、Iテラスで釘4点、IIテラスで寛永通宝4点、釘16点、不明6点であった。

屋敷地内の諸施設も含めて、遺物の接合関係は第135～137図にしめした。

(遺物観察表：228～230頁)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



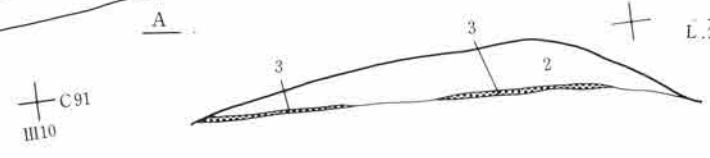
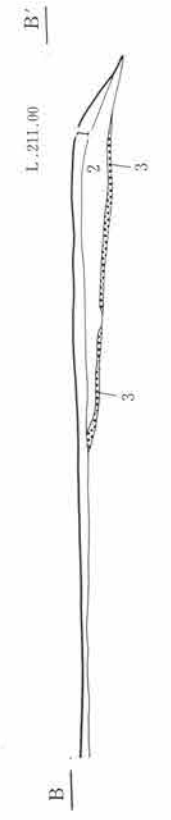
第133図 1号屋敷調査前の状況



土層注記

- A' 1. 褐色土 1号屋敷の覆土。表土。
- L. 214.00 黑色土中にローム粒子と浅間A軽石を少し含む。
- 2. 1号屋敷を造るさいの盛土。
- 黑色土・ローム・浅間A軽石それぞれを主体とした土層が互層をなす(1号屋敷内1号石垣の土層注記参照)。
- 3. 褐灰色土 浅間A軽石の純層。

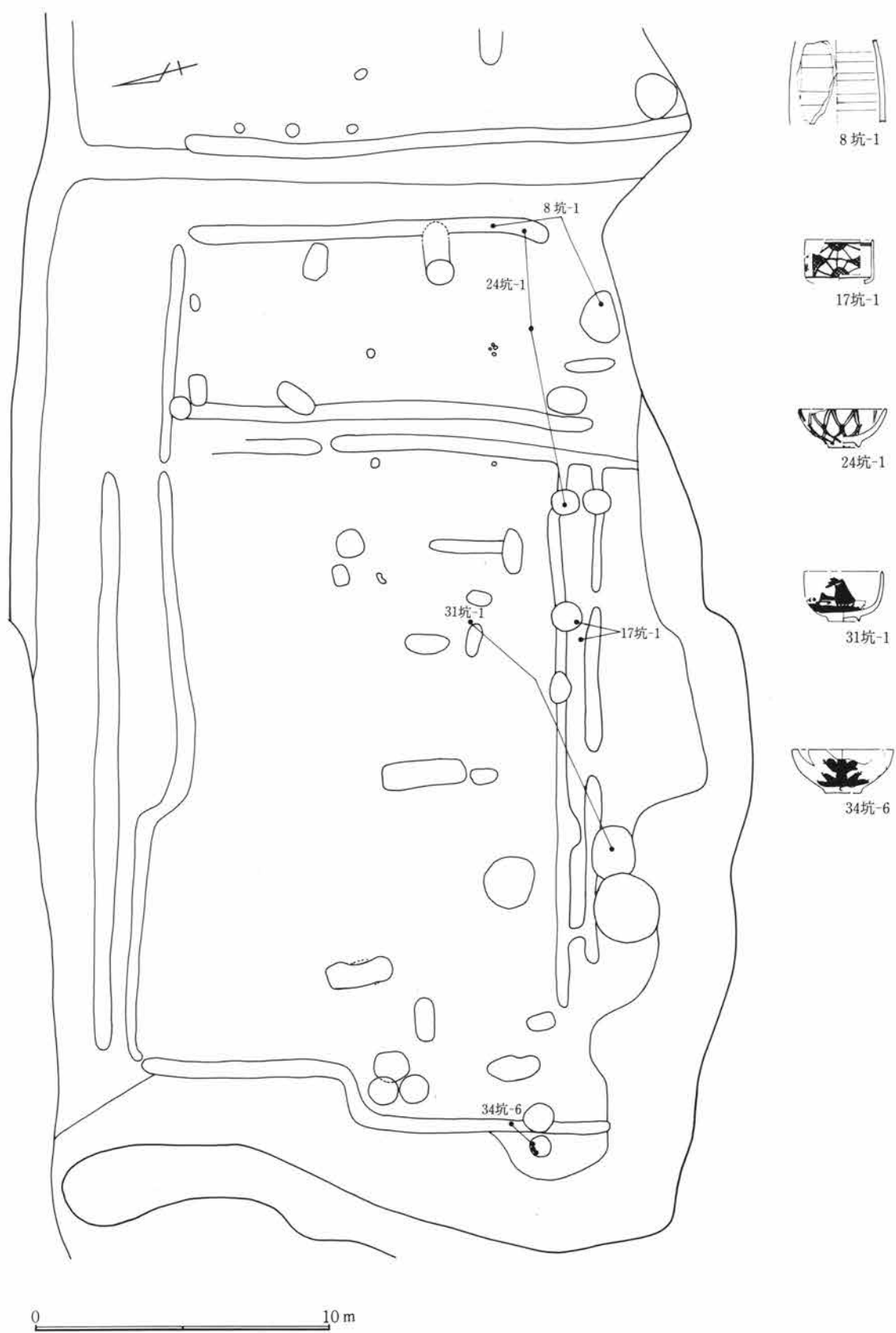
第134図 1号屋敷全体図



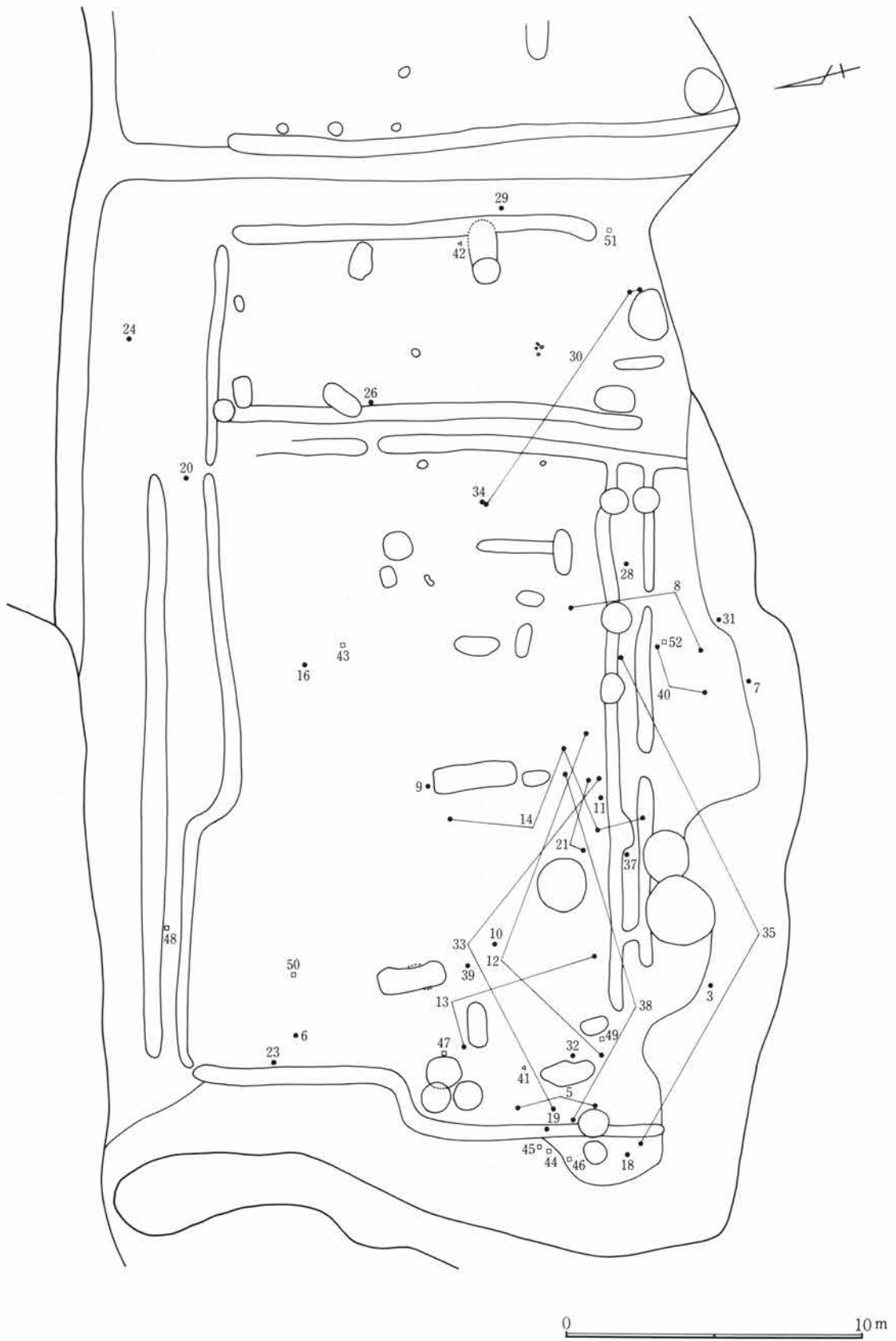




2. 屋敷跡

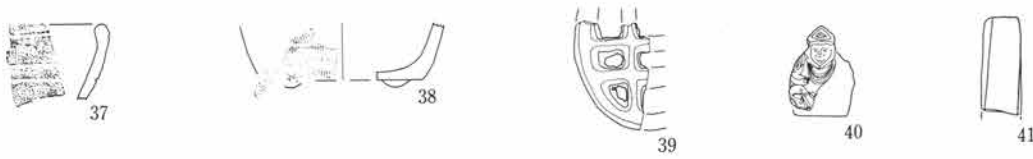
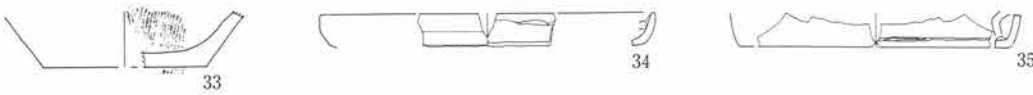
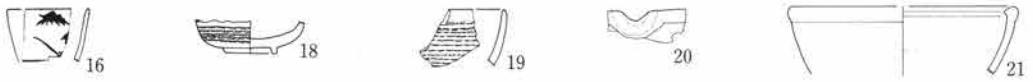


第135図 1号屋敷土坑遺物接合図

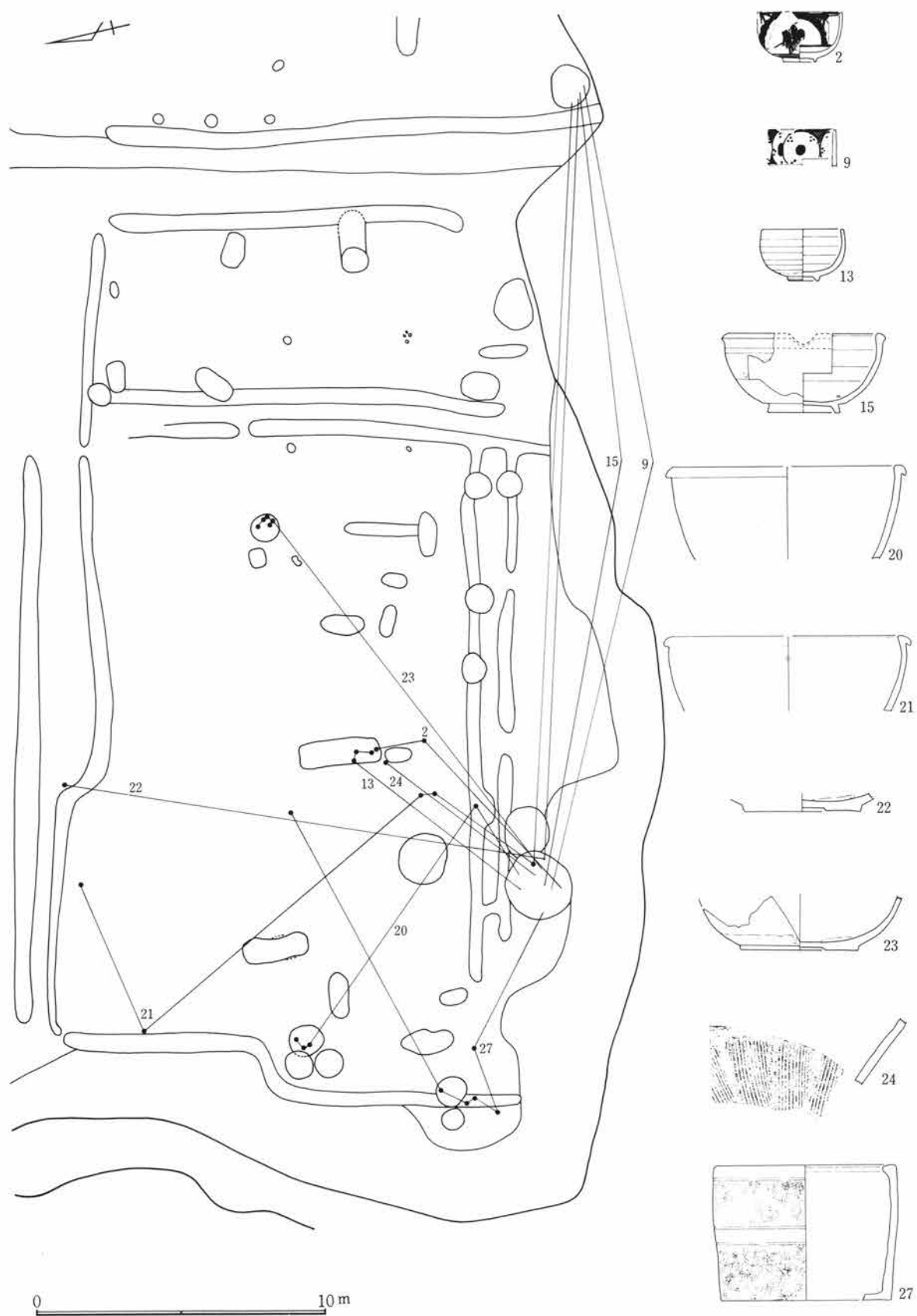


第136図 1号屋敷遺物接合図

2. 屋敷跡

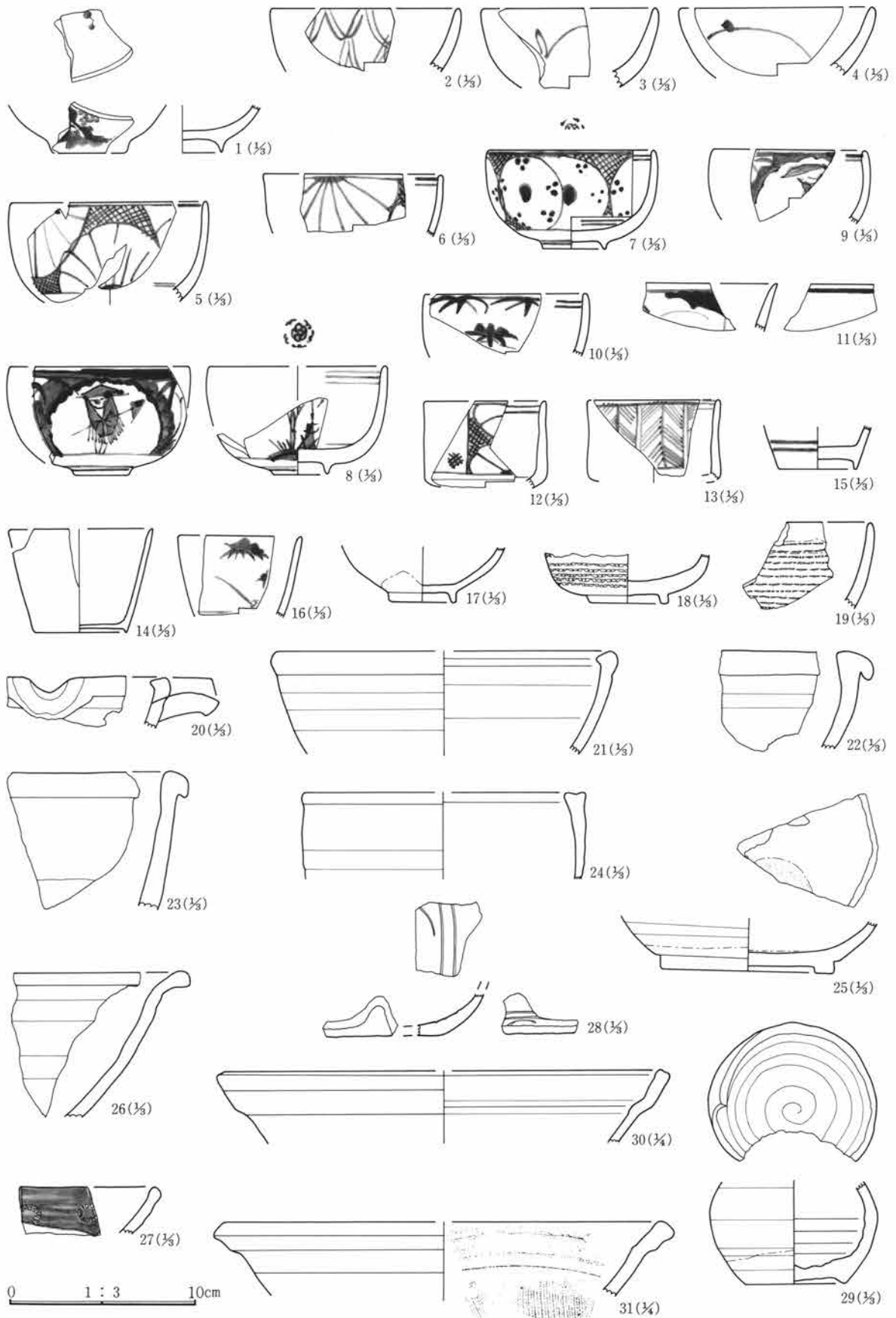


V 江戸時代以降の遺構と遺物



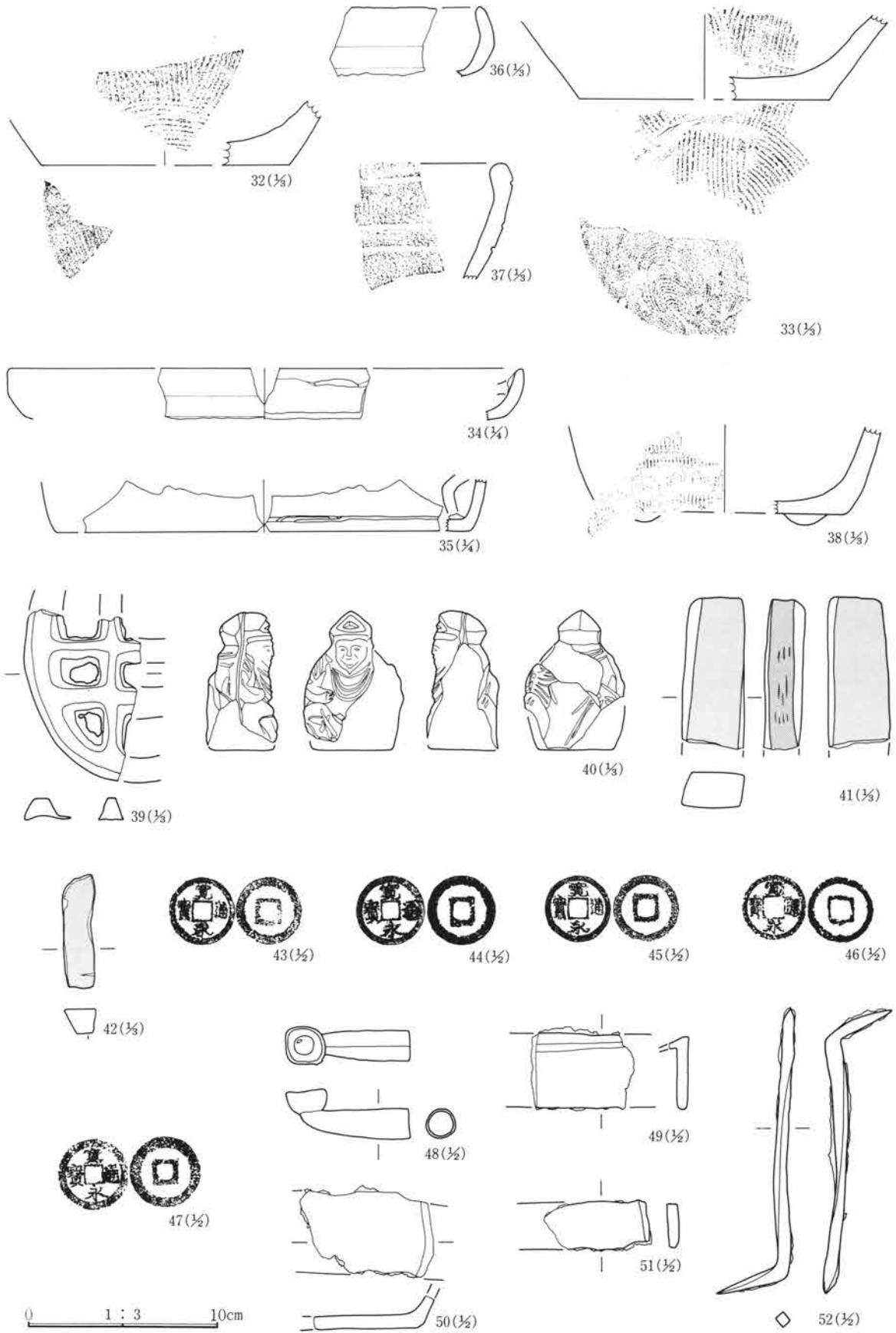
第137図 1号屋敷1号井戸遺物接合図

2. 屋敷跡



第138図 1号屋敷出土遺物(1)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



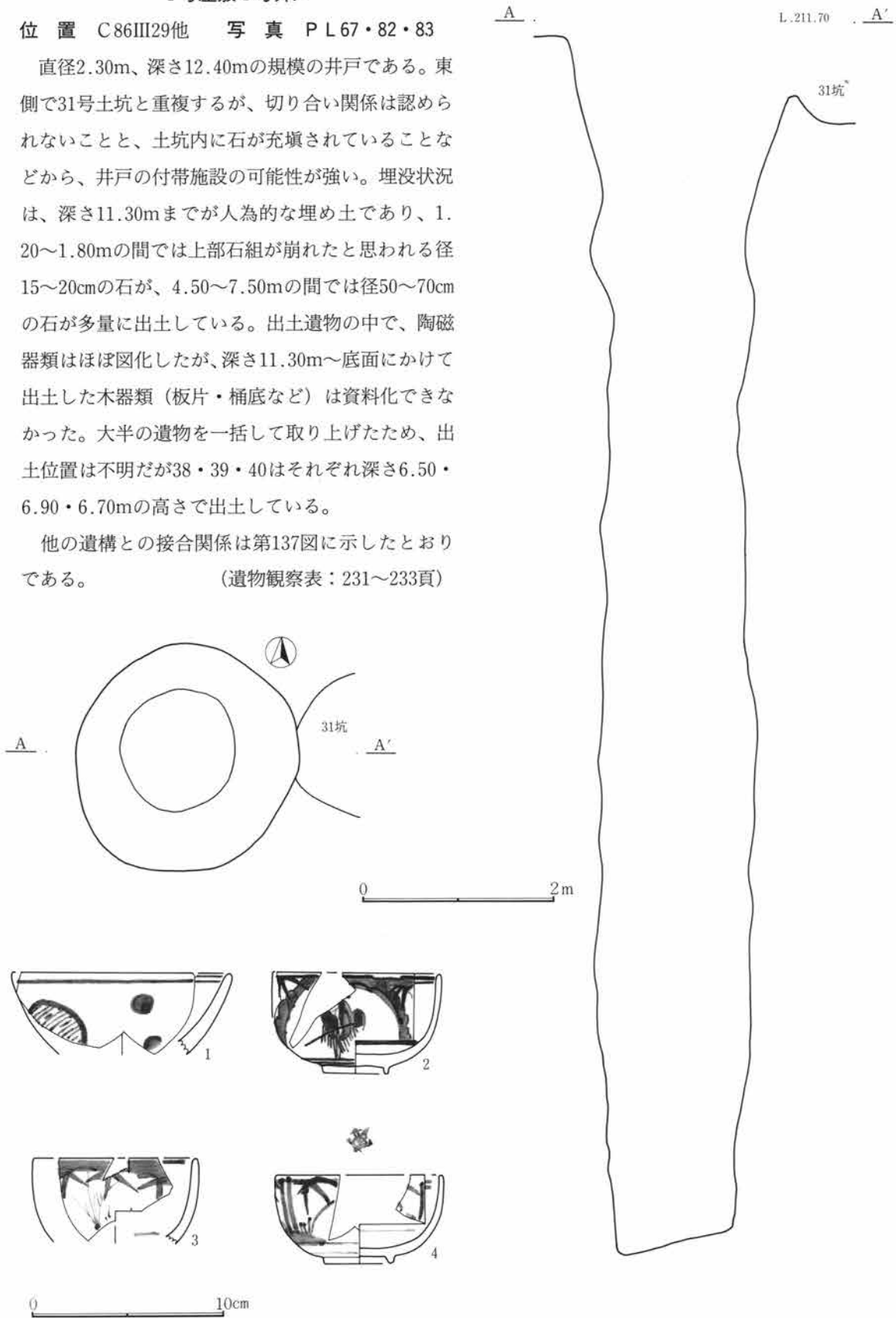
第139図 1号屋敷出土遺物(2)

1号屋敷1号井戸

位置 C86III29他 写真 P L67・82・83

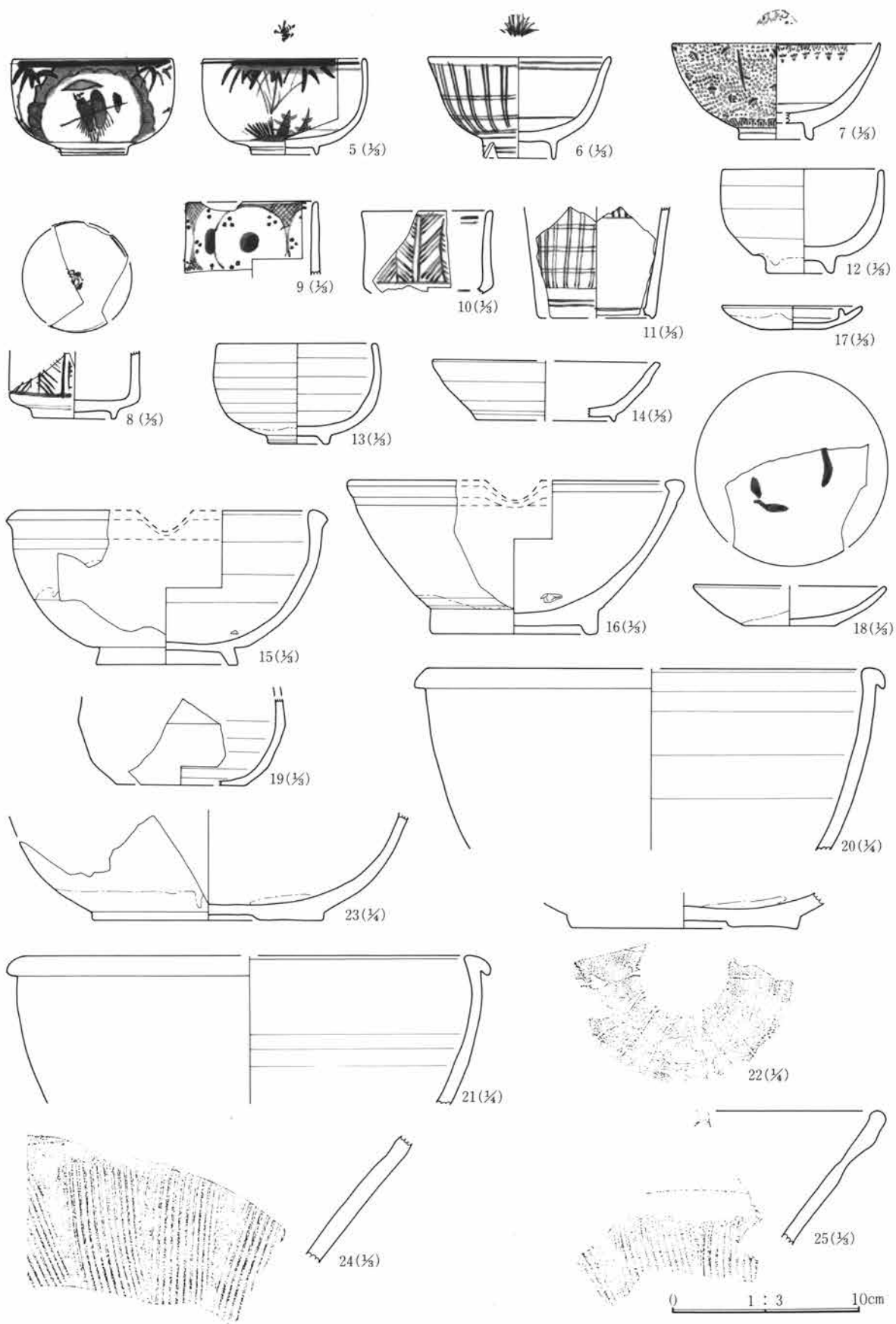
直径2.30m、深さ12.40mの規模の井戸である。東側で31号土坑と重複するが、切り合い関係は認められないことと、土坑内に石が充填されていることなどから、井戸の付帯施設の可能性が強い。埋没状況は、深さ11.30mまでが人為的な埋め土であり、1.20~1.80mの間では上部石組が崩れたと思われる径15~20cmの石が、4.50~7.50mの間では径50~70cmの石が多量に出土している。出土遺物の中で、陶磁器類はほぼ図化した。深さ11.30m~底面にかけて出土した木器類（板片・桶底など）は資料化できなかった。大半の遺物を一括して取り上げたため、出土位置は不明だが38・39・40はそれぞれ深さ6.50・6.90・6.70mの高さで出土している。

他の遺構との接合関係は第137図に示したとおりである。  
(遺物観察表：231~233頁)



第140図 1号屋敷1号井戸と出土遺物(1)

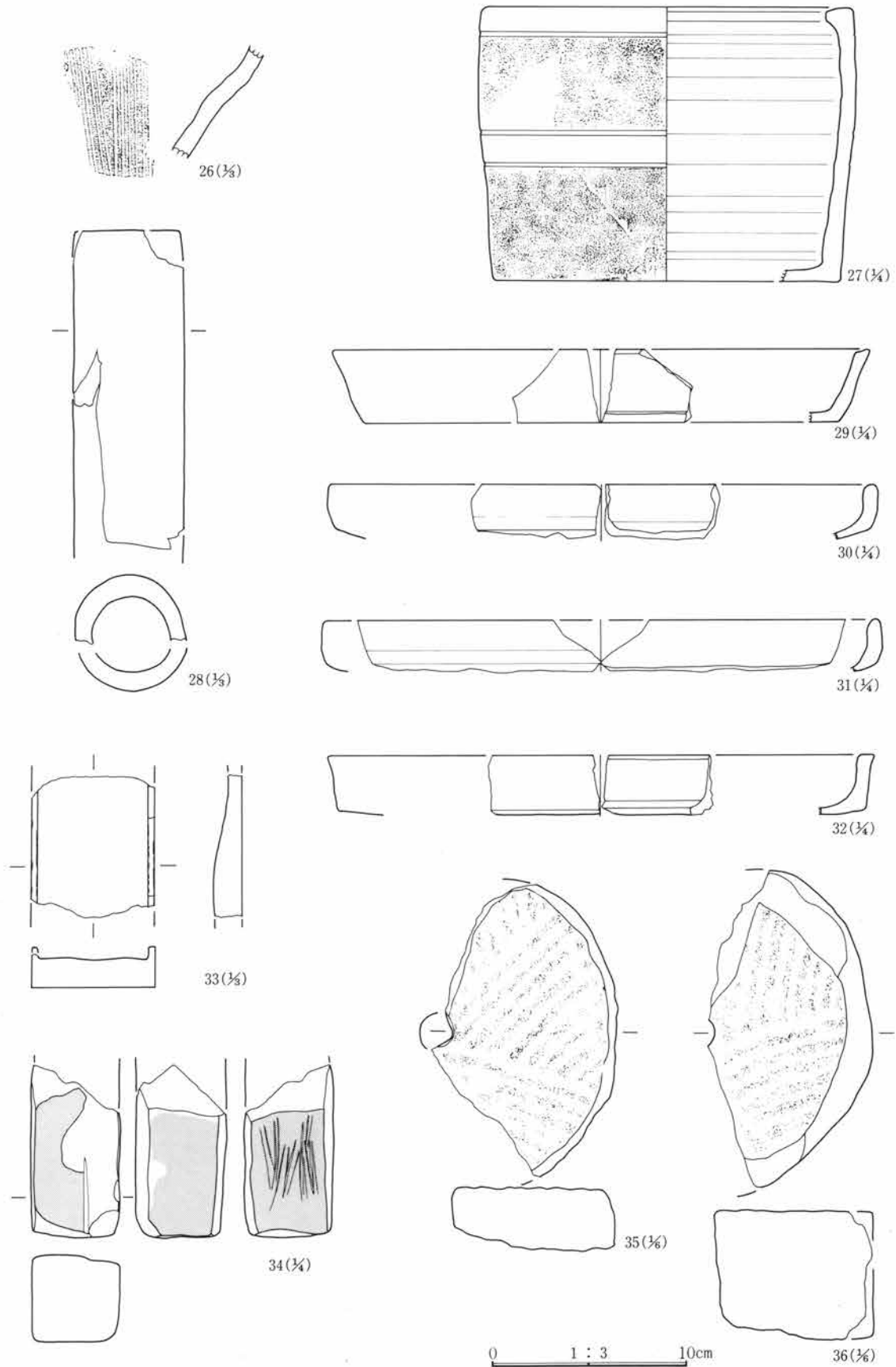
V 江戸時代以降の遺構と遺物



第141図 1号屋敷1号井戸出土遺物(2)

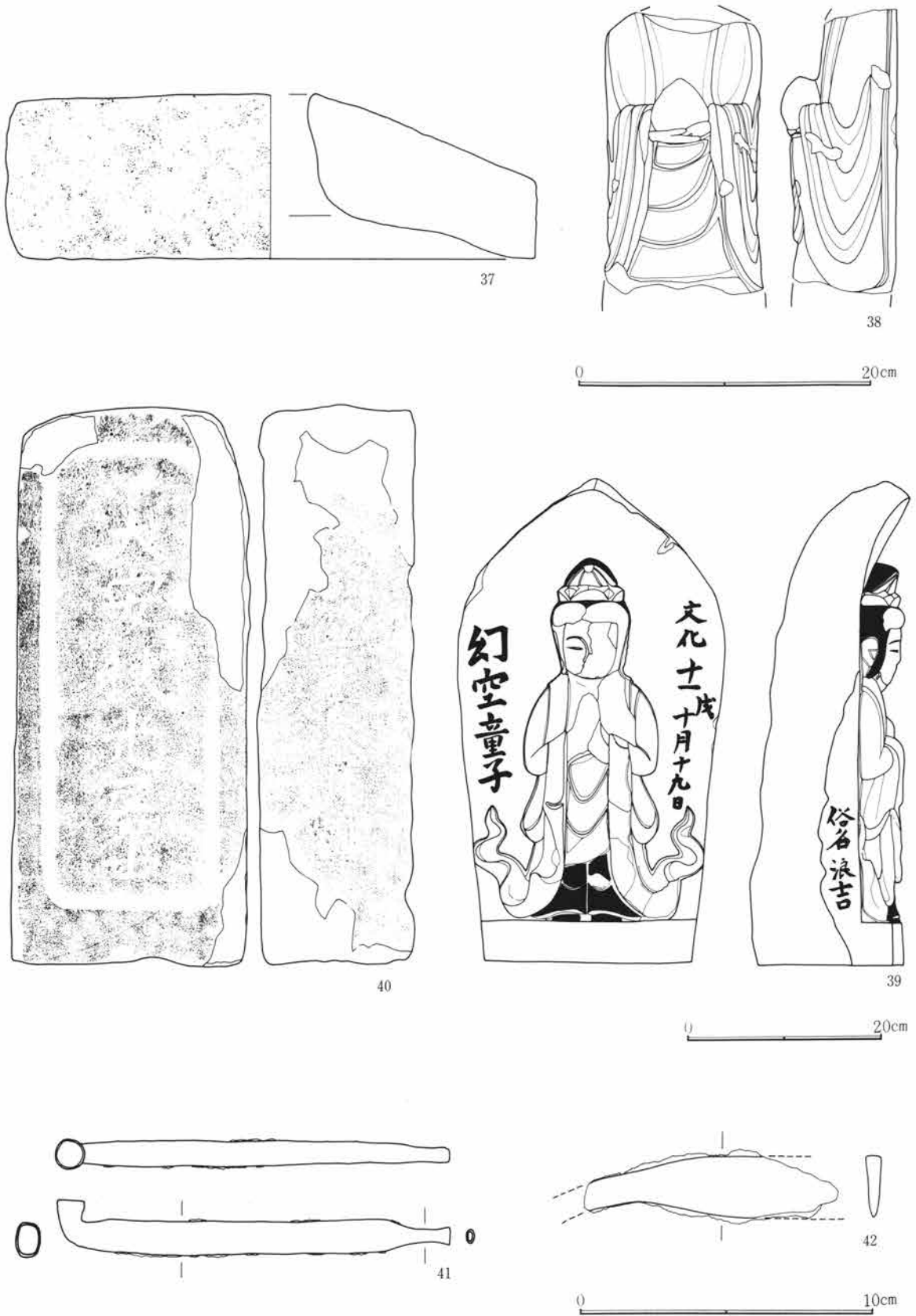


2. 屋敷跡



第142図 1号屋敷1号井戸出土遺物(3)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第143図 1号屋敷1号井戸出土遺物(4)

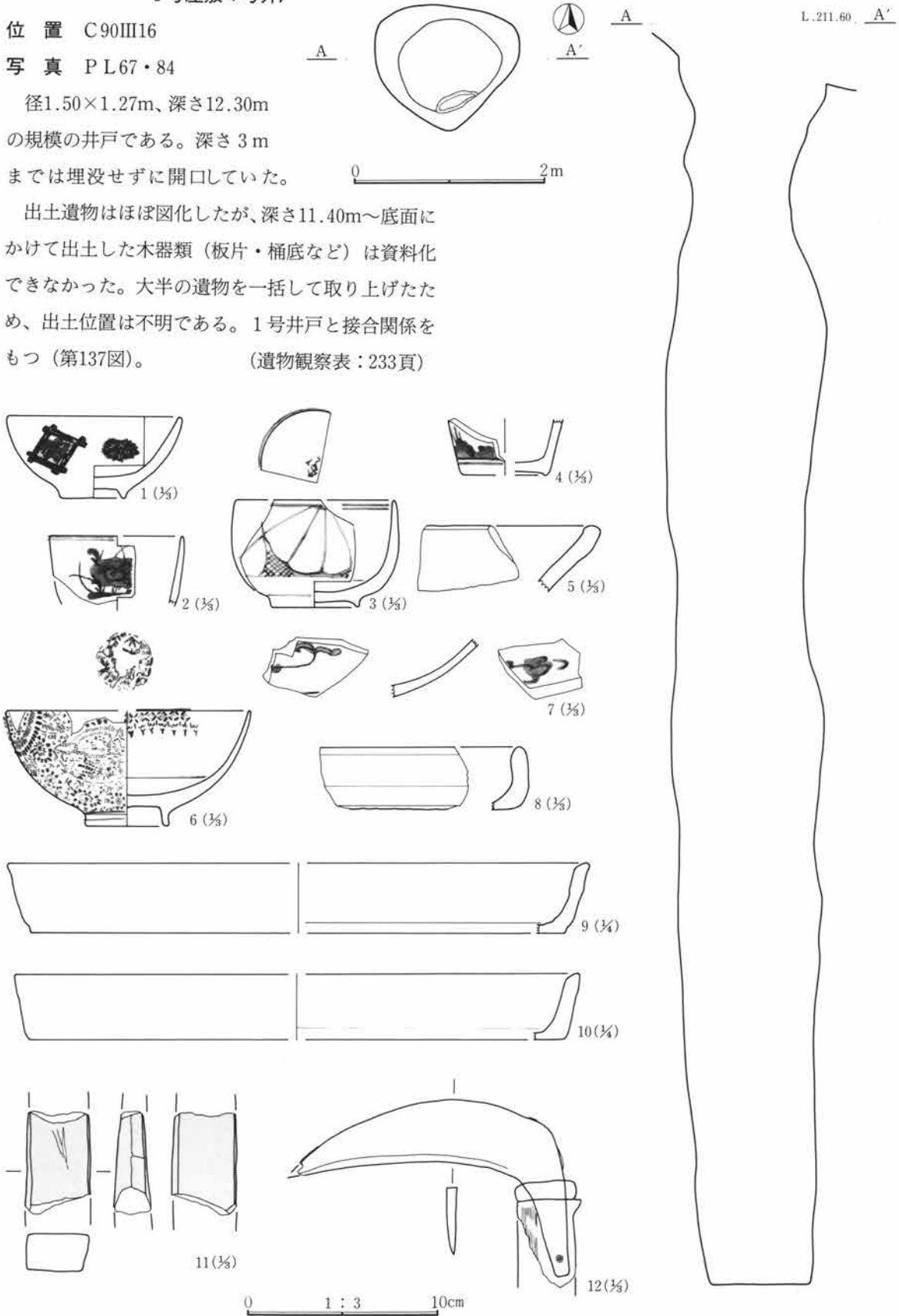
1号屋敷4号井戸

位置 C90III16

写真 PL67・84

径1.50×1.27m、深さ12.30m  
の規模の井戸である。深さ3m  
までは埋没せずに開口していた。

出土遺物はほぼ凶化したが、深さ11.40m～底面に  
かけて出土した木器類（板片・桶底など）は資料化  
できなかった。大半の遺物を一括して取り上げたた  
め、出土位置は不明である。1号井戸と接合関係をも  
つ（第137図）。  
（遺物観察表：233頁）



第144図 1号屋敷4号井戸と出土遺物

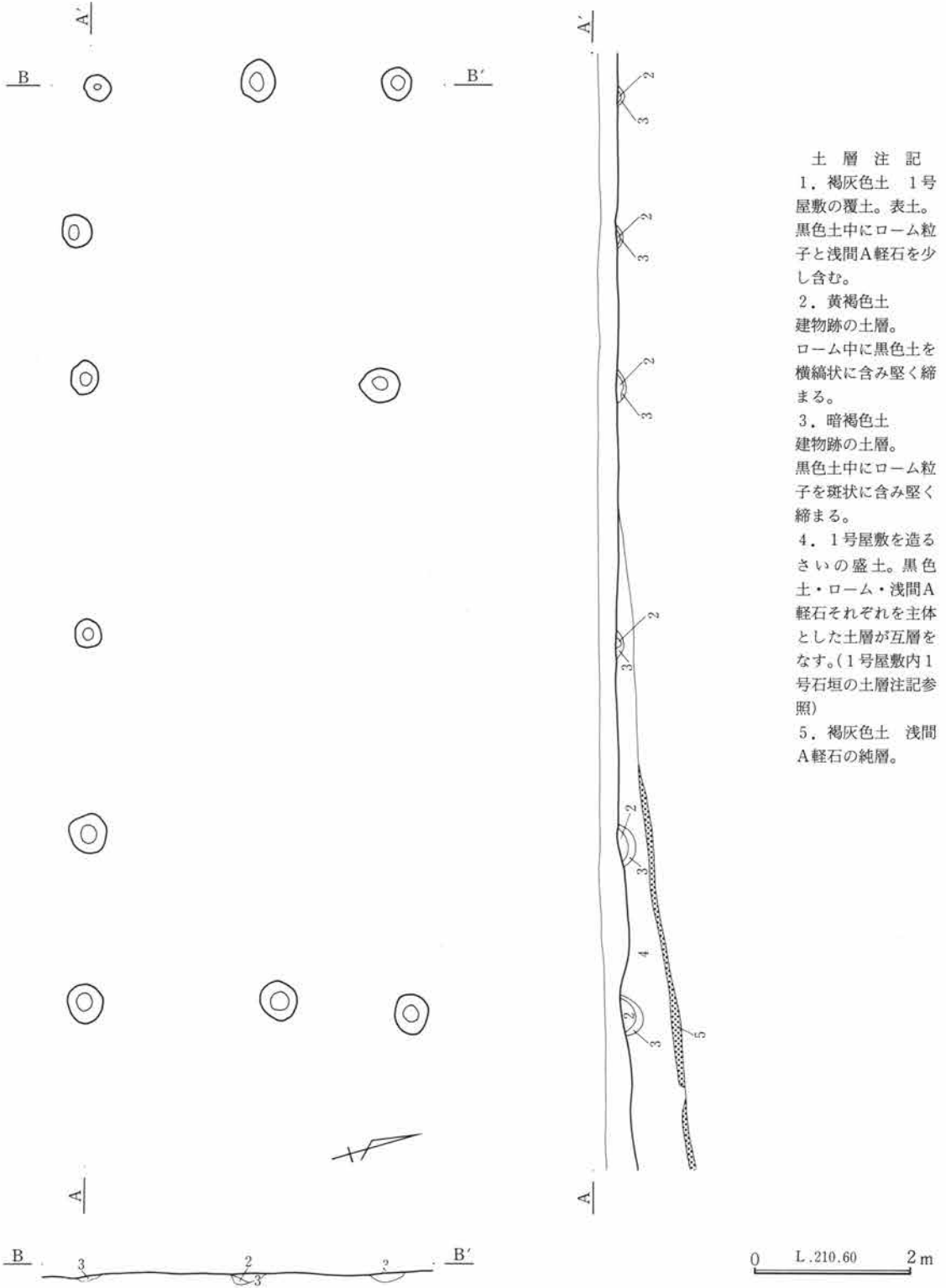
V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷 1号建物

位置 C84III14他 写真 PL66

Iテラスで検出された。2間×6間(?)の規模であり、11基の土台を検出した。石場建てであった

と思われるが、調査時には既に石は消失していた。半円状の掘り方をもち、土をつき固めて土台とし(PL66)、その上に礎石を置いて建物を構築していたと考えられる。遺物の出土はなかった。



第145図 1号屋敷 1号建物

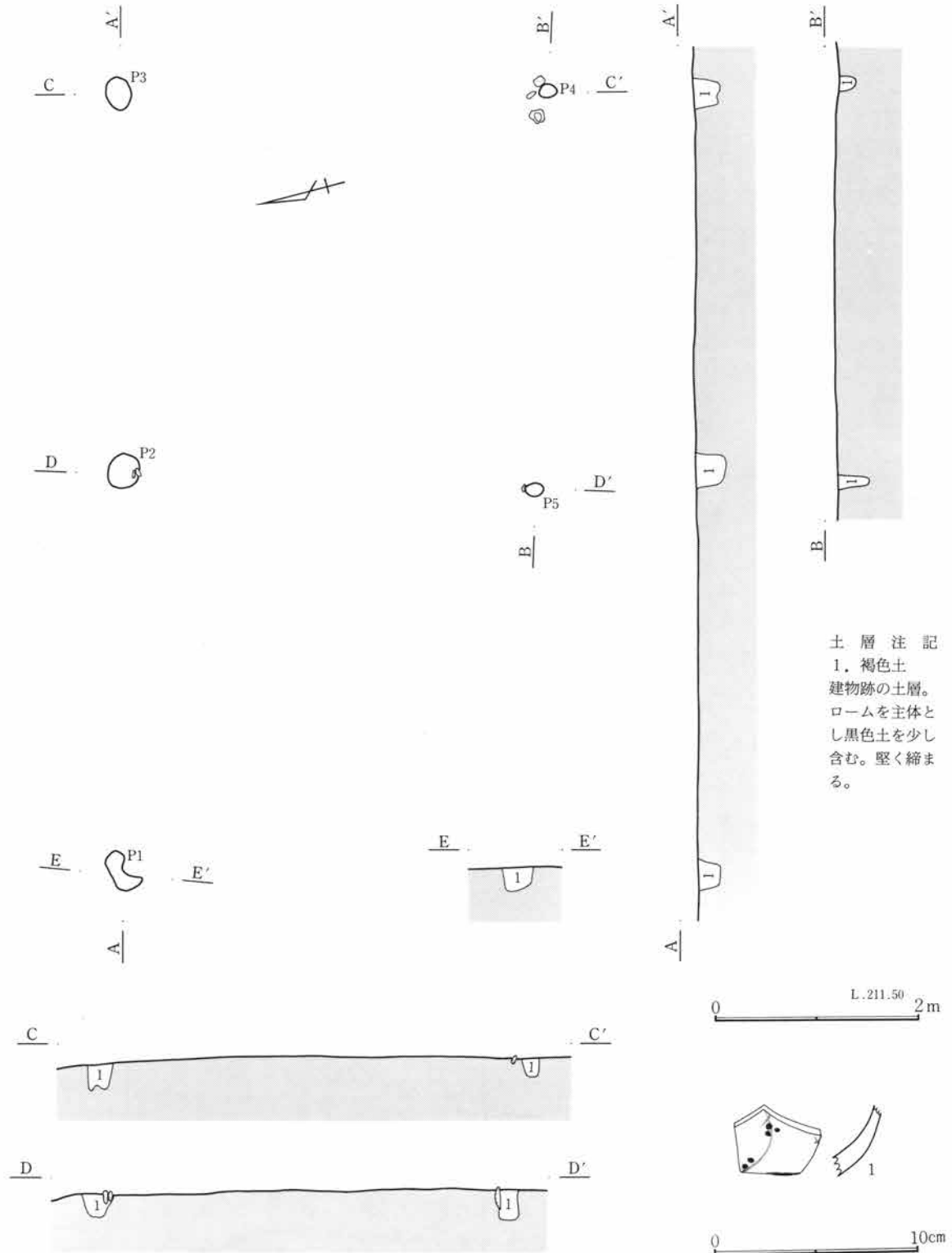
2. 屋敷跡

1号屋敷2号建物

位置 C86III20他 写真 PL66

IIテラスの東寄りで見出された。1間×3間(?)の規模であり、5基の土台を検出した。柱穴状の掘

り方をもち、土をつき固めて土台とし、礎石を置いて建物を構築していたと思われるが、礎石は小礫を検出できたにすぎない。遺物はP5内から1が出土しただけである。(遺物観察表:233頁)



第146図 1号屋敷2号建物と出土遺物

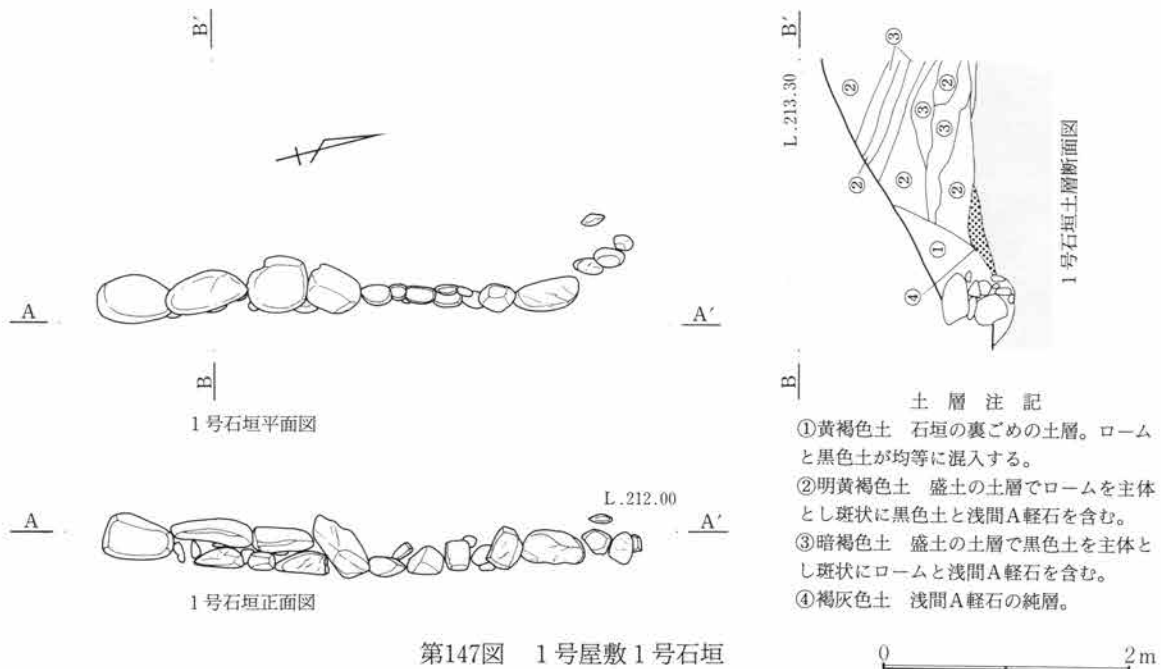
V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷1号石垣

位置 C80III30他 写真 PL65・66

屋敷西側にある土塁状施設盛り土部分の土留的な役割をもつ石垣である。表面に大きな自然石を積み

あげ、小礫を裏込めに使用している。石垣の長さは4.30mであるが、石垣が土塁状施設全面に巡っていた可能性は弱い。盛り土の土層観察から、盛り土の後に、石垣がつくられていることが判明した。

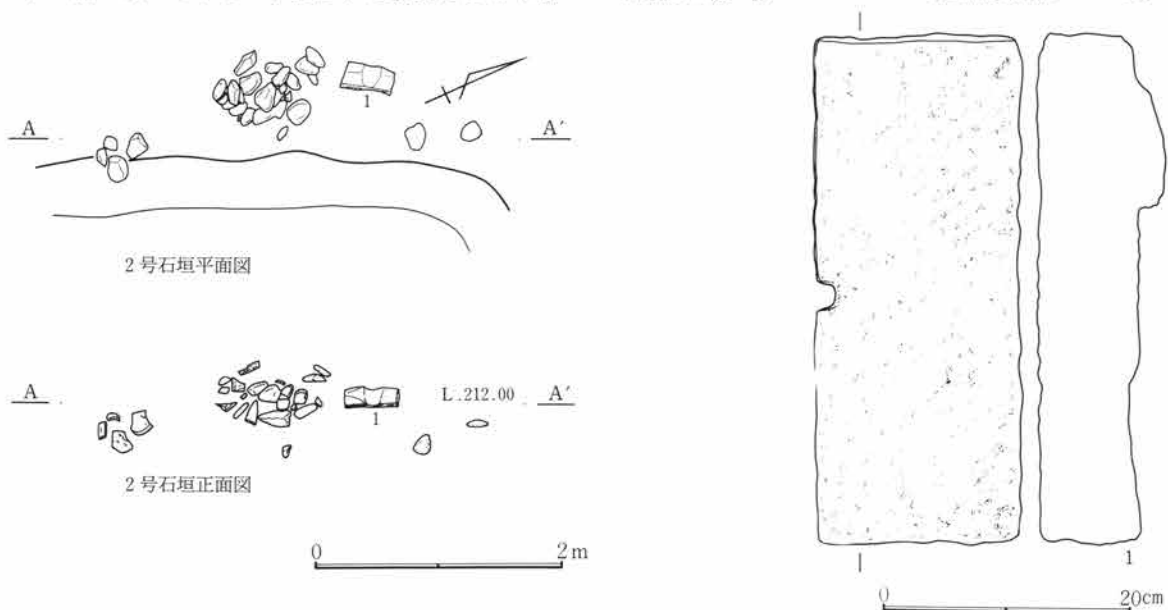


1号屋敷2号石垣

位置 C82III32他 写真 PL65・66

屋敷西側にある土塁状施設切り土部分で検出された。27個の石からなるが、積まれた状態ではなく面

的に分布し、しかも配置された状態でないことから、石垣の機能を果たしていたとは考えにくい。切石(1)が出土しているが、形状などから墓石などの土台の可能性が高い。(遺物観察表：234頁)

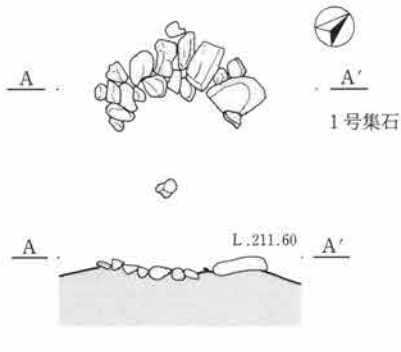


2. 屋敷跡

1号屋敷1号集石

位置 C80III30他 写真 PL73

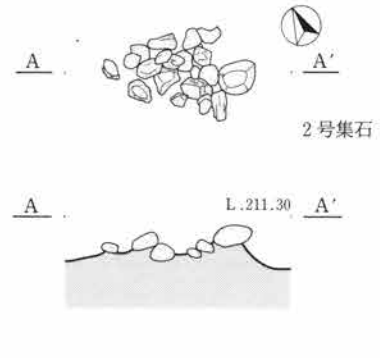
約20個の大小の自然礫からなる。掘り込みはなく、石の下は堅く締まっていた。遺物の出土はない。機能は不明である。



1号屋敷2号集石

位置 C81III22他 写真 PL73

約20個の大小の自然礫からなる。掘り込みはなく、石の下は締まりがない。遺物の出土はない。3号溝の南側に位置する。



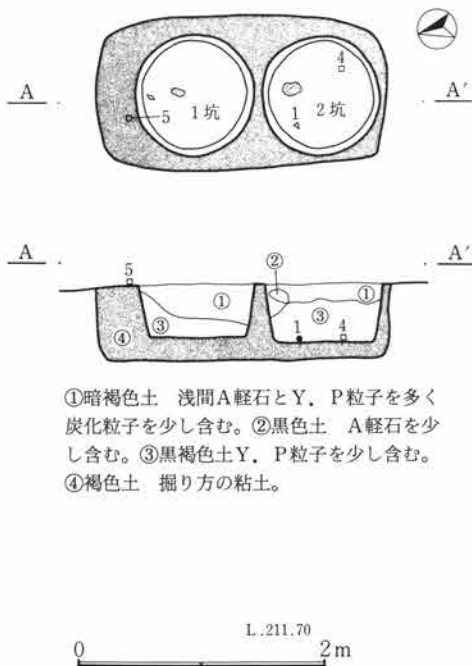
第149図 1号屋敷1・2号集石

1号屋敷1・2号土坑

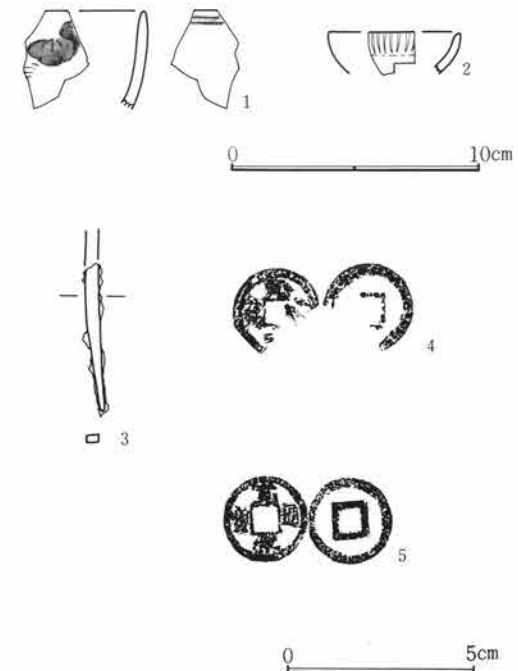
位置 C82III31他 写真 PL67・84

桶を埋設する土坑で、掘り方を共有することから2基の土坑は、一体のものである。規模(径×深さ)は、1号土坑：0.93×0.40m、2号土坑：0.90×0.48

m、で掘り方の縦×横は、2.35×1.24mで、深さは0.59mである。1号土坑の東側は23号土坑に一部切られている。図示した遺物が出土した。本遺跡から出土した紅皿は2の1点だけである。桶材は残存していなかった。(遺物観察表：234頁)



①暗褐色土 浅間A軽石とY、P粒子を多く炭化粒子を少し含む。②黒色土 A軽石を少し含む。③黒褐色土Y、P粒子を少し含む。④褐色土 掘り方の粘土。



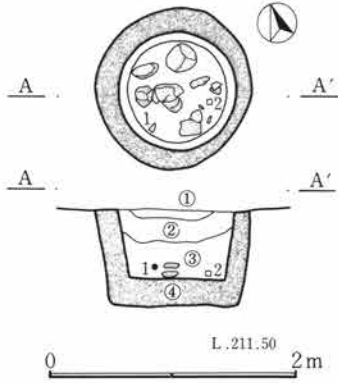
第150図 1号屋敷1・2号土坑と出土遺物

V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷3号土坑

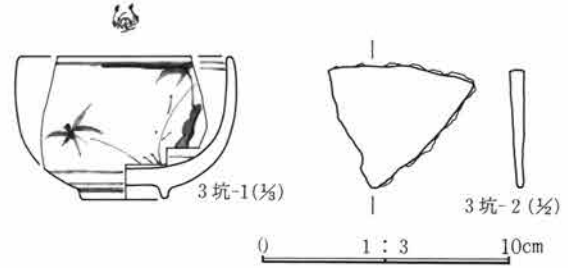
位置 C82III22 写真 PL67・84

桶を埋設する土坑であるが、桶材は残存していなかった。規模(径×深さ)は、0.94×0.52mで掘り



- ① 暗褐色土  
ローム粒子と浅間A軽石を少し含む。
- ② オリーブ褐色土  
炭化粒子とY, P粒子を少し含む。
- ③ 黒褐色土  
粘性が強い。
- ④ 褐色土  
掘り方の粘土

方の規模(径×深さ)は、1.37×0.75mである。埋没土中から図示した遺物以外に、人頭大を中心とした自然礫が出土している。(遺物観察表:234頁)



第151図 1号屋敷3号土坑と出土遺物

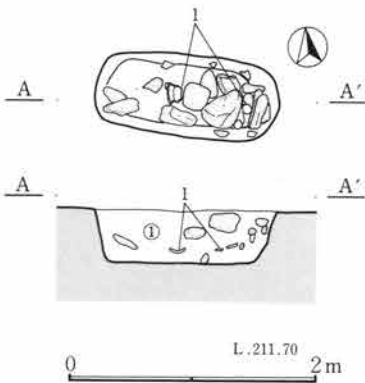
1号屋敷4号土坑

位置 C83III30 写真 PL68・84

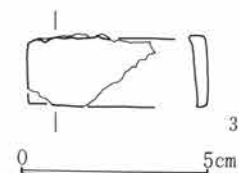
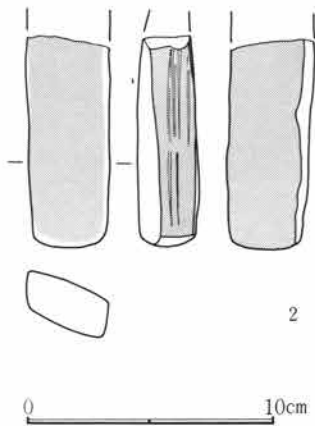
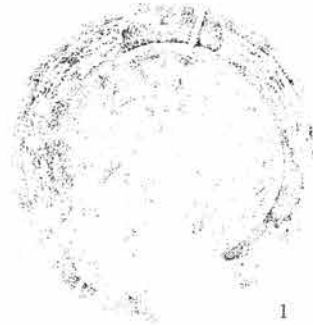
隅丸長方形の土坑で、規模(縦×横×深さ)は、

1.47×0.62×0.38mである。埋没土中からは、図示した遺物以外に被熱した自然礫が多く出土した。

(遺物観察表:234頁)



- ① 暗オリーブ褐色土  
浅間A軽石とローム粒子を多く、炭化物と焼土粒子及びロームブロックを少し含む。  
締まりは弱い。



第152図 1号屋敷4号土坑と出土遺物

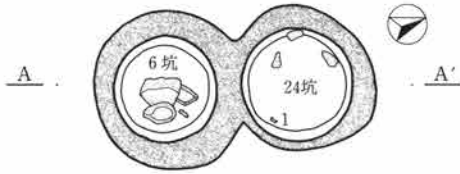


2. 屋敷跡

1号屋敷6・24号土坑

位置 C87III22他 写真 PL68・84

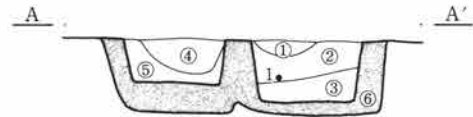
桶を埋設する土坑で、掘り方部分で6号土坑が24号土坑を切る。それぞれ8号溝・9号溝と重複する



- ①黄褐色土 浅間A軽石とY, P粒子を少し含む。
- ②黒褐色土 浅間A軽石を多く含む。③暗褐色土 Y, P粒子を少し含む。④Y, P粒子を多く含む。⑤暗オリーブ褐色土 粘土質の土壤。⑥褐色土 掘り方の粘土。



が土坑との新旧関係は不明である。規模(径×深さ)は、6号土坑:0.79×0.38m、24号土坑:0.91×0.45m、で掘り方はそれぞれ一回り大きい。埋没土からは、図示した遺物以外に自然礫が出土した。桶材は残存していなかった。(遺物観察表:234頁)

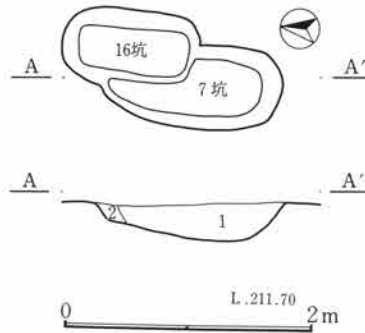


第153図 1号屋敷6・24号土坑と出土遺物

1号屋敷7・16号土坑

位置 C84III31 写真 PL68

2基の土坑ともに、隅丸長方形を呈する土坑であるが、重複関係は不明である。規模(縦×横×深さ)は、7号土坑:1.42×0.67×0.37m、16号土坑:1.08×0.60×0.37mである。埋没土から遺物は出土しなかった。



- 1. オリーブ褐色土  
ローム質土壤中にY, P粒子を少し含む。粘性と締まりは弱い。
- 2. 黄褐色土  
Y, P粒子を多く含む。堅く締まり、粘性は弱い。

第154図 1号屋敷7・16号土坑

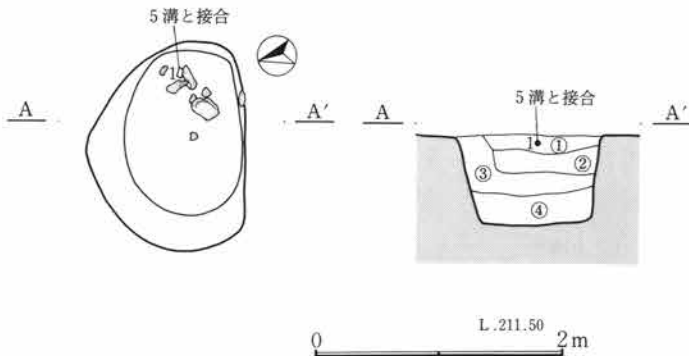
1号屋敷8号土坑

位置 C88III19 写真 PL68

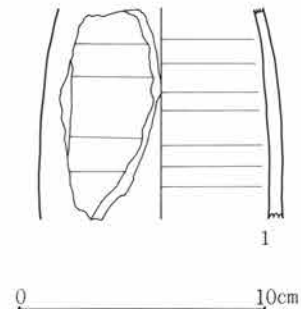
南側は調査区域外であるために、全体形状は不明

であるが、④層の存在から桶を埋設する土坑の可能性はある。長辺は1.65m、深さは0.74mであった。①層中から、自然礫と1が出土した。

(遺物観察表:235頁)



- ①暗褐色土  
ローム粒子を少し含む。
- ②褐色土  
浅間A軽石を少し含む。
- ③黄褐色土  
ローム質土壤。
- ④褐色土  
粘土質土壤で堅く締まる。

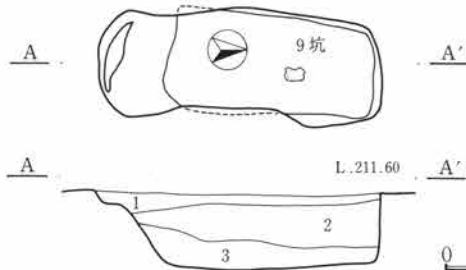


第155図 1号屋敷8号土坑と出土遺物

V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷9号土坑

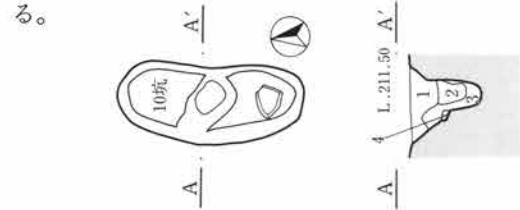
C81III29他に位置し規模(縦×横×深さ)は2.23×0.83×0.62mである。遺物の出土は礫だけである。



1. 暗褐色土 浅間A軽石とローム粒子を少し含む。
2. 褐色土 褐色土中にロームブロックを斑状に含む。
3. 暗褐色土 ローム粒子を少し浅間A軽石を多く含む。

1号屋敷10号土坑

位置 C84III24 写真 P L 68  
規模(縦×横×深さ)は1.47×0.61×0.54mである。

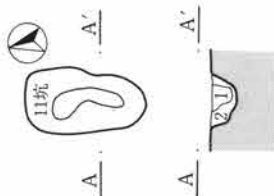


1. 褐色土 ロームブロックとY, P粒子を少し含む。
2. 暗褐色土 ローム粒子を少し含む。
3. オリーブ褐色土 ローム粒子を多く含む。
4. 明褐色土 ローム質土壌。粘性弱い。

第156図 1号屋敷9・10号土坑

1号屋敷11号土坑 位置C84III24 写真P L 69

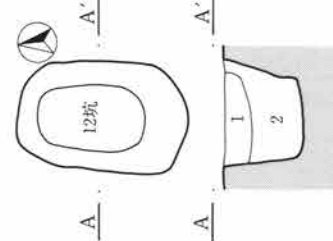
規模(縦×横×深さ)は1.47×0.61×0.54mである。



1. 暗オリーブ褐色土 Y, P粒子を少し含む。粘性は弱い。若干締まる。
2. 黄褐色土 1層に似るが、含まれるY, P粒子の量が多い。

1号屋敷12号土坑 位置C87III20 写真P L 69

規模(縦×横×深さ)は1.36×0.85×0.70mである。



1. 褐色土 浅間A軽石とY, P粒子を少し含む。
2. オリーブ褐色土 ローム質土壌。

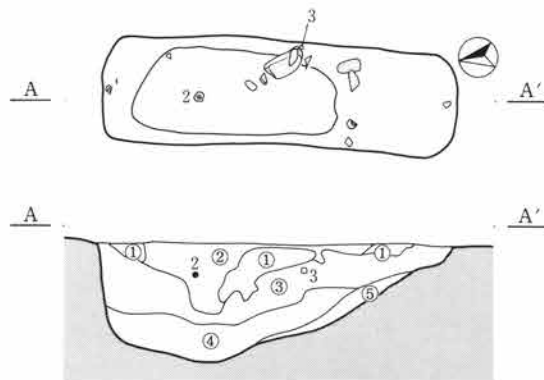


第157図 1号屋敷11・12号土坑

1号屋敷15号土坑

位置 C84III26他 写真 P L 69・84

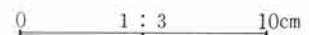
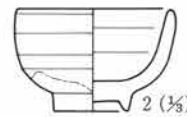
規模(縦×横×深さ)は2.82×0.78×0.92mである。



る。形状は9号土坑と類似する。埋没土の上層から、図示した遺物以外に自然礫が出土した。

(遺物観察表:235頁)

- ① 褐色土 ローム質土壌
- ② 褐色土 ロームブロックを斑状に含む。
- ③ 黒褐色土 ロームブロックを少し含む。
- ④ 褐色土 黒色土を斑状に含む。
- ⑤ 褐色土 褐色土中に浅間A軽石を多く含む。



第158図 1号屋敷15号土坑と出土遺物

2. 屋敷跡

1号屋敷17号土坑

位置 C86III24 写真 PL69・84

桶を埋設する土坑で、8号溝と重複するが新旧関係は不明である。規模(径×深さ)は、1.02×0.57

m、で掘り方の規模(径×深さ)は1.32×0.64mである。土坑内には、自然礫が多く廃棄されており、その中から図示した遺物が出土した。桶材は残存していなかった。(遺物観察表:235頁)

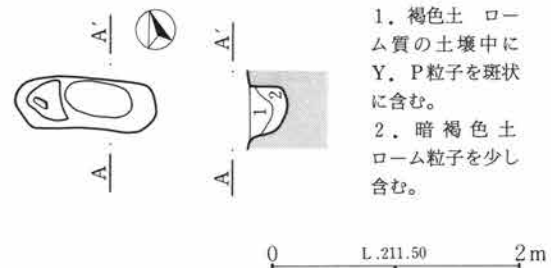


第159図 1号屋敷17号土坑と出土遺物

1号屋敷13号土坑

位置 C85III24

隅丸長方形にちかい形状であり、西側に小さなテラスがある。規模(縦×横×深さ)は、1.12×0.40×0.32mである。埋没土中から、西側のテラス部分で自然礫が出土している。



第160図 1号屋敷13号土坑

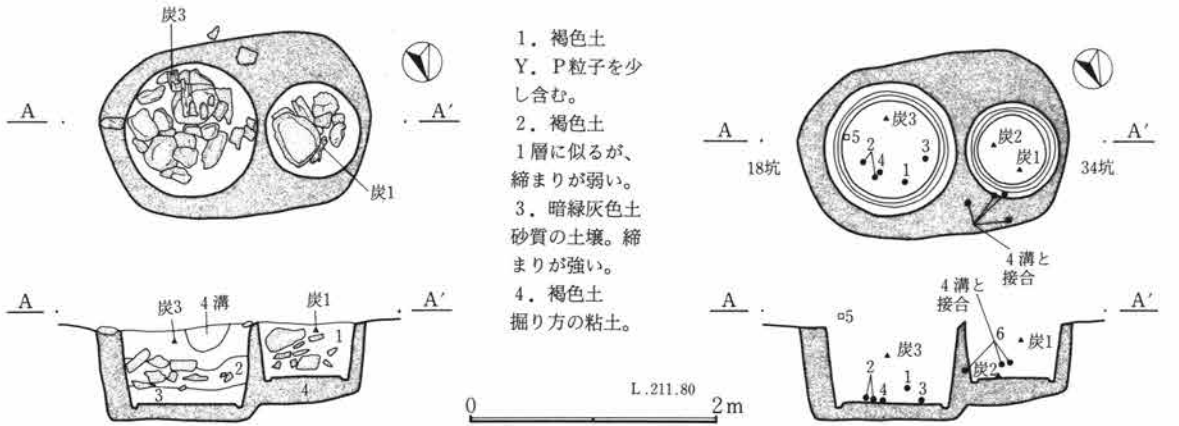
V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷18・34号土坑

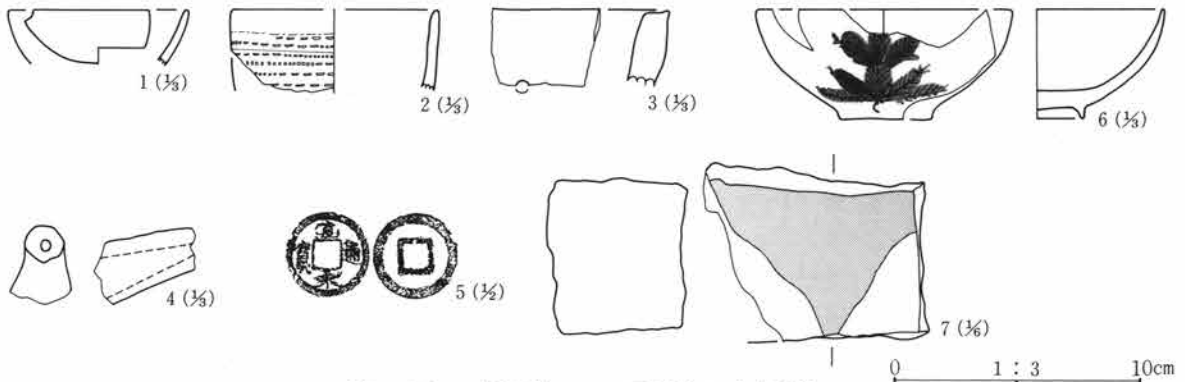
位置 C82III32 写真 PL69・70・84

桶を埋設する土坑で、掘り方を共有することから2基の土坑は、一体のものである可能性が強い。規

模(径×深さ)は、18号土坑：0.98×0.66m、34号土坑：0.79×0.46m、である。18号土坑は4号溝に切られている。埋没土中から、自然礫と図示した遺物が出土した。(遺物観察表：236頁)



1. 褐色土  
Y. P粒子を少し含む。
2. 褐色土  
1層に似るが、縮まりが弱い。
3. 暗緑灰色土  
砂質の土壌。縮まりが強い。
4. 褐色土  
掘り方の粘土。



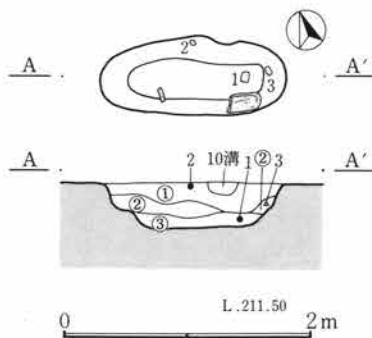
第161図 1号屋敷18・34号土坑と出土遺物

1号屋敷19号土坑

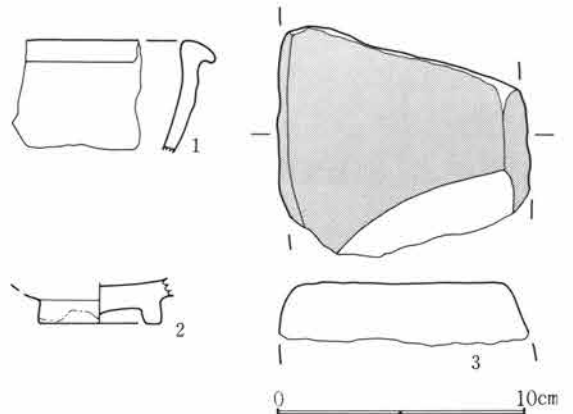
位置 C86III22 写真 PL70

規模(縦×横×深さ)は、1.45×0.60×0.33mであ

り、埋没土中から図示した遺物が出土した。10号溝に切られる。(遺物観察表：236頁)



- ① 黄褐色土  
浅間A軽石を少し含む。
- ② 暗褐色土  
浅間A軽石をごく僅かに含む。
- ③ 褐色土  
Y. P粒子を多く含む。

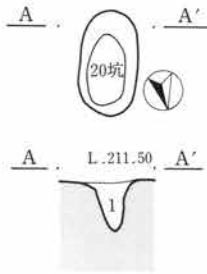


第162図 1号屋敷19号土坑と出土遺物

2. 屋敷跡

1号屋敷20号土坑 写真 PL70

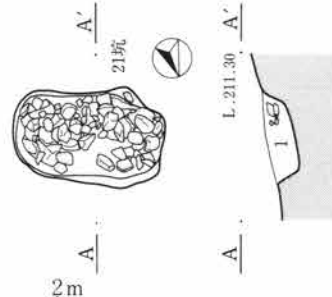
C85III23に位置し規模(縦×横×深さ)は、0.82×0.52×0.49mである。遺物の出土はなかった。



1. オリーブ褐色土  
Y, P粒子を多く含む。締まりはあまりなく、粘性は弱い。

1号屋敷21号土坑 写真 PL70

C84III17に位置し規模(縦×横×深さ)は、1.22×0.75×0.21mの集石土坑である。

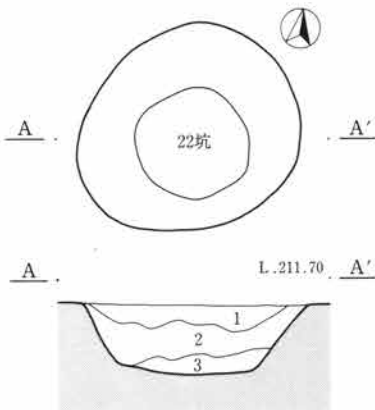


1. 褐色土  
Y, P粒子を少し含む。締まりはなく、粘性は弱い。

第163図 1号屋敷20・21号土坑

1号屋敷22号土坑 写真 PL70

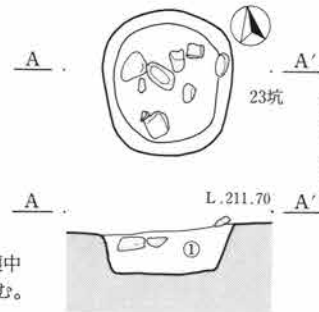
C85III28に位置し規模(長径×短径×深さ)は、1.78×1.65×0.58mである。遺物の出土はなかった。



1. 明黄褐色土 粘土ブロックとY, P粒子を多く含む。  
2. 黄褐色土 1層に似るが、粘土ブロックを含まない。  
3. 褐色土粘土質土壤中にY, P粒子を少し含む。

1号屋敷23号土坑 写真 PL67

C82III30に位置し規模(縦×横×深さ)は、1.14×1.00×0.32mである。上層から自然礫が出土した。

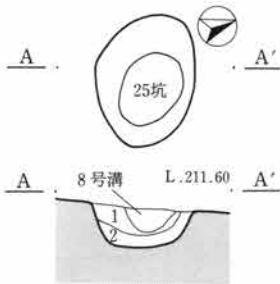


① 暗褐色土  
ローム粒子を少し含む。粘性と締まりは若干ある。

第164図 1号屋敷22・23号土坑

1号屋敷25号土坑 写真 PL-

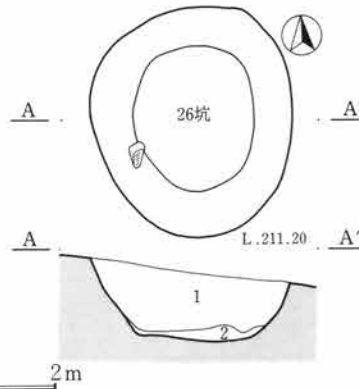
C85III28に位置し規模(長径×短径×深さ)は、1.08×0.80×0.41mである。遺物の出土はなかった。



1. オリーブ褐色土  
ローム質土壤。  
Y, P粒子を多く含む。  
2. 黒褐色土  
Y, P粒子を少し含む。

1号屋敷26号土坑 写真 PL71

C86III11に位置し規模(長径×短径×深さ)は、1.82×1.62×0.75mである。自然礫が出土した。



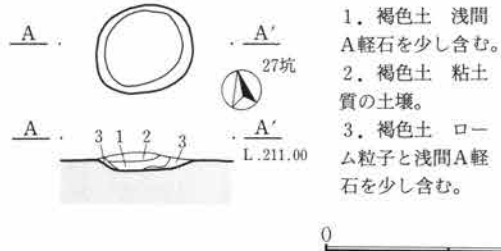
1. 褐色土  
浅間A軽石とロームブロックを多く含む。  
2. 暗オリーブ褐色土  
粘土質土壤。強く締まる。

第165図 1号屋敷25・26号土坑

V 江戸時代以降の遺構と遺物

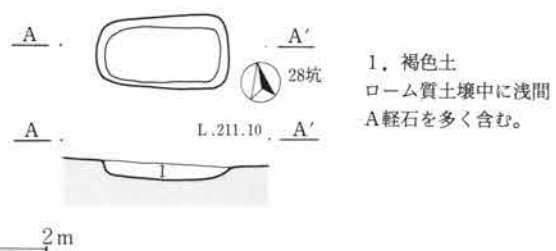
1号屋敷27号土坑 写真 PL71

C81III19に位置し規模(径×深さ)は、0.75×0.12mである。桶を埋設する土坑の可能性はある。



1号屋敷28号土坑 写真 PL-

C81III19に位置し規模(縦×横×深さ)は、1.04×0.55×0.13mである。3溝と重複し先後関係は不明。

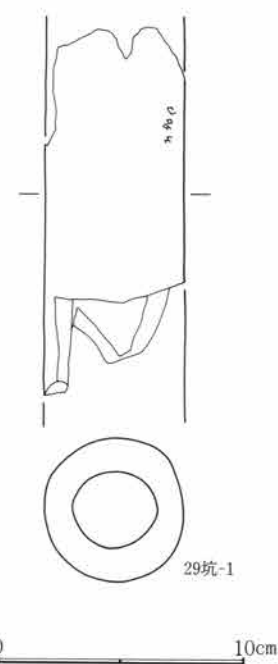
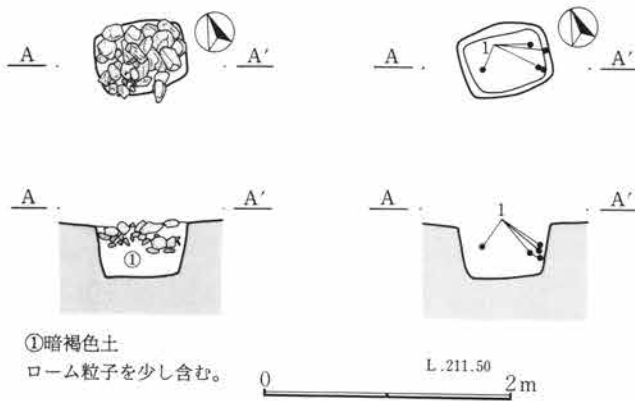


第166図 1号屋敷27・28号土坑

1号屋敷29号土坑

位置 C83III22 写真 PL71・84

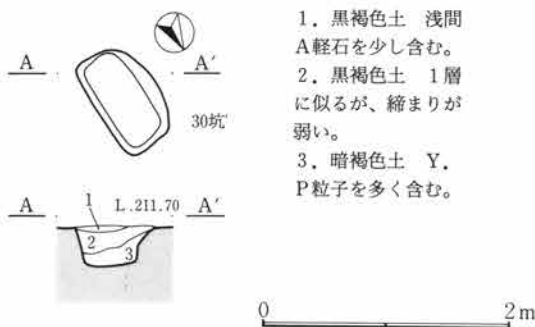
規模(縦×横×深さ)は、0.71×0.56×0.38mであり、埋没土の上層から図示した遺物と、自然礫が大量に出土した。(遺物観察表：236頁)



第167図 1号屋敷29号土坑と出土遺物

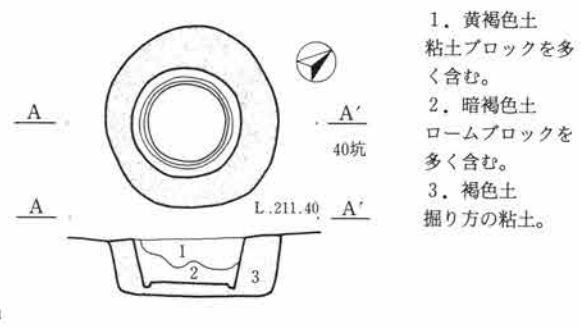
1号屋敷30号土坑 写真 PL71

C85III30に位置し規模(長径×短径×深さ)は、0.85×0.50×0.32mである。遺物の出土はなかった。



1号屋敷40号土坑 写真 PL71

C86III18に位置し、規模(径×深さ)は、0.87×0.34mである。桶を埋設する土坑で38号土坑を切る。



第168図 1号屋敷30・40号土坑

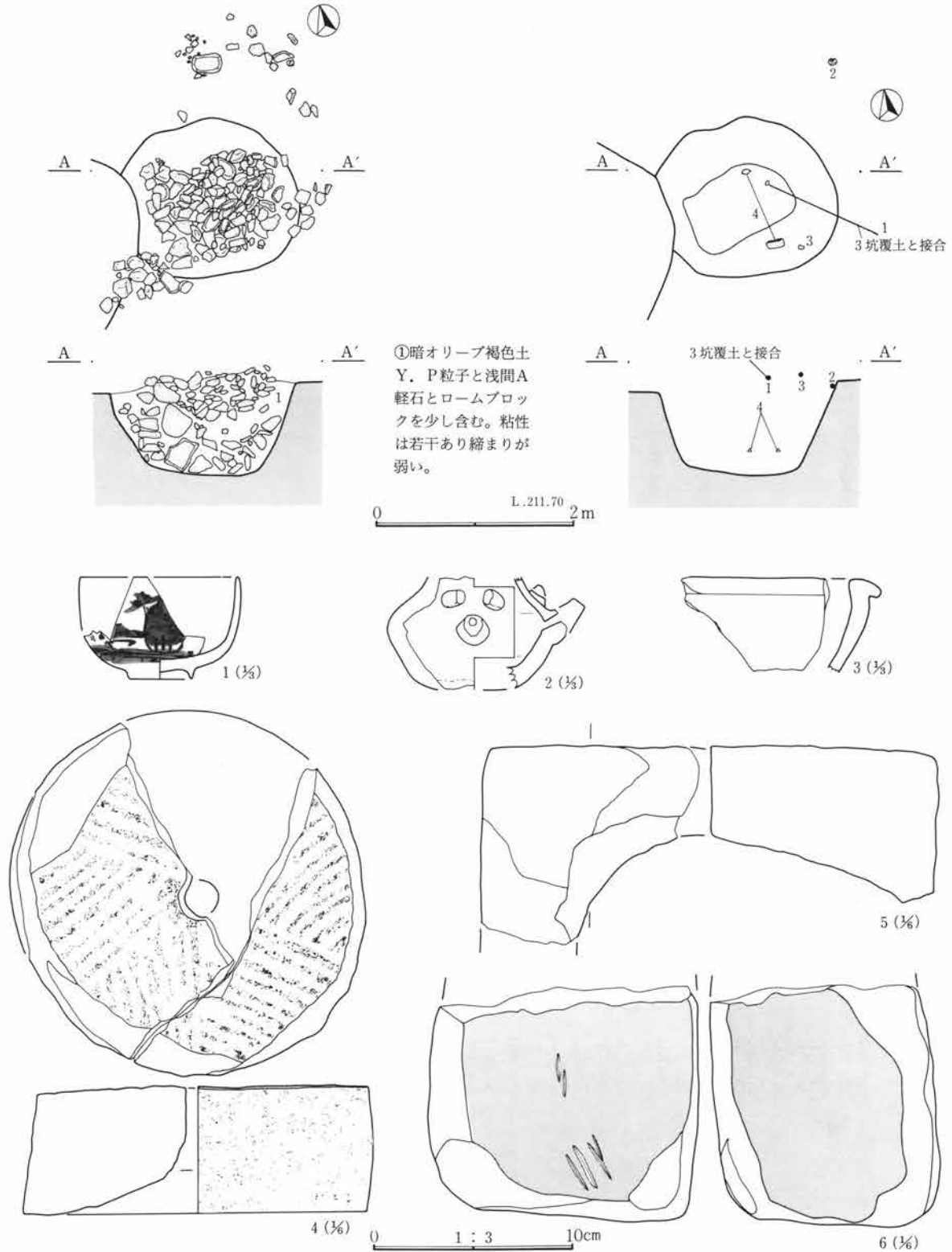
2. 屋敷跡

1号屋敷31号土坑

位置 C86III27他 写真 PL71・84

規模(長径×短径×深さ)は、1.71×1.55×0.94mである。1号井戸と重複するが、切り合い関係は認

められず、井戸の付帯施設である可能性が高い。土坑内には、石が充填されており、その中から図示した遺物が出土した。1は遺構間の接合関係をもつ(第135図参照)。(遺物観察表:236・237頁)



第169図 1号屋敷31号土坑と出土遺物

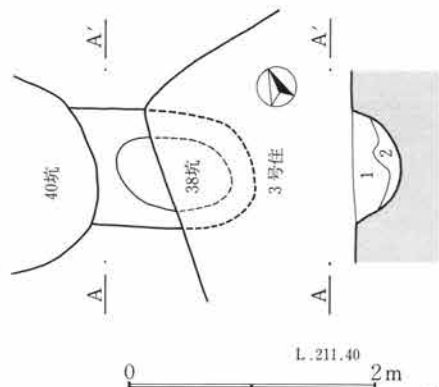
V 江戸時代以降の遺構と遺物

1号屋敷38号土坑

位置 C86III17 写真 PL71・84

40号土坑に切られる。3号住居調査時に検出され

ため、全体形状は不明である。埋没土中から1が出土した。(遺物観察表:237頁)



- 1. 褐色土  
ローム質土壌中に黒褐色土を斑状に含む。
- 2. 褐色土  
Y. P粒子を多く含む。



0 5cm

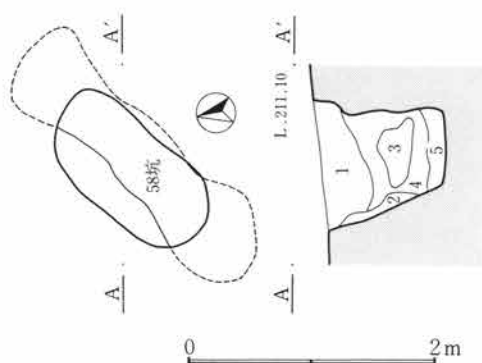
第170図 1号屋敷38号土坑と出土遺物

1号屋敷58号土坑

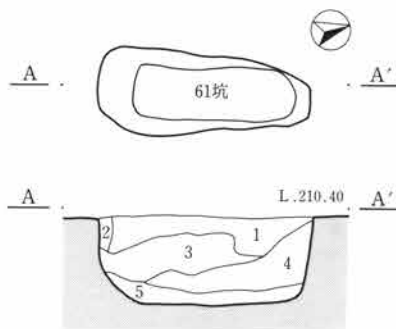
袋状を呈する土坑である。深さは1.06mで、上面長辺は1.46m、底面長辺は2.45mである。

1号屋敷61号土坑

C88III13に位置し規模(縦×横×深さ)は、1.84×0.55×0.73mである。遺物の出土はなかった。



- 1. 暗褐色土
- 2. 黄褐色土  
ロームブロック。
- 3. 黄褐色土 M, P  
ブロック。
- 4. 暗褐色土
- 5. 黄褐色土  
M, Pを含む。



- 1. 褐色土 M, Pを少し含む。
- 2. ロームブロック。
- 3. 黄褐色土
- 4. 暗褐色土 M, Pを少し含む
- 5. 褐色土 M, Pを多く含む。

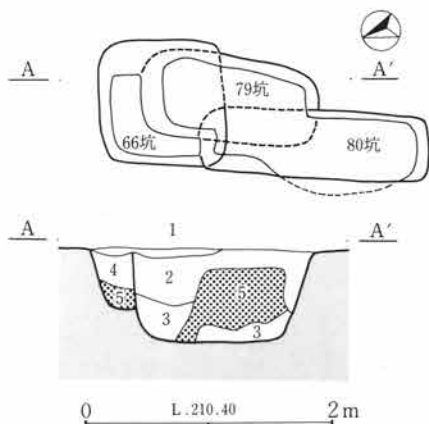
第171図 1号屋敷58・61号土坑

1号屋敷66・79・80号土坑

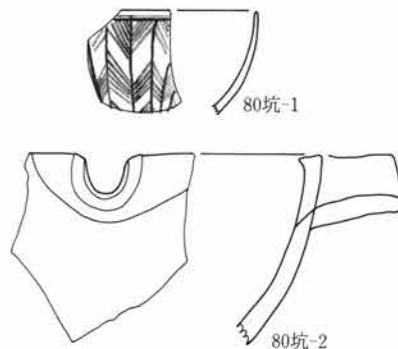
位置 C88III13他 写真 PL84

3基重複し、79坑が66坑を切るが他の先後関係は

不明である。規模(縦×横×深さ)は、66坑:0.95×0.95×0.51m、79坑:1.35×0.75×0.67m、80坑:1.72×0.52×0.74mである。(遺物観察表:237頁)



- 1. 暗褐色土 M, Pを少し含む。
- 2. 灰黄褐色土 M, Pを多く含む。
- 3. にぶい黄褐色土 M, Pを少し含む。
- 4. 黒褐色土 1層に似るが、含まれる M, Pの量が少ない。
- 5. 暗褐色土 浅間 A軽石を多く含む。



0 10cm

第172図 1号屋敷66・79・80号土坑と出土遺物

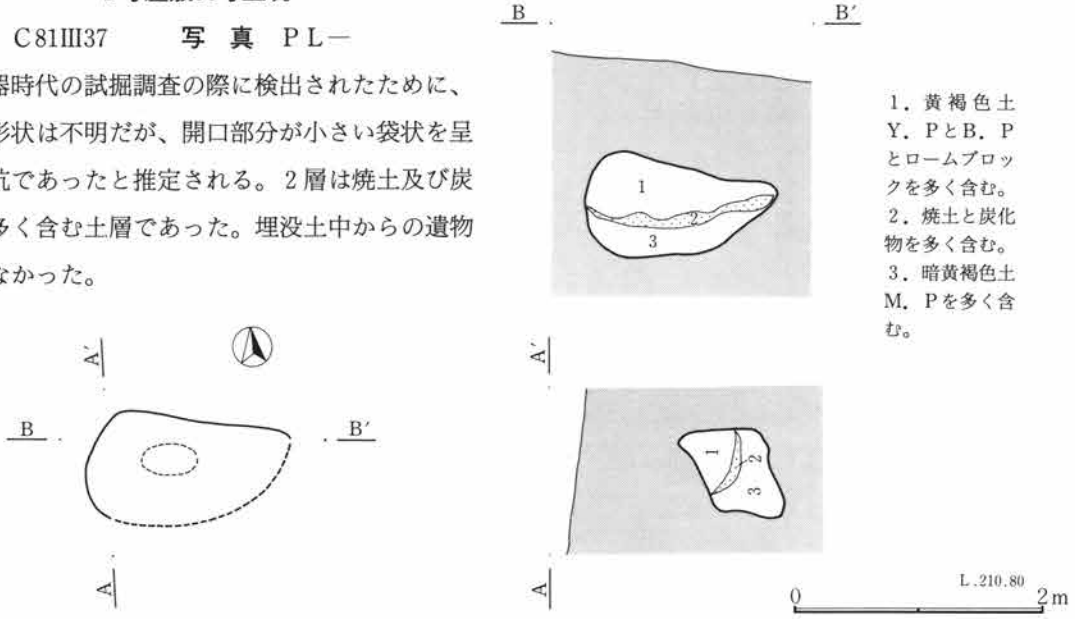


2. 屋敷跡

1号屋敷88号土坑

位置 C81III37 写真 PL-

旧石器時代の試掘調査の際に検出されたために、全体の形状は不明だが、開口部分が小さい袋状を呈する土坑であったと推定される。2層は焼土及び炭化物を多く含む土層であった。埋没土中からの遺物出土はなかった。



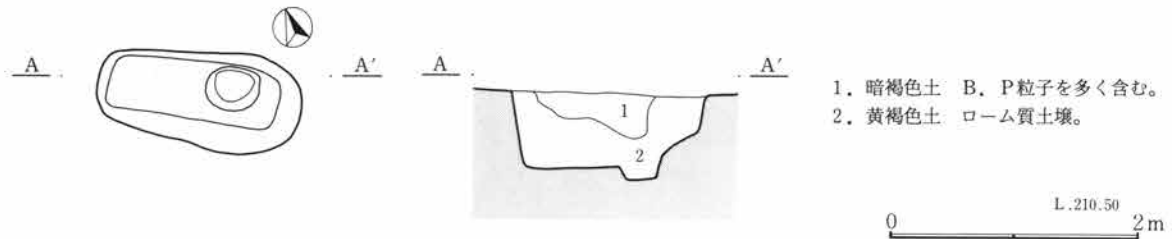
第173図 1号屋敷88号土坑

1号屋敷63号土坑

位置C87III13に位置し規模(縦×横×深さ)は、1.

62×0.74×0.75mである。隅丸長方形を呈する。

遺物の出土はなかった。



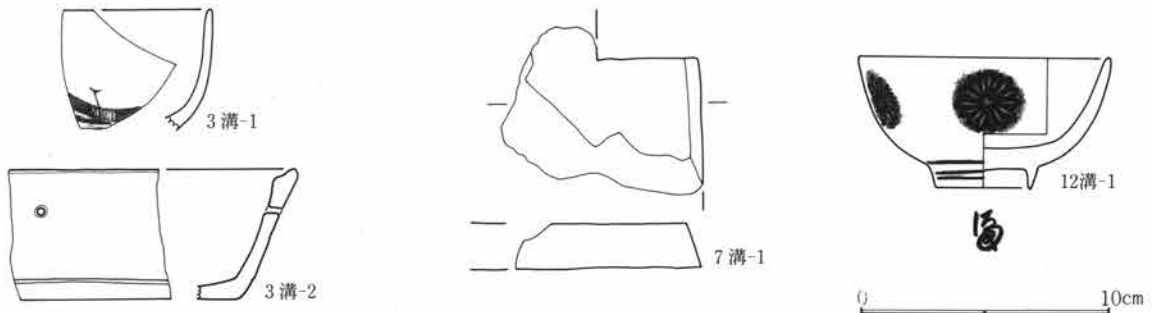
第174図 1号屋敷63号土坑

1号屋敷内の溝

写真 PL72・73・84

1号屋敷からは11条の溝が検出されたが、遺物が出土しなかったのは1・2・6・9・11溝である。3溝からは、図化以外の遺物では、磁器碗の小片が2点出土している。4溝からは焙烙の小片2点が出

土し、磁器碗が34土坑出土遺物と接合した(第135図参照)。5溝から出土した遺物は土坑出土遺物と接合した(第135図参照)。7溝からは図化した瓦が出土した。8溝からは、陶器鉢2片と磁器碗2片が出土した。12溝からは、図化した碗が底面から22cm上で出土した。(遺物観察表:237頁)



第175図 1号屋敷溝出土遺物

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 2 号屋敷出土遺物 (第125~128図、PL 78~80)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器 茶碗	口縁部 ~底部 口 8.8 高 5.5 底 3.5	肥前系	18C後	丸形の染付碗。外面は口縁部に1本と腰部~高台にかけて4本の横線。体部文様は折枝花文と高台周辺に蓮弁文。見込太極文。素地は灰白色で呉須は少しくすむ。	2次に被熱。
2	磁器 茶碗	口縁部 ~底部 口 (8.6) 高 5.8 底 3.6	肥前系	18C後	丸形の染付碗。焼成不良。外面は矢羽根文。腰部と高台に横線。内面は口縁に2本と腰部に横線。見込は寿。素地は灰白色で、呉須は黒ずんだ発色。	
3	磁器 茶碗	口縁部 口 (8.8) 高 — 底 —	肥前系	18C中~ 後	丸形の染付碗。体部は二重網目文。呉須は、少しくすんで発色。素土は灰白色。	覆土上層
4	磁器 茶碗	体部 口 — 高 (3.8) 底 —	肥前系	18C後	青磁染付の半筒形碗。外面は青磁釉だが発色が悪い。内面は腰部に横線。呉須は少しくすんで発色。焼成不良で素地は灰褐色。	
5	磁器 茶碗	体部一部 欠損 口 7.9 高 5.6 底 4.0	肥前系	18C後	染付の半筒形碗。外面は菊花散らし文。内面は口縁部に四方禪文。見込手描き五弁花文。素地は灰白色で呉須は少しくすんで発色。	
6	磁器 茶碗	高台部の 大半を欠 損 口 8.3 高 6.8 底 (3.5)	肥前系	18C後	半筒形の染付碗。外面は折枝花文と折れ松葉文。内面は四方禪文。見込はコンニャク判五弁花文。素地は灰白色で、呉須は少しくすんで発色。	2次に被熱。
7	磁器 茶碗	底部欠損 口 8.3 高 — 底 —	肥前系	18C後	半筒形の染付碗。外面は松竹梅文。内面は口縁部に四方禪文と腰部に2本の横線。素地は灰白色で呉須は少しくすんで発色。	
8	磁器 小盃	体部と 高台部欠 損 口 7.6 高 — 底 (3.0)	肥前系	18C中葉 ~後	染付の小盃。粗い貫入が入る。素地は灰色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	2次に被熱。
9	磁器 小盃	体部欠 損 口 7.1 高 4.0 底 3.1	肥前系	18C中葉 ~後	染付の小盃。粗い貫入が入る。素地は灰色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	2次に被熱。
10	磁器 皿	体部欠 損 口 11.3 高 3.5 底 4.0	肥前・波 佐見	18C後	内面は格子目文。蛇ノ目状の釉剥ぎ部分に泥漿。素地は灰褐色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	
11	磁器 皿	体部欠 損 口 12.0 高 3.5 底 4.4	肥前・波 佐見	18C後	内面は格子目文。蛇ノ目状の釉剥ぎ部分に泥漿。素地は灰褐色で、呉須はうすく少しくすんで発色。ピンホールが多い。	
12	磁器 皿	口縁部 口 12.3 高 — 底 —	肥前・波 佐見	18C後	内面は格子目文。素地は灰褐色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	
13	磁器 皿	口縁部 口 (13.2) 高 — 底 —	肥前・波 佐見	18C後	内面は格子目文。素地は灰白色で、呉須はうすく黒ずんだ発色。	
14	磁器 皿	口縁部一 部欠損 口 10.4 高 2.9 底 6.1	肥前系	18C前	外面は唐草文。高台内側に渦福。口唇部に口鏝。内面は、コンニャク判の菊花文と籬。見込コンニャク判五弁花文。素地は灰白色で、呉須は少しくすんで発色。	
15	磁器 皿	口縁部 口 (10.1) 高 — 底 —	肥前系	18C前	外面は唐草文。口唇部に口鏝。内面はコンニャク判の菊花文と籬。素地は灰白色で、呉須は青色に発色。	
16	磁器 徳利	胴部~底 部 口 — 高 — 底 (4.8)	肥前系	18C後	染付神酒徳利。若松と梅竹文。素地はうすい灰白色。呉須は少しくすんで発色。	
17	陶器 飯碗	口縁部 ~体部 口 9.7 高 — 底 —	肥前系	18C	陶胎染付。妬器質。外面は口縁部に2本の横線。体部には山水文か。	2次に被熱。
18	陶器 飯碗	口縁部 口 (12.1) 高 — 底 —	肥前系	18C	陶胎染付。妬器質。外面は口縁部に唐草文。体部は山水文。呉須は青色に発色。細かな貫入が入る。	
19	陶器 飯碗	口縁部 口 (10.6) 高 — 底 —	肥前系	18C前 ~中	陶胎染付。妬器質。外面は口縁部に四方禪文。細かな貫入が入る。	

## 2. 屋敷跡

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考	
20	陶器 飯碗	口縁部 ～体部 欠損	口 (12.2) 高 8.9 底 4.8	肥前系	18C 前 ～中	陶胎染付。炻器質。外面は口縁部四方禪文。体部は山水文。	2次的に被熱。
21	陶器 飯碗	口縁部 ～体部	口 — 高 — 底 4.4	肥前系	18C 前 ～中	陶胎染付。炻器質。呉須は黒ずんだ発色。	
22	陶器 飯碗	口縁部	口 (11.4) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	胎釉と、うのふ釉を施す。素地は黄褐色。	
23	陶器 茶碗	口縁部	口 (11.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	胎釉と、うのふ釉を施す。素地は黄褐色。	
24	陶器 小盃	体部～底部	口 — 高 — 底 3.1	瀬戸・美濃系	18C	内外面に灰釉。付高台で高台無釉だが一部釉が残存。素地は灰褐色。	
25	陶器 蓋	つまみ部 欠損	口 12.5 高 —	瀬戸・美濃系		外面体部～口縁部及び内面に胎釉と、うのふ釉。素地は暗褐色。	
26	陶器 皿	口縁～底部 欠残	口 (11.0) 高 2.6 底 (6.8)	瀬戸・美濃系	17C 後 ～18C 前	外面体部と内面に灰白色。削り高台。素地は灰褐色。	
27	陶器 片口鉢	口縁部 ～体部 欠残	口 (18.8) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C 後 ～19C 前	胎釉。素地は暗褐色。	
28	陶器 香炉	口縁部 ～底部	口 10.6 高 7.9 底 6.1	肥前系		陶胎染付。炻器質。外面は口縁部2本線と腰部に1本線。体部に山水文。内面は口縁部に釉薬。	2次的に被熱。
29	陶器 香炉	体部～底部	口 — 高 — 底 4.8	瀬戸・美濃系	18C	外面は体部に灰釉。付高台。素地は淡黄褐色。	溝柵形部分の底面から出土。
30	陶器 香炉	口縁部	口 (11.7) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	外面に菊花文が彫られる。外面及び内面の口縁部に胎釉。素地は淡黄褐色。	31と同一か。
31	陶器 香炉	底部片	口 — 高 — 底 (8.1)	瀬戸・美濃系	18C	外面体部に胎釉。三足になると思われるが、1つのみ残。素地は淡黄褐色。	30と同一か。
32	陶器 灯明皿	口縁部 ～底部	口 10.2 高 2.0 底 5.0	瀬戸・美濃系	18C 後	外面の一部と内面に鉄釉。灯明皿の上皿で内面に重ね焼き痕がのこる。	
33	陶器 灯明皿	口縁部 ～底部	口 (11.0) 高 2.2 底 (4.7)	瀬戸・美濃系	18C 後	外面の一部と内面に鉄釉。灯明皿の下皿で外面に重ね焼き痕がのこる。	
34	陶器 土瓶	口縁部 ～底部	口 11.6 高 16.4 底 11.6	不明	18C か	1対の耳を有し、陰刻を施す。外面にも松葉?を陰刻。足が1つ残存。外面体部下から内面に鉄釉。外面に灰釉を流し掛け。	2次的に被熱。
35	陶器 徳利	体部～底部	口 — 高 — 底 7.0	瀬戸・美濃系か	18C 後 ～19C 前	ヘコカン徳利。外面に鉄釉。内面無釉。	内面は2次的に被熱したため剝離。
36	陶器 搦鉢	体部～底部	口 — 高 — 底 (13.9)	瀬戸・美濃系	18C	鉄(錆)釉。櫛目の単位は12本。素地は淡黄褐色。底部に回転糸切痕(右回転)。	40と同一。 2次的に被熱。
37	陶器 搦鉢	口縁部	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	焼締搦鉢の口縁部。素地は暗褐色。鉄(錆)釉搦鉢の口縁部。素地は淡黄褐色。	覆土上層
38	陶器 搦鉢	口縁部	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	鉄(錆)釉搦鉢の口縁部。素地は淡黄褐色。	
39	陶器 搦鉢	口縁部	口 — 高 — 底 —	丹波か?	17C 後	焼締搦鉢の口縁部。素地は暗褐色。	

V 江戸時代以降の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
40	陶器 摺鉢	口 一 高 一 底 一	瀬戸・美濃系	18C	鉄(錆)釉。楯目の単位は12本。 素地は淡黄褐色。	36と同一。 2次的に被熱。
41	軟質陶器 火鉢か	口縁部 口 (23.8) ～体部 高 一 底 一	不明		内外面ともに丁寧な整形が施される。 外面口縁部下に太めの沈線。 酸化炎焼成。	
42	軟質陶器 焙烙	口縁部 口 (36.0) ～底部 高 4.8 底 (33.0)	不明		42、43、44、は同一個体。内耳部分は口唇部の少し下から、底部に接合する。44には1対の補修孔が見られ、内外面に焼けこげによる紐の痕跡が見受けられる。酸化炎焼成。	
43	軟質陶器 焙烙					
44	軟質陶器 焙烙					
45	軟質陶器 焙烙	口縁部 口 (40.0) ～底部 高 5.7 底 (36.0)	不明		外面は、体部と底部の接合部に篋の痕跡が残る。 内耳部分は体部の中位から底部に接合する。 酸化炎焼成。	諏訪前遺跡A区3号井戸 2と同一か。覆土上層
46	軟質陶器 火鉢	口縁部 口 28.2 ～底部 高 16.7 底 24.8	不明		外面は、胴部中位に叩き目。台部に小孔を有するが、単位は不明。酸化炎焼成。	
47	陶器 把手か	つまみ部 つまみ部 高 (6.2)	瀬戸・美濃系か?		外面に鉄釉。中央に中空状に小孔を有する。 素地は褐色。	覆土上層
48	土製人形	袖部分	不明		素焼きの土製人形の袖部分。	
49	土製品	部分			竈などの構造材の一部か。 芴入りの粘土を素地とする。	
50	土製品	部分			50と51は同一個体。 竈などの構造材の一部か。 芴は含まれず、砂礫を多く含む。煤付着。	2号屋敷33号土坑2と同一個体。
51	土製品					

石製品

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴	備考
52	砥石	長 一 幅 3.0 厚 2.5 重 81.0	1部を欠損する。外面に使用による細い線条痕を若干有する。いわゆる虎砥。	流紋岩
53	砥石	長 一 幅 3.4 厚 1.7 重 32.0	大半を欠損する。側面に、櫛歯状工具痕がみられることから、18C後～19C前半。	流紋岩
54	砥石	長 一 幅 6.3 厚 2.0 重 200.0	1/2を欠損し、外面の1部が剥がれる。外面に使用による細い線条痕を多数有する。	流紋岩 2次的に被熱 覆土上層。

金属製品

(単位：cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
55	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.2	銅	完形。方孔。銭背無文。	
56	銭 寛永通宝	厚 0.09 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	
57	銭 寛永通宝	厚 0.09 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	
58	銭 寛永通宝	厚 0.1 径 2.2	銅	古寛永。1/2を欠損。方孔。銭背無文。	覆土上層
59	煙管 吸口	長 5.4 径 0.9 吸口径0.4 重 5.0	銅	最大径を羅字挿入口にもつ。口唇部の手前にかけてゆるやかにくびれる。口唇部にふくらみを持つ。	
60	釘	長 7.5 幅 0.3 重 5.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。	

## 2. 屋敷跡

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
61	釘	長 ー 幅 0.2 重 1.7	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部は遺存状態が悪く詳細は不明。脚部を欠損。	
62	釘	長 ー 幅 0.4 重 8.4	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
63	釘	長 ー 幅 0.3 重 1.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
64	釘	長 ー 幅 0.3 重 1.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	
65	釘	長 ー 幅 0.5 重 6.1	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。先端が曲がる。頭部を欠損。	
66	釘	長 ー 幅 0.4 重 2.3	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
67	釘	長 ー 幅 0.5 重 4.9	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	
68	釘	長 ー 幅 0.3 重 4.6	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
69	釘	長 ー 幅 0.2 重 1.9	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
70	釘	長 ー 幅 0.4 重 3.4	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。頭部は遺存状態が悪く詳細は不明。	
71	釘	長 ー 幅 0.4 重 4.2	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。曲がっている。	
72	釘	長 ー 幅 0.4 重 5.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	
73	釘	長 ー 幅 0.2 重 6.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	
74	釘	長 ー 幅 0.5 重 7.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	
75	釘	長 ー 幅 0.4 重 5.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
76	小 刀	長 ー 幅 1.4 重 3.6	鉄	両端を欠損する。遺存状態が悪く詳細は不明。	
77	火 箸 か	長 ー 幅 1.2 重 18.0	鉄	中央から先端にかけて欠損。頭部は折り曲げてある。	
78	釘	長 ー 幅 0.4 重 1.9	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。遺存状態が悪く詳細は不明。	
79	釘	長 ー 幅 0.4 重 8.9	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。曲がっている。	
80	釘	長 ー 幅 0.3 重 0.8	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。	
81	煙 管 雁	長 4.7 径 0.9 火皿径1.3 重 6.9	銅	口唇部にふくらみを持つ。火皿と首部の接合に補強帯を用いず脂返しはあまり湾曲しない。僅かに肩を持つ。	
82	煙 管 吸 口	長 4.5 径 0.8 吸口径0.3 重 5.8	銅	最大径を羅字挿入口に持つ。僅かに肩をもち文様が彫られる。	
83	煙 管 吸 口	長 4.9 径 1.0 吸口径0.4 重 3.3	銅	羅字挿入口が最大径よりすばまる。口唇部を欠損する。	
84	煙 管 吸 口	長 6.5 径 1.1 吸口径0.4 重 4.8	銅	最大径を羅字挿入口に持つ。口唇部を欠損。羅字挿入口付近に線痕。	
85	煙 管 雁 首	長 5.5 径 0.8 火皿径1.9 重 5.6	銅	火皿の径が小さい。火皿と首部の接合に補強帯が用いられない。脂返しはあまり湾曲しない。	
86	切 羽	長 (4.2) 厚 0.1 重 4.4	銅	2つに折れ曲がる。完形。左右対称の形状をなす。	
87	小 刀	長 ー 幅 1.4 重 9.5	鉄	大半を欠損する。	
88	火 打 金	長 ー 厚 0.23 重 5.6	鉄	片端及び上部を欠損する。	
89	和 鉄	長 ー 幅 1.6 厚 0.30 重 7.4	鉄	握り部分を欠損する。	

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 2 号屋敷 3 号井戸出土遺物 (第129図、PL 80)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 陶器鉢 ～体部	口 (21.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C 後か	植木鉢か。外面～内面口縁部に鉄釉。素地は淡黄褐色。	覆土
2	軟質陶器 焙烙	口 — 高 — 底 —	不明		外面に煤付着。酸化炎焼成。外面体部と底部の接合部に段を持つ。	覆土下層 2号屋敷45と同一か。
3	体部～底部 陶器 香炉	口 — 高 — 底 6.8	瀬戸・美濃系	18C	体部外面に鉛釉。三足を底部に接合。素地は淡黄褐色。	覆土下層 2号屋敷内の遺物と接合。
4	口縁部の 磁器 皿 1部欠損	口 12.1 高 4.3 底 3.7	肥前系	18C 後	内面は格子目文。蛇ノ目状の釉剥ぎ部分に泥漿。素地は灰褐色で、具須はうすく少しくすんで発色。ピンホールが多い。	覆土下層 2号屋敷内の遺物と接合。

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴	備考
5	石白	径 (36.4) 厚 13.8 重 9300	粉挽き白の上白。目は6分画で6本の浅い溝。上縁はしっかりとした稜を持つ。	覆土 安山岩

内匠諏訪前遺跡 A 区 2 号屋敷33号土坑出土遺物 (第131図、PL 80)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 陶器 皿	口 9.0 高 — 底 —	瀬戸・美濃系		灰白色を内面と外面の口縁部に施すが、2次的な被熱のため、表面が荒れている。	2次に被熱。 覆土。2号屋敷内の遺物と接合。
2	部分 土製品				竈などの構造材の一部か。萌は含まれず、砂礫を多く含む。煤付着。	覆土 2号屋敷50、51と同一個体。

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷出土遺物 (第138図、PL 81・82)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	底部 磁器 茶碗	口 — 高 — 底 (3.9)	有田	1660年代 ～1720年 代	色絵の碗。文様は全て線描きののち、絵付。外面には青、赤線で岩を、緑で植物を絵付。見込には花の文様を施す。素地は白色。	覆土上層
2	口縁部 磁器 飯碗	口 (10.1) 高 — 底 —	肥前系	18C 後	丸形の染付碗。体部は二重網目文。具須は少しくすんで発色。素地は灰白色。	覆土上層
3	口縁部 磁器 飯碗	口 (9.2) 高 — 底 —	肥前系	18C 中葉	丸形の染付碗。素地は灰白色。外面に植物の文様。具須はうすく少しくすんで発色。	
4	口縁部 磁器 飯碗	口 (10.0) 高 — 底 —	肥前系	18C 中 ～末	丸形の染付碗。素地は灰白色。外面に植物の文様。具須はうすく少しくすんで発色。	覆土上層
5	口縁部 磁器 茶碗 ～体部	口 (10.4) 高 — 底 —	肥前系		丸形の染付碗。外面に菊花散らし文。内面は口縁部に1本、腰部に2本の横線。素地は灰白色。具須は少しくすんで発色。	
6	口縁部 磁器 茶碗	口 (9.6) 高 — 底 —	肥前系		丸形の染付碗。外面に菊花散らし文。内面は口縁部に2本の横線。具須は少しくすんで発色。	
7	口縁部 磁器 茶碗 ～底部	口 9.0 高 5.2 底 3.3	肥前系	1810年代	丸形の染付碗。外面は雪の輪文。見込手描き五弁花文。横線は高台と内面口縁部と腰部に各2本。具須は黒ずんだ発色。	
8	口縁部 磁器 茶碗 ～底部	口 9.4 高 5.6 底 2.9	肥前系	1810年代	丸形の染付碗。外面は竹の子掘文。見込手描き五弁花文。素地は白色。具須は黒ずんだ発色。	
9	口縁部 磁器 茶碗	口 (8.2) 高 — 底 —	肥前系	1810年代	丸形の染付碗。外面は竹の子掘文。素地は白色。具須は黒ずんだ発色。口縁部内面に2本の横線。	

## 2. 屋敷跡

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
10	磁器 茶碗	口 (8.6) 高 — 底 —	肥前系	天明以降	丸形の染付碗。 外面は雪持笹。内面は口縁部2本の横線。 呉須は少しくすんで発色。素地は灰白色。	
11	磁器 飯碗	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系か	幕末～明治	端反りの染付碗。呉須は青色に発色。気泡を多く含む。素地は白色。	
12	磁器 茶碗	口 (6.4) 高 — 底 —	肥前系		半筒形染付碗。外面は菊花散らし文。 内面は口縁部2本腰部に1本横線。 呉須はうすく少しくすんで発色。素地は灰白色。	
13	磁器 茶碗	口 (7.0) 高 — 底 —	肥前系	1810年代	半筒形染付碗。外面は矢羽根文。 内面は口縁部2本の横線。呉須はうすく少しくすんで発色。素地は白色。	
14	磁器 猪口	口 7.6 高 5.4 底 5.0	肥前系	18C代	無文。ピンホールが外面に多く見られる。 素地は白色。	
15	磁器 猪口	口 — 高 — 底 4.0	肥前系	18C 中～末	染付の猪口。外面に2本の横線。 呉須はうすく少しくすんで発色。 素地は白色。	覆土上層
16	磁器 猪口	口 (6.6) 高 — 底 —	肥前系	18C後	染付の猪口。外面に雪持笹。 呉須はうすく少しくすんで発色。 素地は白色。	
17	陶器 茶碗	口 — 高 — 底 3.5	瀬戸	18C後	いわゆる「長の」碗。高台無軸で他は灰釉。 粗い貫入が見受けられる。素地は淡黄褐色。	覆土上層
18	陶器 茶碗	口 — 高 — 底 4.2	瀬戸・美濃系		鍔茶碗。炆器質。外面は灰釉。 内面は鉄釉。畳付は無軸。	
19	陶器 茶碗	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C 後～19C	鍔茶碗。内面～外面口縁部は銅緑釉。 外面の体部は胎釉。素地は淡黄褐色。	
20	陶器 片口鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C～19C	胎釉。素地は淡黄褐色。	
21	陶器 片口鉢	口 (17.8) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C～19C	胎釉。素地は淡黄褐色。	
22	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系		捏鉢か。灰釉。素地は淡黄褐色。	
23	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系		捏鉢か。灰釉と銅緑釉。素地は淡黄褐色。	
24	陶器 半胴甕	口 (14.8) 高 — 底 —	瀬戸	18C後	半胴甕。鉄釉。素地は褐色。	
25	陶器 鉢	口 — 高 — 底 12.0	瀬戸・美濃系		灰釉。大形の鉢。内面には重ね焼きのために釉が1部拭われる。素地は灰白色。	
26	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18Cか	内外面に長石釉。	
27	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —	肥前系唐津	17C 後～18C中	内面に象目による白土の印花文。 白化粧土ののち、透明釉。	覆土上層
28	陶器 盤	口 — 高 — 底 —	南宋か	13C	体部外面及び内面に緑釉を施す。 内面に陰刻による文様を描出。素地は淡黄褐色。	中世
29	陶器 徳利	口 — 高 — 底 5.3			底部は削り出し。内外面に鉄釉。炆器質。	

V 江戸時代以降の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
30	陶器鉢 口縁部片	口 (31.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	内外面に鉄(錆)釉。	
31	陶器鉢 口縁部片	口 (31.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	内外面に鉄(錆)釉。櫛目の単位は12本。	
32	陶器鉢 底部	口 — 高 — 底 (13.0)	瀬戸・美濃系	17Cか	内外面に鉄(錆)釉。 底部に回転糸切痕(右回転)。	
33	陶器鉢 体部~底部	口 — 高 — 底 (13.0)	瀬戸・美濃系	17Cか	内外面に鉄(錆)釉。 底部に回転糸切痕(右回転)。	
34	軟質陶器焙烙 口縁部~底部	口 (36.0) 高 3.3 底 (33.6)	不明		体部外面に稜を持つ。内耳部分は口唇部より出ている。酸化炎焼成。	外面煤。
35	軟質陶器焙烙 体部~底部	口 — 高 — 底 (28.8)	不明		内耳部分は体部と底部の接する位置より若干底部側より出ている。酸化炎焼成。	外面煤。
36	軟質陶器焙烙 口縁部片	口 — 高 3.4 底 —	不明		内部外面に稜。酸化炎焼成。	外面に煤。覆土上層
37	軟質陶器火鉢 口縁部~体部	口 — 高 — 底 —	不明		外面に叩き目と沈線。 還元炎に近い酸化炎焼成。	38と同一か。
38	軟質陶器火鉢 胴部~底部	口 — 高 — 底 (12.8)	不明		外面に叩き目と沈線。 還元炎に近い酸化炎焼成。 底部に円形の粘土貼付による足(単位不明)。	37と同一か。
39	土製品七厘中敷 1/4残	径 — 厚 1.1	不明		裏面には指頭状の圧痕が見受けられる。 酸化炎焼成。	
40	土製品恵比寿人形	高 —	不明	18C後~19C前	型押整形で内面には指頭圧痕がみられる。 酸化炎焼成。	

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴	備考
41	砥石	長 — 幅 3.3 厚 1.9 重 87.0	下部を欠損。側面に櫛歯状工具痕がみられることから 18C後~19C前半。	流紋岩
42	砥石か	長 5.8 幅 1.8 厚 1.2 重 25.0	上面と表面の2面が丁寧に研磨されている。	滑石片岩

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
43	銭 寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	
44	銭 寛永通宝	厚 0.12 径 2.3	銅	古寛永。完形。方孔。銭背無文。	
45	銭 寛永通宝	厚 0.1 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	
46	銭 寛永通宝	厚 0.09 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	
47	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.4	銅	古寛永。完形。方孔。銭背無文。	
48	煙管雁首	長 4.3 径 1.0 火皿径 1.3 重 7.1	銅	火皿の径が小さい。脂返しはあまり湾曲しない。	
49	不明	長 — 重 20.2	鉄	上方の縁を折り曲げている。 鉄製品。両端を欠損。	
50	不明	長 — 重 37.5	鉄	両端を欠損。折り曲げている。	
51	不明	長 — 重 11.3	鉄	片端を欠損。	
52	鏝	長 10.0 重 15.0	鉄	断面形が方形を呈する。ねじれている。 完形。	



## 2. 屋敷跡

## 内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷 1 号井戸出土遺物 (第140~143図、PL 80~83)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器茶碗	口縁部 口 (11.2) 高 — 底 —	肥前系	18C 後	丸形の染付碗。外面に丸文。素地は灰白色で呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土 1号屋敷覆土上層の遺物と接合。
2	磁器茶碗	口縁部 ~底部 口 (8.6) 高 5.1 底 (3.4)	肥前系	天明~ 1810年代	丸形の染付碗。外面は竹の子掘文。見込手描き五弁花文。素地は白色。呉須は黒ずんだ発色。	覆土 1号屋敷内の遺物と接合。
3	磁器茶碗	口縁部 口 (8.4) 高 — 底 —	肥前系	天明~ 1810年代	丸形の染付碗。外面に竹(竹の子掘)文。口縁部内面に横線。素地は灰白色で呉須は少しくすんで発色。	覆土
4	磁器茶碗	口縁部~ 底部1/2 口 8.6 高 4.5 底 3.6	肥前系	天明~ 1810年代	丸形の染付碗。外面に竹(竹の子掘)文。内面は口縁部と腰部に横線。見込手描き五弁花文。素地は白色で呉須は少しくすんで発色。	覆土
5	磁器茶碗	口縁部 ~底部 口 8.6 高 5.0 底 3.5	肥前系	天明~ 1810年代	丸形の染付碗。外面は竹の子掘文。見込手描き五弁花文。素地は白色。呉須は黒ずんだ発色。	覆土
6	磁器茶碗	口縁部 ~底部1/2 口 9.6 高 5.3 底 3.9	肥前系	1820年代 ~幕末	端反りの染付碗。外面に格子目文。素地は灰白色で呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
7	磁器飯碗	口縁部 ~底部1/2 口 10.9 高 5.0 底 3.9		19C 末以 降	コバルトによる発色で型紙絵付による松竹梅文。	覆土
8	磁器茶碗	体部~ 底部 口 — 高 — 底 (4.3)	肥前系	天明~ 1810年代	半筒形の染付碗。外面は矢羽根文。見込手描き五弁花文。素地白色で呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
9	磁器茶碗	口縁部 ~体部片 口 7.0 高 — 底 —	肥前系		半筒形の染付碗。外面は雪の輪文。素地は白色で呉須は黒ずんだ発色。	覆土 4号井戸覆土の遺物と接合。
10	磁器茶碗	口縁部 ~体部片 口 (6.8) 高 — 底 —	肥前系	天明~ 1820年代	半筒形の染付碗。外面は矢羽根文。内面は口縁部に横線2本。素地は白色、呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
11	磁器猪口	口縁部 ~底部 口 — 高 — 底 (6.0)	肥前系	19C 前~ 幕末	染付の猪口。外面及び内面口縁部に格子目文。素地は灰白色で呉須は青色に発色。	覆土
12	陶器茶碗	完形 口 8.4 高 5.4 底 3.5	瀬戸・美濃系	18C 後	鉄釉の茶碗。釉は厚く、ピンホールがある。素地は淡黄褐色。	覆土
13	陶器茶碗	口縁部 ~底部 口 (8.4) 高 5.2 底 3.5	瀬戸・美濃系	18C 後~ 19C 前	鉄釉の茶碗。釉は口縁部ほど厚くはない。ピンホールがある。素地は灰褐色。	覆土 1号屋敷内の遺物と接合。
14	陶器皿	口縁部 ~底部 口 (15.0) 高 3.1 底 (10.4)	瀬戸・美濃系	17C 後~ 18C 前	灰釉の皿。	覆土
15	陶器片口鉢か?	口縁部 ~底部 口 16.8 高 8.0 底 (7.4)		18C 後	灰釉。内面にピン痕。素地は褐色。	覆土 4号井戸覆土の遺物と接合。
16	陶器片口鉢	口縁部 ~底部 口 (17.5) 高 8.0 底 8.8	瀬戸・美濃系	18C 以降	鉛釉の片口鉢。内面にピン痕が3ヶ所。素地は淡黄褐色。	
17	陶器灯明皿	口縁部 ~底部 口 7.4 高 1.2 底 3.3	瀬戸・美濃系		灯明皿の上皿。外面に重ね焼きの痕。鉄釉。	
18	陶器灯明皿	口縁部 ~底部 口 (10.1) 高 2.1 底 4.8	瀬戸・美濃系		灯明皿の下皿。内外面に重ね焼きの痕。鉄釉。	
19	陶器徳利	体部~ 底部 口 — 高 — 底 (6.8)	瀬戸・美濃系か?	18C 後~ 19C 前	ヘコカン徳利。外面に鉄釉。内面無釉。	

V 江戸時代以降の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
20	陶器鉢 口縁部～底部	口 31.0 高 — 底 —		18C後～ 19C前	灰釉と銅緑釉を施す捏鉢。 素地は灰白色。粗い貫入。	覆土 8号溝、31号土坑。 1号屋敷内の遺物と接合。
21	陶器鉢 口縁部～底部	口 31.0 高 — 底 —		18C後～ 19C前	灰釉と銅緑釉を施す捏鉢。 素地は灰白色。粗い貫入。	覆土 4号井戸と1号屋敷内の 遺物と接合。
22	陶器鉢 底部	口 — 高 — 底 (15.9)		18C後～ 19C前	内面に灰白色を施す。重ね焼きのために釉が1部拭 われている。素地は灰白色。	覆土 4号井戸の遺物と接合。
23	陶器鉢 体部～底部	口 — 高 — 底 16.2		18C後～ 19C前	内面に灰白色を施す。重ね焼きのために釉が1部拭 われている。素地は灰白色。底部に露痕。	覆土 3号土坑の遺物と接合。
24	陶器鉢 体部片	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美 濃系	18C	内外面に鉄釉。櫛目の単位は12本。 素地は淡黄褐色。	覆土 1号屋敷内の遺物と接合。
25	陶器鉢 口縁部～底部	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美 濃系		内外面に鉄釉。櫛目の単位は13本。 素地は淡黄褐色。	覆土
26	陶器鉢 体部片	口 — 高 — 底 —	丹波系	17C後～ 18C初	焼締摺鉢の体部。外面に指頭圧痕。 櫛目の単位は不明。	覆土
27	軟質陶器 火鉢 口縁部～底部	口 24.4 高 18.3 底 23.0	不明	19C前後	外面に煤附着。円筒形を呈する。外面に叩き目のよ うな痕跡をもつが、陰刻の横線間及び口縁部は磨消 される。	覆土 4号溝、18号土坑。 1号屋敷内の遺物と接合。
28	土製品 羽口	長 — 径 5.5	不明		発泡する箇所はない。還元炎焼成。	覆土
29	軟質陶器 焙烙 口縁部～底部	口 (36.2) 高 4.9 底 (32.0)	不明		平底の焙烙。還元炎焼成。	覆土
30	軟質陶器 焙烙 口縁部～底部	口 (36.6) 高 — 底 (36.0)	不明		底面が曲面を呈する。外面に稜。酸化炎焼成。	覆土
31	軟質陶器 焙烙 口縁部～底部	口 (37.5) 高 — 底 (36.8)	不明		底面が曲面を呈する。外面に稜。酸化炎焼成。	
32	軟質陶器 焙烙 口縁部～底部	口 (36.8) 高 3.7 底 (36.6)	不明		平底の焙烙。還元炎焼成。	

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
33	硯	巾 5.2 高 1.3	塚以上を欠損する。中央部が磨耗によりくぼむ。	流紋岩 覆土
34	砥石	長 — 幅 6.0 厚 6.1 重 600	塚以上を欠損。部分的に外面の剝離がある。 四面が研ぎ面。1面に使用時の線条痕。	砂岩 覆土
35	石白	径 (36.0) 厚 5.9 重 4800	粉挽き白の下白、6分画で10溝。%を欠損。	安山岩 覆土 孔径 (3.5)
36	石白	径 34.0 厚 12.6 重 9900	粉挽き白の下白。6分画で7溝。%を欠損。	安山岩 覆土 孔径 (3.2)
37	石白	径 36.0 厚 11.1 重 17600	粉挽き白の下白。目なしで下面は上げ底状を呈す。 断面形状は片側に向かって傾斜し、左右対称をなさない。	砂岩 覆土 孔径 (3.7)
38	墓石	長 — 幅 10.8 厚 8.0 重 2000	地藏の石仏。顔と足以下を欠損する。 風化が著しい。	牛伏砂岩
39	墓石	長 48.8 幅 27.3 厚 17.5 重 20500	石仏。風化がほとんどない。刻字及び髪部分などに墨が残存。 裏面に工具痕。「文化十一戊十月十九日 幻空童子 俗名浪吉」	砂岩
40	墓石	長 56.5 幅 24.9 厚 16.6 重 49000	角柱状の墓石。底面と裏面に工具痕。 「大安秋光居士 文政五年亥八月朔日」	砂岩 文政五年か?

## 2. 屋敷跡

## 金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
41	煙管	長 13.3 径 1.1 火皿径1.0 吸口径0.6	銅	火皿の径が小さい。両側に肩をもち、口唇部にふくらみをもつ。羅字部分(金属)の断面が楕円形。	覆土
42	不明	長 ー 重 24.0	鉄	両端を欠損する。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷4号井戸出土遺物(第144図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	ほぼ完形 磁器 飯碗	口 9.0 高 4.3 底 3.6	肥前系	18C前～ 中葉	丸形の染付碗。外面にコンニャク判による蔦と井桁桐の葉文。素地は白色で呉須は少しくすんで発色。内面に箸の使用痕。	覆土
2	口縁部 ～体部 磁器 茶碗	口 (7.0) 高 ー 底 ー	瀬戸・美濃系	幕末文化 文政以降	染付の碗。外面に草花文。素地は白色。呉須は少しくすんで発色。	覆土
3	口縁部 ～底部 磁器 茶碗	口 (8.2) 高 5.5 底 (4.4)	肥前系	天明～ 1810年代	丸形の染付碗。外面は菊花散らし文。見込は手描き五弁花文。素地は白色で呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
4	体部～底 部 磁器 猪口	口 ー 高 ー 底 (2.9)	肥前系	18C後	染付の猪口。素地は灰白色で、呉須は黒ずんだ発色。	覆土
5	口縁部 ～体部片 磁器 鉢	口 ー 高 ー 底 ー	瀬戸・美濃系	18C前～ 19C前	灰釉を施す。炆器質。	覆土
6	口縁部 ～底部 磁器 鉢	口 (12.6) 高 5.9 底 4.2	瀬戸・美濃系か	明治～大 正	コバルトによる発色。型紙絵付による鶴亀文。見込は松竹梅。素地は白色。	覆土
7	体部片 磁器 鉢か?	口 ー 高 ー 底 ー	肥前系	1690年代 ～18C前	染付の鉢。内外面に唐草文。素地は白色で、呉須は少しくすんで発色。	覆土
8	口縁部 ～底部 軟質陶器 焙烙	口 ー 高 ー 底 ー	不明		底面が曲面を呈する。外面に稜。酸化炎焼成。	覆土
9	口縁部 ～底部 軟質陶器 焙烙	口 ー 高 4.8 底 ー	不明		平底の焙烙。外面は体部と底部の接合部に稜。還元炎焼成に近い。	覆土
10	口縁部 ～底部 軟質陶器 焙烙	口 ー 高 4.5 底 ー	不明		平底の焙烙。酸化炎焼成。	覆土

## 石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
11	砥石	長 ー 幅 3.4 厚 2.0 重 55.0	上、下を欠損。側面に平タガネの痕跡がのこる。	流紋岩

## 金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
12	鎌	長 14.7 幅 3.2 重 145	鉄	桑切鎌か。片刃で、先端を欠く。木質が残存。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷2号建物出土遺物(第146図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	体部片 磁器 茶碗	口 ー 高 ー 底 ー	肥前系	18C中～ 末	丸形の染付碗。素地は灰白色で呉須は黒ずんだ発色。	pit 5 覆土 2 次的に被熱。

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷2号石垣出土遺物(第148図)

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
1	角柱石	長さ 40.4 幅 16.8 厚 10.2 重 11000	墓石の基礎等に使われた可能性が高い。全面に加工痕。	砂岩

内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷1号・2号土坑出土遺物(第150図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部片	口 — 高 — 底 —	肥前系	18C 後 ~19C 前	丸形の染付碗。外面は植物文。内面に2本の横線。焼成不明。	2号土坑
2	口縁部片	口 — 高 — 底 —	肥前系	18C	紅皿。素地は白色。	2号土坑

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
3	釘	長さ — 幅 0.3 重 1.5	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。	2号土坑
4	錢 寛永通宝	厚 0.13 径 2.3	銅	ㄥ欠損。方孔。錢背無文。	2号土坑
5	錢 寛永通宝	厚 0.09 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	1号土坑

内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷3号土坑出土遺物(第151図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 ~底部	口 (8.6) 高 5.6 底 3.4	肥前系	天明~ 1810年代	染付の丸碗。外面に雪の輪に竹文。見込は手描き五弁花文。素地は白色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	漆継の痕跡。

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
2	不明	重 15.0	鉄	縁辺すべてが欠損。	

内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷4号土坑出土遺物(第152図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	体部~底部	口 — 高 — 底 16.8	不明		外面に叩き目に似た痕跡。脚が剥がれている。酸化炎焼成。	

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
2	砥石	長さ — 幅 3.5 厚 2.5 重 104	ㄥ程度を欠損。側面に櫛歯状工具痕がみられることから18C後~19C前半。	流紋岩

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
3	不明	長さ — 重 9.4	鉄		片端を欠損する。

内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷6・24号土坑出土遺物(第153図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁~底部	口 9.0 高 3.9 底 3.0	肥前系	1700~1780	丸形の染付碗。外面に二重網目文。素地は白色で、呉須はうすく少しくすんで発色。生掛け。	24号土坑、5号溝 1号屋敷内出土遺物と接合。

## 2. 屋敷跡

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷8号土坑出土遺物(第155図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	体部	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C後	外面に飴釉。 素地は淡黄褐色。	5号溝出土遺物と接合。

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷15号土坑出土遺物(第158図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器飯碗	口 — 高 — 底 —	肥前系	18C後	丸形の染付碗。外面に草花文か。気泡を多く含む。素地は灰白色で、具須は少しくすんで発色。	覆土
2	陶器小盃	口 6.2 高 4.0 底 3.0	瀬戸・美濃系	18C	内外面に灰釉。付高台で高台無軸だが一部軸が残存。素地灰褐色。	

## 金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
3	銭 寛永通宝	厚 0.10 径 2.3	銅	古寛永。方孔。銭背無文。	

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷17号土坑出土遺物(第159図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器茶碗	口 縁部 (6.8) ~底部 高 4.4 底 (6.8)	肥前系	天明~1810年代	半筒形染付碗。外面は菊花散らし文。気泡を多く含む。素地は灰白色で、具須は少しくすんで発色。	1号屋敷内出土遺物と接合。
2	軟質陶器焙烙	口 縁部片 — 高 — 底 —	不明		底面が曲面を呈する。外面に稜。	覆土
3	陶器灯明皿	口 縁部 10.0 ~底部 高 2.4 底 4.8	瀬戸・美濃系		灯明皿の下皿。鉄釉。素地は灰白色。外面に重ね焼きの痕。	
4	土人形武士	1/2	不明		形押成形で内面には指頭圧痕がみられる。酸化炎焼成。	

## 石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
5	石臼	孔径 3.6 厚 13.6 重 5800	粉挽き臼の上臼。6分画で7~8本の溝。供給口から「ものくばり」の溝が掘られる。上縁はしっかりとした稜。	安山岩

## 金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
6	鋸	重 6.0	鉄	片側の先端を欠損。もう一方の先端は曲がっている。	
7	銭 寛永通宝	厚 0.18 径 2.3	銅	1/2以上を欠損。方孔。銭背無文。	
8	銭 寛永通宝	厚 0.12 径 2.3	銅	1/2を欠損。方孔。銭背無文。	
9	釘	長 — 幅 0.4 重 6.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部と脚部を欠損。木質が残存。	
10	釘	長 — 幅 0.2 重 1.5	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。頭部は遺存状態が悪く詳細は不明。	

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷 18 号・34 号土坑出土遺物 (第161図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器 茶碗	口 (7.2) 高 — 底 —	肥前系	18C	丸形の碗。ピンホールあり。 素地は灰白色。	18号土坑
2	陶器 茶碗	口 (8.2) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C~19C	鎧茶碗。外面口縁部~内面鉄釉。 外面の体部は灰釉。炻器質。	18号土坑
3	軟質陶器 焙烙	口 — 高 — 底 —	不明		補修孔(孔径0.4)が残存。外面に煤付着。 還元炎焼成。	18号土坑
4	土瓶急須 のみ		不明		土瓶、急須類の注ぎ口か。先端部の孔径は0.4cm。 混入物のない素地で酸化炎焼成。	18号土坑
6	磁器 飯碗	口 10.2 高 4.3 底 3.8	肥前系	18C後	丸形の染付碗。外面に若松文。素地は灰白色で、 呉須は黒ずんだ発色。生掛け。	34号土坑 土坑内及び土坑掘り方と 4号溝の遺物と接合。

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
5	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永か。方孔。銭背無文。	18号土坑

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
7	砥石	長 — 幅 3.6 厚 10.6 重 3250	断面長方形。研ぎ面は一面で、他の部分には加工痕。	34号土坑 砂岩 覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷 19 号土坑出土遺物 (第162図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —		18C~19C前	捏鉢か。灰釉を施し、細かな貫入がみられる。 素地は褐色。	
2	陶器 茶碗	口 — 高 — 底 4.8	瀬戸・美濃系	18C~19C前	飴釉を施す。炻器質。	

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
3	砥石	長 — 幅 10.1 厚 — 重 305	大半を欠損し、遺存面が少ない。	砂岩

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷 29 号土坑出土遺物 (第167図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	土製品 羽口	長 — 径 5.5	不明		先端に近い部分に発泡がみられる。 刻字「□万名口」	

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号屋敷 31 号土坑出土遺物 (第169図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器 茶碗	口 (7.8) 高 5.0 底 3.2	肥前系	18C後 ~19C前	丸形の染付碗。外面に山水文。 素地は灰白色で、呉須は黒ずんだ発色。	1号屋敷内出土遺物と接合。
2	陶器 急須	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系		注ぎ口の径は0.4cm。内外面に鉄釉。耳の一部が残存する。	
3	陶器 鉢	口 — 高 — 底 —	不明		捏鉢の口縁部。内外面に透明釉。 細かな貫入がみられる。	

## 2. 屋敷跡

## 石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
4	石白	径 — 孔径 3.9 厚 12.6 重 18200	粉挽き白の下白。6分画で10溝。	安山岩
5	不明	厚 22.6 重 9800	竈に使用されたか。2次的に被熱し、煤付着。 内外面に加工痕。	砂岩
6	砥石	幅 26.5 厚 22.9 重17500.0	研ぎ面が2面。太めの線条痕。	砂岩

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷38号土坑出土遺物(第170図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	頭部のみ 土人形 唐子人形 残存		不明		型押成形を接合。中は中空。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷80号土坑出土遺物(第172図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 磁器 茶碗 ~体部	口 — 高 — 底 —	肥前系	18C後	丸形の茶碗。外面に矢羽根文。 素地は灰白色で呉須は少しくすんで発色。焼成不良。	覆土
2	注ぎ口 陶器 片口鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	胎釉。素地は淡黄褐色。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷3号溝出土遺物(第175図、PL 84)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 磁器 茶碗 ~体部	口 — 高 — 底 —	肥前系	18C後~ 19初	丸形の染付碗。外面に船の文様。 素地は灰白色で呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
2	軟質陶器 焙烙	口縁部 ~底部 高 5.1 底 —	不明		補修孔(径0.3)が残存。 還元炎焼成。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷7号溝出土遺物(第175図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・製作技法の特徴	備考
1	部分 瓦	厚 1.6	不明		棧瓦の破片。	覆土 1号屋敷には伴わない。

## 内匠諏訪前遺跡A区1号屋敷12号溝出土遺物(第175図)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	完形 磁器 茶碗	口 10.0 高 5.1 底 4.8	肥前・波佐見	18C前~ 中	丸形の染付碗。外面はコンニャク判による菊花文。 高台内側に渦福。素地は灰白色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土

V 江戸時代以降の遺構と遺物

3号屋敷

位置 C73III54他 写真 PL74・85

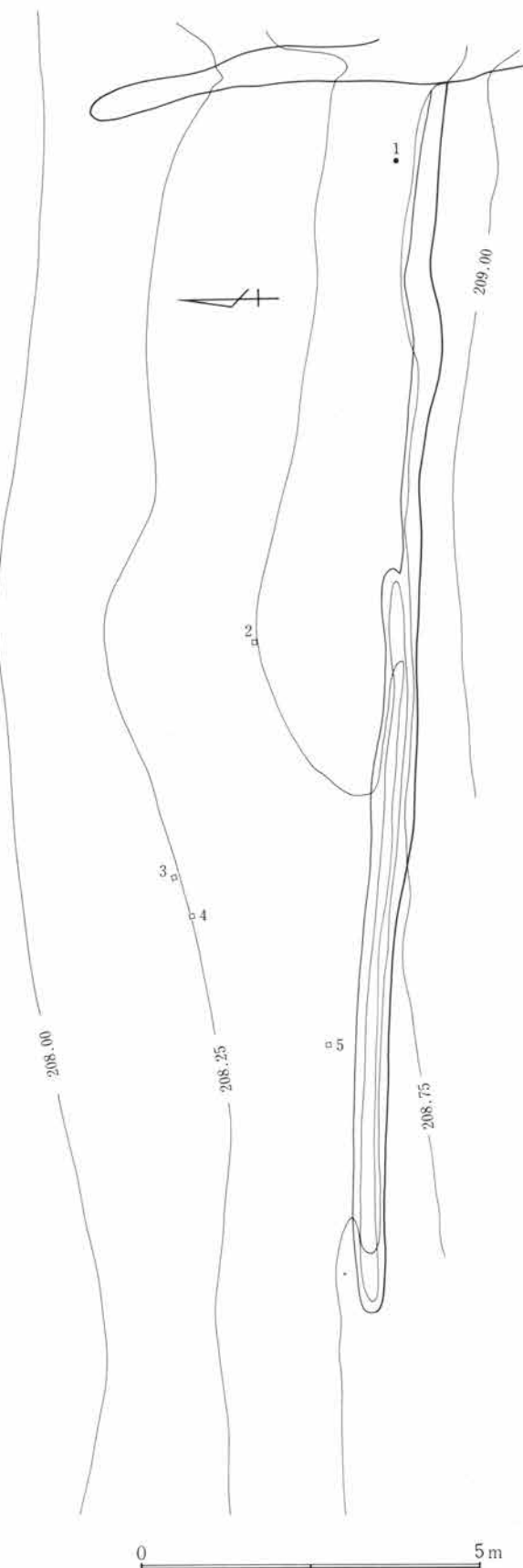
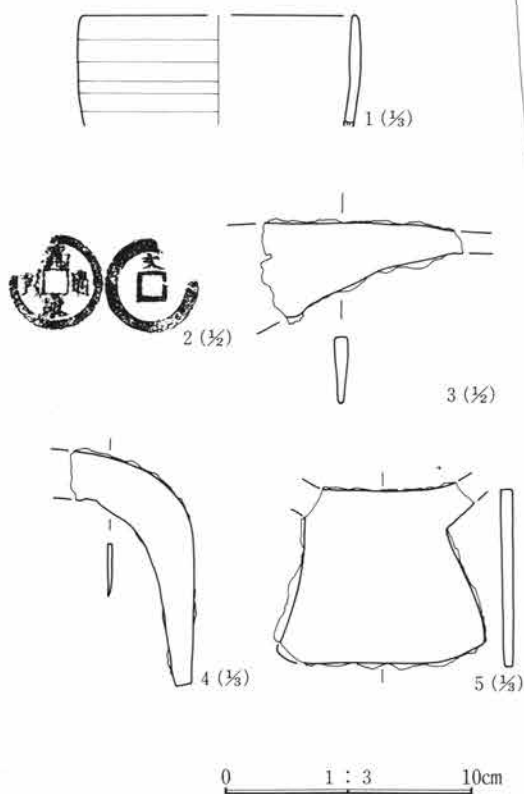
方位 N-5°-E

2号屋敷の西側に位置し、北側に傾斜する場所に立地する。検出面は基盤の粘土層である。

南側を切り土して段に沿って長さ10.8mの溝が掘られていた。北側に向かってなだらかに傾斜し、盛土による平坦面の造成は行われていない。また、切り土及び溝以外の施設は検出できなかった。調査当初は屋敷地として取り扱ったが、上記の検出状況などから屋敷地である可能性は弱い。

出土遺物は、図化したもの以外に磁器碗の小片が8点、陶器碗の小片が10点、播鉢小片1点、焙烙1点が出土した。出土遺物の年代は18Cを中心としているが、一部明治以降の磁器も存在する。

(遺物観察表：246頁)



第176図 3号屋敷と出土遺物

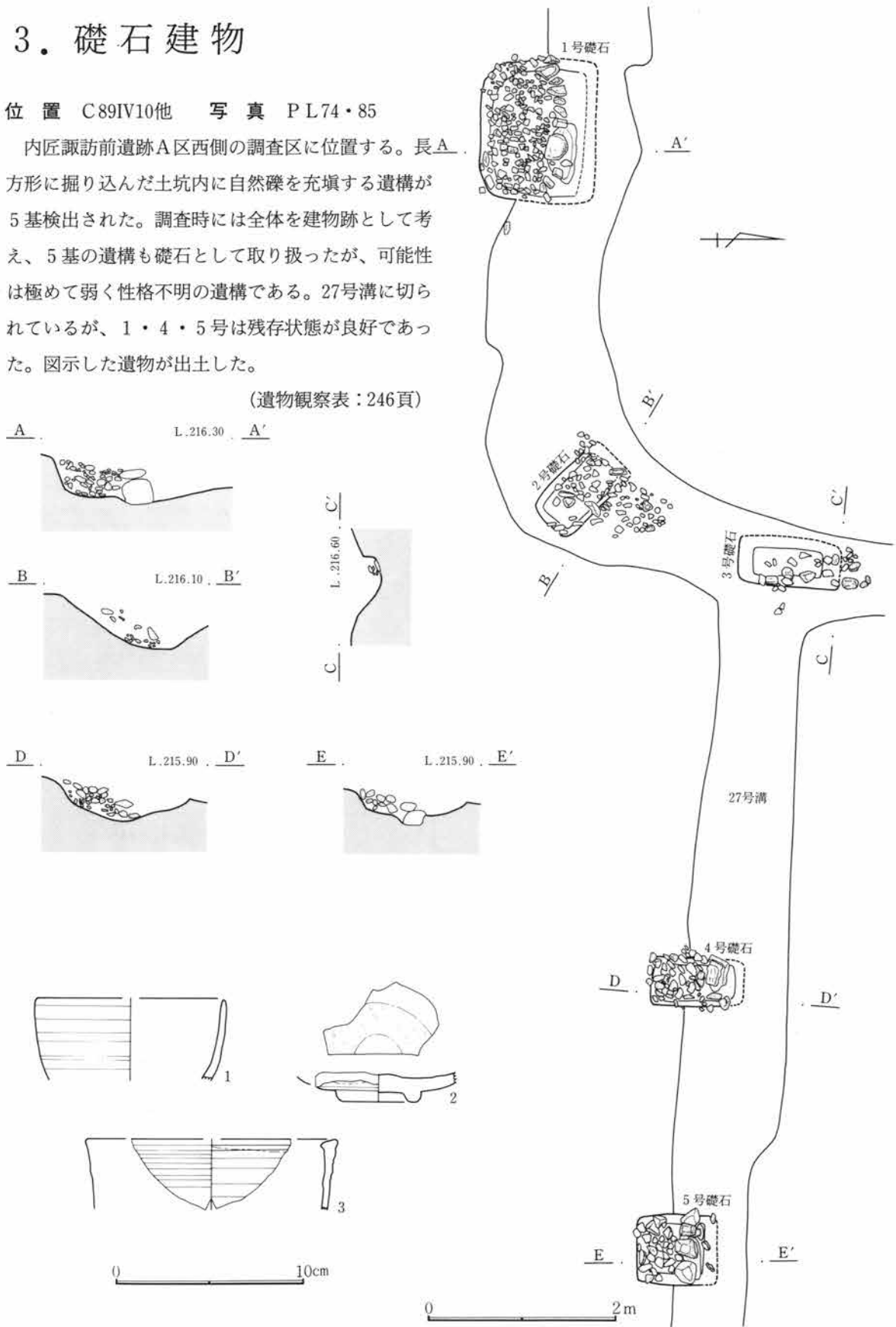


### 3. 礎石建物

位置 C89IV10他 写真 PL74・85

内匠諏訪前遺跡A区西側の調査区に位置する。長A方形に掘り込んだ土坑内に自然礫を充填する遺構が5基検出された。調査時には全体を建物跡として考え、5基の遺構も礎石として取り扱ったが、可能性は極めて弱く性格不明の遺構である。27号溝に切られているが、1・4・5号は残存状態が良好であった。図示した遺物が出土した。

(遺物観察表：246頁)



第177図 礎石建物と出土遺物

## 4. 墓 塚

内匠諏訪前遺跡A区で13基と内匠日影周地遺跡A区で1基検出された。

### 内匠諏訪前遺跡A区

13基の墓塚は2号屋敷の北西部分でかたまって検出されている(第121図参照)。重機を使用した改葬が行われていたために、残存状態は極めて悪かった。2号屋敷との時間的な関係は、上記の理由から発掘調査では明らかにしえなかったが、路線外に移築された墓石10基の中で建立年代が1番古いもので「天保4巳」=1833年(癸巳)の年号が刻まれていることから天明3年(1783年)以前に消失した2号屋敷とは同時期に存在してなかったと考えられよう。また、調査時点では既に改葬が行われていたことから調査した墓塚と移築された墓石との対応関係もつかむことはできなかった。13基の墓塚から出土した遺物も改葬時の攪乱をうけている。また、遺存状態が悪かった銭・釘類については図化できなかったものもある。

(遺物観察表:246~249頁)

### 内匠日影周地遺跡A区

馬の墓塚が1基検出された。

#### 内匠諏訪前遺跡A区1号墓塚

位置 C76III49 写真 PL74・85

癒着した寛永通宝4枚・釘(棺桶に使用)31本・銅線1本が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.90×0.88)×0.24mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区2号墓塚

位置 C75III49 写真 PL74・85

寛永通宝10枚・文久永宝1枚が出土した。2は方孔を2次的に円孔にしている。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.52×0.66)×0.24mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区3号墓塚

位置 C75III49 写真 PL74・85

腐食し癒着した寛永通宝9枚・釘(棺桶に使用)

40本・煙管1対・ガラス小玉(径3mmで青16・白1)が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.90×0.72)×0.92mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区4号墓塚

位置 C74III49 写真 PL74・85

寛永通宝4枚・磁器茶碗1片が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.88×0.64)×0.40mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区5号墓塚

位置 C74III49 写真 PL74・85

寛永通宝6枚・釘(棺桶に使用)40本・磁器碗小片が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.88×0.84)×0.61mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区6号墓塚

位置 C73III49 写真 PL74・85

癒着した寛永通宝6枚・磁器茶碗1片が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.88×0.84)×0.61mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区7号墓塚

位置 C73III49 写真 PL74・85

癒着した寛永通宝6枚・煙管1対が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.64×0.78)×0.22mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区8号墓塚

位置 C73III49 写真 PL74・85

癒着した寛永通宝6枚・煙管1対・釘(棺桶に使用)15本が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.78×0.74)×0.24mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区9号墓塚

位置 C75III48 写真 PL74

遺物の出土はなかった。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.76×1.08)×0.50mである。

#### 内匠諏訪前遺跡A区10号墓塚

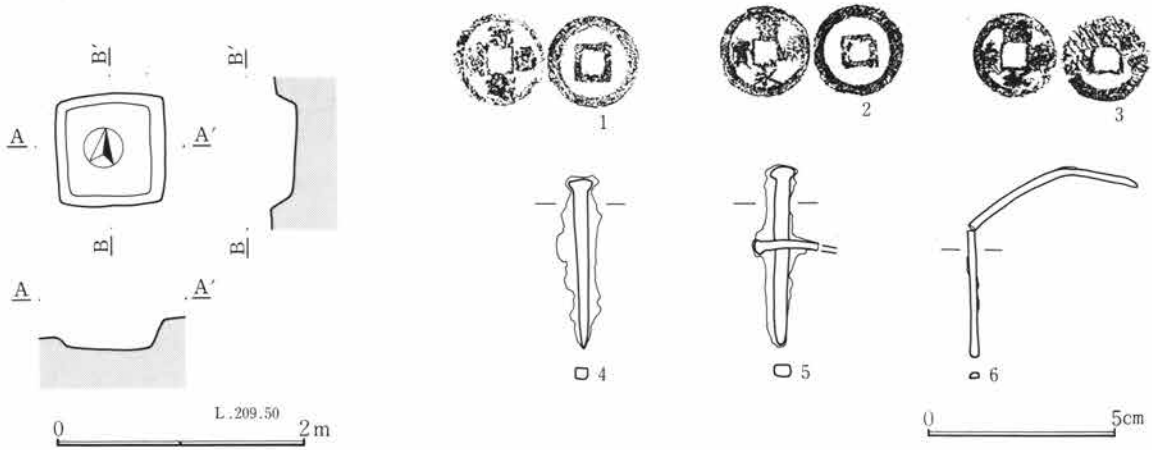
位置 C74III48 写真 PL74

釘(棺桶に使用)11本が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、(0.90×0.88)×0.53mである。

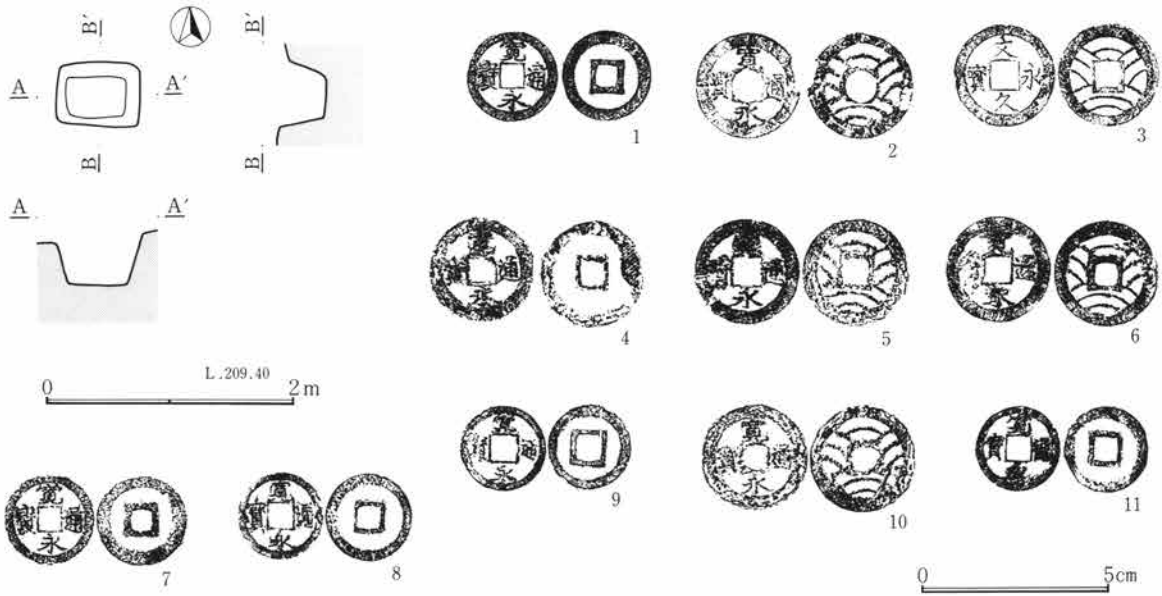
#### 内匠諏訪前遺跡A区11号墓塚

位置 C73III47 写真 PL74

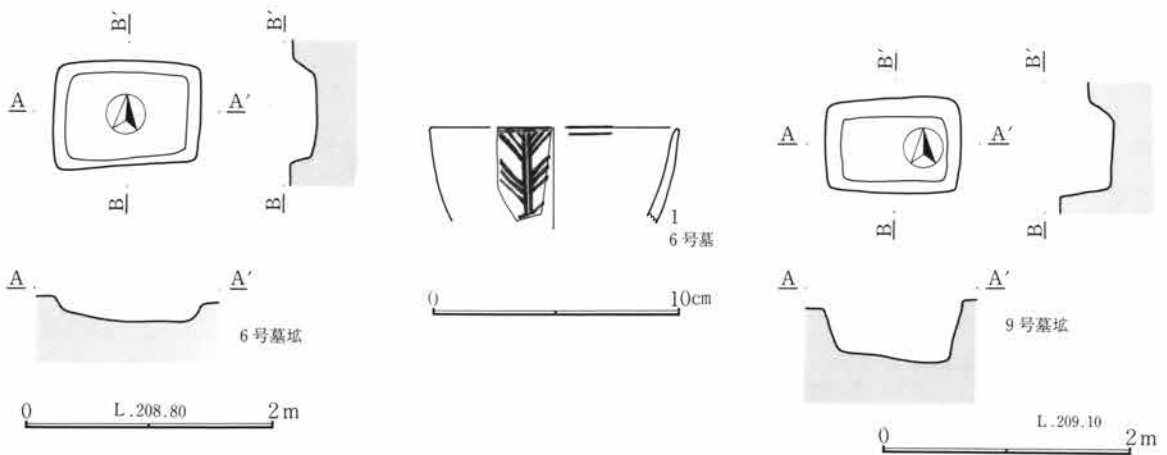
4. 墓 塚



第178図 諏A 1号墓塚と出土遺物

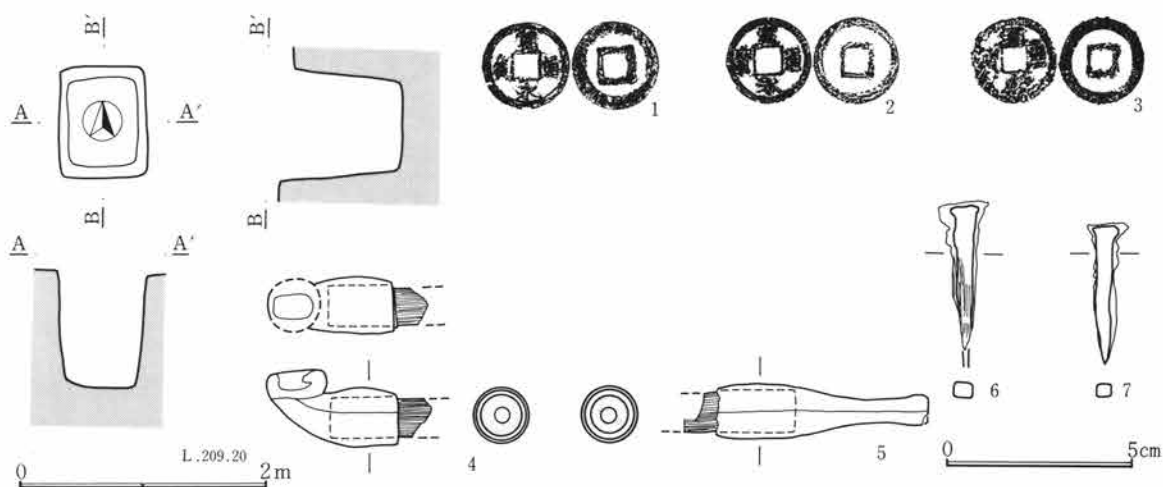


第179図 諏A 2号墓塚と出土遺物

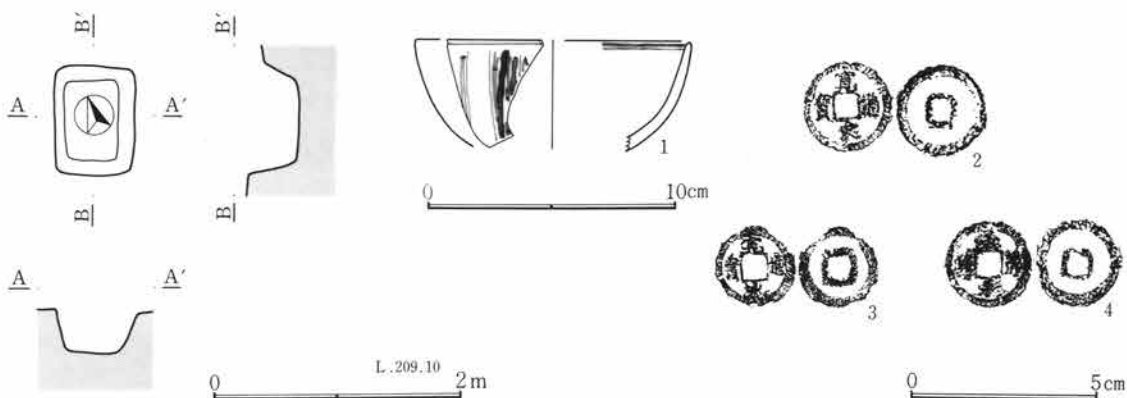


第180図 諏A 6・9号墓塚出土遺物

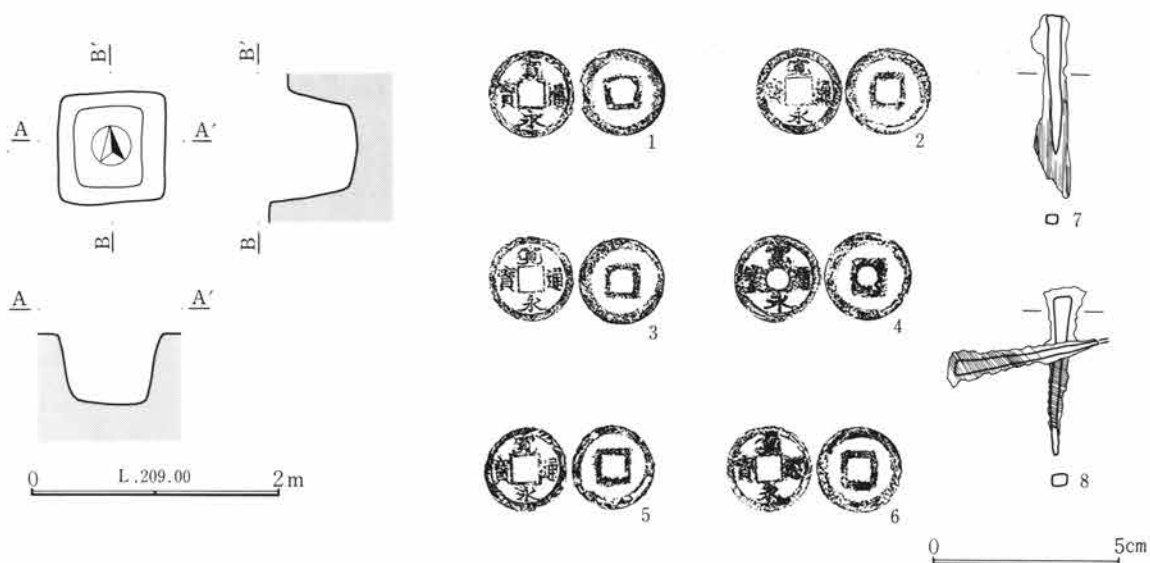
V 江戸時代以降の遺構と遺物



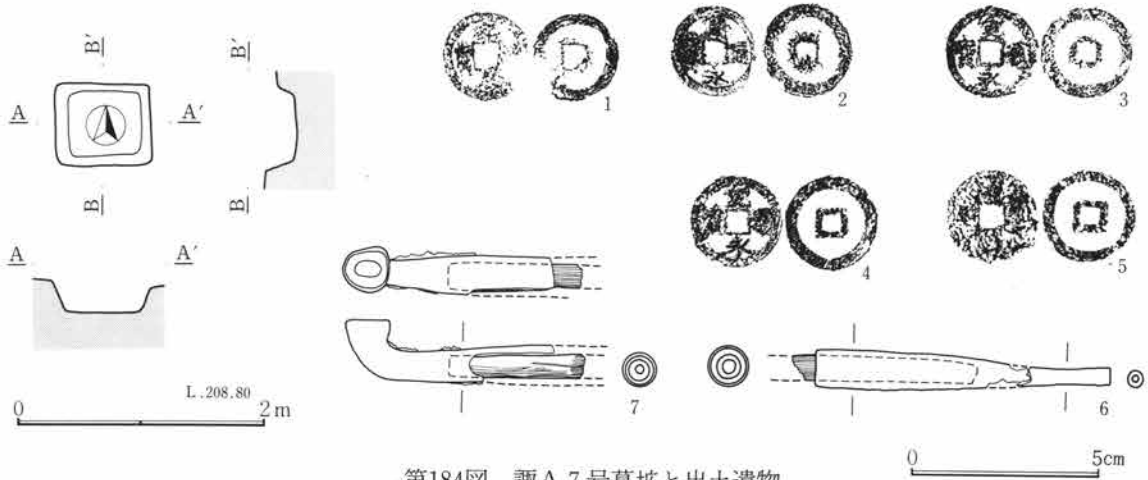
第181図 諏A 3号墓塚と出土遺物



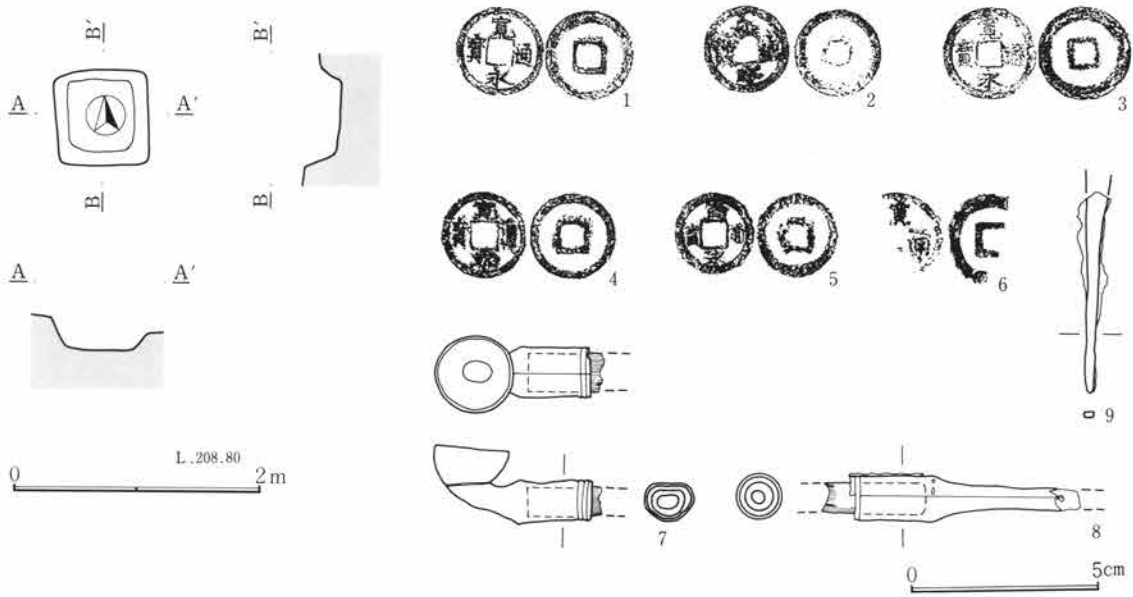
第182図 諏A 4号墓塚と出土遺物



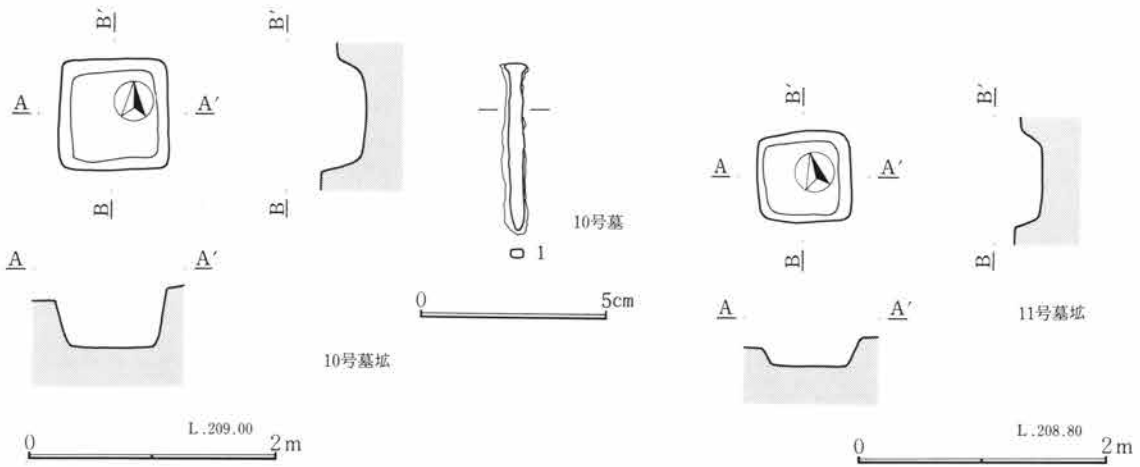
第183図 諏A 5号墓塚と出土遺物



第184図 諏A 7号墓塚と出土遺物

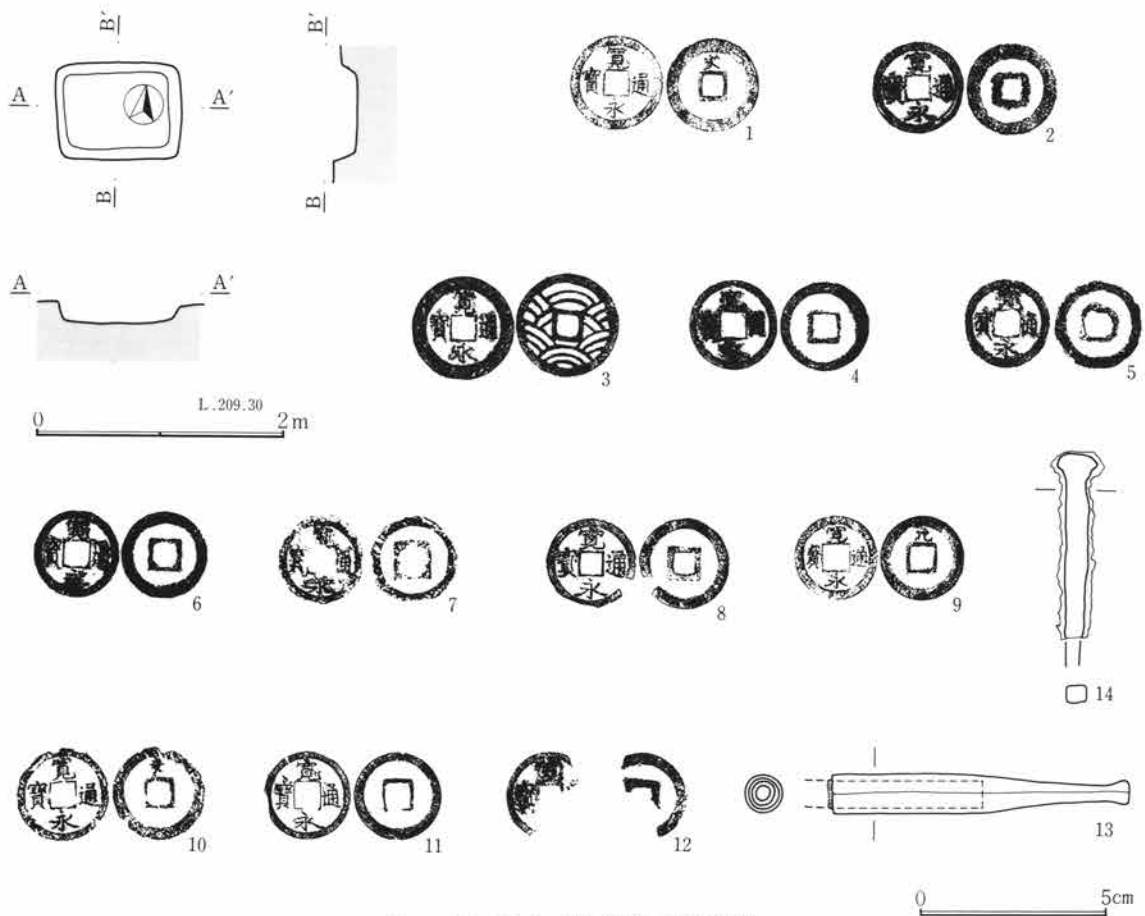


第185図 諏A 8号墓塚と出土遺物

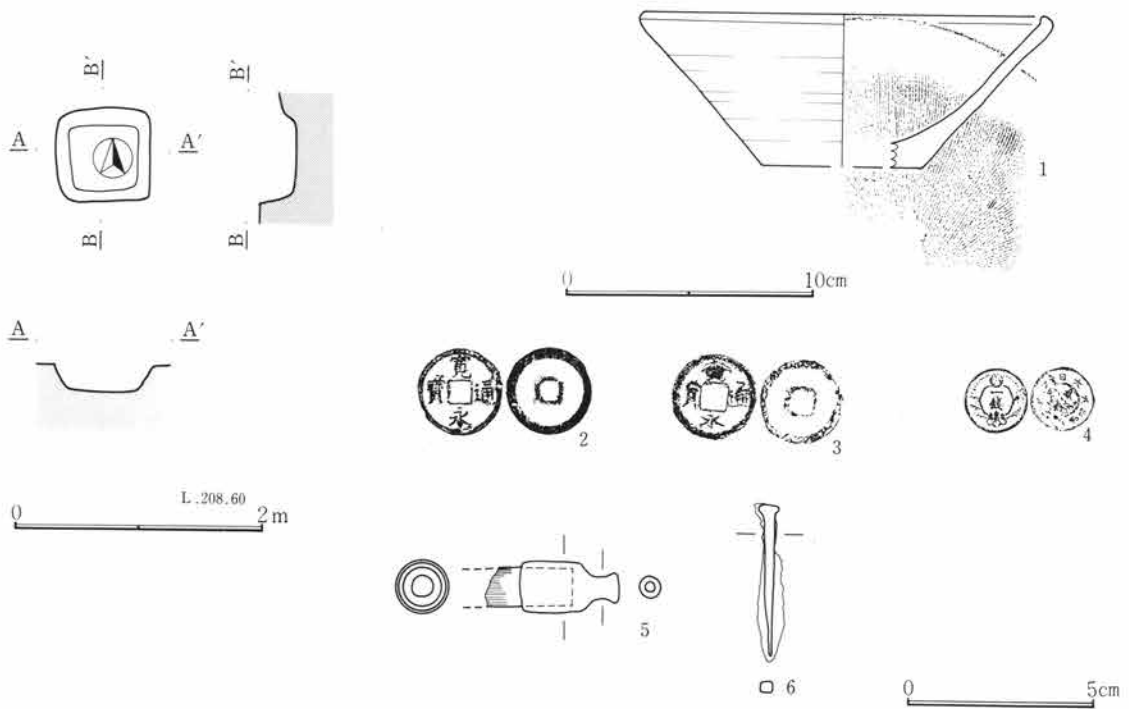


第186図 諏A10・11号墓塚と出土遺物

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第187図 諏A12号墓塚と出土遺物



第188図 諏A13号墓塚と出土遺物

遺物の出土はなかった。規模《(縦×横)×深さ》は、 $(0.72 \times 0.74) \times 0.22\text{m}$ である。

#### 内匠諏訪前遺跡A区12号墓塚

位置 C75III47 写真 PL74・85

寛永通宝12枚・煙管の吸口1つ・釘(棺桶に使用)35本が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、 $(0.78 \times 1.00) \times 0.14\text{m}$ である。

#### 内匠諏訪前遺跡A区13号墓塚

位置 C73III46 写真 PL74・85

寛永通宝4枚・昭和アルミ銭1枚・煙管の吸口1つ・釘(棺桶に使用)10本・石膏型で造られている鯉の水差し1点・播鉢1点が出土した。規模《(縦×横)×深さ》は、 $(0.72 \times 0.73) \times 0.31\text{m}$ である。

#### 内匠日影周地遺跡A区1号墓塚

位置 D16VI40 写真 PL74

立地 馬背状丘陵の西端に位置し、西側に傾斜する場所で検出された。方位はN-46°-Eである。

形状 長軸1.8m、短軸1.1mの不正楕円形を呈し、深さは0.58mである。

埋没土 M・Pを多量に含むローム質土壤中に、暗褐色土と浅間A軽石を斑状に含む。

検出状況 人頭大の自然礫が上層で出土し、その下

から馬骨が検出された。

#### 内匠日影周地遺跡出土の馬骨について

宮崎重雄

A区1号墓塚から出土した馬骨についてのコメントを、ここに記す。

この馬骨は、左記のような形状、立地の墓塚に、いくぶん四肢を屈曲させて東側に置き、南南西の隅に頭を、北北東に臀部を置いて横臥姿勢で埋存していたもので、6個の人頭大の石が上層を覆っていた。

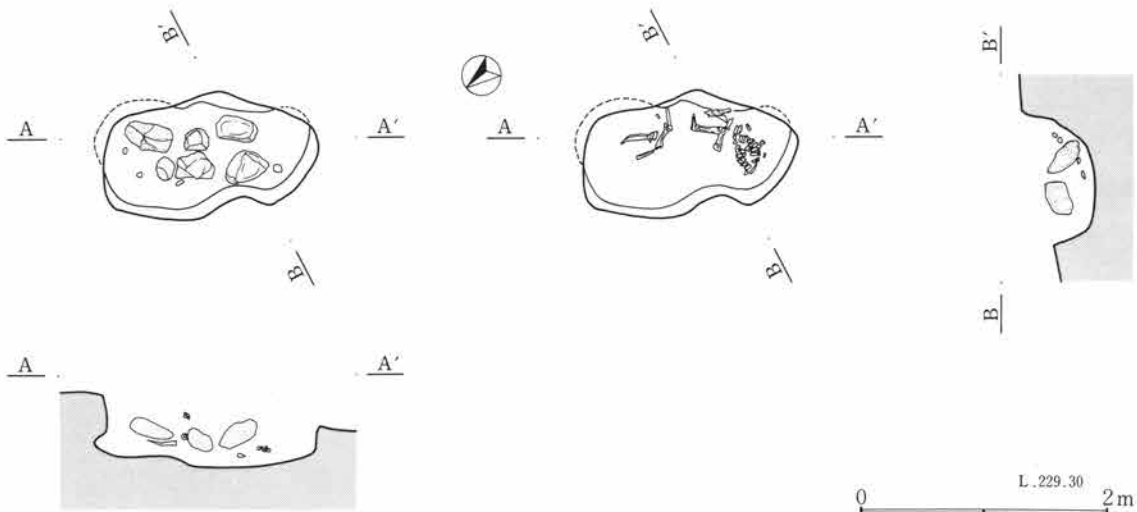
時代：中世～近世(?)

性別：切歯がすべて検出されているにもかかわらず、その近くに植立していたはずの犬歯が検出されていないことから、雌馬である可能性がきわめて高い。

年齢：歯冠高(咬耗度)の肉眼鑑定により8～10才程度と推定される。

体高：脛骨の全長が30.4cm、下顎全臼歯列長が15.3cmであることから、体高は116cm程度と推定される。

116cmの体高はペシュロン、サラブレッドなどの西洋馬のそれにははるかに及ばず、日本在来馬の小型馬すなわちトカラ馬・野間馬に相当する。このような小型馬は中・近世においては、乗用馬としてよりは農馬・駄馬として使われていた可能性の方が高い。



第189図 日A1号墓塚

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 3 号屋敷出土遺物 (第176図、PL 85)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 ~体部 陶器 茶碗	口 (11.5) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系		丸形の茶碗。胎釉。素地は淡黄褐色。	

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
2	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.4	銅	1/4欠損。新寛永。銭背方孔上部に文。	
3	小刀か	長 — 重 1.3	鉄	刃部の大部分を欠損する。	
4	鎌	長 — 重 3.9	鉄	両端を欠損する。刃の状態も遺存状態が悪く詳細は不明。	
5	不明	長 — 重 129.0	鉄	両端に突出する部分をもつ。	

内匠諏訪前遺跡 A 区礎石建物出土遺物 (第177図、PL 85)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 ~体部 陶器 茶碗	口 (10.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C後半	外面に胎釉。素地は妬器質。	4号礎石内
2	底部片 陶器 皿	口 — 高 — 底 (4.4)	肥前内野山窯	17C後~ 18C前	内面は青緑釉。外面には透明釉。輪糸皿。	2号礎石内
3	口縁部 ~体部 陶器 香炉	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C前~ 19前か	内面口縁部~外面に灰釉。	3号礎石内

内匠諏訪前遺跡 A 区 1 号墓塚出土遺物 (第178図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
1	銭 寛永通宝	厚 0.14 径 2.3	銅	古寛永か。完形。方孔。銭背無文。	覆土
2	銭 寛永通宝	厚 0.14 径 2.4	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
3	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	方孔。銭背不明。背面に布痕付着。完形。	覆土
4	釘	長 4.5 幅 0.3 重 4.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。完形。	覆土 棺桶の釘。
5	釘	長 4.8 幅 0.4 重 2.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。2本が癒着。1本は完形。	覆土 棺桶の釘。
6	不明	長 8.2 幅 0.2 重 1.6	銅	両端を欠損する。2ヶ所折れ曲がる。	覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区 2 号墓塚出土遺物 (第179図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
1	銭 寛永通宝	厚 0.14 径 2.4	銅	古寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
2	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.7	銅	新寛永。ほぼ完形。方孔を円孔にする。銭背は青海波11波。四文銭。	覆土
3	銭 文久永宝	厚 0.10 径 2.7	銅	完形。方孔。銭背は青海波11波。四文銭。	覆土
4	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.7	銅	古寛永か。完形。方孔。背面に布付着。銭背無文。	覆土



V 江戸時代以降の遺構と遺物

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
5	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.7	銅	新寛永。ほぼ完形。方孔。錢背は青海波11波。四文錢。	覆土
6	錢 寛永通宝	厚 0.14 径 2.7	銅	新寛永。完形。方孔。錢背は青海波11波。四文錢。	覆土
7	錢 寛永通宝	厚 0.11 径 2.3	銅	古寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
8	錢 寛永通宝	厚 0.11 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
9	錢 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
10	錢 寛永通宝	厚 0.14 径 2.7	銅	新寛永。完形。方孔。錢背は青海波11波。四文錢。	覆土
11	錢 寛永通宝	厚 0.09 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区 6 号墓塚出土遺物 (第180図、PL 85)

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	産 地	年 代	器 形 ・ 文 様 ・ 釉 薬 等 の 特 徴	備 考
1	口縁部 磁器 茶碗	口 (10.0) 高 — 底 —	肥前系	天明～ 1810年代	丸形の染付碗。外面は矢羽根文。 素地は灰白色で、呉須は黒ずんだ発色。焼成不良。	覆土

内匠諏訪前遺跡 A 区 3 号墓塚出土遺物 (第181図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
1	錢 寛永通宝	厚 0.15 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
2	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
3	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
4	煙管 雁首	長 4.3 径 1.4 火皿径1.4 重 5.0	銅	火皿の径が大きい。羅字挿入口が最大径よりすばまる。羅字一部残存。	覆土 5と対。
5	煙管 吸口	長 6.5 径 1.4 重 6.0	銅	羅字挿入口が最大径よりすばまる。口唇部にふくらみをもつ。羅字一部残存。	覆土 4と対。
6	釘	長 3.7 径 0.5 重 1.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。完形。	覆土 棺桶の釘
7	釘	長 3.6 径 0.4 重 1.3	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。完形。	覆土 棺桶の釘

内匠諏訪前遺跡 A 区 4 号墓塚出土遺物 (第182図、PL 85)

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	産 地	年 代	器 形 ・ 文 様 ・ 釉 薬 等 の 特 徴	備 考
1	口縁部 磁器 茶碗	口 — 高 — 底 —	瀬戸	幕末	丸形の染付碗。素地は白色で、呉須は青色に発色。	覆土

金属製品

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
2	錢 寛永通宝	厚 0.13 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
3	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 2.1	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
4	錢 寛永通宝	厚 0.14 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠諏訪前遺跡 A 区 5 号墓壇出土遺物 (第183図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
1	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
2	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
3	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
4	銭 寛永通宝	厚 0.14 径 2.3	銅	古寛永か。完形。方孔を円孔にする。銭背無文。	覆土
5	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
6	銭 寛永通宝	厚 0.10 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
7	釘	長 3.6 幅 0.3 重 2.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。完形。	覆土 棺桶の釘
8	釘	長 4.2 幅 0.4 重 4.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。木質が残存。2本が癒着。	覆土 棺桶の釘

内匠諏訪前遺跡 A 区 7 号墓壇出土遺物 (第184図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
1	銭 寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。ㄨ欠損。方孔。銭背無文。	覆土
2	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.4	銅	新寛永か。完形。方孔。銭背無文。	覆土
3	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.4	銅	古寛永か。完形。方孔。銭背無文。	覆土
4	銭 寛永通宝	厚 0.17 径 2.4	銅	古寛永か。完形。方孔。銭背無文。	覆土
5	銭 寛永通宝	厚 0.14 径 2.4	銅	ほぼ完形。方孔。	覆土
6	煙管 吸口	長 8.5 径 1.0 吸口径0.4 重 10.0	銅	羅字挿入口が最大径よりすばまる。口唇部にふくらみをもつ。羅字一部残存。	覆土 7と対。
7	煙管 雁首	長 6.5 径 0.9 火皿径1.2 重 6.0	銅	火皿の径が小さい。脂返しはあまり湾曲しない。羅字挿入口が最大径よりすばまる。	覆土 6と対。

内匠諏訪前遺跡 A 区 8 号墓壇出土遺物 (第185図、PL 85)

金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
1	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
2	銭 寛永通宝	厚 0.08 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
3	銭 寛永通宝	厚 0.13 径 2.4	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
4	銭 寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
5	銭 寛永通宝	厚 0.11 径 2.1	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	覆土
6	銭 寛永通宝	厚 0.18 径 —	銅	新寛永か。ㄨ欠損。方孔。銭背無文。	覆土
7	煙管 雁首	長 4.5 径 1.3 火皿径2.0 重 6.0	銅	火皿の径が大きい接合部補強帯なし。肩をもつ。	覆土 8と対。
8	煙管 吸口	長 6.9 径 1.2 吸口径0.5 重 4.3	銅	明瞭な肩をもつ。口唇部欠損。羅字一部残存。	覆土 7と対。
9	釘	長 5.3 幅 0.2 重 7.5	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部を欠損。	覆土 棺桶の釘。

## 内匠諏訪前遺跡 A区10号墓塚出土遺物 (第186図)

## 金属製品

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
1	釘	長 4.4 幅 0.4 重 1.7	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。完形。 木質が残存。	覆土 棺桶の釘。

## 内匠諏訪前遺跡 A区12号墓塚出土遺物 (第187図、PL 85)

## 金属製品

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
1	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.4	銅	新寛永。完形。錢背方孔上部に文。	覆土
2	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.4	銅	古寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
3	錢 寛永通宝	厚 0.14 径 2.7	銅	新寛永。完形。方孔。錢背は青海波21波。	覆土
4	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
5	錢 寛永通宝	厚 0.09 径 2.3	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
6	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
7	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
8	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.3	銅	古寛永。一部欠損。方孔。錢背無文。	覆土
9	錢 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永。完形。錢背方孔上部に元。	覆土
10	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.4	銅	新寛永。完形。錢背方孔上部に文。	覆土
11	錢 寛永通宝	厚 0.09 径 2.3	銅	新寛永。ほぼ完形。方孔。錢背無文。	覆土
12	錢 寛永通宝	厚 0.10 径 —	銅	½以上を欠損。方孔。錢背無文。	覆土
13	煙 管 吸 口	長 8.1 径 1.0 吸口径0.6 重 11.0	銅	羅字挿入口が最大径よりすばまる。口唇部にふくらみをもつ。羅字一部残存。	覆土
14	釘	長 — 径 0.5 重 5.0	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。脚部を欠損。 木質が残存。	覆土 棺桶の釘。

## 内匠諏訪前遺跡 A区13号墓塚出土遺物 (第188図、PL 85)

(単位: cm)

番 号	残存状態	大 き さ	産 地	年 代	器 形 ・ 文 様 ・ 釉 薬 等 の 特 徴	備 考
1	½欠損	口 15.9 高 6.0 底 (6.3)	瀬戸・美濃系	17C	鉄(錆)釉の揃鉢。櫛目12本で櫛目が細かい。 素地は淡黄褐色。	覆土

## 金属製品

(単位: cm・g)

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
2	錢 寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
3	錢 寛永通宝	厚 0.11 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。錢背無文。	覆土
4	一 錢	厚 0.17 径 1.6	アルミ	カラス。昭和。年次不明	覆土 二次的に被熱。
5	煙 管 吸 口	長 3.6 径 1.3 吸口径0.6 重 4.4	銅	明瞭な肩をもち短い。最大径を羅字挿入口にもつ。口唇部にふくらみをもつ。	覆土
6	釘	長 3.9 幅 0.3 重 0.9	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。完形。 木質が残存。	覆土 棺桶の釘。

## 5. 溝

図 第190～194図 写真 PL76・77・85・86

屋敷に關係しない溝は31条が検出された。

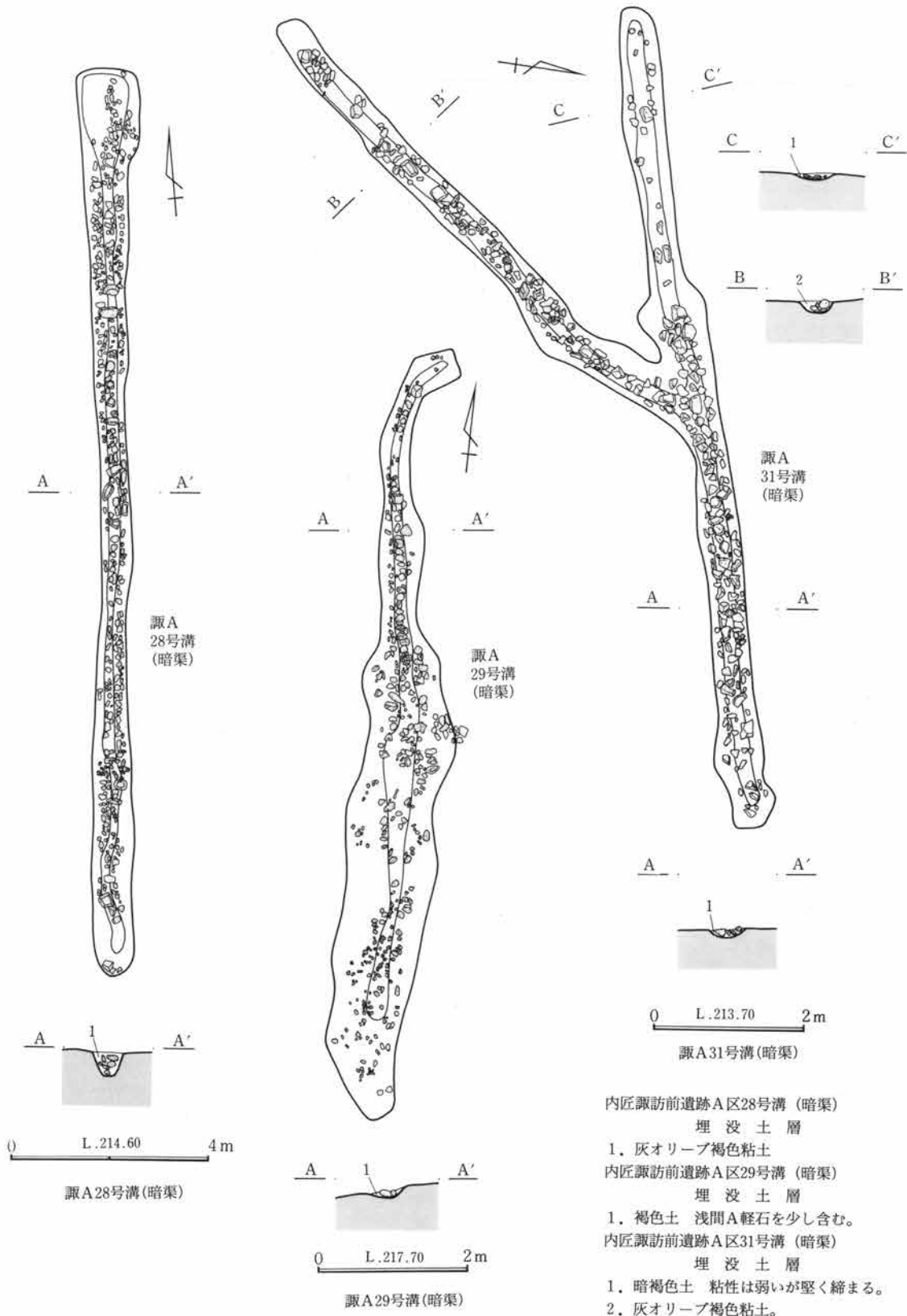
大半が排水の目的でつくられたと思われるが、あわせて地境溝や根切溝の役割をもつ場合もあったと

思われる。溝の中で、暗渠が検出されている。暗渠が検出された地点はいずれも検出面が粘土層(X層)である。また、全体図中にも図化できなかつたが、地境・農道の両端・削平などによる傾斜変換点には調査時点で機能する溝が存在していたが、それらの溝の年代的な上限は不明である。

(遺物観察表：255・256頁)

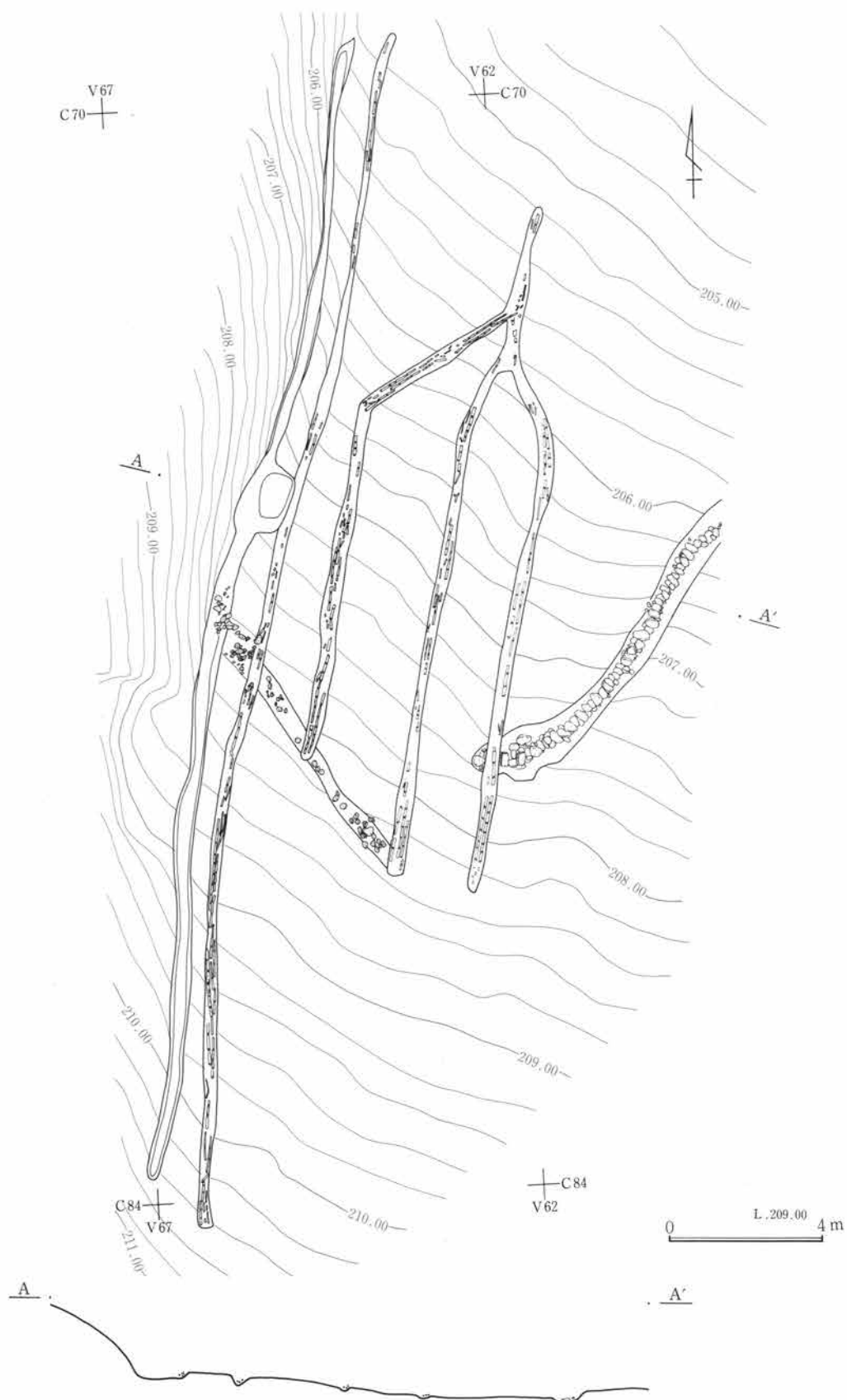
第5表 江戸時代以降溝規模一覧

地区	番号	位置	長さm (のべ)	最大 幅cm	深さ cm	方位	特記事項
内匠諏訪前遺跡A区	14	C77III50他	23.0	83	11	N-20°-E N-9°-W	2号屋敷の溝(13溝)を切る。15・16溝と重複するが、先後関係は不明。昭和30年代の遺物出土。
内匠諏訪前遺跡A区	15	C75III50他	8.0	48	3~29	N-5°-E	14・16溝と重複。先後関係は不明。
内匠諏訪前遺跡A区	16	C73III50他	6.0	48	3~29	N-3°-E	14・15溝と重複。先後関係は不明。
内匠諏訪前遺跡A区	26	C70IV20他	27.3	120	2~19	N-30°-W	図化した遺物1点だけの出土。時期不明。
内匠諏訪前遺跡A区	27	C96IV20他	75.8	130	13~57	N-2°-E N-85°-W	1~5号礎石を切る。図示した遺物が出土しているが、18C前~幕末までの年代幅がある。
内匠諏訪前遺跡A区	28	C92IV3他	17.8	120	27~50	N-5°-E	石組みの暗渠。粘土と石を使用し、粘土中から図示した17Cの遺物が出土。北端は桁形を呈する。
内匠諏訪前遺跡A区	29	D0IV22他	10.4	120	2~33	N-5°-W	石組みの暗渠。底面しか残存せず、掘り込みも、ほとんど検出できなかった。
内匠諏訪前遺跡A区	30	C90IV40他	21.0	77	4~12	N-70°-E	遺物の出土はなかつた。2次堆積のA軽石を含む。
内匠諏訪前遺跡A区	31	C90III80他	18.6	60	7~19	N-80°-E N-38°-E	石組みの暗渠。Y字状を呈する。遺物の出土はなかつた。粘土を使用している。
内匠日影周地遺跡A区	1	C90V30他	60.1	55	15~35	N-8°-W N-73°-W	多数の溝と重複関係するが同時に機能か。3溝に近い部分が暗渠。図示した遺物は年代幅をもつ。
内匠日影周地遺跡A区	2	D0V47他	17.0	39	8~20	N-2°-W	石組みの暗渠。粘土を使用。遺物の出土はなかつた。
内匠日影周地遺跡A区	3	C90V18他	27.0	68	7~20	N-15°-E	1溝と18溝と同時に機能か。2次堆積のA軽石含む。
内匠日影周地遺跡A区	4	C90V5他	29.0	43	3~14	N-10°-E	遺物の出土なし。2次堆積のA軽石含む。
内匠日影周地遺跡A区	5	C90V4他	27.2	77	6~23	N-10°-E	2次堆積のA軽石含む。遺物の出土なし。
内匠日影周地遺跡A区	6	C95V40他	29.0	100	3~17	N-88°-W	2次堆積のA軽石を多く含む。遺物の出土なし。
内匠日影周地遺跡A区	7	C90V40他	21.2	63	5~8	N-80°-E	2次堆積のA軽石を多く含む。遺物の出土なし。
内匠日影周地遺跡A区	8	D0V36他	25.3	37	7~15	N-10°-E	2次堆積のA軽石を含む。遺物の出土なし。
内匠日影周地遺跡A区	9	D0V35他	26.6	57	18~25	N-10°-E	2次堆積のA軽石を含む。遺物の出土なし。
内匠日影周地遺跡A区	10	D0V34他	19.9	19	14~24	N-10°-E	石組みの暗渠。11溝を切る。遺物の出土はなかつた。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	11	C98V34他	15.0	33	17~25	N-10°-W	石組みの暗渠。10・12溝に切られる。A軽石を含まず、17C代の遺物が3点出土した。
内匠日影周地遺跡A区	12	D0V34他	20.1	30	22~30	N-13°-E	11溝を切る。18C前半の白化粧土を雑巾掛けした唐津系茶碗の少片が1点出土した。
内匠日影周地遺跡A区	13	D0V29他	20.4	23	21	N-20°-E	1号住を切る。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	14	D0V27他	20.6	23	14~21	N-20°-E	19号住を切る。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	15	D2V25他	21.8	30	20~26	N-20°-E	遺物の出土なし。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	16	D4V18他	15.4	48	3~9	N-4°-E	遺物の出土なし。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	17	D5V19他	23.2	65	15~21	N-4°-E	18C代肥前系の陶胎染付碗底部が1点出土した。2次堆積のA軽石を含む。
内匠日影周地遺跡A区	18	D0V10他	56.0	130	7~24	N-75°-W	3・17溝と同時に機能か。2次堆積のA軽石含む。
内匠日影周地遺跡A区	19	D40V30他	94.0	180	18~98	N-70°-E	根切り溝か。A軽石含む。26坑と重複。遺物なし。
内匠日影周地遺跡B区	1	C95V90他	20.3	27	7~42	N-84°-W	石組みの暗渠。溜井状遺構を切る。2次堆積のA軽石含む。
内匠日影周地遺跡B区	2	C75V65他	112.1	90	27	N-5°-E	竹の暗渠。複数からなる。3号暗渠に切られる。
内匠日影周地遺跡B区	3	C75V62他	9.0	50	49	N-15°-E	石組みの暗渠。2号溝を切る。

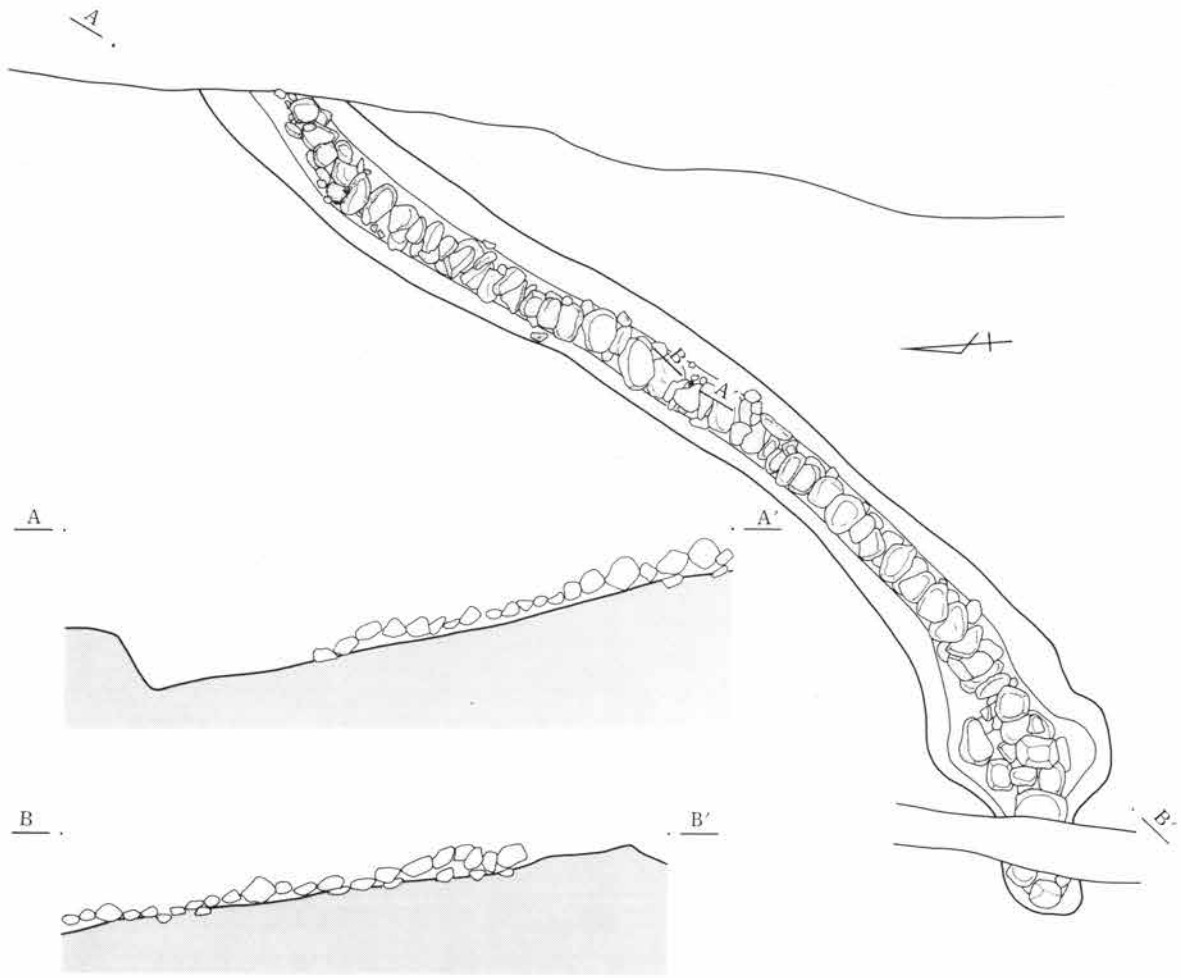


第190図 諫A28・29・31号溝 (暗渠)

V 江戸時代以降の遺構と遺物

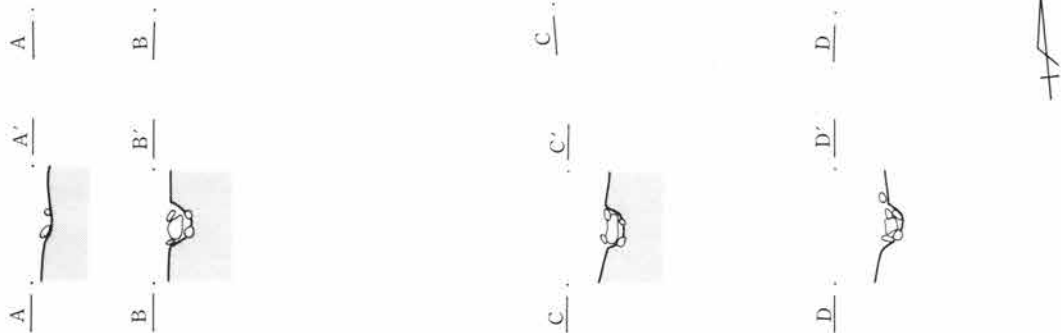


第191図 日B 2号溝 (暗渠)



0 L. 207.50 2m

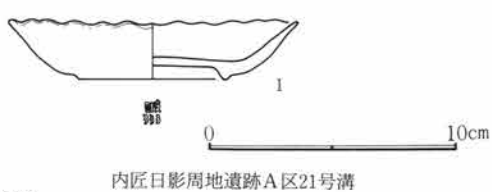
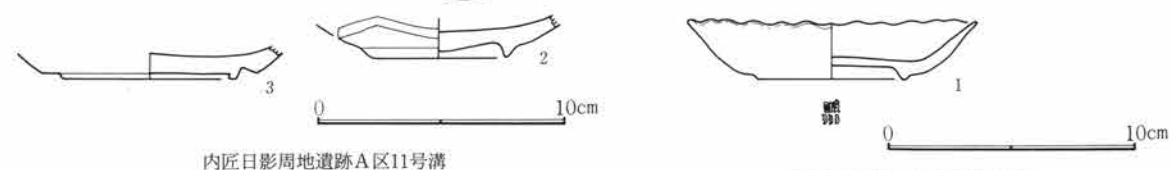
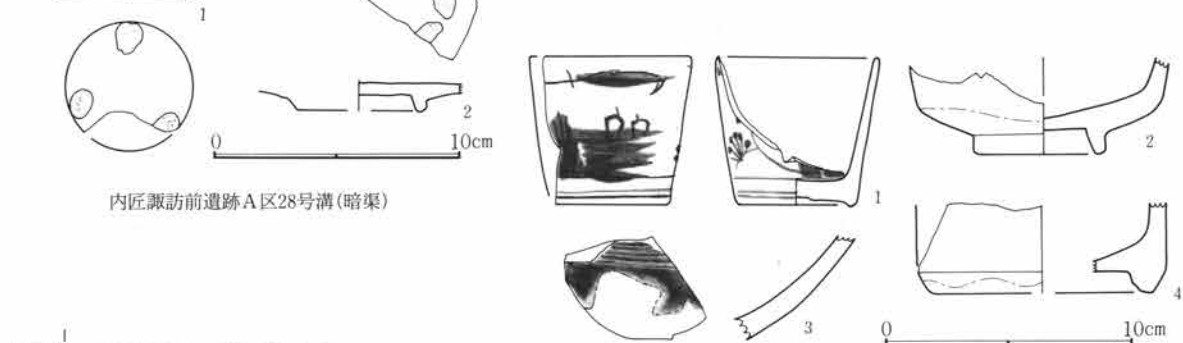
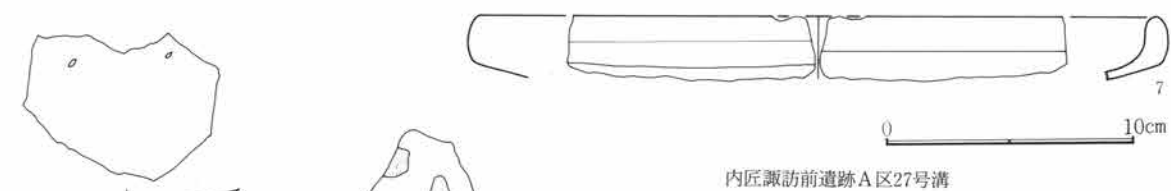
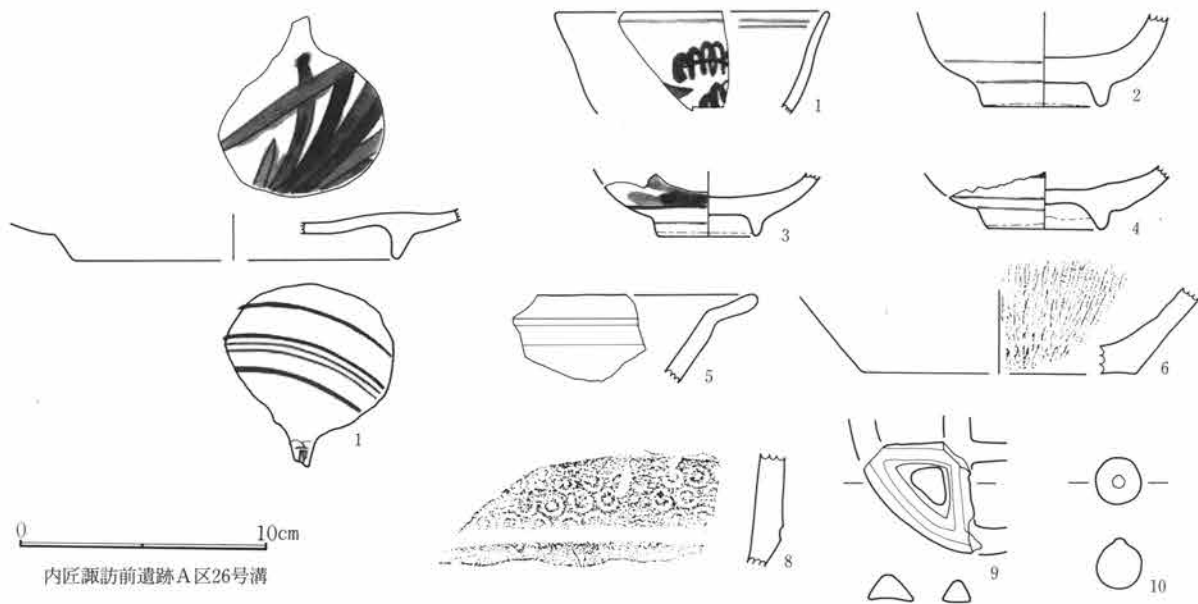
第192図 日B 3号溝 (暗渠)



0 L. 219.70 2m

第193図 日B 1号溝 (暗渠)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第194図 溝出土遺物



## 5. 溝

## 内匠諏訪前遺跡 A区26号溝出土遺物 (第194図、PL 85)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1 磁器 皿	底部	口 — 高 — 底 (13.0)	肥前系	18C前～ 中	内面には草花文。外面は横線。高台高く、内側に「製」の一部が残存。素地は白色で、呉須は青色に発色。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡 A区27号溝出土遺物 (第194図、PL 85)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1 磁器 飯碗	口縁部 ～体部	口 (10.8) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	幕末	端反りの染付碗。素地は白色で、呉須は青色に発色。	覆土
2 陶器 飯碗	体部～底 部	口 — 高 — 底 4.9	肥前系	18C前～ 中	陶胎染付。妬器質。呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
3 陶器 飯碗	底部	口 — 高 — 底 4.0	肥前系	18C前～ 中	陶胎染付。妬器質。外面に山水文か。呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
4 陶器 飯碗	底部	口 — 高 — 底 4.6	肥前系	18C前～ 中	陶胎染付。妬器質。外面に山水文か。呉須はうすく少しくすんで発色。	覆土
5 陶器 鉢	口縁部 ～体部	口 — 高 — 底 —	肥前系唐津		内外面に銅緑釉を施す。素地は赤褐色。	覆土
6 陶器 播鉢	体部～底 部	口 — 高 — 底 (5.4)	堺系	18C代	焼締播鉢の底部。素地は明褐色。	覆土
7 軟質陶器 焙烙	口縁部 ～底部	口 36.4 高 2.4 底 —	不明		底部が曲面を呈する。外面に稜。酸化炎焼成。	覆土
8 軟質陶器 火鉢	体部	口 — 高 — 底 —	不明		外面に丸と二重丸の印刻文。酸化炎焼成。	覆土
9 土製品 七厘中敷	1/2残存	厚 1.0	不明		裏面には指頭状の圧痕。酸化炎焼成。	覆土

## 金属製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
10	鉄砲玉	径 1.2 重 9.6	鉛	製作時の突起が残存。完形。	覆土

## 内匠諏訪前遺跡 A区28号溝出土遺物 (第194図、PL 85)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1 陶器 皿	底部	口 — 高 — 底 5.4	瀬戸・美濃系	17C前葉	志野皿。内外面にビン痕。高台は削り出す。長石釉を内外面に施す。素地は褐白色。	覆土
2 陶器 皿	底部	口 — 高 — 底 (5.0)	肥前系	17C	内面に砂目積み痕。内外面に透明釉。素地は淡い褐色。	覆土

V 江戸時代以降の遺構と遺物

内匠日影周地遺跡A区1号溝出土遺物（第194図、PL 85）

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 磁器猪口 ～底部	口 (6.4) 高 5.8 底 (4.6)	肥前系	明治3年 以降	コバルトによる発色。蛇ノ目凹形高台。 口唇部に口鏝。外面は山水文。素地は白色。	覆土
2	底部 陶器香炉	口 — 高 — 底 5.0	肥前系		陶胎染付と思われるが、外面に透明釉のみ。 炻器質。	覆土
3	体部 陶器鉢	口 — 高 — 底 —	肥前系唐津	18C後	内外面に白化粧土による刷け目。透明釉。 素地は赤褐色。	覆土
4	体部～底部 陶器花瓶か	口 — 高 — 底 (10.0)	瀬戸・美濃系		外面は淡青色で内面は透明釉。素地は褐白色。	覆土

内匠日影周地遺跡A区11号溝出土遺物（第194図、PL 85）

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	体部～底部 陶器茶碗	口 — 高 — 底 5.0	瀬戸・美濃系	17C	天目茶碗。内外面に鉄釉。焼成不良で内面が発泡。 素地は灰褐色。	覆土
2	底部 磁器皿	口 — 高 — 底 5.4	肥前 吉田窯	17C	染付の皿。内面に樓閣文。芙蓉手。 素地は灰褐色で、具須はくすんで発色。	覆土 遺構外でも同様の皿出土。
3	底部 陶器皿	口 — 高 — 底 (6.2)	瀬戸・美濃系か	17C	内面にピン痕。灰釉の皿。炻器質。	覆土

内匠日影周地遺跡A区20号溝出土遺物（第194図、PL 86）

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 陶器揺鉢 ～体部	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	17C代	鉄（錆）釉を施す。口唇部は内側に折り返し、櫛目の単位は7 + $\alpha$ 本。	

内匠日影周地遺跡A区21号溝出土遺物（第194図、PL 86）

（単位：cm）

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	口縁部 磁器皿 ～底部	口 11.5 高 2.2 底 5.8	岐阜	昭和	15年戦争中の統制番号が、陽刻として高台内側に見受けられる（岐333）。石膏による型作りで、ゴム版による文様が施される。口縁部内側には鶴亀文。内側には松竹梅文。	

## 6. 土坑

屋敷に関係しない土坑は16基検出された。土坑からは、遺物が出土していない。

### 内匠諏訪前遺跡A区

14号土坑は浅間A軽石の純層が堆積しており、2号屋敷地に隣接する東側で検出されたことなどから、この屋敷に伴う可能性が高い。また、諏訪前遺跡A区内の土坑は、検出面が1号屋敷の盛土下であることなどから、1号屋敷地造成以前の土坑であるが、埋没土層の様相から、浅間A軽石降下以前にすでに埋没していたものと、浅間A軽石降下時に開口

していたものと、浅間A軽石降下後で1号屋敷地造成前につくられたものが想定できる。

### 内匠諏訪前遺跡B区

3基検出された。いずれも埋没土中に浅間A軽石を含むが、2次的な堆積である。

### 内匠日影周地遺跡A区

4基検出された。1号土坑は3基からなり、18号溝と重複している。2号・3号土坑は桶を埋設する土坑で、2号土坑は底板が、3号土坑は横板・竹の籬・底板が検出された。また、全体図等にも図化できなかったが、ロームが残っている地区では、地境や畠の境界近辺に近現代の芋穴状土坑群が検出されている。

第6表 江戸時代以降土坑規模一覧

(単位: cm)

地 区	番号	位 置	規模(縦×横)×深さ	図	備 考
内匠諏訪前遺跡A区	5	C79III30	(147×122)×45	第195図	1号屋敷西側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	14	C77III32	(213×110)×103	第195図	1号屋敷西側盛土下で検出。写真 PL 75。
内匠諏訪前遺跡A区	35	C79III22	(97×50)×21	第195図	1号屋敷北側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	36	C86III17	(?×57)×48	第195図	旧石器試掘坑で検出された。
内匠諏訪前遺跡A区	37	C80III24	(94×60)×30	第195図	1号屋敷北側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	39	C81III21	(60)×28	第195図	1号屋敷北側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	41	C81III23	(76×49)×28	第196図	1号屋敷北側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	42	C82III32	(?×58)×43	第196図	1号屋敷西側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡A区	50	C79III28	(120×61)×23	第196図	1号屋敷北側盛土下で検出。
内匠諏訪前遺跡B区	7	C82IV52	(193×110)×35	第196図	埋没土中に炭化粒子を多く含む。
内匠諏訪前遺跡B区	8	C84IV54	(195×105)×32	第196図	埋没土中に炭化粒子を多く含む。
内匠諏訪前遺跡B区	13	C78IV58	(35×30)×33	第196図	
内匠日影周地遺跡A区	1	D0V10	(190×130)×38	第196図	18溝と重複。
内匠日影周地遺跡A区	2	D93V32	(175×160)×49	第197図	桶埋設の土坑。掘り方は検出されなかった。写真 PL 75。
内匠日影周地遺跡A区	3	D94V34	(110)×113	第197図	桶埋設の土坑。掘り方は検出されなかった。写真 PL 75。
内匠日影周地遺跡A区	26	D39V5	(175×114)×87	第197図	19溝と重複。

## 7. 遺構外出土遺物

### 図 第199・200図 写真 PL86

江戸時代以降の陶磁器類は総数で297点出土している。また、分布の様相などについては、別項で述べる(第229～231図参照)。

年代がわかる陶磁器類は、18世紀以降のものが主体をしめるが、17世紀代の陶磁器類も僅かながら出土している(10・20～22)。11は諏訪前遺跡の墓改葬にともなう重機攪乱土層から出土していることか

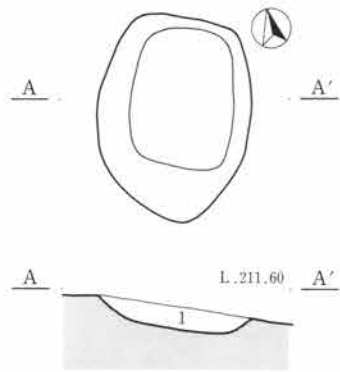
ら、2号屋敷にともなう可能性がある。

金属類の中で鉄砲玉(29・30)は中世の可能性もある。また、火打金(49)は1号屋敷西側盛土下から検出されていることから2号屋敷にともなう可能性がある。

特殊な遺物としては、焙烙の底部に補修孔及び補修材である銅線が伴って検出されている(26)。また、土製釜輪も検出された(27)。

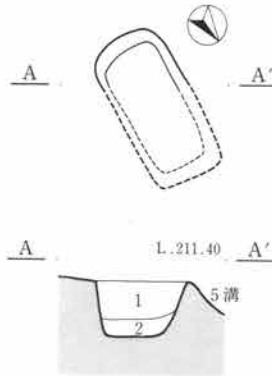
(遺物観察表: 263～265頁)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



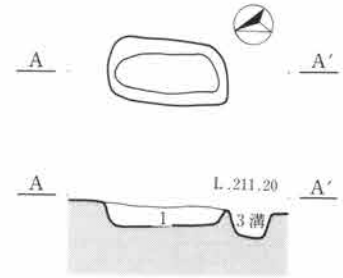
内匠諏訪前遺跡A区5号土坑  
埋没土層

1. オリーブ褐色土層  
ローム質の土壤中に褐色土を斑状に含む。  
浅間A軽石をごく僅かに上面に含む。粘性  
と縮まりは弱い。



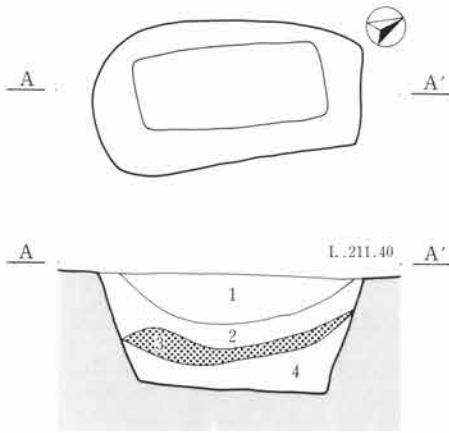
内匠諏訪前遺跡A区36号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
ローム粒子を多く含む。若干縮まる。  
2. 暗褐色土  
浅間軽石を多く含む。縮まりが強い。



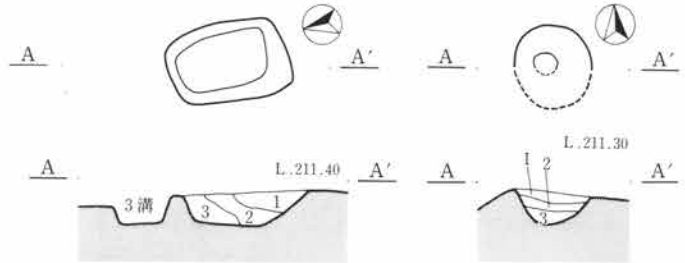
内匠諏訪前遺跡A区35号土坑

1. にぶい黄褐色土  
浅間A軽石を多く含む。縮まりが弱い。  
黒色土のブロックを少し含む。



内匠諏訪前遺跡A区14号土坑  
埋没土層

1. 灰黄褐色土 浅間A軽石のみの堆積だが純層で  
はなく、流れ込みによる堆積。  
2. 暗褐色土 褐色土中に浅間A軽石を多く含む。  
粘性と縮まりはない。  
3. 褐灰色土 浅間A軽石の純層。  
4. 褐色土 ローム質の土壤。



内匠諏訪前遺跡A区37号土坑  
埋没土層

1. 暗褐色土 浅間A軽石を多く含む。粘  
性は弱い縮まりがある。  
2. 黒褐色土 浅間A軽石を少し含む。  
3. 黒褐色土 2層に似るが、ローム粒  
子を少し含む。

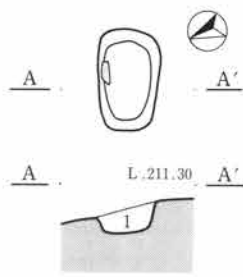
内匠諏訪前遺跡A区39号土坑  
埋没土層

1. 褐色土 ローム粒子と浅間  
A軽石を斑状に含む。  
2. 焼土層。  
3. 暗褐色土 ローム粒子を少  
し含む。



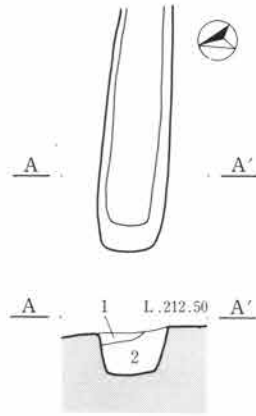
第195図 諏A5・14・35・36・37・39号土坑

V 江戸時代以降の遺構と遺物



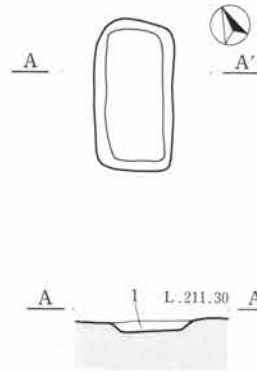
内匠諏訪前遺跡A区41号土坑  
埋没土層

1. 黄褐色土  
浅間A軽石とY、P粒子を多く含む。粘性と縮まりが弱い。



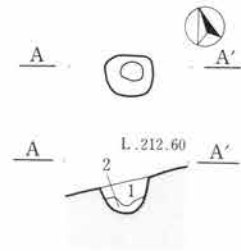
内匠諏訪前遺跡A区42号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
浅間A軽石とローム粒子を少し含む。粘性弱いが若干縮まりが見受けられる。  
2. 褐色土  
浅間A軽石を多く含む。粘性弱く縮まりもない。



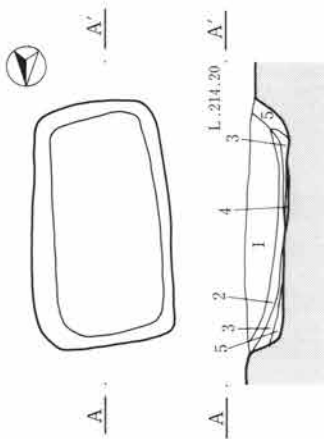
内匠諏訪前遺跡A区50号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
褐色土中に、浅間A軽石を多く含む。  
粘性は弱く、縮まりもない。



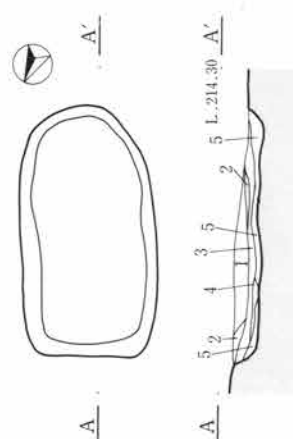
内匠諏訪前遺跡B区13号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
浅間A軽石を多く含む。粘性は弱く、縮まりもない。  
2. 黄褐色土  
ローム質の土壌で汚れている。



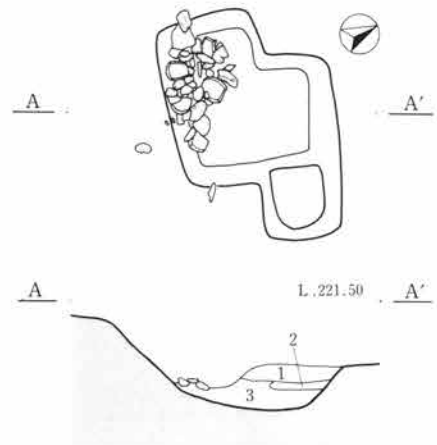
内匠諏訪前遺跡B区7号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
浅間A軽石を少しと、ロームブロックを多く含む。  
2. 灰層  
細かな炭化粒子を多く含む。  
3. 黒褐色土  
炭化物を多く含む。  
4. 褐色土  
B、P粒子を多く含む。



内匠諏訪前遺跡B区8号土坑  
埋没土層

1. 褐色土  
浅間A軽石を少し含む。  
2. 褐色土  
ロームブロックを多く含む。  
3. 灰層  
細かな炭化粒子を多く含む。  
4. 黒褐色土  
炭化物を多く含む。  
5. 褐色土  
B、P粒子を多く含む。



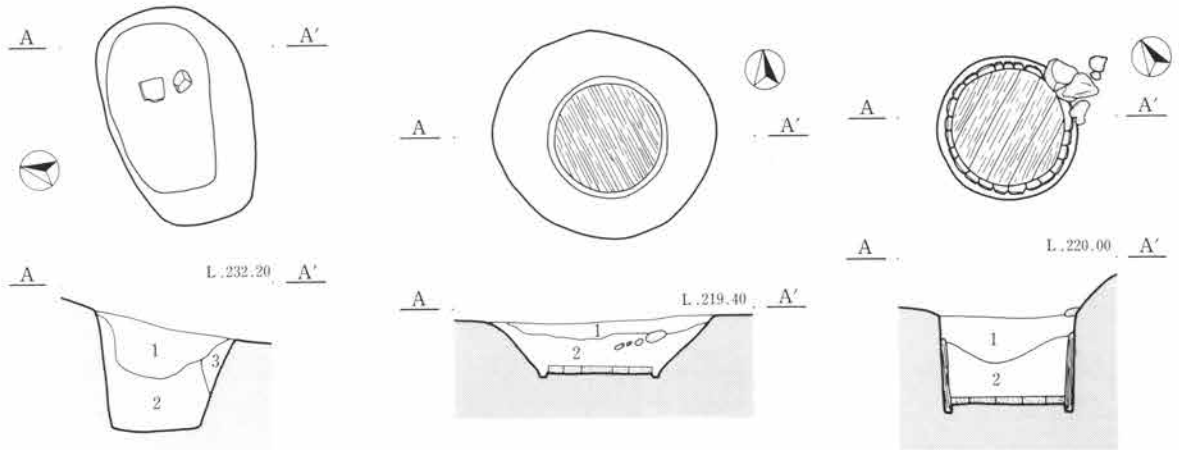
内匠日影周地遺跡A区1号土坑  
埋没土層

1. 灰色土  
浅間A軽石を多く含む。粘土質で、砂粒を少し含む。  
2. 明褐色土  
粘土ブロックを多く含む。  
3. 灰色土  
1層に似るが、含まれる砂粒の量が多い。

0 2m

第196図 諏A41・42・50・諏B7・8・13・日A1号土坑

V 江戸時代以降の遺構と遺物



内匠日影周地遺跡A区26号土坑  
埋没土層

1. 暗褐色土  
浅間A軽石とB、P粒子を斑状に少し含む。粘性は弱く、縮まりもない。
2. 黒褐色土  
1層に似るが、含まれる浅間A軽石の量が多い。
3. 褐色土 B、Pブロックを多く含む。

内匠日影周地遺跡A区2号土坑  
埋没土層

1. 暗褐色土  
浅間A軽石を多く含む。砂質で縮まりが強い。
2. 暗褐色土  
浅間A軽石を少し含む。粘性が強く、堅く縮まる。

内匠日影周地遺跡A区3号土坑  
埋没土層

1. 黒色土 浅間A軽石と粘土粒を多く含む。粘性強く堅く縮まる。
2. 黒褐色土  
1層に似るが、色調が若干明るい。

0 2m

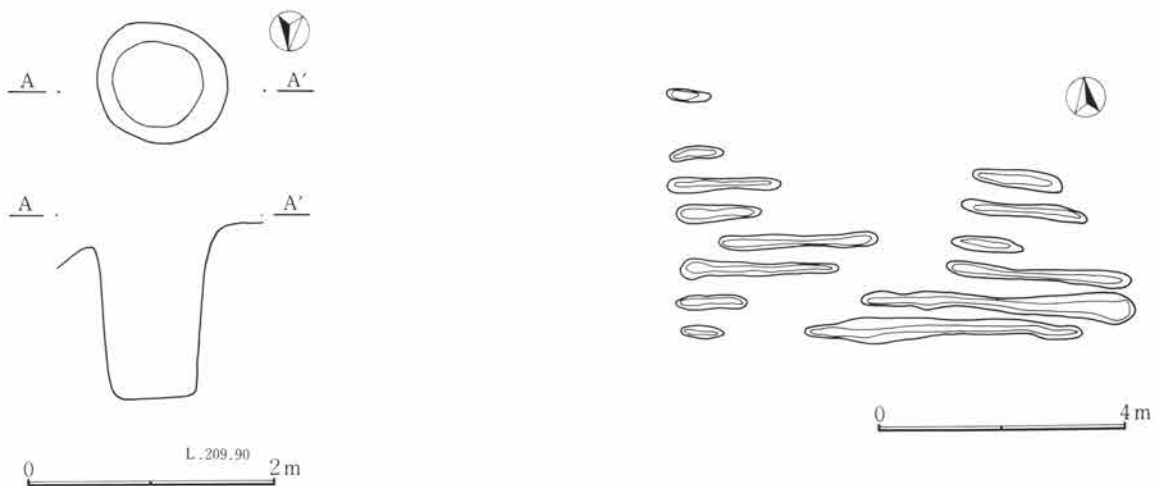
第197図 日A 2・3・26号土坑

## 8. 井戸

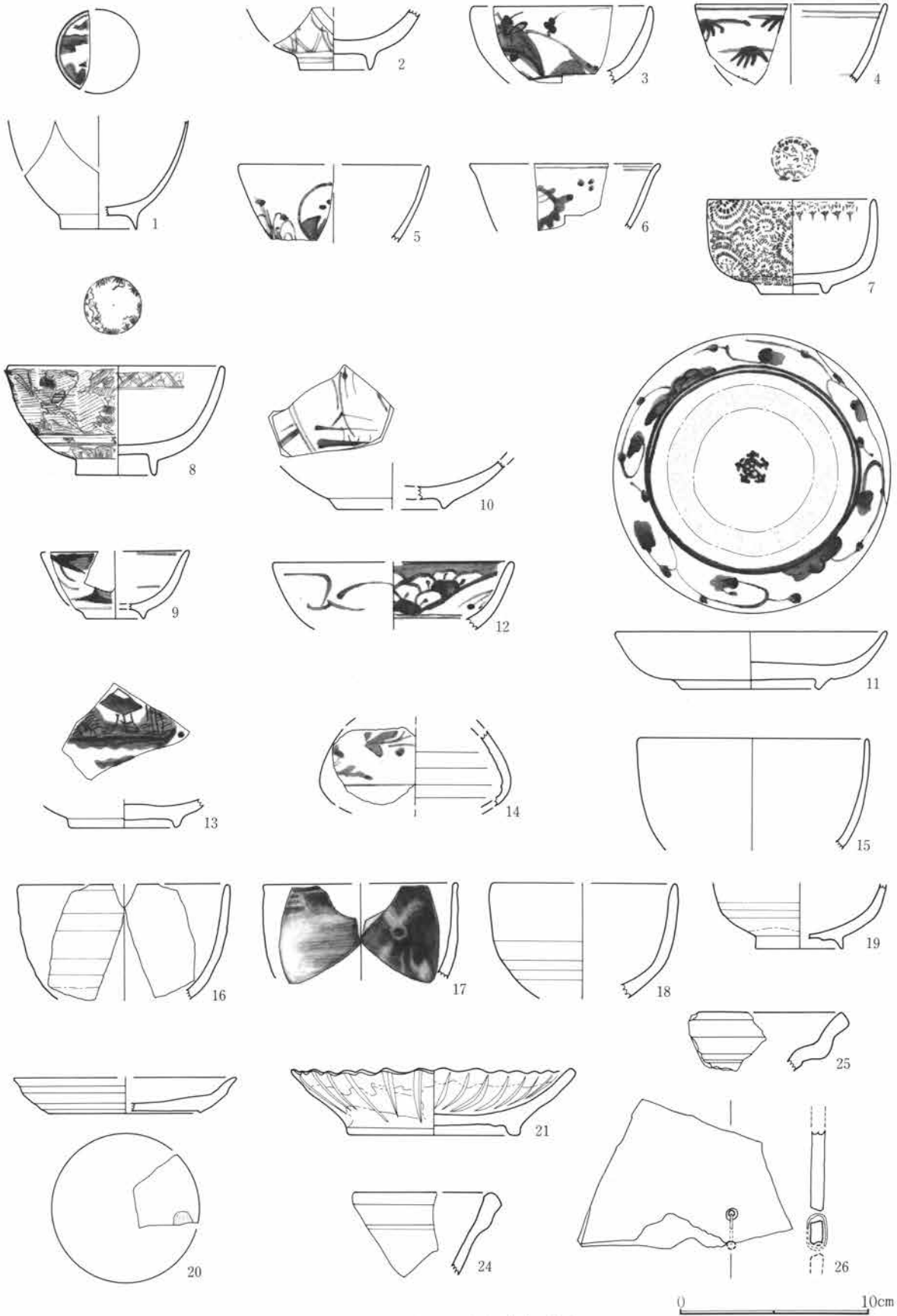
屋敷に伴わない井戸は2号井戸1基のみである。  
位置はC79III41で、2号屋敷の南東隅をきる。直径105cm、深さ145cmで埋没土に浅間A軽石を含まない。

## 9. 畠

位置 C77III40他 写真 PL74  
2号屋敷の東側で屋敷生活面より約40cm上で確認された。2次堆積した浅間A軽石を多く含む。

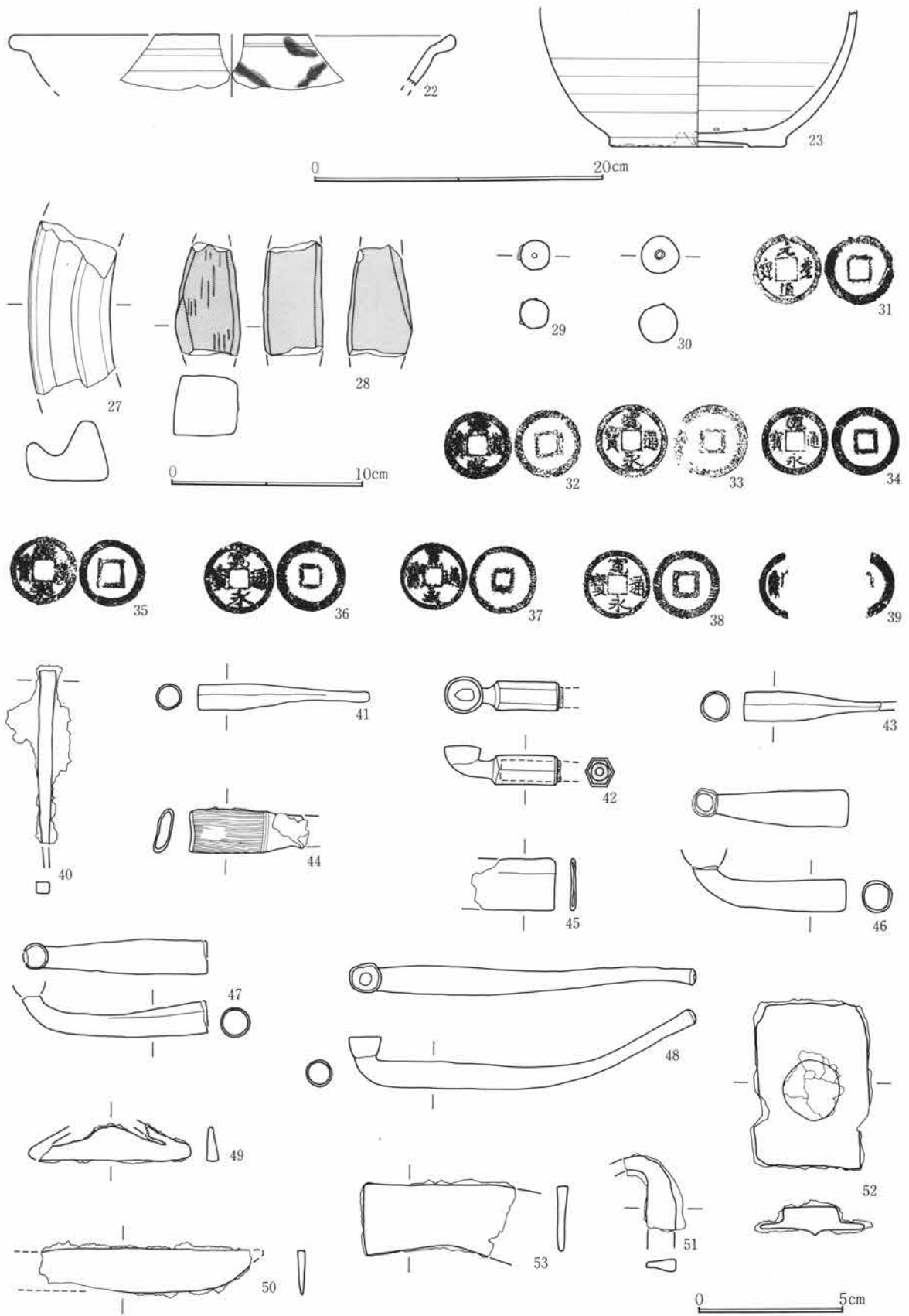


第198図 2号井戸と畠



第199図 遺構外出土遺物 (1)

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第200図 遺構外出土遺物(2)



## V 江戸時代以降の遺構と遺物

## 江戸時代以降遺構外出土遺物 (第199図～200図、PL 86)

(単位: cm)

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
1	磁器碗 磁飯碗	体部～底部 口 ー 高 ー 底 (4.0)	有田	18C前～ 中	青磁染付の碗。外面は青磁釉。内面は見込に山水文ののち、透明釉。素地は白色で、呉須は青色に発色。	C 61III40G
2	磁器碗 磁飯碗	体部～底部 口 ー 高 ー 底 3.8	肥前系	1700～ 1780	染付の丸形碗。外面は二重網目文。素地は灰白色で、呉須はうすく少しくすんで発色。	C 77III27G
3	磁器碗 磁飯碗	口縁部～体部 口 (9.2) 高 ー 底 ー		1700～ 1780	染付の丸形碗。外面は雪の輪に梅樹文。素地は灰色で呉須は黒ずんだ発色。	表採
4	磁器碗 磁飯碗	口縁部～体部 口 (9.8) 高 ー 底 ー	瀬戸	幕末	丸形の染付碗。外面には笹文か。素地は白色で呉須は青色に発色。釉薬内に細かな気泡を多く含む。	C 57III56・C 67III56G
5	磁器碗 磁飯碗	口縁部～体部 口 (9.8) 高 ー 底 ー	瀬戸	幕末	染付碗。外面は唐草と丸文。素地は白色で呉須は青色に発色。釉薬内に細かな気泡を多く含む。	C 66III44G
6	磁器碗 磁飯碗	口縁部～体部 口 (10.0) 高 ー 底 ー	瀬戸・美濃系か	幕末	端反りの染付碗。素地は白色で、呉須は青色に発色。	2号屋敷
7	磁器碗 磁茶碗	口縁部一部欠損 口 8.7 高 4.9 底 3.9		明治	コバルトによる発色。型紙絵付による松竹梅文。素地は白色。	2号屋敷
8	磁器碗 磁茶碗	完形 口 11.4 高 5.7 底 4.4		大正	コバルトによる発色。銅版絵付による草花文。素地は白色。	2号屋敷
9	磁器小盃	口縁部～底部 口 (7.8) 高 3.5 底 (3.0)	瀬戸・美濃系	幕末	端反りの染付小盃。素地は白色で、呉須は青色に発色。釉薬内に細かな気泡を多く含む。	2号屋敷
10	磁器皿	底部 口 ー 高 ー 底 (5.8)	肥前吉田窯	17C	染付の皿。内面に楼閣文。芙蓉手。素地は灰褐色で、呉須はくすんで発色。	日影周地遺跡A区11号溝でも同様の皿出土。 C 88V 43G
11	磁器皿	ほぼ完形 口 14.3 高 3.0 底 7.3	肥前系	18C中～ 末	染付の輪髹皿。内面にはつる草文。見込はコンニャク判の五弁花文。蛇ノ目状の釉剥ぎ部分に泥漿。	2号屋敷内墓攪乱土層
12	磁器皿	口縁部～体部 口 (12.6) 高 ー 底 ー	肥前系	18C前	染付の皿。口唇部に口錆。内面植物と花文。素地は灰白色で、呉須は少しくすんで発色。	C 89V140G
13	磁器皿	底部 口 ー 高 ー 底 (5.8)	肥前系	19C初	染付の皿。内面は山水文。素地は白色で、呉須は少しくすんで発色。	2号屋敷
14	磁器壺	体部 口 ー 高 ー 底 ー	肥前系	18C前～ 中	外面は草花文。内面無釉。素地は白地で、呉須はうすく少しくすんで発色。	2号屋敷
15	陶器茶碗	口縁部～体部 口 (12.0) 高 ー 底 ー	瀬戸・美濃系	18C後～ 19C前	飴釉とうのふ釉の茶碗。素地は褐白色。	C 81III32G
16	陶器茶碗	口縁部～体部 口 (10.8) 高 ー 底 ー	瀬戸・美濃系	18C後～ 19C前	飴釉の茶碗。	C 81III22G
17	陶器茶碗	口縁部～体部 口 (10.2) 高 ー 底 ー	肥前系唐津	18C前	白化粧土を雑巾掛けののち、透明釉。素地は赤褐色。	C 84IV11G
18	陶器茶碗	口縁部～体部 口 (9.8) 高 ー 底 ー	肥前系	17C後～ 18C前	京焼風陶器。呉器手形の碗。細かな貫入が見られる。素地は淡黄褐色。	C 79III16G
19	陶器茶碗	体部～底部 口 ー 高 ー 底 (4.4)	肥前系	17C後～ 18C前	底部無釉で、高台をシャープに削る。刻印なし。素地は淡黄褐色で緻密。	C 79IV32G
20	陶器皿	口縁部～底部 口 (11.7) 高 1.8 底 (4.0)	瀬戸・美濃系	17C前	長珪石釉を内外面に施す。高台は削り出し。炆器質。底部にピン痕。	C 73III45G

V 江戸時代以降の遺構と遺物

番号	残存状態	大きさ	産地	年代	器形・文様・釉薬等の特徴	備考
21	陶器皿 口縁部 ～底部	口 (15.0) 高 3.5 底 (9.0)	瀬戸・美濃系	17C	型作りによる菊皿。内面に布目痕。飴釉と灰釉を施す。素地は淡黄褐色。	1号屋敷西側盛土。
22	陶器鉢	口 (30.0) 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	17C前	笠原鉢。長珪石釉と銅緑釉を施す。素地は淡黄褐色。	C65III52G
23	陶器片口鉢	口 — 高 — 底 (12.2)	瀬戸・美濃系か	明治以降	透明釉の片口鉢。底部無釉。素地は緻密で淡黄褐色。内面に重ね焼きの道具痕。	C85VI45G C86VI50G
24	陶器播鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	鉄(錆)釉の播鉢。素地は淡黄褐色。	C83III8G
25	陶器播鉢	口 — 高 — 底 —	瀬戸・美濃系	18C	鉄(錆)釉の播鉢。素地は淡黄褐色。	C67III56G
26	軟質陶器焙烙	口 — 高 — 底 —	不明		平底の焙烙。補修孔(径0.3)と、補修の際使用した銅線が残存。対となる補修孔の一部が残る。還元炎焼成に近い。	C79III29G
27	土製品釜輪	厚 1.20～3.00 幅 4.1	不明		外側の直径が(38.0cm)内側の直径が(27.0cm)を呈する。酸化炎焼成で無釉。	C67III56G

石製品

(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	形状・特徴等	備考
28	砥石	長 — 幅 3.5 厚 3.10 重 90	上、下を欠損する。側面の一面に、櫛歯状工具痕がみられることから18C後半～19C前半。	流紋岩 表採

金属製品

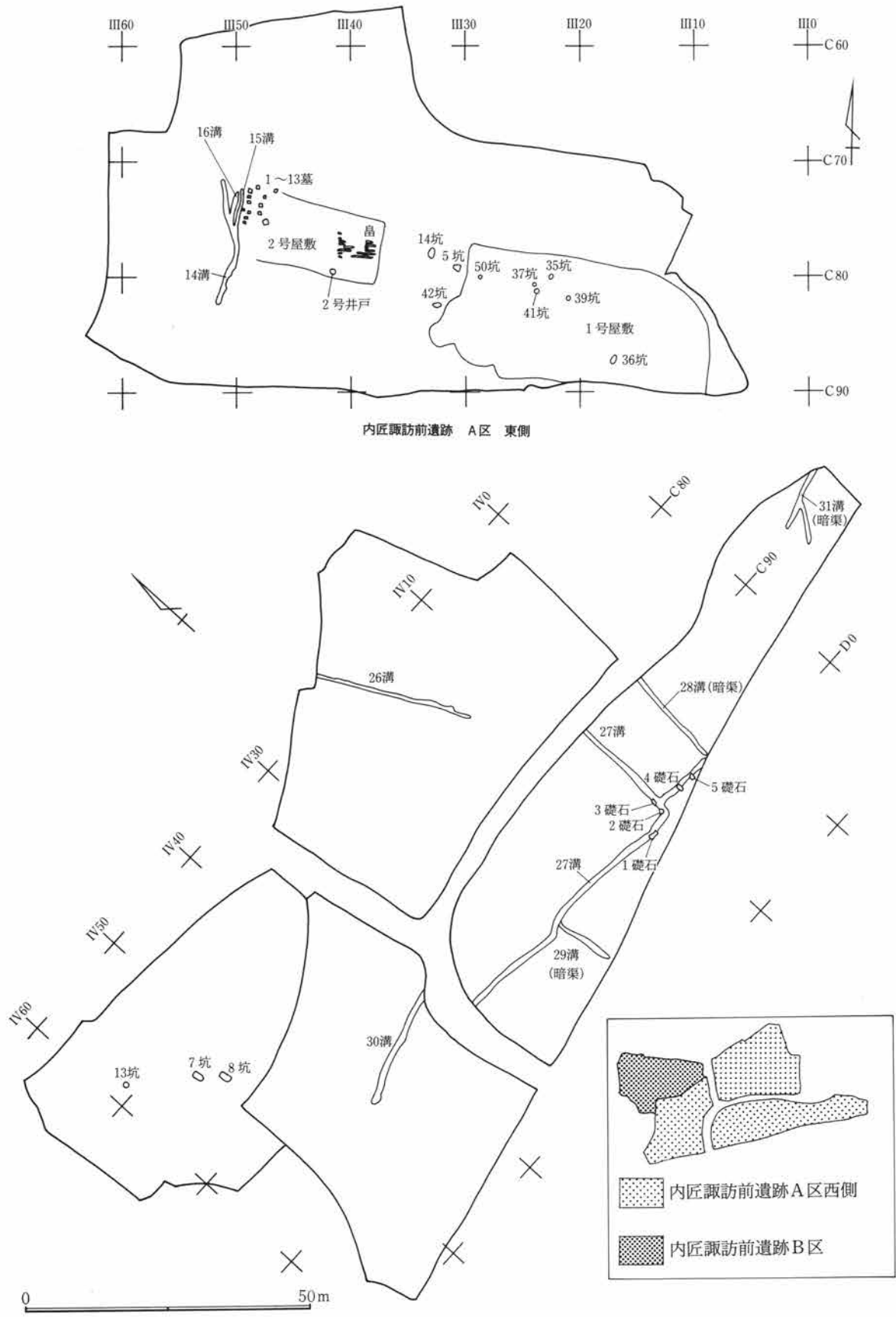
(単位: cm・g)

番号	種類	大きさ・重量	材質	形状・特徴等	備考
29	鉄砲玉	長 1.50 径 1.0 重 6.0	鉛	製作時の突起の痕跡が残存。完形。	D3V36G
30	鉄砲玉	長 1.30 径 1.3 重 15.0	鉛	製作時の突起の痕跡が残存。完形。	D38V76G
31	銭元豊通宝	厚 0.14 径 2.2	銅	ほぼ完形。方孔。北宋銭。	D19VI31G
32	銭寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	内匠諏訪前遺跡A区墓攪乱。土層。
33	銭寛永通宝	厚 0.13 径 2.4	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	内匠諏訪前遺跡A区表採。
34	銭寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	C81III18G
35	銭寛永通宝	厚 0.10 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	C80III31G
36	銭寛永通宝	厚 0.11 径 2.4	銅	古寛永。完形。方孔。銭背無文。	C80III18G
37	銭寛永通宝	厚 0.14 径 2.2	銅	新寛永か。完形。方孔。銭背無文。	C73III47G
38	銭寛永通宝	厚 0.12 径 2.2	銅	新寛永。完形。方孔。銭背無文。	C81III34G
39	銭寛永通宝	厚 0.14 径 —	銅	新寛永。欠残。方孔。銭背不明。	C85III36G
40	釘	長 — 幅 0.4 重 9.6	鉄	脚部の断面形が方形を呈する角釘。頭部を欠損。頭部は遺存状態が悪く詳細は不明。	1号屋敷西側盛土
41	煙管吸口	長 5.9 径 0.9 吸口径0.3 重 3.3	銅	最大径を羅字挿入口にもつ。口唇部にふくらみをもつ。	1号屋敷西側盛土
42	煙管雁首	長 4.1 径 1.0 火皿径1.3 重 6.0	銅	首部に肩をもつ。羅字挿入口の断面は六角形。羅字一部残存。	C80III32G
43	煙管吸口	長 4.8 径 1.0 吸口径— 重 4.0	銅	最大径を羅字挿入口にもつ。口唇部を欠損。口唇部の手前にかけてゆるやかにくびれる。	C80III51G

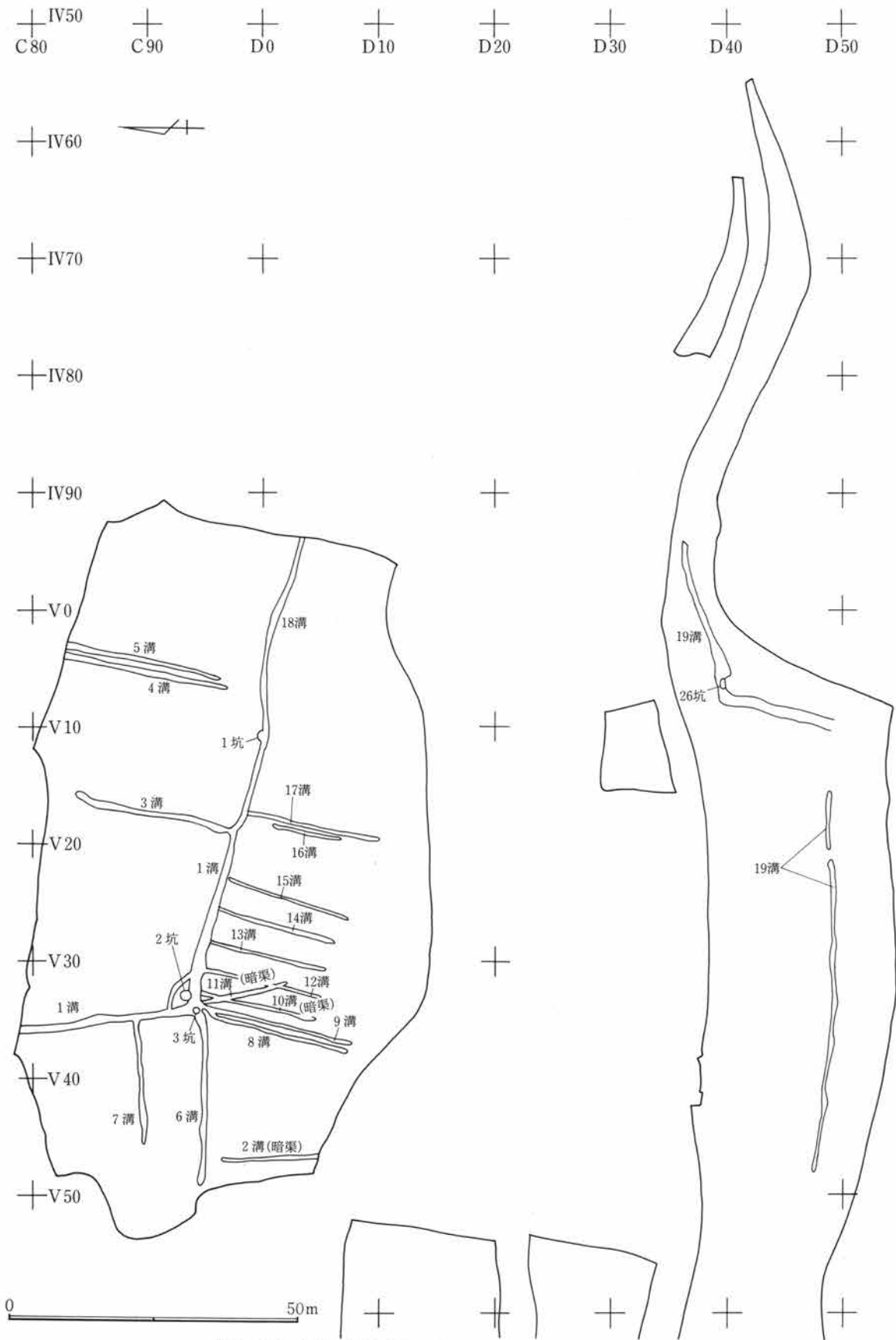
V 江戸時代以降の遺構と遺物

番 号	種 類	大 き さ ・ 重 量	材 質	形 状 ・ 特 徴 等	備 考
44	煙 管 吸 口	長 ー 径 1.5 重 6.0	銅	羅字挿入口が最大径よりすばまる。線刻を施す。つぶれて折れ曲る。	C82III25G
45	煙 管 吸 口	長 2.9 径 ー 重 4.0	銅	最大径を肩にもつ。つぶれている。ㄥ欠損。	C88III10G
46	煙 管 雁 首	長 5.3 径 1.1 火皿径ー 重 10.0	銅	火皿を欠損。脂返しはあまり湾曲しない。	D42V23G
47	煙 管 雁 首	長 6.4 径 1.0 火皿径0.9 重 8.0	銅	火皿を欠損。脂返しはあまり湾曲しない。	C83V7G
48	煙 管	長 12.0 火皿径1.0 吸口径0.2 重 19.0	銅	火皿の径が小さい。口唇部にふくらみをもつ。曲がっている。	内匠日影周地遺跡A区 表採
49	火 打 金	長 5.3 重 8.9	鉄	片端及び上部を欠損する。	C86III36G
50	小 刀 か	長 7.3 幅 1.5 重 9.3	鉄	大部分を欠損。	1号屋敷西側盛土
51	不 明	長 ー 重 6.0	鉄	切羽の一部か。ㄥ残存。	C84III38G
52	不 明	長 3.8 重 55.0	鉄	完形。中心部に円盤状の盛りあがりをもつ。留金具か。	D44V71G
53	不 明	長 ー 幅 2.2 重 17.5	鉄	大部分を欠損する。	C83III50G

V 江戸時代以降の遺構と遺物

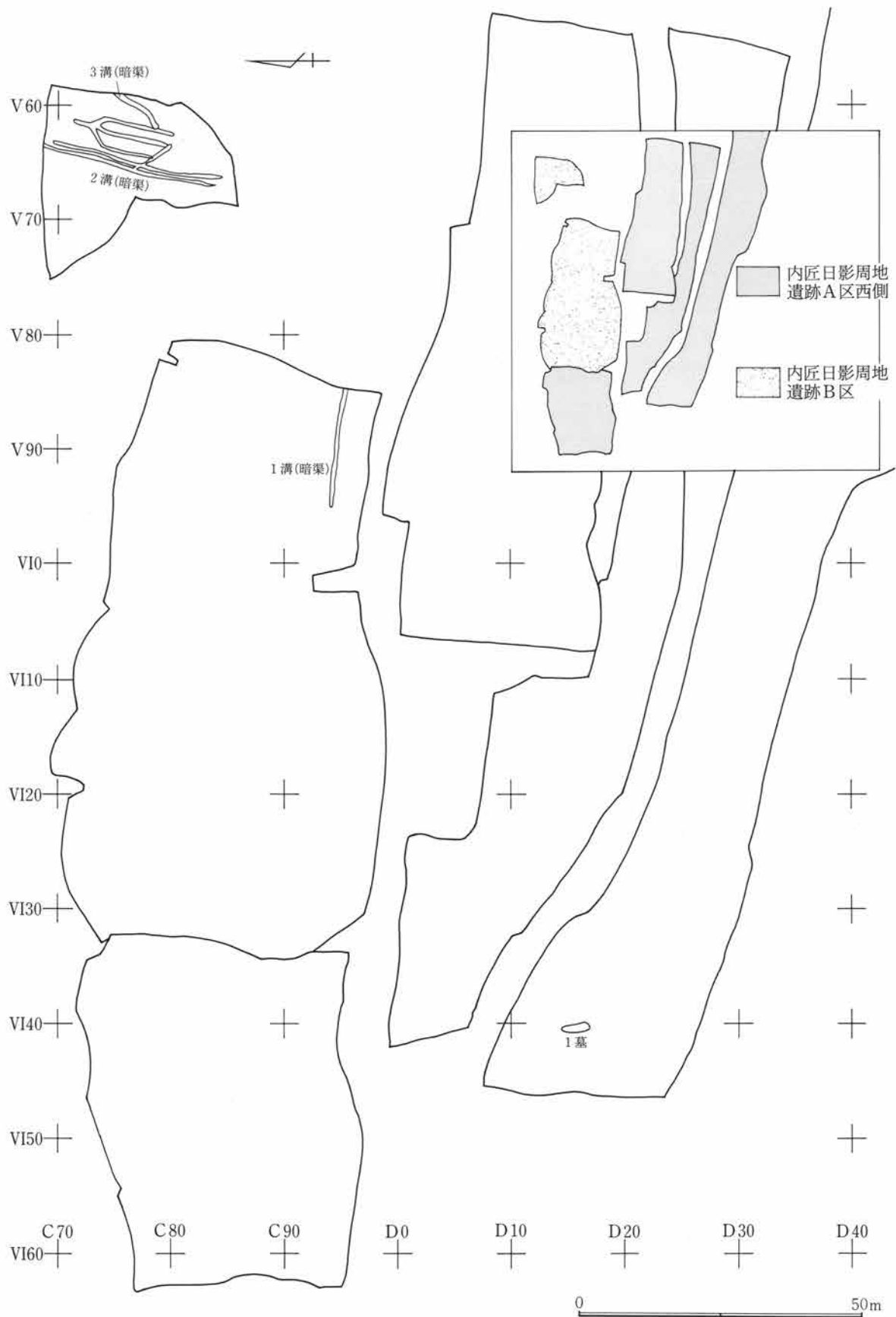


第201図 江戸時代遺構分布(1)・内匠諏訪前遺跡



第202図 江戸時代遺構分布(2)・内匠日影周地遺跡A区東側

V 江戸時代以降の遺構と遺物



第203図 江戸時代遺構分布(3)・内匠日影周地遺跡

## VI 成果と問題点

### 1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

本遺跡からは、縄文時代から近現代に至る様々な遺構と遺物が検出された。土地はその時代に応じて様々な土地利用が行われており、この地区においても例外ではない。関越道上越線に伴う発掘調査では、遺跡の名称を、現況の地形区分と遺跡の様相をもって、大字名と小字名を用いて遺跡名称としたために、「離れ山」丘陵内の遺跡には数多くの名称が付されている。しかしながら、地形が区分される隣接遺跡であっても、土地は時代によって同様の土地利用がなされていたり、異なったりするのが実態であるのは周知の事実であり、今回の報告においても、遺跡名称による区分が総ての時代における様相と合致しないことを注意しておきたい。このような前提<sup>(1)</sup>に立ち、ここでは各時代の土地利用の変遷に中心の視点を置き、遺構外遺物の分布などの事実を補いながら各時代における調査区内の様相について考えるとともに、住居群のありかたについても検討をおこなってみたい。なお、本遺跡の全体的な評価は「離れ山」丘陵上の隣接する地点の報告を待たねばならないが、詳細は今後の本報告に譲るとして、その概略は本編Ⅰ－4、「周辺の遺跡」を参照してほしい。

#### (1) 縄文時代

今回の調査で検出された遺構は、全調査面積が43,594㎡と広大であるにもかかわらず、竪穴式住居5軒、竪穴状遺構1基、土坑49基、埋甕1基、集石1基と少なかった。また、その帰属時期は、前期黒浜式期～中期五領ヶ台式期のいずれかの段階に限定される。ここでは、段階を追いながら、検出された遺構の様相と遺物分布の状況を重ね合わせて各時代の土地利用のありかたを考えてみたい。

**早期** 遺構は検出されずに、内匠諏訪前遺跡A区で土器が40点弱出土している（第204図参照）。段階的には早期撚糸文後半から沈線文前半で、11点出土した繊維を微量に含む楕円押形文土器もこの段階と考えられる。これらの土器は生活に伴う廃棄物であり、この地点で、早期の限定された土器型式期において、なんらかの居住活動が行われていたことを示しているといえよう。

**前期** 調査区域内で検出された遺構の一番古い段階は黒浜式期で、内匠諏訪前遺跡B区で2軒の住居と当該期の可能性が強い土坑が3基検出されている。遺構外出土の土器も、この段階は内匠諏訪前遺跡A区3点、内匠諏訪前遺跡B区50点、内匠日影周地遺跡A区19点、内匠日影周地遺跡B区2点と遺構分布に対応する出土点数をしめしている。

諸磯a式期は内匠諏訪前遺跡B区と内匠日影周地遺跡A区でそれぞれ1基住居が検出されている。土坑は2基諸磯a式の土器を出土しているが、いずれも小片である。内匠日影周地遺跡A区2号住居出土土器は肋骨文や波状文を施文する土器が主体を占めることから当該期の古い段階に、内匠諏訪前遺跡B区5号住居出土土器は木葉状入組文や爪形文が施文されることから諸磯a式後半～b式前半の土器様相である。遺構外出土の土器は、内匠諏訪前遺跡A区9点、内匠諏訪前遺跡B区6点、内匠日影周地遺跡A区12点で、ほぼ遺構分布に対応する出土点数であった。

諸磯b式期は、内匠諏訪前遺跡A区8号住居が検出された唯一の遺構である。8号住居出土土器は諸磯b式のなかでも新しい様相を示している。遺構外土器は内匠諏訪前遺跡A区7点、内匠諏訪前遺跡B区5点、内匠日影周地遺跡A区2点の出土であった。諸磯c式期は明瞭な遺構は検出されず、内匠諏訪前遺跡A区71号土坑覆土から1点、同地区から19点の土器が出土したにすぎない。いずれも当該期の古い

## VI 成果と問題点

段階に位置付けられる。

十三菩堤式期は内匠諏訪前遺跡A区10号住居(竪穴状遺構)が検出された唯一の遺構である。この段階の検出された遺構は、県内では類例が少ないが諏訪西遺跡(工事用道路)1号土坑が本遺跡例に近似する。遺構外出土土器は内匠諏訪前遺跡A区で4点、内匠日影周地遺跡A区・B区で各1点出土したにすぎない。

前期において検出遺構数が少なく、遺構数に対応するように遺構外土器の出土量が少ないという状況(第205～207図参照)は、調査区内の各細別土器型式期内で確認できた。遺構外出土土器の分布を考えた場合に、遺構の分布と遺構外出土土器の分布がほぼ対応することは、これらの土器がそれぞれの遺構にかかわりをもつ可能性が強い生活廃棄物であるといえよう。さらに、生活廃棄物が少ないことは、各段階における居住期間が相対的に短いことを示しており、少なくとも当該遺跡においては前期の段階において継続的な居住活動は行われていなかったことがわかる。

**中期** 五領ケ台式期の可能性が強い土坑が、内匠諏訪前遺跡A区で7基、内匠諏訪前遺跡B区で5基まとまって検出された。これらの土坑の周辺には縄文時代ではあるが時期不明の土坑が少なからず存在し、このような土坑も当該期の可能性が強いと考えられる。この段階における遺構外出土土器は内匠諏訪前遺跡A区341点、内匠諏訪前遺跡B区28点、内匠日影周地遺跡A区9点、内匠日影周地遺跡B区2点であり、土坑数に対応するように分布する傾向をしめしている(第208～210図)。さらに、遺構外出土土器の量は他の時期に比べ圧倒的に多く、土器が生活廃棄物であるという考えからすれば、土坑(用途は不明だが)を中心とはしているが、縄文時代の中で一番積極的な土地利用がなされた時期であるとも換言できる。しかしながら、出土した五領ケ台式土器は、今村啓爾氏による編年<sup>(3)</sup>にあてはめた場合には、I a式段階から五領ケ台式直後型式段階までを含んでおり、五領ケ台式期全般にわたる時間の累積の結

果として土坑群が形成され、遺構外遺物が廃棄されたと考えるべきであり、一時期に存在した土坑数は極めて少ないといえよう。

なお、勝坂式期以降晩期に至る土器片は、調査区内からは検出されなかった。このことは、該期において生活廃棄物を出す居住活動がこの地区では行われていなかった可能性が強いことを示している。

以上各時期における様相について述べてきたが、遺構に関していえば、形成された時期は限定され、しかも同時期に存在したであろう遺構数もきわめて少なく、出土土器(生活廃棄物)の少なさから存続期間も短いものであったことが確認できたと思う。このような状況が時期的、地域的な様相とどのようなかかわりを持つかが課題となろうが、残念ながら今回はそのゆとりを持ち得なかった。しかしながら、遺構が検出できなかった段階の遺物も含め、この課題にたいしては、まず個々の遺跡の実態がわかるような資料提示がなされねばならないことを、筆者自身の反省も含め指摘して終わりとしたい。

### (2) 弥生時代

今回の調査では、縄文時代終末～弥生時代黎明期から弥生時代終末～古墳時代前期初頭に至る遺構・遺物が検出されたが、その量的な主体は後期樽式段階で、他の時期は希少であった。ここでは時間的に前後するが、内匠日影周地遺跡A区の樽式段階の住居群(第214図)にかかわる問題について述べ、その後各段階の様相について触れていきたい。

#### 内匠日影周地遺跡A区の住居群について

##### (1) 出土土器の編年的位置付け

内匠日影周地遺跡A区における11軒の住居群を分析する前段の作業として、出土した土器群の編年的位置付けが明確にされねばならない。樽式土器の編年は近年、飯島克巳氏・若狭徹氏<sup>(4)</sup>と佐藤明人氏<sup>(5)</sup>による論文で三期区分が示されている。当遺跡が位置



する地域も、「鍋川流域」「甘楽地域」と表現こそちがうものの分析が行われている。2つの論文の目的は若干異なるものの、「樽式土器細分はほぼ相互に検証された<sup>(6)</sup>」と若狭氏が述べたように、その区分については概ね合致していると思われる。これらの成果に基づいて内匠日影周地遺跡A区出土の土器群を位置付けるとすれば、2期の後半ともいべき様相の土器群といえ、時間的にも限られた段階と思われる。

2期の後半とする根拠は、出土した土器群を飯島・若狭氏と佐藤氏がともに2期に位置付けた吉井町黒熊遺跡12号住居出土の土器群と比較した場合<sup>(7)</sup>、一部併行する可能性があるが全体的に後出する様相をもち、さらに3期までは下らないと思われるからである。

その理由として、①口縁端（上）部に帯状の波状文が施される土器（第37図1、第41図7・8、第43図13・14、第46図1）が少ないこと、甕においては、②胴上部に最大径をもつもの（第37図1・2、第43図3、第48図1）が少ないこと③口縁部から胴上部に施される波状文が多段にわたるものが多く、段が比較的意識されており、段が交差する場合においても交差が少ないこと④量的には少ないが、櫛描による崩れた斜格子文が施される（第46図4、第53図1、第57図3）こと、壺においては、⑤篋描鋸歯文（第37図3、第41図7）と⑥胴部への貼付文（第37図4、第41図7、第43図4）などがあげられる。（時期的な区分とかかわるか不明だが、日影周地遺跡A区の土器群の特徴として、簾状文を施すものが少なく、複合口縁の土器が1片も存在しないこともあげられる。）

以上、出土した土器群の全体的な編年的位置付けについて述べた。また、出土した土器を新旧の要素から分離できるかもしれないが、同一住居内出土土器の位置関係（例えば床直上と埋没土上層など）からみていくと、混在した状況であり、必ずしも明瞭な差異をみいだすことはできなかった。このことは、新しい要素をもつ土器も、古い要素をもつ土器も同

一時間軸上では同時に使用されていた可能性が強いことを示唆していると思われる。

## (II) 住居群の分析

11軒の住居群を分析する場合、まず同時存在の住居を確定していく作業が重要となる<sup>(9)</sup>。一般的な手法により出土土器の様相から住居の時期を分離させることができればよいのだが、前述したように本遺跡の場合、筆者の力量不足もあり現状では難しそうである。つまり、土器からは11軒が同時期に存在した様相しか導きだせないし、現実には11軒の住居は重複していない（第214図）。それでは、単純に11軒が同時に生活を営んでいたかという、その可能性は弱い。なぜならば、a. 住居間の遺物接合（第215図）、b. 住居の位置関係などから11軒の住居群に時間差が想定されるからである。以下、その根拠について述べておく。

### a. 住居間の接合について

異なった住居から出土した遺物が接合することは、一部自然条件に起因する場合も想定されるが、多くの場合は人為的な作用（＝廃棄行為）に起因する可能性が強いと考えている。

住居間の接合は5例確認できた（第215図参照）。まず、4住を中心とした関係をみていこう。4住は3住、5住、8住と接合関係（個々の遺物の出土位置は本文中各遺構図参照）がある。4住と3住では、3住3と3住19が接合資料である。両者の遺物は、4住からは床直上、3住からは埋没土下層から出土している。このことから、4住の埋没土が形成されず3住が埋没している段階で、遺物が3住と4住に廃棄された状況が想定されることから3住→4住という関係が導き出せる。

4住と8住の接合資料は8住1の台付甕1点だけである。両者の住居ともに埋没土中層からの出土であることから、この場合にはむしろ時間差を想定しづらく、同時存在の可能性が強い状況といえよう。

4住と5住の接合資料は4住12の壺である。この場合、残念なことに5住からの出土位置が不明なために両住居の関係は不明である。

## VI 成果と問題点

他の住居間接合として10住と15住の接合例がある。15号住12の高坏がそれにあたるが、10号住からは床直上、15号住からは埋没土下層から出土している。この場合は、3号住と4号住の接合関係と同様の事例であることから15住→10住という関係が想定される。

### b. 住居の位置関係

住居が重複する場合には明らかに時間差が存在するが、11軒の住居間には重複関係はない。しかしながら、火災延焼の危険の分散や家屋の軒先の存在(仮に周堤帯が存在するとしても)などを理由として極端な近接関係にある住居の同時存在はありえないと考えられる。<sup>(10)</sup> 具体的にその距離を明示できないが、今回の場合には4住と18住の距離が約70cmであることから両住居の同時存在の可能性は弱く、時間的前後関係が想定される。また、住居間距離から同時存在が疑問視される住居として、8住と9住(2m50cm)、15住と16住(4m50cm)、12住と17住(4m90cm)、があげられる。さらに興味深いことに、この4例はいずれも住居間の遺物接合関係をもっていない。時代は異なるが、縄文時代中期の集落を分析した黒尾和久氏は「近接住居に接合関係が認められないのであるから、住居の近接は、住居の重複に準じて時間の断絶を物語る考古学的情報である」と述べ、遺物接合関係から近接住居の同時存在を否定している。<sup>(11)</sup> この理解にたてば、本遺跡の接合関係を持たない近接住居は接合関係からも、同時存在の可能性は弱いといえよう。

以上、11軒の住居群がすべて同時に存在しないと考えられる根拠について述べた。

この中で、唯一同時に存在した可能性が強い4住と8住を例にとり、他の住居とのかかわりをみていきたい。4住と8住が同時存在とした場合、その住居間距離(約33m)、住居面積、主軸方位、単位性が意味するものは大きいと思われる。つまり4住と8住をモデルとして、同様の関係を有する2棟1組が抽出できる可能性を示していると考えられるからで

ある。住居面積については、11軒が3つのグループに別れることは既に述べた(本文III-2)が、大きくみれば大規模住居(40㎡以上)が6軒、中小規模住居(20㎡未満)の住居が5軒であり、興味深いことに大規模住居と中小規模住居の数がほぼ同じである。4住(19.1㎡)と8住(推定46㎡)の同時存在から住居規模が時間差を示すものではなく、2棟1組の住居が大規模住居と中小規模住居からなる可能性が示された。さらに、その方位も4住(N-12°-W)と8住(N-12°-E)の違い(24度)が許容範囲と仮定できよう。<sup>(12)</sup> このような視点から、他の住居について2棟1組を可能性として抽出してみると、3住(48㎡)と18住(推定16.2㎡) 住居間距離 約13m、9住(17.5㎡)と16住(推定69㎡) 住居間距離 約45m、10住(推定52㎡)と12住(10.1㎡) 住居間距離 約33m、15住(10.0㎡)と17住(推定59.5㎡) 住居間距離 約45mとなる。ただし、明らかに方位が異なる5住の存在と、3住と18住の住居間距離が比較的短いことが問題点として残る。

不十分ではあるが11軒の住居群について分析を試みた。その結果として同時期にどれだけの住居数が居住していたか不明であるが、最低2期にわたって、主軸方向がにている規模の異なる2棟1組の住居群が存在していた可能性を示すことができた。このことが、他の遺跡に於ける状況といかなる関連をもちうるのか、また2棟1組の意味するものについては今回分析できなかったが、今後の課題として考えていきたい。

### 各時期の様相

**縄文晩期終末～弥生時代黎明期** 内匠日影周地遺跡 A区15号土坑から、縄文晩期終末～弥生時代黎明期に位置付けられる土器群が出土している。土器の分布は、中期の遺物とともに図化したため図上であらわすことができないが、第216・217図の大半と第218図の南側2カ所の集中地点は当該期である。当該期において遺構・遺物の検出例が少ない状況と、当遺跡の様相がどのようなかかわりをもちうるかについ

## 1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

て述べる力をもたないが、このような状況が存在していることをまずは認識することが重要ではなかろうか。

**中期** 当遺跡の中期は、前半と後半に分けることができる。前半唯一の遺構及び遺物は、内匠諏訪前遺跡A区64号土坑と出土した壺で、遺構外から土器は検出されなかった。このような状況は、先に述べた晩期終末～弥生時代黎明期と近似したものとして理解できる。後半では、内匠日影周地遺跡B区4号住が存在する。該期の遺構外出土土器は、内匠日影周地遺跡B区の2つの谷地から多く出土している（第218図のC80以北の2カ所の集中地点）。この2つの谷地は、内匠日影周地遺跡B区4号住の下位に位置することから、住居の土器捨て場であったと考えられる。

**後期** 内匠日影周地遺跡A区の住居群については前述したように、最低2時期にわたる住居が指摘できる。この場合、最低2時期が時間的に連続するかは不明である。遺構外出土土器からこの住居群をとらえてみると、出土量が少ないことから（第219・220図）、長期にわたる継続的な居住域とするには無理がある。他の樽式段階の住居としては内匠日影周地遺跡B区8住がある。この遺構は、住居かどうか疑問があるが、時間的には出土土器に等間隔の簾状文がみられることから、樽式2期と思われる。この遺構については、その機能を考えるうえで今後の類例を待ちたい。

**弥生時代終末～古墳時代初頭** 内匠日影周地遺跡B区2号住が当該期に位置付けられる。土器群にみられる外来系土器及び樽式的要素は、当地域の古墳時代成立に至る過程を考えるうえで重要な問題が内包されていると思われる。また、この土器群に縄文系土器がみられない点も興味深い。本遺跡だけで語れることは少ないが、当該期の住居が1軒だけであったことを考えると、今後資料の増加により古墳時代成立に関する小地域の分析がなされる際には、土器群の様相とともにその集落規模についても併せて考えられなければならないだろう。

### (3) 古墳～平安時代

古墳時代前期から平安時代までの遺構や遺物は、多数の土器型式の欠落期を含みながら、検出されている。以下段階を追いながら述べていきたい。

**古墳時代前中期** この段階の遺構と遺物は内匠日影周地遺跡でしか検出されていない。地形との関係で検出された遺構をながめると、馬背状丘陵の背の部分に方形周溝墓1基（前期）と古墳1基（中期）が検出されているのに対して、住居は丘陵北側の緩斜面上に立地するという明瞭な差異をみいだすことができる。前期の住居はA区1住とB区5住（?）、中期の住居はB区3号住（?）であり、いずれの時期も小規模な居住の様相が浮かびあがる。さらにその居住期間も、生活廃棄物である遺構外出土土器の量的分布（第223図）から、短かったであろうと推定される。

**古墳時代後期** 6世紀末～7世紀前半とおもわれる住居が内匠諏訪前遺跡ではA区で8軒（1住・2住・3住・4住・5住・6住・7住・9住）、B区で2軒（1住・3住?）、内匠日影周地遺跡ではA区で6軒（6住・7住・11住・13住・14住・19住）、B区で2軒（1住?・6住?）検出されている（第107～109図）。一部に残存状況が悪く実態が不明な住居もあるが、検出住居数からいえば古墳時代の中ではもっとも居住活動が活発であった時期である。この中で、視覚的には内匠諏訪前遺跡A区を除けば、他地区では住居が散在するような状況で検出されている。

ここでは、内匠諏訪前遺跡A区の住居群にかかわる問題について述べておきたい。

### 内匠諏訪前遺跡A区の住居群（第221図）について

8軒の住居群は、おおむね6世紀末～7世紀前半の土器群を出土している。さらに、出土した土器群からは明瞭な時間差を想定できないが、住居間の遺物接合関係（第222図）から時間差が想定される。住居間接合は5例確認できたが、この中で3例は4住と9住との間で確認された。この3例について土器

## VI 成果と問題点

が廃棄されたであろう時期及び出土位置をみてみると、4住（第76図）では、ほぼ住居が埋没しきった段階での廃棄であるのに対して、9住（第84図）では埋没土下層からの出土であることから住居埋没の早い段階での廃棄と考えられる。以上から、4住→9住という時間の差が想定できよう（4住よりも9住のほうが高位に立地することから、埋没も4住のほうが早く埋没する要因をもつことも事実である）。住居群が最低2期にわたる可能性については述べたが、それではどの住居が同時存在として考えられるのであろうか。住居間接合からは同時存在の住居を導き出すことはできなかったが、他の要素として、各住居の竈位置に注目してみたい。

住居群は竈位置において東西南北の4つのパターンが存在する。調査時には江戸時代の屋敷地造成のために削平を受けていたが、本来は北側に向かう斜面であり、ほぼ同一地形上に立地していたと考えられる。同じ地形で竈位置が異なるということは、この中で同じ竈位置を有する住居は類似性が強いことを意味する。そこで、竈位置から類似性の強い住居を抜き出し併せてその住居間距離を示すと、1住と6住(20.5m)、3住と9住(18.6m)、4住と5住(27.6m)となる。この住居間距離は先に弥生時代の住居群で分析した距離と類似することから、結果として導かれた2棟1組がそれぞれ同時に存在していた可能性を示唆しているのではなかろうか。

ここでは、竈位置と住居間距離から同時存在の住居を想定してみたが2住と7住については不明であるし、他の同時存在を導き出す手段をもちえないため可能性の指摘に留めたい。

しかし、8軒すべてが同時に存在した可能性は極めて弱く、同時に存在したであろう住居の様相は、他の調査区とあまりかわらない散在する状態であったことが想定されたと思う。

**奈良時代** 今回の調査では、奈良時代と思われる遺構は検出されず、遺構外も含めて遺物も出土しなかった。前述した古墳時代後期の様相とは大きく状

況を異にしている。

**平安時代** 僅かではあるが、9C～10Cの遺構と遺物が検出されている。遺構で特徴的なものは土坑で、多くが完形の坏や高台付壺を1～4点伴って出土している。内匠日影周地遺跡A区18号土坑（第115図）がその代表的な土坑であるが、この場合は埋没土から墓としての機能が想定されよう。さらに、土坑は検出されなかったものの、その特徴的な遺物出土の様相から1号方形周溝墓や内匠日影周地遺跡A区13住にも同様の土坑が存在していた可能性が強いと考えている。平安時代において調査区が居住にかかわる土地でなかったことは、遺構外出土土器の量的な希少さ（第227・228図）からもうなずけよう。

以上、古墳時代～平安時代の様相について触れたが、住居が構築された時代は限定され、その規模も小さく、居住期間も短かったであろうことが想定できたとする。また、住居が構築されなくとも墓域などとして利用される時代もあれば、遺構外遺物さえも出土しない時代も存在するという状況も確認できた。この結果について、時間的・地域的視点からの考察を述べることは今回できないが、幸いなことに「離れ山」丘陵では当該期の遺構は比較的多く検出されていることから全体の報告を待って検討したいと考えている。

### (4) 江戸時代

江戸時代において居住にかかわる土地利用として、2号屋敷の成立（18C前～中葉）と廃絶（1783年に近い段階）、1号屋敷の成立（1783年以後）と廃絶（19C前半か）があげられる。

ここでは、(I)2つの屋敷跡について性格付けとそれぞれの比較から問題点を指摘し、(II)居住以外の土地利用について考えてみたい。

#### (I) 屋敷について

まず、2つの屋敷の性格であるが、江戸時代の内匠

## 1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

村が西上州の一般的な農村であったことや、立地する場所から商家などの可能性は弱く、職種を特定するような遺物がみられないことなどから農民の屋敷と考えると差し支えないと思われる。(1号屋敷については、『群馬縣北甘楽郡史<sup>(14)</sup>』に「傳へいふその昔大なる酒藏家ありてこの井水(1号屋敷1号井戸—引用者)を醸造に用ひたるなりとか。」と記載があり、酒屋としての伝承を伝えているが調査結果からは、その可能性は極めて弱いと考えている。)農民が新たに屋敷をつくる際には、さまざまな場合と要因が存在すると考えられるが、本遺跡のように今まで居住者がいない丘陵上に新たに屋敷をつくるとなると入植的な意味合いが少なからず存在した可能性を指摘できよう。

次に、2号屋敷と1号屋敷を比較して内包する問題点について考えてみたい。

2つの屋敷跡は、①屋敷地規模と②桶埋設土坑に明瞭な差異をみいだすことができる。

### ①屋敷地規模について

平坦面の広さを比べると、1号屋敷地(推定1373㎡)は2号屋敷地(推定238.4㎡)の約5.8倍の広さをもっている。それぞれの屋敷地は斜面を造成して平坦面が形成されていることは既に述べたが、両屋敷地の造成にかかわる労力は、1号屋敷の西側に造られた土壘状施設の存在から単に面積による比較以上の違いがある。2つの屋敷における農民がどのような階層であったかは不明だが、屋敷地規模の違いを年代差として理解すると、本遺跡の場合、2号屋敷地造成時(18世紀前～中葉)から1号屋敷造成時(1783年以降)に至る間において屋敷造成に費やすことができる労働力が増加したといえる。このことは単に屋敷地造成だけでなく、農耕や開墾にもあてはまる可能性が指摘できる。

### ②桶埋設土坑について

桶埋設土坑は2号屋敷地で1基、1号屋敷地で11基が検出された。2号屋敷の1基はその位置から便所と考えた(当然、肥料として利用されたとおもわれる)。1号屋敷の場合は溝と重複関係をもつものも

存在することからすべてが同時に存在した可能性は弱く、すべてを便所と考えることはできない。この、桶埋設土坑の用途については深谷克己氏が「商業的農業と生産技術<sup>(15)</sup>」の中で次のように述べている。

「人馬のこへはかぎり有事に候得ば、作りこへを致すへし「憐民撫育法」『近世地方経済資料』六、二〇三頁)という記述はその考え方を示す。これは穴を掘って桶を伏せ、水を入れ草を刈りこんで肥料を作ることを指示したものだ(以下略)」

このような用途が想定されるならば、1号屋敷で検出された11基の桶埋設土坑の大半は「作りこへ」の施設と考えられる。そして、桶を埋設する土坑が1号屋敷地において増加しているということは、少なくとも本遺跡内においては1783年以降において農作物に施す肥料の質及び量が増加したことを示す可能性が強いことを意味すると考えられる。

以上、両屋敷の違いから想定される可能性について触れたが、補足として2号屋敷の場合、想定される建物が母屋、便所、井戸の上屋であるのに対し、1号屋敷はこれ以外の建物(1号建物、2号建物)が存在することも大きな違いであることを指摘しておきたい。

今回は両屋敷の違いを年代差として認識して考えをすすめたが、当然階層差の有無が問題となろう。この点については、今後の調査事例の増加を待つて再度検討する必要性を強く感じる。

### (II) 土地利用について

平安時代以降江戸時代に至る間において、遺構は検出されず、遺構外から宋銭1枚(元宝通宝 初鑄1078年)と1号屋敷の混入として13世紀代に比定される緑釉の盤が1点出土した。

以下、江戸時代以降の、居住以外の土地利用について述べていきたい。

明治5～6年(1872～1873年)に作成された壬申地籍図(第232図)では屋敷地周辺の多くは「新下畑」の地目となっている。「新下畑」とは、江戸時代のあ

## VI 成果と問題点

る段階で土地が開墾され下畑して農地になったことを示唆していると考えられよう。一方、慶長10年(1605年)の「内匠村、御検地御水帳」<sup>(16)</sup>には、他の小字が農地として記載されているにもかかわらず諏訪前や日影周地といった小字はみあたらないことも、このことを間接的ながら裏付けているのかもしれない。

考古学的な情報から上記のことについて、土地利用の変遷を追ってみることにする。

17世紀代の遺構としては、内匠諏訪前遺跡A区28号溝と内匠日影周地遺跡A区11号溝がある。いずれも石組の暗渠であり、石組の中から当該期の遺物が出土していることから遺構の年代としても有効性をもつと思われる。暗渠が農業に伴う排水施設とすれば、暗渠設置時での開墾行為が想定される。遺構外出土遺物において17世紀代のもは極めて少なく、図化できうるものについては図示した4点(第199図10、20、21、22)だけであった。

18世紀以降のなかで年代を特定できる溝や土坑はない。しかしながら、18世紀以降から幕末にかけての遺物自体は僅かだが、土坑、溝、遺構外から出土している。溝・土坑・遺構外から碗や皿といった生活雑器が出土することをどのように解釈すべきかについて明解な答えを用意できないが、なんらかの人的活動に伴って結果的(自然現象などにより)にその地点で検出されたであろうことは確かである。

屋敷地以外の遺構や遺物からは17世紀において開墾が行われ、その後も幕末まで人的な活動がなされていたことが確認できた。

それでは、17世紀の暗渠設置時において調査区内が一様に開墾されたかとなると不明である。むしろ、前述した屋敷跡の存在やその規模(屋敷内施設を含む)から考えると、段階をおいながら徐々に開墾がすすみ、最終的に壬申地籍図にみられるような状態になった可能性が強いと思われるが、屋敷地の存在以外にその積極的な根拠がないことからここでは可能性の指摘にとどめ今後の課題としたい。

## 註

- (1) この点については土井義夫氏の指摘(土井 1989)がある。
- (2) 小野和之他 1986 (3) 今村 1985
- (4) 飯島・若狭 1988 (5) 佐藤 1988
- (6) 若狭 1991 (7) 茂木 1983・1984
- (8) 特に甕や台付甕においてこの特徴は顕著である。
- (9) 同時存在の住居を模索する際の方法論として「宇津木台遺跡群IV」などを参考とした。
- (10) 地域は異なるが、この点については藤田憲司氏の論考が注目される。(藤田 1984)
- (11) 黒尾 1988
- (12) 方位を規定する要因としては、まず地形があげられよう。内匠日影周地遺跡A区の場合、ほぼ同じ斜面であることから、にた方位を示すのはある意味では当然かもしれない。しかしながら、3・4・18住の場合は隣接しながらも(ほぼ同様の地形でありながらも)方位が著しく異なることから、必ずしも地形だけが方位を規定するわけではない。
- (13) 方法的には前述した弥生時代後期の住居群分析と同様である。
- (14) 本多亀三 1928 (15) 深谷克己 1983
- (16) 富岡市史・近世資料編に記載されている。

## 引用・参考文献

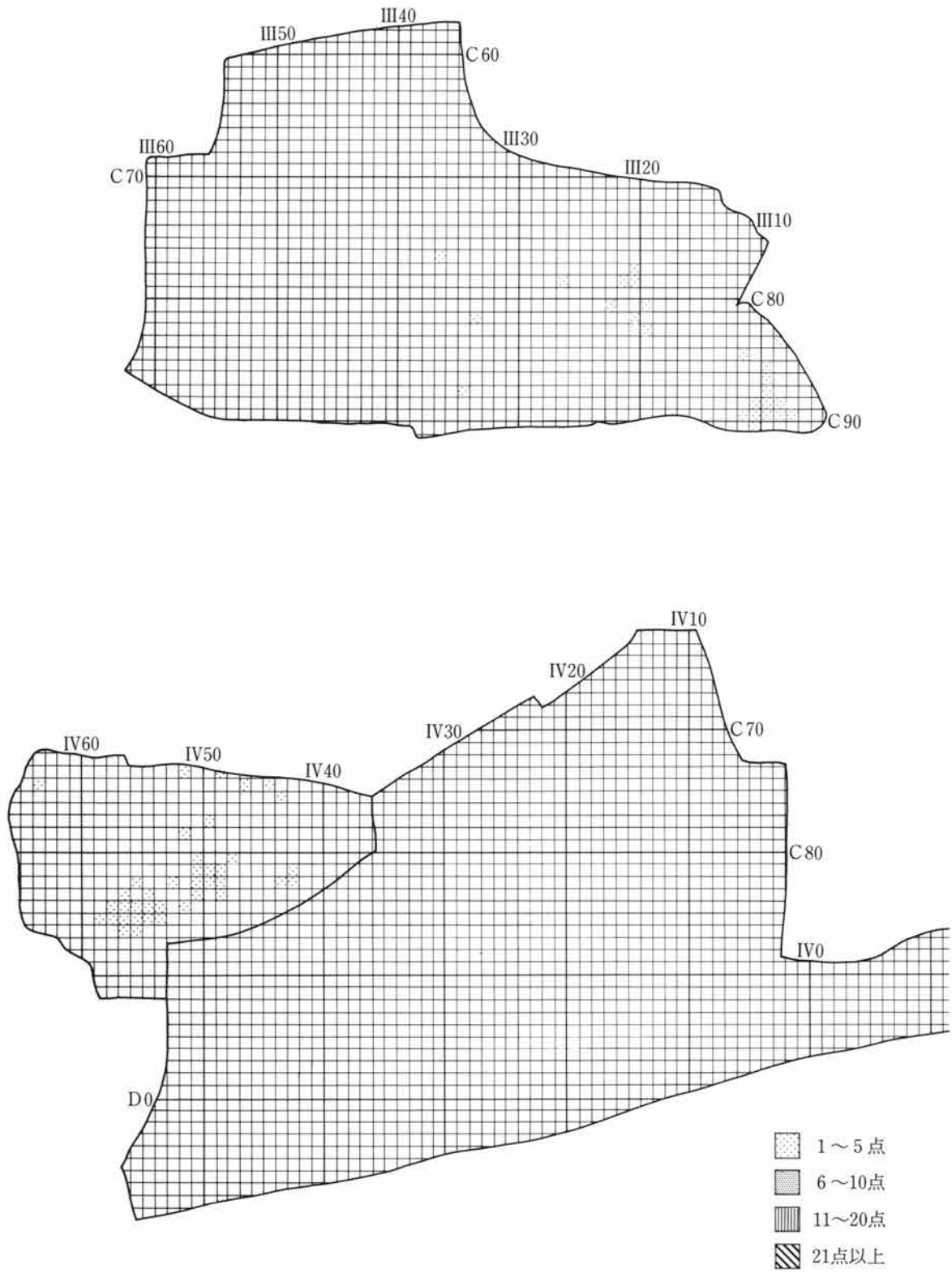
- 飯島克己・若狭 徹 1988 「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9 信濃史学会
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器編年 その細分および東北地方との関係を中心に」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号
- 小野和之他 1986 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1988 「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 黒尾和久 1988 「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』No.454 校倉書房
- 戸井晴夫・塩野崎直子・渋江芳浩 1984 「宇津木台遺跡群」IV 八王子市宇津木台地区遺跡調査会
- 富岡市市史編さん委員会 1987 『富岡市史・近世資料編』富岡市
- 土井義夫 1989 「考古学方法論ノート(3)」『貝塚』43 物質文化研究会
- 深谷克己 1983 「商業的農業と生産技術」『講座・日本技術の社会史』第1巻農業・農産加工 日本評論社
- 藤田憲司 1984 「単位集団の居住領域―集落研究の基礎作業として―」『考古学研究』122 考古学研究会
- 本多亀三 1928 『群馬縣北甘楽郡史』
- 茂木由行 1983 『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3)―図版編―』吉井町教育委員会
- 茂木由行 1984 『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3)―本文編―』吉井町教育委員会
- 若狭 徹 1991 「弥生時代」『群馬文化』第228号 群馬県地域文化研究協議会

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



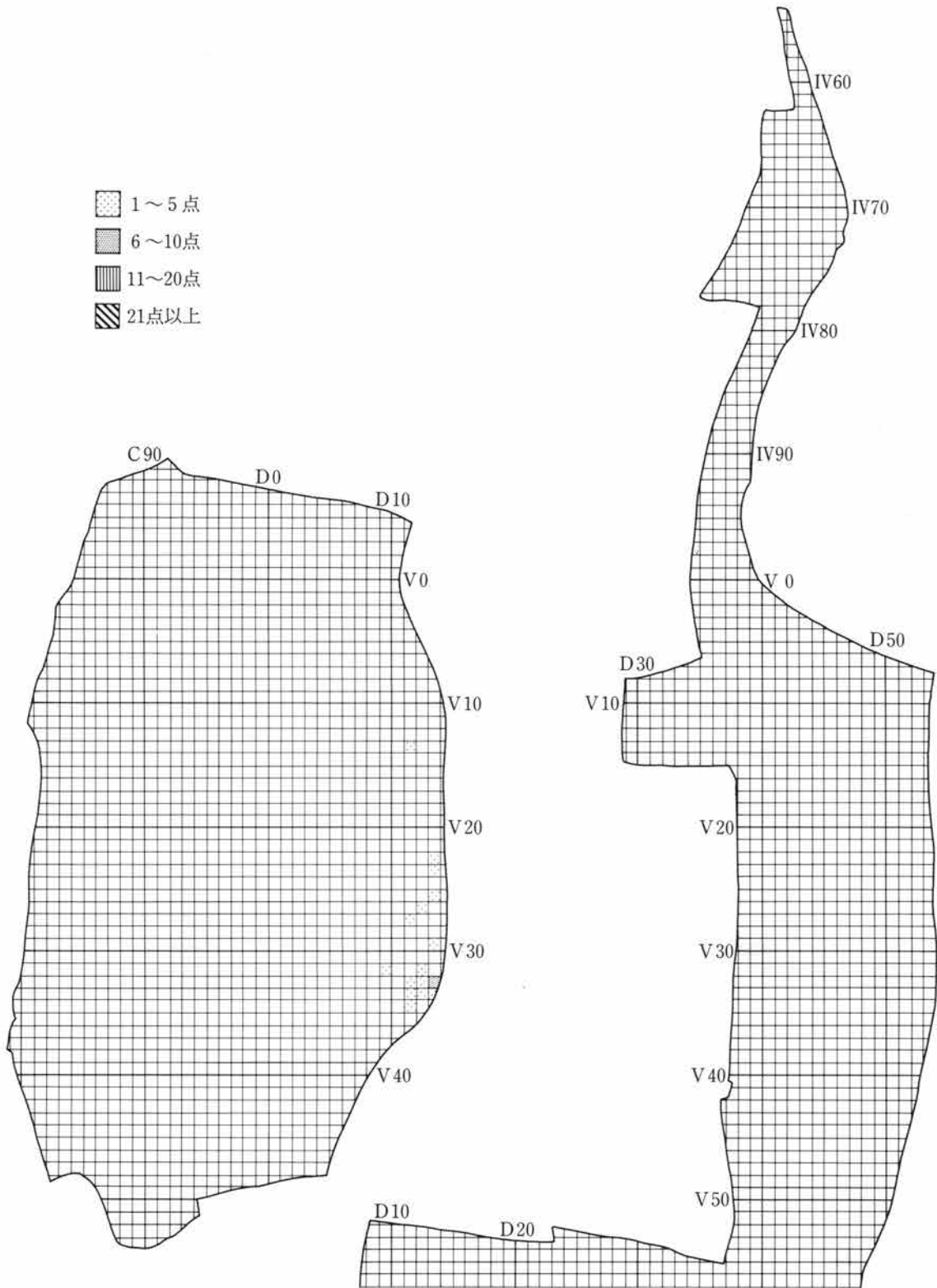
第204図 縄文時代早期土器のグリッド別分布

VI 成果と問題点



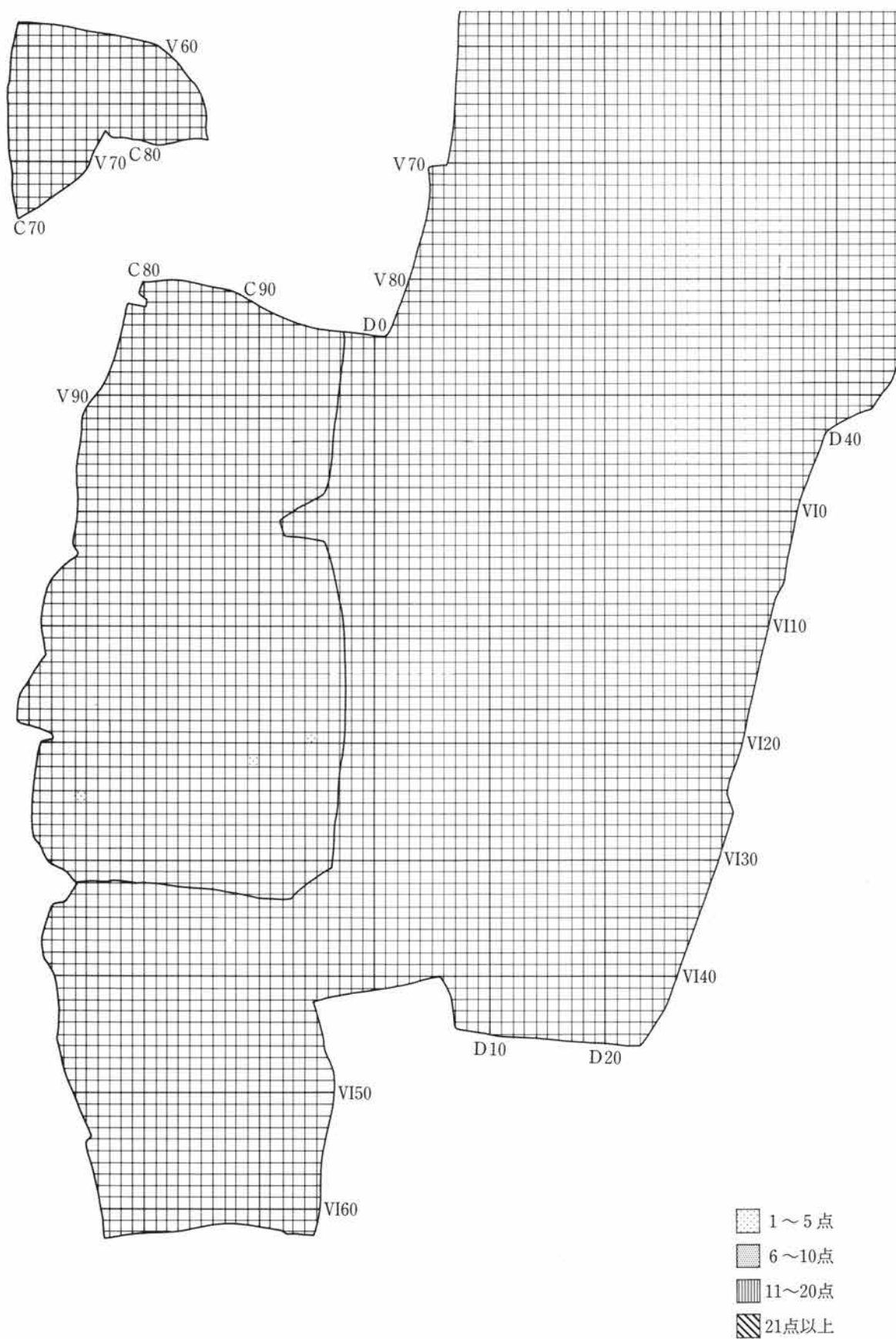
第205図 縄文時代前期土器のグリッド別分布(1)





第206図 縄文時代前期土器のグリッド別分布 (2)

VI 成果と問題点



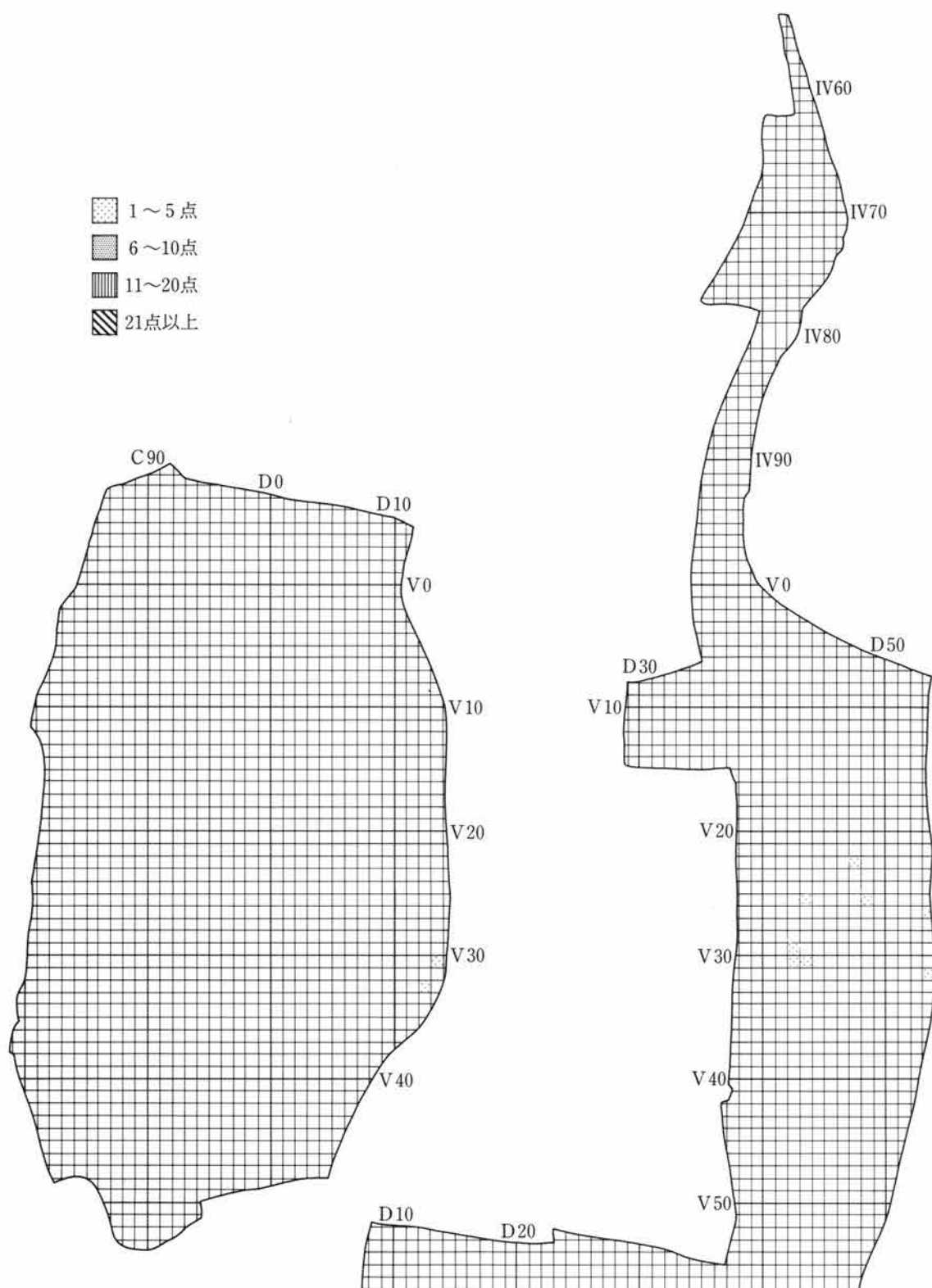
第207図 縄文土器前期土器のグリッド別分布 (3)

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



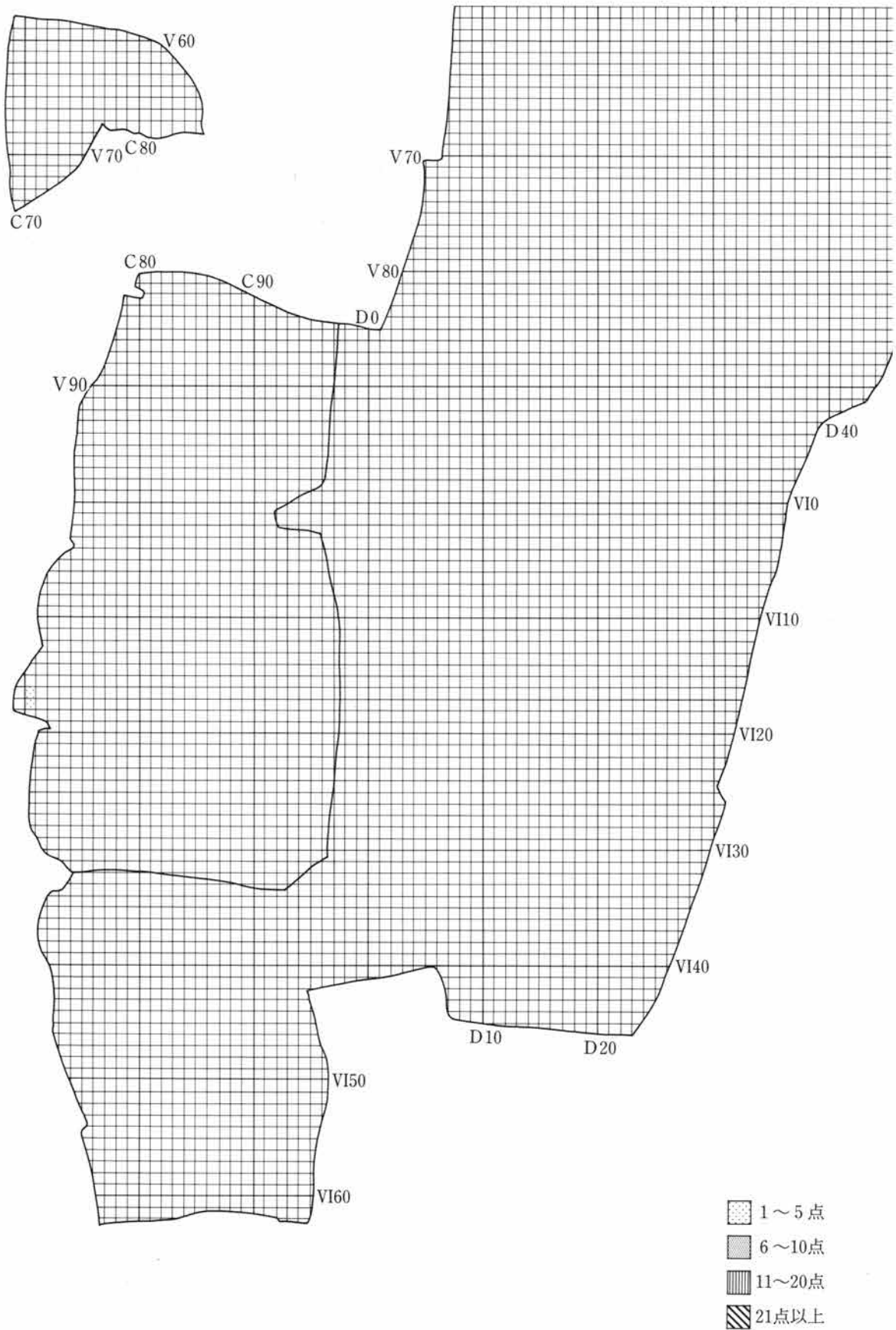
第208図 縄文時代五領ヶ台式土器のグリッド別分布 (1)

VI 成果と問題点



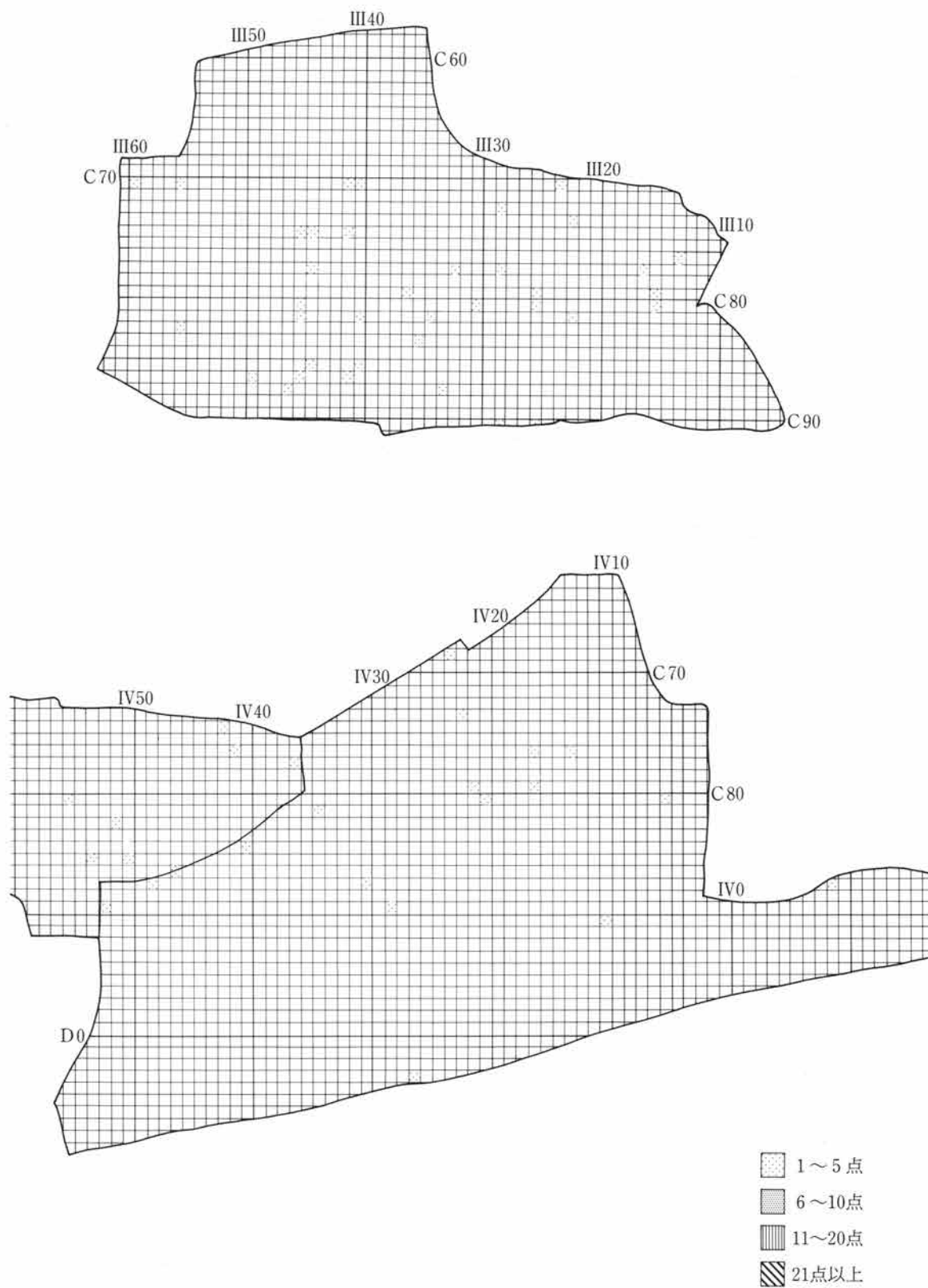
第209図 縄文時代五領ケ台式土器のグリッド別分布（2）

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

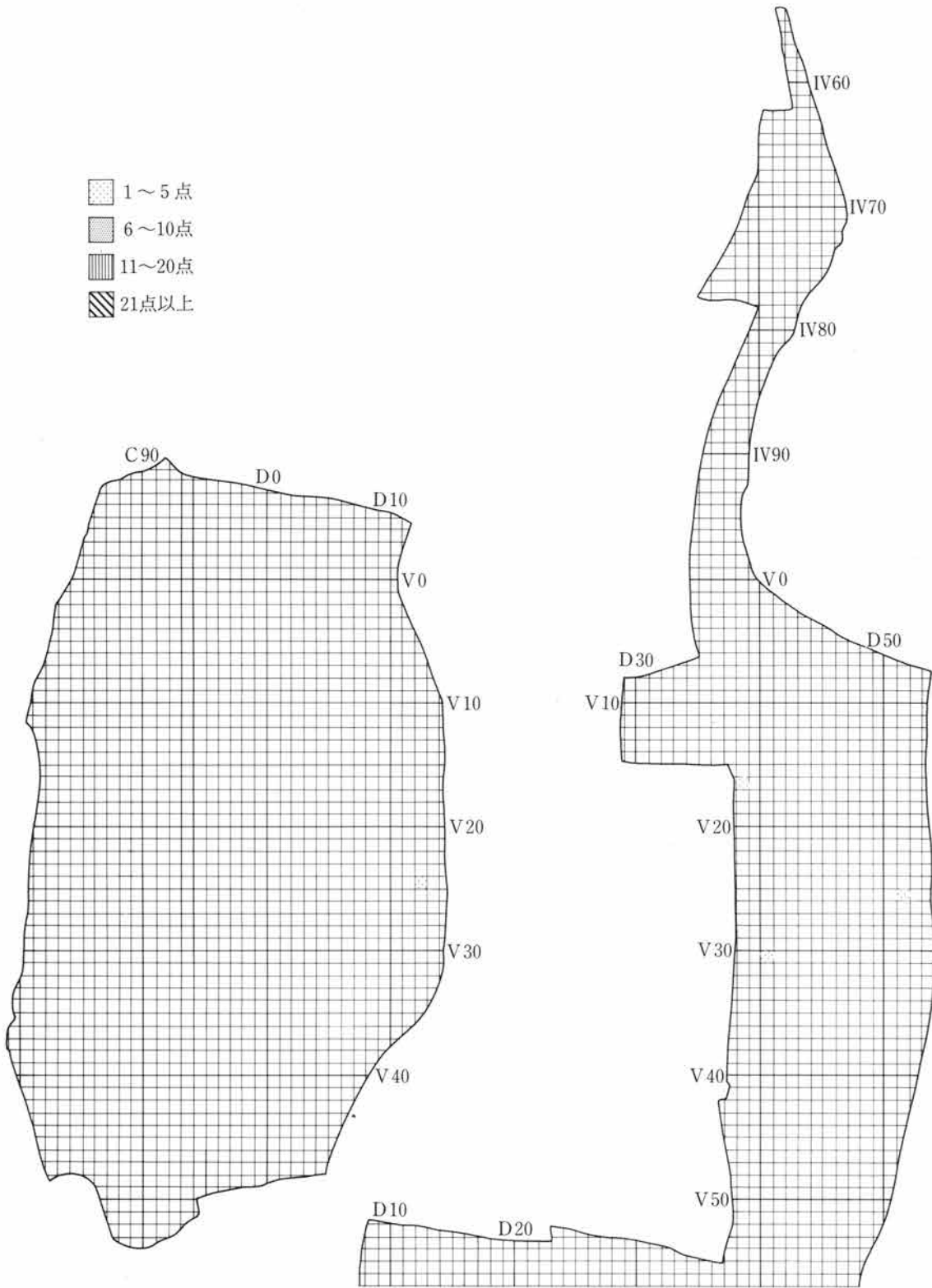


第210図 縄文時代五領ヶ台式土器のグリッド別分布 (3)

VI 成果と問題点

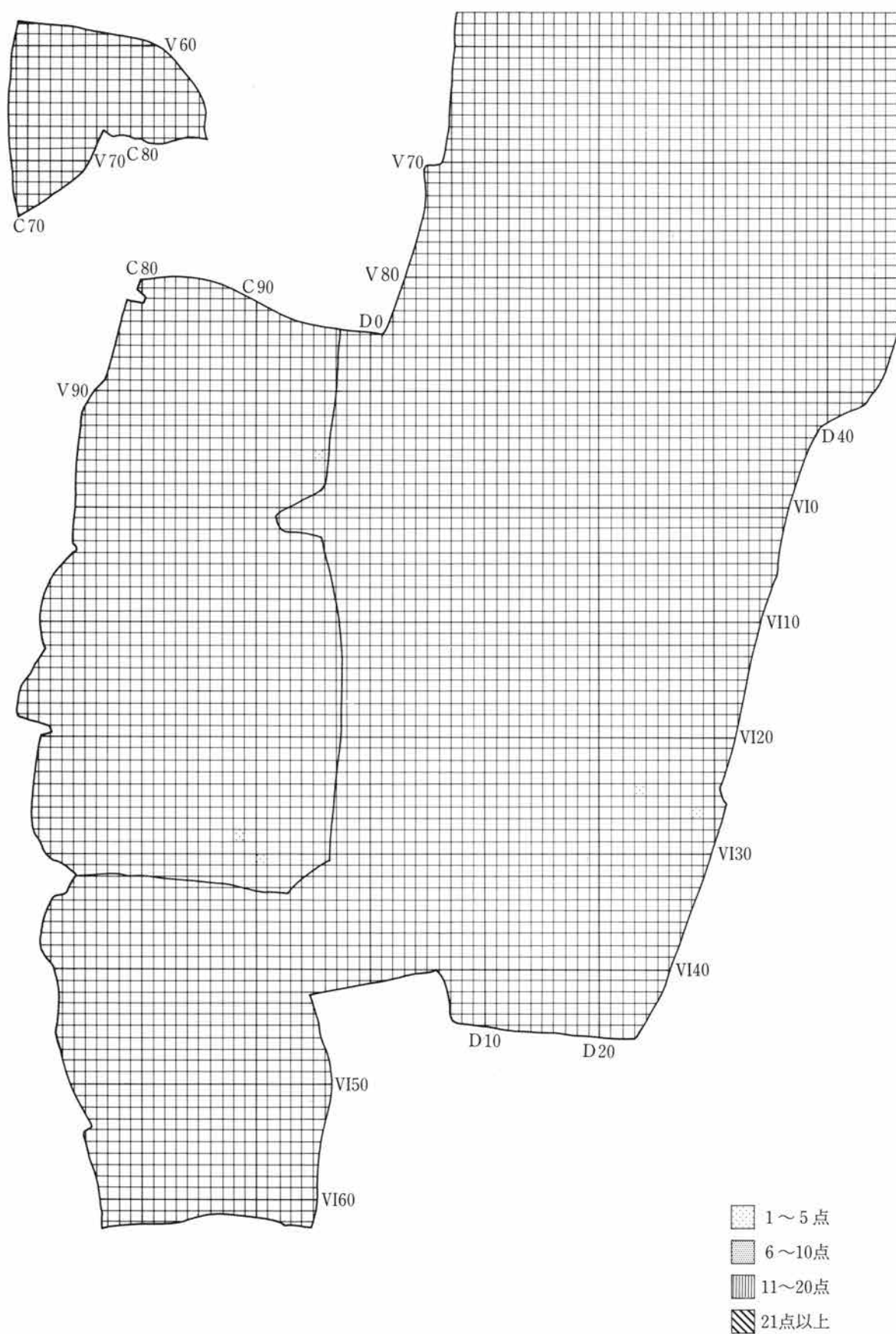


第211図 縄文時代石器のグリッド別分布（1）



第212図 縄文時代石器のグリッド別分布 (2)

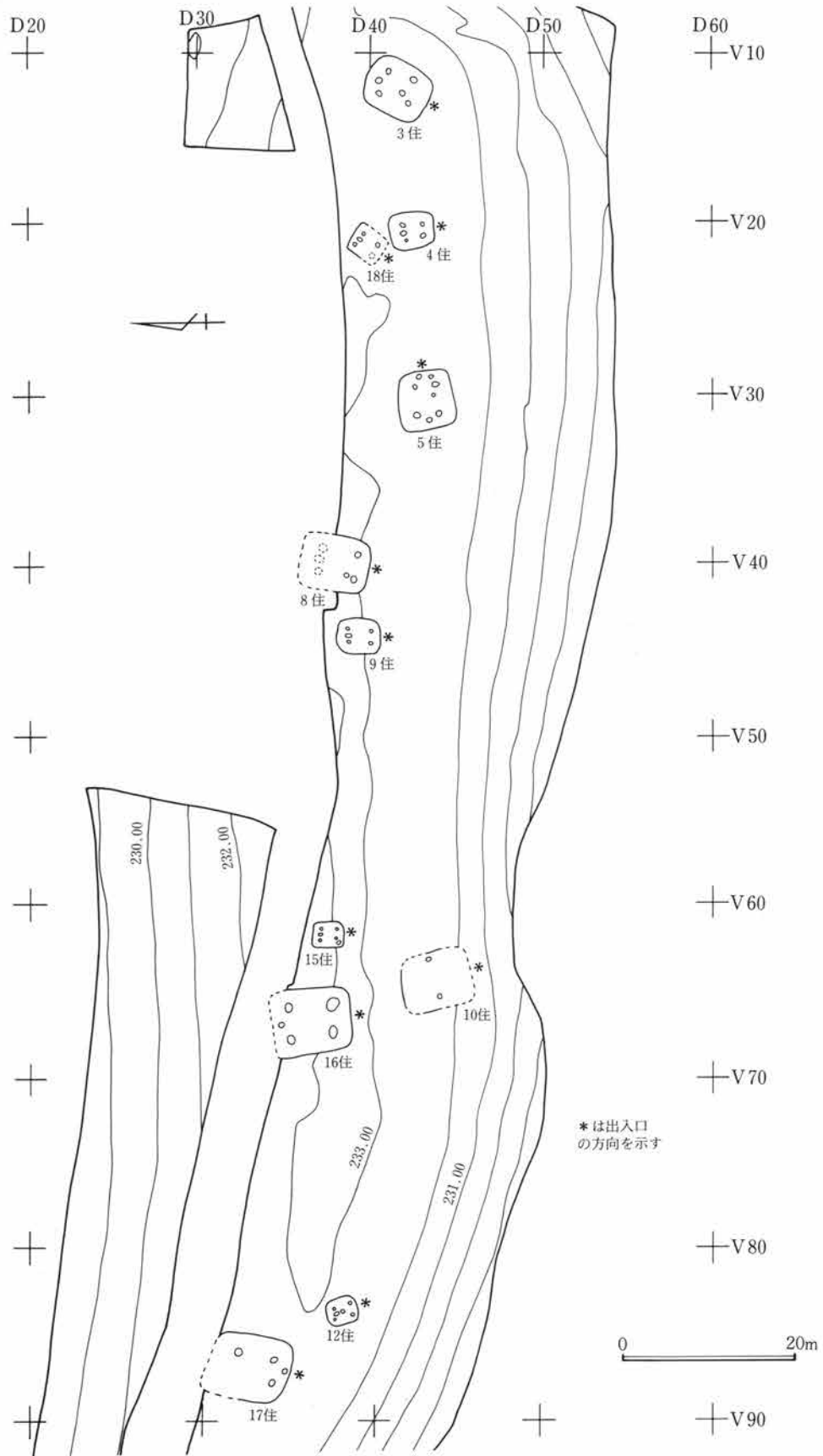
VI 成果と問題点



第213図 縄文時代石器のグリッド別分布 (3)

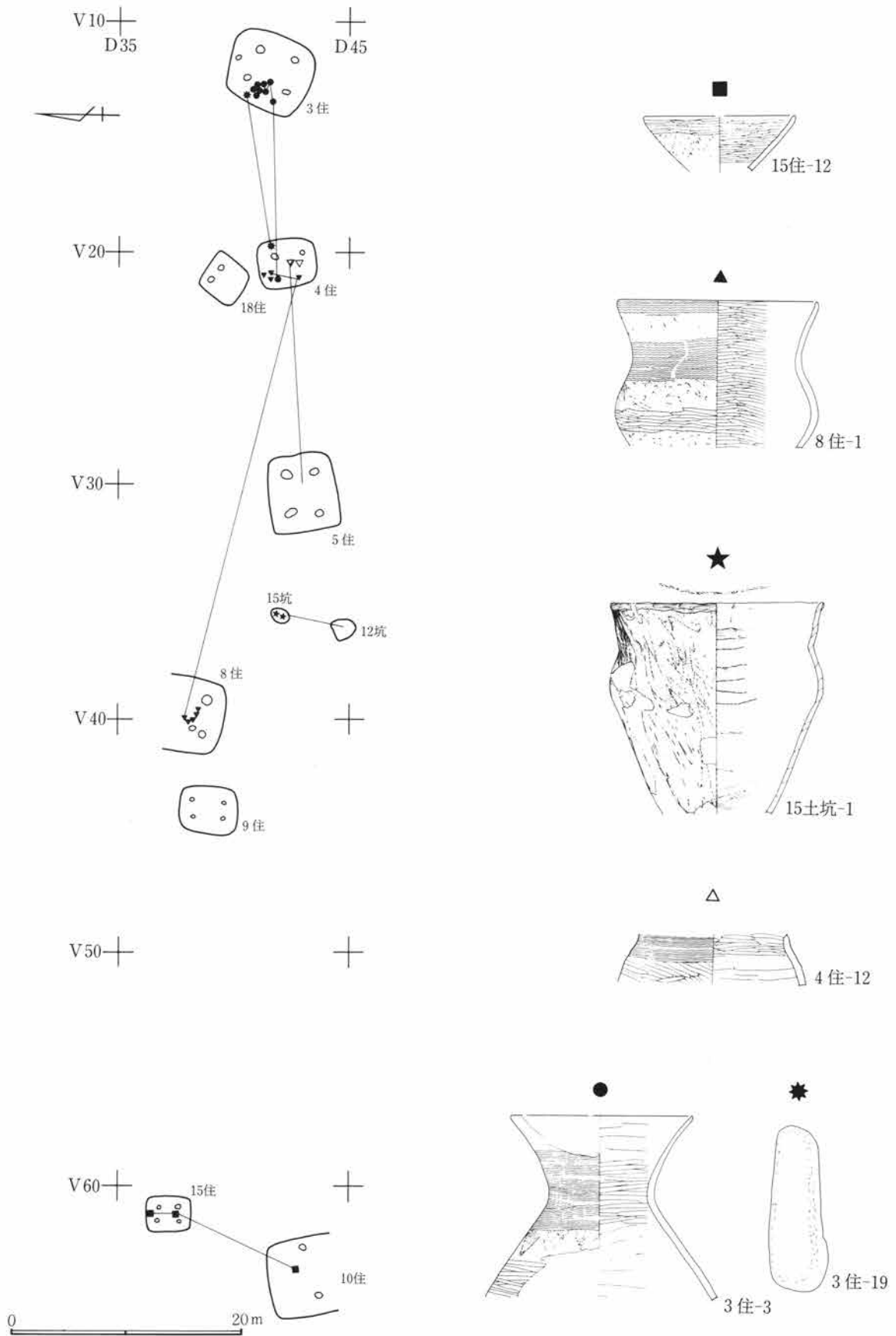


1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



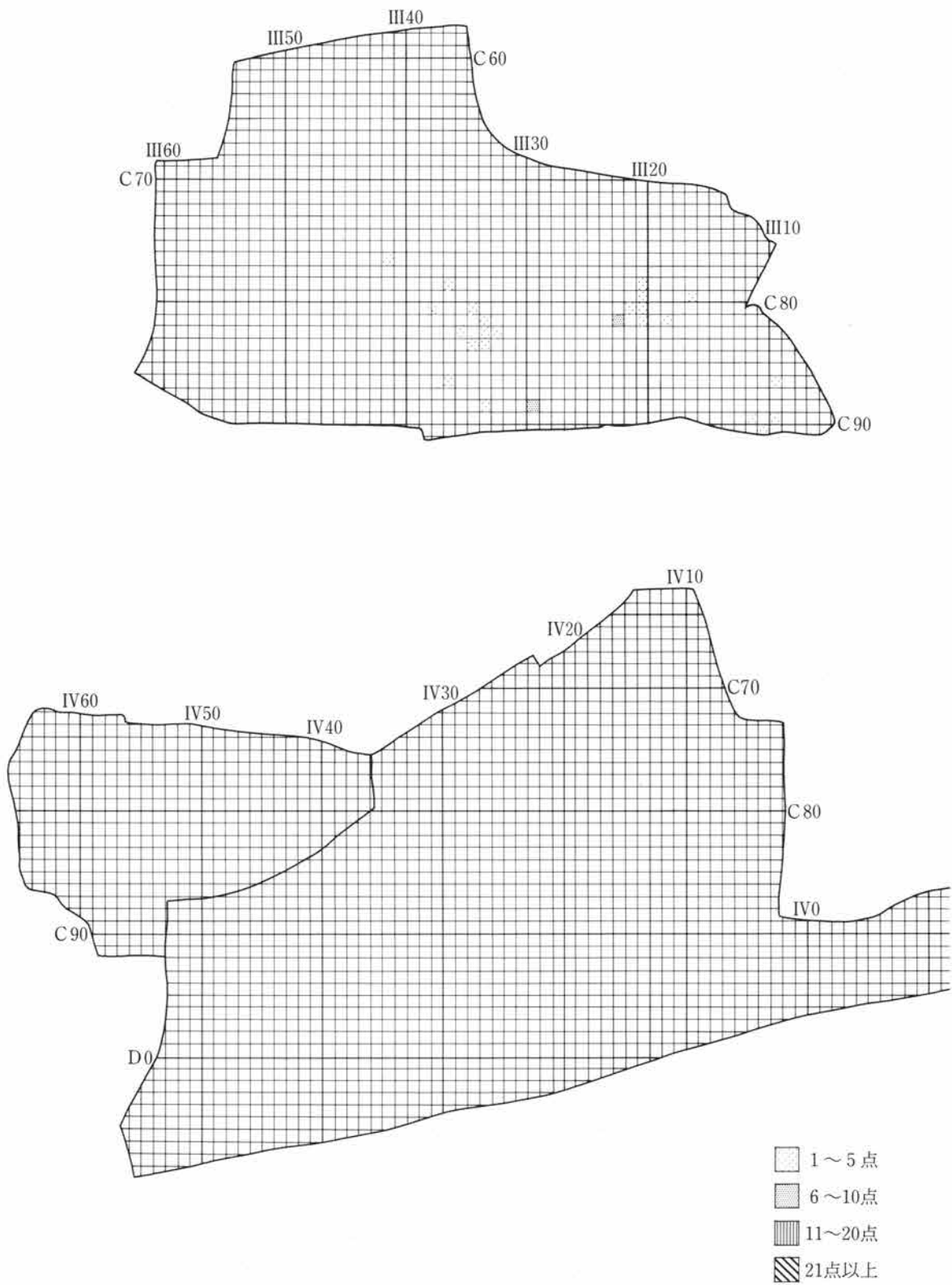
第214図 内匠日影周地遺跡A区弥生時代住居全体図

VI 成果と問題点



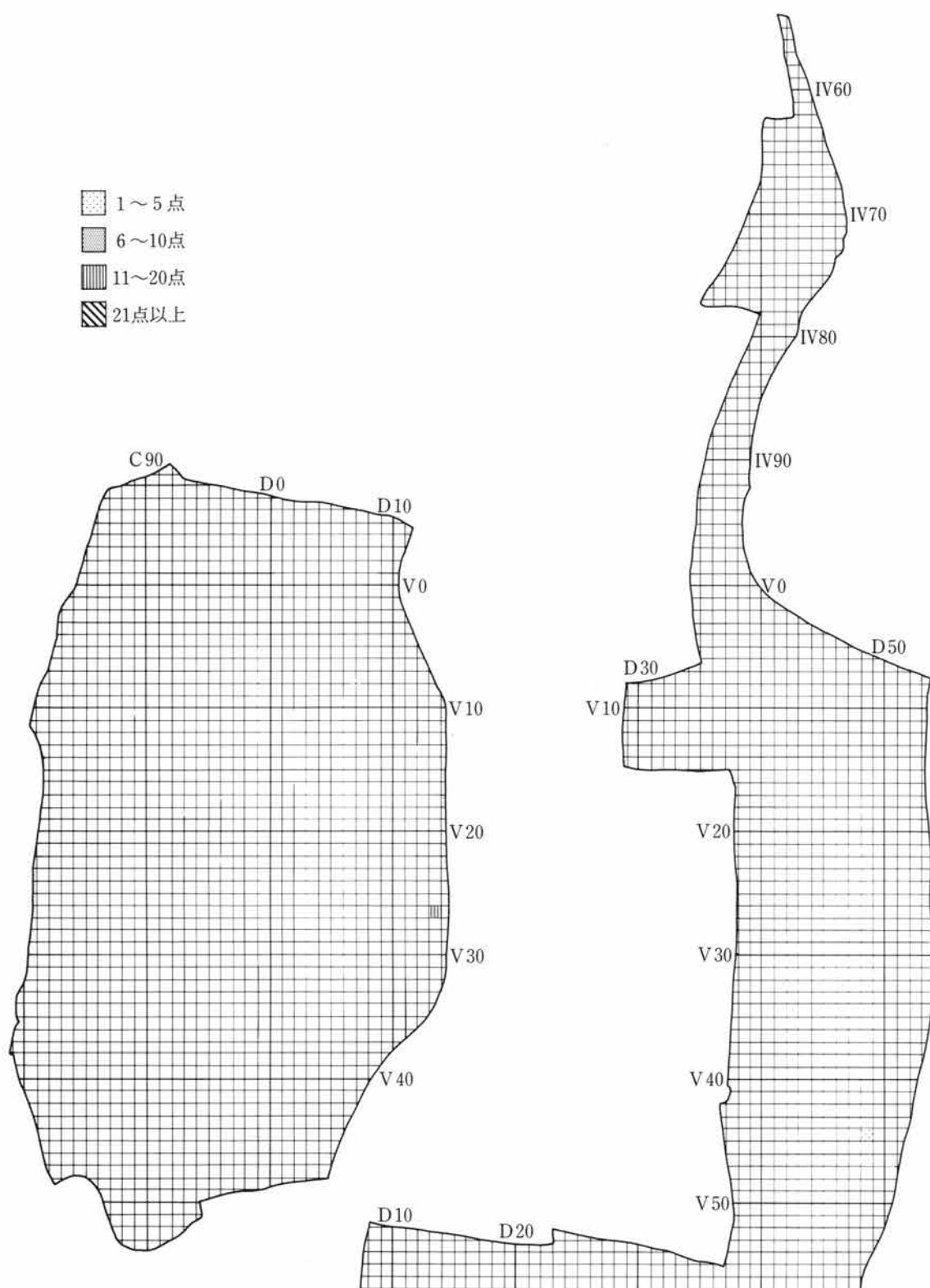
第215図 内匠日影周地遺跡A区弥生時代遺構間接合図

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



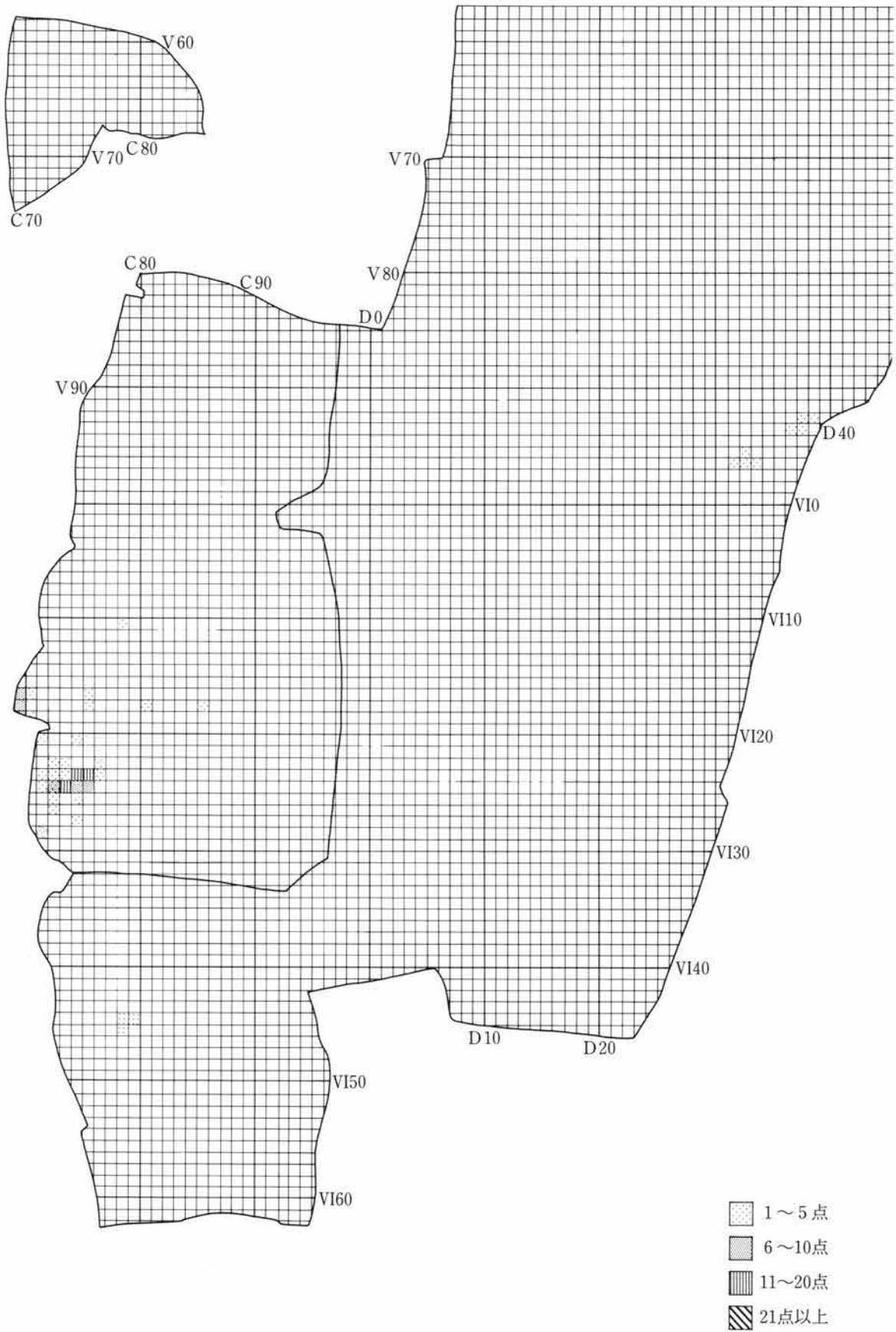
第216図 縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布 (1)

VI 成果と問題点

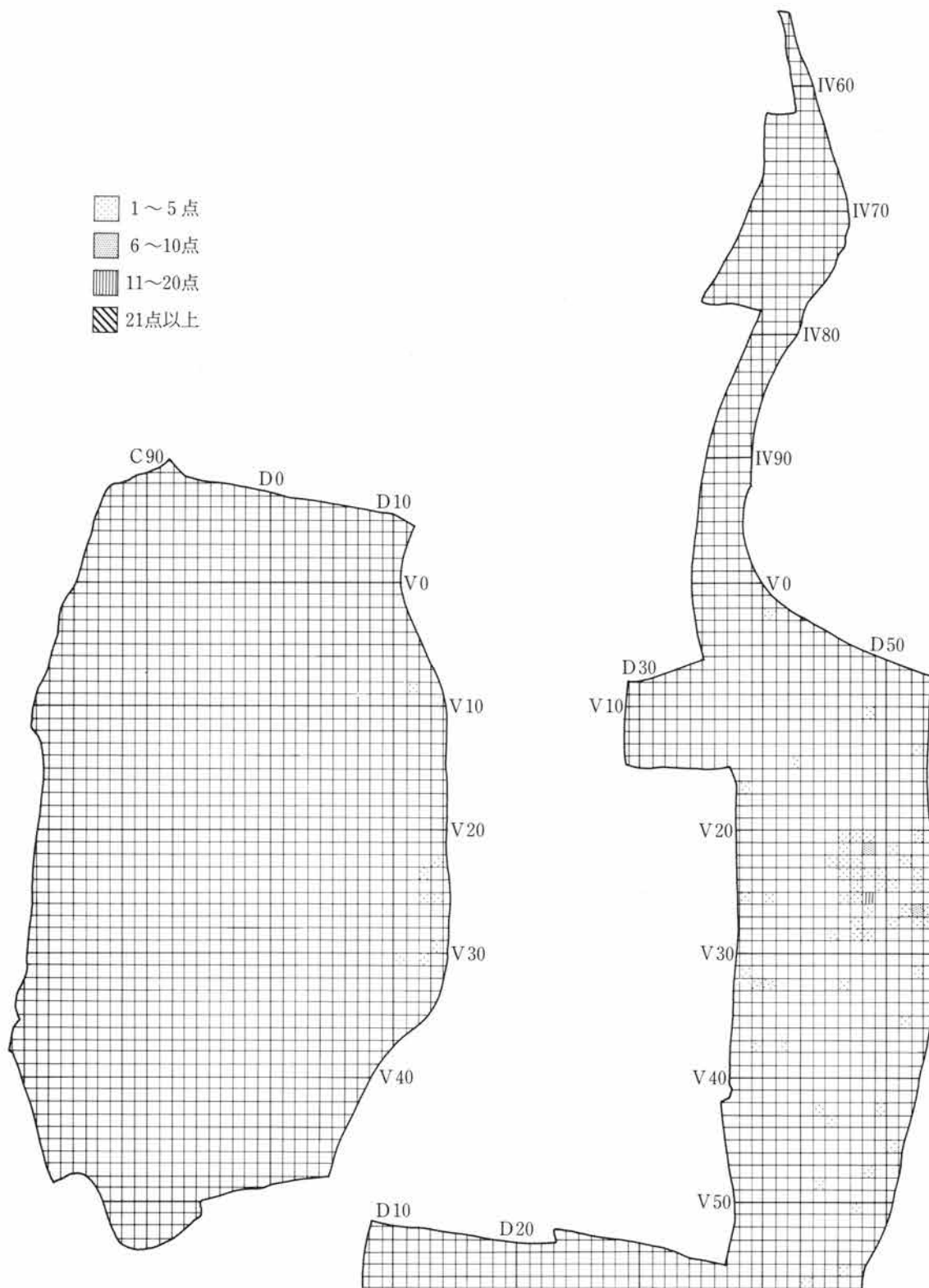


第217図 縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布(2)

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

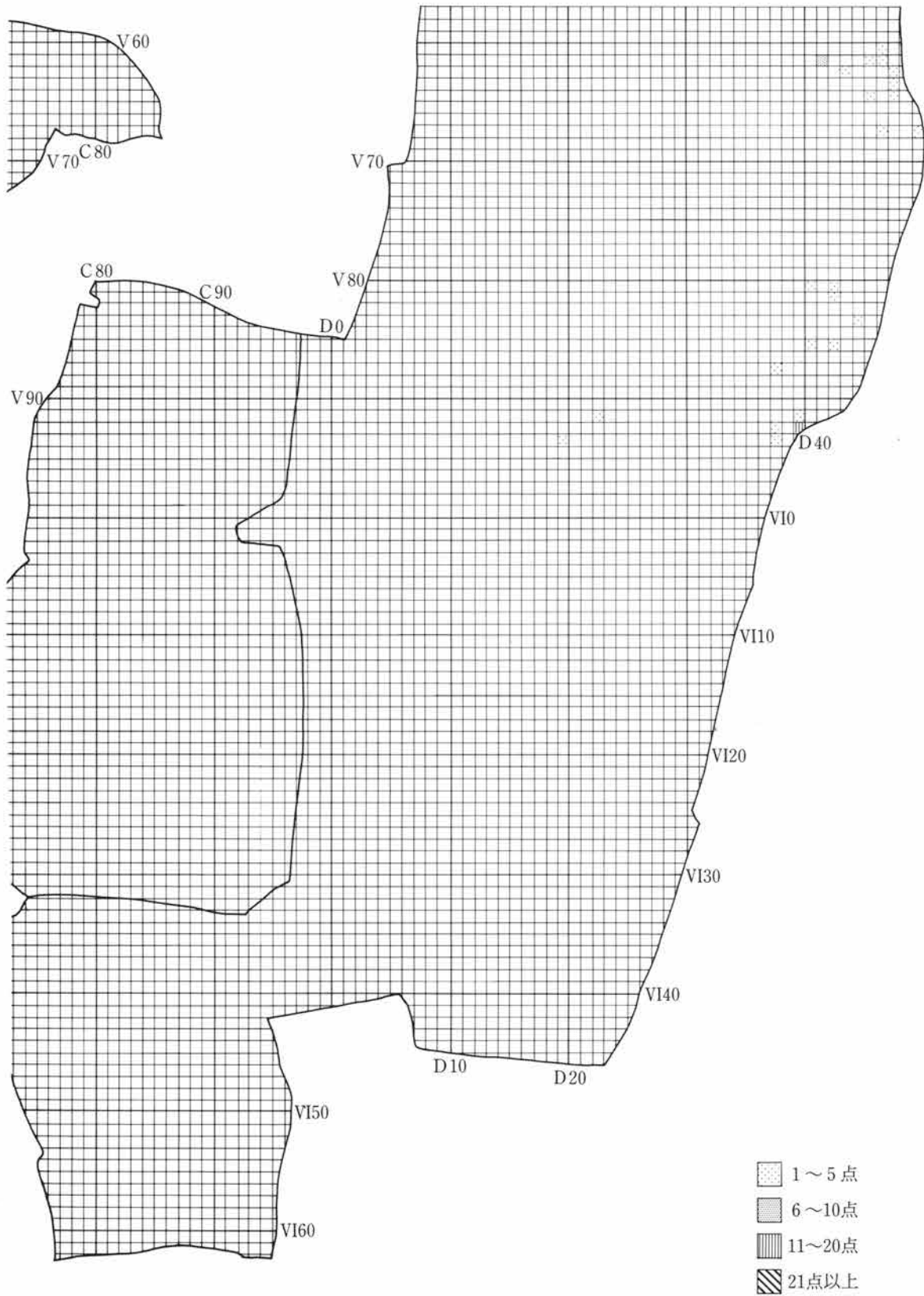


第218図 縄文時代終末～弥生時代中期土器グリッド別分布 (3)



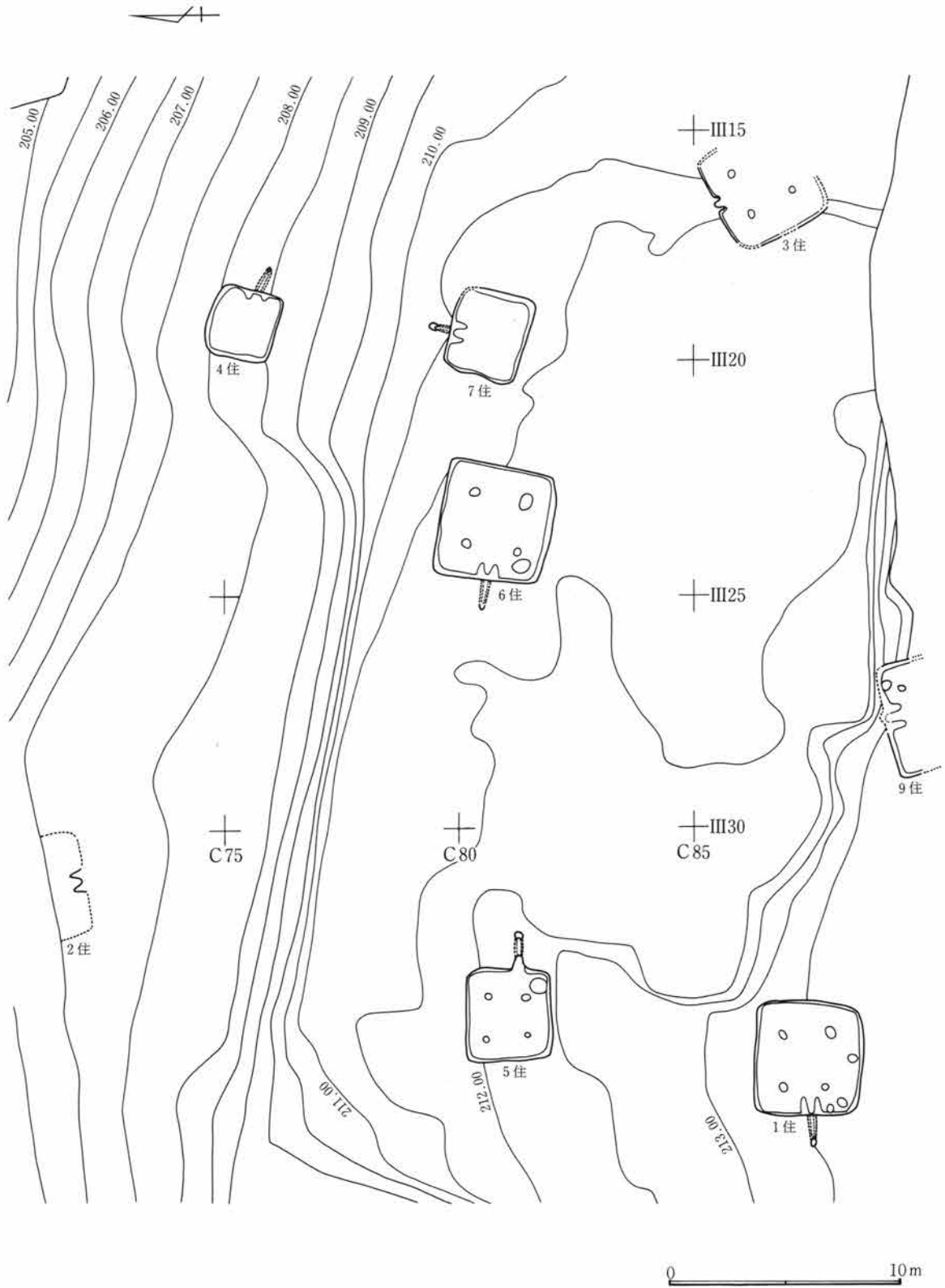
第219図 弥生時代後期土器のグリッド別分布 (1)

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



第220図 弥生時代後期土器のグリッド別分布(2)

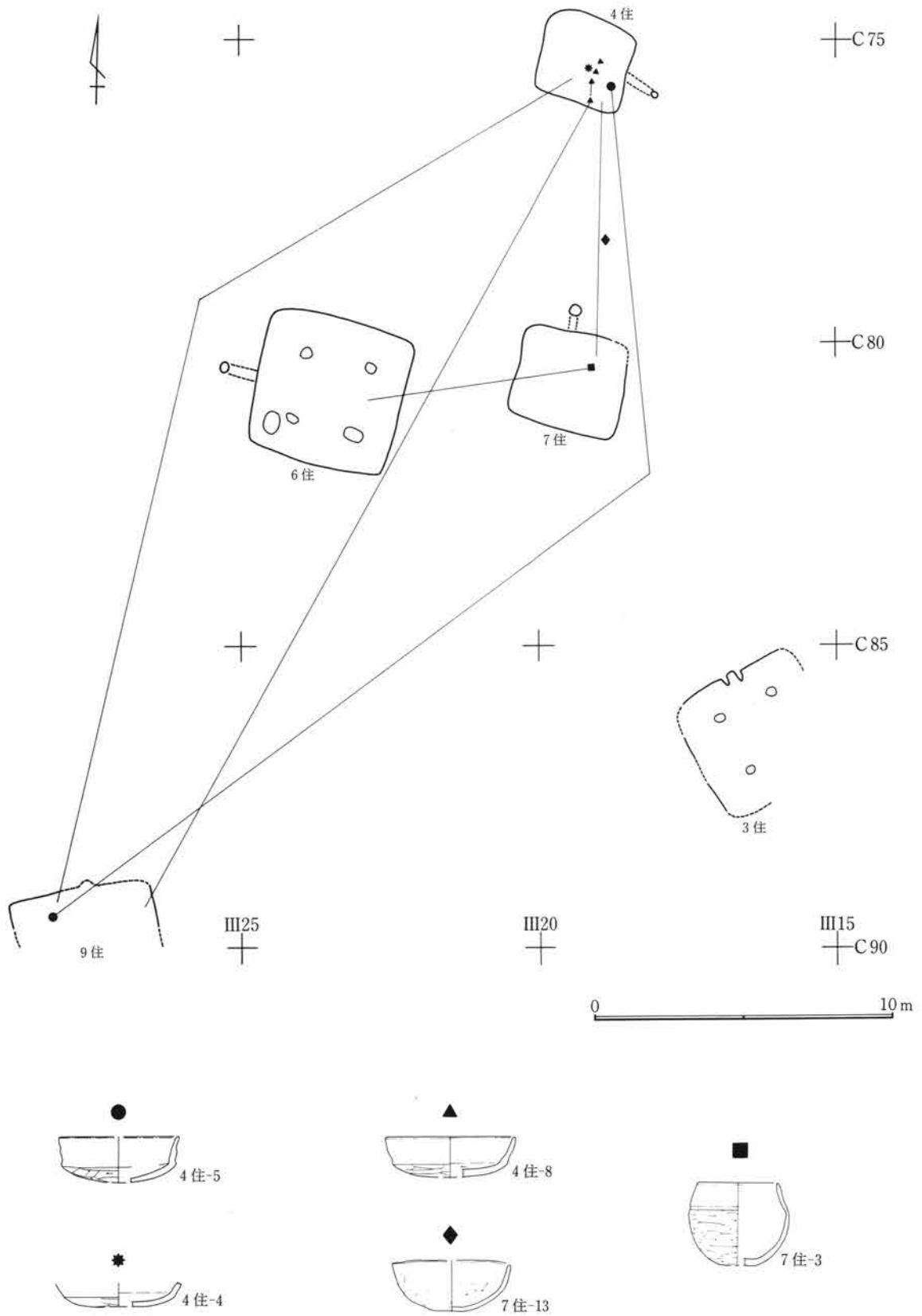
VI 成果と問題点



第221図 内匠諏訪前遺跡A区古墳時代住居全体図

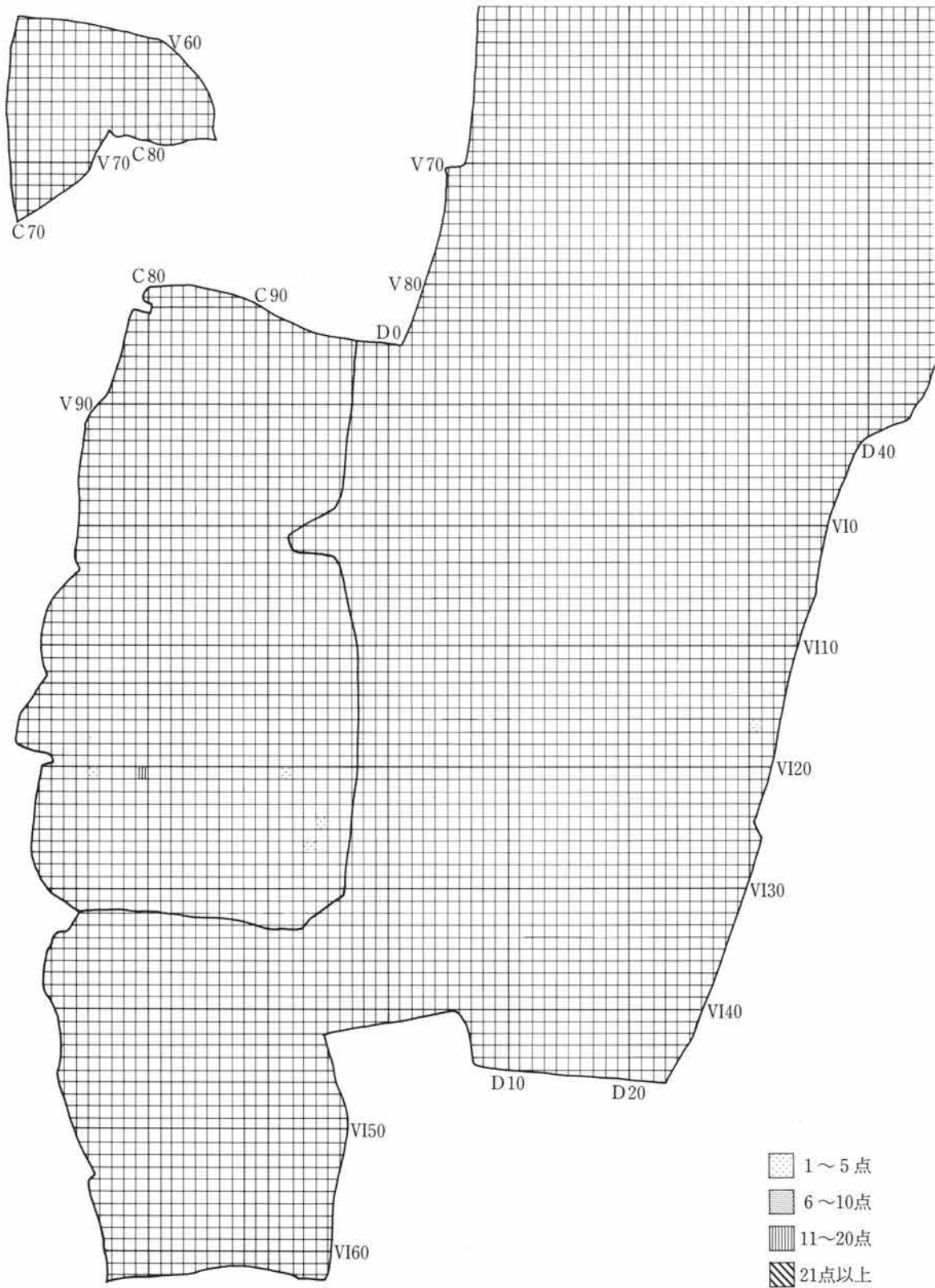


1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

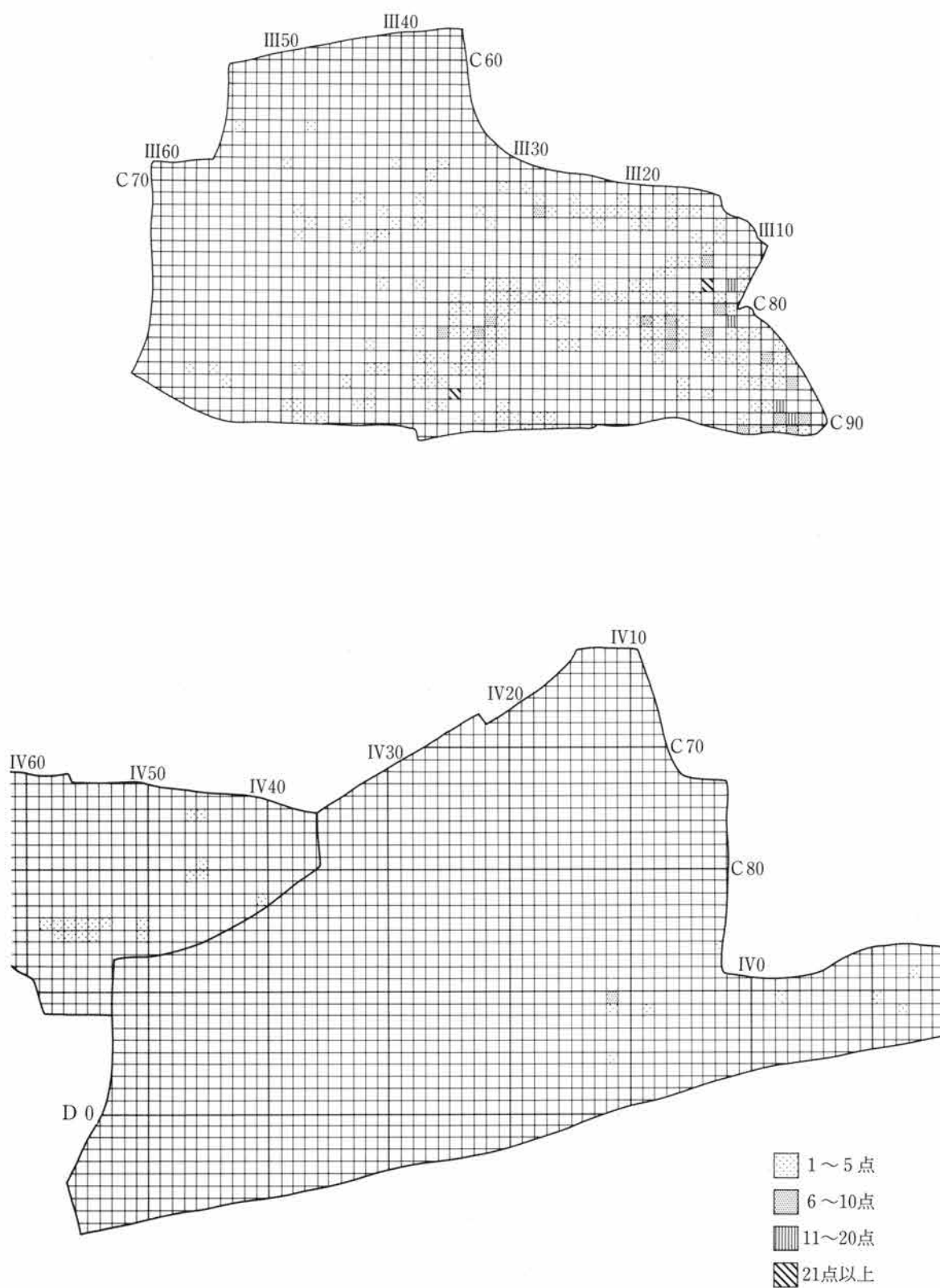


第222図 内匠諏訪前遺跡A区古墳時代住居間接合図

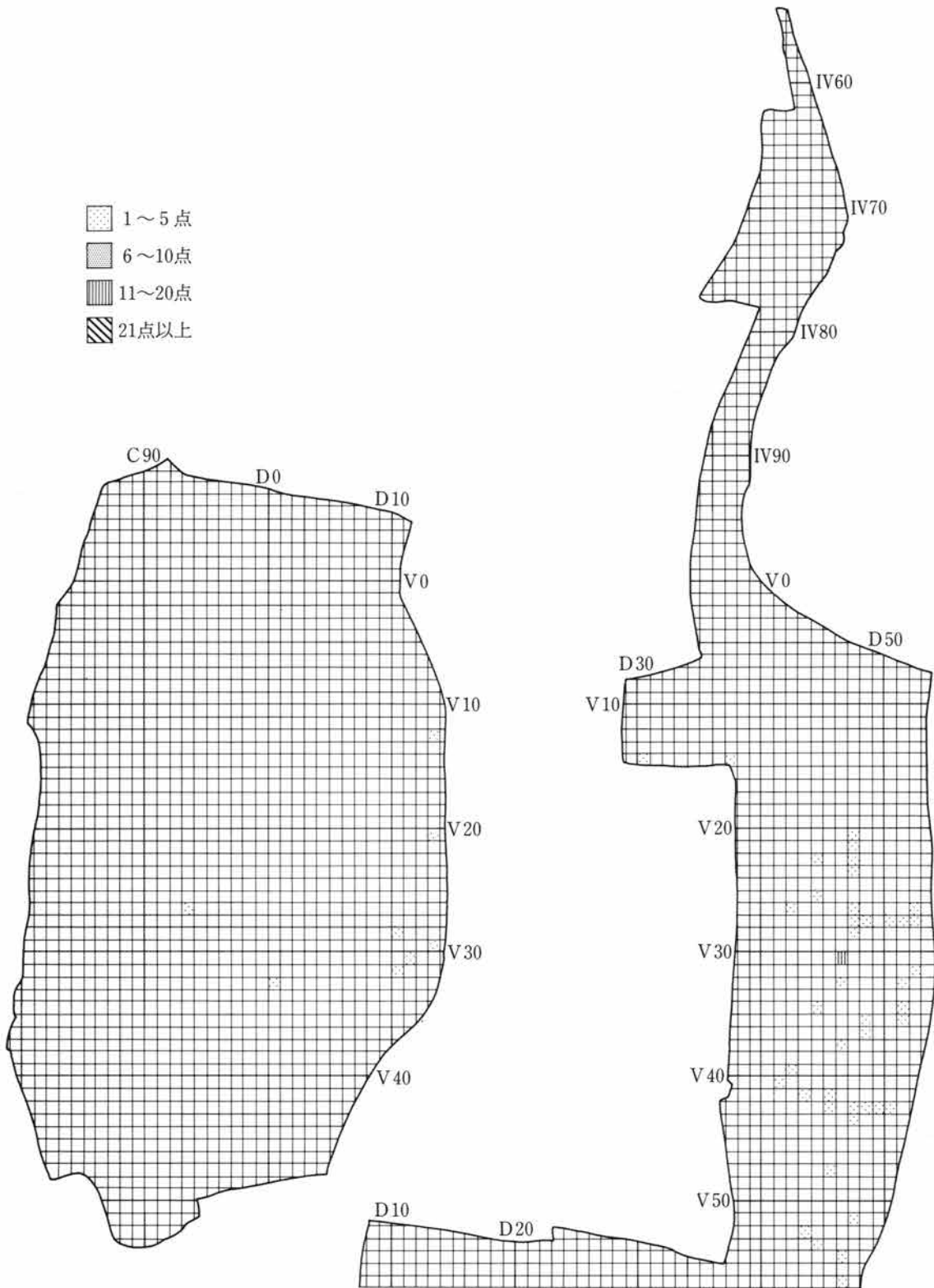
VI 成果と問題点



第223図 古式土師器のグリッド別分布

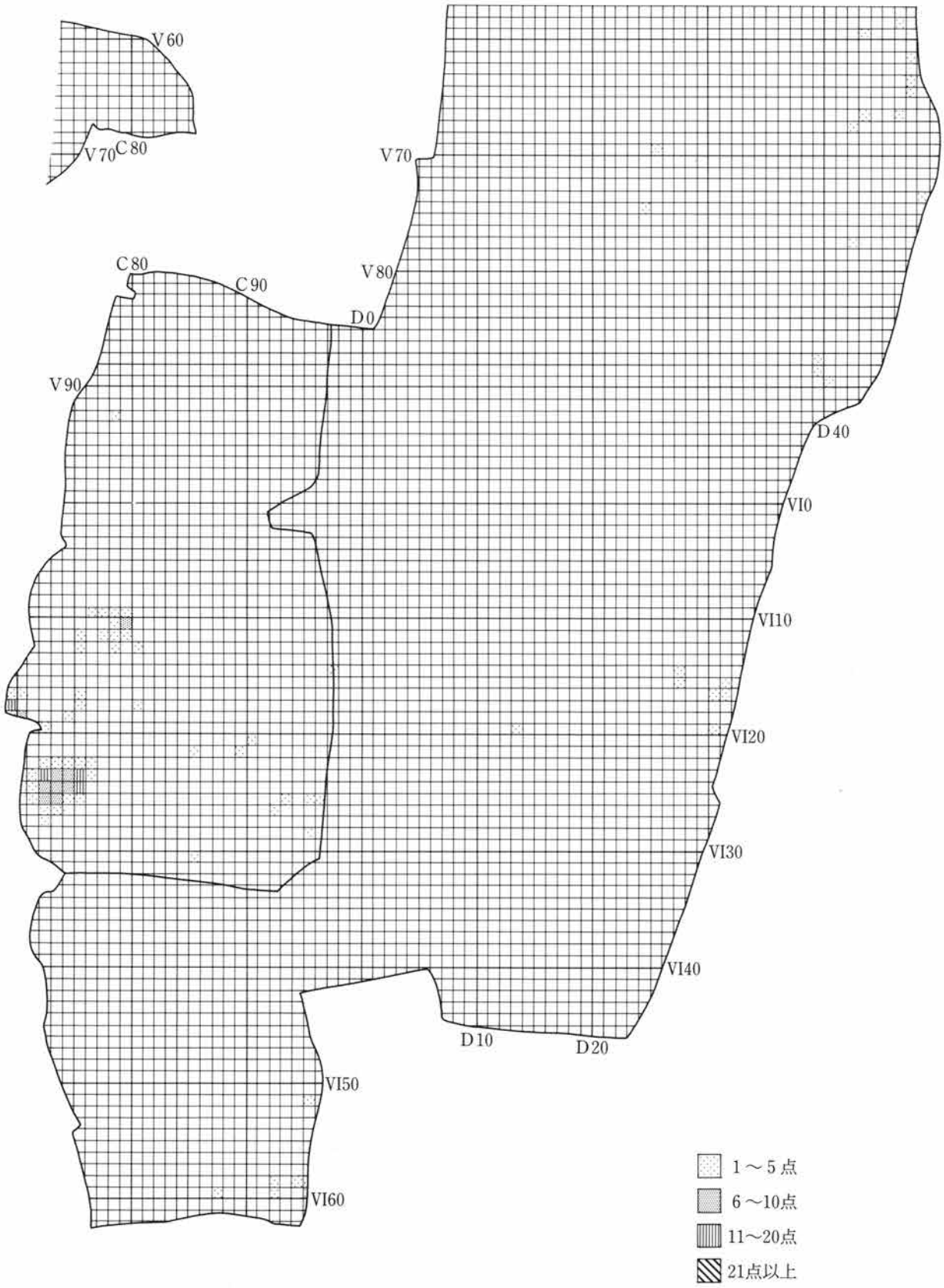


第224図 古墳時代後期土器のグリッド別分布（1）



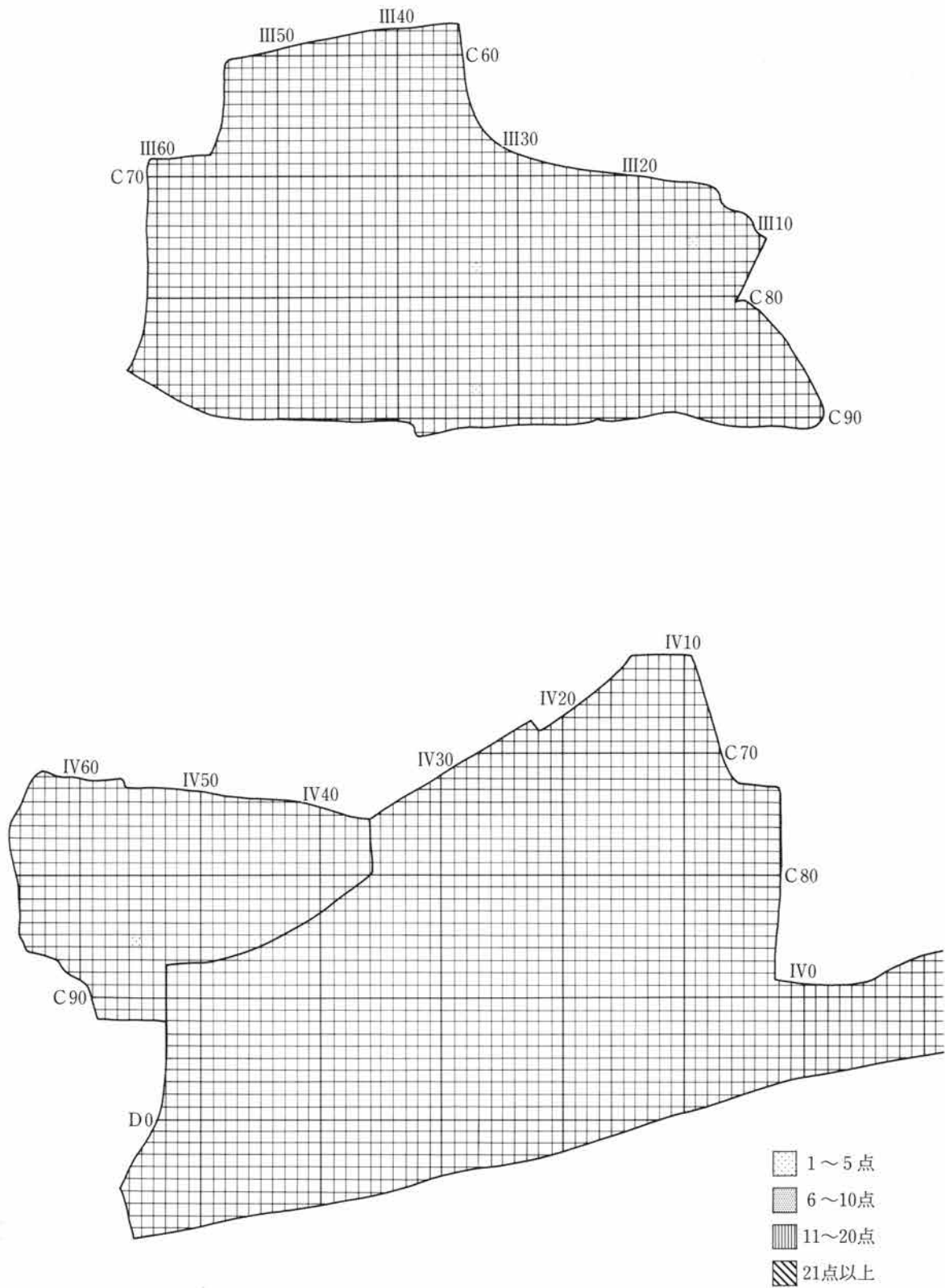
第225図 古墳時代後期土器のグリッド別分布 (2)

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物

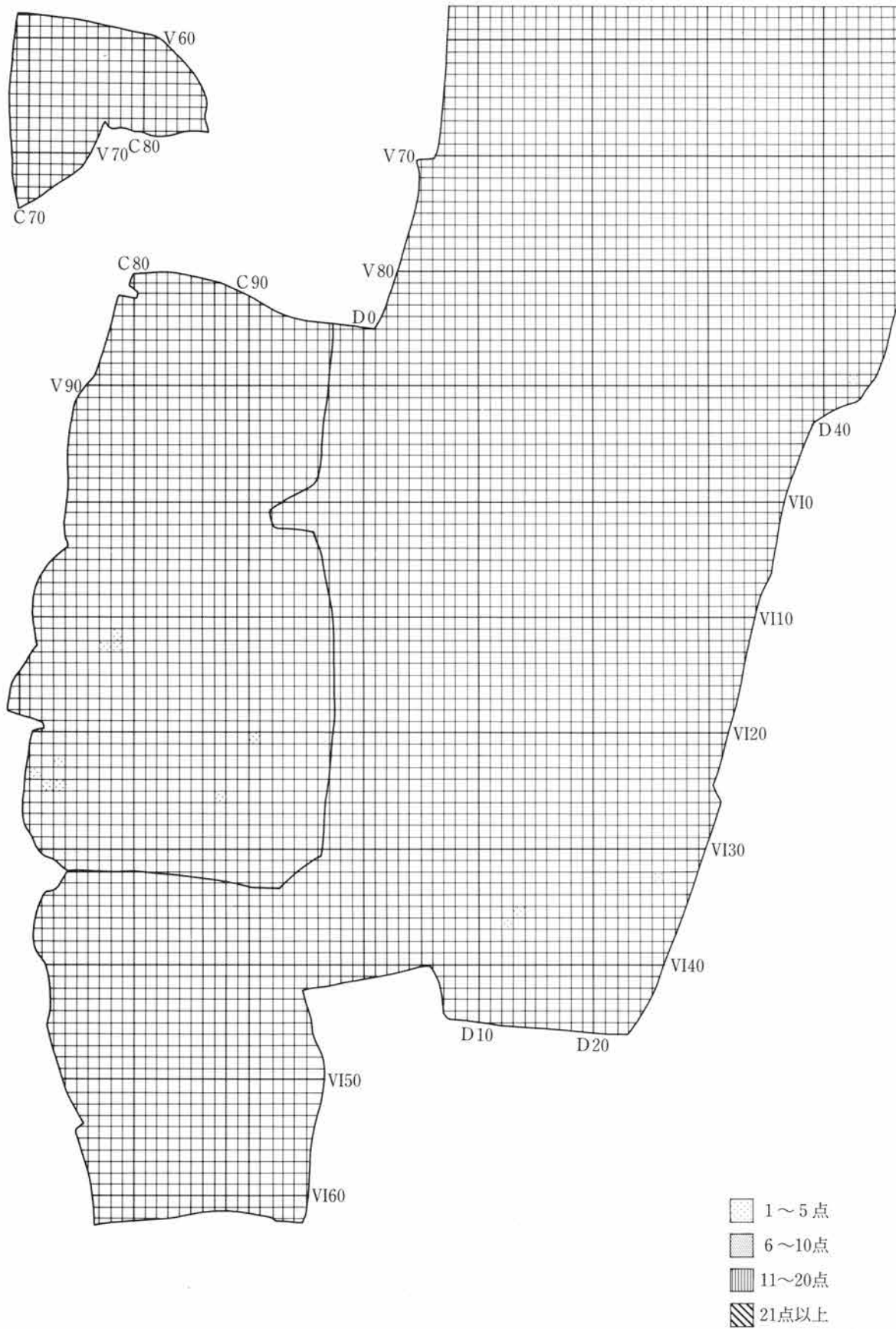


第226図 古墳時代後期土器のグリッド別分布（3）

VI 成果と問題点



第227図 平安時代土器のグリッド別分布（1）



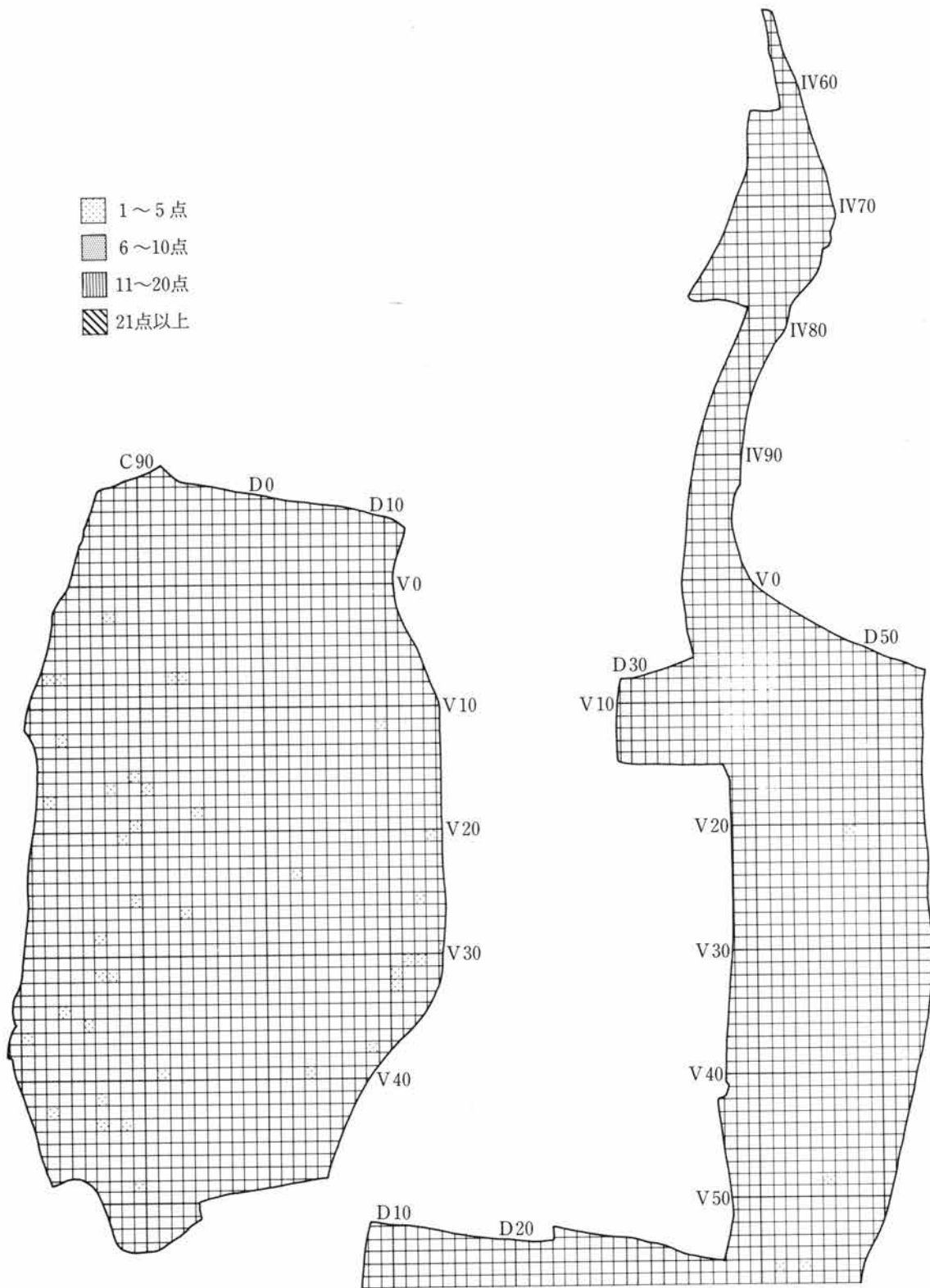
第228図 平安時代土器のグリッド別分布 (2)

VI 成果と問題点



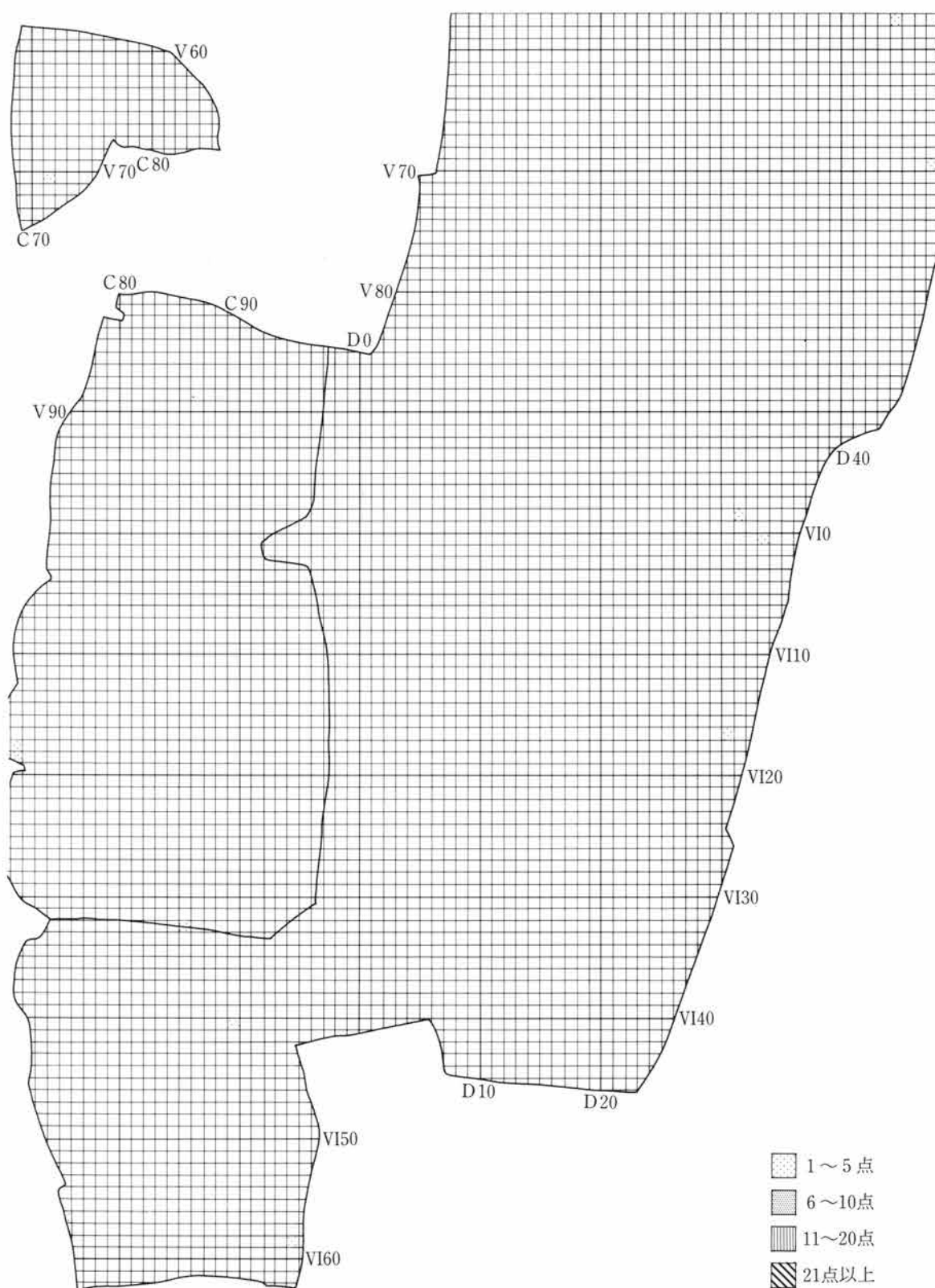
第229図 江戸時代以降土器のグリッド別分布 (1)





第230図 江戸時代以降土器のグリッド別分布（2）

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



第231図 江戸時代以降土器のグリッド別分布(3)

1. 縄文～江戸時代の遺構と遺物



地籍図（壬申地券地引絵図・第十二大区小十三区甘楽郡内匠村 群馬県立文書館蔵）



諏訪神社の石塔類

第232図 地籍図及び諏訪神社

## 2. コゲ・ススの付着からみた土器の使われかた

## — 弥生時代後期 —

外山 政子

## 1 はじめに

土器には煮炊き、貯蔵、食器としてなどいろいろな用途が考えられる。本来の使われかたのほか転用している場合も有るはずである。このような用途は何によって推定されているかという点とまず器形であり、製作技法、出土状況である。当然、土器の形と用途は密接な関係があり、当時の人々の生活と意識が確実に反映されているといえるだろう。しかし、形と用途の関係が明確にとらえられているかと言うと、未だ不十分な部分も多い。用途を推定する要素としては、使用痕跡の観察も重要であろう。

土器には使われることによって生じたと思われるスレ、アレ、ヨゴレ、変色などが認められる。これらの痕跡がどのような作業や動作のさいに着くのか、はたして使用痕跡といえるのかという検証は、観察データの蓄積と復元的な作業実験によるしかないと考え、双方ともデータが十分に蓄積されているとはいえない。しかし、今日の私達の生活作業や動作からも類推できる部分は多いはずで、痕跡を観察することによって、用途とさらに使い方を実際をある程度推定できるだろうと考えている。今回報告する内匠日影周地遺跡では弥生時代後期の住居跡が13棟で出土土器量も多くはない。そこで全体の土器のうち比較的数量も多く観察のしやすいススやコゲの痕跡を取り上げて、土器の用途と煮炊きの実態を考える資料としておきたい。

観察はおもに内面のコゲとヨゴレの有無、部位、外面のススの付着の有無、付着の部位、煮炊きに付随して発生する変色、アレ、スレの有無と部位とである。

## 2 コゲやヨゴレの着く土器、着かない土器

鍋・釜にコゲつきを作ってしまうのは、ものを煮る際の火加減と、内容物の水分の多少にかかわることは、煮炊きをしたことのある人ならば良く知っているだろう。水分がなくなっても、うっかり火を引かず加熱し続けて、鍋は真っ黒などという経験もあ

るだろう。このときは、鍋・釜の底から胴下半部にかけてコゲが出来ることが多い。内容物の入っていた上限部より下がコゲつく。また、コゲが着かないまでも、内容物が熱によって変化しある種のこびりつきが生じる場合がある。これをヨゴレと呼んでいる。このヨゴレは内容物が沸騰することによって、グツグツとはねあがり、実際に内容物が入っていた分量（喫水線？）より上に着くことが実験により観察されている。こうしたことを頭に入れて土器を観察すると（第233、234図）次のようなことが指摘できるだろう。

- ①コゲはいわゆるカメ形土器だけに付着している
- ②コゲは内面、胴下半部に付着している
- ③平底の形のカメではコゲが内底部には無いことが多い（第233図A 9住1、A 8住5、A 5住2、A 3住13、A 17住3、ただし、コゲはその性格から全体の加熱量と相関関係にあつて、A 3住1のように加熱が強いと底部にコゲが着く）
- ④台付きカメは内底部にコゲが付着している（第234図A 15住1、B 2住2）。③の観察結果と外面のススの観察結果とも合わせて考えると加熱方法の違いが指摘できるだろう。
- ⑤ヨゴレは内面、胴中部からやや上にかけて帯状にめぐることが多い（第233図A 3住1、A 3住7、A 3住13）先に述べた実験結果から内容量の推定も可能であろう。全体的な傾向としては、胴最大径よりやや下辺りまでが内容物の目安とできそうである。
- ⑥口縁部内側にめぐるとしたものは（第233図A 5住3）次に述べるススと区別がつきにくかったが、帯状にめぐることから、蓋の存在と加熱の際蓋を使用した傍証となるだろう。

## 3 ススの着く土器、着かない土器

ススは物を加熱した際、炎の不完全燃焼で付着する場合のススと、日常的に火を焚く場所周辺に置い

## 2. コゲ・ススからみた土器の使われ方

であったためにスケタ場合とが有るようだ。近代の伝統的な煮炊き施設であったカマドでは、炎は鍋釜の下からまんべんなく当たるよう工夫されていた。したがって、底にはまんべんなくススが着いており、火力の変化は読み取れない。しかし、弥生時代のカメでは強いススの部分と薄いススの部分、あるいはさらにスケタ部分と有るようで、火力にも炎の当たり具合にもむらがあったようで、加熱施設と加熱方法を推測させる。ススの観察からは次のようなことが指摘できるだろう。(第233、234図)

- ①ススの付着が認められるのはカメ形の土器が圧倒的に多いが、壺形や高杯形など他器種にも付着していることがある。
- ②平底のカメ形土器では全体にススがまわるが、胴部のやや下の辺りから頸部の下辺りまでと、口縁部外周には強いススが認められる。
- ③カメ形土器では、口縁部の内側に1～2cmの幅でススがめぐることが多い。(A 8住4、A 4住4、A 5住2、A 17住1、A 4住5) ヨゴレの項でも触れたように、蓋の使用痕跡と出来るだろう。
- ④平底のカメ形土器では、底部外面が加熱によって赤く変色し、スケタしている場合がある(第233図A 4住6)。A 3住1、A 18住1では底部にススが認められる例もある。底部外面のススは明瞭でなくても、底部から下胴部に変換する低い部分からススの付着が認められている。このことから煮炊きの際、加熱施設にどのように設置したかの推定ができるだろう。おそらく炉に直接おくタイプで、底部を埋め込んだり、支脚のような器具の使用もなかったと言える。
- ⑤台付カメでは台部分外面にススが付着したり、赤変し、内側にもススが認められている場合もある(B 2住2)。このことは観察結果と併せて加熱施設への設置方式が確定できるだろう。
- ⑥①と関連するが、カメ形以外の土器に付着するススは一定の部位が確定できない場合がある。例えば、この事は土器の使い方に通常でない使い方を想定する必要があるということではないだろうか。

(A 5住4、A 10住1、A 15住9)これらを一括で転用のためと考えているが、他の使用痕跡や出土状況の要素も含めて検討しなければならないだろう。

### 4 加熱施設の在り方

当地域の弥生時代後期の加熱施設は、住居内の炉が中心で、形状では前代から大きな変化は見せていない。しばしば住居内に二基炉をもつが、同時期に使用されている場合と、新旧関係がつかめる場合とがある。一方は住居の長軸方向で、入り口施設の向側に2本の柱穴の間に設けられている。住居中心部方向に細長い石をおいていることが多い。もう一方は入り口施設にたいして左側にあることが多く、当遺跡では石を入り口側に設置する特徴がある。燃焼部と思われる赤く焼土化した範囲はおよそ55cm×45cm程の楕円形で、断面は浅く船底状にくぼむ。特別なピットなどの施設は付随していない。

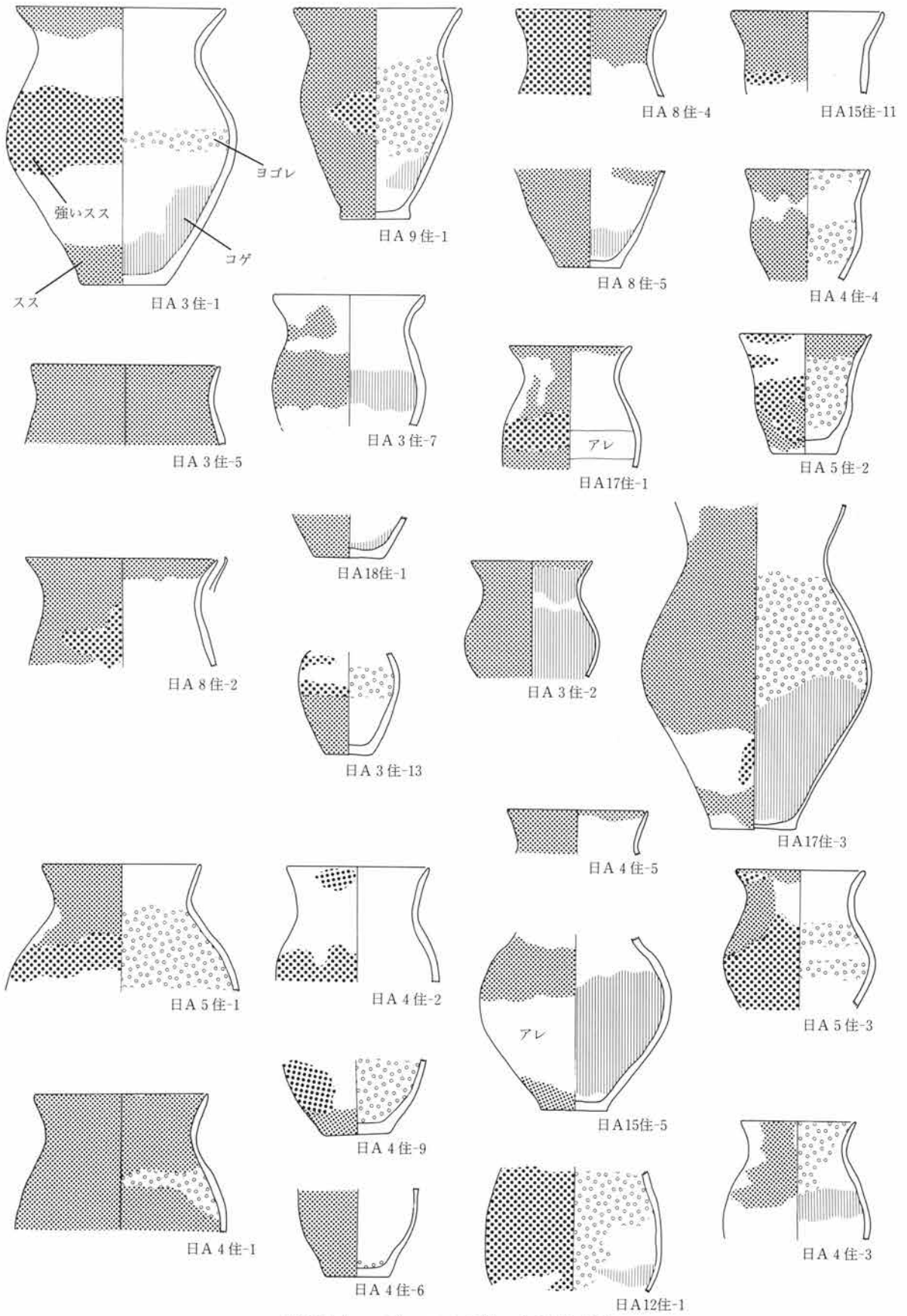
### 5 おわりに

土器の使用痕跡を主にススとコゲの面から観察し加熱施設の在り方を見て来たが、以下の事柄が確認できたと考えている。

- ・ススとコゲの付着から、当地の煮炊き具の主体は平底のカメであること。台付きカメも小中型のものは見られるが、数が少ない。
- ・大形の壺類は基本的に煮炊きには使われていない。
- ・加熱の方式は炉に直置きであったであろう。
- ・支脚などの使用痕跡は見られない。
- ・加熱の方向は長めのカメの胴部からと言える。
- ・煮炊きの際、蓋が多用されただろう。

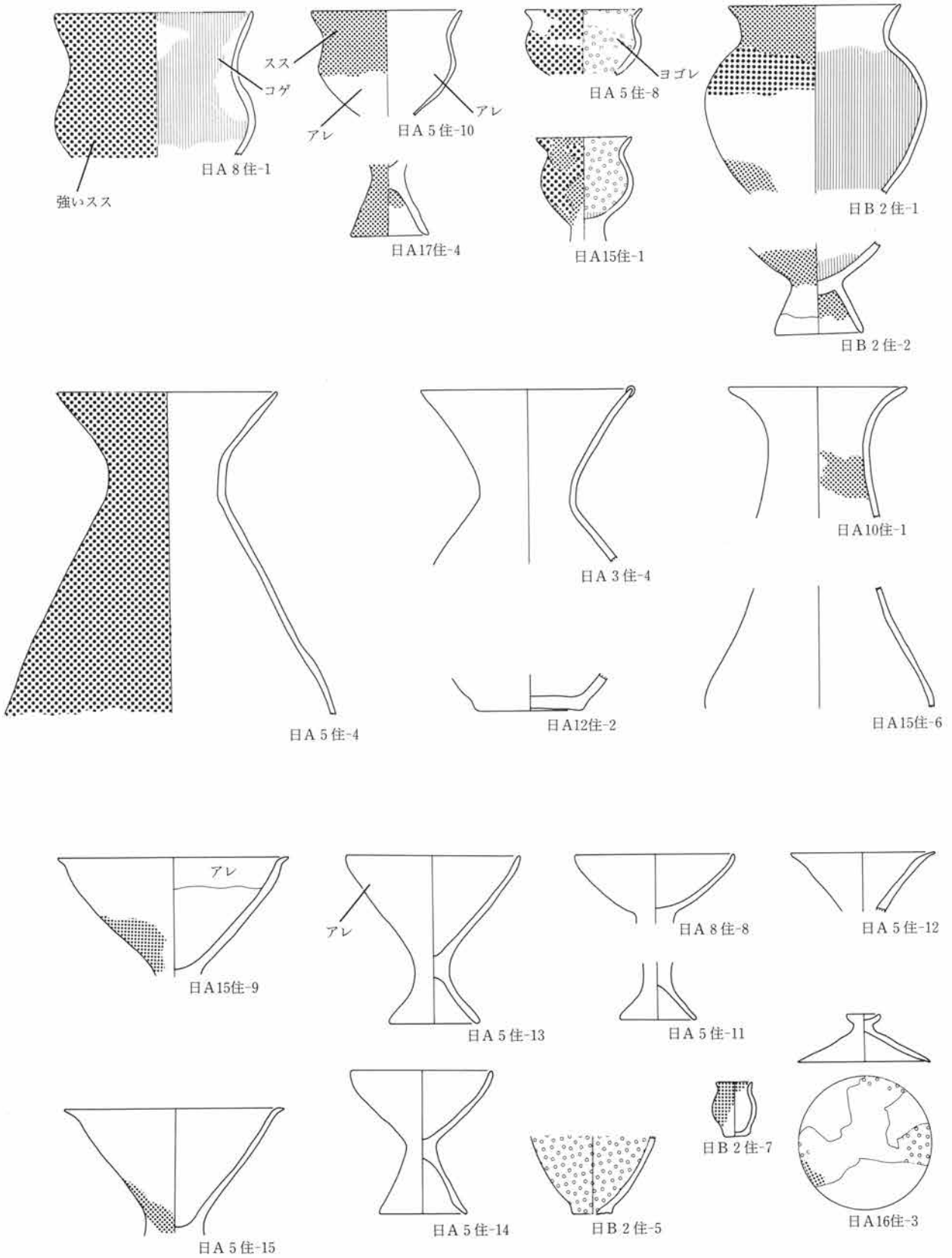
土器はそのほとんどが日常生活のなかで使われており、使えばその痕跡が残るはずである。痕跡を観察することによってその使われかたの実態をより明確にしていくことも可能となろう。こうした基礎的な作業の積み重ねのなかに時代変容の兆しさえも見いだし得るのではないかと考えている。今報告では弥生時代の遺構も少なく、観察できた土器の個体数も少なかつたため、今後さらにデータを蓄積して行きたい。

VI 成果と問題点



第233図 コゲ・ススの着いた土器 (1)

2. コゲ・ススからみた土器の使われ方



第234図 コゲ・ススの着いた土器（2）

## 付篇1 群馬県内匠諏訪前・日影周地遺跡出土の樹種について

鈴木三男（金沢大・教養・生物）・能城修一（農水省森林総合研究所）

### 1. 内匠諏訪前遺跡

群馬県富岡市大字内匠の内匠諏訪前遺跡の江戸時代の屋敷跡から出土した炭化材の樹種を同定した。試料は2号屋敷の床面から得られた炭化材21点と1号屋敷の二つの土坑から得られた炭化材3点、合計24点で、徒手により横断、放射、接線の各破断面を作成し、落射顕微鏡を用いて観察、同定した。その結果、スギ、アカマツ、クリ、コナラ節、竹類の5種が同定された。これらの同定の根拠となった材形質を以下に略記し、それらの顕微鏡写真を図版1～3に、同定結果の一覧を表1に示した。通常、遺跡出土材は組織プレパラートの形で証拠標本として保存しているが、炭化材の場合、炭化材の小片を保存して置いても長年の間には風化して組織を観察できなくなることが予測されるので、同定の際に顕微鏡写真を撮影し、それを証拠標本とした。このフィルムは金沢大学教養部生物学教室に保存されている。

#### 同定結果

##### 1. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don スギ科

###### 図版1 写真1～6（諏訪一1）

軟質の炭化材で、年輪界は明瞭（写真1，以下1と略す）、早材部はとても柔らかく、晩材部はやや硬い。仮道管と樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹材で、樹脂細胞は詳細な観察をしないと見つからない。早材部仮道管は薄壁で直径が大きく、晩材部に向けて順次小さくなる（2）。放射壁の有縁壁孔は単列あるいは2列で後者の場合は対列状である（5）。放射組織は単列で柔細胞のみからなる（4，5）。分野壁孔はスギ型で、1分野あたり2個が普通である。以上の形質からスギの材と同定した。

##### 2. アカマツ *Pinus densflora* Sieb. et Zucc. マツ科

###### 図版1.2 写真7～12（諏訪一2）

年輪幅が極めて広い針葉樹材で早材から晩材への移行は緩やかだが、晩材部仮道管と早材部仮道管では直径と壁孔が歴然と違うので年輪界は明瞭である（7）。垂直、水平の樹脂道を持ち、前者は大型で年輪内に散在し（8）、後者は紡錘形放射組織にある（9，10）。分野壁孔は大型の窓状で（11）、放射仮道管の内壁には顕著な鋸歯状の突起がある（12）。これらの形質からアカマツの材と同定した。

##### 3. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

###### 図版2.3 写真13～19（諏訪一24）

同心円状に並んだ大型の道管が肉眼でもはっきり見える環孔材で年輪始めにはしばしばチロースのある大きな道管が数層に並び（13）、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の微細な道管が火炎状あるいは放射方向に集まる（13,14）。道管の穿孔は単一で（18）、道管—放射組織間の壁孔は大型で楕円状である（19）。放



射組織は単列で(15,16)、同性(17)、柔細胞は目だたない。以上の形質からブナ科のクリの材と同定した。

#### 4. コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版3 写真20~23(諏訪-18)

クリ同様、年輪始めに大型の道管が同心円状に並ぶ環孔材で、晩材部の仮道管は微細な薄壁多角形でやはり火炎状あるいは放射状に並ぶ(20,21)。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織がある(20,22)。道管の穿孔は単一で、道管-放射組織間の壁孔は大型の楕円状である(23)。以上の形質からブナ科コナラ属の内、コナラ、ミズナラなどのコナラ節の材と同定した。

#### 5. 竹類 *Bamboo* sp. イネ科

図版3 写真24~27(諏訪-19)

中空で節のある炭化物で、その横断面を観察すると、茎の中心側に原生木部腔、その両側の外側に各1本の太い道管からなる1対の後生木部、そして原生木部腔に対応する位置の外側に節部があり、それら全体を直径が小さく壁のたいへん厚い繊維細胞の集まりが鞘状に覆っている維管束(26)が散在している不整中心柱である(24,25)。茎の表面は平滑で(24,25)、各維管束は髓腔に近い内側のものは径が大きく、繊維細胞の鞘は少なく、外側に行くに従って径が小さくなり、繊維鞘が多くなる(25,27)。以上の形質からイネ科タケ亜科の稗であることが分かる。タケ亜科には様々なタケ類、ササ類があるが、これらの組織構造は互いによく似ており、組織学的にはこれ以上詳細な同定は出来無い。ただ、出土炭化物の稗の直径が比較的太いことからこれはタケ類の稗であることが考えられる。

以上、江戸時代の二つの屋敷跡の24点の炭化材から5種が同定されたが、その大部分は2号屋敷のスギである。これらは遺物の分布状況からみて、焼け落ちたこの屋敷の建築材の一部であると考えられることから、この屋敷がスギ材を主に用いて建てられていたことが分かる。そして部分的にアカマツ材を用いていたこと、また、壁土の崩落と思われる場所の炭化物が竹類であったことは、壁の心材に竹編みがあったことが推定され、近世の家屋の建築用材によく一致する。一方、1号屋敷跡では土坑から出土した炭化材が調べられたが、これらはスギとクリで、これらも建築材として矛盾の無いものであり、またそれ以外のものであったことも考えられるが、試料が少ないため詳細は不明である。

## 2. 内匠日影周地遺跡

群馬県富岡市大字内匠の日影周地遺跡のA地区の6,11,12,13号住居及びB地区の3号住居から出土した炭化材15点の樹種を同定した。これらの炭化材は住居内床面に散在しており、これらの住居の建築材の一部であったことが考えられている。試料は徒手により横断、放射、接線の各破断面を作成し、それを落射顕微鏡で観察して同定した。その結果、イヌガヤ、オニグルミ、アカガシ亜属、エノキ属、ケヤキ、イヌエンジュ、カエデ属、ムクロジ、トネリコ属、散孔材一種の10種が同定された。以下に同定された各樹種の同定の根拠となった材形質について略記し、それらの代表的な顕微鏡写真を写真1～60に掲載した。また、同定結果の一覧を表2に示してある。フィルムは金沢大学教養部生物学教室に保存されている。

### 同定結果

#### 1. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科

##### 図版4 写真1～5 (日影—12)

材質の極めて均一な針葉樹で、年輪界はほとんど目立たない(写真1, 以下1と略す)。早材部仮道管はやや直径が大きく、晩材部仮道管では接線方向に扁平で、やや壁が厚い(2)。仮道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある(3, 5)。樹脂細胞は散在状で、その水平壁は時として数珠状に肥厚する(4)。放射組織は柔細胞のみからなり、単列で、背は低い(3～5)。分野壁孔は極めて小さく、ヒノキ型で、一分野あたり1～2個である(5)。これらの形質からイヌガヤの材と同定した。

#### 2. オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科

##### 図版4.5 写真6～11 (日影—8)

中型の道管がほぼ単独で密度低く散在状、あるいはやや放射方向に連なる傾向のある散孔材で(7)、道管の穿孔は単一(9,10)、柔組織はほぼ1細胞幅で接線状に並び(7)、放射組織は1～5細胞幅の紡錘形で(8,9)、同性である(10,11)。これらの形質からオニグルミの材と同定した。

#### 3. アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

##### 図版5 写真12～16 (日影—5)

質の硬い炭化材で、単独の中ないし小型の道管がルーズに放射方向に配列する放射孔材である(12,13)。道管の穿孔は単一で、道管-放射組織間の壁孔は縦長の楕円形で柵状に並ぶ(16)。放射組織は単列のものと複合状のものがあり(12～14)、前者は同性である(15)。これらの形質からブナ科コナラ属の内、常緑性のアカガシ亜属の材と同定した。

#### 4. エノキ属 *Celtis* ニレ科

##### 図版5.6 写真17～22 (日影—9)

年輪始めに大型の道管が単独あるいは2個複合して数層に並ぶ環孔材で(17)、晩材部では薄壁の小道管が多数接線方向に集まって接線状の波状の紋をなす(17,18)。道管相互の壁孔は交互状で密に分布し(19)、穿孔は単一、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある(21,22)。放射組織は比較的大きな多列の紡錘形でしばしば鞘状になり(20)、又上下端の細胞が直立あるいは平伏細胞であり、異性である(20,21)。これらの形

質からエノキ属の材と同定した。

5. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

図版6.7 写真23~28 (日影-11)

年輪始めに大道管がほぼ一層に並ぶ環孔材で (23)、大道管は丸く、ほぼ単独、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まってエノキ属同様の波状の紋を成す (23,24)。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は交互状で密、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある (26,28)。放射組織は形の整った紡錘形で上下端にのみ大型の細胞があって大きな結晶を持つ (25,26)。これらの形質からケヤキの材と同定した。

6. イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) C. K. Schn. マメ科

図版7 写真29~34 (日影-3)

エノキ属やケヤキ同様の大道管の配列を示す環孔材で (29)、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状を成したものが散在する (29,30)。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は交互状 (32)、道管-放射組織間壁孔は丸い (34)。木部柔組織は周囲状だが炭化材では区別がつきにくい。放射組織は7細胞幅くらいにまでなる紡錘形で鞘状になり、組織が粗雑な感じがする (31~33)。これらの形質からマメ科のイヌエンジュの材と同定した。

7. カエデ属 *Acer* カエデ科

図版7.8 写真35~40 (日影-1)

丸く薄壁の小型の道管が密度低く散在する散孔材で、薄壁でやや径の大きい繊維状仮道管と厚壁でやや径の小さい繊維状仮道管からなる雲紋状の文様が見える (35,36)。道管の穿孔は単一で、内壁に顕著ならせん肥厚を持つ (38,40)。放射組織は2~3細胞幅の同性で輪郭は不整である (37~39)。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

8. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科

図版8.9 写真41~46 (日影-15)

ケヤキやイヌエンジュに良く似た大道管の配列をする環孔材で、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊状を成し散在し、それらをつなぐように独立帯状の柔組織が分布する (41,42)。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は交互状で密、小道管の内壁にはらせん肥厚がある (44,46)。柔組織は量多く、ストランドを成す (43,44)。放射組織はほぼ同性で4細胞幅くらい、輪郭は不整である (43~45)。以上の形質からムクロジの材と同定した。

9. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

図版9 写真47~52 (日影-7)

年輪始めに大道管が単独あるいは2個複合して数層に並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁で輪郭が角張り、内腔が丸い小道管が数個放射方向に複合したものが散在する (47,48)。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に密に分布する (50~52)。放射組織は2~3細胞幅で背の低い紡錘形で同性である (49~51)。以上の形質からトネリコ属の材と同定した。

10. 散孔材一種 Diffuse porous wood sp.

図版9.10 写真53~60 (日影-2)

薄壁でやや角味を帯びた丸い小道管が、ほぼ単独、時に2個放射方向に複合して均一に散在する散孔材で(53,54)、年輪界はほとんど目だたない。道管相互の壁孔は交互状で、道管の穿孔は単一、内壁にらせん肥厚がある(56,60)。木部柔組織は目だたない。放射組織は2~3細胞幅で痩せた紡錘形で背はさほど高くなく(55~57)、明瞭な異性である(56,58,59)。以上のような形質を持つものは、バラ科のナシ亜科やモクセイ科のあるものなどに似ており、それらとの類縁も考えられるが、炭化材で観察できる形質の範囲では同定にいたらなかったため、散孔材一種として置く。

日影周地遺跡における建築材の用材

以上見てきたように、当遺跡A地区の6, 11, 12, 13号住居、及びB地区の3号住居から出土した炭化材の内、15点の樹種は10種類もの多岐にわたった。これらの炭化材がすべて住居内の床面から出土していることから考えると、そのほとんどがこれら住居の建築材であったと見なすことが出来る。この観点から同定された樹種を見ていくと、6号住居ではムクロジとアカガシ亜属が2点ずつ、それにエノキ属とケヤキがあり、11号ではカエデ属とオニグルミ、12号はトネリコ属、13号はイヌガヤと同定できなかった散孔材一種(2点)、そしてB地区の3号の3点はすべてイヌエンジュ、となっている。調査された資料数が余りにも少ないので、はっきりとした傾向はつかめないが、3号が3点ともイヌエンジュであること、6号の6点の内、ムクロジとアカガシ亜属が2点ずつであることなどは、これらの住居がそれらの材が多く用いられていたことを示している可能性が多少はある。しかし、そうであるにしても、ここでは住居毎に違った材を用い、その樹種も特にあるものを集中して使う、という傾向が全然見られず、ありとあらゆる材を使っているような印象を受け、これがこの遺跡における用材の特徴といえよう。

表1 内匠諏訪前遺跡炭化材の樹種

標本番号	樹種名	発掘区	遺構名	試料番号
諏訪-1	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	272
諏訪-2	アカマツ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	308
諏訪-3	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	311
諏訪-4	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	260
諏訪-5	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	256
諏訪-6	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	314
諏訪-7	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	337
諏訪-8	アカマツ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	276
諏訪-9	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	320
諏訪-10	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	234
諏訪-11	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	482
諏訪-12	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	312
諏訪-13	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	248
諏訪-14	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	233
諏訪-15	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	257
諏訪-16	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	271
諏訪-17	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	239
諏訪-18	コナラ節	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷	504
諏訪-19	竹類	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷 1号炭化物	
諏訪-20	アカマツ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷 1号炭化物	
諏訪-21	アカマツ	内匠諏訪前遺跡A区	2号屋敷 1号炭化物	
諏訪-22	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	1号屋敷 34号土坑	1
諏訪-23	スギ	内匠諏訪前遺跡A区	1号屋敷 34号土坑	2
諏訪-24	クリ	内匠諏訪前遺跡A区	1号屋敷 18号土坑	1

表2 内匠日影周地遺跡出土炭化材の樹種

標本番号	樹種名	発掘区	遺構名	試料番号
日影-1	カエデ属	内匠日影周地遺跡A区	11号住居	3
日影-2	散孔材一種	内匠日影周地遺跡A区	13号住居	42
日影-3	イヌエンジュ	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	11
日影-4	イヌエンジュ	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	12
日影-5	アカガシ亜属	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	1
日影-6	アカガシ亜属	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	14
日影-7	トネリコ属	内匠日影周地遺跡A区	12号住居	45
日影-8	オニグルミ	内匠日影周地遺跡A区	11号住居	12
日影-9	エノキ属	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	9
日影-10	散孔材一種	内匠日影周地遺跡A区	13号住居	43
日影-11	ケヤキ	内匠日影周地遺跡A区	6号住居	2
日影-12	イヌガヤ	内匠日影周地遺跡A区	13号住居	4
日影-13	ムクロジ	内匠日影周地遺跡B区	3号住居	27
日影-14	ムクロジ	内匠日影周地遺跡B区	3号住居	29
日影-15	ムクロジ	内匠日影周地遺跡B区	3号住居	29

## 付篇2 内匠諏訪前遺跡火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. 分析の目的

内匠諏訪前遺跡は、鑄川右岸に発達した高位の河岸段丘面上に位置する。段丘を構成する礫層の上位には、下位より粘土層、褐色火山灰土、黒ボク土と連続する堆積物および土壌が認められた。褐色火山灰土の中には、多くの降下テフラが含まれている。鑄川河岸において、これらのテフラについて記載された例はこれまでほとんどない。そこで、ここでは重鉱物組成を明かにし、その特徴を把握しておくことにする。また粘土層最上部には、白色のガラス質細粒火山灰の純層が認められた。このテフラについては、軽鉱物組成を求めるとともに、屈折率の測定を行った（写真は図版14）。

### 2. 分析の方法

分析は、次の手順で行った。

- 1) 試料約30gを秤量。
- 2) 粗粒の軽石を含む試料について、乳鉢で粉碎。
- 3) 超音波洗浄と分析篩（1/16mm）による篩別を繰り返し、泥分を除去。
- 4) 80°Cで恒温乾燥。
- 5) 分析篩により、1/4—1/8mmの粒子を篩別。
- 6) テトラプロモエタン（比重2.96）により、比重分離。
- 7) 偏光顕微鏡下で、重鉱物あるいは軽鉱物250粒を同定し、重鉱物組成あるいは軽鉱物組成を求める。
- 8) 細粒ガラス質火山灰について、新井（1972）の方法により屈折率測定。

### 3. 分析結果

#### (1) 層 序

内匠諏訪前遺跡の代表的な土壌断面図を図1に示す。この地点では、下位より粘土層、褐色火山灰土、黒ボク土の堆積が認められた。粘土層は灰褐色でとくに粘土分に富む（重粘土質）。この粘土層の最上部には厚さ2cmの細粒で白色の火山灰の純層（試料番号11）がレンズ状に認められた。

粘土層の上位の褐色火山灰土には、5層準にわたってテフラの降灰層準が認められた。最下位のテフラは粘土層を整合に覆うテフラ（層厚62cm）で、白色あるいは橙色に風化している。細かくみると6ユニット（試料番号5～10）から構成されているようである。このうち下から5番目のユニットは最も厚く（層厚34cm）、また最も粗粒の軽石（最大径31mm）や石質岩片（最大径7mm）を含む。このテフラの上位には、暗褐色火山灰土をはさんで3ユニットから構成されるテフラ（層厚13cm）が認められる。それらは下位より黄橙色軽石層（軽石の最大径8mm、試料番号4）、黄灰色粗粒火山灰層、橙色軽石層（粗粒火山灰を多く含む、軽石の最大径は8mm、試料番号3）である。このテフラの上位には厚さ6cmの黄橙色の軽石層（試料番号2）が認められる。含まれる軽石の最大径は、8mmである。

このテフラの上位の褐色火山灰土には、白色～灰白色の軽石の濃集部が認められる。含まれる軽石の最大径は、8mmである。また褐色火山灰土の最上部には、厚さ5cmの黄色軽石のレンズ（試料番号1）が認められる。軽石の最大径は19mmで、斜長石などの結晶を含む。

## (2) 鉱物組成

粘土層最上部に認められる火山灰（試料番号11）の軽鉱物組成ダイアグラムを図2に、その内訳を表1に示す。この試料には、平板状のいわゆるバブル型の透明な火山ガラスが非常に多く含まれている。この火山ガラスについて屈折率（ $n$ ）の測定を行ったところ、1.499～1.501の値が得られた。このことから、本テフラは約2.1～2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰（At, 町田・新井, 1976）に対比される。

降下テフラ層の重鉱物組成のダイアグラムを図3に、その内訳を表2にそれぞれ示す。分析を行ったいずれのテフラにも、斜方輝石や単斜輝石が多く認められ、角閃石は含まれていない。これらのことからいずれのテフラも浅間火山起源のテフラであることがわかる。層相および重鉱物組成から、試料番号5～10、試料番号3～4、試料番号2の3枚のテフラはいずれも約1.6～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石（As-Bp, 町田ほか, 1984）に対比される。これらのうち、最下位の厚いテフラは、単独に浅間一室田軽石（As-Mp）と呼ばれることがある（たとえば早田, 1989）。褐色火山灰土の最上部に認められる黄色軽石は、層相および鉱物組成から約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石（As-YP, 町田ほか, 1984）に対比される。さらに As-BP と As-YP の間に認められた白色～灰白色の軽石は、層位から約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石（As-SP, 町田ほか, 1984）に由来している可能性がある。

## 4. まとめ

内匠諏訪前遺跡における今回の分析で、下位より AT、As-BP、As-SP?、As-YP の降灰層準および層序を把握することができ、多くの時間軸の設定が可能であることが明らかになった。とくに AT を純層で確認できたことの意義は大きいと考えられる。今後、周辺遺跡でも石器包含層との関係が明確な AT 純層が確認される可能性もあり、期待される。

### 参考文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジー基礎的研究—, 第四紀研究, 11, p.254-269.  
 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—, 科学, 46, p.339-347  
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究とテフラのカタログ—, 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学」, p.865-928.  
 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p297-312.

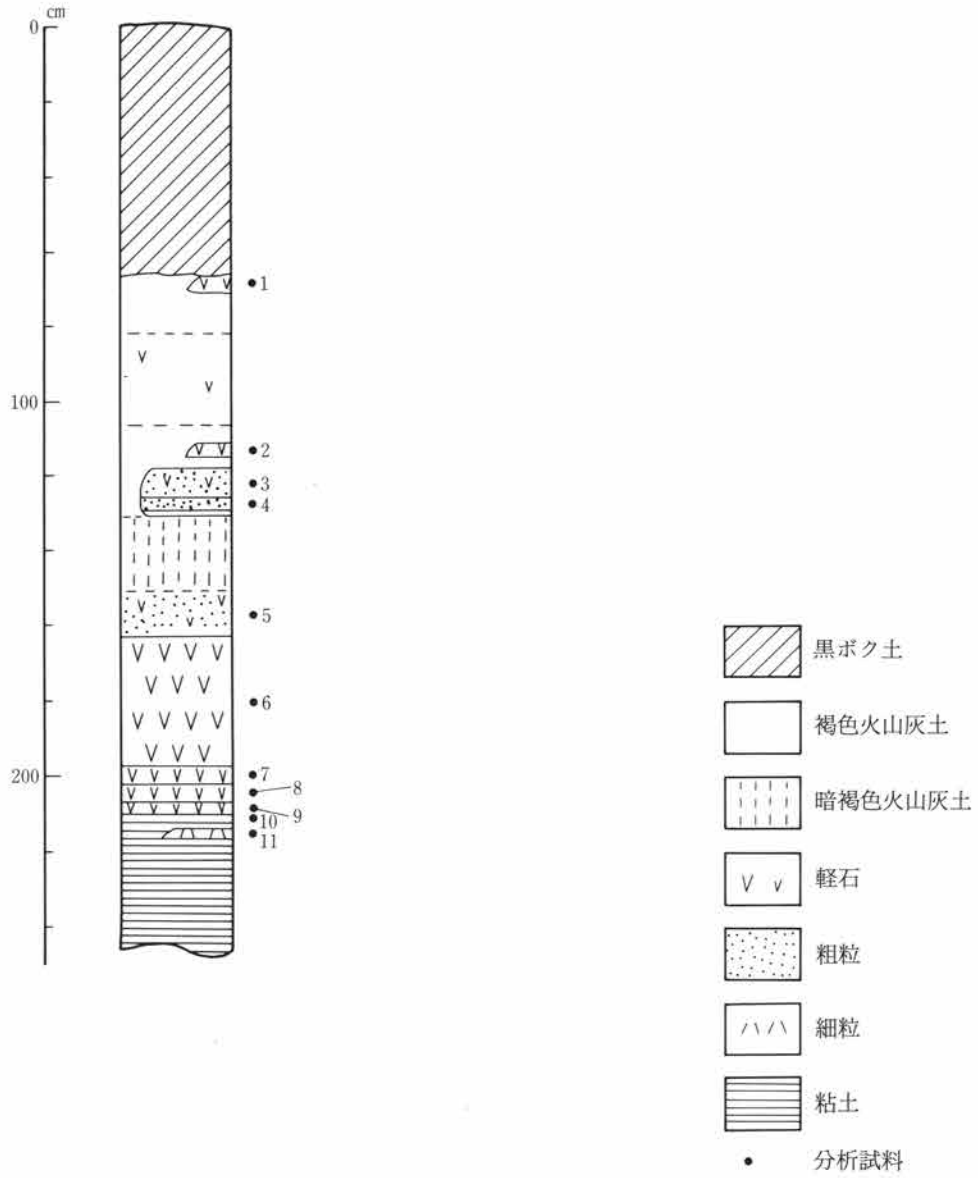


図1 内匠諏訪前遺跡A区における褐色火山灰土の断面



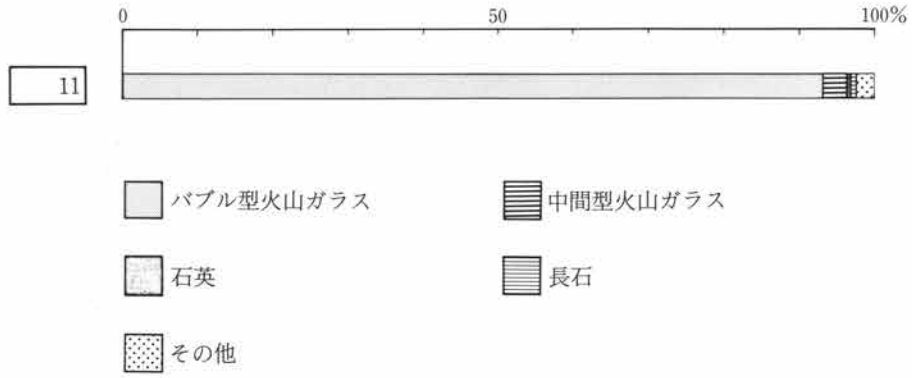


図2 試料番号11の軽鉱物組成ダイアグラム

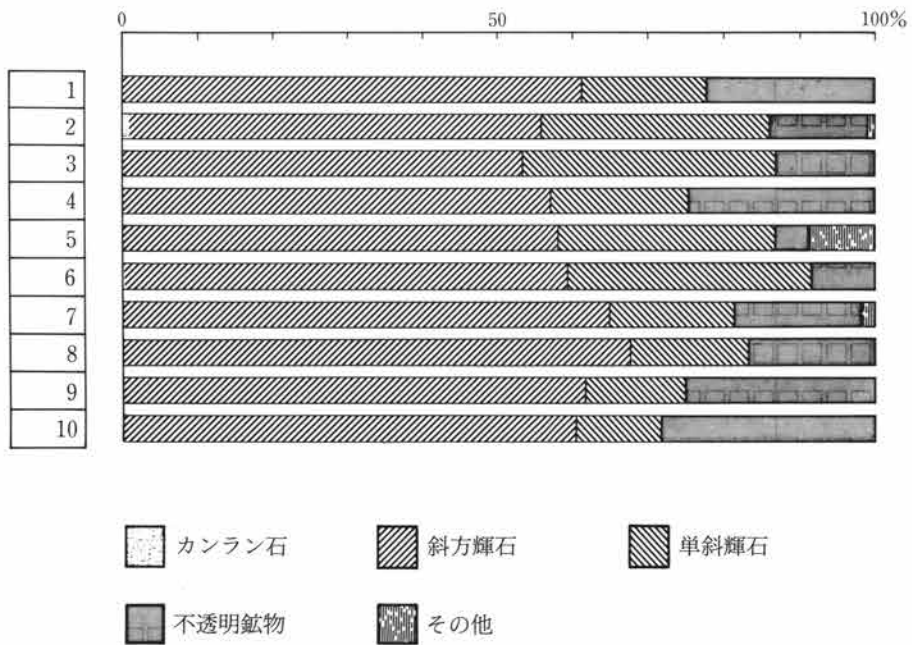


図3 重鉱物組成ダイアグラム

表1 試料番号11の軽鉱物組成

試料番号	軽 鉱 物 組 成					同定鉱物粒数
	バブル型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	
11	233	8	1	2	6	250

表2 重鉱物組成

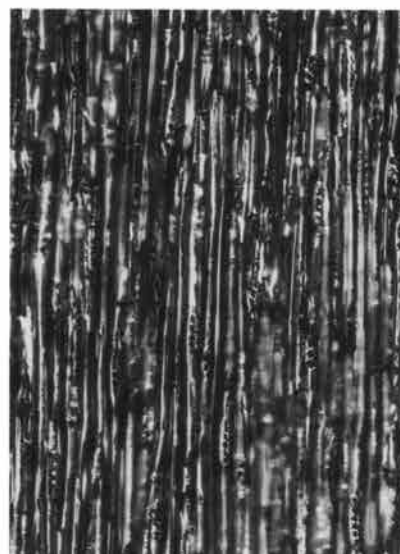
試料番号	重 鉱 物 組 成					同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	その他	
1	1	152	41	56		250
2	2	137	76	33	2	250
3		133	84	33		250
4		142	46	61	1	250
5		145	72	11	22	250
6		148	81	20	1	250
7	1	161	41	43	4	250
8		169	39	41	1	250
9		154	33	63		250
10		151	28	69	2	250



1 スギ (諏訪-1) C×50



2 スギ (諏訪-1) C×100



3 スギ (諏訪-1) T×100



4 スギ (諏訪-1) T×200



5 スギ (諏訪-1) R×200



6 スギ (諏訪-1) R×500



7 アカマツ (諏訪-2) C×50



8 アカマツ (諏訪-2) C×100



9 アカマツ (諏訪-2) T×100

図版一 2



10 アカマツ (諏訪-2) T×200



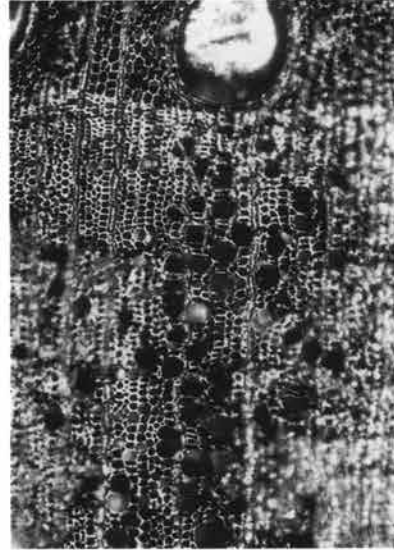
11 アカマツ (諏訪-2) R×200



12 アカマツ (諏訪-2) R×500



13 クリ (諏訪-24) C×50



14 クリ (諏訪-24) C×100



15 クリ (諏訪-24) T×100



16 クリ (諏訪-24) T×200



17 クリ (諏訪-24) R×100



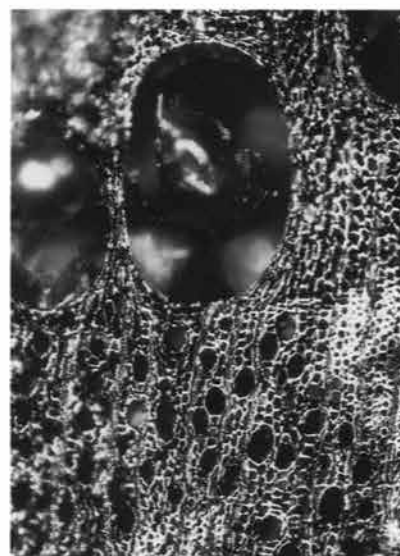
18 クリ (諏訪-24) R×200



19 クリ (諏訪-24) R×200



20 コナラ節 (諏訪-18) C×50



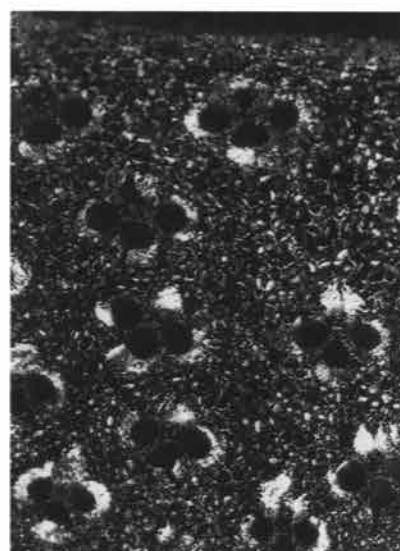
21 コナラ節 (諏訪-18) C×100



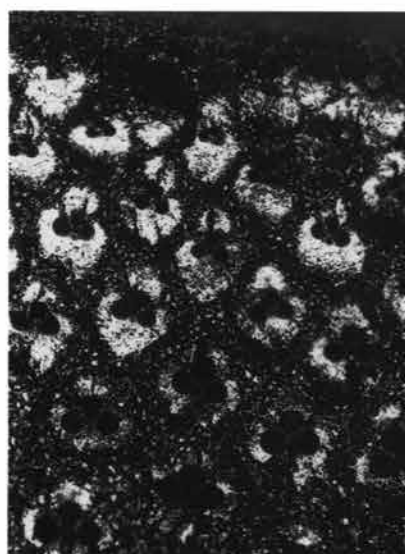
22 コナラ節 (諏訪-18) T×100



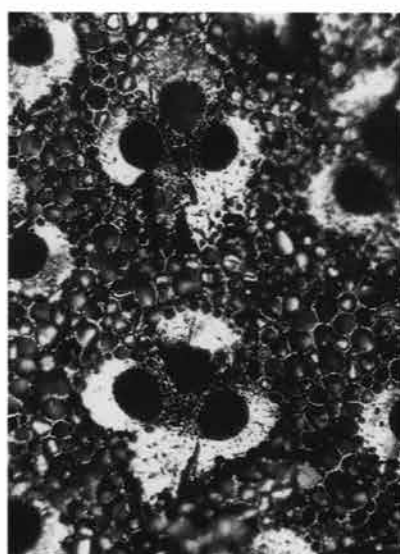
23 コナラ節 (諏訪-18) R×200



24 竹笹類 (諏訪-19) C×50



25 竹笹類 (諏訪-19) C×50

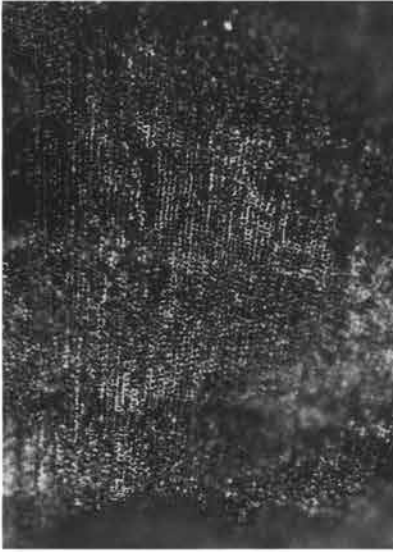


26 竹笹類 (諏訪-19) C×100

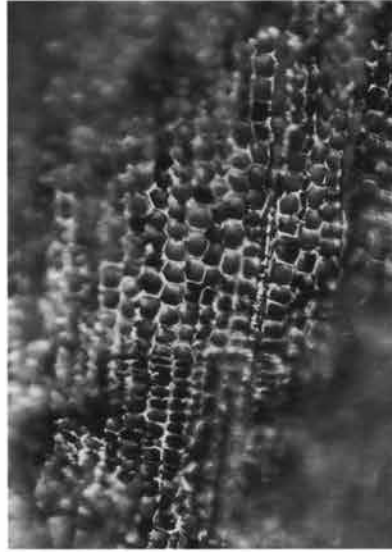


27 竹笹類 (諏訪-19) C×100

図版一 4



1 イヌガヤ (日影-12) C×50



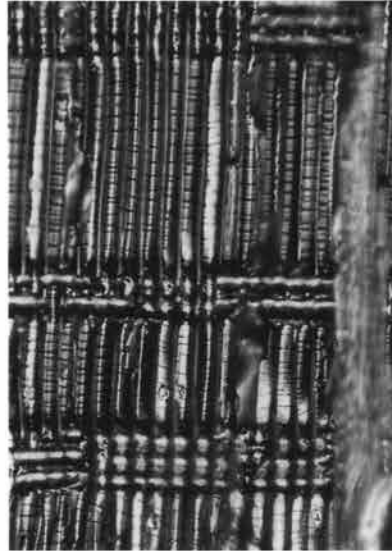
2 イヌガヤ (日影-12) C×200



3 イヌガヤ (日影-12) T×200



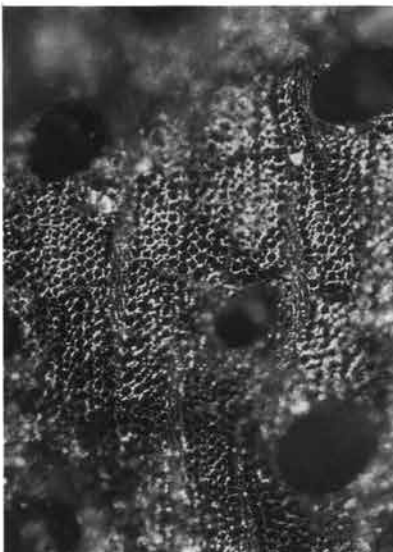
4 イヌガヤ (日影-12) T×500



5 イヌガヤ (日影-12) R×200



6 オニグルミ (日影-8) C×50



7 オニグルミ (日影-8) C×100



8 オニグルミ (日影-8) T×100



9 オニグルミ (日影-8) T×200



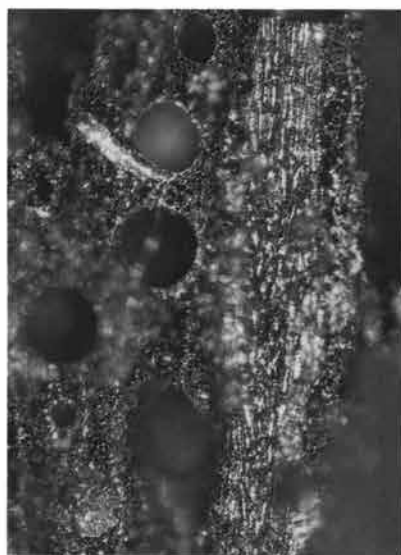
10 オニグルミ (日影-8) R×100



11 オニグルミ (日影-8) R×200



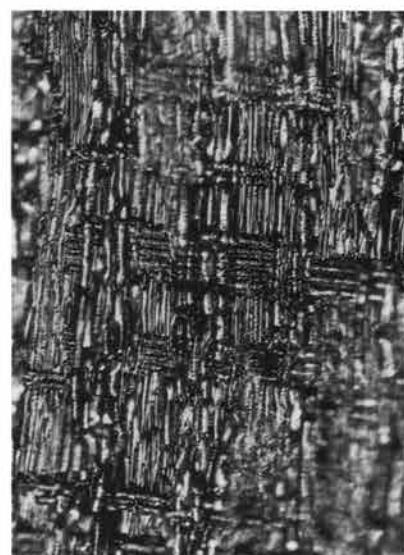
12 アカガシ亜属 (日影-5) C×50



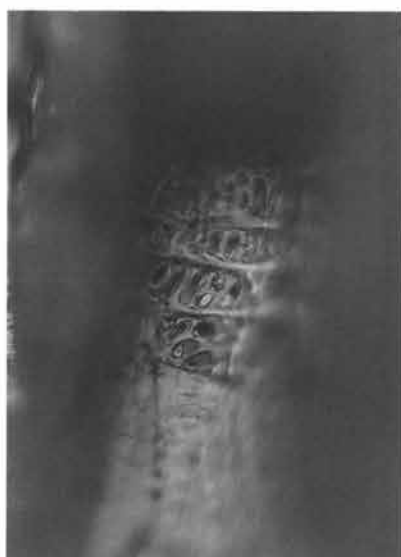
13 アカガシ亜属 (日影-5) C×100



14 アカガシ亜属 (日影-5) T×200



15 アカガシ亜属 (日影-5) R×100



16 アカガシ亜属 (日影-5) R×500



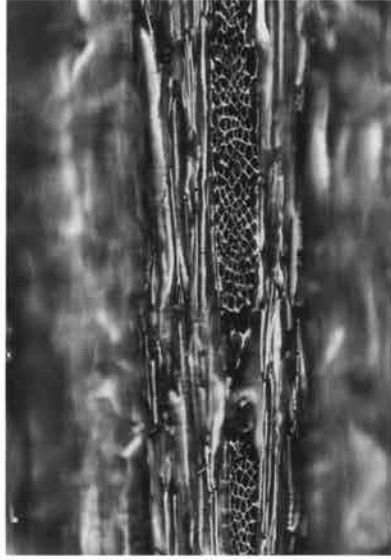
17 エノキ属 (日影-9) C×50



18 エノキ属 (日影-9) C×100



19 エノキ属 (日影-9) T×100



20 エノキ属 (日影-9) T×200



21 エノキ属 (日影-9) R×100



22 エノキ属 (日影-9) R×200



23 ケヤキ (日影-11) C×50



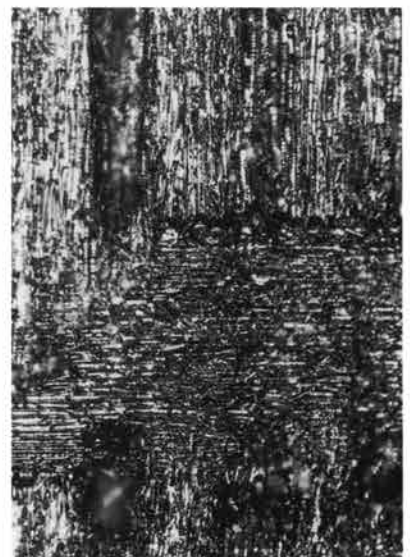
24 ケヤキ (日影-11) C×100



25 ケヤキ (日影-11) T×100



26 ケヤキ (日影-11) T×200

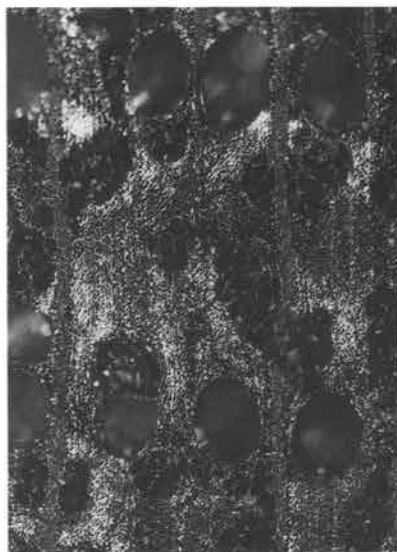


27 ケヤキ (日影-11) R×100

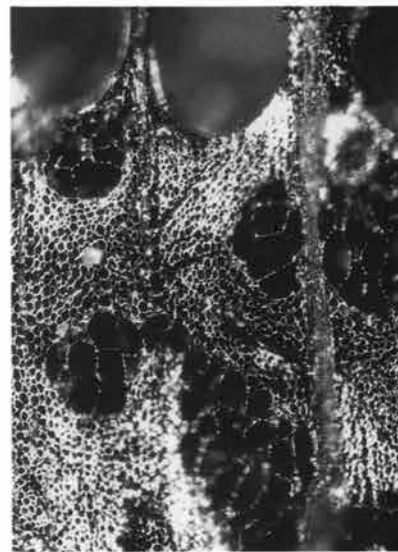




28 ケヤキ (日影-11) R×200



29 イヌエンジュ (日影-3) C×50



30 イヌエンジュ (日影-3) C×100



31 イヌエンジュ (日影-3) T×100



32 イヌエンジュ (日影-3) T×200



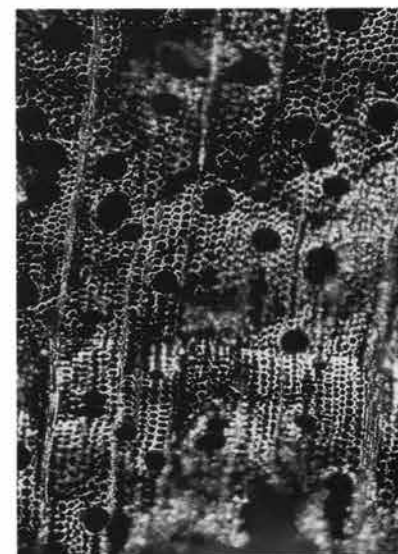
33 イヌエンジュ (日影-3) R×100



34 イヌエンジュ (日影-3) R×200



35 カエデ属 (日影-1) C×50



36 カエデ属 (日影-1) C×100



37 カエデ属 (日影-1) T×100



38 カエデ属 (日影-1) T×200



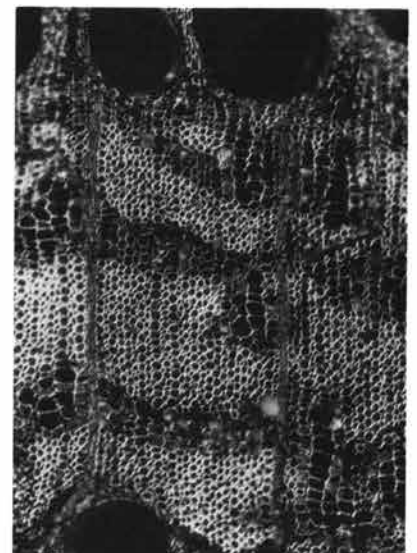
39 カエデ属 (日影-1) R×100



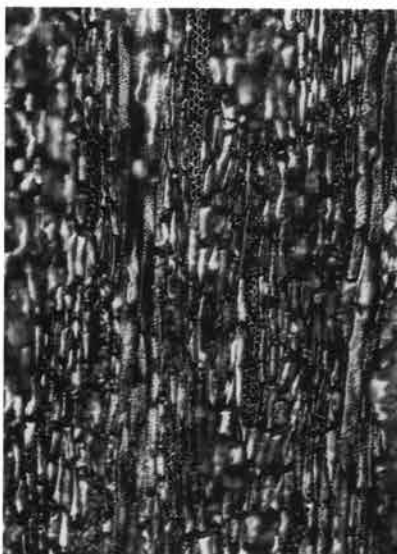
40 カエデ属 (日影-1) R×200



41 ムクロジ (日影-15) C×50



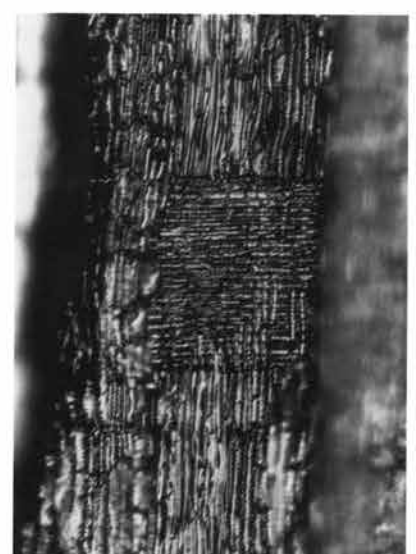
42 ムクロジ (日影-15) C×100



43 ムクロジ (日影-15) T×100



44 ムクロジ (日影-15) T×200



45 ムクロジ (日影-15) R×100



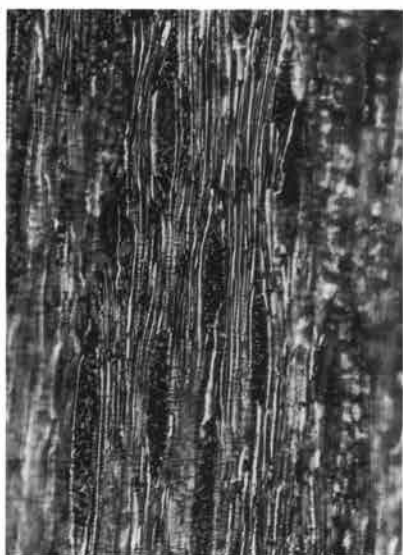
46 ムクロジ (日影-15) R×200



47 トネリコ属 (日影-7) C×50



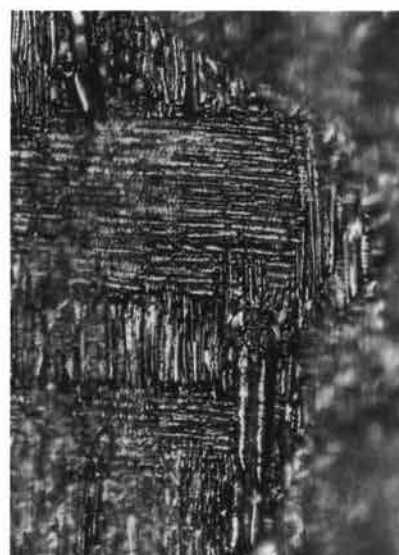
48 トネリコ属 (日影-7) C×100



49 トネリコ属 (日影-7) T×100



50 トネリコ属 (日影-7) T×200



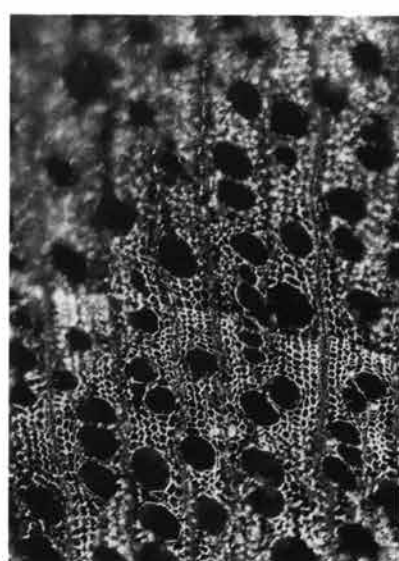
51 トネリコ属 (日影-7) R×100



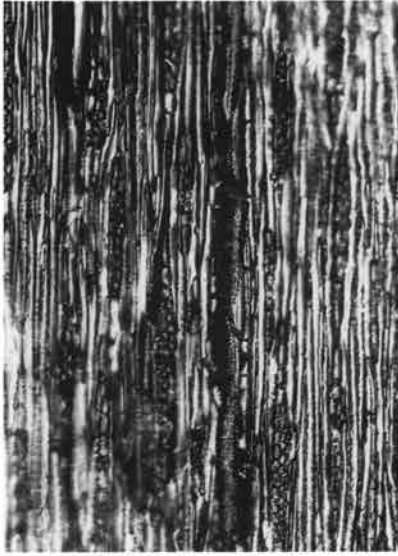
52 トネリコ属 (日影-7) R×200



53 散孔材一種 (日影-2) C×50



54 散孔材一種 (日影-2) C×100



55 散孔材一種 (日影-2) T×100



56 散孔材一種 (日影-2) T×200



57 散孔材一種 (日影-2) T×200



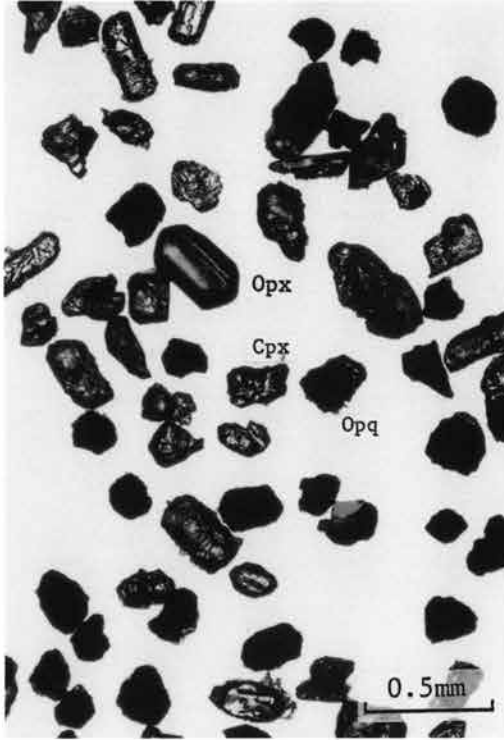
58 散孔材一種 (日影-2) R×100



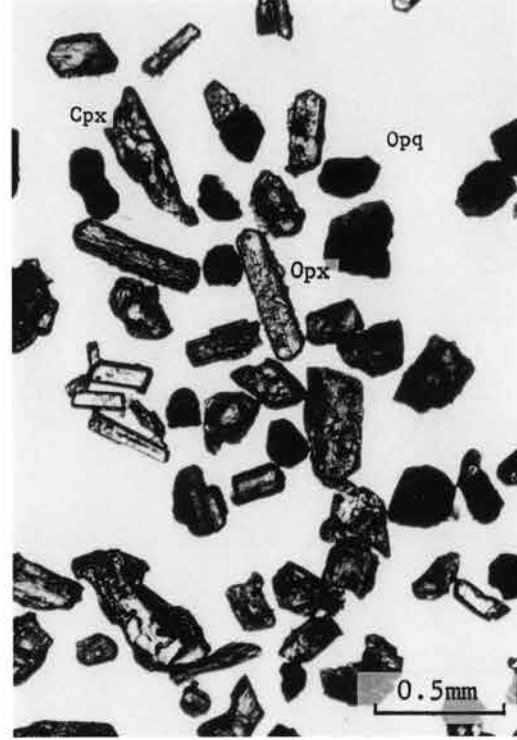
59 散孔材一種 (日影-2) R×200



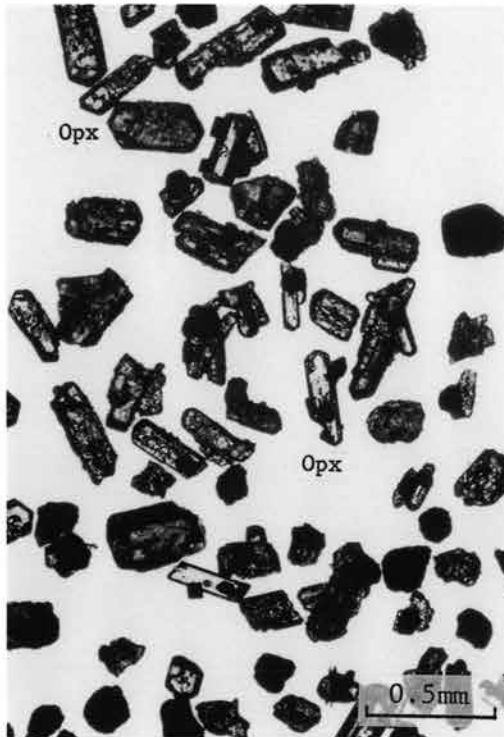
60 散孔材一種 (日影-2) R×200



試料番号1 (As-YP)



試料番号3 (As-BP)



試料番号6 (As-MP)



試料番号11 (AT)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Opq: 不透明鉱物, Bw: バブル型ガラス



写 真 图 版







内匠諏訪前遺跡と内匠日影周地遺跡（手前）全景（空中写真西から）



内匠日影周地遺跡A区全景（空中写真東から）



内匠日影周地遺跡B区全景（空中写真東から）



内匠日影周地遺跡A区南側全景（空中写真）



内匠日影周地遺跡B区全景（空中写真）



内匠諏訪前遺跡A区旧石器試掘状況（西から）



内匠日影周地遺跡A区旧石器試掘状況（東から）



内匠日影周地遺跡遠景（南から）



内匠日影周地遺跡遠景（北から）



内匠諏訪前遺跡B区全景（東から）



諏A 8号住居全景（北から）



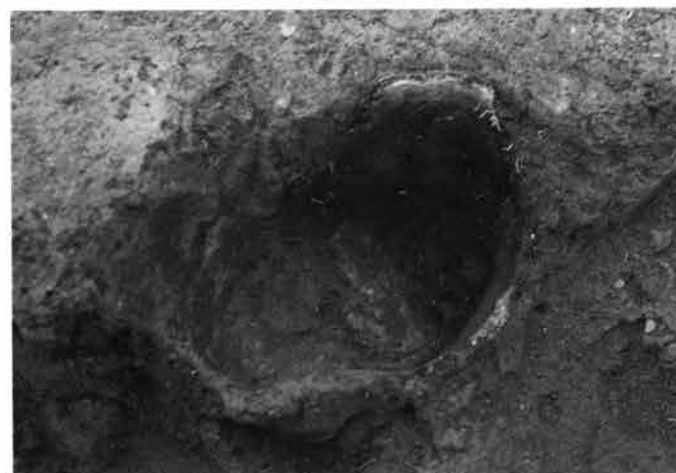
諏A 10号住居・70号・71号土坑全景（東から）



諏A 10号住居遺物出土状態



諏B 2号住居全景（南から）



諏B 2号住居埋壺出土状態（東から）



諏B 4号住居全景（北から）



諏B 5号住居全景（北から）



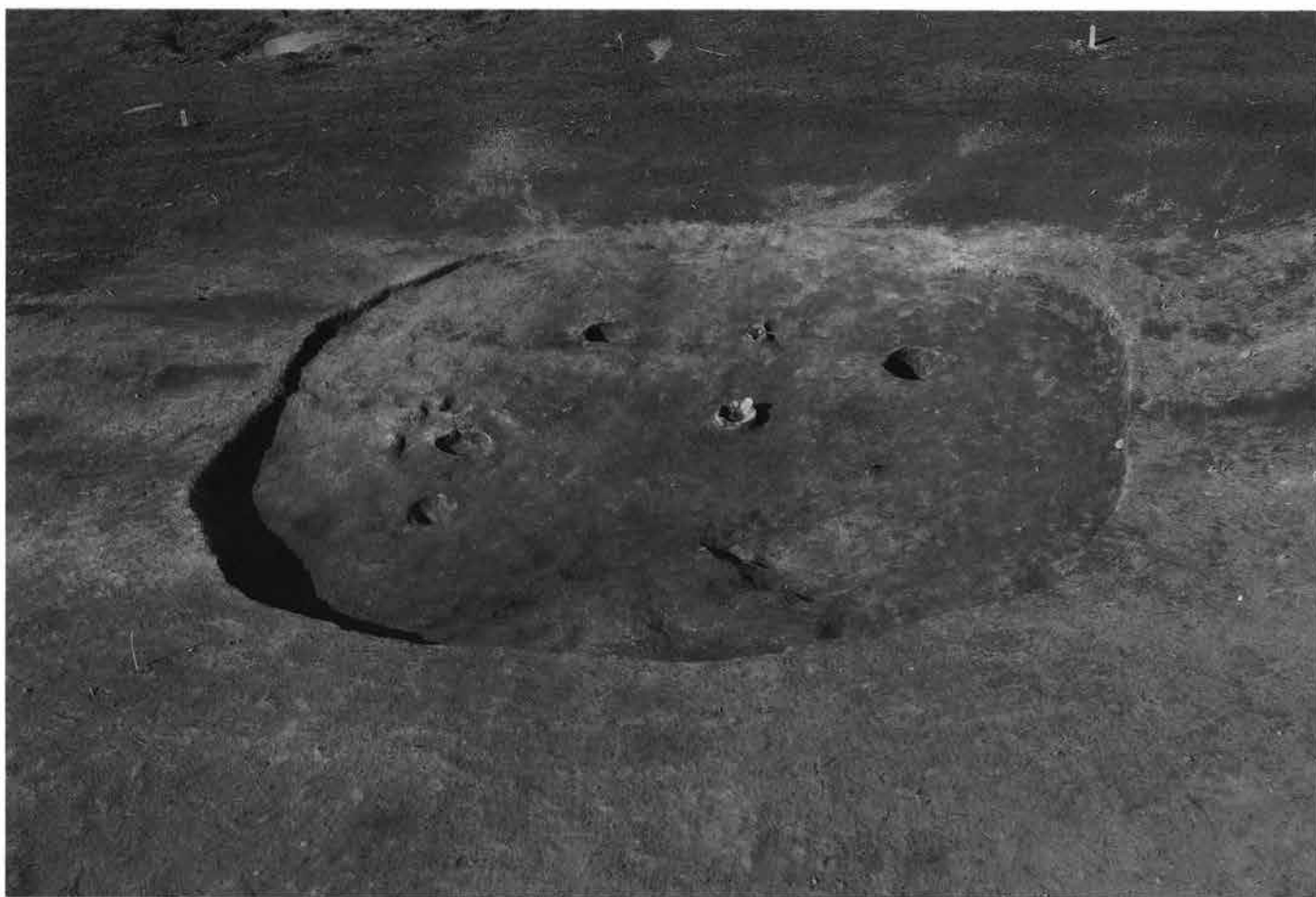
諏B 5号住居掘り方全景（北から）



日A 2号住居遺物出土状態（北から）



日A 2号住居遺物出土状態（北から）



日A 2号住居全景（南から）



諏A 44号土坑全景



諏A 45号土坑全景



諏A44号・45号・46号・47号・48号土坑全景（東から）



諏A46号土坑全景（南から）



諏A47号土坑全景（南から）



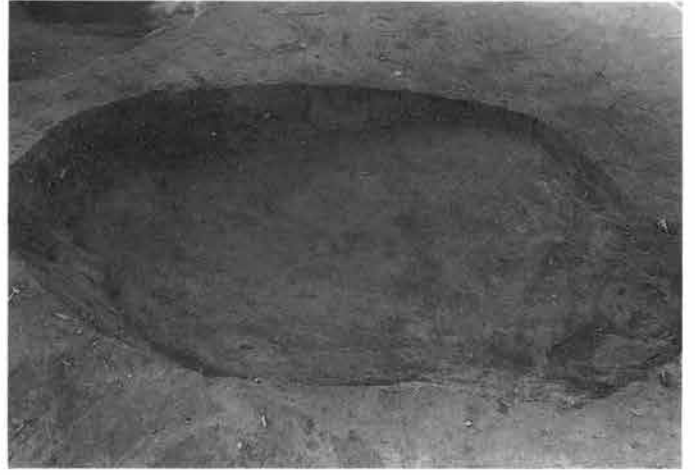
諏A48号土坑全景（南から）



諏A49号土坑全景



諏A52号土坑全景



諏A54号土坑全景（東から）



諏A73号土坑セクション



諏A73号土坑全景（東から）



諏A74号土坑全景（東から）



諏A75号土坑全景（東から）



諏A76号土坑全景（東から）



諏A77号土坑全景（東から）



諏A78号土坑全景（東から）



諏A82号土坑セクション（南から）



諏A82号土坑全景（南から）



諏A83号土坑全景（南から）



諏A84号土坑全景（北から）



諏A85号土坑遺物出土状態（北から）



諏A85号土坑全景（北から）



1号埋壺





諏B 1号土坑全景（南から）



諏B 2号土坑全景（西から）



諏B 3号土坑全景（南から）



諏B 4号土坑全景（北から）



諏B 5号土坑全景（北から）



諏B 6号土坑全景（東から）



諏B 14号土坑全景 (東から)



諏B 20号土坑全景



諏B 22号土坑全景 (南から)



諏B 23号土坑全景 (南から)



諏B 24号土坑全景 (南から)



諏B 25号土坑全景 (東から)



諏B 26号土坑全景 (南から)



諏B 27号土坑全景 (西から)



諏B 28号土坑全景（南から）



諏B 29号土坑全景（南から）



諏B 30号土坑全景（南から）



日A 27号土坑全景（北から）



日A 28号土坑全景（東から）



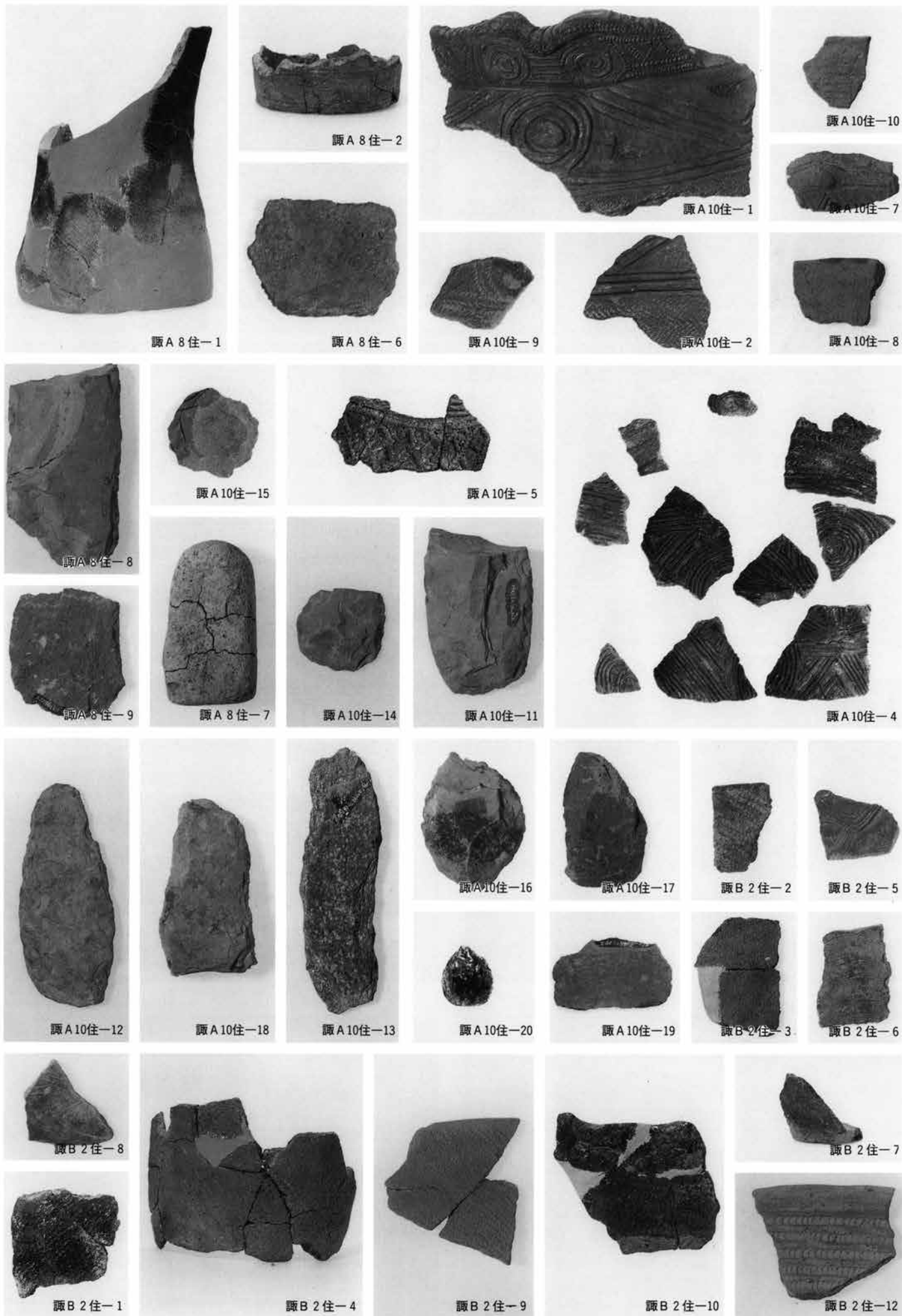
日A 29号土坑全景（西から）



日B 4号土坑全景（北から）



1号集石全景（南から）





諏B 2住-11



諏B 2住-13



諏B 2住-16



諏B 2住-17

諏B 2住-18



諏B 2住-14



諏B 5住-5



諏B 2住-19



諏B 4住-3



諏B 5住-3



諏B 5住-1



諏B 5住-2



諏B 2住-15



諏B 5住-6



諏B 4住-2



日A 2住-5



日A 2住-7



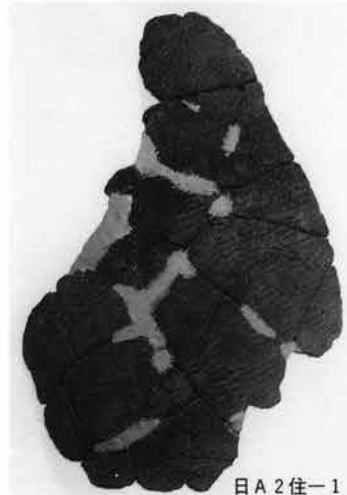
日A 2住-2



日A 2住-4



日A 2住-11



日A 2住-1



日A 2住-3



日A 2住-13



日A 2住-19



日A 2住-15



日A 2住-17



日A 2住-16



日A 2住-18



諏A 46坑-1



諏A 81坑-1



諏A 75坑-1



諏A 47坑-1

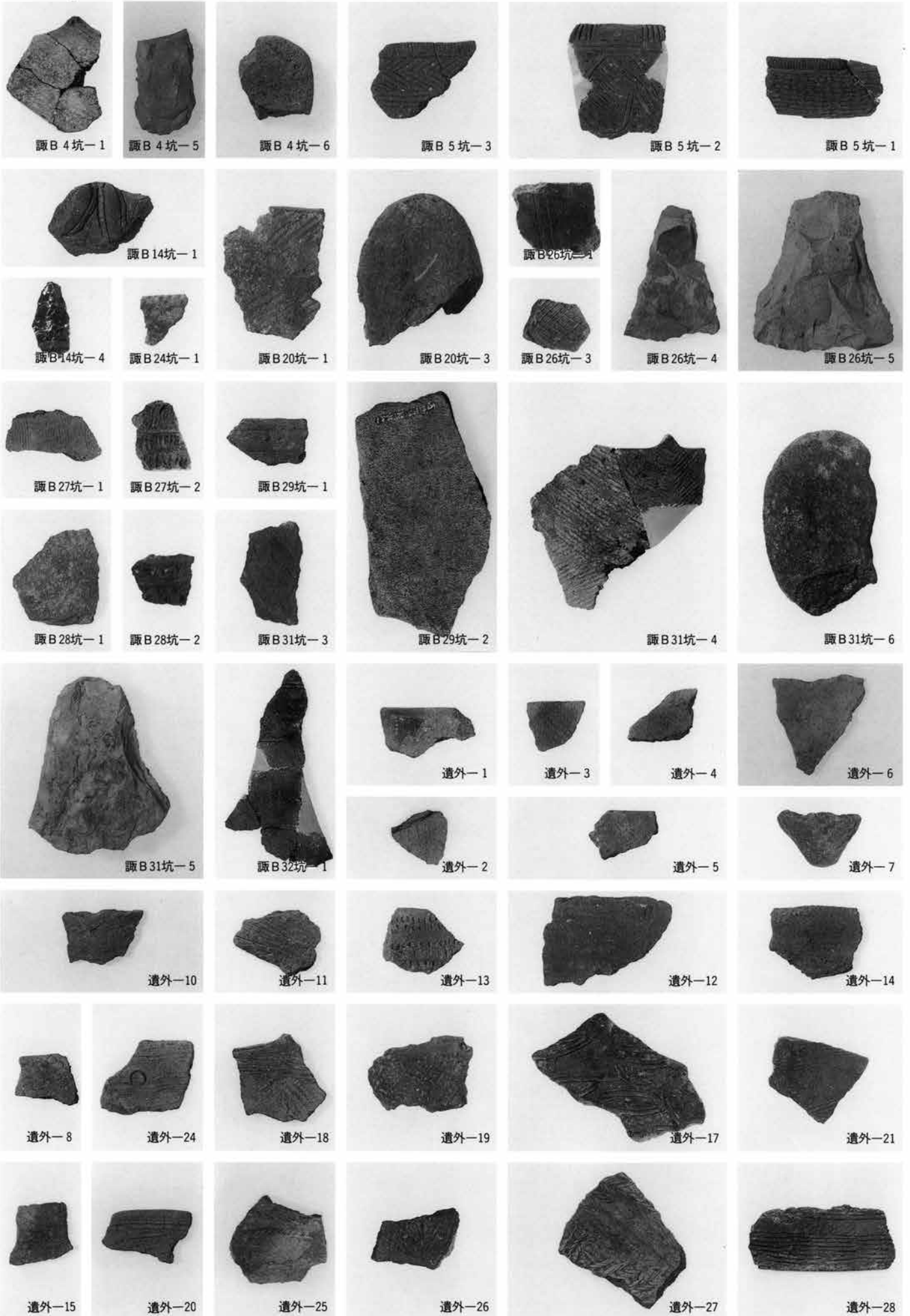


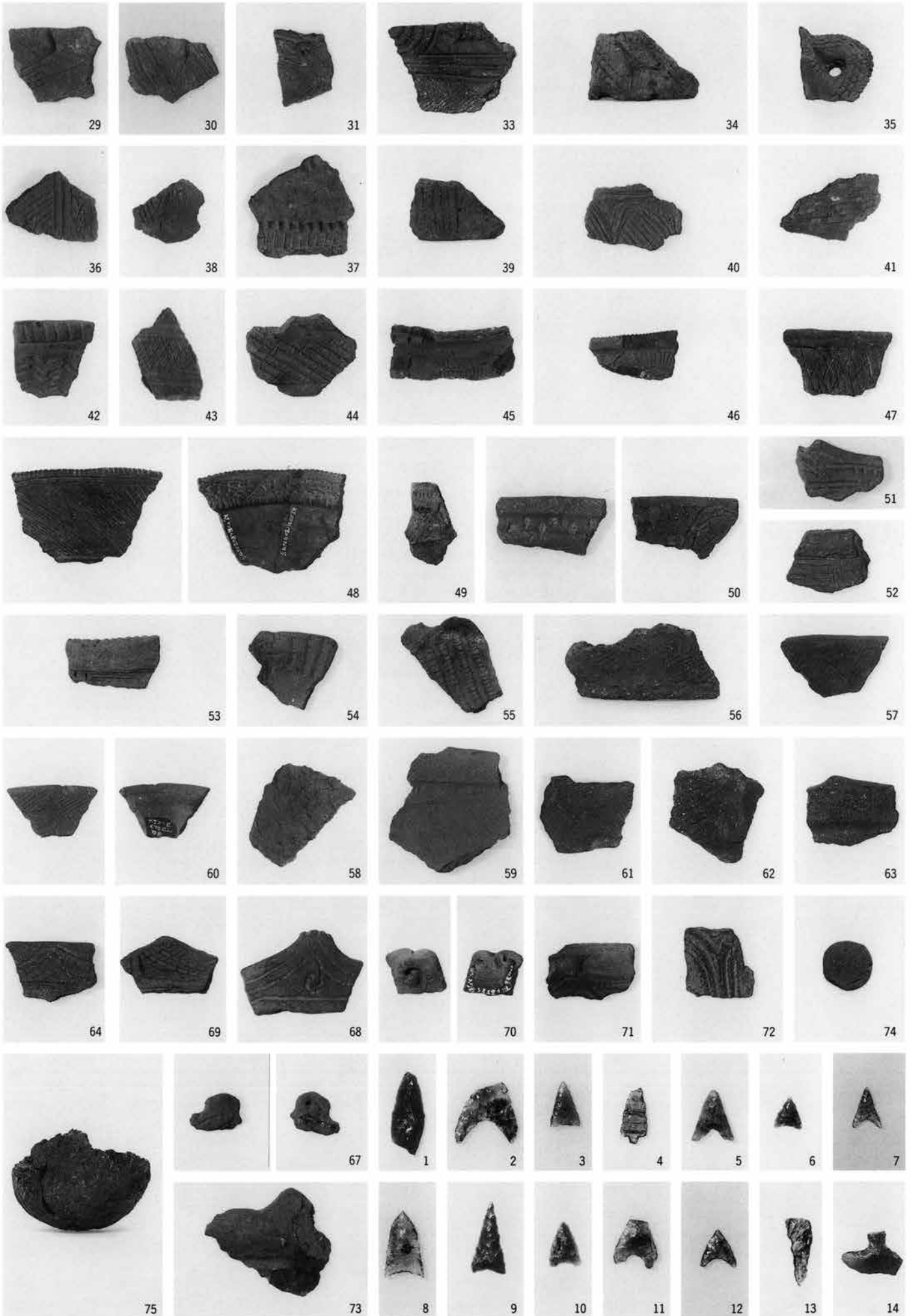
諏A 53坑-4

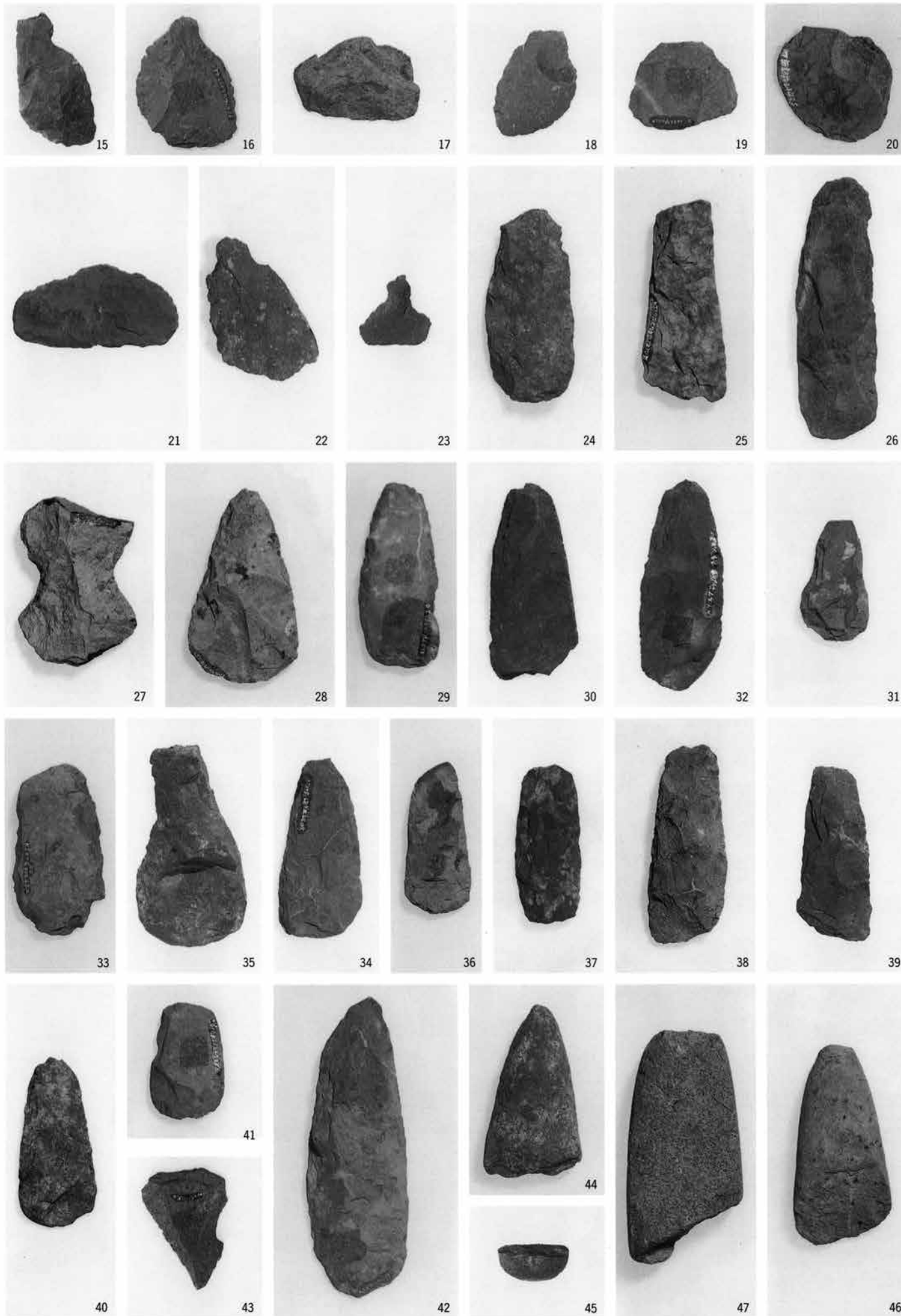


諏B 4坑-3

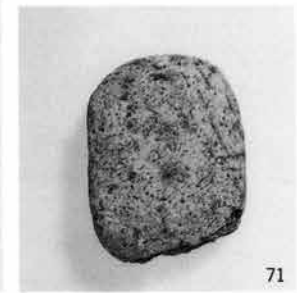
PL. 14 縄文時代













内匠日影周地遺跡 A 区弥生時代の竪穴住居群（東から）



内匠日影周地遺跡 A 区弥生時代の竪穴住居（西から）



日A 3号住居全景



日A 3号住居遺物出土状態



日A 3号住居遺物出土状態



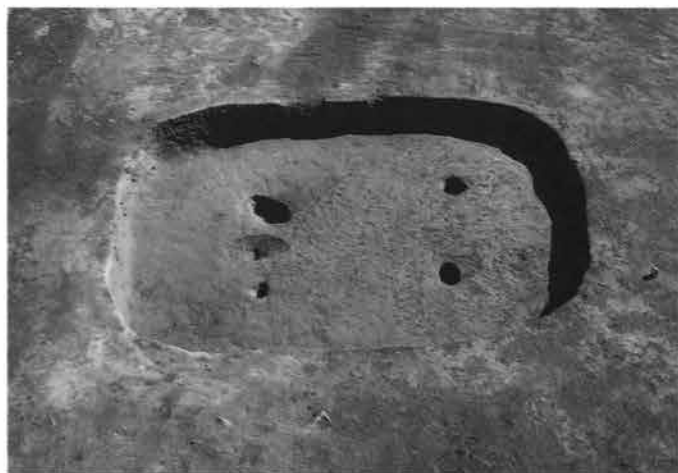
日A 3号住居遺物出土状態



日A 3号住居2号炉全景



日 A 4 号住居遺物出土状態



日 A 4 号住居全景 (西から)



日 A 5 号住居遺物出土状態 (南から)



日 A 5 号住居遺物出土状態



日 A 5 号住居遺物出土状態



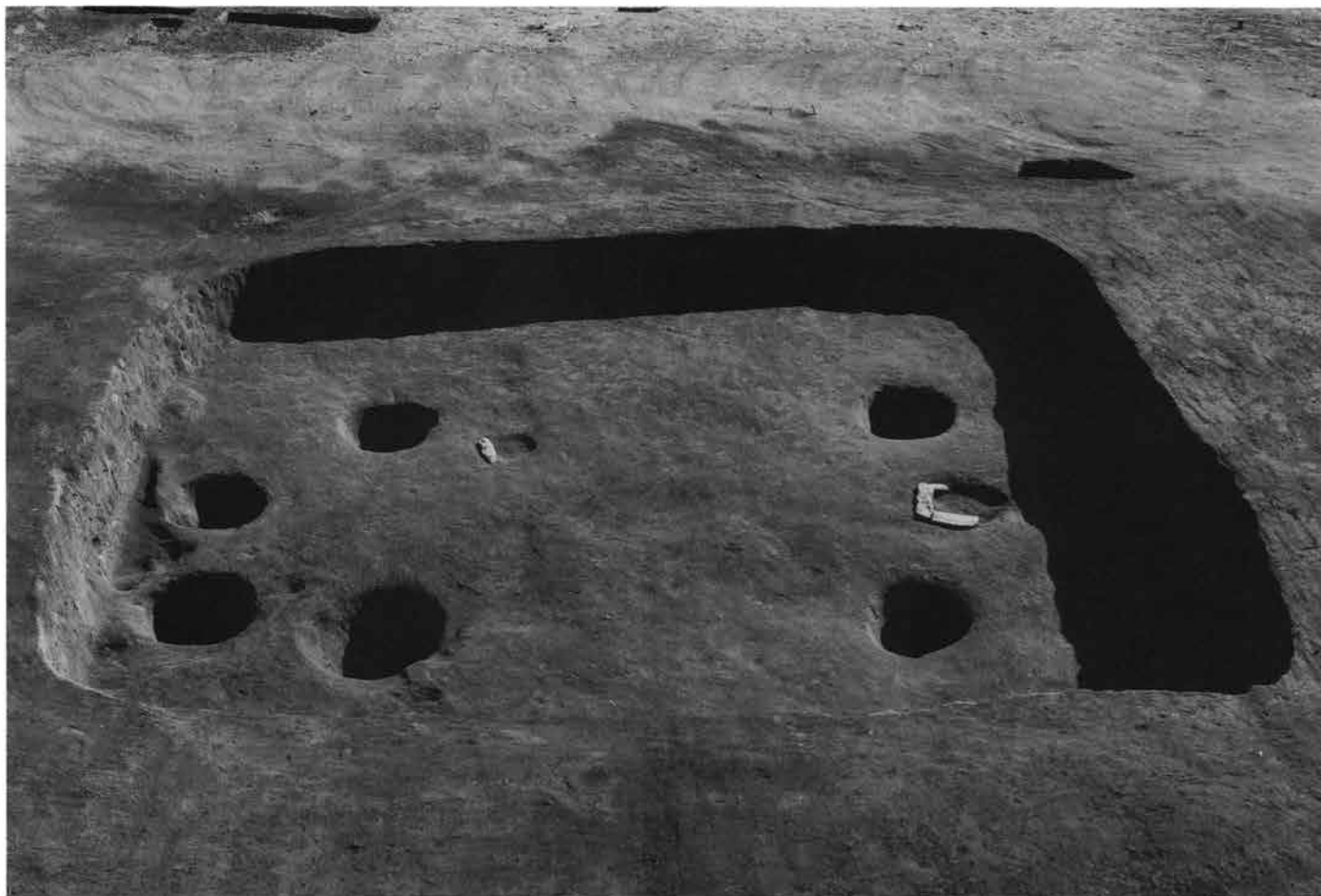
日 A 5 号住居遺物出土状態



日 A 5 号住居 1 号炉



日 A 5 号住居 2 号炉



日 A 5 号住居全景（北から）



日 A 8 号住居遺物出土状態（南から）



日 A 8 号住居全景（南から）



日 A 9 号住居炉セクション（東から）



日 A 9 号住居全景（西から）



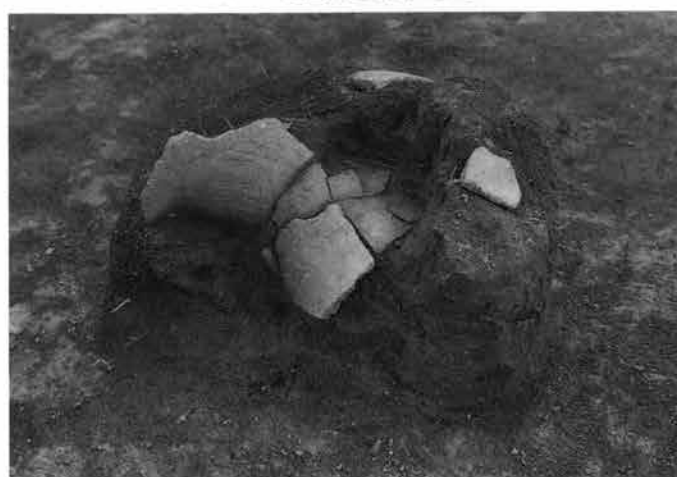
日 A 10号住居全景 (南から)



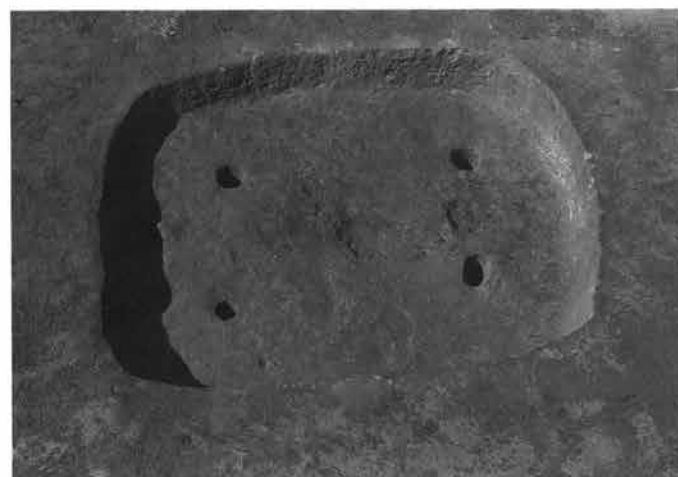
日 A 10号住居遺物出土状態



日 A 10号住居遺物出土状態



日 A 10号住居遺物出土状態



日 A 12号住居全景 (東から)



日 A 12号住居セクション (南から)



日 A 12号住居遺物出土状態 (南から)



日 A 12号住居遺物出土状態



日 A 15号住居遺物出土状態 (南から)



日 A 15号住居遺物出土状態



日 A 15号住居全景 (東から)



日 A 16号住居全景 (南から)



日 A 16号住居掘り方全景 (東から)



日 A 16号住居遺物出土状態



日 A 16号住居遺物出土状態



日 A 17号住居全景 (西から)



日 A 17号住居遺物出土状態



日 A 17号住居遺物出土状態



日 A 18号住居全景 (東南から)



日 A 18号住居全景 (南から)



日 A 18号住居炉全景 (東から)

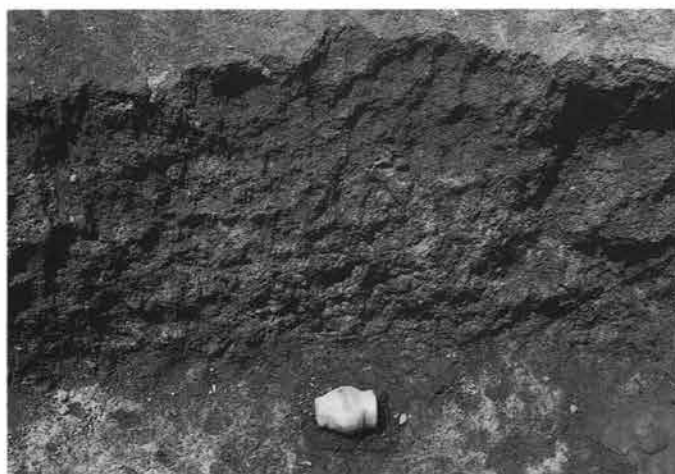




日B 2号住居全景（東から）



日B 2号住居セクション（西から）



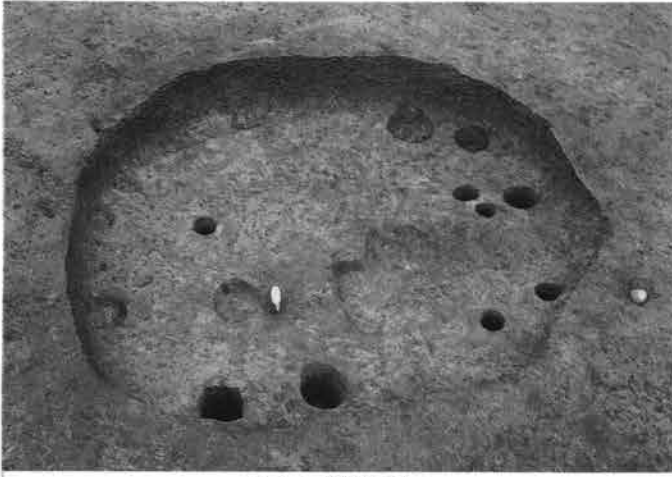
日B 2号住居遺物出土状態



日B 2号住居遺物出土状態



日B 2号住居遺物出土状態



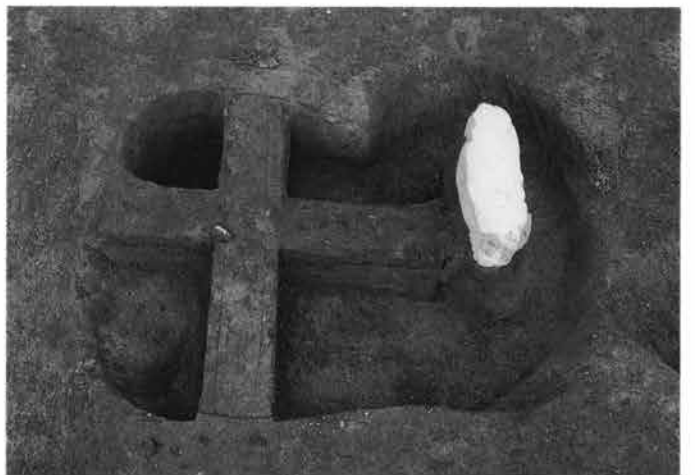
日B 4号住居全景



日B 4号住居遺物出土状態 (東から)



日B 4号住居遺物出土状態 (東から)



日B 4号住居炉セクション (西から)



日B 8号住居全景 (北から)



日B 8号住居遺物出土状態 (北から)



日B 8号住居遺物出土状態 (北から)



日B 8号住居遺物出土状態 (北から)



諏A64号土坑全景（北から）



諏A64号土坑セクション（東から）



諏A64号土坑遺物出土状態



日A7号土坑全景



日A9号(左)・10号(右)土坑全景（西から）



日A11号土坑全景



日A12号土坑全景（西から）



日A14号土坑全景



日 A15号土坑遺物出土状態 (東から)



日 A15号土坑セクション (南から)



日 A15号土坑全景 (西から)



日 A16号土坑全景



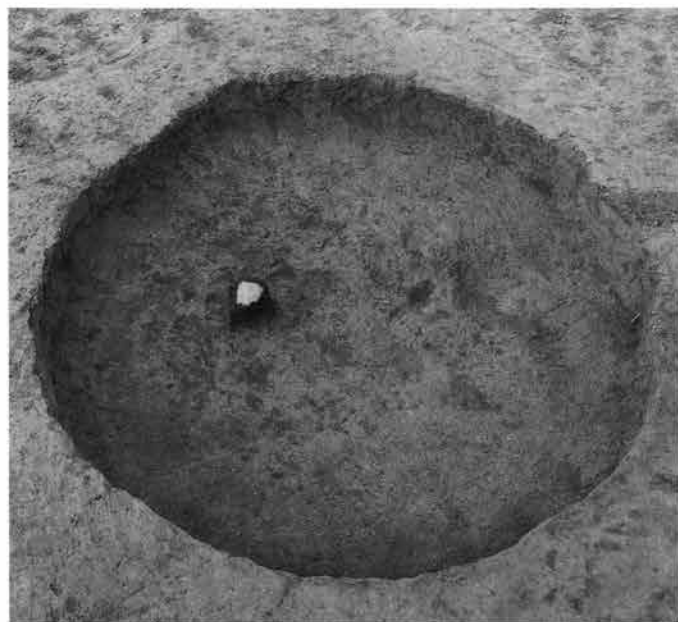
日 A17号土坑全景 (北から)



日 A20号土坑全景 (西から)



日 A21号土坑全景 (南から)



日 A24号土坑全景 (南から)



日 A25号土坑全景 (北から)



日 B 5号土坑全景 (北から)



日 B11号土坑



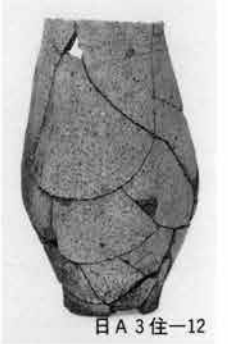
日A 3住-1



日A 8住-1



日A 3住-7



日A 3住-12



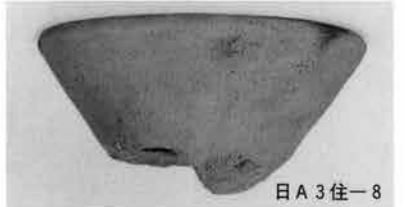
日A 3住-4



日A 3住-3



日A 3住-2



日A 3住-8



日A 3住-6



日A 3住-16



日A 3住-19



日A 3住-17



日A 4住-2



日A 3住-13



日A 3住-10



日A 3住-18



日A 3住-15



日A 4住-6



日A 4住-7



日A 4住-1



日A 4住-8



日A 4住-5



日A 4住-13



日A 4住-11



日A 4住-3



日A 4住-18



日A 4住-19



日A 4住-20



日A 5住-14



日A 4住-4



日A 4住-14



日A 4住-15



日A 5住-11



日A 4住-17



日A 4住-21



日A 5住-6



日A 5住-4



日A 5住-13



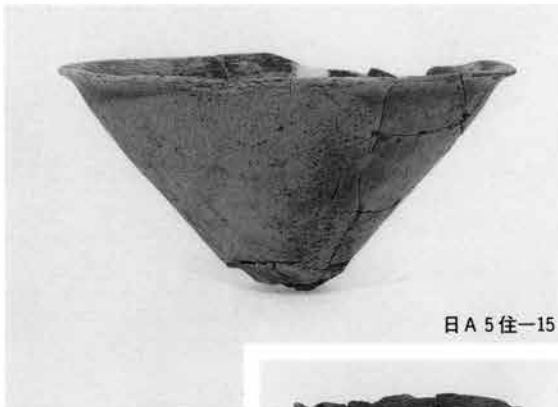
日A 5住-1



日A 5住-3



日A 5住-16



日A 5住-15



日A 5住-2



日A 5住-10



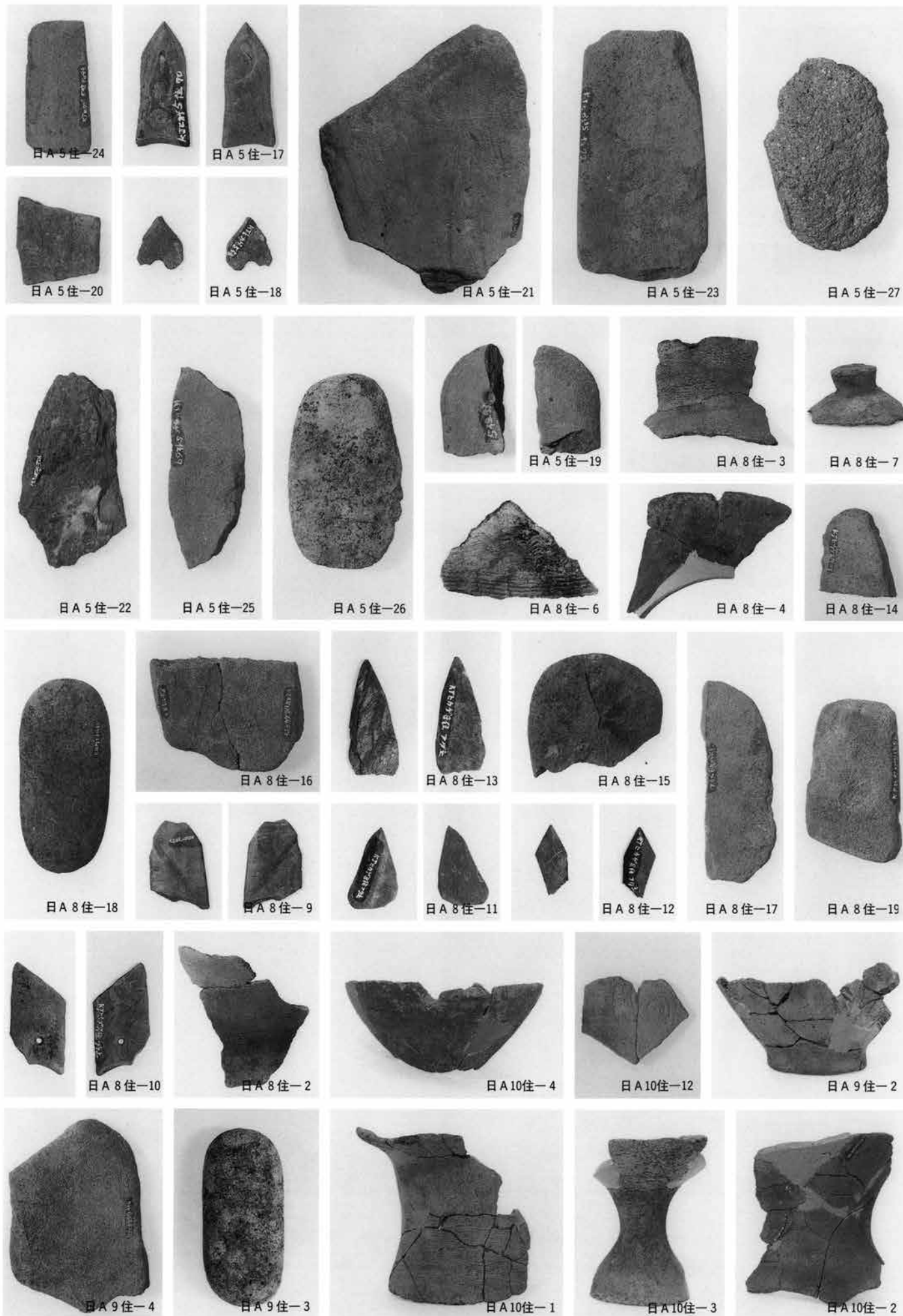
日A 5住-5



日A 5住-8



日A 5住-12







日A10住-5



日A10住-6



日A10住-8



日A10住-9



日A10住-7



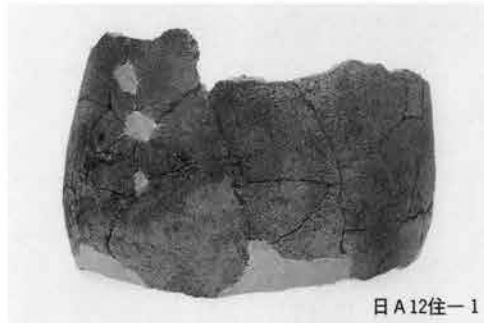
日A10住-11



日A12住-4



日A12住-7



日A12住-1



日A12住-5



日A12住-6



日A12住-3



日A15住-11



日A15住-1



日A15住-13



日A15住-3



日A15住-5



日A15住-4



日A15住-16



日A15住-15



日A15住-10



日A15住-9



日A15住-17



日A15住-14



日A15住-8





日B 2住-6



日B 2住-7



日B 4住-4



日B 4住-3



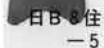
日B 4住-2



日B 8住-1



日B 8住-5



日B 8住-3



日A 15坑-4



諏A 64坑-1



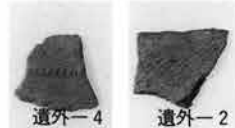
日A 15坑-1



日A 15坑-3



日A 15坑-5



遺外-4



遺外-2



日A 15坑-2



日A 21坑-1



遺外-15



遺外-3



日A 24坑-1



日A 15坑-6



遺外-16



遺外-5



遺外-14



遺外-17



遺外-9



遺外-18



遺外-6



遺外-12



遺外-8



遺外-7



遺外-13



遺外-1



日B 2住-8



1号方形周溝墓全景（東から）



1号方形周溝墓セクション



1号方形周溝墓遺物出土状態



1号方形周溝墓遺物出土状態



1号方形周溝墓遺物出土状態



1号古墳 (空中写真)



1号古墳主体部検出状況



1号古墳全景 (東から)



1号古墳主体部掘り方



1号古墳主体部掘り方



諏A 1号住居全景（東から）



諏A 1号住居遺物出土状態



諏A 1号住居竈全景（東から）



諏A 1号住居掘り方全景



諏A 2号住居遺物出土状態



諏A 2号住居竈全景



譚 A 3号住居全景 (東から)



譚 A 3号住居遺物出土状態



譚 A 3号住居竈全景



譚 A 3号住居掘り方全景 (東から)



譚 A 4号住居全景 (西から)



譚 A 4号住居遺物出土状態



譚 A 4号住居竈全景



譚 A 4号住居掘り方全景



譚A 5号住居全景（西から）



譚A 5号住居遺物出土状態



譚A 5号住居竈全景（西から）



譚A 5号住居竈掘り方全景



譚A 5号住居掘り方全景（西から）



譚A 6号住居全景（東から）



譚A 6号住居遺物出土状態



譚A 6号住居掘り方全景（東から）





諏A 7号住居全景（南から）



諏A 7号住居掘り方全景（南から）



諏A 7号住居竈全景



諏A 9号住居全景（北西から）



諏A 9号住居竈全景（東から）



諏B 1号住居全景 (南から)



諏B 1号住居遺物出土状態 (東から)



諏B 1号住居遺物出土状態 (西から)



諏B 1号住居竈全景 (南から)



諏B 1号住居旧竈全景 (南から)



諏B 1号住居掘り方全景 (南から)



諏B 3号住居遺物出土状態 (東から)



諏B 3号住居全景 (東から)



日A 1号住居全景 (東から)



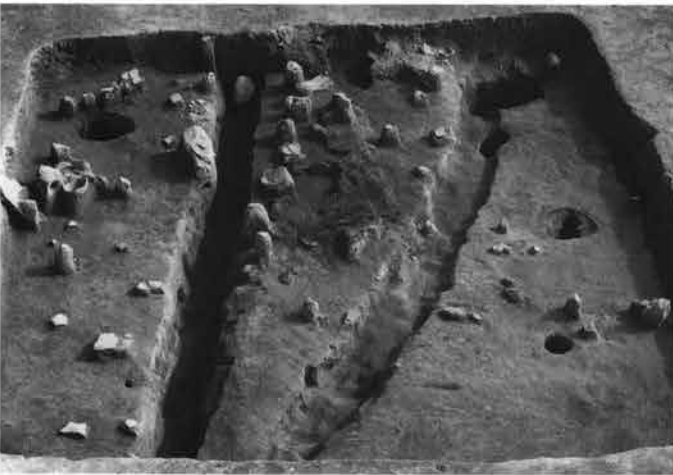
日A 1号住居遺物出土状態



日A 1号住居炉全景



日A 6号住居全景 (西から)



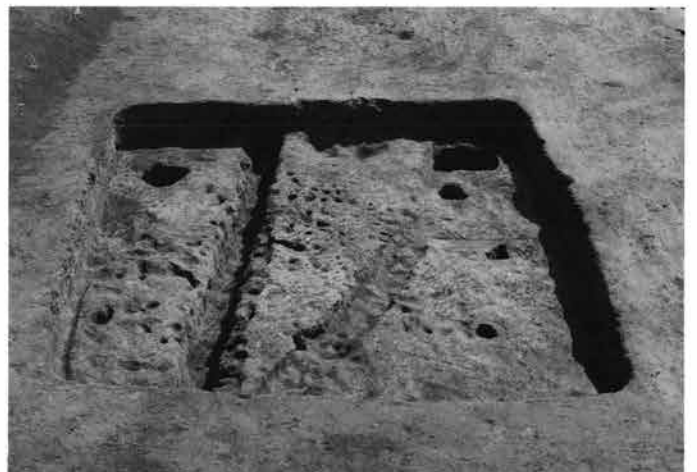
日A 6号住居遺物出土状態 (西から)



日A 6号住居北壁付近遺物出土状態



日A 6号住居竈全景



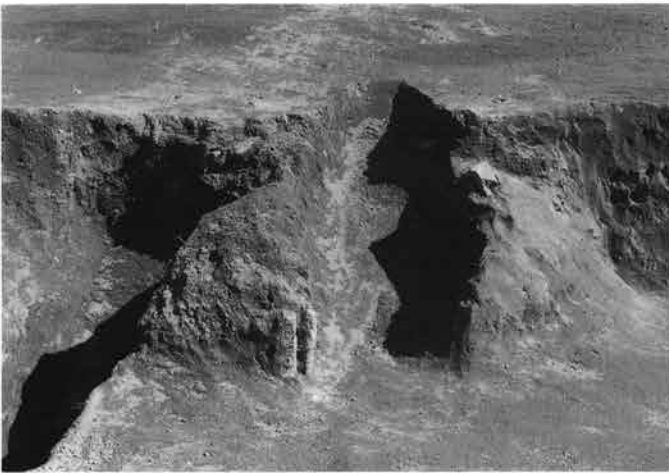
日A 6号住居掘り方全景 (西から)



日A7号住居全景（西から）



日A7号住居南壁付近遺物出土状態



日A7号住居竈全景（西から）



日A7号住居掘り方（西から）



日A11号住居全景（南から）



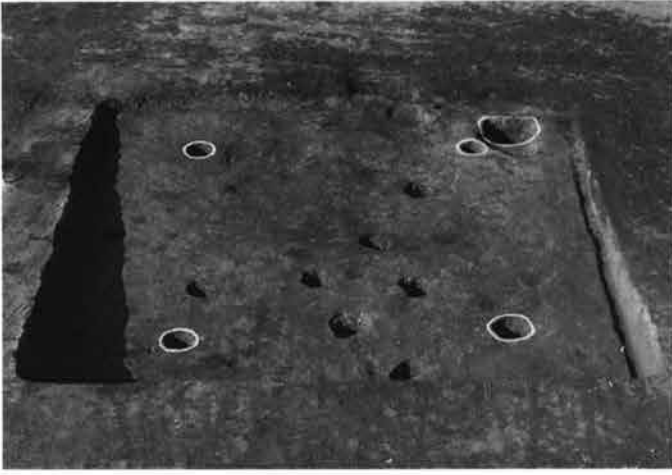
日A11号住居貯蔵穴



日A11号住居竈全景



日A11号住居掘り方全景（南から）



日 A 13号住居全景 (南から)



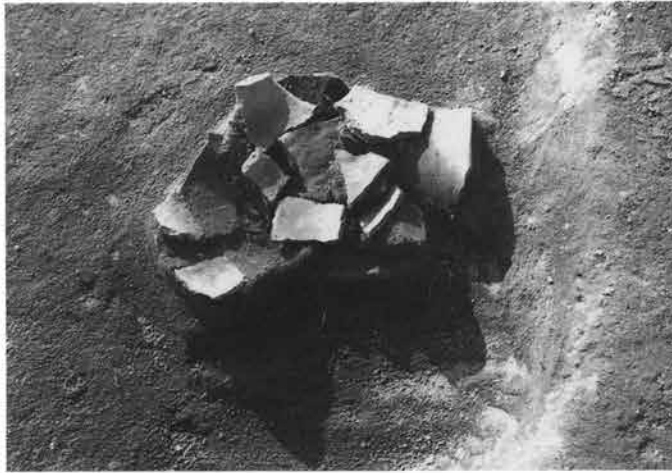
日 A 13号住居遺物出土状態 (北から)



日 A 13号住居掘り方全景 (南から)



日 A 14号住居全景 (南から)



日 A 14号住居遺物出土状態 (東から)



日 A 19号住居全景 (西から)



日 A 19号住居竈全景 (西から)



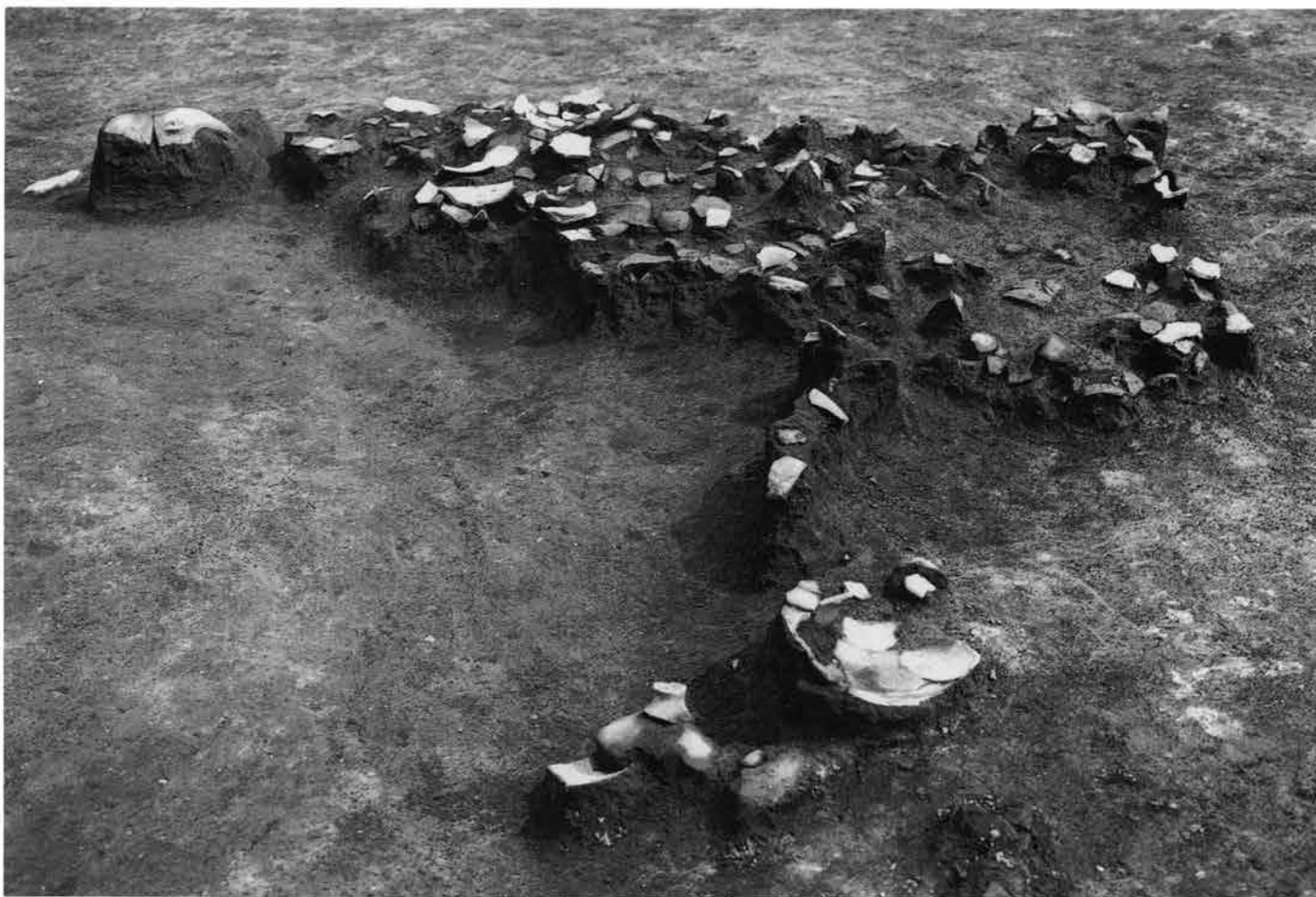
日 A 19号住居掘り方セクション (西から)



日B 3号住居全景 (北から)



日B 3号住居セクション (南から)



日B 3号住居遺物出土状態



日B 3号住居遺物出土状態



日B 3号住居遺物出土状態 (北から)



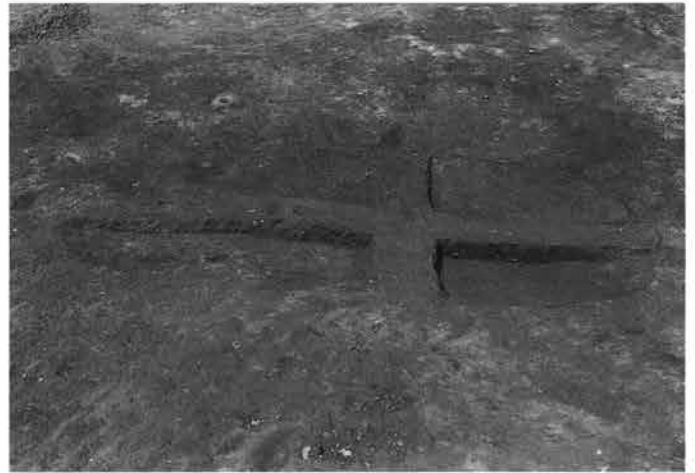
日B 3号住居 Pit12遺物出土状態（北から）



日B 3号住居南西壁炭化物出土状態（東から）



日B 3号住居北壁炭化物出土状態（南から）



日B 3号住居炉セクション（東から）



日B 3号住居掘り方全景（東から）



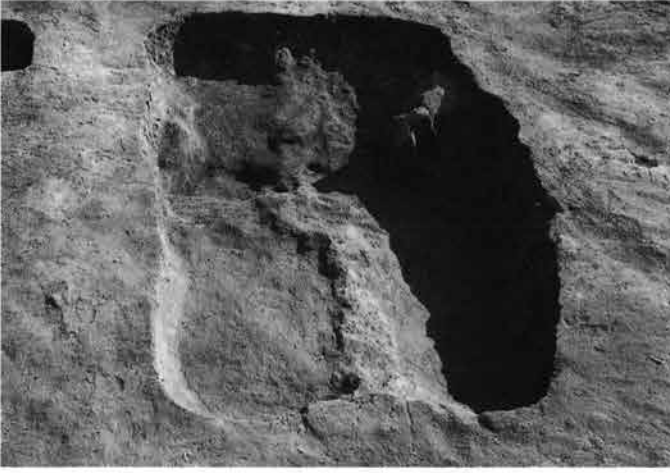
日B 1号住居全景（北から）



日B 5号住居全景（東から）



日B 6号住居全景（西から）



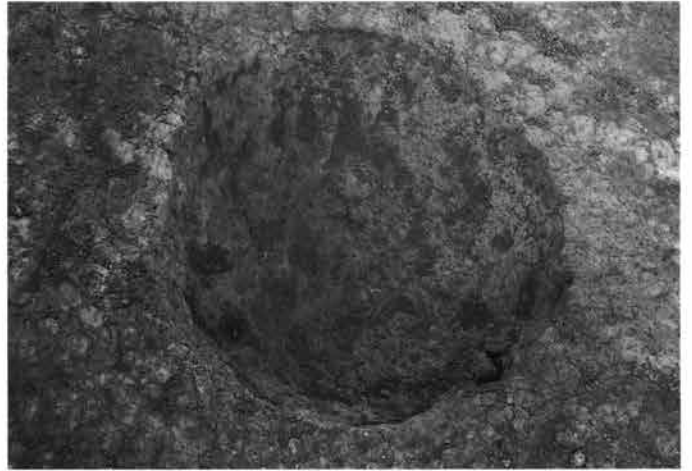
1号竖穴状遺構全景（北から）



1号竖穴状遺構遺物出土状態（北から）



諏A55号土坑全景（北から）



諏A87号土坑全景（南から）



諏A89号土坑全景（東から）



諏A90号土坑全景（南から）

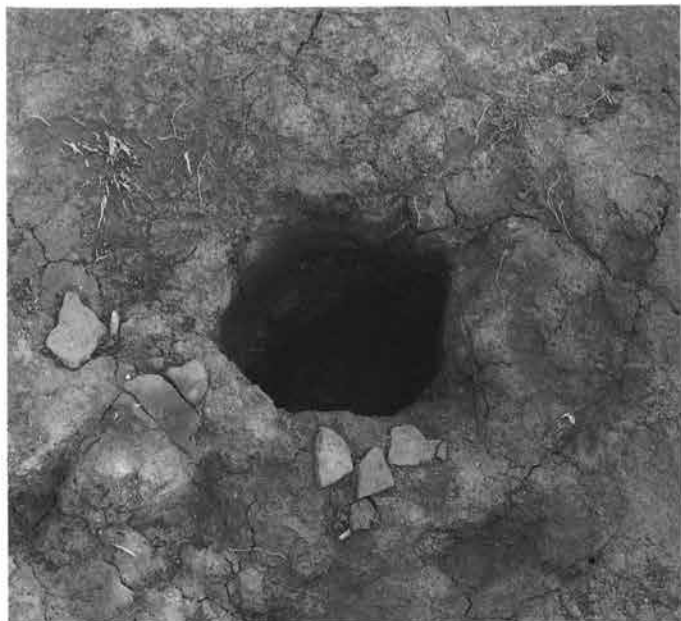


諏A92号土坑全景（東から）

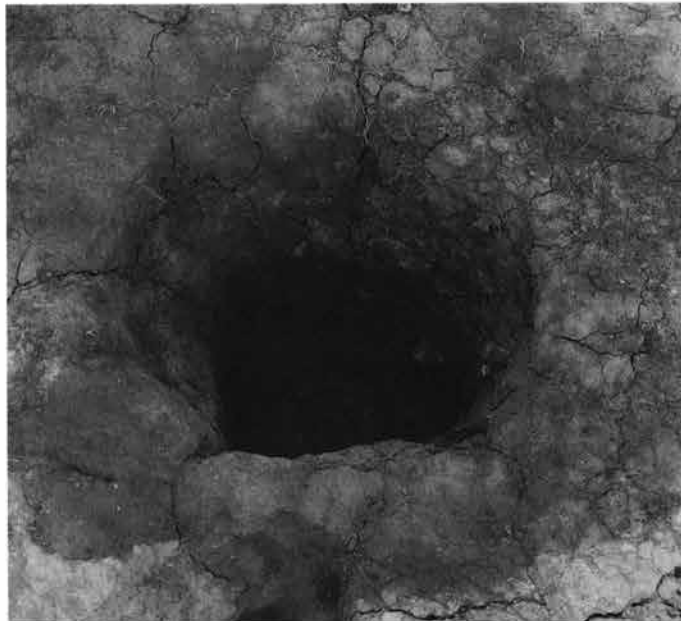


諏A93号土坑（東から）





諏A95号土坑全景（南から）



諏A96号土坑全景（南から）



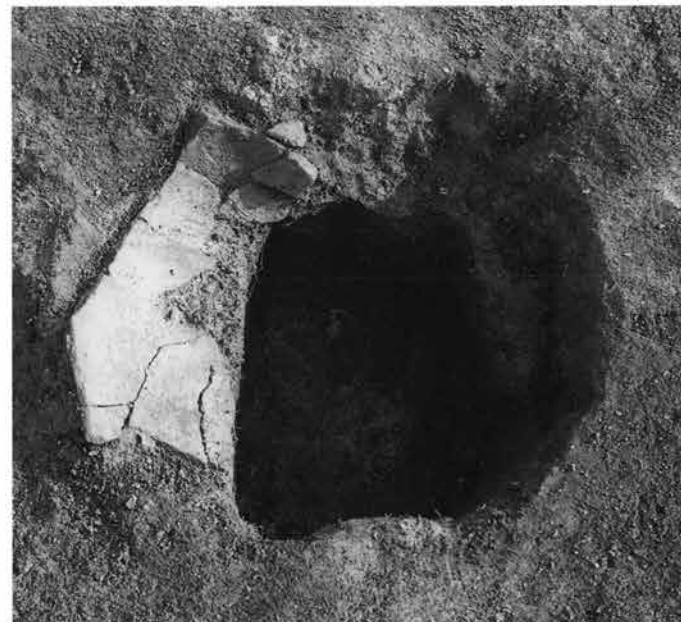
諏A97号土坑全景（北から）



諏A98号土坑全景（西から）



諏A99号土坑全景（西から）



諏A100号土坑全景（西から）



日A 8号土坑全景 (南から)



日A18号土坑全景



日A18号土坑遺物出土状態



日A18号土坑セクション (南から)



日A18号土坑遺物出土状態



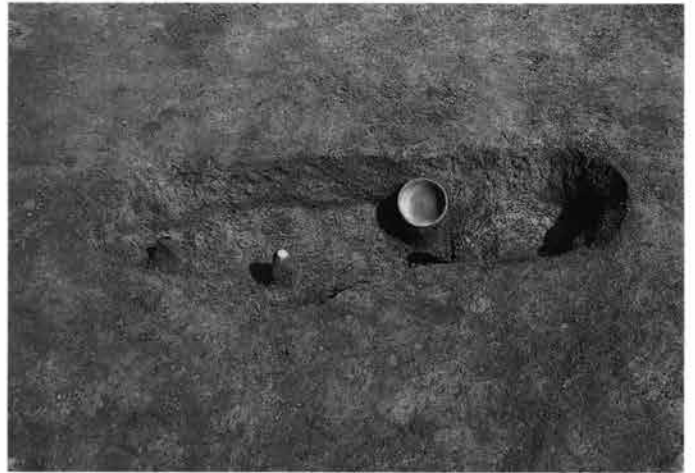
日 A 19号土坑全景



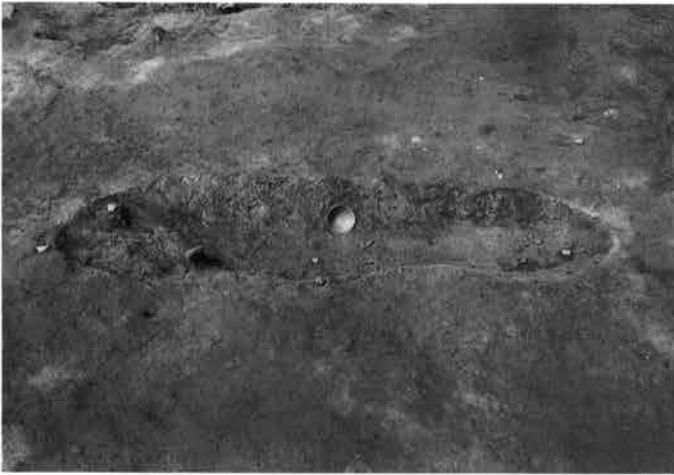
日 A 22号土坑全景



日 A 22号土坑遺物出土状態



日 B 6号土坑全景 (南から)



日 B 9号土坑全景 (南から)



日 B 9号土坑遺物出土状態 (東から)



日 B 23号(左)・24号(右)溝全景 (東から)



1号溜井状遺構全景 (東から)



1号方形周溝墓-1



1号方形周溝墓-5



1号方形周溝墓-4



1号方形周溝墓-2



1号方形周溝墓-3



1号古墳-1

諏A 1住-3



諏A 1住-4



諏A 1住-7



諏A 1住-9



諏A 1住-11



諏A 1住-1



諏A 1住-12



諏A 1住-10



諏A 1住-6



諏A 1住-8



諏A 2住-4



諏A 2住-1



諏A 2住-8



諏A 2住-7



諏A 2住-6



諏A 2住-9



諏A 2住-2



諏A 2住-3



諏A 2住-10



諏A 3 住-2



諏A 3 住-6



諏A 3 住-7



諏A 3 住-3



諏A 3 住-1



諏A 3 住-5



諏A 3 住-10



諏A 3 住-11



諏A 4 住-1



諏A 4 住-3



諏A 3 住-8



諏A 3 住-9



諏A 4 住-2



諏A 4 住-7



諏A 4 住-9



諏A 4 住-10



諏A 5 住-2



諏A 4 住-8



諏A 4 住-6



諏A 5 住-6





諏A 9住-1



諏A 9住-2



諏A 9住-4



諏A 9住-8



諏A 9住-6



諏B 1住-13



諏B 1住-12



諏B 1住-16



諏B 1住-10



諏B 1住-11



諏B 1住-15



諏B 1住-14



諏A 9住-3



諏B 1住-7



諏B 1住-3



諏A 1住-7



諏B 1住-17



諏B 1住-18



諏B 1住-27



諏B 1住-32



諏A 9住-5



諏B 1住-19



諏B 1住-21



諏B 1住-29



諏B 1住-20



諏B 1住-1



諏B 1住-22



諏B 1住-25



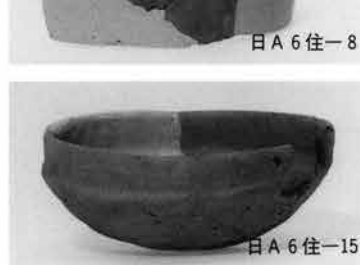
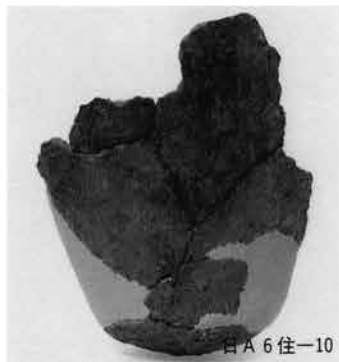
諏B 1住-26



諏B 1住-31



諏B 1住-5







日A 6住-2



日A 6住-17



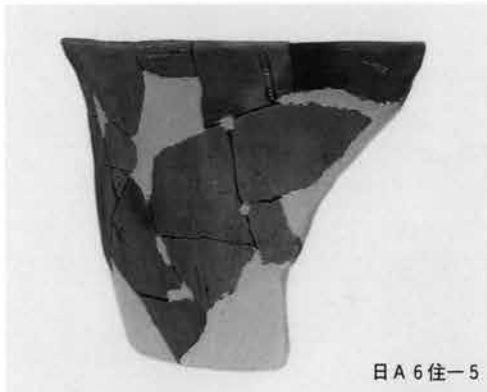
日A 6住-19



日A 6住-20



日A 6住-11



日A 6住-5



日A 6住-21



日A 7住-7



日A 7住-5



日A 7住-2



日A 7住-1



日A 7住-9



日A 7住-8



日A 7住-10



日A 7住-11



日A 11住-4



日A 11住-3



日A 13住-3



日A 13住-8



日A 13住-4



日A 13住-1



日A 13住-6





日B 3住-6



日B 3住-10



日B 3住-1



日B 3住-5



日B 3住-22



日B 3住-30



日B 3住-11



日B 3住-24



日B 3住-9



日B 3住-26



日B 3住-3



日B 3住-13



日B 3住-25



日B 3住-12



日B 3住-23



日B 3住-27



日B 3住-28



日B 3住-14



日B 3住-15



日A18坑-1



日A18坑-2



日B 3住-16



日B 3住-18



日A18坑-1



日A18坑-2



日B 3住-21



日B 3住-20



日A22坑-1



日B 6坑-1



日B 5住-1



1号竖穴状遺構-1



日A18坑-4



日A18坑-3



1号溜井状遺構-1



日A 8坑-1



遺外-11



遺外-4



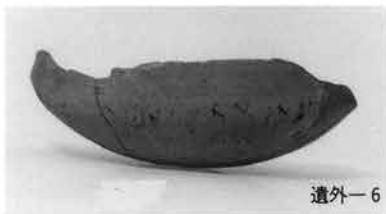
遺外-9



遺外-12



遺外-7



遺外-6



遺外-13



遺外-17



遺外-18



遺外-16



1号屋敷と2号屋敷（空中写真）



1号屋敷と2号屋敷（空中写真 東から）



2号屋敷全景（西から）



2号屋敷全景（東から）



2号屋敷セクション（南から）



2号屋敷セクション（北から）



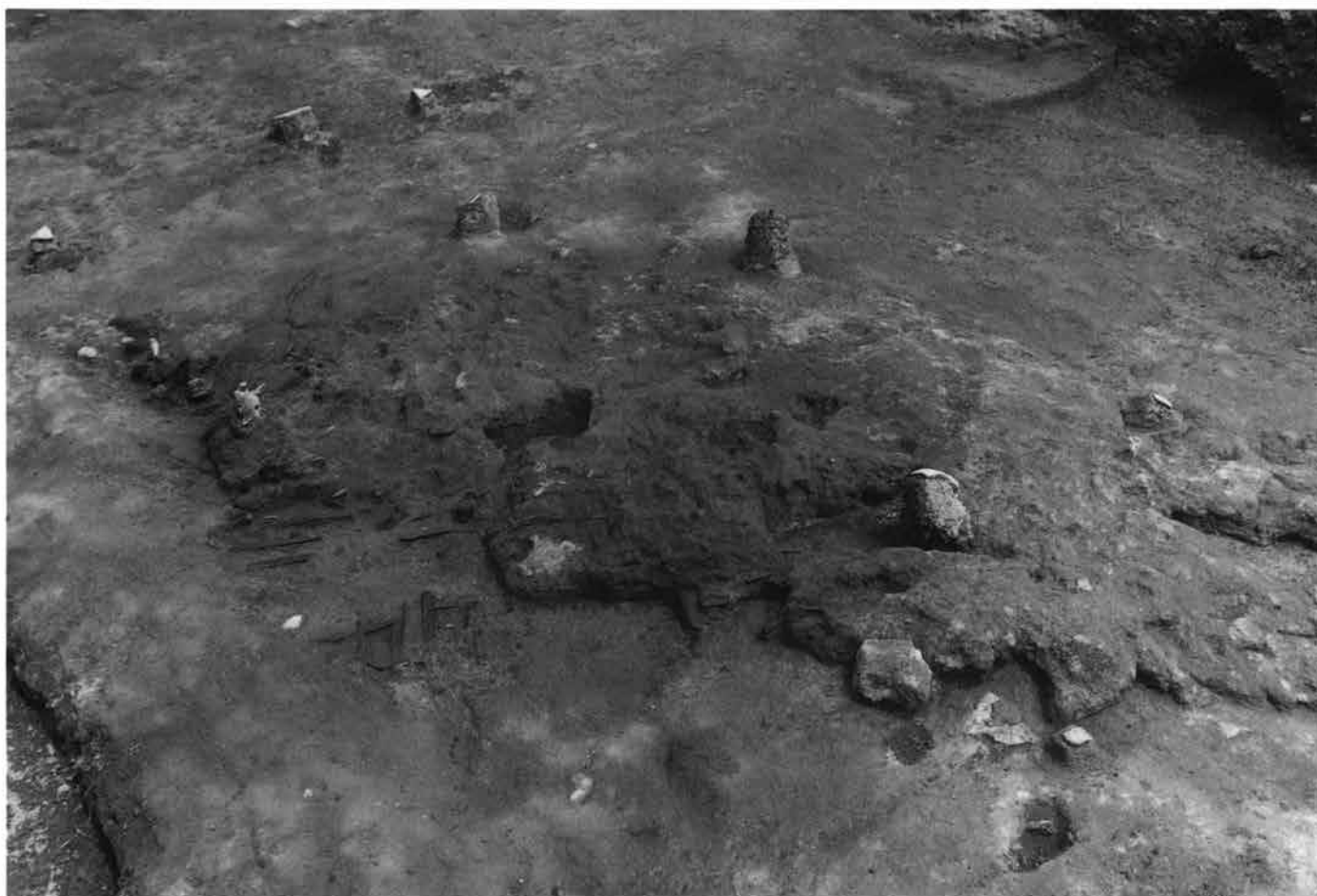
2号屋敷遺物出土状態（西から）



2号屋敷遺物出土状態（東から）



2号屋敷遺物(No.7)出土状態



2号屋敷1号炭化物



2号屋敷1号炭化物



2号屋敷遺物(No.29)出土状態



2号屋敷3号井戸セクション(南から)



2号屋敷3号井戸全景(北から)



2号屋敷33号土坑セクション



2号屋敷33号土坑全景



2号屋敷68号土坑全景(南から)



2号屋敷32号土坑全景





1号屋敷全景（西から）



1号屋敷部分（南から）



1号屋敷部分（北から）



1号屋敷1号石垣全景（東から）



1号屋敷2号石垣全景（東から）



1号屋敷1号・2号石垣全景（南から）



1号屋敷西側盛土セクション（北から）



1号屋敷東側盛土セクション（北から）



1号屋敷1号建物掘り方全景（西から）



1号屋敷1号建物セクション（北から）



1号屋敷2号建物掘り方全景（東から）



1号屋敷2号建物5号 Pit 確認状況



1号屋敷遺物出土状態



1号屋敷1号井戸全景（北から）



1号屋敷4号井戸全景（北から）



1号屋敷1号(左)・2号(右)・23号(奥)土坑全景（西から）



1号屋敷1号・2号・23号土坑掘り方全景（西から）



1号屋敷3号土坑遺物出土状態



1号屋敷4号土坑遺物出土状態



1号屋敷6号土坑全景



1号屋敷24号土坑全景



1号屋敷6号(右)・24号(左)土坑掘り方全景(西から)



1号屋敷7号(左)・16号(右)土坑全景(南から)



1号屋敷8号土坑全景(北から)



1号屋敷10号土坑全景(西から)



1号屋敷11号土坑全景（南から）



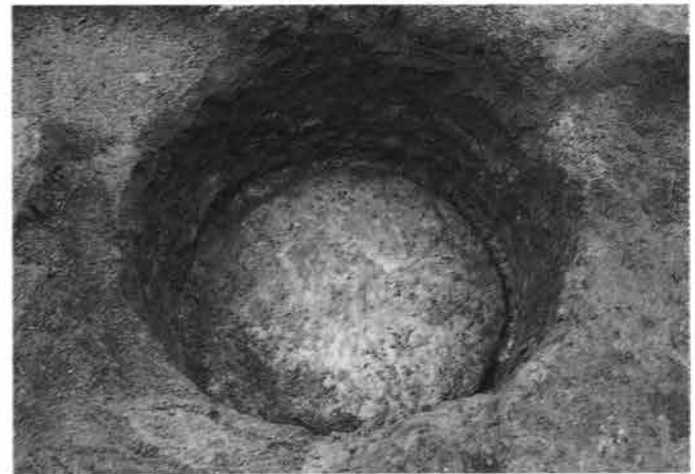
1号屋敷12号土坑全景（南から）



1号屋敷15号土坑全景（南から）



1号屋敷17号土坑遺物出土状態（南から）



1号屋敷17号土坑全景（南から）



1号屋敷18号土坑遺物出土状態（南から）



1号屋敷18号土坑全景（西から）



1号屋敷34号土坑遺物出土状態（南から）



1号屋敷34号土坑全景（南から）



1号屋敷18号(右)・34号(左)土坑掘り方全景



1号屋敷20号土坑全景



1号屋敷19号土坑全景（東から）



1号屋敷21号土坑遺物出土状態（南から）



1号屋敷22号土坑全景



1号屋敷26号土坑全景 (南から)



1号屋敷27号土坑全景 (南から)



1号屋敷29号土坑遺物出土状態



1号屋敷30号土坑全景



1号屋敷31号土坑遺物出土状態 (東から)



1号屋敷31号土坑全景 (北から)



1号屋敷38号(左)土坑全景・40号(右)土坑掘り方全景 (北から)



1号屋敷40号土坑掘り方セクション (東から)



1号屋敷1号溝全景（北から）



1号屋敷2号(左)・3号(右)溝全景（西から）



1号屋敷4号溝全景（南から）



1号屋敷5号溝全景（北から）





1号屋敷6号(右)・7号(左)溝全景(北から)



1号屋敷8号(右)・9号(左)溝全景(東から)



1号屋敷12号溝全景(北から)



1号屋敷1号集石全景(南から)



1号屋敷2号集石全景(東から)



3号屋敷全景（東から）



礎石建物全景（北から）



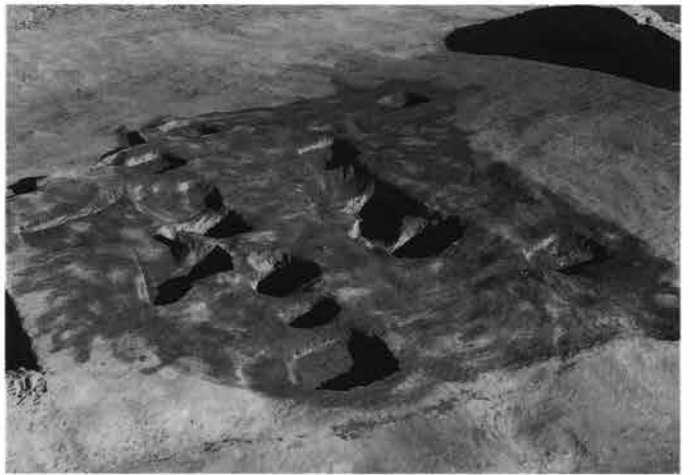
礎石建物の1号礎石全景（北から）



畠確認状態（東から）



畠A軽石除去後状態（東から）



諏A 1号~13号墓埴全景（南から）



日A 1号墓埴遺物出土状態



日A 1号墓埴馬骨検出状態



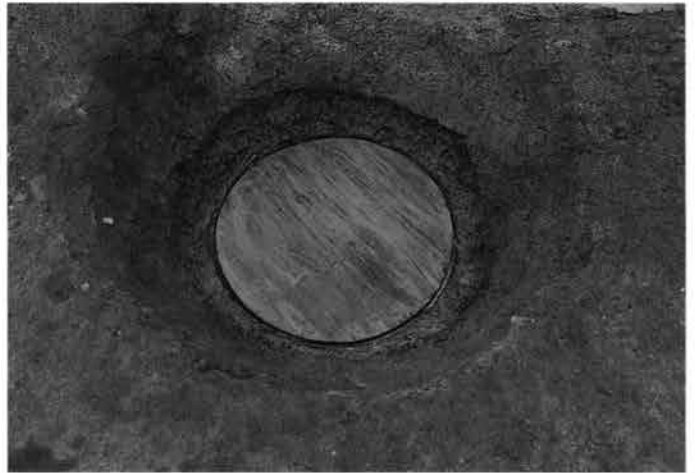
諏A 14号土坑セクション (南から)



諏A 14号土坑全景 (南から)



日A 2号(右)・3号(左)土坑全景(南から)



日A 2号土坑全景 (南から)



日A 2号土坑桶底除去状態 (南から)



日A 3号土坑全景 (南から)



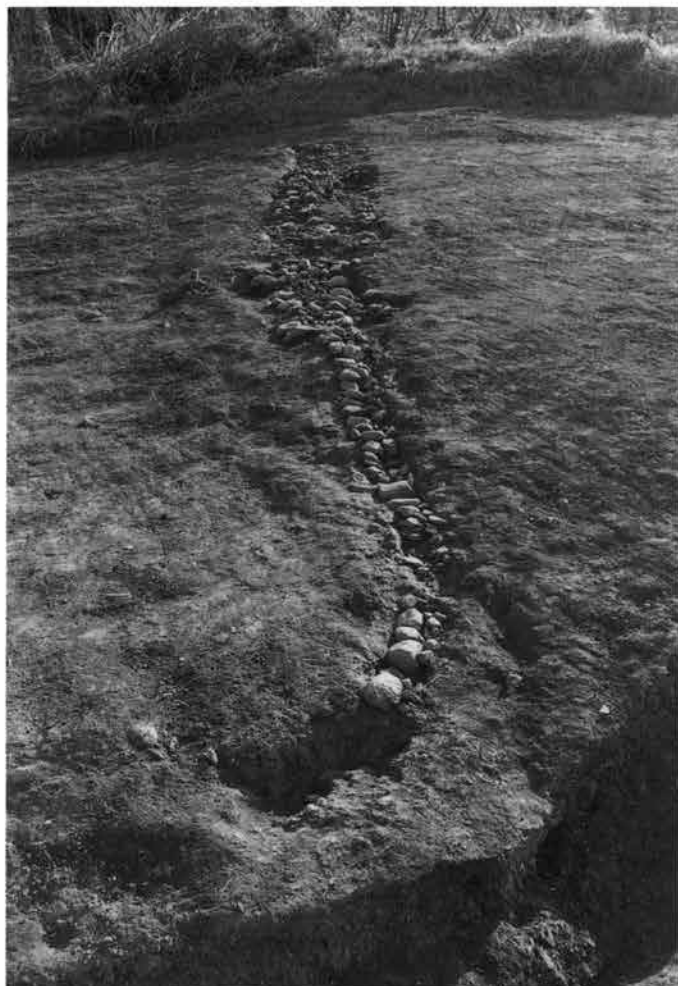
日A 3号土坑桶除去状態



日A 3号土坑桶除去状態



諏A28号溝(暗渠)全景(北から)



諏A29号溝(暗渠)全景(北から)



諏A31号溝(暗渠)全景



日A1号溝(暗渠)全景(東から)



日A11号溝(暗渠)全景(北から)



日B3号溝(暗渠)全景(北から)



日B1号溝(暗渠)全景(西から)



日B1号溝(暗渠)蓋石除去状態(西から)



日B2号溝(暗渠)全景





31



33



28



34



32



28



35



30



29



36



40



41



46



42



42



43



45



45



44



44



51



47



49



50



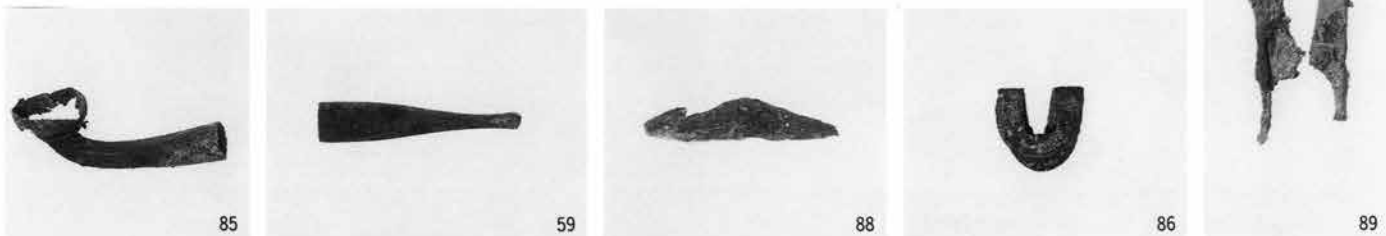
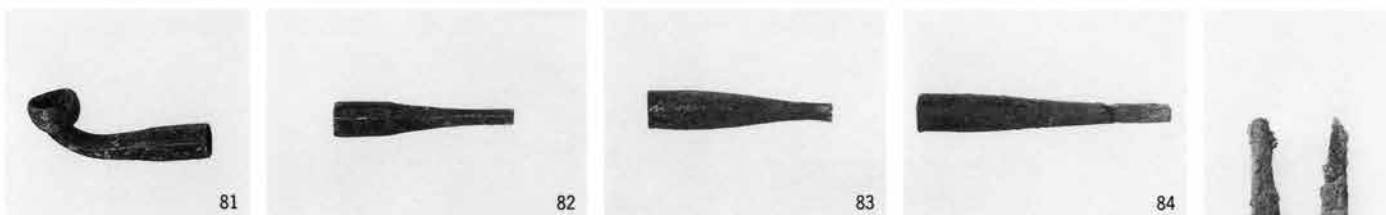
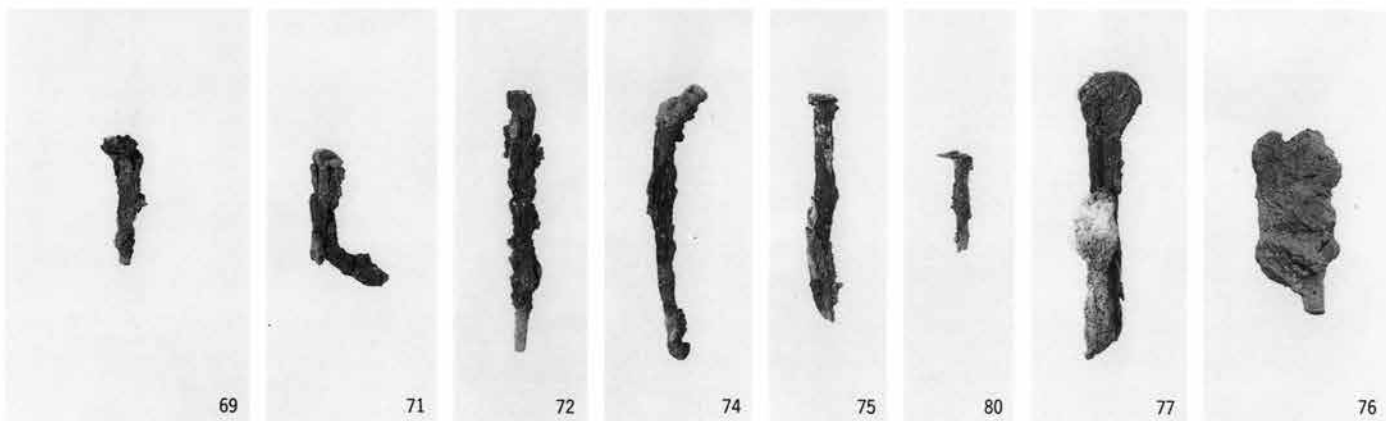
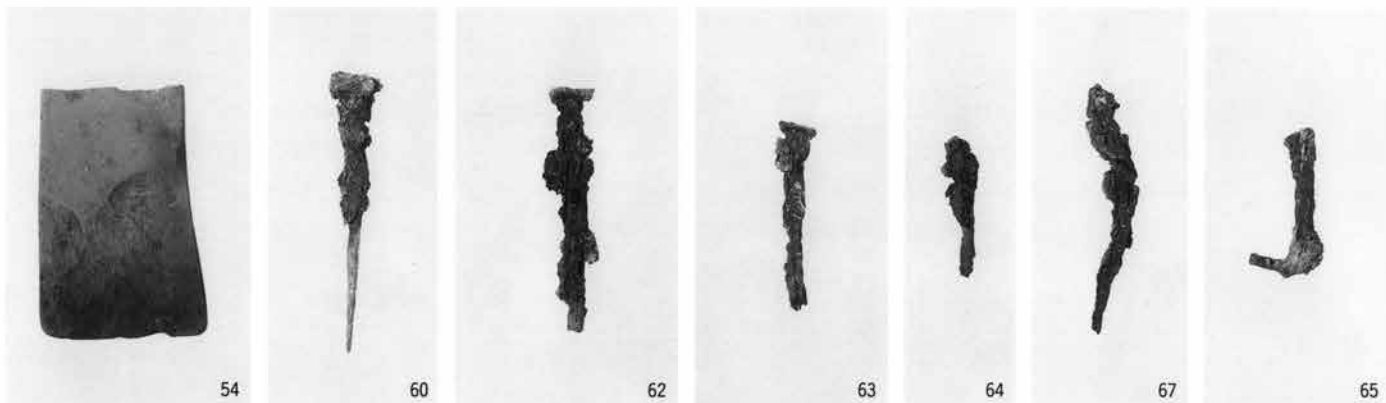
53



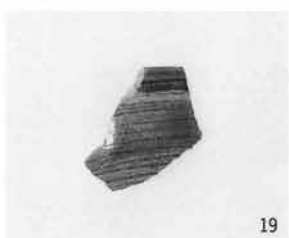
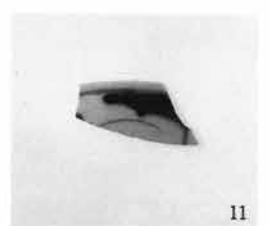
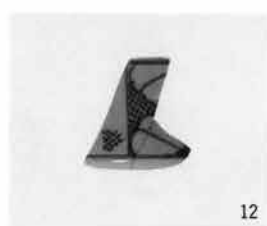
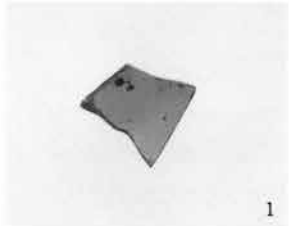
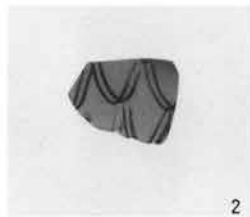
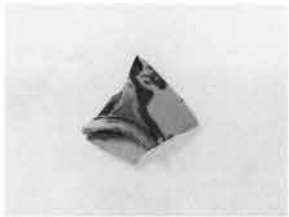
52



48









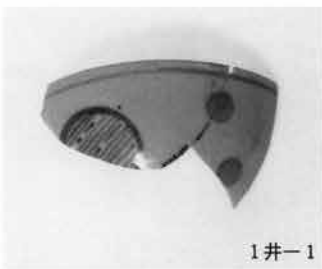
52



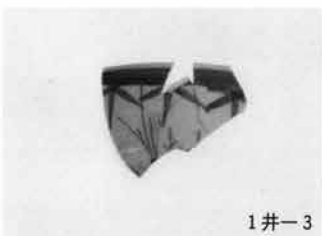
45



48



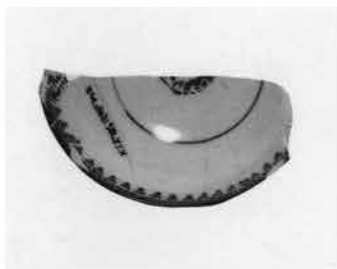
1井-1



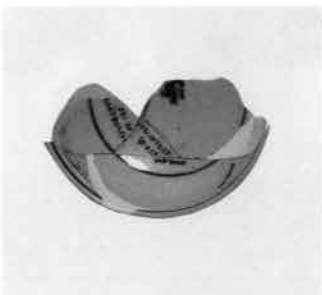
1井-3



1井-6



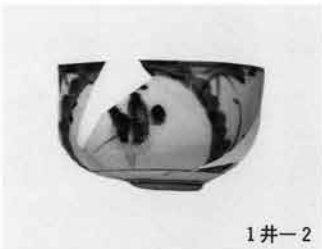
1井-7



1井-9



1井-5



1井-2



1井-4



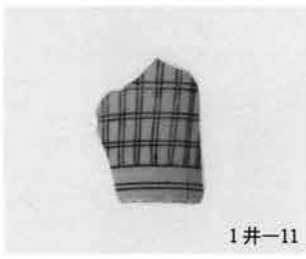
1井-10



1井-15



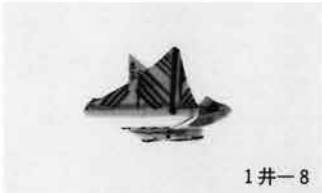
1井-8



1井-11



1井-12



1井-8



1井-14



1井-13



1井-16



1井-17



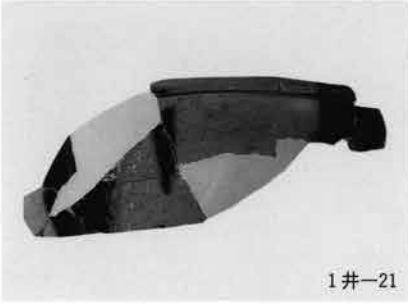
1井-19



1井-18



1井-20



1井-21



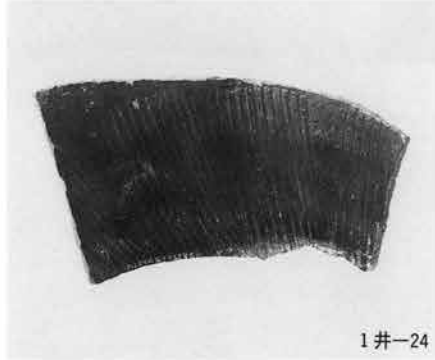
1井-22



1井-23



1井-25



1井-24



1井-28



1井-27



1井-34



1井-30



1井-33



1井-40



1井-38



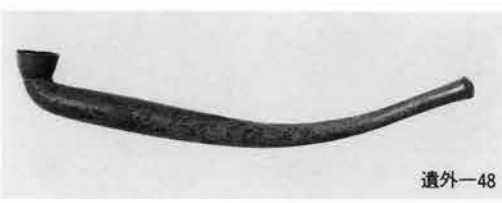
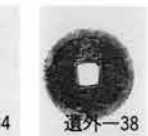
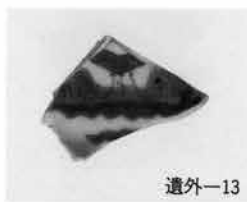
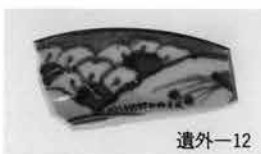
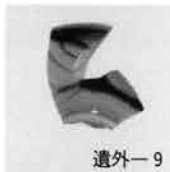
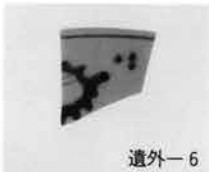
1井-41



1井-39







群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告第138集

**内匠諏訪前遺跡  
内匠日影周地遺跡**

関越自動車道(上越線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第12集

平成4年3月21日 印刷

平成4年3月27日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784-2  
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村大字下箱田784-2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



付図 内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡全体図